

佐倉市タルカ作遺跡

—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III—

1985.3

千葉県土地開発公社
財団法人千葉県文化財センター

佐倉市タルカ作遺跡

—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

1985.3

千葉県土地開発公社
財団法人千葉県文化財センター

序 文

千葉県は、京葉臨海工業地帯のほか内陸部にも工業を育成するという施策のもとに、各地域に内陸工業団地を建設してきました。その中でも、佐倉市は、東京や京葉臨海工業地帯及び新東京国際空港にも近く、工業団地建設にとって有利な条件を備えています。

すでに第一・第二工業団地が建設され、市や県の発展に大きく貢献してきました。このたび、「歴史のまちに未来の頭脳を」というスローガンのもとに佐倉第三工業団地の建設が、千葉県土地開発公社により計画されました。

佐倉市は、印旛沼と緑なす台地に育くまれ、約3万年も前から現代に至るまでの文化財が非常に多く所在しており、まさに「歴史のまち」であります。このような歴史的文化財は、市民に精神的ななうるおいとやすらぎを与えるとともに、誇りとなっており、佐倉市市民憲章にも「歴史と自然をたいせつに」することが盛り込まれています。

佐倉第三工業団地の建設に当たり、千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社並びに関係諸機関は度重なる協議をもち、埋蔵文化財の取扱いについて慎重を期した結果、工業団地内に設置する公園内に古墳等の埋蔵文化財を残し、現状保存するとともに、その他の埋蔵文化財については発掘調査を実施して記録を残すことになりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会から財団法人千葉県文化財センターが指名を受け、昭和50年度並びに昭和54年度より実施してまいりましたが、ここに佐倉第三工業団地の発掘調査報告書第三冊として、昭和54年度より調査してきましたタルカ作遺跡の報告書を刊行する運びとなりました。タルカ作遺跡は、縄文時代の炉穴群や古墳時代の住居跡群を中心とした先土器時代から歴史時代の遺跡です。

この報告書が、当地域の歴史を理解し、研究する資料として、また、文化財保護思想の涵養に役立つことを願う次第です。

本報告書の刊行に当たり、千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社並びに関係諸機関の協力、御指導と、発掘調査から報告書作成まで協力された調査補助員の皆様方に心から感謝致します。

昭和60年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

1. 本書は、千葉県土地開発公社による佐倉第三工業団地建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に所収する内容は佐倉市神門字タルカ作752番地先から字中作781番地先に所在するタルカ作遺跡の発掘調査報告である。
3. 発掘調査は、千葉県土地開発公社の依頼と千葉県教育庁文化課の要請と指導のもとに、昭和54・55・56・57・58年度に、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
4. 発掘調査は調査部長白石竹雄（昭和54年～58年）部長補佐山田友治（昭和54年）、栗本佳弘（昭和55年）、中山吉秀（昭和56年）、岡川宏道（昭和57年・58年）、班長沼沢豊（昭和54年・55年）、阪田正一（昭和56年）、根本弘（昭和57年）、矢戸三男（昭和58年）の指導のもとに下記の調査研究員が担当した。

昭和54年6月4日～7月30日　調査研究員　阪田正一、金丸　誠

昭和55年10月23日～昭和56年3月31日　調査研究員　阪田正一、金丸　誠、藤　淳一

昭和56年12月15日～昭和57年3月31日　主任調査研究員　矢戸三男　調査研究員　藤　淳一、
関根重夫

昭和57年8月24日～11月22日　調査研究員　服部哲則

昭和58年4月1日～5月12日　調査研究員　服部哲則

5. 整理作業は、調査部長白石竹雄（昭和57・58年）、鈴木道之助（昭和59年）、部長補佐岡川宏道（昭和57年）根本弘（昭和58・59年）、班長根本弘（昭和57年）矢戸三男（昭和58・59年）の指導のもとに下記の調査研究員を中心に、文化財センター佐倉第三事務所の調査研究員全員が助力し、これにあたった。

昭和57年　主任調査研究員　矢戸三男

昭和58年　調査研究員　藤崎芳樹

昭和59年　調査研究員　田村　隆

6. 本書の執筆は、矢戸三男、田村隆、石倉亮治、藤淳一、服部哲則が行ったが、一部を鈴木道之助、根本弘の助言のもとに矢戸が加筆、補正した。なお、執筆担当者は別記（文末）のとおりである。

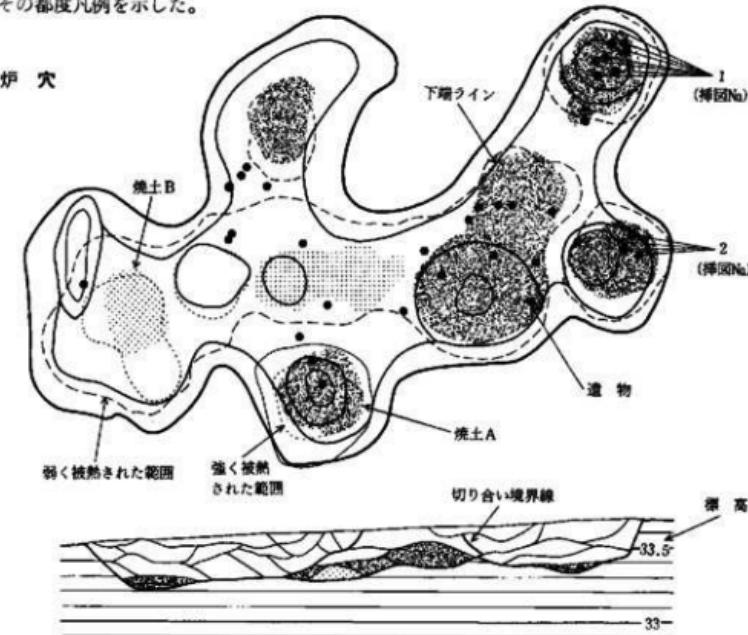
7. 本書の編集は、鈴木道之助、根本弘の助言のもとに、矢戸三男を中心に、執筆者全員が助力し、これにあたった。

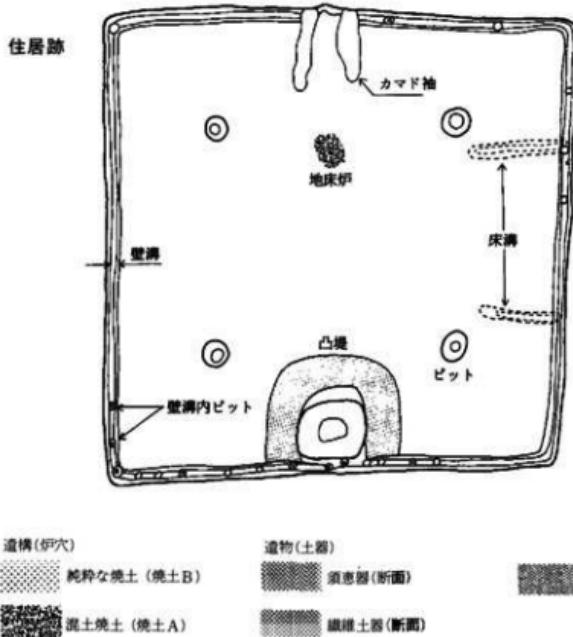
8. 発掘調査に際しては、千葉県教育庁文化課、佐倉市教育委員会、千葉県土地開発公社、および数多くの調査補助員、地元の方々の協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。

凡　例

1. 本遺跡の市町村コード及び遺跡コードは、行政管理庁指定統計コード(12)佐倉市：212と、佐倉第三工業団地内遺跡コード：004であり、両者を合せた212-004を本遺跡のコードとした。
2. 本書の第2図は、国土地理院著作・発行の1:25,000地形図、佐倉(千葉14号-2)、酒々井(千葉10号-4)、千葉東部(千葉15号-1)、八街(千葉11号-3)を合成し、使用した。
第4図、第5図は、佐倉市教育委員会著作・発行の千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図—佐倉市遺跡詳細分布調査報告書—(昭和59年3月31日発行)所収の遺跡分布図を一部加筆して使用した。
第6図は、株式会社ダイヤコンサルタントによる佐倉第三工業団地土質調査報告書(昭和47年12月発行)所収の概略図を一部改変して使用した。
3. 本書に使用した地形図・遺構図・出土遺物位置図等の方位は、全て座標北を示す。
4. 各図面の縮尺については、図版目次に各個の縮尺比を付し明示したが、原則として下記のとおり統一した。

遺構	住居跡	炉穴、土塙、カマド	先土器時代ブロック	
遺物	縄文土器	土師器・須恵器	土製品・石製品	石器
5. 本書に使用したスクリーントーンは、下記の用例に従うものとするが、これ以外のものについてはその都度凡例を示した。





6. インスタントレタリングによる遺物の表示に関しては、各個に凡例を付す場合が多いが、古墳時代以降の遺物位置図に関しては、下記のとおりである。

器種	出土状況		
	覆土	床面(±土3cm)	カマド・柱穴
環・高環・ミニチュア・増	○	●	●
甕・壺・小型甕	□	■	■
瓶	△	▲	▲
土製支脚	●	●	
土製品(白玉・土玉・勾玉等)	○	●	
石器	※	※	

7. 第3章における縄文原体の表記は、山内清男氏の表記法に従ったが、下記のとおり簡略化している。

(1) 0段は多条のもののみを除き省略。(2) 縞条体回転文はYと略記。(3) 軸縄に別種の縄を並列して絡げる場合は2R (Rの縄2本) の如く略記。

8. 本書において使用した遺構番号は、編集段階において新規に付したものであり、発掘調査時の遺構番号とは一致していない。このため、調査時の旧遺構番号については、新番号の後に括弧づけて示してある。なお、遺物の注記番号に使用した遺構番号は全て旧番号を用いてある。

目 次

序 文	3 土 坂	321
例 言	4 方形周溝状遺構	321
凡 例	付 グリッド採集の遺物	324
目 次	第 5 章 歴史時代	326
第 1 章 序 説	1 概 要	326
1 経緯と経過	2 住居跡	326
A 調査の経緯	第 6 章 調査の成果	332
B 調査の経過	1 タルカ作遺跡第III群第1類土器の諸問題	
C 調査の方法	— 子母口式土器の成立	332
2 遺跡とその環境	2 タルカ作遺跡出土土師器の分類と鬼高期	
A 自然的環境	集落の構造	346
B 歴史的環境	3 結 語	363
C 遺跡の概要		
D 層 序		
第 2 章 先土器時代		
1 概 要		
2 ブロック		
第 3 章 繩文時代		
1 概 要		
2 遺構と遺物		
A 炉 穴		
B 落し穴		
C 土 坂		
D 小竪穴		
3 遺物包含層		
A 繩文土器		
B 石 器		
C 土製品		
第 4 章 古墳時代		
1 概 要		
2 住居跡		

挿 図 目 次

- 第1図 グリッド分割図 (下) (1/40・1/3)
第2図 遺跡の位置と周辺の地形(1/50000)
第3図 遺跡の地形(1/4000)
第4図 鹿島川流域の遺跡(1—縄文時代)(約1/70000)
第5図 鹿島川流域の遺跡(2—古墳時代以降)(約1/70000)
第6図 台地と谷の地盤地質図
第7図 佐倉第三工業団地内ローム層柱状図
集成(数字:地点番号)(1/8000・1/30)
第8図 タルカ作遺跡全体図(1/1500)
第9図 先土器時代試掘坑の配置と検出ブロック(1/2000)
第10図 第1・第5ブロック及びブロック外遺物出土状況(1/80)
第11図 第2ブロック遺物出土状況(1/80)
第12図 第2ブロック出土石器実測図(2/3)
第13図 第3ブロック遺物出土状況(1/80)
第14図 第3ブロック出土石器実測図(2/3)
第15図 第4ブロック遺物出土状況(1/160)
第16図 第4ブロック出土石器実測図(2/3)
第17図 第5ブロック(2・3)及び単独出土の石器(1)実測図(2/3)
第18図 縄文時代の遺構と第III群土器の分布状況(1/500)
第19図 第1号炉穴遺構図・出土遺物・第2号炉穴遺構図・出土遺物(1/40・1/3)
第20図 第3号炉穴遺構図(上)出土遺物(下)(1/40・1/3)
第21図 第4～6号炉穴遺構図(上)出土遺物
第22図 第7号炉穴遺構図(1/40)
第23図 第8号炉穴遺構図(1/40)
第24図 第9号炉穴遺構図(1/40)
第25図 第9号炉穴出土遺物(1/3)
第26図 第10号炉穴遺構図(1/40)
第27図 第1号土塙・第11号炉穴遺構図(1/40)
第28図 第11号炉穴出土遺物(1/3)
第29図 第12号・13号炉穴遺構図・出土遺物(1/40・1/3)
第30図 第12号炉穴出土遺物(1/3)
第31図 第14号炉穴遺構図(左)出土遺物(右)(1/40・1/3)
第32図 第15号炉穴遺構図(上)出土遺物(下)(1/40・1/3)
第33図 第16号炉穴遺構図(1/40)
第34図 第16号炉穴出土遺物(1/3)
第35図 第17号炉穴遺構図(上)出土遺物(下)(1/40・1/3)
第36図 第18号炉穴遺構図・出土遺物(1/40・1/3・2/3)
第37図 第19号炉穴遺構図(1/40)
第38図 第20号炉穴遺構図(上)出土遺物(下)(1)(1/40・1/3)
第39図 第20号炉穴出土遺物(2)(1/3)
第40図 第21号炉穴遺構図(1/40)
第41図 第22号炉穴遺構図(1/40)
第42図 第22号炉穴出土遺物(1/3・2/3)
第43図 第23号炉穴遺構図(1/40)
第44図 第25号炉穴遺構図・出土遺物(1/40)

1 / 3)	
第 45 図 第26号炉穴遺構図 (1/40)	第 70 図 繩文土器拓影図 (5) (1/3)
第 46 図 第27号炉穴・第4号落し穴遺構図(1/ 40)	第 71 図 類別土器の分布状況 (2) (1/2000)
第 47 図 第27号炉穴出土遺物 (1/3)	第 72 図 繩文土器拓影図 (6) (1/3)
第 48 図 第28号炉穴遺構図 (左)出土遺物 (右) (1/40・1/3)	第 73 図 繩文土器拓影図 (7) (1/3)
第 49 図 第29号炉穴遺構図 (上)出土遺物 (下) (1/40・1/3)	第 74 図 繩文土器拓影図 (8) (1/3)
第 50 図 第30・31号炉穴遺構図 (1/40)	第 75 図 繩文土器拓影図 (9) (1/3)
第 51 図 第32号炉穴遺構図 (左)・第33号炉穴 遺構図・出土遺物 (右) (1/40・1/ 3)	第 76 図 類別土器の分布状況 (3) (1/2000)
第 52 図 第34号・35号炉穴遺構図 (1/40)	第 77 図 第1V群土器の種別分布状況 (1/500)
第 53 図 第36号炉穴遺構図 (上)出土遺物 (下) (1) (1/40・1/3)	第 78 図 繩文土器拓影図 (10) (1/3)
第 54 図 第36号炉穴出土遺物 (2) (1/3)	第 79 図 繩文土器拓影図 (11) (1/3)
第 55 図 第37・38号炉穴遺構図 (1/40)	第 80 図 繩文土器拓影図 (12) (1/3)
第 56 図 第39号炉穴遺構図 (1/40)	第 81 図 繩文土器拓影図 (13) (1/3)
第 57 図 第1号落し穴遺構図 (1/40)	第 82 図 繩文土器拓影図 (14) (1/3)
第 58 図 第2号・第3号落し穴遺構図 (1/40)	第 83 図 繩文土器拓影図 (15) (1/3)
第 59 図 第2号落し穴出土遺物 (2/3)	第 84 図 繩文土器拓影図 (16) (1/3)
第 60 図 第3号落し穴出土遺物 (1/3)	第 85 図 繩文土器拓影図 (17) (1/3)
第 61 図 第2号土塙遺構図 (左)出土遺物 (右) (1/40・2/3)	第 86 図 繩文土器拓影図 (18) (1/3)
第 62 図 第1号小堅穴・第24号炉穴遺構図・遺 物出土位置図 (1/40)	第 87 図 繩文土器拓影図 (19) (1/3)
第 63 図 第1号小堅穴出土遺物 (1/3)	第 88 図 類別土器の分布状況 (4) (1/2000)
第 64 図 第24号炉穴出土遺物 (1/2)	第 89 図 繩文土器拓影図 (20) (1/3)
第 65 図 類別土器の分布状況 (1) (1/2000)	第 90 図 繩文土器拓影図 (21) (1/3)
第 66 図 繩文土器拓影図 (1) (1/3)	第 91 図 繩文土器拓影図 (22) (1/3)
第 67 図 繩文土器拓影図 (2) (1/3)	第 92 図 類別土器の分布状況 (5) (1/2000)
第 68 図 繩文土器拓影図 (3) (1/3)	第 93 図 繩文土器拓影図 (23) (1/3)
第 69 図 繩文土器拓影図 (4) (1/2)	第 94 図 繩文土器拓影図 (24) (1/3)
	第 95 図 繩文時代石器分布状況 (1/2000)
	第 96 図 繩文時代剥片・礫の分布状況 (1/ 2000)
	第 97 図 繩文時代石器実測図 (1) (2/3)
	第 98 図 繩文時代石器実測図 (2) (2/3)
	第 99 図 繩文時代石器実測図 (3) (2/3)
	第100図 繩文時代石器実測図 (4) (1/2)
	第101図 繩文時代石器実測図 (5) (1/2)
	第102図 繩文時代土製品実測図 (1) (2/3)

第103図	縄文時代土製品実測図（2）（2/3）	実測図（下）（1/60・1/40）
第104図	第1号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）	第125図 第7号住居跡遺物実測図（1）（1/4）
第105図	第1号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）	第126図 第7号住居跡遺物実測図（2）（1/4）
第106図	第1号住居跡遺物実測図（2）（1/4）	第127図 第7号住居跡遺物実測図（3）（1/2）
第107図	第2号住居跡遺構・遺物位置図（上）カマド実測図（下）（1/60・1/40）	第128図 第8号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）
第108図	第2号住居跡遺物実測図（1/4・1/1）	第129図 第8号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1/40・1/4）
第109図	第3号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）	第130図 第9号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）
第110図	第3号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）	第131図 第9号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1/40・1/4）
第111図	第3号住居跡遺物実測図（2）（1/4）	第132図 第10号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）
第112図	第4号住居跡遺構図（1/60）	第133図 第10号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）
第113図	第4号住居跡遺物位置図（1/60）	第134図 第10号住居跡遺物実測図（2）（1/4）
第114図	第4号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）	第135図 第11号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）
第115図	第4号住居跡遺物実測図（2）（1/4）	第136図 第11号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）
第116図	第4号住居跡遺物実測図（3）（1/4）	第137図 第11号住居跡遺物実測図（2）（1/2）
第117図	第4号住居跡遺物実測図（4）（1/4・1/2）	第138図 第12号住居跡遺構図（1/60）
第118図	第5号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）	第139図 第12号住居跡遺物位置図（1/60・1/40）
第119図	第5号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）	第140図 第12号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）
第120図	第5号住居跡遺物実測図（2）（1/4）	第141図 第12号住居跡遺物実測図（2）（1/4）
第121図	第6号住居跡遺構・遺物位置図（1/60）	第142図 第13号住居跡遺構図（1/60）
第122図	第6号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1/40・1/4）	第143図 第13号住居跡遺物位置図（1/60）
第123図	第7号住居跡遺構図（1/60）	第144図 第13号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）（1/40・1/4）
第124図	第7号住居跡遺物位置図（上）カマド	第145図 第13号住居跡遺物実測図（2）（1/4）
		第146図 第14号住居跡遺構・遺物位置図（1/

	60)	第166図 第23号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)
第147図	第14号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1 / 40 • 1 / 4)	第167図 第23号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1 / 40 • 1 / 4)
第148図	第15号住居跡遺構・遺物位置図 (上) カマド実測図 (下) (1 / 60 • 1 / 40)	第168図 第23号住居跡遺物実測図 (2) (1 / 4)
第149図	第15号住居跡遺物実測図 (1) (1 / 4)	第169図 第24号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)
第150図	第15号住居跡遺物実測図 (2) (1 / 4)	第170図 第24号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1 / 40 • 1 / 4)
第151図	第16号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)	第171図 第25号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)
第152図	第16号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1 / 40 • 1 / 4)	第172図 第25号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1) (1 / 40 • 1 / 4)
第153図	第17号住居跡遺構・遺物位置図 (上) カマド実測図 (下) (1 / 60 • 1 / 40)	第173図 第25号住居跡遺物実測図 (2) (1 / 4)
第154図	等17号住居跡遺物実測図 (1 / 4)	第174図 第26号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)
第155図	第18号住居跡遺構図 (1 / 60)	第175図 第26号住居跡遺物実測図 (1 / 4)
第156図	第19号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)	第176図 第27号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)
第157図	第19号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1) (1 / 40 • 1 / 4)	第177図 第27号住居跡遺物実測図 (1 / 4)
第158図	第19号住居跡遺物実測図 (2) (1 / 2 • 1 / 1)	第178図 第28号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)
第159図	第20号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)	第179図 第28号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1) (1 / 40 • 1 / 4)
第160図	第20号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1 / 60 • 1 / 4)	第180図 第28号住居跡遺物実測図 (2) (1 / 4)
第161図	第21号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)	第181図 第29号住居跡遺構・遺物位置図 (上) カマド実測図 (下) (1 / 60 • 1 / 40)
第162図	第21号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1 / 40 • 1 / 4 • 1 / 2)	第182図 第29号住居跡遺物実測図 (1) (1 / 4)
第163図	第22号住居跡遺構・遺物位置図 (1 / 60)	第183図 第29号住居跡遺物実測図 (2) (1 / 4)
第164図	第22号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1) (1 / 40 • 1 / 4)	第184図 第30号住居跡遺構図 (1 / 60)
第165図	第22号住居跡遺物実測図 (2) (1 / 4)	第185図 第30号住居跡遺物位置図 (1) (1 / 60)
		第186図 第30号住居跡遺物位置図 (2) (1 / 40)
		第187図 第30号住居跡カマド実測図 (上) 遺物 実測図 (下) (1) (1 / 40 • 1 / 4)

第188図	第30号住居跡遺物実測図(2)(1/4)	60)
第189図	第30号住居跡遺物実測図(3)(1/ 4・1/2)	第209図 第37号住居跡遺物実測図(1/4)
第190図	第31号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)	第210図 第38号住居跡遺構・遺物位置図(上) 遺物実測図(下)(1/60・1/4)
第191図	第31号住居跡カマド実測図(上)遺物 実測図(下)(1)(1/40・1/4)	第211図 第39号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)
第192図	第31号住居跡遺物実測図(2)(1/ 4・1/2)	第212図 第39号住居跡カマド実測図(上)遺物 実測図(下)(1)(1/40・1/4)
第193図	第32号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)	第213図 第39号住居跡遺物実測図(2)(1/ 4・1/2)
第194図	第32号住居跡遺物実測図(1)(1/4)	第214図 第40号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)
第195図	第32号住居跡遺物実測図(2)(1/4)	第215図 第40号住居跡カマド実測図(上)遺物 実測図(下)(1)(1/40・1/4)
第196図	第33号住居跡遺構・遺物位置図(上) カマド実測図(下)(1/60・1/40)	第216図 第40号住居跡遺物実測図(2)(1/4)
第197図	第33号住居跡遺物実測図(1)(1/4)	第217図 第41号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)
第198図	第33号住居跡遺物実測図(2)(1/ 4・1/2)	第218図 第41号住居跡カマド実測図(1/40)
第199図	第34号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)	第219図 第41号住居跡遺物実測図(1/4)
第200図	第34号住居跡カマド実測図(上)遺物 実測図(下)(1/40・1/4・1/2)	第220図 第42号住居跡遺構・遺物位置図(上) カマド実測図・遺物実測図(下)(1/ 60・1/40・1/4)
第201図	第35号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)	第221図 第43号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)
第202図	第35号住居跡カマド実測図(上)遺物 実測図(下)(1)(1/40・1/4)	第222図 第43号住居跡カマド実測図(上)遺物 実測図(下)(1/40・1/4・1/2)
第203図	第35号住居跡遺物実測図(2)(1/4)	第223図 第1号土塙(上)、第2号土塙(下) 遺構図・遺物実測図(1/60・1/4)
第204図	第36号住居跡遺構・遺物位置図(1/ 60)	第224図 方形周溝状遺構遺構図・遺物位置図 (1/80、1/40)
第205図	第36号住居跡カマド実測図(上)遺物 実測図(下)(1)(1/40・1/4)	第225図 グリッド採集の遺物(1/4・1/2)
第206図	第36号住居跡遺物実測図(2)(1/4)	第226図 第44号住居跡遺構・遺物位置図(上) カマド実測図(下)(1/60・1/40)
第207図	第36号住居跡遺物実測図(3)(1/4)	第227図 第44号住居跡遺物実測図(1/4)
第208図	第37号住居跡遺構・遺物位置図(1/	

- 第228図 第45号住居跡遺構・遺物位置図（上）
カマド実測図（下）（1/60・1/40）
- 第229図 第45号住居跡遺物実測図（1/4）
- 第230図 第III群第1類土器の組成
- 第231図 タルカ作遺跡第III群第1類土器（1/
2）
- 第232図 千葉県城ノ台（北）貝塚第5類土器
- 第233図 埼玉県ト伝遺跡A地点I類II類土器
(1/8)
- 第234図 阿玉台北遺跡A地点の土器（1/3）
- 第235図 栃木県出流原小学校内遺跡の土器
- 第236図 坯分類図（1/12）
- 第237図 壺・甌・高坯分類図（1/12）
- 第238図 タルカ作遺跡の住居跡展開（1/2000）

表 目 次

第1表 第1ブロック遺物計測表	第31表 第15号住居跡土製品観察表
第2表 第2ブロック遺物計測表	第32表 第16号住居跡土器観察表
第3表 第3ブロック遺物計測表	第33表 第17号住居跡土器観察表
第4表 第4ブロック遺物計測表	第34表 第19号住居跡土器観察表
第5表 第5ブロック遺物計測表	第35表 第19号住居跡土製品・石製品観察表
第6表 ブロック外遺物計測表	第36表 第20号住居跡土器観察表
第7表 繩文土器観察表	第37表 第21号住居跡土器観察表
第8表 第1号住居跡土器観察表	第38表 第21号住居跡土製品観察表
第9表 第2号住居跡土器観察表	第39表 第22号住居跡土器観察表
第10表 第2号住居跡石製品観察表	第40表 第23号住居跡土器観察表
第11表 第3号住居跡土器観察表	第41表 第24号住居跡土器観察表
第12表 第4号住居跡土器観察表	第42表 第25号住居跡土器観察表
第13表 第4号住居跡土製品・石製品観察表	第43表 第25号住居跡石製品観察表
第14表 第5号住居跡土器観察表	第44表 第26号住居跡土器観察表
第15表 第6号住居跡土器観察表	第45表 第27号住居跡土器観察表
第16表 第7号住居跡土器観察表	第46表 第28号住居跡土器観察表
第17表 第7号住居跡土製品・石製品・鉄製品 観察表	第47表 第29号住居跡土器観察表
第18表 第8号住居跡土器観察表	第48表 第29号住居跡石製品観察表
第19表 第8号住居跡土製品観察表	第49表 第30号住居跡土器観察表
第20表 第9号住居跡土器観察表	第50表 第30号住居跡土製品観察表
第21表 第9号住居跡土製品観察表	第51表 第31号住居跡土器観察表
第22表 第10号住居跡土器観察表	第52表 第31号住居跡土製品・石製品観察表
第23表 第10号住居跡土製品観察表	第53表 第32号住居跡土器観察表
第24表 第11号住居跡土器観察表	第54表 第33号住居跡土器観察表
第25表 第11号住居跡土製品観察表	第55表 第33号住居跡土製品観察表
第26表 第12号住居跡土器観察表	第56表 第34号住居跡土器観察表
第27表 第13号住居跡土器観察表	第57表 第34号住居跡土製品観察表
第28表 第13号住居跡土製品・石製品観察表	第58表 第35号住居跡土器観察表
第29表 第14号住居跡土器観察表	第59表 第35号住居跡土製品観察表
第30表 第15号住居跡土器観察表	第60表 第36号住居跡土器観察表
	第61表 第36号住居跡土製品観察表

第62表	第37号住居跡土器観察表	第70表	第43号住居跡土器観察表
第63表	第37号住居跡石製品観察表	第71表	第43号住居跡土器製品観察表
第64表	第38号住居跡土器観察表	第72表	第1号土塙土器観察表
第65表	第39号住居跡土器観察表	第73表	グリッド採集土器観察表
第66表	第39号住居跡土器製品観察表	第74表	グリッド採集土製品・石製品観察表
第67表	第40号住居跡土器観察表	第75表	第44号住居跡土器観察表
第68表	第41号住居跡土器観察表	第76表	第45号住居跡土器観察表
第69表	第42号住居跡土器観察表	第77表	坏の伴出関係一覧

図 版 目 次

図版1	タルカ作遺跡とその周辺（空中写真・南から）【図版1—3は森昭氏撮影】	図版18	縄文時代遺構内の遺物
図版2	タルカ作遺跡とその周辺（空中写真・北から）	図版19	同 上
図版3	タルカ作遺跡の俯瞰（空中写真）	図版20	同 上
図版4	先土器時代第2ブロック、同第3ブロック	図版21	同 上
図版5	先土器時代の石器	図版22	縄文土器（第I群、第II群）
図版6	第1号炉穴、第2号炉穴	図版23	縄文土器（第II群）
図版7	第3号炉穴、第4・5号炉穴	図版24	縄文土器（第II群、第III群）
図版8	第6号炉穴、第7号炉穴	図版25	縄文土器（第III群、第IV群）
図版9	第9号炉穴、同（遺物出土状況）	図版26	縄文土器（第IV群）
図版10	第10号炉穴、第11号炉穴	図版27	縄文土器（第IV群、第V群）
図版11	第12号炉穴、第13号炉穴	図版28	縄文土器（第V群）
図版12	第14号炉穴、第15号炉穴	図版29	縄文土器（第VI群、第VII群、第VIII群）
図版13	第16号炉穴、第17号炉穴	図版30	縄文土器（第VIII群）、土製器
図版14	第20号炉穴、第22号炉穴	図版31	縄文時代の石器
図版15	第25号炉穴、第27号炉穴	図版32	第1号住居跡、同（遺物出土状況）
図版16	第29号炉穴、第36号炉穴	図版33	第2号住居跡、同（遺物出土状況）
図版17	第2号落し穴、第3号落し穴	図版34	第3号住居跡、同（遺物出土状況）
		図版35	第4号住居跡、同（遺物出土状況）
		図版36	第5号住居跡、第6号住居跡
		図版37	第7号住居跡、同（遺物出土状況）

図版38	第8号住居跡、第9号住居跡	図版70	同	上(8~10号)
図版39	第10号住居跡、第11号住居跡	図版71	同	上(10、11号)
図版40	第12号住居跡、第13号住居跡	図版72	同	上(12号)
図版41	第14号住居跡、第15号住居跡	図版73	同	上(13号)
図版42	第16号住居跡、第17号住居跡	図版74	同	上(13~15号)
図版43	第18号住居跡、第19号住居跡	図版75	同	上(15~17号)
図版44	第20号住居跡、第21号住居跡	図版76	同	上(17、19~21号)
図版45	第22号住居跡、第23号住居跡	図版77	同	上(22、23号)
図版46	第24号住居跡、第25号住居跡	図版78	同	上(23、24号)
図版47	第26号住居跡、第27号住居跡	図版79	同	上(25号)
図版48	第28号住居跡、同(遺物出土状況)	図版80	同	上(25~27号)
図版49	第29号住居跡、第30号住居跡	図版81	同	上(27、28号)
図版50	第31号住居跡、同(遺物出土状況)	図版82	同	上(28、29号)
図版51	第32号住居跡、第33号住居跡	図版83	同	上(29、30号)
図版52	第33号住居跡(カマド断面・中央に支脚)、第34号住居跡	図版84	同	上(30号)
図版53	第35号住居跡、第36号住居跡	図版85	同	上(31号)
図版54	第37号住居跡、第38号住居跡	図版86	同	上(31、32号)
図版55	第39号住居跡、第40号住居跡	図版87	同	上(32号)
図版56	第40号住居跡(遺物出土状況)、第41号住居跡	図版88	同	上(32、33号)
図版57	第42号住居跡、第43号住居跡	図版89	同	上(34、35号)
図版58	第44号住居跡、第45号住居跡	図版90	同	上(35、36号)
図版59	方形周溝、第1号土塁、第2号土塁	図版91	同	上(36号)
図版60	古墳時代住居跡の遺物(1号)	図版92	同	上(36、39号)
図版61	同 上(1、2号)	図版93	同	上(39、40号)
図版62	同 上(2号)	図版94	同	上(40、41号)
図版63	同 上(3号)	図版95	古墳時代住居跡の遺物(41、43号)、歴史時代住居跡の遺物(44号)	
図版64	同 上(4号)	図版96	歴史時代住居跡の遺物(45号)	
図版65	同 上(4号)	図版97	表面採集の遺物、45号住居跡墨書き器 (拡大)、方形周溝内の土器	
図版66	同 上(4、5号)			
図版67	同 上(5~7号)			
図版68	同 上(7号)			
図版69	同 上(7号)			

第1章 序 説

1 経緯と経過

A 調査の経緯

千葉県土地開発公社によって計画された佐倉第三工業団地内の埋蔵文化財調査は、計画段階において千葉県教育庁文化課と、千葉県土地開発公社が度重なる協議をおこない、保存部分、記録保存のうち造成をおこなう部分を画定し、造成部分については、千葉県土地開発公社の造成計画に沿って、年次計画を立てて発掘調査を実施することとなった。そして、発掘調査は、財團法人千葉県文化財センターが、千葉県土地開発公社の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとにおこなうこととなった。

B 調査の経過

タルカ作遺跡は、このような経緯のもとに、財團法人千葉県文化財センターが、昭和54・55・56・57・58の5年度にわたって調査をおこなった。各年度の調査の内容と成果は、以下の通りである。

昭和54年度は、北西側の調整池周辺部分4,700m²および南西側の幹線道路部分についてIII層上面までの確認調査をおこない、古墳時代住居跡8を確認した。

昭和55年度は、まず、タルカ作遺跡の主要部分にあたる28,300m²についてIII層上面までの確認調査をおこなった。そして、2年度にわたる確認調査の結果をもとに、33,000m²のIII層上面までの遺構の本調査をおこなった。その上で、同じ33,000m²について先土器の確認調査をおこなった。本調査の結果、古墳時代住居跡38、土塙2、方形周溝状遺構1、歴史時代住居跡2を検出した。

昭和56年度は、上記33,000m²内の先土器時代の遺構2,000m²の本調査ならびに、新たに発見された縄文時代早期から前期にわたる遺構を本調査した。検出された遺構は、炉穴39、落し穴4、土塙2、小竪穴1である。

昭和57年度は、先土器本調査を前年度の残り2,000m²おこなうとともに、新たに発見された古墳時代住居跡3を調査した。

昭和58年度には、33,000m²の南側に隣接する2,100m²について、先土器時代までの確認調査および本調査をおこなった。古墳時代住居跡1が検出された。

C 調査の方法

調査の方法は、先土器時代の遺構については、100m²に1つ2m×2m=4m²のグリッドを設けて確認調査をおこない、石器の出土した地点について確認グリッドを拡張して本調査をおこなった。

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

第1図 グリッド分割図

縄文時代以降の遺構については、主として重機を用いてIII層上面まで表土を剥いだあと、精査をおこなって検出し、その上で本調査をおこなった。

遺物・遺構の位置を記録するためのグリッドは、大・中・小の3段階で設定した。大グリッドは、佐倉第三工業団地全体を覆うもので、50m×50mの大きさを持つ。中グリッドは、大グリッドの中を、10m×10mに区切って設けたもので、1つの大グリッドの中の25個の中グリッドができる。小

グリッドは、中グリッドの中を更に2m×2mに区切って設定したもので、1つの中グリッドの中に25個の小グリッドができる。タルカ作遺跡における大グリッドの名称については第8図を参照されたい。中グリッドと小グリッドの番号は、どちらも第1図のようにつけている。

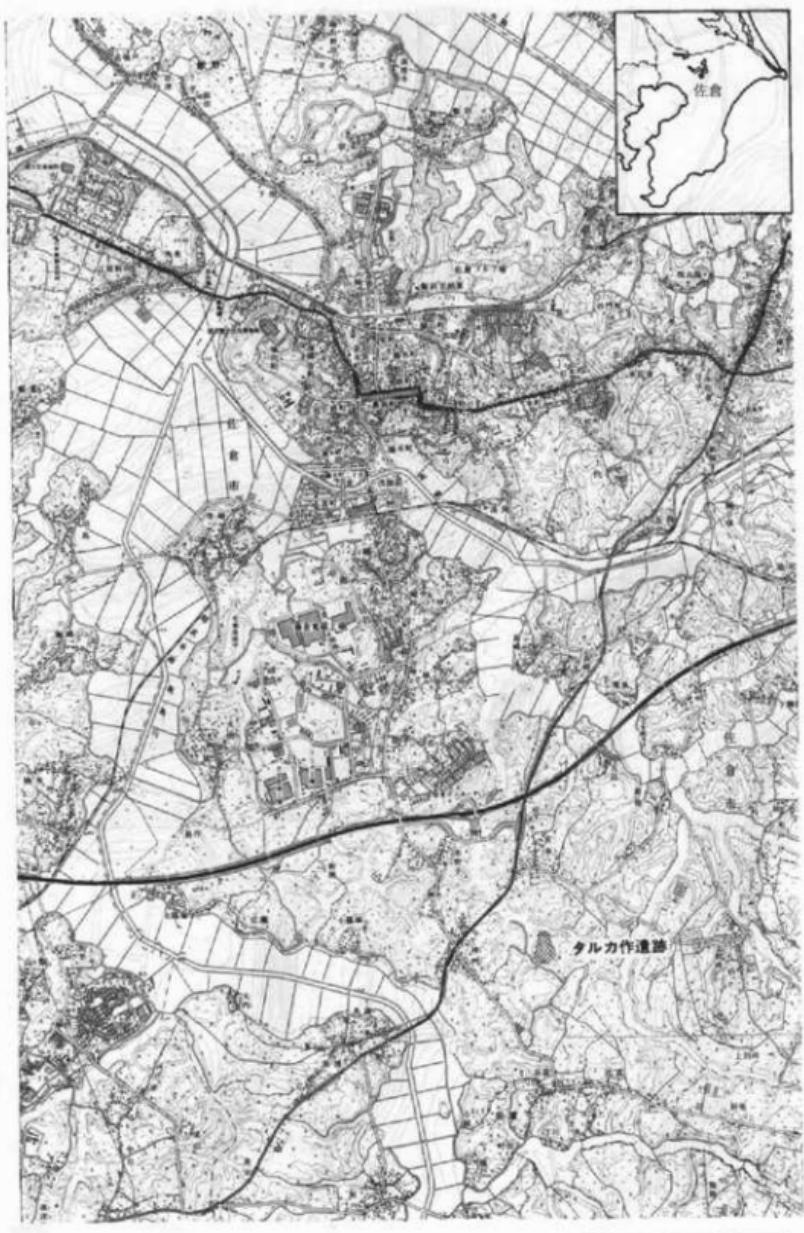
遺跡コードは、すでに凡例に明示した如く212-004である。調査時における遺構番号は、001より検出した順序に従ってふっている。遺物番号は、遺構またはグリッドを単位として、0001から順にふっている。(都 淳一)

2 遺跡とその環境

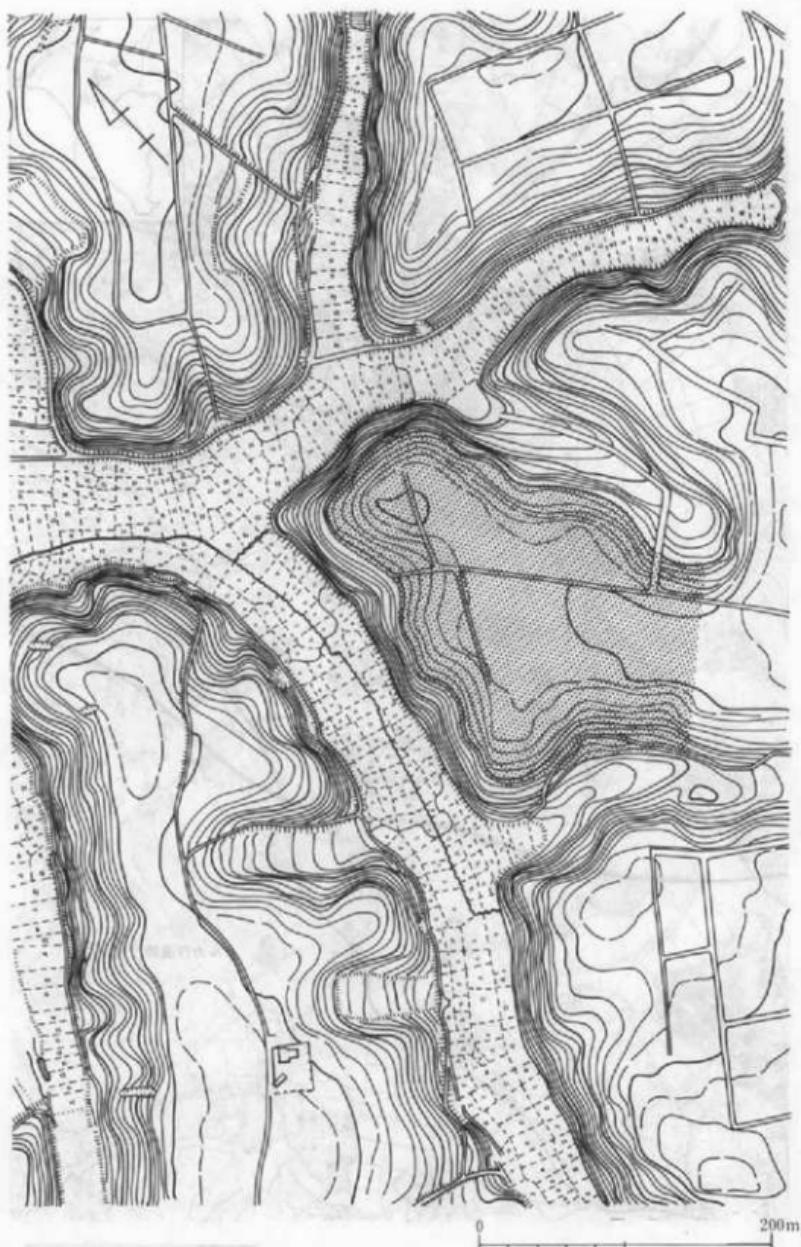
A 自然的環境

タルカ作遺跡のある千葉県佐倉市は、逆三角形状を呈する下総台地のほぼ中央に位置している。現在の佐倉市街地は、この下総台地を中央部で縦断する鹿島川の右岸台地上にのり、城下町として典型的な発展を遂げたことはよく知られている。この下総台地の主要部分は下総上位面（地形面の区分は杉原1970による）から構成され、下末吉ローム層の全層準を含むところから、武藏野台地における淀橋面、相模野、下末吉台地における下末吉面と対比されている。この面の基底には海成層である成田層が厚く堆積し、現在の地形の骨格を形成している。一方、下総上位面を刻む河谷に沿って、この成田層を起源とする千葉段丘砂礫層を基盤とする千葉第2段丘、千葉第1段丘と言われる低位段丘面が部分的に認められる。

これから報告するタルカ作遺跡は、佐倉第三工業団地用地内にあるが、ここは鹿島川と佐倉城下で合流する高崎川の、支流によって東西を限られ、南を鹿島川の一支谷によって切断された広大な台地の一角を占めている。(第2図)。この用地内における埋蔵文化財調査の成果の一部は、すでに2冊の報告書として刊行され(鈴木、清藤、大原、1978、金丸、1983)、周辺地域の自然的、歴史的環境についても詳述されている。それらの成果によれば、佐倉第三工業団地用地内の主要遺跡の大



第2図 遺跡の位置と周辺の地形



第3図 遺跡の地形

部分が下総上位面上に位置し、本遺跡もまたその例外ではない。

さて、本地域の景観をみると、河谷に浸食された低地での水田經營と、台地上での畑作という典型的な下総型の営農形態がとられ、緑の多い田園風景を現出させている。遺跡周辺の状況をもうすこし詳しくたどりう。千葉、四街道から、国道51号線を北東に向い、鹿島川をわたれば、神門、宮本の集落に到達する。一方、神門で道を南に折れ、佐倉から八街へ到る県道を谷沿いにすすむと、岩富の集落に入ることになる。これより東は八街町の市街地まで、広い畑地が連なり、人家も稀となる。

このように、タルカ作遺跡を含む工業団地用地内は、神門、宮本、あるいは岩富といった古い集落に囲繞された地域であり、谷津田と雜木林と、そしてわずかな畑地とによっておおわれていた。しかし、大規模な造成工事の開始された今となっては、この風景も里人の記憶のかたすみにとどめられているにすぎず、それもいつしか風化していくにちがいない。

B 歴史的環境

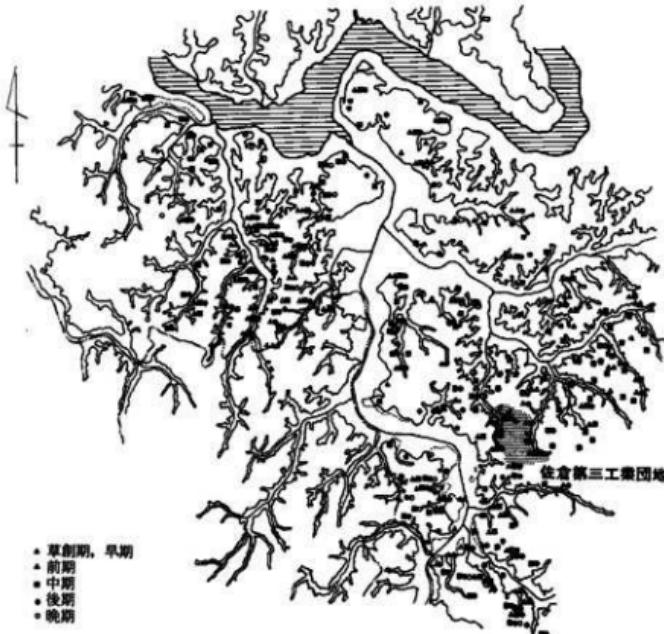
佐倉市周辺の遺跡と、その考古学的調査の経緯に関しては、梅咲直照氏の論考（梅咲1983）に詳しい。また本遺跡周辺の遺跡分布状況に関しては、すでに星谷津遺跡の報告書中に触れた（鈴木、清藤、大原、1978）。従って、本書においては、鹿島川流域の遺跡、特に本遺跡と時代的にかかわる縄文、古墳時代の遺跡分布状況を中心として略述しておきたい。

鹿島川は千葉市土気、誉田地区に源を発し、ほぼ真北に北流し印旛沼に注ぐ、全長約12kmの小河にすぎないが、多数の支谷と、さらに支谷に注ぐ小支谷を集め、沿岸の台地に変化に富んだ起伏を与えることにもなる。このようにして形成された支谷に分断された台地上には、これから概観するようにおびただしい数の遺跡が残されている。

第4図、第5図に鹿島川下流域の遺跡分布図を掲げた（佐倉市教育委員会 1984 原図）ので、この地域を中心として、以下時代を追って通観することにしたい。

縄文時代草創期前半 明らかにこの時期に属する有舌尖頭器の発見は、星谷津遺跡（報文第79図1）、Na206（上勝田城ノ内）遺跡、（金子 1973）が知られ、本遺跡からも3例の資料が採集された。しかし何といっても、漆谷津遺跡（佐倉市教育委員会 1983）第1群土器が重要である。繩形の縄の圧痕の付された土器で、自縄自巻の原体圧痕と説明されているが、類例は少ない。さらにこの時期に千葉第2段丘上に遺跡が残されたことも忘れてはならない。

縄文時代草創期後半 この時期もまとまった遺物は得られていない。井草式が漆谷津遺跡で、夏島式がタルカ作遺跡に認められる。また星谷津遺跡からも少量ずつ井草式から稻荷台式にわたる資料が報告されている程度で、香取から富里にかけて分水嶺上に該期の遺跡が密集する状態と著しい対照をなしている。しかし、生谷境堀遺跡では（桑原編 1974）、井草式から花輪台式に至る各期の資料と同時に、刺突文のある別型式が検出され、草創期末葉の土器群編年に波紋を投げかけることになった。



第4図 鹿島川流域の遺跡（1—縄文時代）

縄文時代早期 汗線文系の土器を出す遺跡としては、将門鹿島台遺跡（佐倉市教育委員会 1975）から田戸下層式とそれに伴う土坑が検出されている。これに前後する時期の資料は本遺跡からも得られているので、後に詳述したい。漆谷津遺跡からも田戸上層式中葉の好資料の出土があった。条痕文系の段階になると遺跡数は急速に増加し、遺構も數多く検出されるようになる。また印旛沼周辺での貝塚の形成もこの段階から開始される。学史上重要な飯田三ヶ月山貝塚や上座貝塚（麻生 1959）などがこれである。上座貝塚では炉穴の他に住居跡も検出されている。この期の住居跡としては間野台貝塚と飯重新畠遺跡（桑原編1974）の例も忘れてはならない。タルカ作遺跡においても早期後葉の炉穴群が検出されている。

この他に重要と思われるのに漆谷津遺跡第4群土器の検出があげられる。茅山上層式直後段階上ノ山式併行期の好資料であり、下総台地北縁部の類例（中山 1979 川根 1982）とともに、東関東地方の該期の土器群の変遷を考える上で基礎的な資料となろう。なお、現在資料整理中であるが、佐倉第三工業団地内の向原遺跡からは、これに後続し、前期最初頭に及ぶかと考えられる別種の土器が多く検出されており、報告書にて詳述される予定となっている。

縄文時代前期 本地域においては遺跡数の目立って減少する時期であり、本遺跡にて黒谷段階の黒



第5図 鹿島川流域の遺跡（2—古墳時代以降）

浜式が検出された意義は大きい。後続する土器群の報告例も多くないが、やはり向原遺跡では、多量の諸磯式、浮島式とともに住居跡の検出があった。浮島I式を主体とし相当量の諸磯式が共伴している。

縄文時代中期 佐倉市教育委員会の集計によれば、市内における五領ヶ台式から阿玉台式にかけての遺跡数が55遺跡にすぎないのに対し、加曾利E式期の遺跡は118遺跡を数え、中期後半になると遺跡数が倍増する。

中期前半期の遺跡としては、佐倉第三工業団地用地内に多数の地点があり、将来は五領ヶ台I式からの型式的変遷をあとづけることが可能となるものと期待される。とくに、向原遺跡では、雷5類、雷7類から阿玉台Ia式にかけての良好な資料を多く検出しており、阿玉台式成立期を考察する上で重要な問題を提起することになる。

中期後半加曾利E期になると、特にその後半に関しては、江原台遺跡や吉見台遺跡に代表されるような大規模な集落が形成されるようになる(佐倉市教育委員会 1979 高田 1980 他)。この他にも住居跡が検出された遺跡としては、円能遺跡(佐倉市教育委員会 1975)、太田宿遺跡(佐倉市教育委員会 1983)、生谷境堀遺跡(桑原編 1974)、間野台遺跡(柿沼他1977)などが知られ、本

遺跡に近接する佐倉市南部中学校校庭遺跡（松裏 1958）からも炉跡が見つかっているから、住居跡があったにちがいない。

縄文時代後晩期 この時期の遺跡の分布状況を見ると、印旛沼の周辺には地点貝塚を伴う大規模な集落が展開するとともに、印旛沼に注ぐ河谷に沿っても、点々と大小の集落の点在する状況がうかがわれる。

学史的にも著名な江原台（曲輪内）遺跡や遠部台遺跡、天神前遺跡（杉原他 1964）などは印旛沼沿岸に立地する拠点的な集落であり、また大型住居跡の発見によって一躍脚光を浴びた吉見台遺跡、異形台付土器と所謂土器塚で知られる井野長割遺跡（内田1977）、多量の異形勾玉の出土が報じられた草刈堀込（若衆山）¹遺跡などは内陸立地の拠点集落であるが、しばしば地点貝塚を伴っている。

本遺跡の周辺においても、調査の進歩に伴って、後期から晩期の包含層が検出されているが、いずれも小規模なものであり、遺物量も極端に少なく、今のところ遺構の検出はない。しかし、堀之内式から荒海式に至るまで諸型式を網羅し、断続的に営まれた季節的なキャンプサイトとも理解され、前記の拠点集落との関わりが問題とされる。

弥生時代 この時代の集落立地のあり方をみると、手縫川、鹿島川、高崎川等の主要河川の沿岸に大半の集落が集中し、内陸支谷部への進出はほとんど見られなくなる。印旛沼周辺は、天神前遺跡（杉原 大塚 1974）や後続する大崎台遺跡、江原台遺跡など著名な遺跡も多く、さらに近年では印・手式あるいは臼井南式の提唱にともなう論争の場ともなっているが、佐倉第三工業団地用地内の該期の資料は渺々たる有様で、ほとんど無人の状態であった。

古墳時代 古墳時代を前期、中期、後期と三分すると、本地域にあっては、前、中期の集落は少ないが、後期以降に著しい増加を示すようであり、主要河川の支谷部深くまで集落が形成されるようになる。

まず、鹿島川流域の集落の状況から概観しよう。古墳時代前、中期の遺跡としては、江原台遺跡（五領9）、大篠塚遺跡（五領2、和泉4）、太田・大篠塚遺跡群、六崎大崎台遺跡、岩富漆谷津遺跡（五領、和泉69）などから住居跡の検出がある程度で、遺跡の規模の較差も大きいようである。本遺跡周辺では、前記の漆谷津遺跡が最大の集落であるが、宮越、北ノ台、菊丹戸等にも同期の土器片が散見されるという（佐倉市教育委員会 1983）。

佐倉第三工業団地用地内で、古墳時代の集落形成の開始されるのは鬼高期初頭であると考えられる（池向II遺跡がこの期に比定される）。鹿島川流域で古墳時代後期の住居跡の検出された遺跡を列挙してみると、江原台遺跡、太田宿遺跡（佐倉市教育委員会 1983）、六崎大崎台遺跡、大篠塚遺跡、太田大篠塚遺跡群、新開遺跡（栗本他 1971）、坂戸広遺跡（渡辺、渋谷他 1977）、岩富漆谷津遺跡（佐倉市教育委員会 1983）、天辺内山遺跡（矢戸、池田 1981）、宮本遺跡（栗本他 1971）、寒風遺跡（栗本他 1971）、八木蒲田谷津遺跡（矢戸、池田 1981）など多数にのぼり、なお他にも多くの散布地が知られている。

一方、古墳に関しては、従来その調査事例が少なく、なかなかその実体がつかめなかつたが、佐倉市教育委員会による綿密な分布調査の成果によって、分布状況の概要が明確にされた。それによると、鹿島川下流域の分布密度は薄く、岩富を中心とする中流域に濃密な分布がみられる。とくに、前方後円墳1、円墳15から構成される飯塚古墳群、そして本遺跡周辺を広く含む岩富古墳群が目立つ存在である。後者には多彩な墳形と主体部構造をもつ古墳が含まれ、総数でも50基を大きく上回るものと考えられる。またその一部に関しては佐倉第三工業団地に関連して当センターによって発掘調査が実施され、多大の成果を得ている。

歴史時代 この時代の集落の分布状況を見ると、前代とそれほど大きな相異を認めることはできない。しかし、江原台遺跡や清水作遺跡（渡辺、渋谷他1977）に代表される多数の掘立柱建物跡をあわせても大集落の出現が注意され、法起寺式伽藍配置で知られる長熊庵寺（久保 1952 他）の建立などからもうかがえるような、新たな政治、社会再編に対応した計画性を帯びた集落の形成がすすめられていく。本遺跡においては、この時期の住居跡は僅かに2棟を検出し得たにすぎないが、このような零細な集落が如何なる背景をもって登場したのか、関連する諸情況を勘案し、周辺の遺跡との関係をまさぐるなかから、考察される必要があろう。

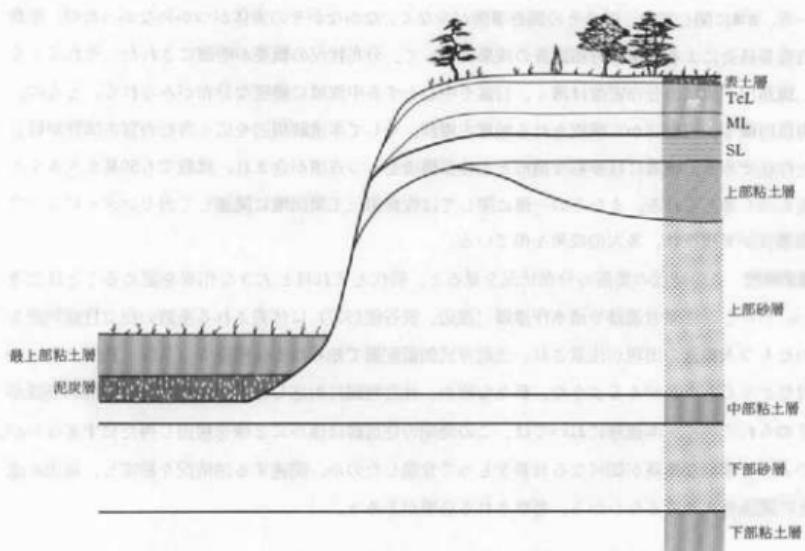
C 遺 跡 の 概 要

タルカ作遺跡は佐倉市神門字タルカ作に所在した。遺跡は高崎川の支流に北面し、東西をやはり支谷によって切られ、結果として北へ突出する半島状の台地上に位置している。支谷をへだてて西に腰巻遺跡が発掘調査されており、東は墳墓のみから構成されていた大作遺跡と陸続している。また南側には、やはり小規模な支谷が東西に漫し、向原遺跡と面することになる。さらに、高崎川支流の対岸には、六拾部、南広、栗野等の諸遺跡が連なり、全体としてひとつの大きな遺跡群の一角を占地しているということができる（第3図）。

さて、この遺跡の営まれた台地は、面積約3万平方m、標高は約35mと記録されている。地形区分の上からは下総上位面に相当する。発掘調査の結果は、次章以降、時代をおって詳細に報告されているので、ここではその成果の概要を示し、遺跡のアウトラインを指摘しておきたい。

先土器時代の遺物出土地点は6箇所あり、このうち3地点から集中的に遺物が出土した。集中地点は全てIII層内で、小規模なものばかりであった。他にハードローム層内よりナイフ形石器、礫片が、ソフトローム層内より礫片の出土した地点があったが、周辺部より他の遺物の検出をみなかった。

縄文時代の遺物は比較的多く、縄文草創期後半から後期前半にわたる各期の遺物が採集された。とくに、縄文早期の土器と前期前半の纖維土器には見るべきものが多い。また、これら両期は各種遺構を伴い、本遺跡調査の一方の柱ともなっている。しかし、他の時期の遺物は、一般に個体数が少なく、散発的に検出された状態を呈している。ただし、こうした遺物も詳細に検すれば、看過しえぬものも多い。早期前半の沈線文系土器や、中期初頭の土器など、本地域では出土事例の乏しかった資料を含んでいるからである。



第6図 台地と谷の地盤地質図

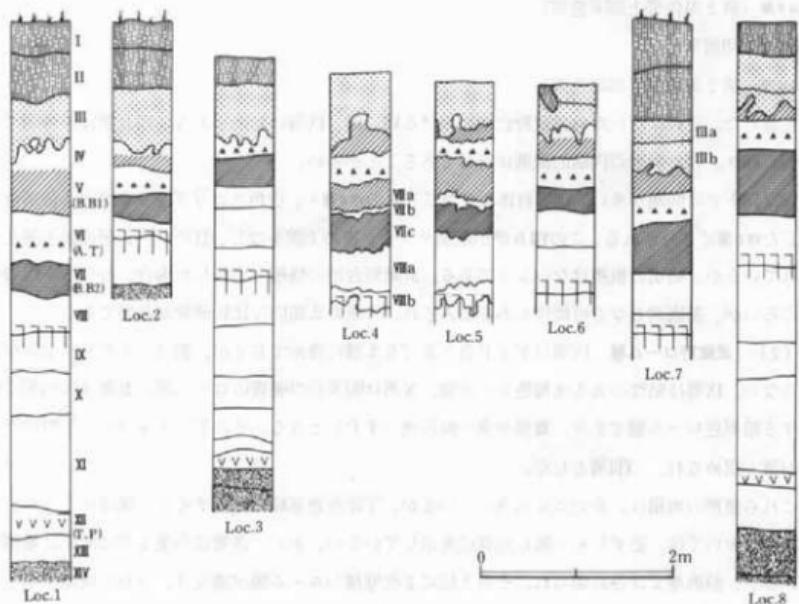
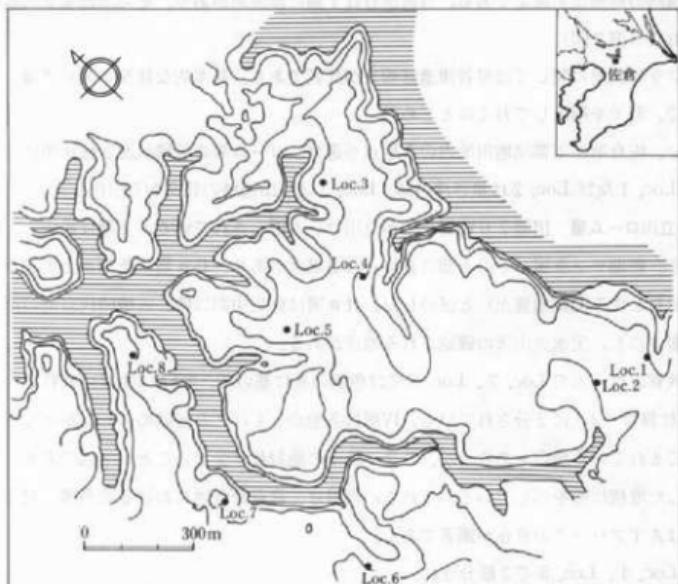
遺構としては黒浜式前半（黒谷段階）期の小竪穴や、時期不詳の落し穴も若干あるが、子母口期を中心とする、約40基からなる炉穴群が特筆される。検出された子母口式土器には、器形の判明する資料も含まれ、田戸上層式から子母口式への推移を考察する上で、まことに貴重な資料であると言えよう。黒浜式についても、その式の前半期後葉の組成を明示できたと考えている。

古墳時代については、鬼高期の住居跡が43棟あり、周辺に群集する古墳群との関係が推察されるとともに、集落を全掘しているので、集団構成、土師器の推移等吟味すべき点は多い。歴史時代においては、2棟の住居跡が検出されたにとどまったが、所謂離れ国分の問題とも関わり、軽視することはできない。第8図に検出遺構の全体を示した。

D 層序

本遺跡の地形学的な骨組みについては、すでにAで触れている。ここでは、より微視的に降下テフラの堆積状況を主体とする台地上層部の層序を観察し、基本層序を確定し、今後の指針を明確にしておきたい。

遺跡周辺は台地部分と谷底部分とから構成されている。谷に接する台地部分は急斜面となっている。台地部分は、砂層と粘質土層との互層となる成田層上に、3枚に大別されるローム層がある。そのうち最下層である下末吉ローム層は、明らかに水成ローム層であり、直接人類の生産活動の場となったのは武藏野ローム層より上位の諸層であるが、武藏野ローム層内の調査は実施例がなく、



第7図 佐倉第三工業団地内ローム層柱状図集成

この期の遺跡の有無は不確定である。谷底部分は下層に泥炭層があり、その上部を2次堆積の粘質土層がおおう（第7図）。

降下テフラの概要に関しては星谷津遺跡報文が詳細であり、基本的な状況に関しては、尽くされているので、若干を補足しておくにとどめたい。

第7図に、佐倉第三工業団地用地内の8地点を選び、ローム層の堆積状況を柱状図にて示した。このうちLoc. 1及びLoc. 2は星谷津遺跡、Loc. 3は立山遺跡の報文から引例した。

（1）立川ローム層 III層よりVII層までが立川ローム層とされている。I層は耕作土、II層は暗褐色土層で、新期テフラ層がその上部に認められる場合があり、IIa層（新期富士テフラ）IIb層（III層を母材とする混腐植質土）と区分した。IIa層は弥生中期以降、古墳時代以前の所産である。また、I層中にも、宝永火山灰の確認される地点がある。

III層は軟質のロームでLoc. 7、Loc. 8では色調の差に基いて、IIIa層（明黄色軟質ローム）、IIIb層（黄褐色軟質ローム）に2分されている。IV層は各地点ともほとんど認められなかった。過半がIII層にとりこまれている場合もあるが、テフラ降下の絶対量が少ないことが主因である。V層、VI層は安定した堆積状態を示している。これらの両層は、武藏野台地における同名層と対比してよい。VI層中にはATブロックの介在が顕著である。

VII層はLoc. 4、Loc. 5で3細分され、

VIIa層（第2黒色帯上部明色部）

VIIb層（間層帶）

VIIc層（第2黒色帯下部暗色部）

と定義した。これはだいたい武藏野台地におけるVII、VIII、IX層に対応しよう。VIIb層は不分明であるが、VIIa、VIIc両層の肉眼的識別は容易であることが多い。

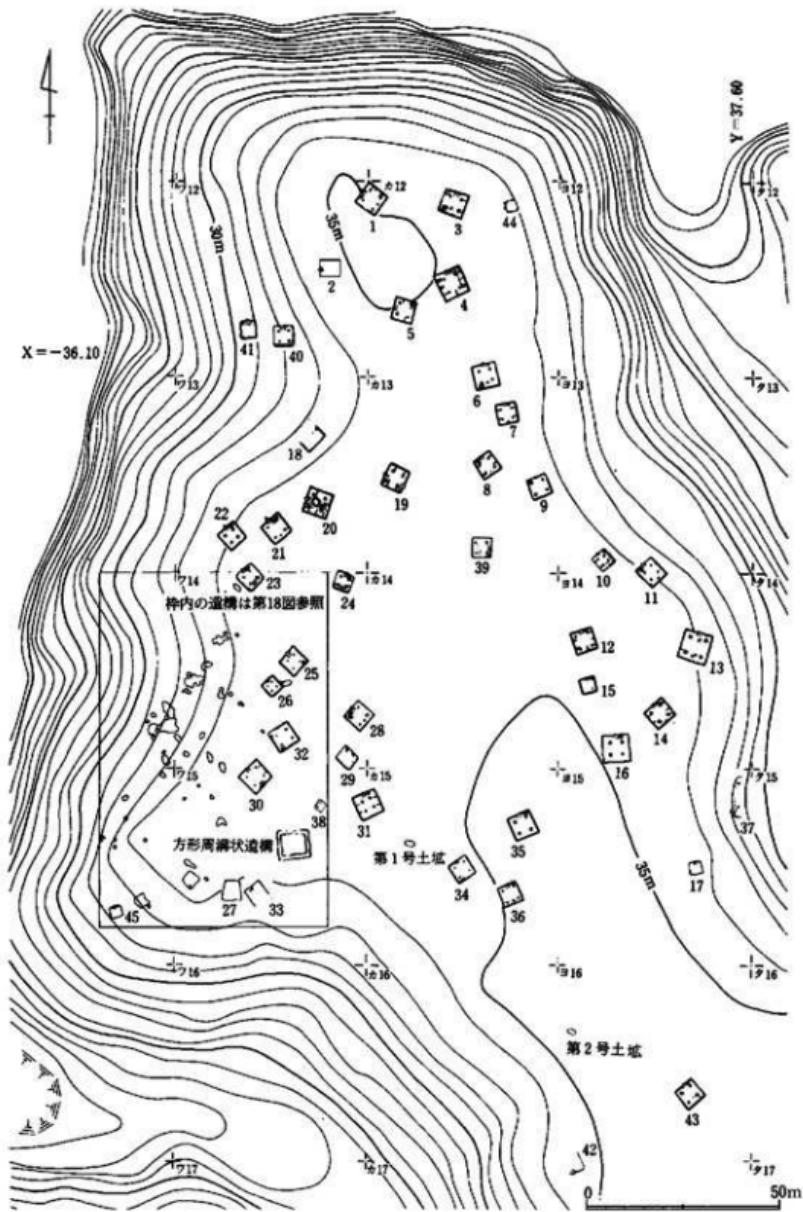
VII層以下には問題が多い。VII層自体はスコリア質のVIIa層と、白色スコリアを少量含み、黄褐色を呈したVIIb層に2分される。このVIIb層が所謂クラック帯の上限をなし、立川ローム層の最下層と言われているが、格別の根拠はないようである。武藏野台地の様相と比較した場合、むしろ、IX層中位ぐらいが、基底面となる可能性もあるとみられ、今後の広範囲な比較研究が必要である。

（2）武藏野ローム層 IX層以下TP直下までを本層に含めておくが、前述のとおり、上限が定まらない。IX層は粘性のある灰褐色ローム層、X層は明黄色の硬質のローム層、XI層は暗色帯に相当する暗褐色ローム層であり、XII層が東京軽石層（TP）となる。その下にチョコレート色のロームが薄く認められ、XIII層とした。

これら諸層の堆積は、各地点に共通しているが、下総台地東縁に比較すると、層厚はうすく、また細部においては、必ずしも一致した層位を示していない。また、各層は台地上では水平に堆積しているが、斜面部では谷に切られ、その上位に2次堆積のローム層が連なり、支谷形成期を明示している。（田村隆）

引用参考文献（あいうえお順）

- 麻生 優 (1959) 佐倉市上座貝塚発見の住居跡と炉穴 (駿台史学9)
- 内田儀久 (1977) 千葉県佐倉市井野長割遺跡出土の異形台付土器 (考古学雑誌63-3)
- 梅咲直照 (1983) 遺跡の位置と環境 (佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要II)
- 柿沼修平 (1977) 間野台・古屋敷
- 金丸 誠 (1983) 佐倉市立山遺跡
- 金子皓彦 (1973) 遺跡分布調査報告書2・佐倉市上勝田、瓜坪新田・米田・上別所地区
- 川根正教 (1982) 千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡
- 久保常晴他 (1952) 千葉県印旛郡長能寺跡発掘調査報告 (銅鐸9)
- 栗本佳弘他 (1971) 埋蔵文化財調査報告—東関東自動車道(千葉—成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書
- 桑原 譲編 (1974) 飯重
- 佐倉市教育委員会 (1975) 円能遺跡発掘調査概報
- 佐倉市教育委員会 (1975) 将門鹿島台
- 佐倉市教育委員会 (1979) 江原台
- 佐倉市教育委員会 (1983) 岩富漆谷津、太田宿
- 佐倉市教育委員会 (1984) 千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図—佐倉市遺跡詳細分布調査報告書一
- 鈴木道之助・清藤一順・大原正義 (1978) 佐倉市星谷津遺跡
- 杉原重夫 (1970) 下総台地西部における地形の発達 (地理学評論43)
- 杉原莊介他 (1964) 千葉県天神前遺跡における晩期織文式土器 (駿台史学15)
- 杉原莊介・大塚初重 (1974) 千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群 (明治大学文学部研究報告・考古学第4冊)
- 高田 博他 (1977) 佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書I—第1次・第2次—
- 中山吉秀 (1979) 千葉県流山市桐ヶ谷新田遺跡
- 松裏善亮 (1958) 千葉県佐倉市南部中学校校庭土師住居址調査
- 矢戸三男・池田大助 (1981) バイブルайн
- 渡辺 黙・渋谷 貞他 (1977) 千葉県佐倉市坂戸遺跡—発掘調査速報一



第8図 タルカ作遺跡全体図（数字は住居跡番号）

第2章 先土器時代

1 概要

本遺跡の先土器確認調査によって、遺物の検出されたグリッドは6箇所認められたが、本調査の結果、とくに遺物の集中の認められた地点は1箇所にすぎず、他は微量の遺物が散漫に採集されたにすぎない（第9図）。

遺跡は鹿島川支谷に三方を限られた、南北に長い台地上にあるが、遺物はこの谷津に南面する台地の縁辺部に多く採集された。台地北側に湾入する谷に面する、北斜面部からは1箇所の遺物出土地点が認められたにすぎず、西～南側にはほとんどの検出地点が並存する傾向があるが、この部分は同時に、繩文時代草創期後半以降の遺物集中地点とも重複している。

本報告書においては、2点以上の遺物が基本的に同一層内に視角的なまとまりをもって検出しえたものはすべてブロック番号を付し、1点しか認められないものについては単独出土として処理することにした。この結果、タルカ作遺跡には5ブロック、1単独例が認められることになる。時期的には下総II期に全て包括される。以下、順を追って各地点の概要を紹介しよう。

2 ブロック

第1ブロック

出土状況（第10図）北側斜面上にて検出された唯一のブロックである。極めて小範囲から3点の遺物が出土した。産出層準はVI層であろう。

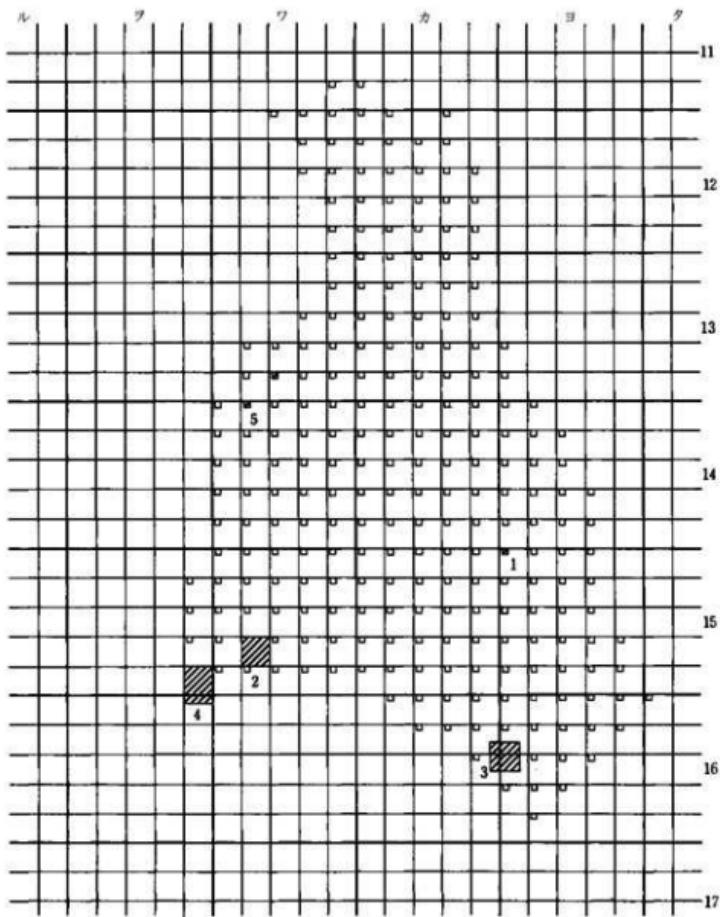
出土遺物 遺物は2個体3点の破碎礫群である。このうちの1点には火熱を受けたために生じる赤変が顕著で、礫群の一部が廃棄されたものとも推定される。ただし周辺部にはこれと関連する遺物出土地点はない。

第1表 第1ブロック遺物計測表

遺物番号	器種	石質(母岩)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	辨認番号	備考
三15-1G-1	礫	片砂岩	33.2	26.7	6.9	6.1	なし	
三15-1G-2	礫	片花崗岩	23.7	18.0	8.0	35.4	なし	火熱による赤変
三15-1G-3	礫	片砂岩	19.8	13.9	4.8	2.9	なし	砂岩は1、3同一母岩

第2ブロック

出土状況（第11図）7.5m×5mの範囲に5点の石器が散漫に分布している。産出層位は波状

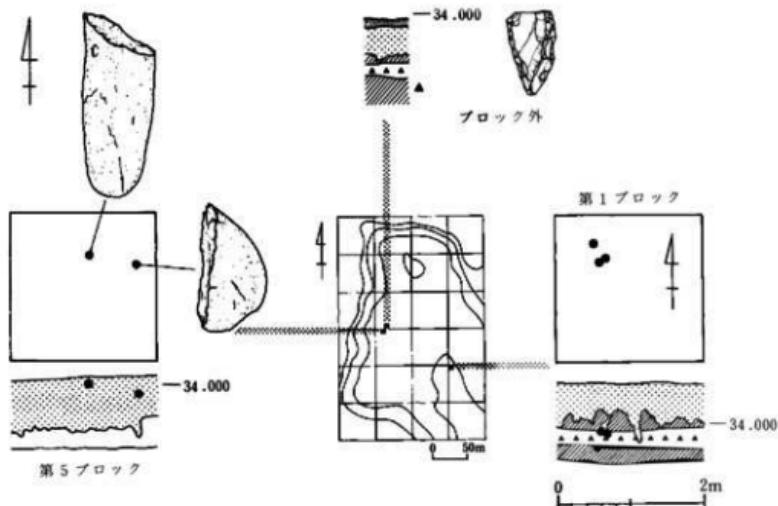


第9図 先土器時代試掘坑の配置と検出ブロックの位置（数字：ブロック番号）

帶の前後で、IV層に比定できよう。

出土遺物（第12図1～5） 石器組成をみると端削器2点、剥片3点、合計すると5点となり、とくに端削器の卓越するブロックと言えよう。母岩構成は1・5が別個体の黒曜石、2・3が同一個体の硬質の砂岩、4が玄武岩という構成となり、多様な母岩の使用が指摘される。

1は黒曜石製の端削器。素材である剥片の上下に打面が残され、石核が背の低い両設型のものであることが分る。2次加工は背面左・右両側縁に加えられているが、とくに右側縁のものは入念であり、急角度、弧状を呈する典型的な端削線を形成している。2も端削器に分類したが、1とは大分ちがったところがある。素材とされたのは、砂岩製で厚味のある縦長の剥片であるが、半折され



第10図 第1, 第5ブロック及びブロック外遺物出土状況

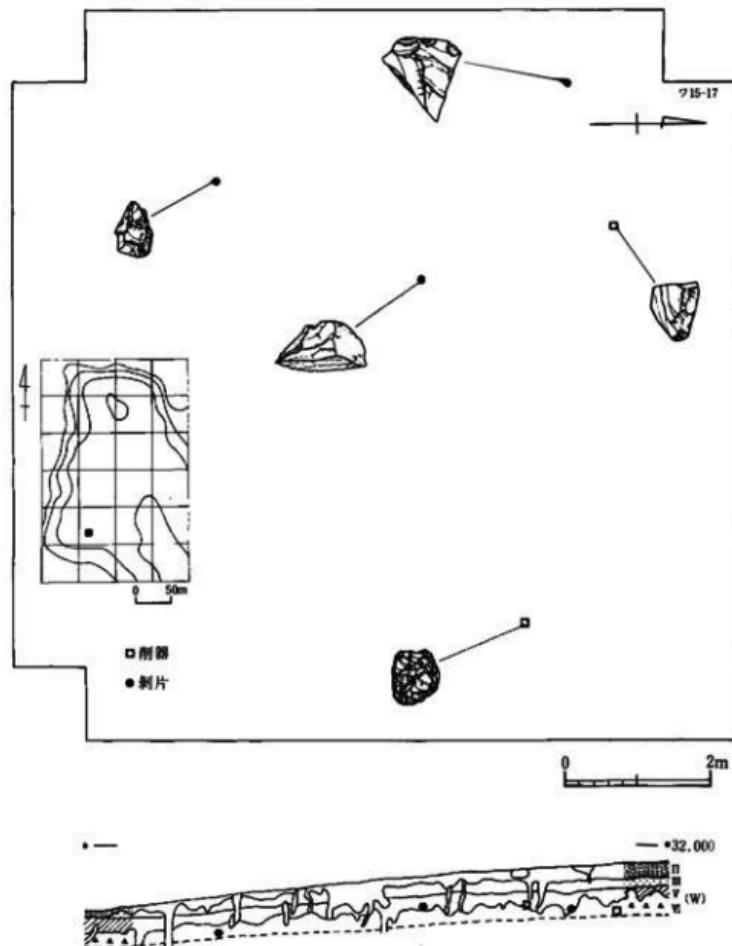
頭部を欠いている。背面右側縁から加えられた剝離は3の打面部からの剝離痕と特徴が一致するところから、素材剝片剝離に先行する段階に施されたものであろう。端削縁は剝片尾部末端に形成されている。3~5は剝片であるが全般に特徴を抱え難い。4は折断剝片。

第2表 第2ブロック遺物計測表

遺物番号	器種	石質(母岩)	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(㎏)	鉢図番号	備考
B 1	剝片	黒曜石	27.0	18.7	9.3	4.2	5	
B 2	剝片	玄武岩	22.8	44.3	14.8	15.3	4	
B 3	剝片	砂岩	42.8	36.9	13.3	15.6	3	
B 4	削器	黒曜石	25.1	25.2	9.4	6.5	1	
ワ15-17G-1	削器	砂岩	26.5	24.1	11.6	7.6	2	

第3ブロック

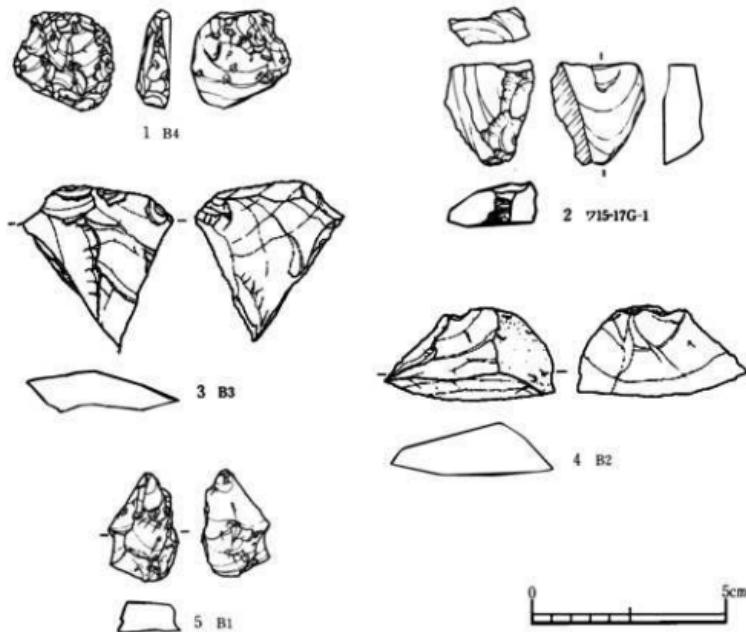
出土状況(第13図) 本ブロックは遺物総数19点と、決して規模の大きなものとは言えないが、タルカ作遺跡においては最もまとまった出土状況を呈している。遺物の出土範囲は4.8m×3.6mであるが、中央部の集中度が高い。一方、垂直分布状況を見ると、II b層から波状帶上面に亘って遺物が含まれているが、III層中位に最も集中する傾向がある。なお、第13図下においてIII層が2分されているが、これはおもに色調の差異にもとづいた分層であり、上部は黄色味が強く(III a層)、下部は赤味が強い(III b層)という特徴を示している。仮にこの区分に従えば、本ブロックはIII a層とIII b層との境界付近に垂直分布の中心をおいていることになろう。



第11図 第2ブロック遺物出土状況

出土遺物（第14図） 遺物総数は19点である。内訳はナイフ形石器2点、端削器1点、石核1点、他に剥片が15点ある。母岩構成は端削器と石核が別母岩の頁岩であるが、他は全例同一母岩のチャートによって占められている。チャートは良質のものであり、乳白色の瑪瑙質を呈し、秩父古生層に多産する青灰色のチャートとは若干趣を異にしている。同質の右材は下総IIc期の諸遺跡に散見され、供給源の探索が必要である。

1はナイフ形石器、基部を欠損しているため全形を知ることはできないが、基部を打面側におく

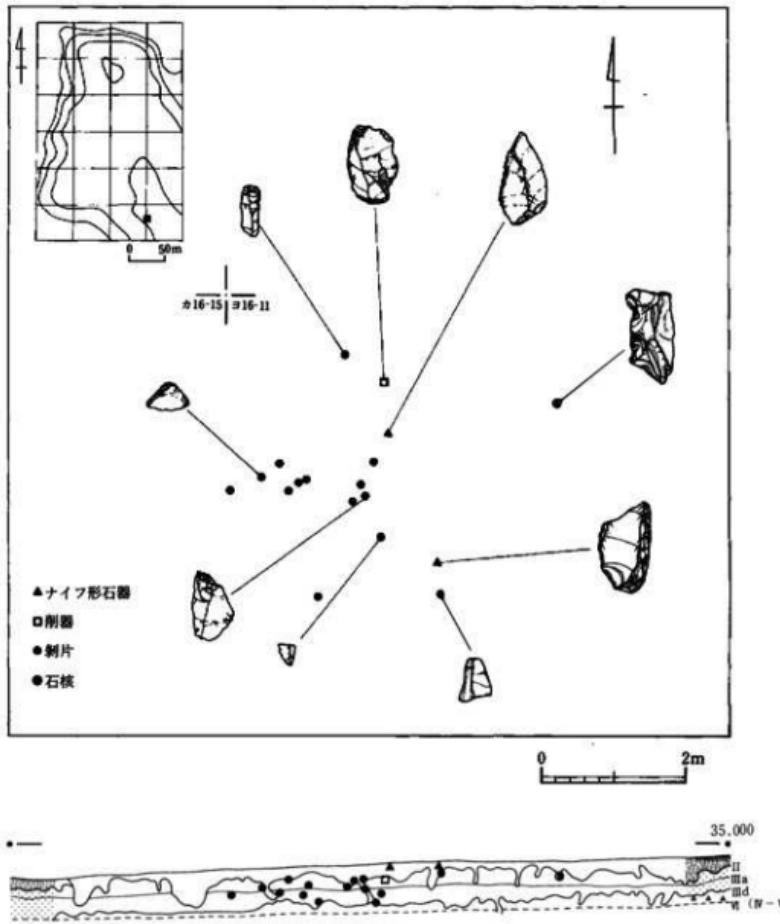


第12図 第2ブロック出土石器実測図

という特徴があり、あるいは2のような基部形態を示すものかも知れない。プランティングは背面左側縁部に連続的に施されているが、背稜を切り、所謂折断技法が採用されている。2のナイフ形石器も破損品である。1とは逆にこの例では尖頭部を大きく欠損している。本例のプランティングは2側縁型と言えるが、背面右側縁のものは入念かつ急斜なものであるが、左側は粗く斜度も弱い。3は頁岩製端削器と考えられる。縦長の剥片の周辺に細かい剥離が加えられ、末端部に長軸に直交して弱い弧状の端削刃が付設されている。

石核は1例あるが(4)、一面に原礫面を残した3角柱状の部厚い剥片を素材にしている。背面左側縁には、大きく4面の剥片剥離痕が認められるが、そのうちの1面が石核折断面によって切られているところから、剥片剥離作業の過程で、石核の一端(素材尾部)が欠損したものと推定される。また、背面左側縁部には細かい剥離痕が重複し、欠損後に側削器に転用された疑いが濃い。さきに触れたように、本石核から剥離された剥片が1例もないことも、この推定を裏付けている。

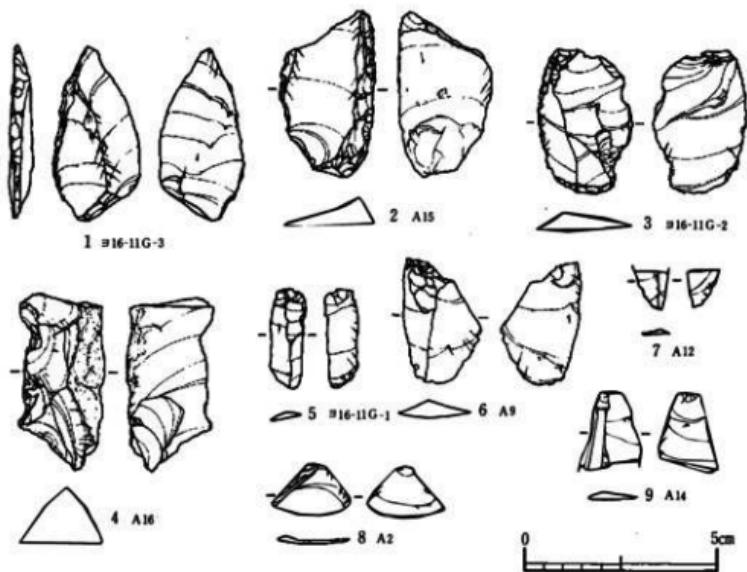
5から9に5例の剥片を図示したが、残余の10例は細かい碎片様のものばかりで、石器製作時の扱ねものであろう。剥片のうち、5・6・7・9などは目的的剥片に分類される。打面を小さく残し、背面1稜型の小形で縦長のものが目立つ。7・9は折断剥片。8はあるいは打面修整剥片とも考えられる。



第13図 第3ブロック遺物出土状況

第3表 第3ブロック遺物計測表

遺物番号	器種	石質(母岩)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	標団番号	備考
A 1	剝片	チャート	11.7	17.8	2.6	0.4	なし	完形末端ヒンデフラクチュア
A 2	剝片	チャート	13.9	21.2	2.1	0.5	8	完形末端ヒンデフラクチュア
A 3	剝片	チャート	8.1	16.1	5.0	0.6	なし	基部欠損
A 4	剝片	チャート	14.0	24.9	7.6	1.6	なし	尾部破片
A 5	剝片	チャート	14.3	24.2	1.7	0.4	なし	完形末端ヒンデフラクチュア

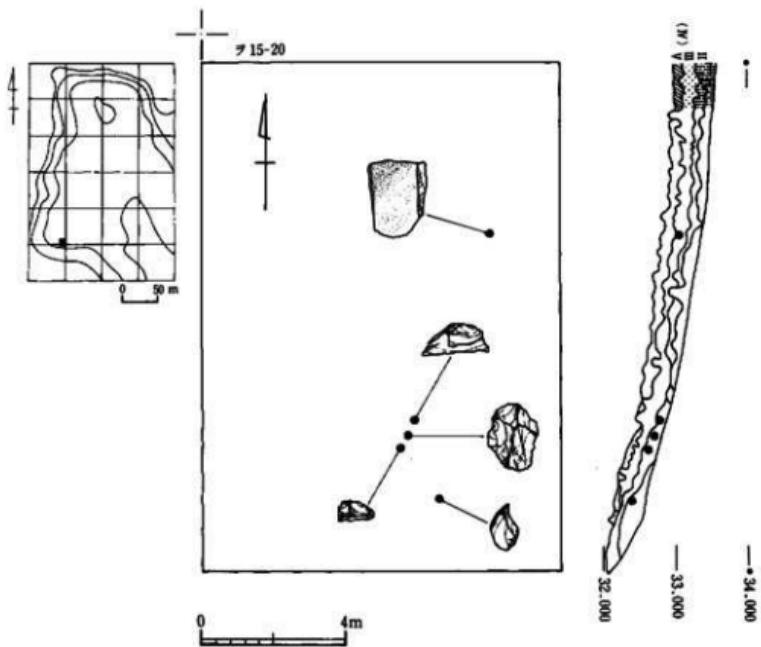


第14図 第3ブロック出土石器実測図

A 6	剥 片	チャート	21.4	13.1	2.8	0.2	なし	尾部（折断剝片）
A 7	剥 片	チャート	11.7	12.2	1.2	0.2	なし	尾部欠損
A 8	剥 片	チャート	8.4	14.2	2.3	0.3	なし	頭部（折断剝片）
A 9	剥 片	チャート	30.5	21.3	4.8	2.2	6	完形
A 10	剥 片	チャート	25.3	12.2	7.1	1.1	なし	完形
A 11	剥 片	チャート	20.7	16.4	4.5	1.1	なし	尾部欠損（折断剝片）
A 12	剥 片	チャート	9.8	9.1	1.7	0.1	7	尾部
A 13	剥 片	チャート	7.7	16.5	2.6	0.3	なし	完形
A 14	剥 片	チャート	20.1	16.7	3.0	0.8	9	尾部欠損（折断剝片）
A 15	ナイフ形石器	チャート	44.2	24.6	9.3	8.7	2	先端部欠損
A 16	石 核	頁岩 a	43.5	23.9	26.3	15.8	4	
16-11G-1	剝 片	チャート	24.7	9.4	3.8	0.7	5	完形
16-11G-2	剝 器	頁岩 b	38.1	19.9	5.7	5.1	3	完形
16-11G-3	ナイフ形石器	チャート	45.8	24.2	6.9	6.2	1	完形、刃部に使用痕らしい微小剝離

第4ブロック

出土状況（第15図） ワ16-05グリッドの2.2m×1.4mの範囲から4点の遺物が近接して検出されたが、やや離れて剝片1点が採集され、これを含めると相当広範囲にわたり散漫な状態で遺物が残



第15図 第4ブロック遺物出土状況

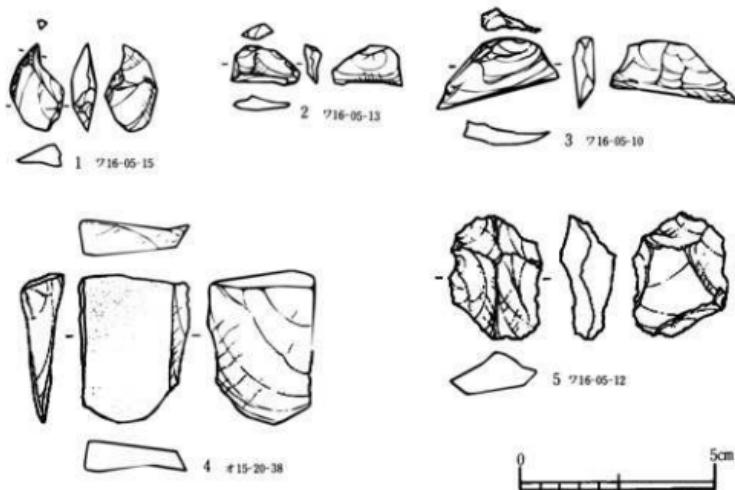
されていることになる。ブロックは緩斜面部に位置するため、土層断面への遺物の投影は必ずしも実態を反映していないが、産出層位はIII層の上部であると推定される。

出土遺物（第16図） 遺物総数は5点で、石錐1点、石核1点、剥片3点という構成となっている。母岩は同一母岩の珪質粘板岩3点、他に別個体の玄武岩が2点あり、2種3母岩が含まれる。

1は珪質粘板岩製の石錐。大きく打面を残す貝殻状剥片の一端を鋭く尖らせてある。2・3も珪質粘板岩製の剥片。横に長い台形状を呈し、打面・打瘤ともに大きい。4は玄武岩の剥片。背面に蹠面を残し、大きく平坦打面を残している。打瘤部から縦に半折されている。5の石核も玄武岩。両面ともに求心的な横に長い剥離面によっておおわれている。最終的な残置核の状態を呈している。

第4表 第4ブロック遺物計測表

遺物番号	器種	石質(母岩)	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重量(㎏)	標因番号	備考
オ15-20-38	剥片	玄武岩 a	38.9	29.2	18.4	9.4	4	完形
ワ16-05-10	剥片	珪質粘板岩	12.5	33.0	5.8	2.5	3	完形末端ヒンダフラクチュア
ワ16-05-12	石核	玄武岩 b	31.8	25.5	13.3	8.4	5	
ワ16-05-13	剥片	珪質粘板岩	9.3	18.2	3.3	0.4	2	完形
ワ16-05-15	石錐	珪質粘板岩	22.7	13.3	5.4	1.3	1	完形



第16図 第4ブロック出土石器実測図

第5ブロック

出土状況(第10図) III層上部より2点の遺物が近接して検出されたが、周辺部からは何らの遺構・遺物も見つかっていない。

出土遺物(第17図2・3) 同一母岩と考えられる砂岩の円礫片が2点ある。加工痕・火熱痕ともに認められない。

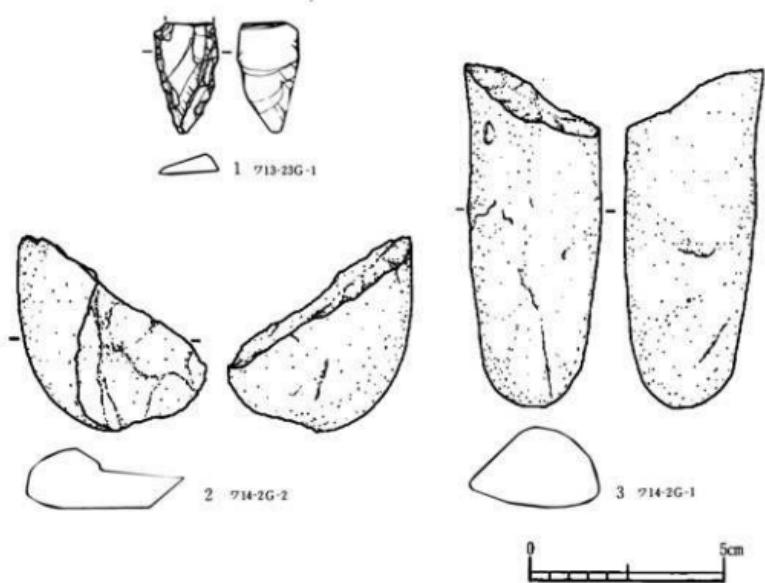
単独出土の石器(第17図1) ワ14-23グリッドVIIa層よりチャート製の石刃ナイフが1点採集された。基部破片と考えられ、両側縁にプランティングが看取されるが、背面左側縁のそれは、尖端部寄りに漸次剥離痕が細かくなり、おそらく本来は2側縁加工の形態をとっていたものと推定される。(田村隆)

第5表 第5ブロック遺物計測表

遺物番号	器種	石質(母岩)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	検出番号	備考
ワ14-2G-1	礫片	砂岩	89.8	34.5	22.7	90.2	3	
ワ14-2G-2	礫片	砂岩	60.1	36.8	17.7	35.4	2	1、2同一母岩

第6表 ブロック外遺物計測表

遺物番号	器種	石質(母岩)	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	検出番号	備考
ワ13-23G-1	ナイフ形石器	チャート	28.7	16.9	5.8	2.9	1	VIIa層検出



第17図 第5ブロック(2,3) 及び単独出土の石器(1)実測図

第3章 繩文時代

1 概要

繩文時代の遺構は、炉穴39、落し穴4、土塙2、小豎穴1が検出された。いずれも早期から前期にかけての時期に属すると思われる。分布も集中しており、北に向って突き出したタルカ作の台地の中でも、南のつけ根の方に近い南西に張り出した部分である。その平坦面と南から西へとまわる斜面に分布する（第18図）。

炉穴39の中には、いくつかの炉穴の喰み合っているものがあり、それらをひとつひとつ数え上げると、70前後の数になる。そのうちには、明確な焼土の検出されなかったものを5個含めている。川口 1980の分類を参考としたが、ロームへの掘り込みの深浅、足場の掘り込みの有無によって、大きく3つのタイプに構造的に分かれるようである。

- ①長方形型。平面が長方形の深い掘りで、一方の端に炉部があり、その反対の端に足場がある。
 - ②深い円形型。平面が円形の深い掘りの炉部だけがみられ、足場の掘り込みはみられない。
 - ③浅い円形型。平面が円形の浅い掘りの炉部だけがみられ、足場の掘り込みはみられない。
- ②については、本来、第25号炉穴のような浅い掘り込みの足場があったかもしれない。②と③の境は、必ずしも明瞭ではない。

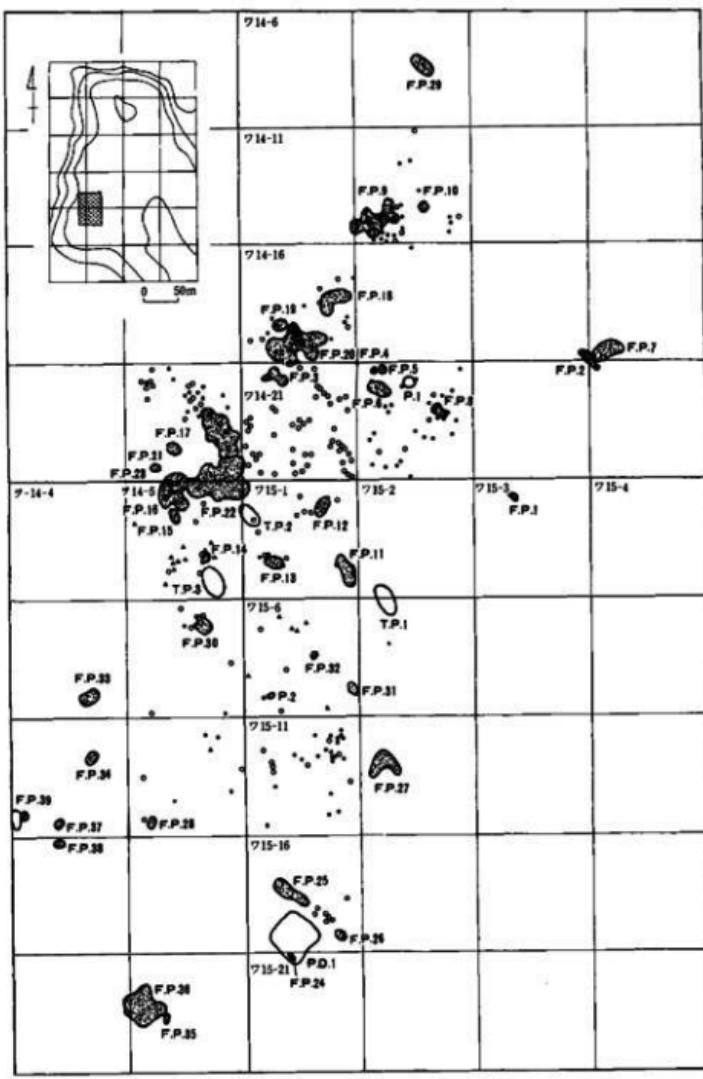
落し穴4は、いずれも同じような構造をしており、口は小判形で、底に向ってすぼまり、途中から長方形の垂直な掘り方に変わって底に至る。底は比較的平坦で、杭をいたした穴はみつからなかった。第4号は、第27号炉穴によって切られており、落し穴の年代を考える上で興味深い。

土塙2は、1つは、はっきりとした掘り方を持つが、今1つは、シミであるかも知れない。ただし、中から石器が出土している。

小豎穴1は、ほぼ正方形を呈し、中からも遺物の出土が多いが、炉跡、柱穴といったものが検出されなかった。

繩文時代の遺物は、上記の遺構中および遺構外の包含層中から、少なからず出土した。繩文土器、石器、土製品から成る。それぞれの内訳は、以下の通りである。

繩文土器 第I群 草創期後半の燃糸文、繩文の土器	513点（包含層中出土数、以下同じ）
第II群 早期前葉の沈線文土器	174点
第III群 早期後葉の無文、条痕文土器	1,139点
第IV群 前期前葉の纖維土器	1,267点
第V群 前期後葉の竹管文と貝殻文の土器	488点
第VI群 前期末葉の繩文土器	僅少
第VII群 中期初頭の土器	156点



○ 条痕文 F.P. 炉穴
 ● 無文 T.P. 落し穴
 ▲ 有文 P. 土塙
 ■ 炉穴 P.D. 小堅穴
 □ 土塙

第18図 縄文時代の遺構と第III群土器の分布状況

第VII群	中期前葉の角押文の土器	157点	
第IX群	中期後葉の土器	82点	
第X群	後期前葉の土器	30点 (1個体)	
石 器	有舌尖頭器 3点	石 斧 2点	磨石、敲き石 9点
	石 鐵 20点	片刃打割器 1点	石 核 4点
	楔状石器 7点	切目石錐 1点	剝 片 131点
	削 器 2点	垂 飾 1点	破 碎 碓 97点
土 製 品	土 製 円 盤 12点	土 器 片 錐 7点	手づくね粘土塊 1点

(鶴 淳一)

2 遺構と遺物

A 炉 穴

第1号炉穴 (061) (第19図)

位置 ワ15-03グリッドの北西隅近くに位置し、古墳時代の第30号住居跡に切られている。立地は、台地の平坦面上である。平面図にみえる角は、先土器確認グリッドのものである。

形状・規模 平面形態は、切られて不明であるが、もし円形であれば、径0.8m前後であろう。深さは0.43mある。穴の形は、底の平らなスリ鉢形である。

覆 土 上の方は黒褐色土が目立ち、下の方は焼土、ローム粒が目立つ。

焼 土 質は純粹でなく、かなり他の土が混じる。円形であれば径45cm、厚さ8cmである。

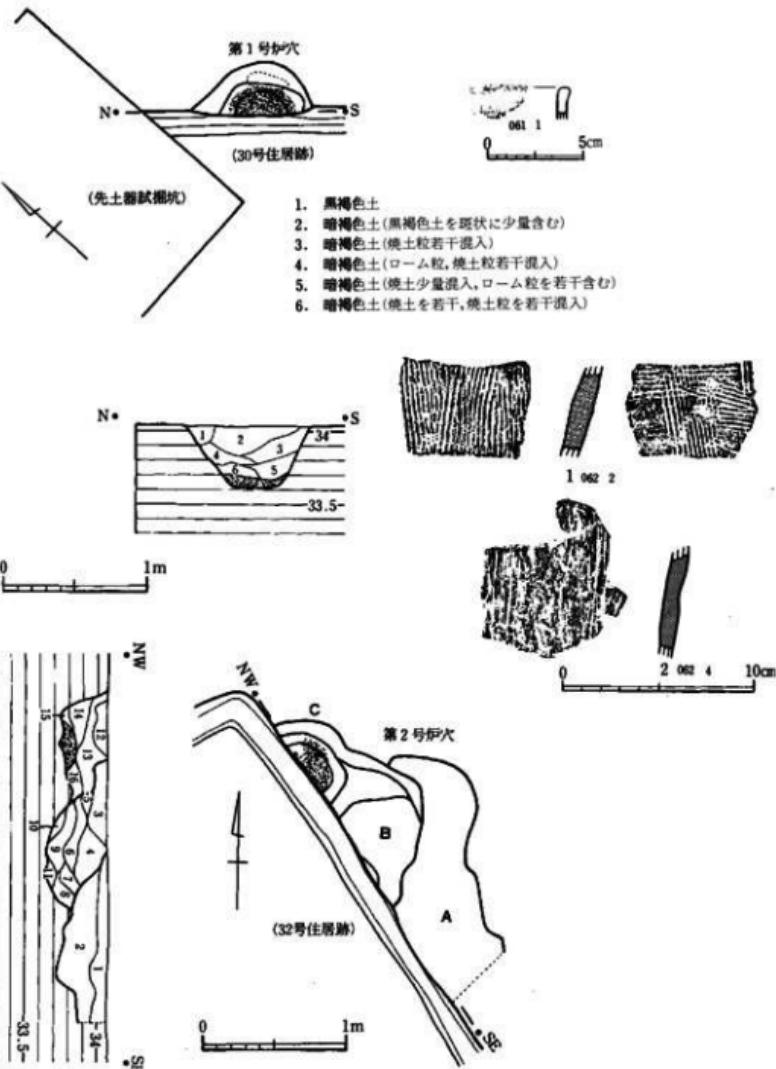
構 造 南西側がのこっていないので断定できないが、深い掘り込みを持つ長方形型の炉部か、あるいは深い掘り込みを持つ円形型の炉部であろう。長方形型の炉部とすれば、足場は、失なわれた南西側にあったはずである。

遺 物 土器片1点(1)のみである。1は口縁部の破片で、口縁部はやや肥厚し、表面に軽い横位のナデ痕が残る。拓影では判別し難いが、口縁下より、浅い撫糸文が施されている。原体はR、胎土中に細かい砂粒がやや多く含まれ、焼成は並、黄褐色を呈す。比較的口径の小さな小型土器で、第I群第4類である。

年 代 細かい年代は、不明である。

第2号炉穴 (062) (第19図)

位 置 ワ14-18、19、23、24の4つのグリッドにまたがる。古墳時代の第32号住居跡に切られて



1. 黒褐色土(ローム粒を斑状に若干混入)
2. 暗褐色土(ロームをブロック状にやや多く含む)
3. 暗褐色土(黒色土粒、焼土粒を若干含む)
4. 暗褐色土(ローム粒、焼土粒を若干含む)
5. 暗褐色土(ロームを若干含み明色)
6. 暗褐色土(焼土粒、ローム粒を若干含む)
7. 暗褐色土(ローム、焼土粒を若干含む)
8. 暗茶褐色土(ロームを若干含み明色)
9. 暗褐色土(焼土粒、ローム粒を若干含む)
10. 暗黃褐色土(焼土粒、ローム粒を若干含む)
11. 暗褐色土(ローム粒、焼土粒を若干含む)
12. 暗褐色土(黒色土を若干含み暗色)
13. 暗褐色土(焼土粒、ローム粒、炭化物粒、黒色土粒を含む)
14. 暗褐色土(焼土粒、ローム粒、炭化物粒、黒色土粒を含む)
15. 暗褐色土(焼土粒、ローム粒を少量含む)
16. 暗褐色土(焼土粒、ローム粒を若干含む)

第19図 第1号炉穴遺構図、出土遺物(上)、第2号炉穴遺構図、出土遺物(下)

いる。立地は、台地の平坦面上である。

形状・規模 住居跡に切られていることと、A、B、Cの3つが切り合い、3回つくりなおされてることから、形は良くわからないが、Cは、長楕円形をしていたようである。したがって、大きさは出せない。深さについてみると、AとCが0.3~0.35mであるのに対し、Bがやや深くて0.4m前後ある。

覆土 Aの覆土には全く焼土が含まれない。Bの覆土には、焼土粒が含まれる。Cの覆土にも焼土粒が含まれるが、BとCの切り合いはつかめた。C→B→Aの順でつくりかえられたことがわかる。

焼土 焼土がみつかったのは、Cだけである。純粹ではない。形は不整形で、長径40cm前後にならう。厚さは10cm前後あり、台形に盛り上がっている。

構造 烧土のこっていたCについては、長方形の掘り込みがあって、北西隅に炉部があり、その反対側に足場があったものと思われる。AとBについては、炉部も位置不明であるが、掘りの深いタイプであることは、確かである。

遺物 土器が3点(1、2)出土した。3点とも第III群の土器である。1は表面、内面とも貝殻条痕で、表面は縦位、内面は縦、横に条痕が走る。内面には、施文前の弱い横位の擦痕も認められる。胎土には長石等の微細な砂粒が多く含まれる。ごく微量の纖維の混入も認められる。焼成は良好で堅密である。2は表面条痕、内面は無文である。表面の条痕は縦位であるが浅く、土器表面の凹面には看取できないところもある。胎土は1に近い。焼成はやや不良である。1、2とも胴下部分の破片で、2は、特に二次焼成を受けている。

年代 出土した土器から子母口期に比定できる。

第3号炉穴(064)(第20図)

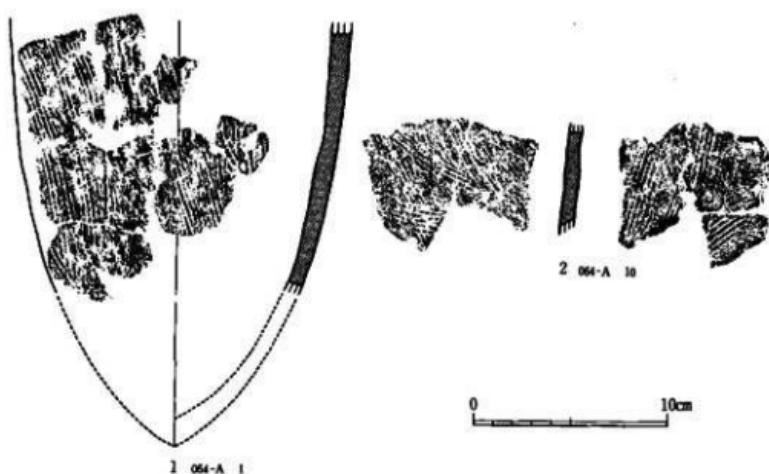
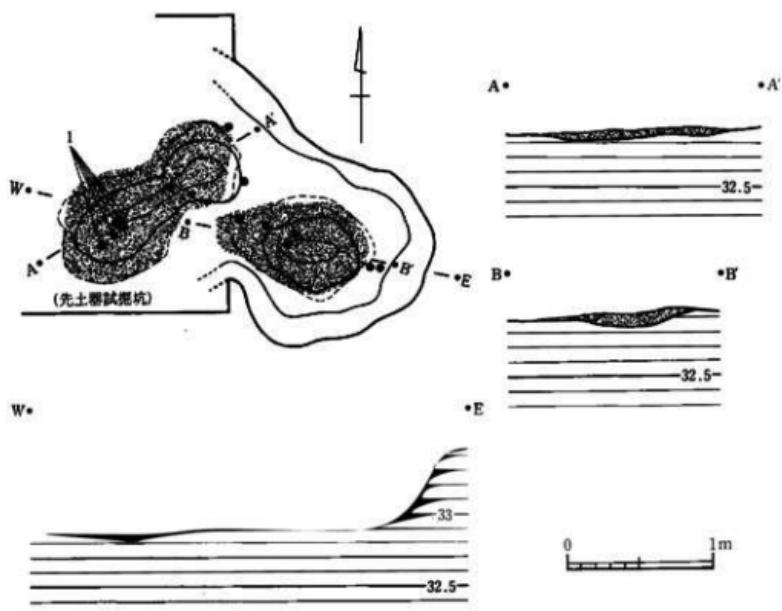
位置 ワ14-21グリッドの北西隅近くに位置する。立地は、北西向きのゆるい斜面である。四角くみえるのは、先土器確認グリッドである。

形状・規模 先土器確認グリッドによって、西側の掘り込みがわからなくなっている。平面形態は、長方形に近かったと思われる。深さ0.6mある。底はゆるい凸凹があり、壁は上ひろがりである。

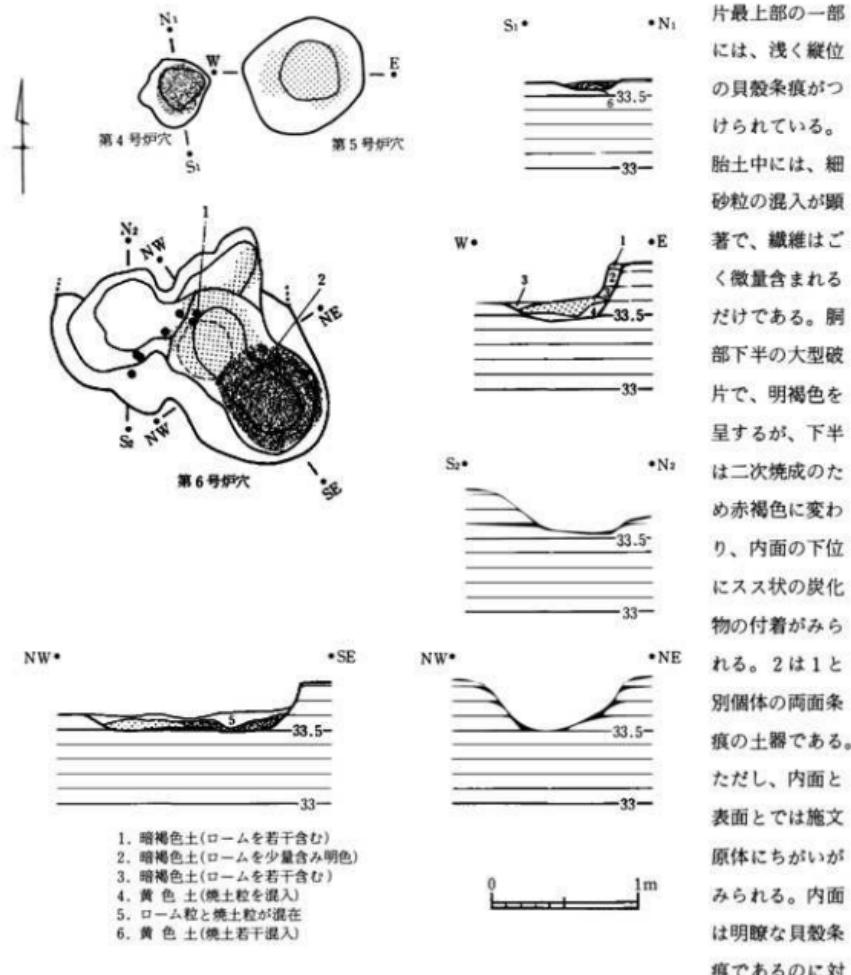
焼土 東西に並んで2個所みつかった。ともに、質はあまり良くない。東側のは、卵形で、長径105cm、短径65cm、厚さ9cmである。これに対し、西側のは、ヒョウタン形で、長径145cm、厚さ5cmである。どちらも、くぼみにたまたまというような堆積をしている。

構造 深い掘り込みを持ち、長方形型と思われる。足場は西にあったはずである。

遺物 土器が31点出土した。全て第III群土器である(1、2)。1は、表面は縦位の貝殻条痕によって全面にわたって施文され、内面はナデ成形ののち、部分的に横位の擦痕が付され、さらに破



第20図 第3号炉穴遺構図(上)出土遺物(下)



第21図 第4～6号炉穴遺構図（上）出土遺物（下）

し、表面は、貝殻条痕施文後に、それよりやや柔軟な原体により擦痕がつけられている。条痕、擦痕とも斜走を基本としているが、走向に統一性を欠く。胎土中には、長石等の細砂粒のほか纖維も少量混入されている。暗褐色を呈し、焼成は良好、胸部上半の破片であろう。しかし、以上の土器からでは、年代の細かい決定

はできない。

年 代 細かい年代は、不明である。

第4号炉穴（065A）（第21図）

位 置 ワ14—22グリッドの北西隅に位置する。第5、第6号炉穴と近接する。立地は、台地の肩口である。

形状・規模 ほとんど焼土のたまたやや四角ばった浅い落ち込みを検出しただけである。落ち込みの径は0.45m前後、深さは0.05mである。底はゆるい丸底で、壁は、上ひろがりにゆるく立ち上がる。

焼 土 形は円形に近く、径32cm、厚さ5cm前後である。質はあまり良くない。焼土の下には、焼土が若干、混じった黄色土が、堆積していた。

構 造 第6号炉穴と切り合っていたものと思われ、掘りの深い長方形であったろう。

遺 物 出土しなかった。

年 代 細かい年代は、不明である。

第5号炉穴（065B）（第21図）

位 置 第4号炉穴のすぐ東にある。第4号炉穴と切り合っていた可能性が高い。

形状・規模 ほとんど炉部にあたると思われる焼土のたまたや円形を呈し、一方が浅い落ち込みを検出しただけである。底は平らで、ゆるく上ひろがりに壁が立ち上がる。

焼 土 形は不整形で、長径62cm、短径50cm、厚さ12cmである。質は良好である。下に焼土粒の混入した黄色土が堆積していた。

構 造 セクションからみて、掘りの深い長方形型であったと思われる。足場は西側にあったであろう。

遺 物 出土しなかった。

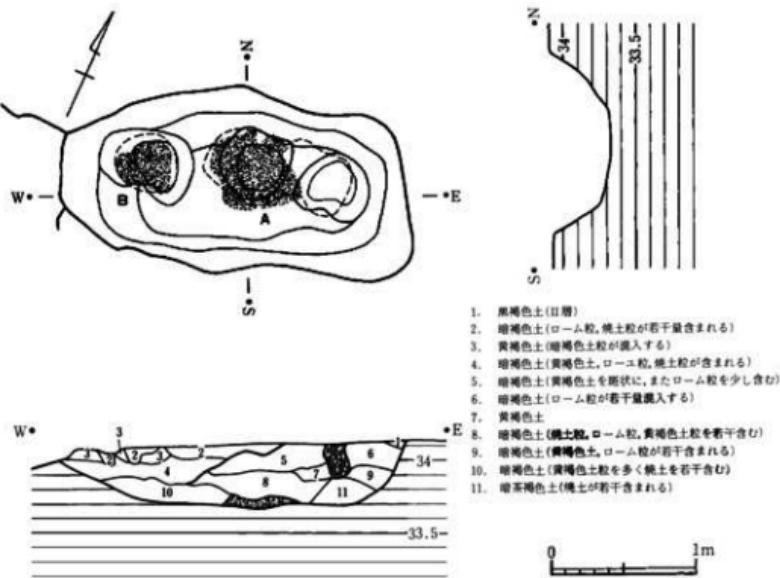
年 代 細かい年代は、不明である。

第6号炉穴（065C）（第21図）

位 置 第4号、第5号炉穴のすぐ南に位置する。

形状・規模 北側の掘り方が失なわれているので、形はよくわからない。少なくとも、長さ2m、幅1m、深さ0.35m以上ある。底は平らで、壁はゆるく立ち上がる。

焼 土 北側に少し飛び出しているが、およそ小判形をしている。長径125cm、短径50cm、厚さ8



第22図 第7号炉穴遺構図

cmである。北西側は質が良く、南東側は混ざり土がある。

構造 挖りの深い長方形型であろう。焼土の検出された南東側の炉部に対して、北西側の少し高まったところが足場であろう。炉部は、堆積していた焼土のセクションからみると、北西→南東と拡張されたらしい。

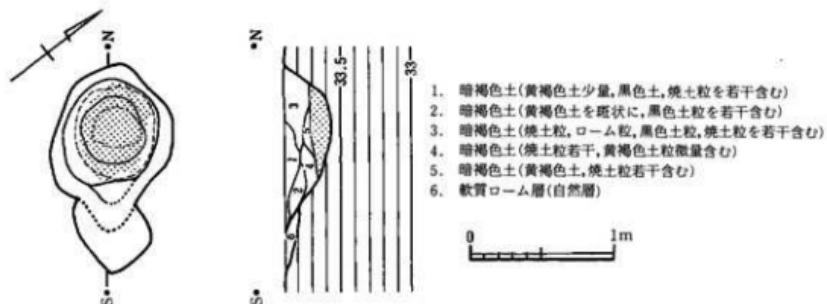
遺物 15点の土器が出土した。2個体分にまとめられる(1、2)。どちらも第III群土器である。1は、表面が不規則に斜走する貝殻条痕、内面は無文で、胎土中には微細な砂粒とともに少量の纖維が含まれる。黒褐色を呈し、焼成は並である。2は、表面、内面ともかすかな擦痕がうかがえる。胎土中には細かい砂粒が含まれるが、纖維の混入は極めて微量である。色は内面黒色、表面茶褐色で、二次焼成の痕跡がある。胴下半部の破片である。

年代 出土土器からみて、子母口期に比定できる。

第7号炉穴(066)(第22図)

位置 W14-19グリッドの南西隅に位置する。立地は、平坦面上である。南西に接して第2号炉穴がある。

形状・規模 平面形態は、長方形である。長さ2.4m、幅1.1m、深さ0.42mである。底は平らで、



第23図 第8号炉穴遺構図

壁はゆるく上ひろがりに立ち上がる。

覆 土 暗褐色土が主体である。炉部の位置が、AからBへと移ったことが見て取れる。

焼 土 AとBの2個所みつかった。どちらも純粹ではなく、混ざり土がある。Aは、方形に近く、一辺50cm、厚さ6cmであり、盛り上がっている。Bは、三角形に近く、一辺35cm前後である。Aの東側のくぼみは、焼土は無かったが、熱を受けた痕がのこる。

構 造 長方形型である。炉部の位置は、Aの東側のくぼみ→A→Bと移っていったと思われる。Aの炉部が使用されていた時には、Aの東側のくぼみの炉部は、焼土をかき出した上で、足場に使われていた可能性がある。これに対して、Bの炉部が使用されていた際には、足場は炉部の西側にあって、Aの側は使われていなかったと思われる。第2号炉穴のところにあったのか。

遺 物 第III群に含まれる擦痕のある土器細片が4点出土した(図ナシ)。

年 代 細かい年代は決定できない。また、第2号炉穴との新旧関係も決定できない。

第8号炉穴 (067) (第23図)

位 置 ワ14-22グリッドの東寄りに位置する。立地は、平坦面上である。

形状・規模 平面形態は、円形である。径0.8~1.2m、深さ0.32mである。底はゆるい丸底で、スリ鉢形である。

覆 土 暗褐色土が主体である。

焼 土 純粹な焼土で、梢円形である。長径70cm、短径43cm、厚さ15cmである。

構 造 掘りは深いが、炉部だけではっきりとした足場の掘り込みをつくらない掘りの深い円形型である。

遺 物 第V群(浮島式)らしい土器細片が1点だけ出土した。(図ナシ)

年 代 細かい年代は、不明である。

第9号炉穴（068）（第24・25図）

位 置 ワ14—12グリッドの南西隅に位置する。西向きのゆるい斜面に立地する。

形状・規模 焼土の数からみて、少なくとも7つの炉穴が噛み合っている。このため、平面形態は、樹枝状である。3.1m×4.5mの範囲に広がる。底は比較的平らである。壁はゆるい上ひろがりである。深さ0.25～0.3mである。

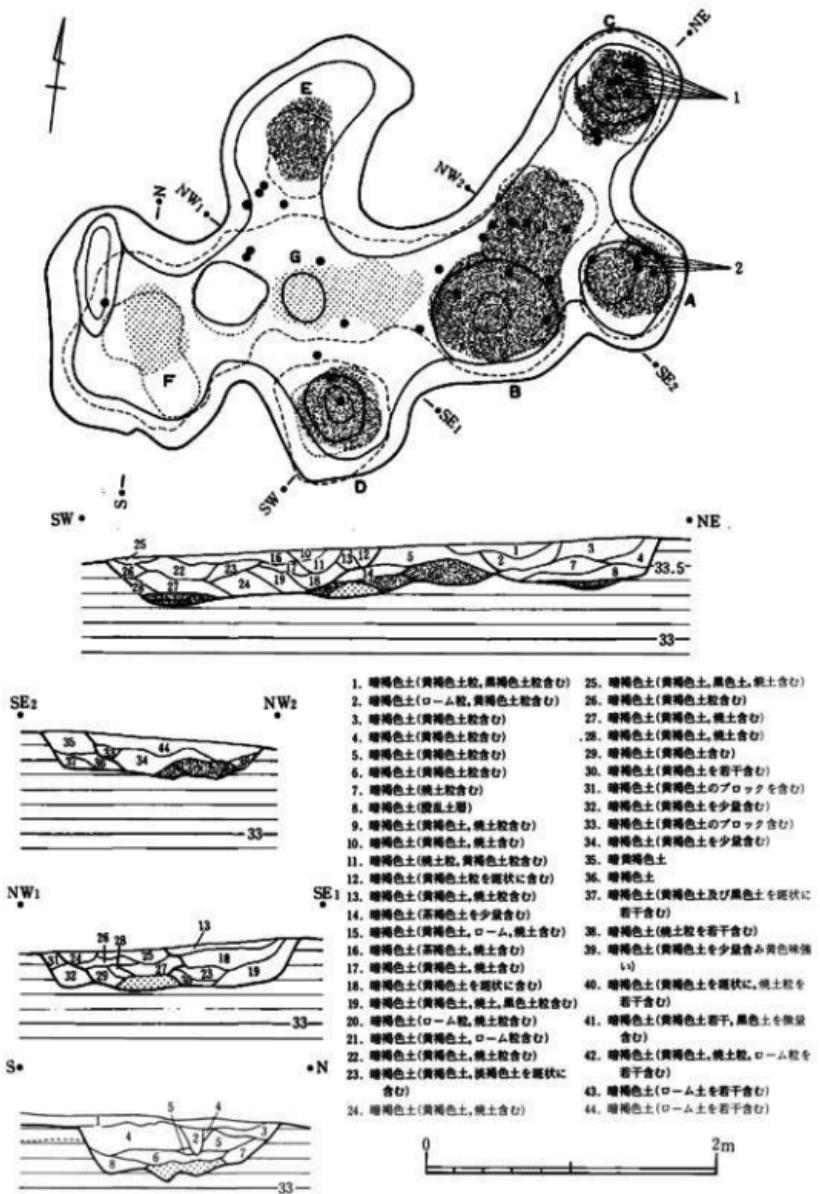
覆 土 暗褐色土が主体である。切り合いからみて、A→B→C、DとE→G→Dの前後関係がわかる。

焼 土 7個所のうち、A～Eの個所は、混ざり土がある。F、Gは純粹に近い。Aは円形に近く、径55～60cmである。Bは西洋梨形で、長さ140cm、幅80cm、厚さ18cmである。純粹に近い焼土の上に、混ざり土のはいった焼土がのって、ひろがっている。Cは楕円形で径55～70cm、厚さ6cmである。Dは、円形で、径55～60cm、厚さ8cmである。Eは、楕円形で長径60cm、短径40cmである。Fは、楕円形で長径60cm、短径40cm、厚さ10cmである。Gは、長方形で長さ105cm、幅43cm、厚さ10cmである。FとGのあいだに丸く赤化したくぼみがある。

構 造 掘りの深い長方形型かと思われるが、掘りは深いものの足場の掘りのみられない第8号炉穴と同じタイプの炉穴が噛み合っているのかもしれない。焼土のあいだの間隔があまりにもせまい。足場を設けるために焼土を片付けた様子がみられない。炉部はわかるのに対し、足場の規模がつかめない。使わなくなった炉部をそのまま足場にしていたためであろう。足場の位置は、炉部の東西南北すべての方角が想定される。

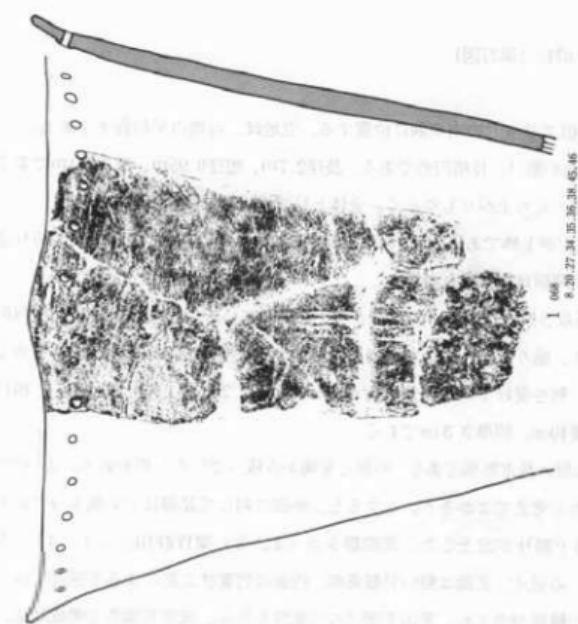
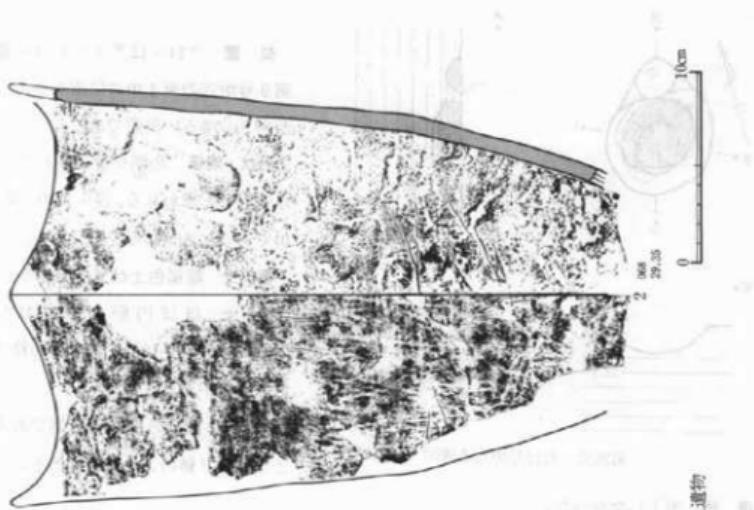
遺 物 第I群第1類と考えられるR Lの縄文をもつ土器が2点、第V群（浮島式）の破片が13点混入しているが、器形をうかがい得る第III群土器が2個体出土した（1、2）。1は逆三角形の深鉢で、口径30.8cm、現存高27.7cmを測る。全体の約3分の1を遺存する。口縁部は外反し、4つの山形の突起が、等間隔につく。底部は欠損している。口端は丸棒状で、胴部の平均器厚は約10mmある。内、表面とも横位を基調とする浅い擦痕が認められる。口縁下約15mmには、20mm前後の間隔をおいて、円孔が、表面より内面に向けてあけられている。胎土には、きめの細かい砂粒少量とともに、微量の纖維が混入している。暗褐色を呈し、焼成は良い。2は長胴の深鉢である。口径21.2cm、現存高32.5cmで、やはり底部を欠損している。口縁部は垂直に立ち上がり、胴部上半は円筒状を呈し、底部に近く、徐々にすぼまる。口縁部には、1と同様に山形の突起がつくが、おそらく4単位であろう。口端の断面形も1と近い。ほとんど無文であるが、胴部の中位から下位にかけて、不規則な擦過痕が縦に走る。胎土への纖維の混入はやや顕著で、特に内面には纖維の離脱痕が多く見受けられる。これに対し、砂粒の混入は少ない。暗褐色を呈し、焼成は良い方である。

年 代 1、2の土器からみて、子母口期である。

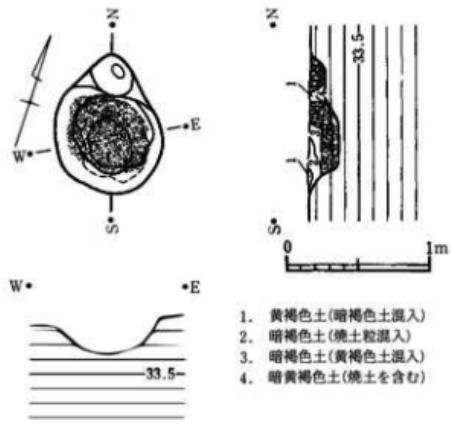


第24図 第9号炉穴造構図

第25图 第9号标穴出土遗物



第10号炉穴 (069) (第26図)



第26図 第10号炉穴遺構図

遺物 出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。

位置 ワ14—12グリッドの南寄り、第9号炉穴の東4mに位置する。立地は、西向きのゆるい斜面である。

形状・規模 北側を擾乱されているが、ほぼ円形と思われる。径0.75m、深さ0.2mである。スリ鉢形をしている。

覆土 暗褐色土が主体である。

焼土 ほぼ円形をしており、径50~65cm、厚さ12cmである。純粹でなく、混ざり土がある。

構造 掘りの深い円形型である。ちょうどビスピリ鉢のような形である。

第11号炉穴 (071) (第27図)

位置 ワ15—01グリッドの南東隅に位置する。立地は、台地の平坦面上である。

形状・規模 平面形態は、長椭円形である。長径2.7m、短径0.95m、深さ0.4mである。底はゆるやかな丸底で、壁の立ち上がりもゆるく、全体として浅いスリ鉢形である。

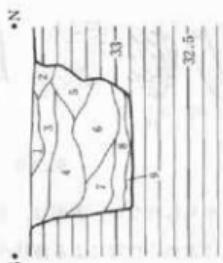
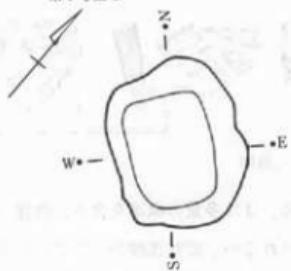
覆土 暗褐色土が主体である。2つの焼土がみられることから、2つの炉穴が切り合っていると思われるが、新旧関係は見て取れない。

焼土 2個所みつかった。どちらも、混ざり土が入っている。北の方の焼土は、椭円形で径40~50cm、厚さ4cmあり、盛り上がっていった。南の方の焼土は、擾乱のために原状をとどめておらず、のこっているのは、熱を受けている部分の大きさからみて、2分の1強と思われる。椭円形で、推定長径55cm、同短径40cm、同厚さ3cmである。

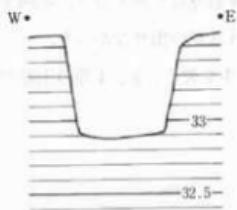
構造 掘りの深い長方形型である。炉部と足場から成っていたと思われる。2つの炉部とも、足場は北側にあったと考えよう。すると、炉部に対して足場はやや高まっていたことになる。

遺物 14点の土器片が出土した。第III群3点(1、2)第IV群10点(3、4)、不明1点である。1は底部近くの破片。表面は粗い貝殻条痕、内面は竹管状工具による不規則な成形痕がある。胎土中には多量の纖維が含まれ、茅山下層式の可能性もある。表面茶褐色で焼成は並。2は表面、内面とも貝殻条痕。胎土への纖維の混入は少ないが、厚手で焼成も良く、1と同様に、茅山下層式

第1号土塙



1. 暗褐色土(ローム粒、黄褐色土粒を若干含む)
2. 黄褐色土(暗褐色土を若干含む)
3. 暗褐色土(褐色土、ローム粒を若干、明黄色土を多量に含む)
4. 暗褐色土(褐色土を若干、黄褐色土を斑状に若干含む)
5. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に少量含む)
6. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に若干含む、やや軟質)
7. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に若干含む、しまりある)
8. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に若干含む)
9. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に若干含む、硬質)

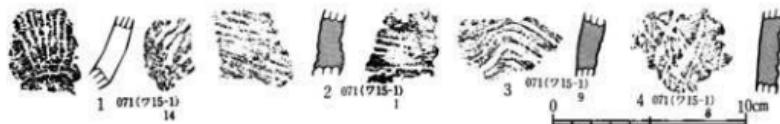


第11号炉穴



1. 暗褐色土(疊土粒、ローム粒、暗褐色土粒を若干含む)
2. 暗褐色土(暗褐色土を斑状に少量混入)
3. 暗褐色土(暗褐色土を若干含み、色調が暗い)
4. 暗褐色土(ローム粒、燒土粒若干、黄褐色土を斑状に少量含む)
5. 暗褐色土(ローム粒、燒土粒若干、明黄色土を斑状に少量混入)
6. 暗褐色土(ローム粒、燒土粒若干、暗褐色土を斑状に少量混入)
7. 暗褐色土(淡黃褐色土、燒土粒若干含む)
8. 暗褐色土(ローム粒、燒土粒若干、黄褐色土を少量混入)
9. 明黄色土(淡黑褐色土、粒土粒を若干混入)
10. 暗褐色土(燒土粒少量混入)

第27図 第1号土塙(上)・第11号炉穴(下)遺構図



第28図 第11号炉穴出土遺物

に比定すべきかもしれない。表面は、赤褐色を呈する。3は多量の纖維を含み、内面の研磨された土器。表面には太めの竹管による波状沈線文が認められるが、波状沈線のうち2山の波頂部～波底部が平行しているから、おそらく2本の工具を揃えて波線を引いているのである。黄褐色を呈し、焼成は並。4も多量の纖維を含むが、内面研磨の痕はない。表面は、太い縄文が交叉しているようにも見えるが、原体はよく分からぬ。軸縄に原体Rを右巻にしたものを、走向不定の状態で回転施文したものかもしれない。包含層中にも同種の土器片は見い出せなかった。

年代 1、2の土器から推測する外ないが、決め手を欠く。3、4等の土器が覆土堆積時に混入したものであることは明らか。

第12号炉穴 (072) (第29・30図)

位置 ワ15-01グリッドの北東隅近くに位置する。第11号炉穴の北6mにある。立地は、台地の河口近くである。

形状・規模 平面形態は、長楕円形である。長径1.9m、短径0.95m、深さ0.3mである。底は平坦で、焼土のある炉部が一段底くなっている。壁はゆるく立ち上がる。

覆土 暗褐色土が主体である。

焼土 ほぼ楕円形で、長径65cm、短径45cm、厚さ8cmである。混ざり土がある。

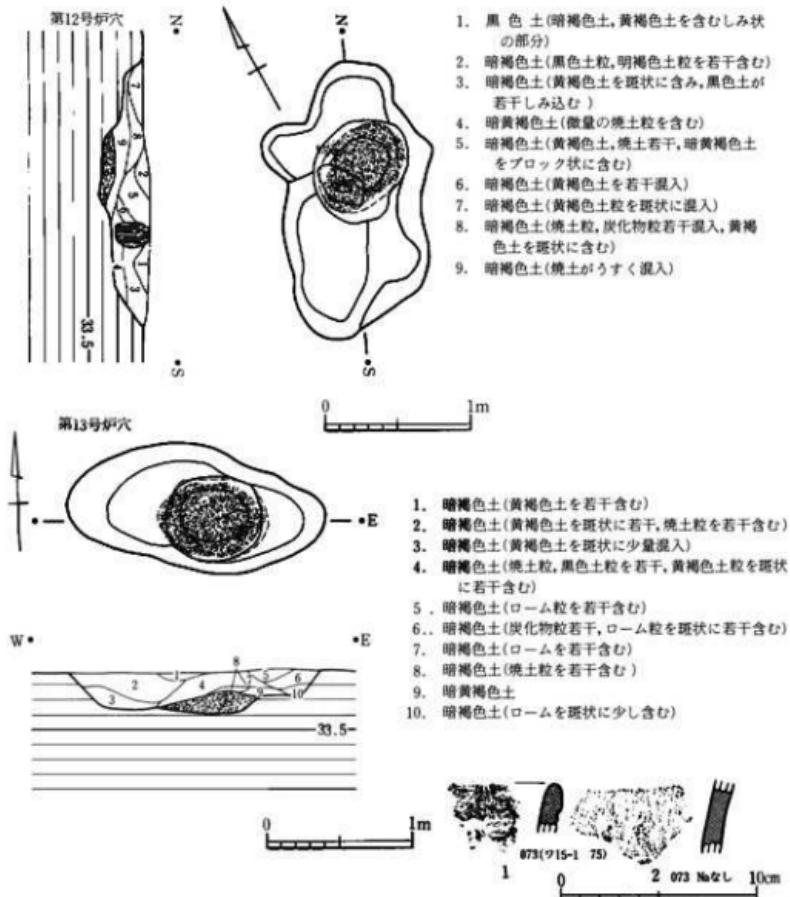
構造 長方形型である。焼土の検出された炉部に対して、南側の一段高まった細長いくぼみが足場にあたろう。

遺物 覆土上層から2点の土器断片が採集された(1、2)。1は底部に近い部位の破片で、表面縦位の貝殻条痕、内面無文。纖維の混入は少ない。茶褐色を呈し、二次焼成を受けている。2は表面、内面とも明瞭な横走貝殻条痕の土器。長石等の微細粒とともに少量の纖維が混入されている。暗～茶褐色を呈し、焼成は良い。

年代 土器は覆土上層からの出土で、細かい年代の決定はできない。

第13号炉穴 (073) (第29図)

位置 ワ15-01グリッドの南西隅近くに位置する。第12号炉穴の南西6mにある。立地は、台地



第29図 第12号(上)・13号(下)炉穴遺構図、出土遺物

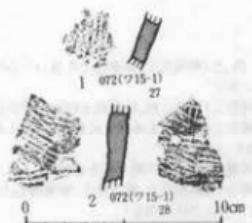
の肩口である。

形状・規模 平面形態は、長楕円形である。長径1.75m短径0.8m、深さ0.28mである。底は平らで、西側が深く、東端に至って一段高くなっている。

覆土 暗褐色土が主体である。

焼土 楕円形で、長径70cm、短径50cm、厚さ15cmである。混ざり土がある。

構造 炉部の掘り込みははっきりとしているが、足場の掘り込みのつかめない深い円形型のうち、炉部の掘り込みがやや大きめのものであろう。掘り込みの西側でも、中では、足場は火に近すぎよう。



第30図 第12号炉穴出土遺物

遺物 土器細片が2点出土した(1、2)。1は無文の口縁部破片。口縁部の断面は丸棒状で、表面、内面ともナデ成形されている。繊維が比較的多く混入し、明褐色を呈する。焼成は甘い。2は表面が縦位の擦痕、内面無文。繊維の混入が多い。焼成は良好で、暗褐色を呈するが、内面は、黒色に近く、繊維離脱の痕跡が著しい。

年代 出土した2点の土器からみて子母口期であろう。

第14号炉穴(076)(第31図)

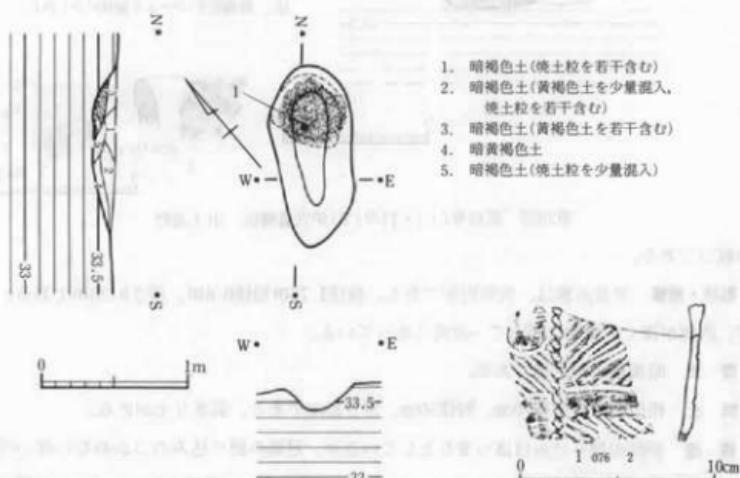
位置 ヲ15—05グリッドの南東隅近くに位置する。第4号土塙のすぐ北にある。立地は、台地の肩口である。

形状・規模 平面形態は、長椭円形である。長径1.25m、短径0.5m、深さ0.15mである。底は比較的平らで、壁はゆるく立ち上がる。

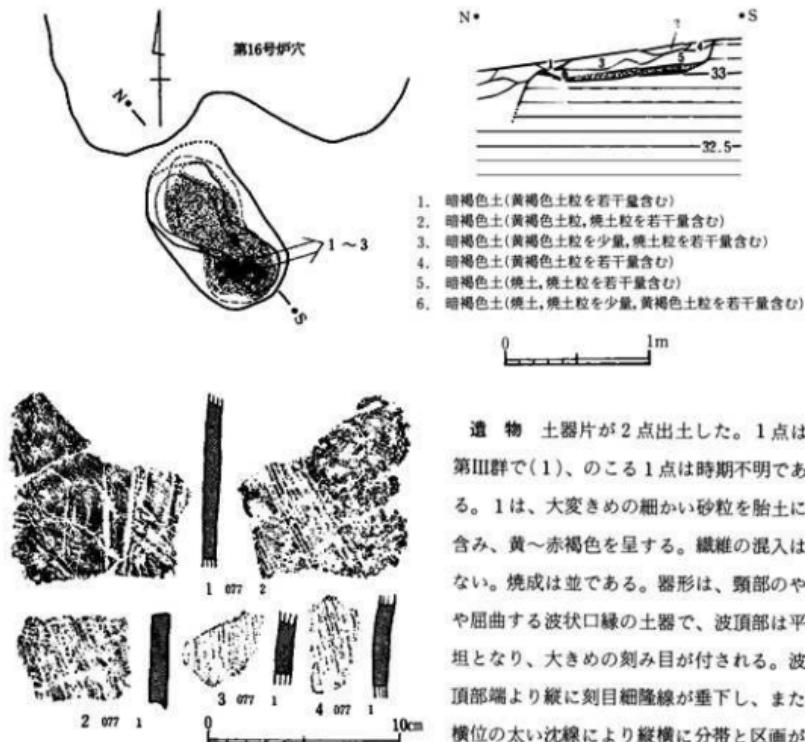
覆土 暗褐色土が主体である。

焼土 ほぼ円形で、径45~48cm、厚さ8cmである。混ざり土がある。

構造 やや掘りが浅いが、長方形型に入ろう。北東の炉部に対し、南西に足場がくる。足場は、火との近さから、底ではなくて、ゆるく立ち上がる壁にかかっていたかもしれない。



第31図 第14号炉穴遺構図(左)出土遺物(右)



第32図 第15号炉穴遺構図（上）出土遺物（下）

くびれ部には口縁部文様帯を画する沈線下に無文帯が置かれ、さらに屈曲部下に沈線による充填がおこなわれている点が注意される。類例は、千葉市鳥込東遺跡（千葉市1979、関野1980）に知られ、野島式（新）段階、金子直行氏の編年案（金子1982、1984）に従えば、野島式第3段階のやや古い部分に比定できるであろう。

年代 出土土器からみて、野島期の後葉に比定できる。

第15号炉穴（077）（第32図）

位置 ラ15-05グリッドの北側に位置する。第14号炉穴の北西4.5mにある。すぐ北側に第16号炉穴がある。立地は、斜面である。

形状・規模 北隅の掘り込みが不明瞭であるが、およそ長方形である。長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.17mである。底は、南東から北西に向ってゆるく傾斜している。壁の立ち上がりは、南東側では

1. 暗褐色土（黄褐色土粒を若干量含む）
2. 暗褐色土（黄褐色土粒、焼土粒を若干量含む）
3. 暗褐色土（黄褐色土粒を少量、焼土粒を若干量含む）
4. 暗褐色土（黄褐色土粒を若干量含む）
5. 暗褐色土（焼土、焼土粒を若干量含む）
6. 暗褐色土（焼土、焼土粒を少量、黄褐色土粒を若干量含む）

0 1m

遺物 土器片が2点出土した。1点は第III群で（1）、のこる1点は時期不明である。1は、大変きめの細かい砂粒を胎土に含み、黄～赤褐色を呈する。繊維の混入はない。焼成は並である。器形は、頸部のやや屈曲する波状口縁の土器で、波頂部は平坦となり、大きめの刻み目が付される。波頂部端より縦に刻目細隆線が垂下し、また、横位の太い沈線により縦横に分帶と区画がおこなわれている。区画内は、やはり太めの沈線が斜行し、充填されている。なお、

きついが、ほかのところではゆるい。2つの炉穴が噛み合っている。

覆 土 暗褐色土が主体である。

焼 土 底部全体に広がってみつかった。真ん中がくびれる。長径100cm、短径45cm、厚さ5cmである。混ざり土がある。

構 造 一見、長方形型に似るが、真ん中がくびれていることから、深い掘りの円形型が2つ噛み合ったものであろう。

遺 物 土器片が51点出土した。第III群が49点（1～4）、第V群（浮島系）2点である。1は一応、表面、内面とも条痕に被覆されるが、両面とも条痕は部分的であり、局部条痕とでもいうべきものである。表面を見ると、横位に局部条痕施文後に、丸棒状工具を縦に数条引いた痕跡があり、第9号炉穴の例と比較することができる。胎土への纖維混入は多めで、焼成は並、黒褐色を呈するが、胴部下位の破片であるために、二次焼成を受けて赤化しているところがある。2は1と同一個体である。3と4は同一個体と思われるが、1、2とは別個体である。表面条痕、内面無文で、胎土中には多量の細砂粒が含まれ、纖維の混入は少ない。黒色を呈し、焼成は並である。

年 代 出土土器からみて、子母口期である。

第16号炉穴（078）（第33・34図）

位 置 ヲ14—25グリッドの南側からヲ15—05グリッドの北側にかけて位置する。すぐ南に第15号炉穴がある。立地は、斜面である。東から西に向って傾斜する。

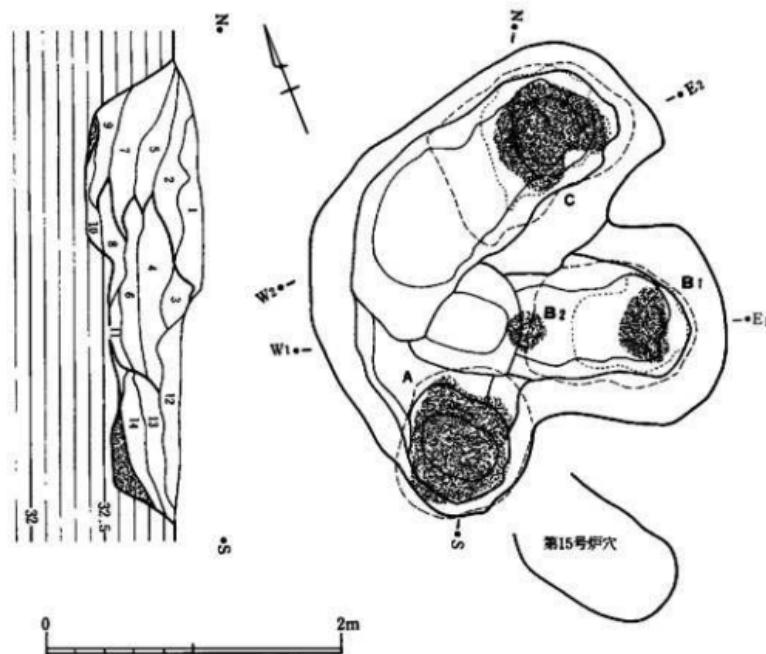
形状・規模 平面形態は、三叉状である。ほぼ径3.0～3.3m、深さ0.4～0.7mである。3つの炉穴が切り合っている。底は比較的平坦であるが、Cの炉穴は、一段低く掘り込まれている。

覆 土 暗褐色土が主体となっている。A→B→Cの順で炉穴がつくられたことがわかる。

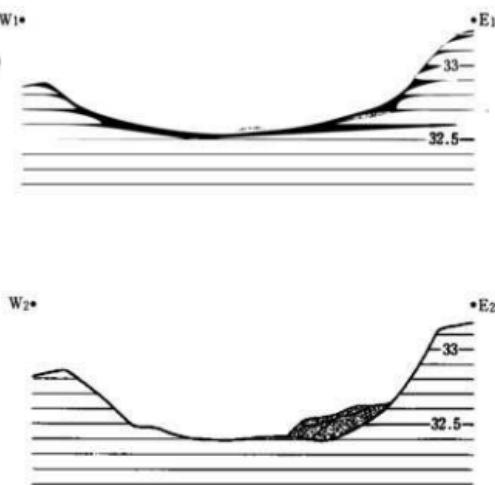
焼 土 都合4個所みつかった。Aは、ほぼ円形で径60～70cm、厚さ12cm、B₁は、梢円形で長径50cm、短径30cm、厚さ4cm。B₂は、円形で径25cm、厚さ3cm、盛り上がる。Cは、ほぼ円形で径5cm、厚さ15cmである。B₂の焼土は、被熱あるいは赤化の範囲より、ややはずれ気味である。B₁の焼土の流れと思われる。

構 造 掘りの深い長方形型である。Aでは北側に、Bは西側に、Cは南西側に足場があったと思われる。そして、炉部と足場の高さは、ほぼ同じであったらしい。B₁の場合は、むしろ、足場の方が低かったようである。比較的原状をとどめていると思われるCでみると、長さ2.5m、幅1.25m、深さ0.6m程度の大きさをもっていたようである。

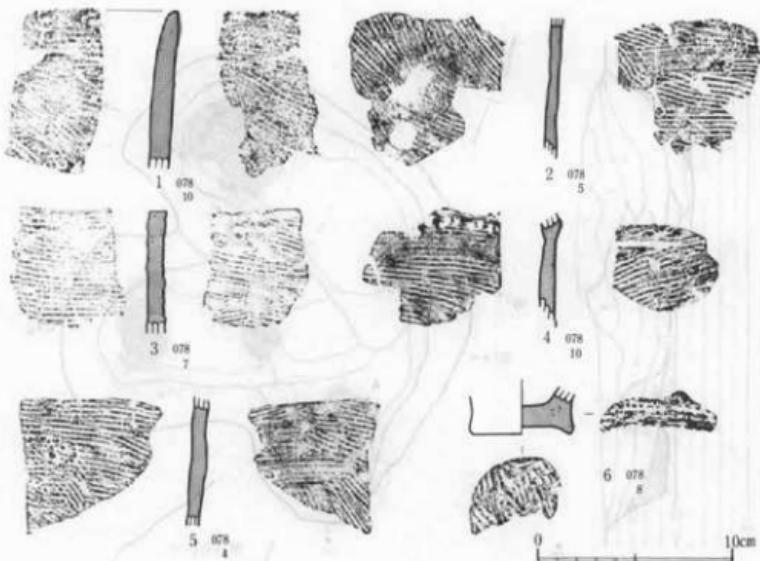
遺 物 土器片が47点出土した。第III群が中心で45点を占め、のこりは、第I群と第V群（浮島II式）が1点ずつである。第III群土器45点は、さらに二分され、（a）子母口式26点（1）と（b）茅山下層式19点（2）となる。このうち（b）の19点は、全て同じ個体の破片である。1は、（a）のうちの1点である。のこりの（a）の破片は細片である。口縁部の破片で、表面、内面とも浅い貝



1. 暗褐色土(ローム粒小径のもの多量に含む)
み黒色土を若干混入、堆積は疊)
2. 暗褐色土(黄褐色土のブロックを少量含む)
3. 暗褐色土(黄褐色土少量混入、ローム粒、焼土粒を若干含む)
4. 暗褐色土(黄褐色土粒、ローム粒、焼土粒を若干含む)
5. 暗褐色土(軟質ロームをやや多く混入)
6. 暗褐色土(黄褐色土、ローム粒を若干含む)
7. 黄褐色土(軟質ロームを多量に含む、ローム粒、焼土粒若干含む)
8. 暗褐色土(黄褐色土、焼土粒を若干、ローム粒を少量含む)
9. 暗褐色土(ローム粒を多く含み、焼土ブロック、炭化粒を若干混入)
10. 暗褐色土(ロームを若干、炭化粒を若干含む)
11. 暗褐色土(ローム、炭化粒を若干含む)
12. 暗褐色土(ローム粒少量、焼土粒を若干混入)
13. 暗褐色土(ローム粒若干、黄褐色土粒を塊状に若干含む)
14. 暗褐色土(大粒ローム粒、焼土粒、黄褐色土を若干含む)



第33図 第16号炉穴遺構図



第34図 第16号炉穴出土遺物

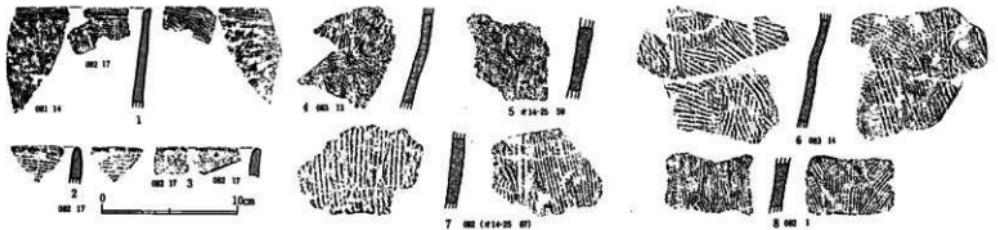
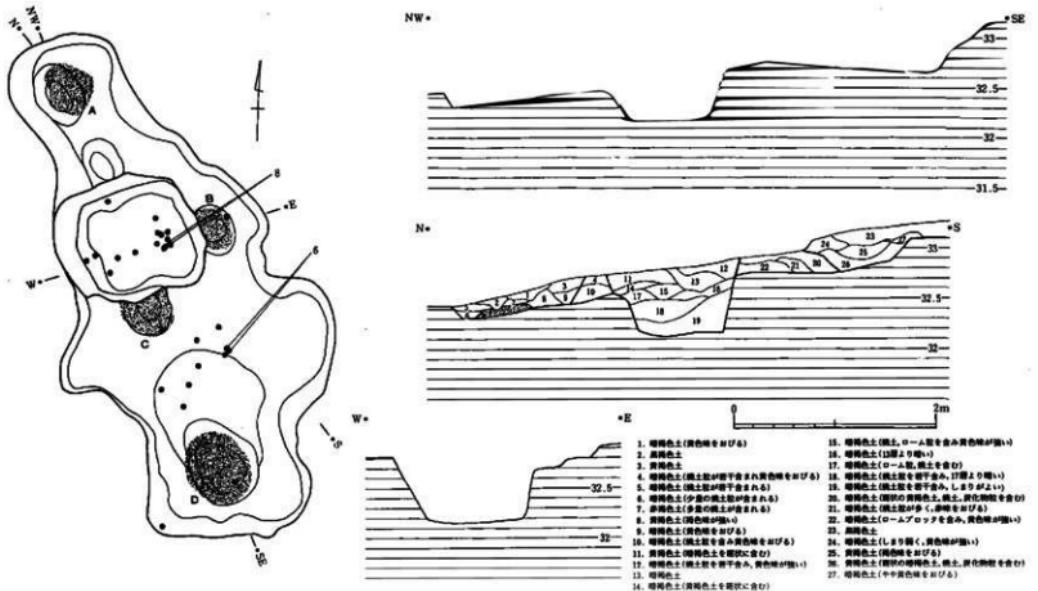
縦条痕が横走している。小破片のため判然としないが、小波状ないし山形突起の付されていた可能性が強い。細砂粒を多く含み、本型式としては纖維の最も目立つ方であろう。黒褐色を呈する。焼成はやや甘い。(b)は、破片数が多いが、口縁部周辺の破片が足りないので、完全には器形の復原ができないが、胸部で屈曲する上げ底の土器となろう。表面、内面ともに押捺の深い貝殻条痕が横走する。条痕は底部にも施されている(2 d)。また、屈曲部には、半截竹管による刺突列がある(2 b)。胎土中には多量の纖維が含まれているが、焼成は極めて良く、堅緻な焼き上がりを示している。全体として赤褐色を呈するが、部分的に黒斑もみられる。

年代 茅山下層式の同一個体破片の集中的な出土ということからして、茅山下層期であろう。

第17号炉穴 (081~084) (第35図)

位置 ラ14-25グリッドの東側に位置する。すぐ南に第22号炉穴がある。立地は、台地の斜面である。

形状・規模 少少の凹凸はあるものの、平面形態は、細長い長方形である。長さ5.4m、幅1.0~2.3m、深さ0.25mである。底面は、比較的平らで、南から北に向って、地形の傾斜に沿って、ゆるやかに傾斜している。壁の立ち上がりは、比較的きつい。E-Wのエレベーションにかかる土塙は、縄文時代よりも後の比較的新しい擾乱と思われる。中からは、炉穴の覆土中にあったと思われる土



第35回 第17号炉穴遺構図（上）出土遺物（下）

器片が出土している。少なくとも4つの炉穴から成る。

覆 土 暗褐色土が主体となっている。真ん中付近よりも北と南の方で、後から炉穴が営まれていることが、見て取れる。

焼 土 A、B、C、Dの4個所みつかった。Aは径48~55cm、厚さ16cm。Bは推定径50cm、厚さ8cm。Cは推定径50cm、厚さ7cm。Dは径75cm、厚さ12cmである。いずれも混ざり土がある。

構 造 Aの焼土を炉部とする炉穴は、明らかに長方形型であり、足場は南東側になろう。のこるB、C、Dは、長方形型ではないかもしれない。あるいは、足場の位置だけ、炉部は変えずに、掘りかえられたのであろうか。

遺 物 土器は、攪乱の土塙中出土のものを含めて223点出土した。1点の第I群土器（RLの繩文が付された胴部破片）を除き、いずれも第III群である。1は表面、内面とも貝殻条痕の土器で、口縁部にやや内そぎ気味の截痕が認められ、口唇上にも横位の条痕がある。口縁下には弱いナデ痕が認められる。内面は火バネ様の器表の剥落が著しい。胎土中には砂粒とともに少量の纖維が混入している。黄褐色を呈し、焼成は並である。2もやはり表面、内面とも横走条痕の土器である。口縁部は丸棒状である。胎土中には砂粒がやや多めに入り、少量の纖維が混入している。黒褐色を呈し、焼成は並である。3は無文土器の口縁部細片である。表面、内面とも淡く擦痕が横走している。口縁部には截痕がある。胎土は、砂粒が多く混じるが、纖維は微量である。黒色を呈し、焼成はやや甘い。4~8は表面、内面とも貝殻条痕の土器。5は胴部下半の破片か。表面には部分的に条痕を擦り消したような擦痕が見て取れる。胎土は、細かい砂粒が多く混じるが、纖維は少ない。6は表面、内面とも縦位あるいは斜位に深い貝殻条痕が施されている。胎土は5に近いが、焼成は良く、暗褐色を呈する。7は胴部下半の破片で、6と同様に条痕は深く明瞭である。縦位施文を原則としている。胎土には、細かい砂粒と纖維が少量ずつ混じる。8では、7と同様に縦位の貝殻条痕が認められるが、表面の条痕の一部が擦り消されている。5でこの種の手法の存在を指摘したが、当該期にはこの類例は多いようである。胎土は6に近く、明褐色で焼成は普通である。

年 代 出土土器からみて、子母口期であろう。

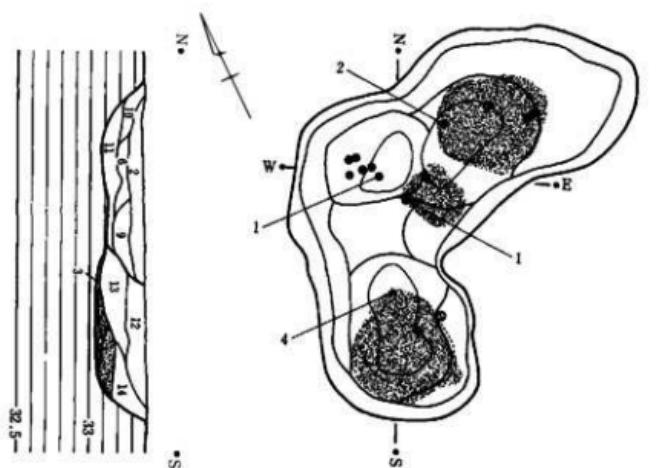
第18号炉穴（085）（第36図）

位 置 ワ14-16グリッドの東側に位置する。立地は、台地の肩口である。

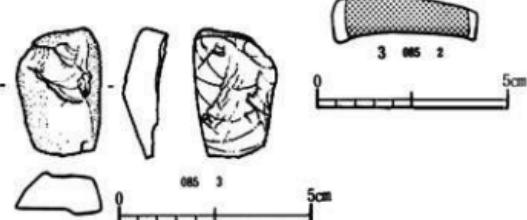
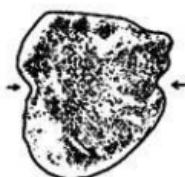
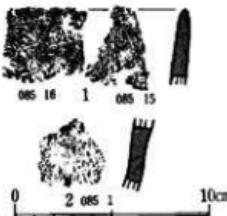
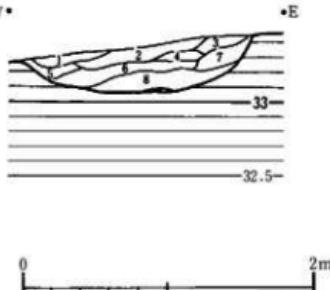
形状・規模 平面形態は、くの字形である。大きく2つの炉穴が切り合っている。北側の炉穴は、長楕円形で、長径2.6m、短径1.1m、深さ0.25m。南側の炉穴は、長方形だったと思われ、長さ2m前後、幅1.05m、深さ0.35m程度の規模をもっていたであろう。底面は比較的平らで、壁は、外側に向ってやや膨らみ気味に立ち上がる。

覆 土 暗褐色土が主体となっている。南→北の順でつくられたことがわかる。

焼 土 3個所みつかった。いずれもその下の炉穴底面は赤化していた。北側の2つは、同じ炉穴

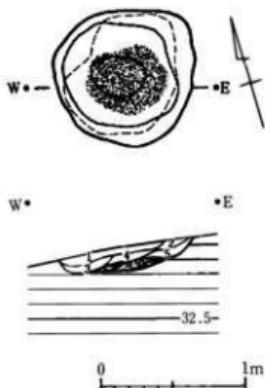


1. 黄褐色土(暗褐色土粒を若干含む黄色味が強い)
2. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に少量含む、焼土粒を若干含む、ローム粒も若干含み、黄色味が強い)
3. 欽賞ローム
4. 暗褐色土(炭化粒、黄褐色土粒を若干含む)
5. 暗褐色土(黄褐色土を若干含み黄色味が強い)
6. 暗褐色土(黄褐色土粒を斑状に若干量含む)
7. 暗褐色土(黄褐色土を少量、焼土粒を若干量含む、やや欽賞)
8. 暗褐色土(黄褐色土、炭化物粒、焼土粒を若干、焼土粒を微量含む、黄色味が強い)
9. 暗褐色土(ローム粒、炭化物粒、焼土粒を若干、黄褐色土を斑状に若干量含む、堆積やや疊)
10. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に含む)
11. 暗褐色土(ローム粒を若干含み、焼土粒も若干量混入、8層に近似する)
12. 黄褐色土(黄褐色土を斑状に少量含む、やや黄色味が強い)
13. 暗褐色土(ローム粒、焼土粒を若干含む、色調暗い)
14. 明褐色土(焼土粒を混入)



第36図 第18号炉穴遺構図、出土遺物

の中で火を焚く場所を変えたことにより、2つになったものと思われる。一番北の焼土は、ほぼ円形で、径70~80cm、厚さ2cm。つぎの焼土は、正方形に近く、一辺35~40cm、厚さ5cm。一番南の焼土は、円形に近く、径70~75cm、厚さ13cmである。3つとも混ざり土がある。



1. 暗褐色土(黄褐色土粒、焼土粒含む)
2. 暗褐色土(黄褐色土粒含む)
3. 暗褐色土(焼土粒を若干含む)
4. 暗褐色土(焼土粒を若干含む)
5. 暗褐色土(ローム粒を若干含む)

第37図 第19号炉穴遺構図

のと言えようが、素材である土器片は中期のものである可能性もあり、また、後世における土器片の再利用というケースも想定されるので、性急な断定は差し控えたい。4は背面に大きく原礫面をとどめるチャートの小型刺片である。

年代 出土土器からみて、子母口期であろう。

第19号炉穴 (086) (第37図)

位置 ワ14—16グリッドの南側に位置する。第18号炉穴の南西5mにある。立地は、斜面である。

形状・規模 平面形態は、ほぼ円形で、径0.95m、深さ0.17mである。底面は、地形に沿って、東から西に向ってゆるく傾斜している。壁は、比較的きつく立ち上がる。

覆土 暗褐色土が主体である。

焼土 ほぼ円形で、径45~55cm、厚さ7cm、やや盛り上がり気味である。混ざり土がある。

構造 足場の掘り込みのみられない掘りの深い円形型である。

遺物 出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。

構造 掘りの深い長方形型である。旧い南側の炉穴は、北側に、炉部から一段高まった足場があったものと思われる。新しい北側の炉穴は、足場は西側にあったものと思われる。ただし、西寄りの小さい焼土が炉部の場合は、その西側では足場としては火に近すぎようから、東側を足場としたのかもしれない。

遺物 22点出土した。このうち20点が土器で、第I群が2点、第III群が16点(1、2)、不明2点である。土器以外の2点は、土錐(3)と石器剝片(4)である。1は口縁部の破片で、内面無文、表面は縦位の擦痕の土器。口縁端の器厚が薄くなる直上口縁となっている。胎土中には、大変きめの細かい砂粒とともに纖維の混入が著しい。暗褐色を呈し、焼成はやや悪い。表面、内面とも纖維脱去痕が看取される。2は内面無文、表面条痕の土器である。表面の条痕は淡い。3は、一端を欠損するが、切目入りの土器片錐と考えられる。素材である土器片は、多量の砂粒が混じり、表面、内面とも無文であるが、第III群土器の底部付近の破片であろう。該期の例とするならば稀有のも

第20号炉穴（087）（第38・39図）

位 置 ワ14—16グリッドの南側に位置する。第19号炉穴のすぐ南にある。立地は、斜面である。

形 状・規 模 10個程度の炉穴が喰み合っており、平面形態は不定形である。およそ5.3m×3.5mの大きさがあり、深さは0.1～0.4mである。底面にはゆるい凹凸があり、へこんだところに焼土が堆積している傾向が見て取れる。底の傾斜は、地形に沿っている。

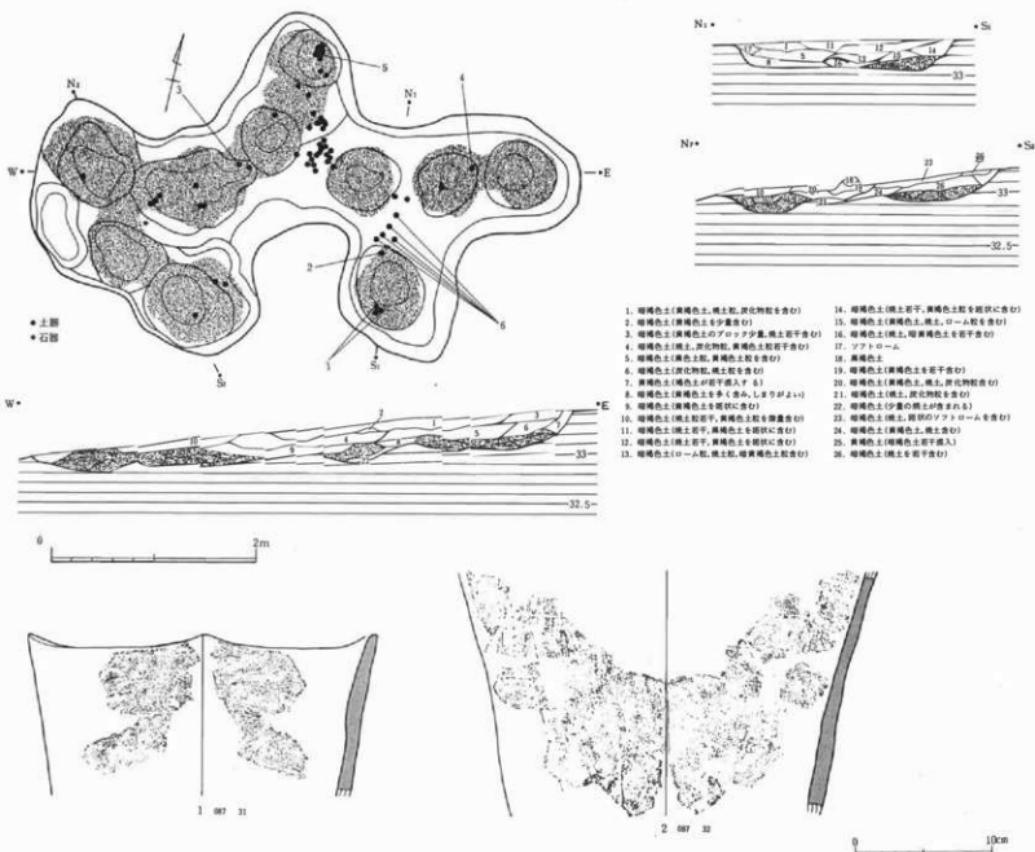
覆 土 暗褐色土が主体である。切り合いをみていくと、東側と西側から中央に向って炉穴がつくりかえられていったことがわかる。

焼 土 特に西側において帯状につながっているが、くぼみをもとに10個所に分かれるとみてよからう。いずれも混ざり土がある。真ん中の遺物の集中していたあたりの独立した焼土は、焼土の下に暗褐色土が堆積していた。くぼみをもとにすると、1つ1つの焼土の大きさも揃い気味で径70cm前後である。北西側の2つの焼土が、他より少し大きい。厚さは、8～25cmである。

構 造 N₁—S₁セクションにかかるものは、長方形型の可能性がある。のこりについては、長方形型とも、深い円形型とも考えられる。

遺 物 土器片227点、石器剥片1点が出土した。土器は、燃糸Rの縦位に認められる第Ⅰ群2点、第V群（浮島系）細片が2点ある他は、全て第III群である（1～5）。ただし、個体数としては、7～8個分くらいであろう。1は無文で、山形突起の付された口縁部付近の破片。内面にのみ、浅く横位の擦痕が看取される。推定口径は24cmぐらいか。長石粒などきめの細かい砂粒とともに、纖維が少量混入している。黒色を基調とし、焼成は普通。2も無文で、胴部中位で約4分の1遺存している。内面は横位の擦痕、表面には、縦、横、斜位等不規則な擦痕が走る。表面には、擦痕の上に細い棒状工具を引いた痕が何条も認められる。同趣の沈線については、すでに指摘した。微細な砂粒の混入が多いが、纖維の混入は少ない。茶～黒褐色を呈し、焼成は良い方であろう。3は円孔文土器の破片である。口縁部にごく近いが、口縁端部を欠損している。胎土、焼成、色調とも1に近似するが、円孔の有無から別個体である。円孔はO・I型で、内面に粘土の盛り上がりを示す。4は無文の胴部破片。表面は赤褐色を呈するが、あるいは二次焼成のせいかもしれない。胎土にはやや粒径の大きな砂粒が多く混じるが、纖維もやや多めである。5は尖底部。表面、内面とも無文で、底部の厚みではなく、やや直線的に開いている。細砂粒が多く、纖維が少量混入する。全体として、無文、擦痕の土器が主体で、有文は円孔文の土器1個体である。貝殻条痕の土器が1点も無いことが注目される。同様の土器組成は、第9号炉穴にもみられる。

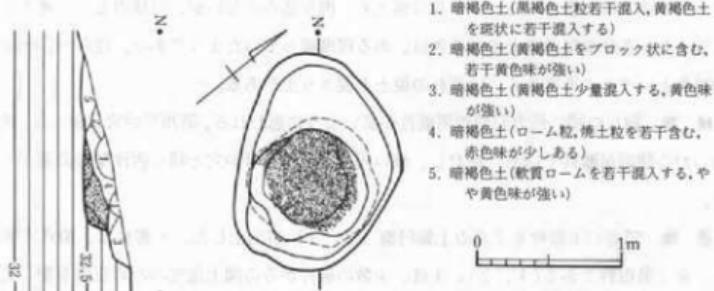
年 代 出土土器からみて、子母口期に比定できる。第9号炉穴との同時存在あるいは、同一集団による利用が、土器組成の同一性から考えられる。



第38図 第20号炉穴遺構図（上）出土遺物（下）(1)



第39図 第20号炉穴出土遺物(2)



第40図 第21号炉穴構造図

第21号炉穴(088)(第40図)

位 置 ヲ14—25グリッドの南側やや西寄りに位置する。第16号炉穴のすぐ北にある。立地は斜面である。

形狀・規模 平面形態は、橢円形である。径1.1~1.5m、深さ0.25mである。底面は、地形に沿わず水平であり、斜面の上の方が深くなっている。

覆 土 暗褐色土が主体である。

焼 土 ほぼ円形で、径65cm、厚さ15cm。地形の傾斜に沿って、上から下へ向って薄くなっている。混ざり土がある。

構 造 深い円形型のようでもあるが、長方形型で、足場は、北側にあったものの、斜面で流れてしまった可能性がある。

遺 物 出土しなかった。

年 代 細かい年代は、不明である。

第22号炉穴(089)(第41・42図)

位 置 ヲ14—25グリッドの南東隅からヲ15—05グリッドの北東隅にかけて位置する。第21号炉穴の南西5mにある。北で第17号炉穴と、西で第16号炉穴と切り合う。

形状・規模 少なくとも 8 つの炉穴が疊み合っている。このため、平面形態は、不整形である。径 3.5~5.2m、深さ 0.3~0.45m である。底面はゆるい凹凸があるが、比較的水平である。壁の傾斜はゆるい。

覆 土 暗褐色土が主体である。切り合いをみると、北→南、東→中央←西と炉穴がつくられたことがわかる。

焼 土 8 個所みつかったが、このうちの北寄りの 4 つは、掘り込みの具合から、2 つの炉部が重なっているものと思われる。一番西の焼土も、掘り込みはないが、同様のものと考えてよからう。とすると、各炉部毎の焼土の大きさは、ある程度揃っていたようである。径 60~70cm 前後、厚さ 10cm 前後というところである。いずれの焼土も混ざり土がある。

構 造 掘りの深い長方形型の可能性が高いように思われる。第 20 号炉穴に較べて、焼土と焼土のあいだの間隔が離れている。ただし、深い円形型の第 15 号炉穴と同じ西洋梨形の焼土も 5 つみられる。

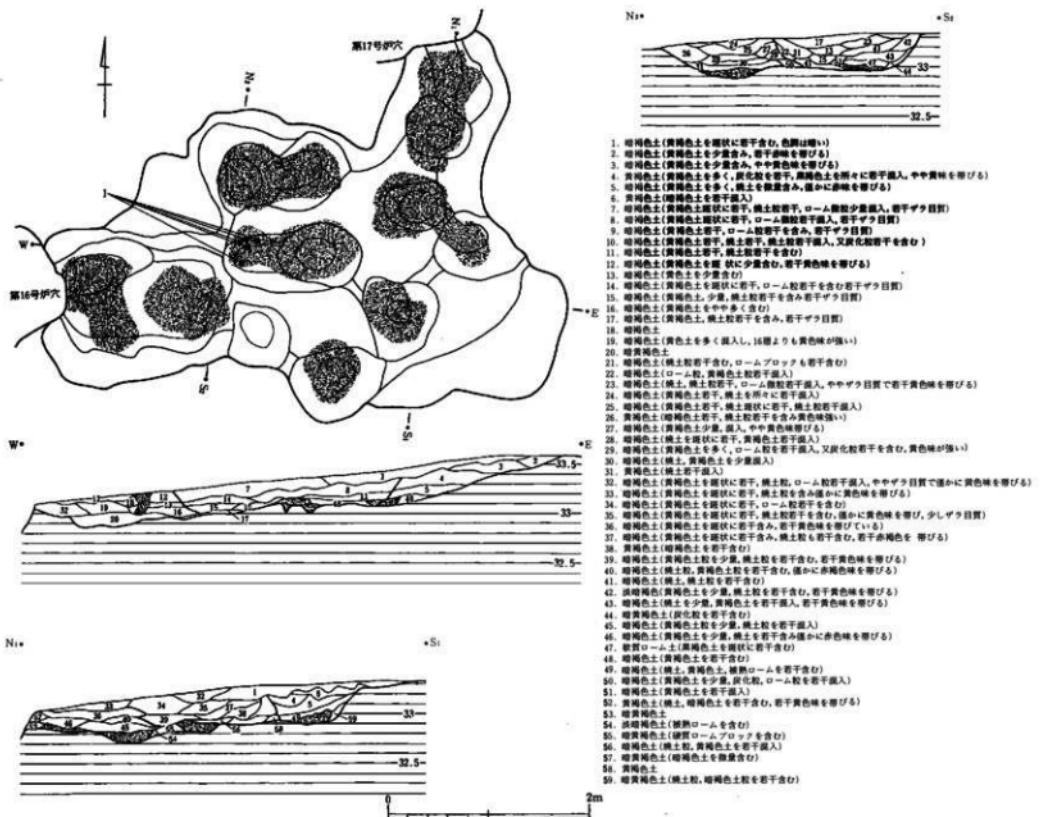
遺 物 55 点の土器片と 2 点の土製円盤（3、4）が出土した。土器片は、型式不明の 1 点を除き、全て第 III 群である（1、2）。1 は、少数の破片からの図上復元のため正確を期し難いが、山形突起を有する口径 24cm くらいの土器であろう。表面には貝殻条痕が、内面には横走する纖細な擦痕がみられる。貝殻条痕は、全体に浅く、縦横に交叉する。口唇部は、丸味を帯びているが、部分的に擦痕をとどめ、切戻のうちに軽くナデ仕上げされている。胎土には、長石等の細砂粒が多く混じり砂っぽいが、纖維の混入は少ない。黒褐色を呈する。焼成は良くない。2 は、無文土器の口縁部破片である。口端には擦痕があり、角頭状になっている。口縁部の表面と内面には軽い横位のナデ成形が認められるが、破片の下部には斜位の擦痕が残されている。細砂粒の混入が目立つが、纖維は多くない。明褐色を呈し、焼成は良い。3 の土製円盤は、径 48mm、厚さ 10mm、重さ 8g で、周縁部を研磨している。素材は、表面条痕の土器胴部破片。胎土中には微細砂が多く、纖維が少量混じる。明褐色を呈する。4 の土製円盤は、やや粗製であるが、研磨は、周縁の全周に及ぶ。径 48mm、厚さ 9mm、重さ 7.9g である。3 と大きさ、重さとも極めて似る。細砂粒の混入は多いが、纖維はごく微量である。茶褐色を呈し、焼成は良い方であろう。土製円盤は、草創期後半に頻出するが、子母口期の前後にあっても、城ノ台（北）貝塚（吉田 1955）、佐倉道南（新津他 1975・1977）等の出土例がある。本遺跡からは、本炉穴の例を含めて、まとまった出土があった。その機能についてはよくわからないが、土器の器面調整に用いられたものかもしれない。

年 代 出土土器からみて、子母口期に比定できる。

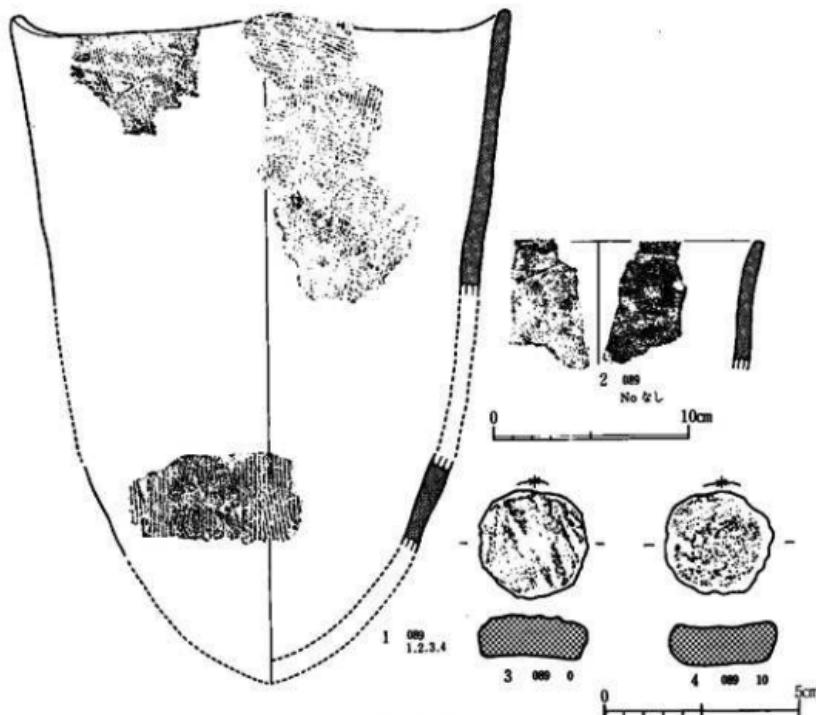
第 23 号炉穴（091）（第 43 図）

位 置 ロ 14-25 グリッドの南西隅に位置する。付近には炉穴が集中する。立地は、斜面である。

形 状・規 模 平面形態は、橢円形である。長径 0.95m、短径 0.8m、深さ 0.08m である。底は、地



第41図 第222号炉穴構造図



第42図 第22号炉穴出土遺物

形の傾斜に沿ってゆるく傾斜する。壁の立ち上がりは、ダラリとしている。

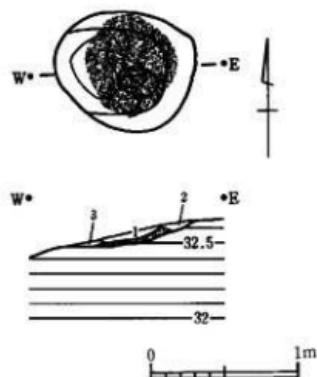
覆 土 暗褐色土が主体である。

焼 土 ほぼ円形で、径60~65cm、厚さ2~3cmである。混ざり土がある。やや盛り上がっている。

構 造 浅い円形型である。足場の掘り込みはみづからない。西側にあったかもしれない。

遺 物 出土しなかった。

年 代 細かい年代は、不明である。



1. 暗褐色土(焼土粒が散在する)
2. 暗褐色土(黄褐色土粒、焼土含む)
3. 暗褐色土(黄褐色土粒、焼土粒含む)

第43図 第23号炉穴遺構図

第24号炉穴 (094) (第62・64図)

位 置 ワ15—21グリッドの北側に位置する。第1号小竪穴に北側を切られている。立地は、斜面である。

形状・規模 北側を第1号小竪穴によって攢乱されている。残っている部分はおよそ楕円形で、長径1.5m、短径1m、深さ0.1mというところである。底面は平らで水平であり、壁はゆるく立ち上がる。焼土のところが少しへこむ。

覆 土 黄褐色土の上に暗褐色土がのっている。

焼 土 楕円形で、長径80cm、短径50cm、厚さ5cmである。混ざり土がある。

構 造 北側が第1号小竪穴によって壊されているので断定できないが、足場の掘り込みを持たない浅い円形型であろう。

遺 物 磨石1点が出土しているが、第1号小竪穴との重複の状況から、第1号小竪穴に伴出したものの可能性も高いが、一応本炉穴の遺物と考えておきたい。花崗岩製で、88mm×83mm×64mmと大人の拳大の大きさで、重さ720g。一面に磨痕が残されている。また、側面には一部敲打痕も残され、磨石以外にも用いられたことがうかがわれる。

年 代 細かい年代は、不明である。

第25号炉穴 (095) (第44図)

位 置 ワ15—16グリッドの真ん中よりやや西寄りに位置する。第1号小竪穴のすぐ北にある。立地は、台地の肩口である。

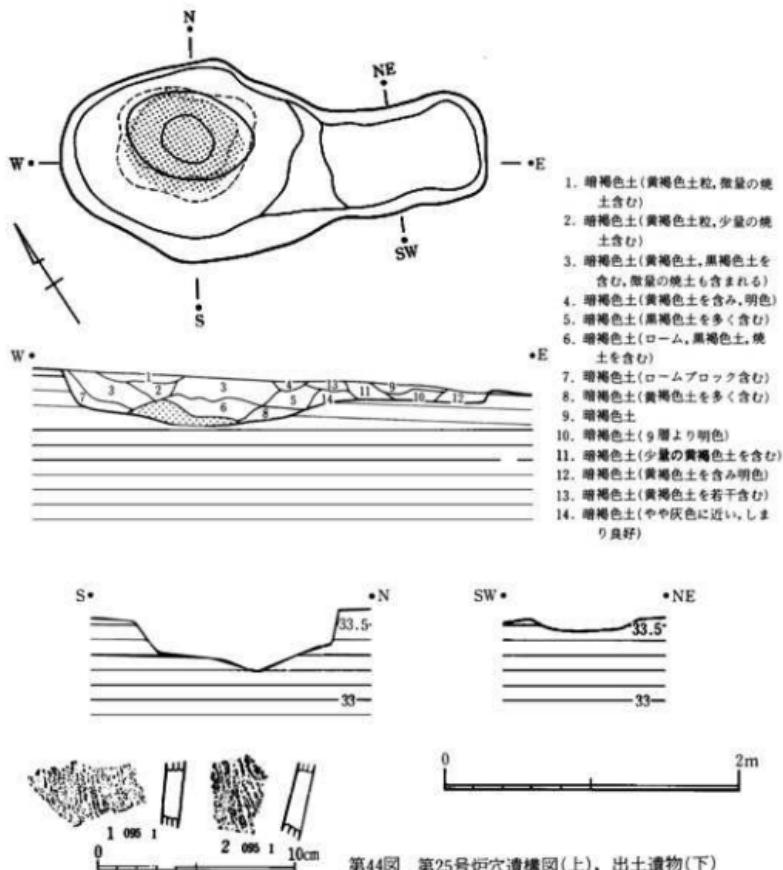
形状・規模 平面形態は西洋梨形である。楕円形の炉部に長方形の足場がついている。長さ2.9m、炉部短径1.35m、足場幅0.7m、炉部深さ0.33m、足場深さ0.1mである。炉部の底面はゆるい丸底で、足場の底面は平坦である。炉部の底面は、足場の底面より一段低い。

覆 土 暗褐色土が主体である。

焼 土 楕円形で、長径80cm、短径70cm、厚さ15cmである。純粹に近い。盛り上がっていた。

構 造 炉部の掘り込みは深くはっきりとしているが、足場の掘り込みと思われる東側の掘り込みは浅い。深い円形型は、本来このような炉部より浅い足場を持っていたのかもしれない。しかし、このタイプの炉穴は、タルカ作遺跡では他にはっきりした例が無いので、東側の足場とみえる浅い掘り込みは、シミであるのかもしれない。

遺 物 2点の第I群土器片(1、2)と1点の焼成を受けた不定形の粘土のかたまりである。1は胴部下半の破片。表面はR Lの単節繩文が縱走している。条間は密で、細めの原体の明瞭な押捺痕が看取される。内面は研磨され平滑である。細砂粒が混入。黒斑のある褐色を呈し、焼成は良好。2もやはり胴部下半の破片で、撲糸文が付されている。原体はR、各条は本来密であるが、回転ム



第44図 第25号炉穴遺構図(上)、出土遺物(下)

ラがあり、圧痕の浅深、条間隔の不定を招いている。内面は特に成形痕が認められない。胎土、焼成は1に近いが、明茶褐色を呈する。

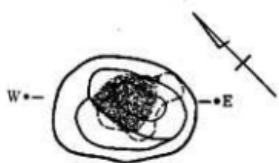
年代 出土土器によっても、細かい年代は決定できない。

第26号炉穴 (096) (第45図)

位置 ワ15-16グリッドの南東隅に位置する。第25号炉穴の南東5mにある。立地は、斜面である。

形状・規模 平面形態は、梢円形である。長径0.95m、短径0.7m、深さ0.15mである。底から壁にかけて浅いスリ鉢形になっている。

覆土 暗褐色土が主体であるが、東側には黄褐色土が目立つ。



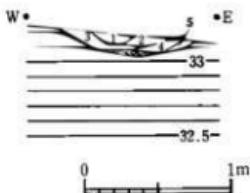
焼土 三角形に近い。径40cm前後、厚さ4cm。混ざり土がある。盛り上がっている。

構造 浅い円形型である。

遺物 出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。

第27号炉穴 (098A) (第46・47図)



1. 暗褐色土(ローム粒、炭化物粒を含む)
2. 暗褐色土(ローム粒、燒土粒を含む)
3. 暗褐色土(ローム粒、燒土粒、炭化物粒を含む)
4. 黄褐色土(燒土粒を多く含み明色)
5. 黄褐色土(暗褐色土粒を少量含み、しまりがよい)

第45図 第26号炉穴遺構図

位置 ワ15-12グリッドの西側に位置する。立地は、台地の平坦面である。第4号落し穴を切っている。

形状・規模 平面形態は、長方形である。2つの炉穴が噛み合っている。長さ2.4m、幅0.7m、深さ0.35mである。底は比較的平らで、壁はゆるやかに立ち上がる。2つの炉穴から成る。

覆土 暗褐色土と黄褐色土が主体である。南西→北東の順で炉穴がつくられたことがわかる。

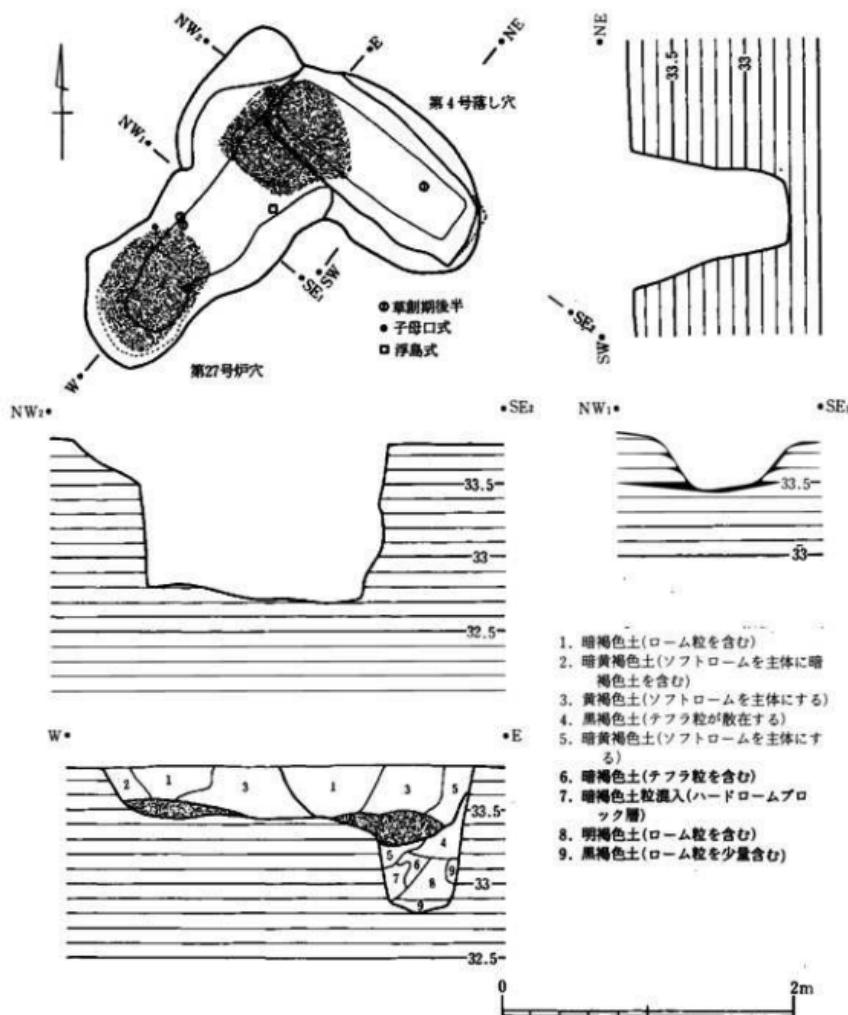
焼土 2個所みつかった。北東側の焼土は、第4号落し穴の覆土の上にのる。円形に近く、径75cm前後、

厚さ23cm。南西側の焼土は、梢円形で、長径85cm、短径60cm、厚さ12cmである。

構造 掘りの深い長方形型である。旧い南西側の炉部の足場は、北東側にあったと思われる。炉部と同じ高さであろう。新しい北東側の炉部は、足場を第4号落し穴の掘り込みをもとにつくっていたようである。

遺物 9点の土器が出土した。内訳は、第I群4点(1)、第II群1点、第III群2点、時期不明の無文細片が3点である。1は繩文の胸部破片。原体はR L。縦走繩文であるから、器面左側に右45度の傾きをもつ無文帶は、回転施文時の原体のズレと考えられる。条間は密で、圧痕も明瞭である。内面には成形痕は認められない。なお、表面の無文帶には軽い研磨の痕があり、繩文施文に先立つ器面成形の様子をうかがうことができる。胎土中には、長石・黒雲母などの花崗岩片が混じる。黄褐色を呈し、焼成は並。なお、図示しなかったが、撚糸Rの付された土器細片が2点ある。第II群以下は、細片で特徴をとらえ難い。

年代 出土土器からでは決定できないが、夏島期に属する可能性はある。



第46図 第27号炉穴、第4号落し穴遺構図

第28号炉穴 (099) (第48図)



第47図 第27号炉穴出土遺物

位 置 ヲ15—15グリッドの南西隅に位置する。立地は、斜面である。北東から南西に向って傾斜している。

形狀・規模 北側の輪郭がよくつかめなかつたが、平面形態は、およそ橢円形だったと思われる。長径1.05m、短径0.75m、深さ0.15m。底は、平坦であるが、焼土のみつかったところは、一段へこんでいた。

覆 土 暗褐色土が主体である。

焼 土 橢円形で、長径55cm、短径27cm、厚さ4cmである。混ざり土がある。

構 造 浅い円形型である。

遺 物 出土しなかつた。

年 代 細かい年代は、不明である。



第48図 第28号炉穴遺構図(左)出土遺物(右)

第29号炉穴 (100) (第49図)

位 置 ヲ14—07グリッドの真ん中よりやや東寄りに位置する。立地は、斜面である。

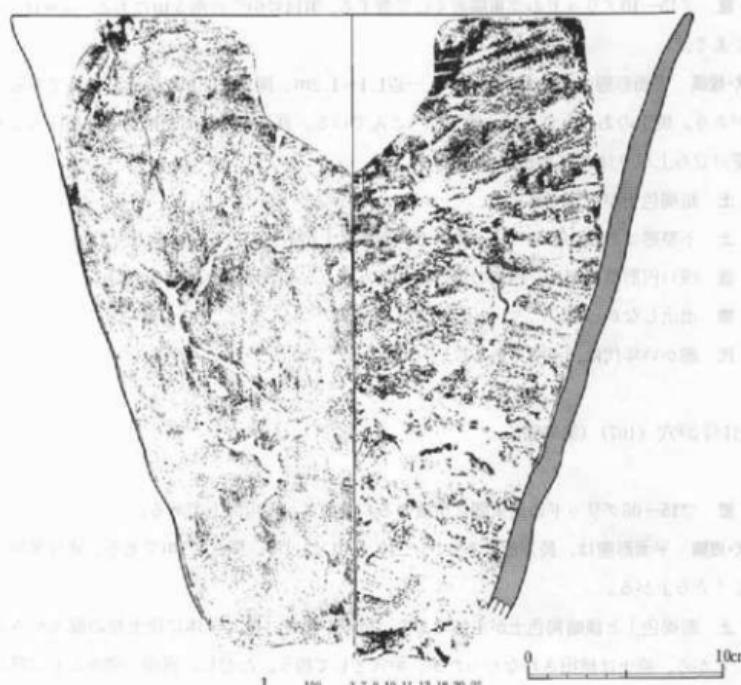
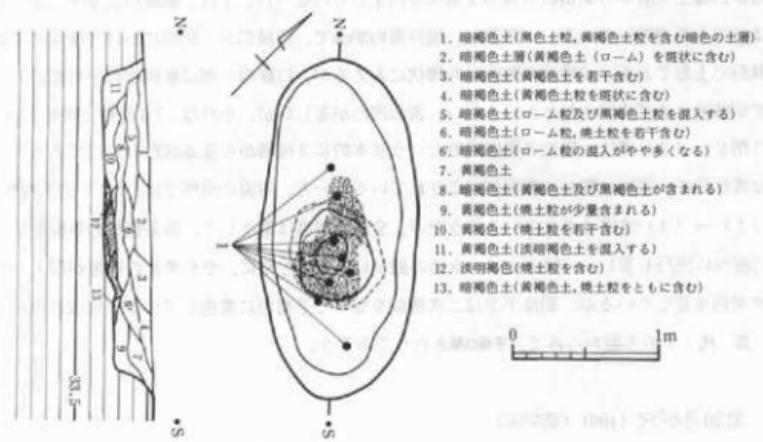
形狀・規模 平面形態は、長橢円形である。長径2.3m、短径1.1m、深さ0.3mである。底は、地形の傾斜に沿ってゆるく傾斜している。焼土の部分が少しへこみ気味である。壁は、かなりきつく立ち上がる。

覆 土 暗褐色土が主体であるが、底の方には黄褐色土が目立つ。

焼 土 西洋梨形をしている。長径90cm、短径45cm、厚さ9cmである。混ざり土がある。

構 造 挖りの深い長方形型であろう。炉部が掘り方の中心に寄っている。足場は炉部の北側とみた方がよかろう。これより小形であるが、構造の似たものに第13号炉穴がある。

（註）土壤名は文部省の土壤研究会の文部省土壤試験場による土壤分類である。以下に示す土壤名は、各層の土壤を表すものである。



第49図 第29号炉穴遺構図(上)出土遺物(下)

遺物 第I群土器が2点(R Lの縦走繩文の土器片とRの絡条体回転の燃糸文の土器片)出土したが、覆土上層から第III群土器が1個体分出土している(1)。1は、底部付近を欠くが、全体の約2分の1を遺存している。口径34cm、現存高約30cmで、口縁部から底部にかけて徐々にすぼまる深鉢形の土器である。口縁部の断面は丸棒状にみえるが、口縁の一部に截痕状の平坦部があり、ヘラで切截後にナデ成形されたものらしい。表面凹凸が著しいが、それは、(1)粘土帯接合→(2)ヘラ削り→(3)横位・縦位の器面成形という基本的に3段階からなる成形のせいであろう。最終的な成形時に、器面に細かい擦痕がこされている。一方、内面の成形では、(2)の工程が省かれ、(1)→(3)で済まされているようだが、全体に擦痕は荒々しく、線条痕様の外観を呈し、器面の細かい凹凸も著しい。胎土には、きめの細かい砂粒とともに、やや多めの纖維が混入している。暗褐色を呈しているが、胴部下半は二次焼成を受けて茶褐色に変色している。焼成は良い方である。

年代 1の土器からみて、子母口期あたりであろう。

第30号炉穴(106)(第50図)

位置 ワ15—10グリッドの北東隅近くに位置する。第14号炉穴の南5mにある。立地は、台地の肩口である。

形状・規模 平面形態は、長方形に近い。一辺1.1~1.2m、深さ0.08mというところである。底は凹凸がある。焼土のあるところは一段ややへこんでいる。真ん中に、南北に走る細長いへこみがある。壁の立ち上がりはダラリとしている。

覆土 暗褐色土が主体である。

焼土 不整形である。怪45~55cmである。混ざり土がある。

構造 浅い円形型である。西側の浅い掘り込みは、シミの可能性がある。

遺物 出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。

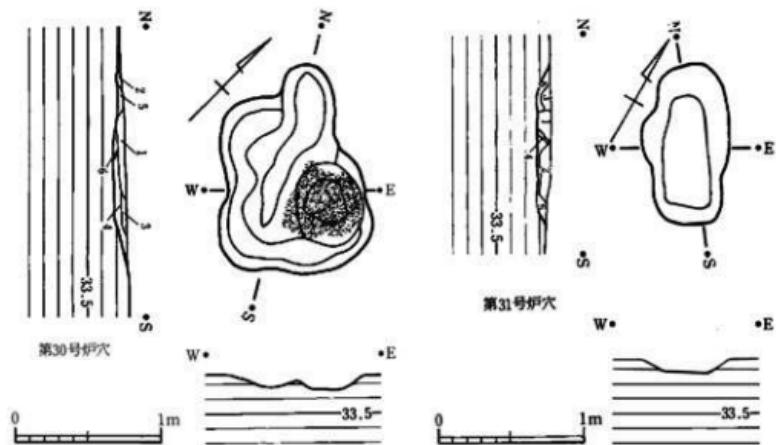
第31号炉穴(107)(第50図)

位置 ワ15—06グリッドの南東隅に位置する。立地は、平坦面上である。

形状・規模 平面形態は、長方形である。一辺0.45m×1.1m、深さ0.1mである。底は平坦で、壁はゆるく立ち上がる。

覆土 暗褐色土と淡淡褐色土が主体である。壁際を除き、覆土全体に焼土粒の混入がみられる。このことから、焼土は検出されなかったが、炉穴として扱う。ただし、底面、壁面ともに熱を受けた痕は無かった。

構造 浅い円形型であろう。



1. 暗褐色土(黄褐色土粒、焼土粒若干が含まれる)
2. 暗褐色土(黄褐色土粒を若干含むが色調は暗い)
3. 暗褐色土(黄褐色土粒を少量、焼土粒を若干含む、わずかに赤味がある)
4. 暗褐色土(黄褐色土粒、焼土粒を若干含む)
5. 黄褐色土(暗褐色土を若干含む)
6. 暗褐色土(黄褐色土を若干含み、やや暗い色調を呈する)

1. 暗褐色土(黒色土を少量混入、炭化物粒、焼土粒を若干含む搅乱土層)
2. 暗褐色土(黒色土、焼土を若干、ロームを斑状に混入)
3. 淡暗褐色土(焼土粒を若干含む、また黄褐色土粒を若干混入)
4. 淡暗褐色土(焼土粒を若干混入)
5. 淡暗褐色土(黄褐色土を少量含み、やや黄色味が強い)
6. 黄褐色土(軟質ローム)

第50図 第30号(左)、31号炉穴(右)遺構図

遺物 出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。

第32号炉穴 (108) (第51図)

位置 ワ15-06グリッドの真ん中よりやや東寄りに位置する。第31号炉穴の北西4mにある。立地は、平坦面上である。

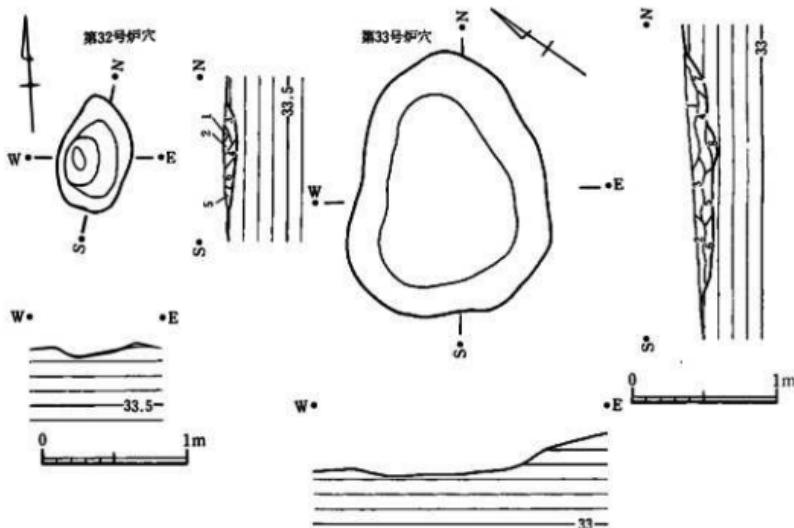
形状・規模 平面形態は、梢円形である。長径0.8m、短径0.5m、深さ0.07mである。底には西側に一段くぼみがある。壁の立ち上がりはゆるい。

覆土 暗褐色土が主体である。全体に焼土が含まれている。このことから、この土塹を炉穴として扱う。ただし、底面、壁面ともに熱を受けた痕は無かった。

構造 浅い円形であろう。

遺物 出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。



1. 黄褐色土(燒土を少す。やや赤味が強い)
2. 暗褐色土(黄褐色土、燒土を若干含む。やや黄色)
3. 暗褐色土(黄褐色土、燒土を若干含む。少し赤色)
4. 暗褐色土(黄褐色土を少す。焼土を若干含む)
5. 暗褐色土(黄褐色土を少す。燒土を若干含む)
6. 黄褐色土(軟質ローム)

1. 淡暗褐色土(黄褐色土少す。燒土粒若干を混入)
2. 淡暗褐色土(黄褐色土少す。燒土粒若干を混入)
3. 暗褐色土(黄褐色土、燒土粒若干を混入)
4. 暗褐色土(黄褐色土、炭化物粒若干を混入)
5. 暗褐色土(黄褐色土若干を混入)
6. 暗褐色土(黄褐色土少すを混入)
7. 暗褐色土
8. 暗褐色土(ローム粒、炭化物粒若干を混入)

第51図 第32号炉穴遺構図(左), 第33号炉穴遺構図, 出土遺物(右)

第33号炉穴(109)(第51図)

位 置 ネ15—09グリッドの南東隅近くに位置する。立地は、台地の肩口である。

形 状・規 模 平面形態は、卵形である。長径1.8m、短径1.4m、深さ0.15mである。底面は比較的平坦で、地形の傾斜に沿って、傾斜している。壁の立ち上がりはゆるやかである。

覆 土 淡暗褐色土と暗褐色土が主体である。比較的上層の方に燒土粒、炭化粒の混入がみられる。このことから、炉穴として扱う。ただし、この炉穴でも、底面、壁面とも熱を受けた痕は認められなかった。

構 造 掘りの深い長方形型であろうか。炉部がはっきりしないので、よくわからない。

遺 物 黒浜式の細片が1点出土した。ほかに炭化物粒1点がサンプリングされている(図ナシ)。

年 代 細かい年代は、不明である。

第34号炉穴 (110) (第52図)

位置 ネ15-14グリッドの北東隅よりやや南寄りに位置する。第33号炉穴の南5mにある。立地は台地の肩口である。

形状・規模 平面形態は、ほぼ橢円形である。長径1m、短径0.8m、深さ0.18mである。底面は、地形の傾斜に沿って傾斜しているが、焼土の部分は、一段とへこんでいた。壁の立ち上がりはゆるい。

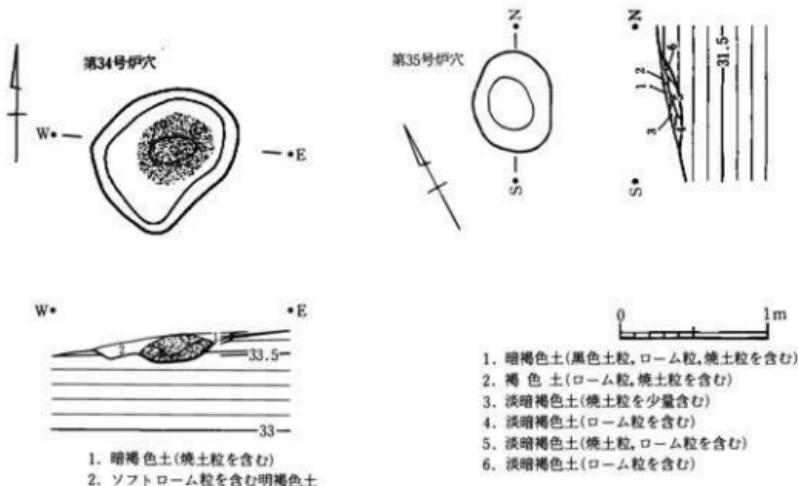
覆土 暗褐色土と明褐色土にはさまれて、焼土が頭を出している。

焼土 楕円形で、長径53cm、短径43cm、厚さ17cmである。上部の方は削られていて、本来はもっと厚かった可能性が高い。へこみにたまっているが、盛り上がってもいる。混ざり土がある。

構造 浅い円形であろう。あるいは、西側に足場があったものが、流れてしまったろうか。

遺物 型式不明の土器細片1点のみ。

年代 細かい年代は、不明である。



第52図 第34・35号炉穴遺構図

第35号炉穴 (112) (第52図)

位置 ネ15-25グリッドの西側に位置する。立地は、台地の斜面である。

形状・規模 平面形態は、橢円形である。長径0.65m、短径0.54m、深さ0.09mである。底は浅い

丸底で、そのままゆるく壁が立ち上がる。

覆 土 淡暗褐色土が主体である。壁際をのぞき、焼土粒が混入している。このため炉穴として扱う。ただし、底面、壁面とも熱を受けた痕は無かった。

構 造 浅い円形型であろうか。

遺 物 出土しなかった。

年 代 細かい年代は、不明である。

第36号炉穴 (113) (第53・54図)

位 置 ヲ15—25グリッドの西側に位置する。第35号炉穴のすぐ西にある。立地は、台地の斜面である。

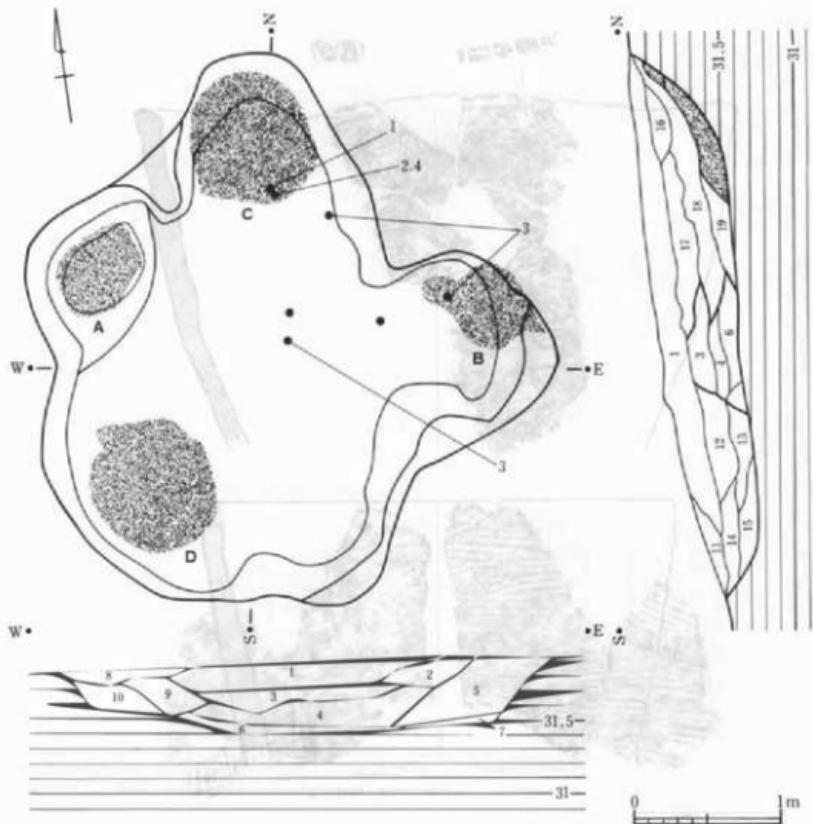
形 状・規 模 平面形態は正方形に近い。一辺3.2m、深さ0.6mである。底面はゆるい凹凸があり、地形の傾斜に沿って傾斜している。壁はゆるく立ち上がる。4つの炉穴が噛み合っている。

覆 土 暗褐色土が主体である。切り合いから、A→B→C、Dとつくりかえられたことがわかる。

焼 土 4個所みつかった。Aは橢円形、長径70cm、短径50cm。Bは紡錘車形、長径90cm、短径55cm。Cは円形、径90cm。Dは円形、径85cm。いずれも混ざり土がある。

構 造 堀りの深い長方形型である。Aは南東側、Bは西側、Cは南側、Dは東ないし北東側に、足場の位置が想定される。焼土のみられない真ん中が常に足場で、それをめぐって、次々と炉部がつくりかえられたかのようである。

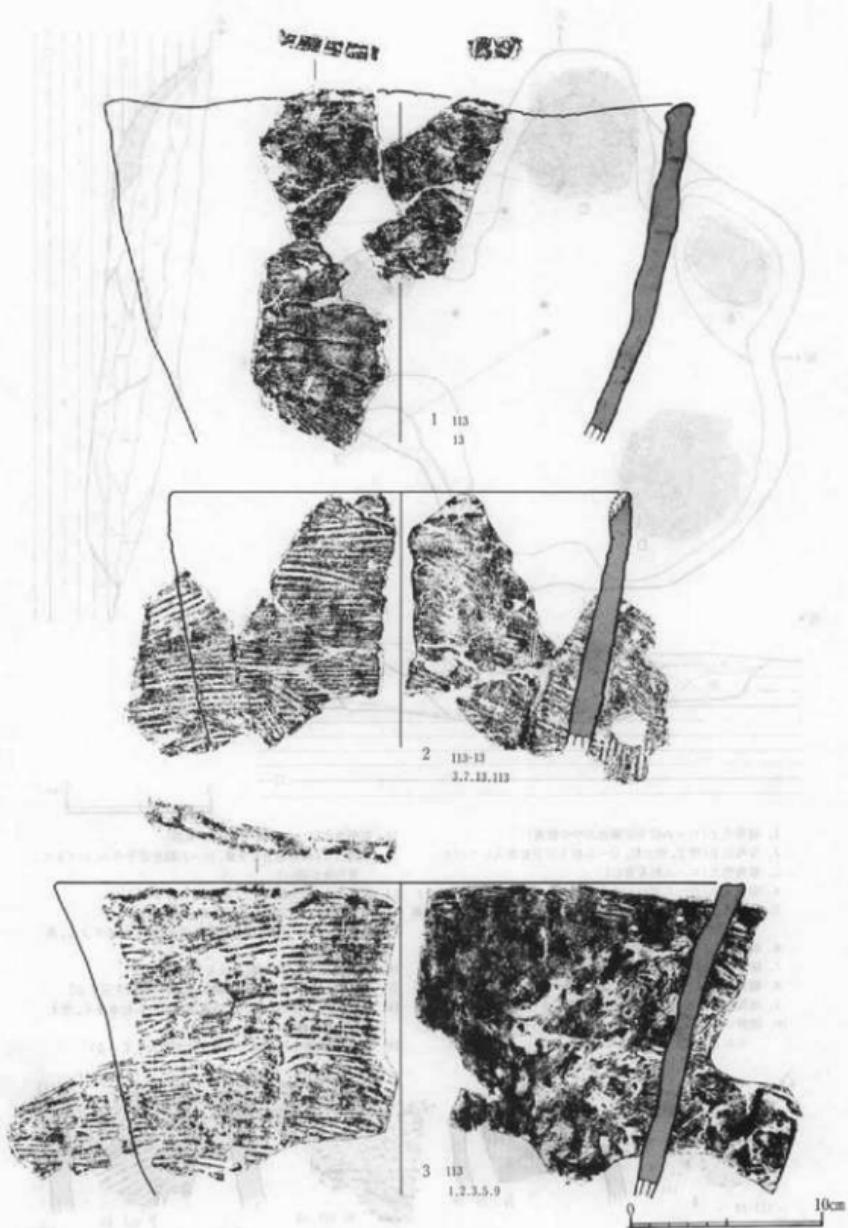
遺 物 器形の復原できるもの3個体分(1、2、3)と63点(4~7)の土器片が出土した。全て第III群である。1は推定口径28.5cm。口縁部の形状はよく分らないが、小波状である可能性がある。口縁端は水平に切られ、細かい刻目が加えられている。表面、内面とも無文であるが、表面には横走する擦痕が看取される。また、粘土帯接合部周辺には器面の凹凸が著しく、指頭によるおさえ痕かと思われる凹部が認められる。胎土中には微細な砂粒とともに纖維の混入が顯著で、成形不良の内面には纖維脱去痕が多数観察される。暗褐色を基調とする。焼成はあまり良くない。2は口縁端を欠損するが、大体の形状を図上復元した。推定口径22.5cm。表面、内面とも貝殻条痕。条痕は、どちらも横走するが、表面が深く、内面は浅い。胎土への纖維の混入は多く、断面は黒色を呈する。茶褐色で、焼成は甘い。破片下部には二次焼成痕がある。3は口径33cm。第29号炉穴出土の土器と近い口径を持つ大型の土器。器形も近い。口端は1と同様に截痕をとどめ、水平に切られた状態を呈している。やはり粘土帯接合部周辺の凹凸が著しい。表面には横走する粗い貝殻条痕が全面に施されている。条痕は、深く明瞭に引かれているところもあるが、施文後に擦り消され、横位の擦痕におきかえられているところがある。同趣の手法については、再三指摘してきた。内面は、器表の剥落が著しく、極めてのこりが悪いが、やはり横走する貝殻条痕がある。胎土、焼成は2に



1. 暗褐色土(ローム粒を少量含みやや軟弱)
 2. 暗褐色土(燒土、燒土粒。ローム粒を若干量混入している)
 3. 暗褐色土(ローム粒を含む)
 4. 暗褐色土(ロームブロックを少量含む。若干黃色味をおびる)
 5. 暗褐色土-ロームブロックを多量に含む。燒土ブロック若干混入。壁の崩落土か)
 6. 暗褐色土(ローム粒がやや多く混入)
 7. 暗褐色土(ローム粒、燒土粒。燒土が少量混入)
 8. 暗褐色土(ローム粒を多く含み軟弱)
 9. 暗褐色土(ローム粒を多く含むが、しまりがよい)
 10. 硬質ローム(暗褐色のしみこみが認められるが、地山と考えられる)
 11. 暗褐色土(ローム粒を多く含み軟弱)
 12. 暗褐色土(黃褐色土を少量、ローム粒を若干含み、わずかに黃色味が強い)
 13. 暗褐色土(燒土粒、ローム粒が若干含まれる)
 14. 暗褐色土(ローム粒を若干含み、しまりがよい)
 15. 暗褐色土(ローム粒、炭化物粒を若干含み、しまりよく、黄褐色が強い)
 16. 暗褐色土(ローム少量、燒土を若干混入)
 17. 暗褐色土(ローム粒若干が混入し、暗い色調を呈する)
 18. 暗褐色土(A-T相当のバミスを含むローム粒を多く、燒土粒若干を含む)
 19. 暗褐色土(燒土及び燒土ブロックが混入している)



第53図 第36号炉穴遺構図(上)出土遺物(下)(1)



第54回 第36号炉穴出土遺物 (2)

近いが、暗褐色を呈する。4は、1と近似した土器であるが、口縁部の刻目は斜行し、かつ深く刻まれている。表面に斜行する擦痕が認められる。内面にも弱い擦痕がある。纖維が微量混入する。黄褐色を呈し、焼成は良い。6は表面に局部条痕の縱走する土器。内面は無文。きめ細かい胎土に少量の纖維が混入する。赤褐色を呈するが、二次焼成を受けた可能性がある。7は表面条痕、内面無文の土器。著しい二次焼成を受け、表面、内面ともにボロボロである。纖維が多く混じる。8も表面条痕、内面無文の土器。胎土はやや砂質で、纖維がやや多く混じる。茶褐色を呈する。

年代 茅山下層期以降に下る可能性も指摘されるが、有文土器が無いため、決め手を欠く。

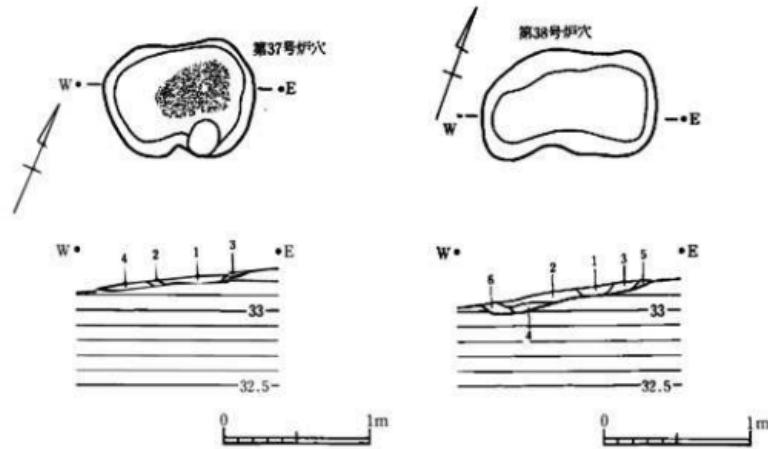
第37号炉穴 (114) (第55図)

位置 ネ15—14グリッドの南側に位置する。第34号炉穴の南西6mにある。立地は、斜面である。

形状・規模 平面形態は、橢円形である。長径1m、短径0.7m、深さ0.05mである。底面はゆるい凹凸があり、地形の傾斜に沿って傾斜している。壁の立ち上がりは、ゆるい。

覆土 暗褐色土が主体である。

焼土 うすく堆積していた。うすいので、セクションには出でていない。橢円形で、長径50cm、短径30cmである。



- | | |
|---|---|
| 1. 暗褐色土(燒土、黄褐色土を若干含む、やや黄色を呈する)
2. 暗褐色土(燒土若干混入)
3. 暗褐色土(燒土、黄褐色土を若干含む)
4. 黄褐色土(燒土粒を若干含む) | 1. 暗褐色土(燒土若干含み、やや黄色味を帯びる)
2. 暗褐色土(黄褐色土を斑状に若干含む、燒土粒を若干含む)
3. 暗褐色土(黄褐色土を若干含む、燒土粒を若干含む)
4. 暗褐色土(燒土粒を僅かに含み、暗色を呈する)
5. 暗褐色土(黄褐色土を若干含む)
6. 暗褐色土(暗褐色土を若干含む) |
|---|---|

第55図 第37・38号炉穴遺構図

構 造 浅い円形型である。

遺 物 出土しなかった。

年 代 細かい年代は、不明である。

第38号炉穴 (115) (第55図)

位 置 ネ15—19グリッドの北側に位置する。第37号炉穴の南2mにある。立地は、斜面である。

形状・規模 平面形態は、長方形である。長さ1.15m、幅0.7m、深さ0.09mである。底面はゆるやかな凹凸があり、地形の傾斜に沿って、傾斜している。壁の立ち上がりはゆるやかである。

覆 土 暗褐色土が主体である。壁際をのぞき全体に焼土粒が混じっている。このため、炉穴として扱う。ただし、底面、壁面とも熱を受けた痕は無かった。

構 造 浅い円形型である。

遺 物 出土しなかった。

年 代 細かい年代は、不明である。

第39号炉穴 (116) (第56図)

位 置 ネ15—14グリッドの南西隅に位置する。第38号炉穴の北西4mにある。立地は、斜面である。

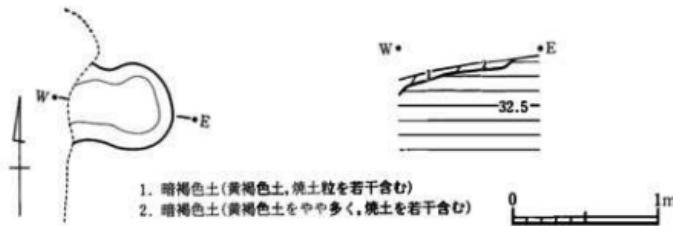
形状・規模 西側を、芋穴かと思われる穴によって壊されている。長方形で、長さ0.7m以上、幅0.55m、深さ0.05mである。底はゆるい凹凸がある。壁はゆるく立ち上がる。

覆 土 全体に焼土粒の混入がみられる。このため焼土はみつかないが、炉穴として扱う。ただし、底面、壁面とも熱を受けた痕は無かった。

構 造 浅い長方形の掘り込みを持つようであるが、そのようなタイプの炉穴は、この遺跡でみつかっていないので、浅い円形型が噛み合っているのではないかろうか。

遺 物 出土しなかった。

年 代 細かい年代は、不明である。



第56図 第39号炉穴遺構図

B 落し穴

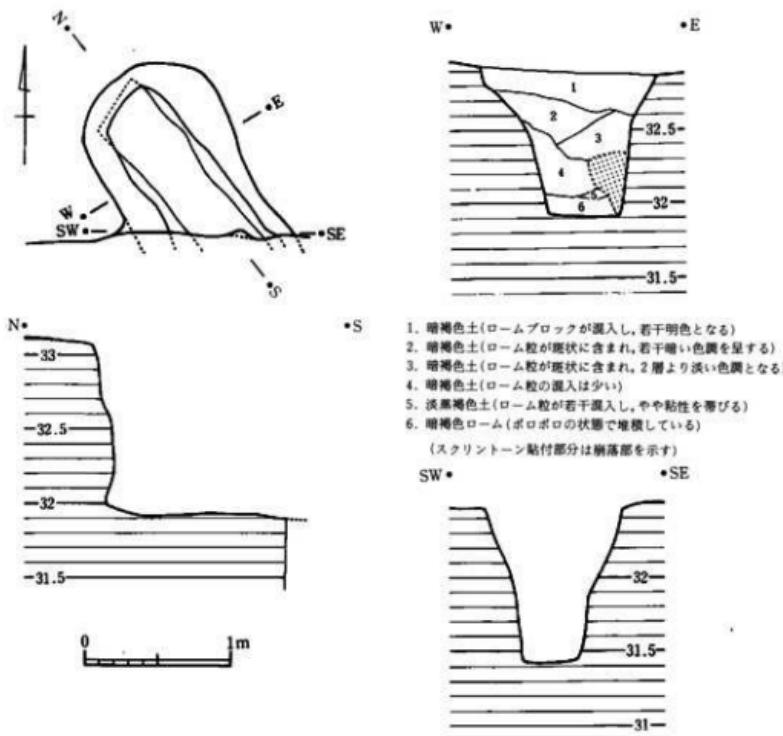
第1号落し穴 (063) (第57図)

位置 ワ15-02グリッドの南西隅近くに位置する。本来、ワ15-07グリッドに、またがっていたはずである。立地は、台地の平坦面上である。

形状・規模 先土器確認グリッドによって、南側の端が失われてわからない。平面形態は、長方形である。口が広がっていて、底の方へいく途中ですばまって、そこから底に向ってほぼ垂直に掘られている。口の大きさは、長さ1.3m以上、幅0.9~1mと推定される。深さは1~1.2mある。底は細かな凹凸がみられ、ローム本来の色でなくなっていた。

覆土 底にはロームが堆積し、その上に、ローム粒、ブロックの混じった暗褐色土が堆積していた。崩落部分もみられた。

構造 形状からみて、落し穴である。



第57図 第1号落し穴遺構図

遺物 遺物は出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。

第2号落し穴(074)(第58・59図)

位置 ワ15-01グリッドの北西隅近くに位置する。立地は台地の肩口である。

形状・規模 平面形態は、口は小判形で、底は長方形である。長さ2.1m、幅1m、深さ1.05mである。底は平らである。口は大きく、中ほどからすぼまって垂直に近く底まで掘り込まれている。

覆土 暗褐色土が主体である。東側では、ローム系の土が目立った。

構造 形状からみて、落し穴である。

遺物 石錐が1点出土した。土器の出土はなかった。石錐は、硬質砂岩の台形に近い幅広剝片を素材とする。背面右側縁に両面から大きめの剥離が、また左側縁にも、部分的であるが、やはり両面から細かい剥離が加えられ、刃先角40度を測る尖頭部が作出されている。先端部は回転磨耗痕が著しい。

年代 石錐によっては、細かい年代の決定はできない。

第3号落し穴(075)(第58・60図)

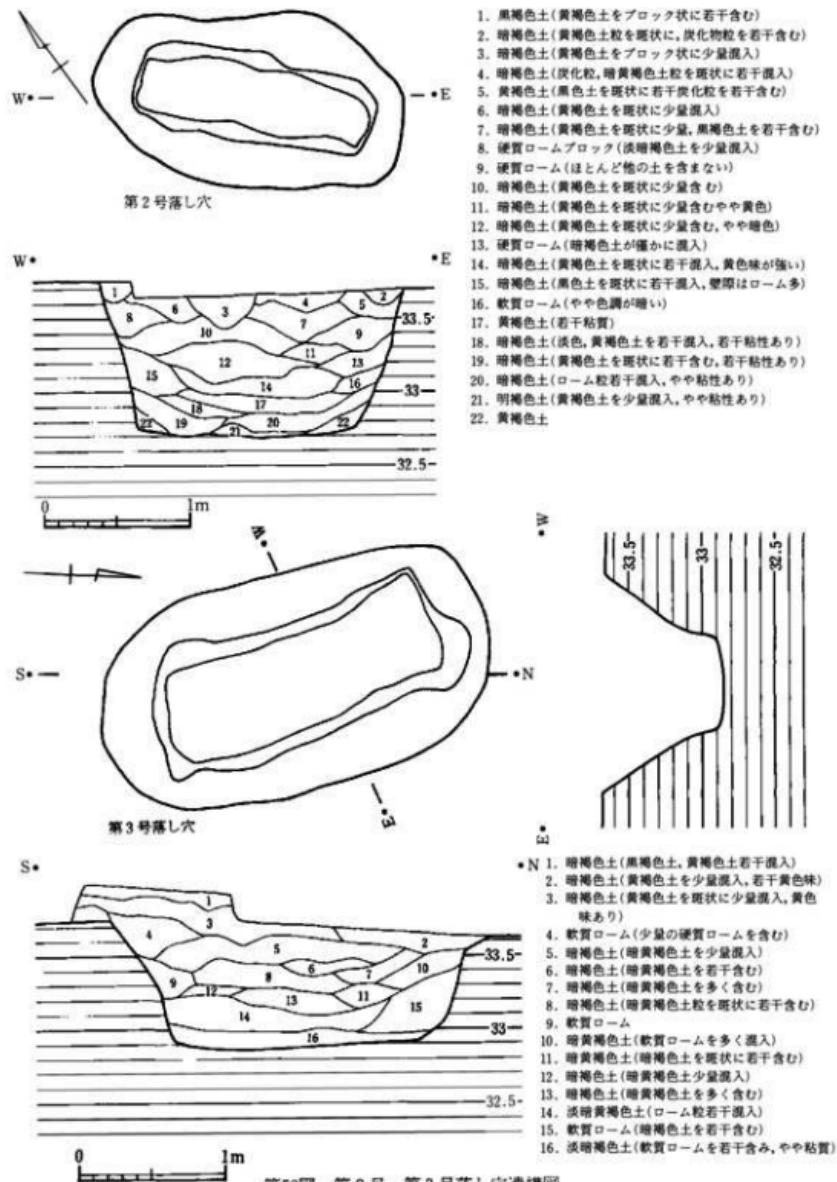
位置 ワ15-05グリッドの南東隅に位置する。第3号土塙の南西6mにある。立地は、台地の肩口である。

形状・規模 平面形態は、口は小判形で、底は長方形である。長さ2.75m、幅1.5m、深さ0.85mである。底は平らである。

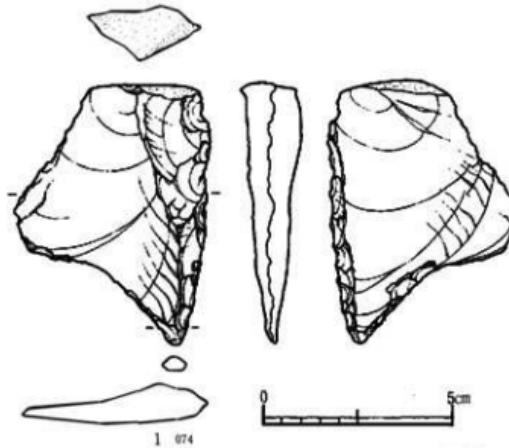
覆土 暗褐色土が主体である。新期テフラ、ロームの混入が目立つ。壁沿いにロームが堆積している。

構造 形状からみて、落し穴である。

遺物 7点の土器細片が出土した。第I群4点(1、2、3)、第III群1点、第IV群1点、不明1点である。1は口縁部破片。きめ細かい砂粒を多く含み、焼成は良くない。明黄色を呈する。器面の風化が進み、軟質な感じがする。このため表面、内面とも成形の状態は観察できない。口縁部は軽く肥厚しており、口唇下約10mmの無文帯を残して、以下に燃糸文が施されている。原体はRで、押捺に浅深がある、燃りは堅い方で、密な節が各条に右傾して認められる。また口唇部下肥厚帯に浅い細沈線が引かれているが、文様として引かれたものか不明である。第I群第4類である。2は1とは別個体の燃糸文土器の胴部破片。胎土の状態は1に近いが、焼成は良く、明黄色を呈する。使用原体はLであり、極めて稀な例であろう。条間は接し、押捺も浅くはないが、原体の燃りの乱れが各所に指摘できる。3は繩文施文のもので、図示しない1点もこれと同一個体と思われる。1、



第58図 第2号、第3号落し穴遺構図



第59図 第2号落し穴出土遺物

2に較べると、胎土中に含まれる細砂の粒がやや大きく、焼成もずっと良い。原体はRLで、縦位密接施文されている。

年代 出土遺物は、だいたい夏島期のものが多いが、落し穴の年代をもとめるには、不安がのこる。しかし同形態の落し穴は、井草期より類例が知られる（西川1984）から、夏島期に属する可能性は捨て切れない。



第60図 第3号落し穴出土遺物

第4号落し穴 (098B) (第46図)

位置 ワ15—12グリッドの西側に位置する。第27号炉穴が上に営まれている。立地は、平坦面上である。

形状・規模 北西隅を第27号炉穴によって攪乱されているが、およその大きさは、長さ1.8m、幅1m、深さ1~1.1mである。口は小判形で、底は長方形である。底はゆるい凹凸がある。

覆土 ほぼ上半分は、第27号炉穴の覆土で、その焼土から下に本来の覆土がのっていた。

構造 形状からみて、落し穴である。

遺物 出土しなかった。

年代 細かい年代は、不明である。第27号炉穴よりも古いことは確かである。

C 土 坑

第1号土坑 (070) (第27図)

位置 ワ14—22グリッドの北西寄りに位置する。第4~6号炉穴の東、第8号炉穴の北西である。立地は、平坦面上である。

形状・規模 平面形態は、正方形に近い長方形である。一辺1m×0.8m、深さ0.7mである。底は平らで、壁は垂直に近く立ち上がる。

覆 土 暗褐色土が主体で、黄褐色土の混入が目立つ。

構 造 性格不明である。

遺 物 土器細片が3点出土した(図ナシ)。1点は燃糸Rが縦位に回転押捺された第I群土器。2点は、第III群土器に入るかと思われる繊維土器。

年 代 細かい年代は、不明である。

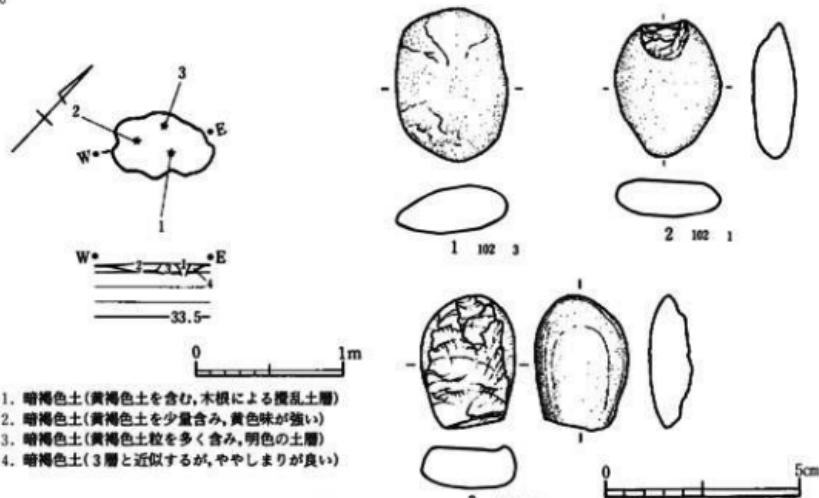
第2号土塙(102)(第61図)

位 置 W15—06グリッドの南西隅に位置する。立地は、平坦面上である。

形状・規模 平面形態は、ほぼ橢円形である。長径0.7m、短径0.45m、深さ0.05mである。浅い掘り込みがあつただけで、シミであるかもしれない。

覆 土 暗褐色土が主体である。

遺 物 石器3点(1～3)、土器片(黒浜式)1点が出土した。1は楔状石器の素材、2が同ブランク、3が同使用段階のものと思われ、1→2→3という流れを想定し得る好資料である。1は49mm×38.5mm×11.5mm、重さ18.9g、砂岩製。2は34.5mm×26.5mm×11mm、重さ10.4g、やはり砂岩製。一端に小剝離痕がある。3は34mm×23.5mm×11mm、重さ12.7g、チャート製両極石片で、図の上端に潰瘍が認められる。以上3点を通観すると、素材の大きさ、石質などから、おそらく成田層下の砂礫層から採取した小円礫が素材とされたものであろう。2の資料より、まず礫の一端に加撃作出されたエッヂを対象にあてがい、他端をハンマーで加撃する3の段階に進むことが予想される。



第61図 第2号土塙遺構図(左)出土遺物(右)

年代 黒浜式の出土から、該式期とも思われるが、今ひとつ根拠に乏しい。

D 小 穫 穴

第1号小竪穴 (093) (第62・63図)

位置 ワ15—16グリッドの南側からワ15—21グリッドにかけて位置する。南隅で第24号炉穴を切っている。立地は、北から南へ傾斜する斜面である。

形状・規模 平面形態は、正方形に近かったと思われる。一辺3~3.5m、南側の隅は、あまり角ばっていなかったようである。深さ0.2m。底は、地形の傾斜に沿ってゆるく傾斜している。比較的凹凸はない。壁の立ち上がりは、ゆるくダラリとしている。

覆土 暗褐色土が主体であるが、南側では、底面の上に広く黄褐色土の堆積がみられた。

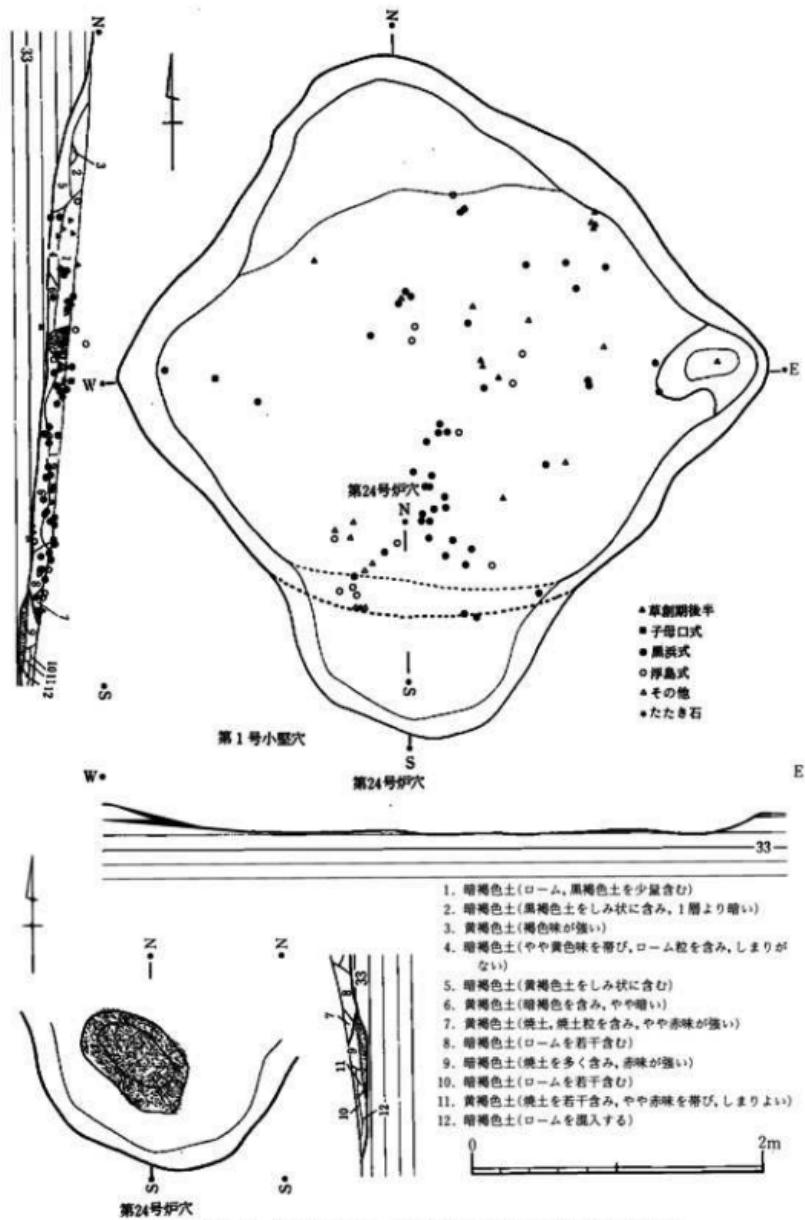
構造 柱穴の類はみられなかった。東隅のくぼみも浅いものである。

遺物 92点の土器片が出土した。内訳は、第I群(1~4)11点、第III群1点、第IV群(5~7)51点、第V群(8~10)11点である。第IV群土器の割合が55%と高い。

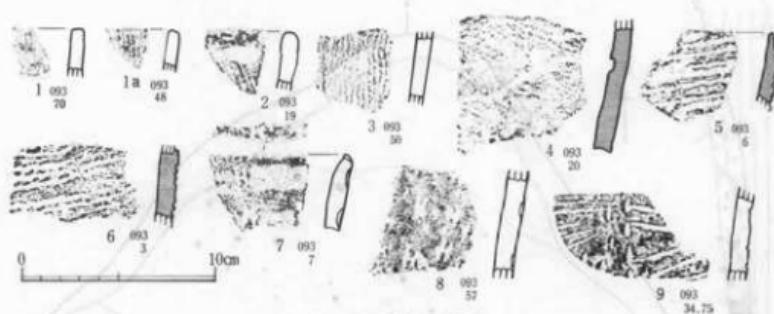
第I群土器 4点の拓影を掲げた。1と2は同一個体。口縁端が少しく平坦となっている。口縁直下から繩文が縦に回転押捺されている。原体はR L。口唇部~内面がナデ成形されている。胎土には細砂粒が多く混入する。黒褐色を呈し、焼成は良い。第I群第2類に属する。3、4はそれぞれ別個体の撻糸文の土器。3は、口縁部が丸棒(指頭)状で、口縁下に撻糸文が付されるが、原体を口縁部と平行に置いて回転しているため、各条が右傾している。原体はR。内面は、粗くナデ成形されているため、砂粒の移動による浅い短条線が、多数、横走している。胎土には細砂粒が多い。明~茶褐色を呈し、焼成は普通。4は胸部破片。表面は、3より太めの、原体Rの回転押捺文が縦走している。条間はせまく、比較的強めに絡条体が回転されているらしい。砂粒の混入が多い。黄褐色を呈し、焼成は良い。内面は、器表の荒れがひどく、成形の様子を観察できない。

第IV群土器 点数が多いが、細片がほとんどで、3例を図示する。5は繩文だけ付された土器。表面全体に原体L Rの回転圧痕が取られるが、表面に細かい凹凸があるため、押捺深度の差が大きく、圧痕の深さに著しい差がある。内面は、特に成形痕が認められないが、胎土中に多量の纖維が混入されている。横位の纖維離脱の痕跡をとどめている。暗赤褐色を呈し、焼成は良くない。6は口縁部破片。軽く内彌気味に立つ形態をしている。施文は多截竹管による波状沈線文で、各波状部では沈線自体が有節化している。内面は良く研磨され平滑である。微細砂とともに多量の纖維が混入している。明茶~暗褐色を呈し、焼成は本群としては良い方である。7も同趣の沈線文をもつ破片であるが、別個体と考えられる。内面は軽い研磨を受けて平滑である。纖維の混入が多いが、長石等の細砂粒も多く混入し、砂っぽい感じがする。表面茶褐色で、焼成は良い。

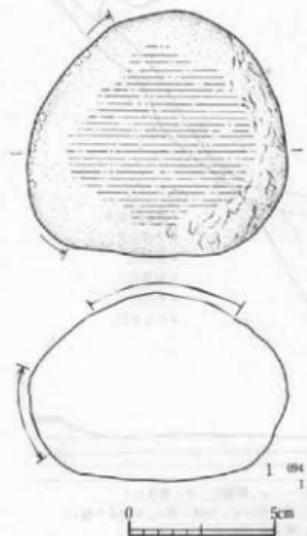
第V群土器 2個体の出土。同一個体とみられる破片がこの炉穴の周辺でも出土しており、覆土に混ざって流れ込んだ破片もある。8、9は同一個体で、半截竹管内側による2個1単位の鋭い



第62図 第1号小竖穴, 第24号炉穴遺構図, 遺物出土位置図



第63図 第1号小竪穴出土遺物



第64図 第24号炉穴出土遺物

刺突列のある土器。8は、口唇上にも同一工具による刺突が間隔をおいて施文されている。8では、器面が表面とも軽く研磨され、その上に刺突が加えられているのがうかがえるが、9では、器面の荒れがひどく内黒となるなど、二次焼成を被った形跡がある。黒褐色を呈し、部分的にススが付着する。胎土中には細砂粒が混じる。焼成は良好である。10は刺突列と細目の沈線による文様構成の看取される土器である。表面は全体に軽い研磨を施したのちに沈線を施文している。内面の成形は不明。胎土は9に近い。明黄～茶褐色を呈し、焼成は並である。

年代 出土土器からみて、黒浜式(古)段階であろう。

(遺構 邵 淳一 遺物 田村 隆)

3. 遺 物 包 含 層

A 繩文土器 (第65～94図)

第1群 草創期後半の燃赤文、縄文の土器

総数513点。口縁部形態、施文手法の差異に従って5類に細別することができる。

第1類 (1～4)。4個体分の破片がある。口縁部形態は外反 (1)、肥厚して外反 (2)、軽度の

肥厚（3、4）の変化があるが、口唇部に縄文原体の横位回転圧痕をとどめるという共通性が認められる（口唇部縄文帯—J₁帯）。胸部は幅の広い縄文帯（J₂帯）によっておおわれるが、この場合、1、2ではJ₁帯一無文帯—J₂帯という構成がとられるのに対して、3、4ではJ₁帯とJ₂帯とが接し、無文帯が消滅している。J₂帯の縄文施文は、1が通常の斜方向回転であるのに、2では横位回転による斜行縄文。3では1とは逆方向の斜方向回転による横走縄文となっている。

第2類（5～15）。1類の特徴であったJ₁帯が消滅し、J₂帯が口唇部直下より底部に及ぶもの。口縁部の断面形態をみると、5～7のように外反の顕著なもの（a）、8～12のように（11は10と同一個体とみられる）、軽度の肥厚、外反のみられるもの（b）、13・14のように直上するもの（c）、15のようにむしろ内彎するもの（d）等の変化があり、一様ではない。（a）、（b）の縄文は器面に密に施文されているが、（c）では回転圧痕が浅く、条間が開いて見える。（d）についても同様であり、（a）（b）両者と、（c）（d）とに大きく2分して考える必要がある。仮に前者を1種、後者を2種としておく。

第3類（25）。J₁帯に対応する口唇部の燃糸文帯を有するものであるが1個体あるにすぎない。この例では角頭状に直上する口縁直下にY₁帯とでも称すべき絡条体回転圧痕が横走し、Y₁帯に接して縱位の燃糸文帯（Y₂帯）が看取される。横走燃糸文は一部Y₂帯にも及んでいる。

第4類（16～24、26～29）。Y₂帯のみの単帶構成のものである。口縁部の形態は、弱く外反あるいは肥厚する傾向が一般的であるが、17、19、25などに見られるように、平坦な口唇部をもつ角頭状のものがある。一方、絡条体の回転圧痕の状態は、2類1種、2種と同様に、圧痕が深く、条間の比較的密なもの（18～26）と、圧痕浅く条間の開くもの（27、28）とに2分される。これをやはり1種、2種としておく。2種は量的に僅少である。29は本類のミニチュア土器で、1種であろう。

第5類（30）。無文土器で1個体の検出。口縁部無文帯の破片である可能性もあるが1類を設ける。円頭状で直上する口縁部形態を示し、外面はよく研磨されている。28例においても、燃糸文の施文に先行して器面が研磨されており、あるいは4類2種と関連するのかもしれない。

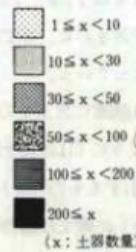
胸部破片（31～49）。43や44など明らかに4類2種と分類されるものもあるが、大多数のものの帰属はよくわからない。縄文、燃糸文の比率はほぼ1：1であり、観察表から明らかなように縄文、燃糸文の施文原体もごく一般的なものである。

第II群 早期前葉の沈線文土器

総数174点。同一個体の破片数が比較的多く、全体として15個体前後とみられる。遺物は2箇所のブロックに分かれて分布している。カ12-06グリッドを中心とするものを第1ブロック、ワ15-15グリッドを中心とするものを第2ブロックとし、各ブロックの内容を検討しよう。

第1ブロック（50～55、60～61、63～66、68、70、71）

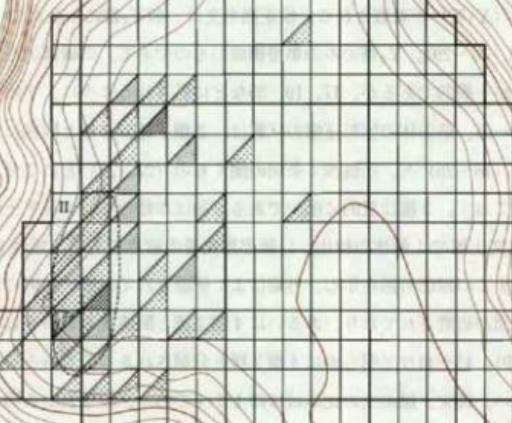
第1類 細沈線文を主体とする土器で、50、55が典型的なもの。51～54、61なども本類の胸部破片である。50、55を見ると、直線的に外反する器形を示し、口縁部が外削ぎに近いという点も共通し



+

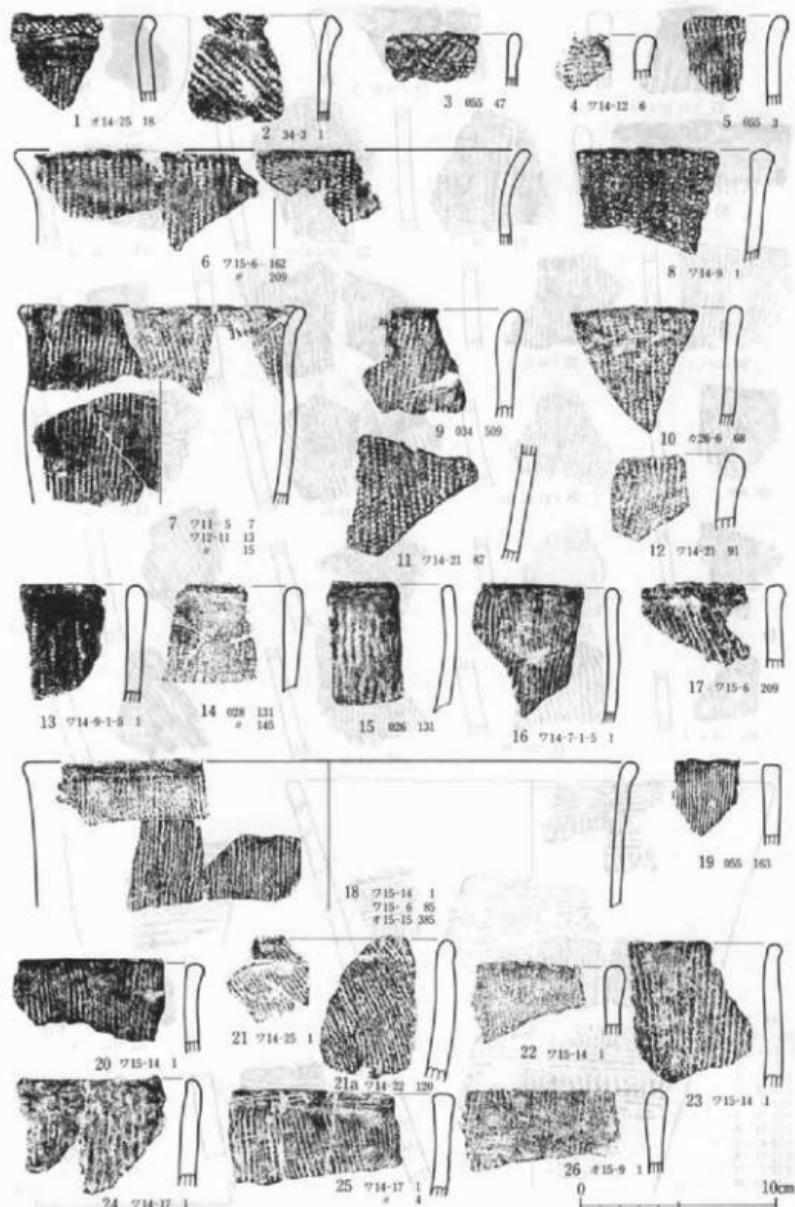
+

+

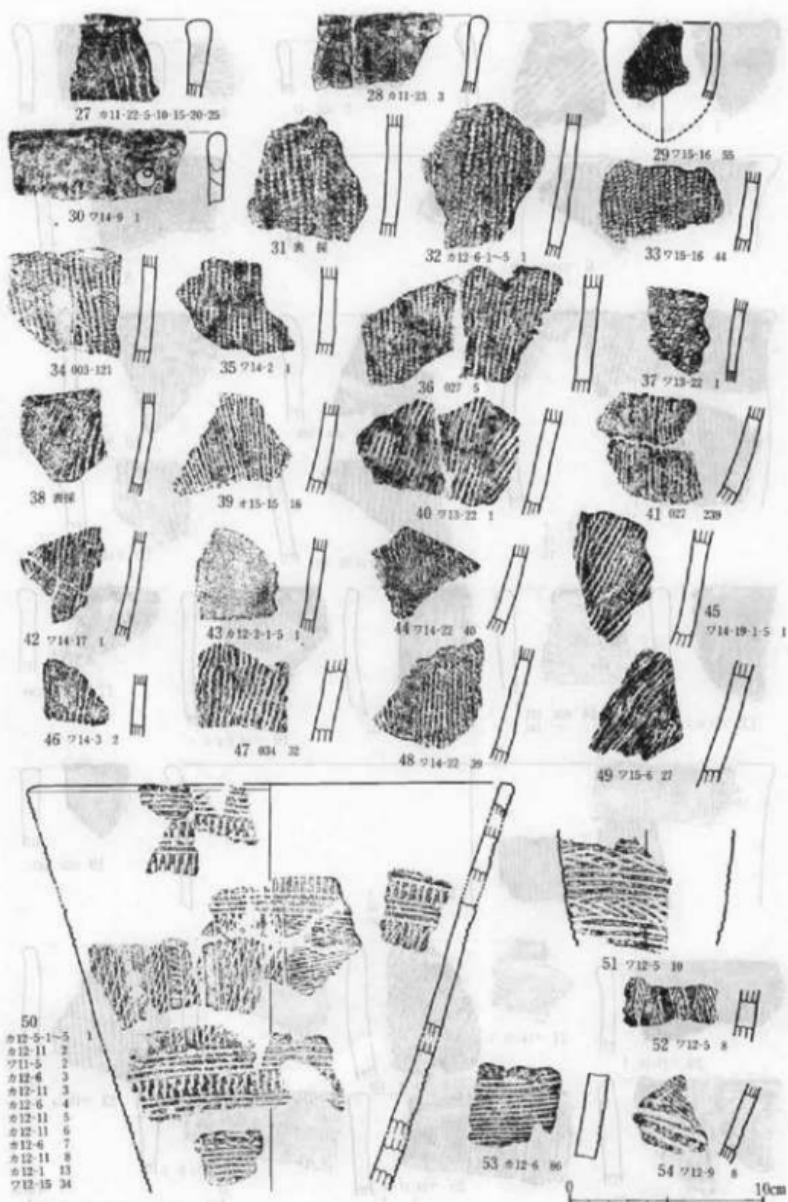


縄文
撫子文
沈線文
(草創期～早期)

第65図 類別土器の分布状況 (1)



第66図 繩文土器拓影図(1)



第67図 繩文土器拓影図(2)

ている。胸部の文様帶は底部近くにまで及ぶ。この著しく幅広の文様帶は細沈線による重層する横帯区画によっていくつにも分帶されることになる。両者ともに底部の形態が不明だが、50については71が、55については67の胎土が近似しており、同一個体となる可能性もある。50は3本乃至4本を1単位とする平行沈線によって横位の区画がおこなわれているが、各区画は幅が狭く縦位交互の短沈線によって充填される。上から4帯目にとくに幅の広い区画を設け、縦位及び斜位に帶状の細線文帶を組み合せた特有のモチーフによる文様が構成されている。なお、最下部の沈線のみが、現状で6条を数えることから、この部分が文様帶の下限を画するものと考えられる。55の文様構成もこれと基本的に一致しているが、横帯を画する沈線の本数が多く、横帯間の短沈線列が上下両帯に接し、また、細線文帶を組み合せた主文様帶の幅が狭いところがちがう。52なども主文様帶の部分であろう。一方、細沈線による横帯間の充填手法としては、51例では斜格子沈線が、61例では丸棒状工具の2列の刺突が採用されるなど変化が大きく、一様には把握できない。

第2類 やや太目の沈線による文様構成の認められるもので、54、60の2個体がある。両例とも細片であり、文様構成は不詳であるが、極めて規範的な横帯区画の認められる前類とは異っている。54では細沈線と複合し、60では短い刺痕が沈線間に看取される。

第3類 器面に粗い条線が横走する無文土器で、63が1例あるのみである。条線は一見すると貝殻条痕のように見える部分もあるが、纖維束様の柔軟なものを強く器面に擦過した結果であるかもしれない。

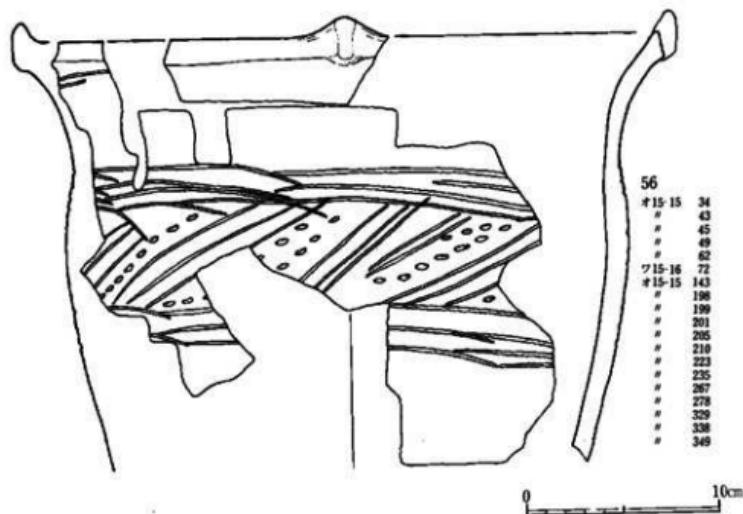
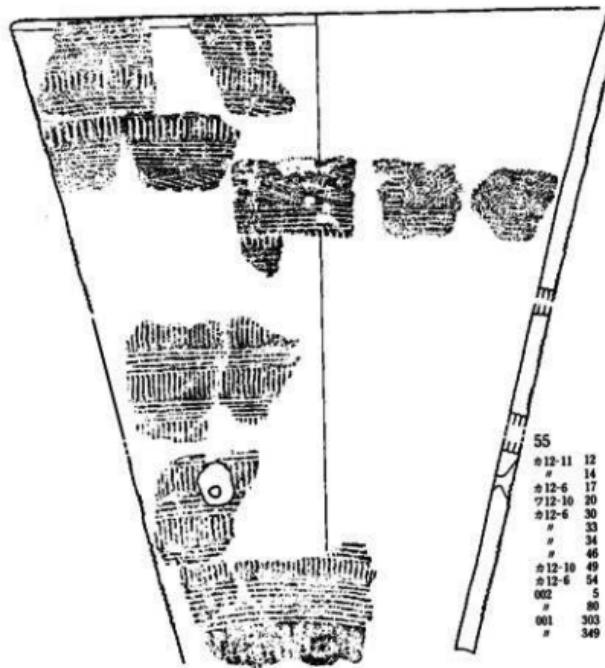
底部 底部は6例あったが、65～67、70のように底部尖端が尖り、かつ尖底部の厚さのうすいものと、71にみられる非常に肉厚なもの両者があるが、これは舟塚原古墳封土内の同期の土器底部を対象とした西川博孝氏の分類に従えば、それぞれA型と、C型に照応する（西川1980）のであろうが、西川氏の分類によるB型とみられる64例は第2ブロックから出土している。

第2ブロック (56～59、62、64、69)

第1類 (56～58)。細沈線による文様構成のみられるものであるが、全体の構成を知りうるものは56例のみである。外削ぎ状に肥厚する口縁部には小突起が付され、頸部の縮約するやや膨らみのある胸部形態を示している。文様は胸部上半、ちょうど胸部の膨らむあたりに帶状に施文されている。施文具は細目の籠状のもので、3本1単位の粗雑な平行沈線によって文様帶の上下を画し、その間には、やはり3本1単位の斜行沈線がひかれ、さらにその沈線間には同一工具尖端を刺突し割出することによって生じる半月状刺痕が加えられている。57、58は同一個体で、69もその底部である。56例と同一の口縁部形態をもち、細沈線による刻目、円形の凹みなどが認められるが、胸部の破片を欠いている。

第2類 (59)。やや太目の沈線が横位に間隔をおいて重ねられるもの。底部付近の破片である。

第3類 (62)。無文のものである。はたして本群に含めてよいのか問題が残るが、胎土は第1類に近く、また、縦位のヘラ削りによる器面調整は次群に認められない要素であるところから、一応本群に入れておく。



第68図 繩文土器拓影図(3)

底部(64、69)。64は尖底部が少し丸味を帯び、比較的肉厚なもの、また、69は尖端が欠損して形状に不明のところがあるが、非常に肉厚なもの。これと同種のものがもう一例あるが図示していない。

これら両ブロック以外から少量の注意される遺物が出土している。(第69図a～f)これをブロック外の土器として、2類に分つ。

第1類(a～d)。小片のみで不明なところの多い土器であるが、おそらく3個体分あると考えられる。すなわちbとcが同一個体と考えられるが、これとaの施文具とは近似しているものの、施文手法に差があり、分離した結果、a、b+c、dという3個体に識別された。

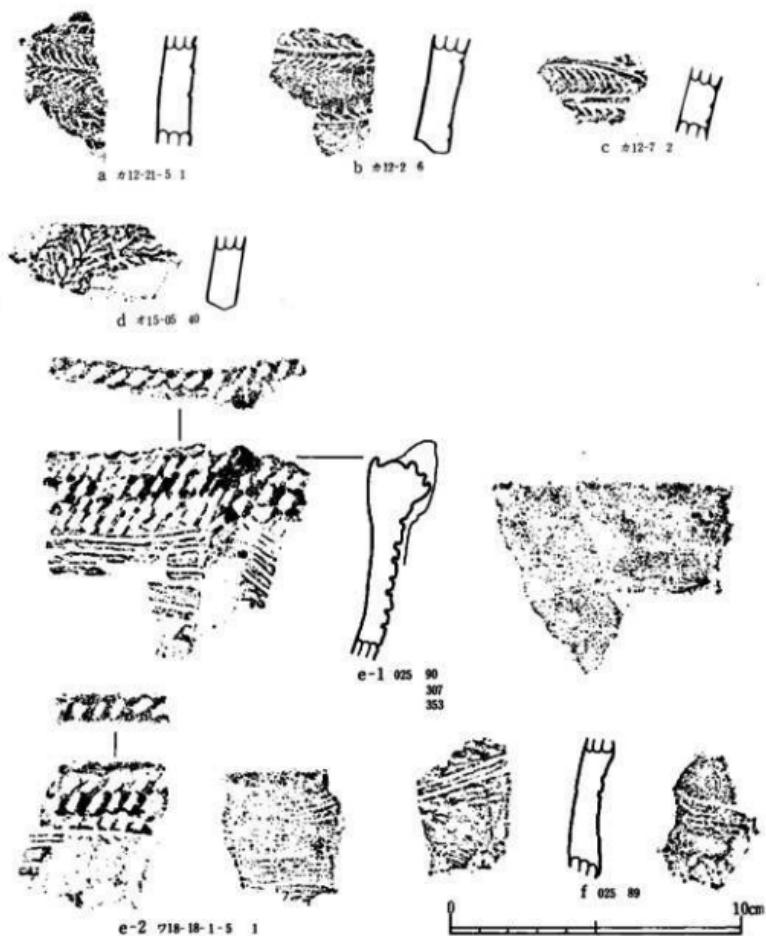
aでは鋭い爪先様の工具先端をほぼ直角に器面へ刺突し、2例1単位の爪形文帯を形成している。ところが、b、cを見ると、工具及びその刺突手法はaと等しいものの、2列1単位の爪形文帯の上を半截竹管によってなぞっており、爪形圧痕の一端が切られる状態となっている。cでは工具をかなり器面に対して鋭角に刺突しているため、爪形圧痕が幅広いものに変化している。半截竹管のなぞりはaに近いが、工具の圧痕手法においてはa～cと異っていると言ふべきであろう。

第2類(e、f)。類例の少ない土器であり、本群へ入れるべきものか躊躇させられた。eは口縁部の破片だが接合しない。口縁下に隆帯が横走し、小突起部からは同様の隆帯が垂下している。口縁部の隆帯の周辺には5列に及ぶ深い刺突列が平行して施され、以下押し曳きの結節沈線による平行線文に移行している。なお、垂下する隆帯の側面部への刺突痕の一部が残存している状態も観察される。fは別個体となるが、2条の沈線の両脇に刺突列がやはり2列認められる。内面はe、f両例ともに浅く条痕が横走しているが、貝殻条痕である可能性が高い。これらの土器の胎土には纖維の混入はないが、茶褐色のスコリア粒様の物質が多く含まれている。このような胎土の土器は土師器の一部には認められたものの縄文土器については、本類を描いて他には認めることができなかった。(第1類は明神裏3式、第2類は田戸上層式)

第三群 早期後葉の無文、条痕文土器

炉穴群をともない、本遺跡の主体を占める一群である。胎土に纖維を少量含むものが多い。貝殻条痕文の付されたもの595点、無文(擦痕のあるものを含む)のもの544点、総計1139点が出土しているが、大半が文様のないもので、有文のものは13個体44点にすぎず、その無文、条痕文土器に対する比率は3.9%となるが、文様帶が口縁部に局限されるものが大半であるため、実際はこれ以上の比率となることは明らかであろう。

有文土器(72～80、127、151～153)。72は口縁下に縦位の細隆起線があり、その下には浅い凹線が斜位に加えられている。内面には横位の擦痕が看取される。極微量の纖維が混入される。73、74は口唇部に貝殻腹縁の圧痕の認められるもの。圧痕は細く浅い。はじめ縦条体圧痕かと見られたが、レプリカによる検鏡観察の結果、貝殻腹縁が施文原体であることが確認された。圧痕位置は、73例では外反する口唇部外面に直交して、74例では平坦な口唇上に斜位に加えられている。73は表裏貝



第69図 繩文土器拓影図(4)

般条痕、74は外面に縦位の擦痕が走る。75は短い細隆線と円形竹管の刺突を交互に繰り返すもの。土器断面ではわかりにくいか、口縁下に細隆起線をめぐらせ、口縁部とこの細隆起線とを、右下りの短隆線で連接して形成される平行四辺形の区画内に竹管刺突を充填している。なお竹管の一部に刻目があるため、刺突痕がC字状となっている。内面は貝殻条痕。円形の補修孔がある。76、77は刺突文である。ともに先端の叉状となる工具（叉状竹管か）を用いるが、76ではこれを口縁直下に刺突しているのに対し、77では反時計回りに短く区切りながら引くことを繰り返している。両例ともに波状突起を有する土器で、76が単純な文様構成をとるのに対して、77では短沈線による鋸齒文

と平行線文を重複させ、さらに破片左端には、右下りの短沈線末端が観察され、そこには未知の文様が構成されているのである。76には口端に刻目がある。両者とも纖維を全く含まない。78~80は所謂突瘤文の土器で、全例に貝殻条痕が付されている。突瘤は3例とも外側から内側へ向くO・I型である。127は内外面に深い貝殻条痕が認められ、有文土器というよりもむしろ貝殻条痕文の土器であるが、平坦な口唇上に貝殻頂部の背圧痕が施されている。纖維の混入は極めて微量で、破片によつては全く痕跡の認められないこともある。堅密な焼成で、胎土も精練され、さらに条痕の様相も異質であるところから、搬入品であると考えられる。

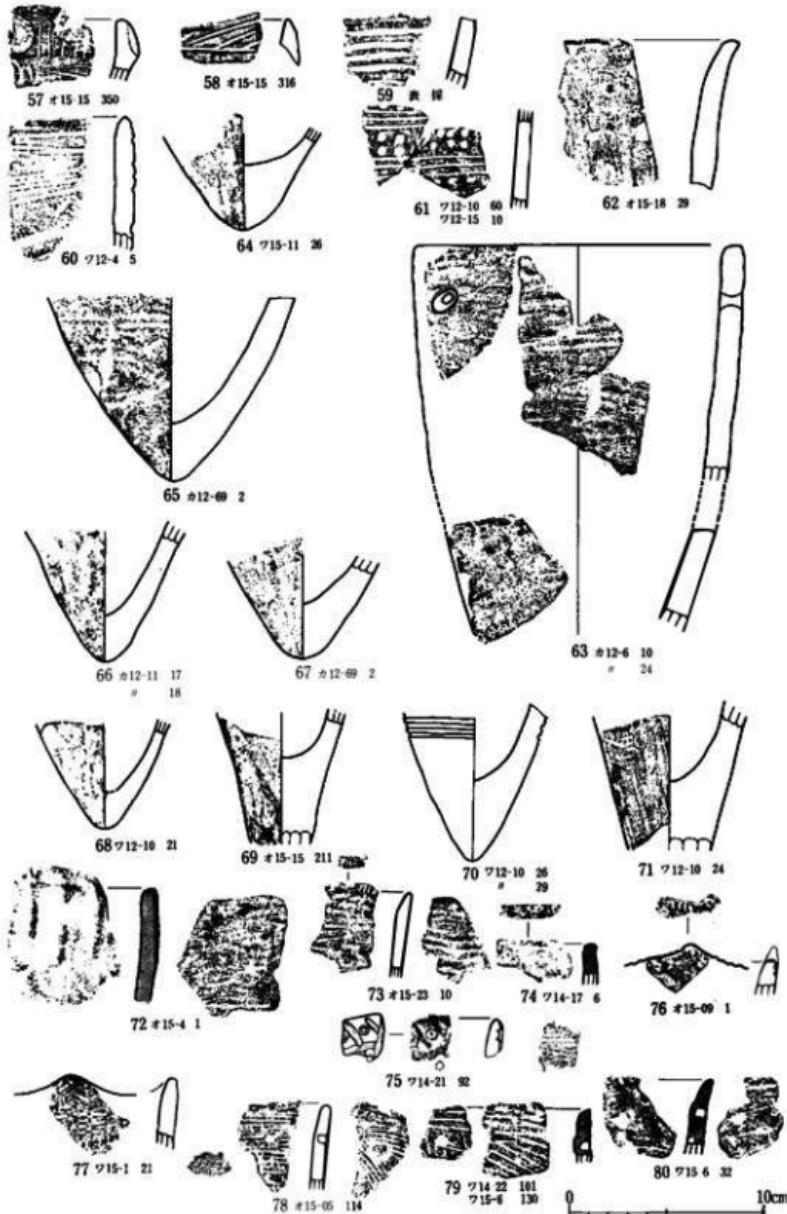
これ以外に、全く異った文様を有する土器が若干ある。151~153の3個体であり、胸部の屈曲する特徴のある器形を示し、刺突文と沈線文が多用されている。纖維の含有量が比較的多く、貝殻条痕が表裏に施されている。この様な特徴をもつ土器については、茅山貝塚の層位的出土例（赤星、岡本1957）によってその帰属時期が容易に判定される。

以上の観察に従うと、有文土器は茅山貝塚で出土している部分と、茅山貝塚には含まれていない部分とに2分されることがわかる。そこで、茅山貝塚（赤星、岡本1957）にない部分を第1類に総括し、ある部分を第2類と呼ぶことにしたい。量的には第1類が第2類をはるかに凌駕していることは、すでに瞥見したとおりである。

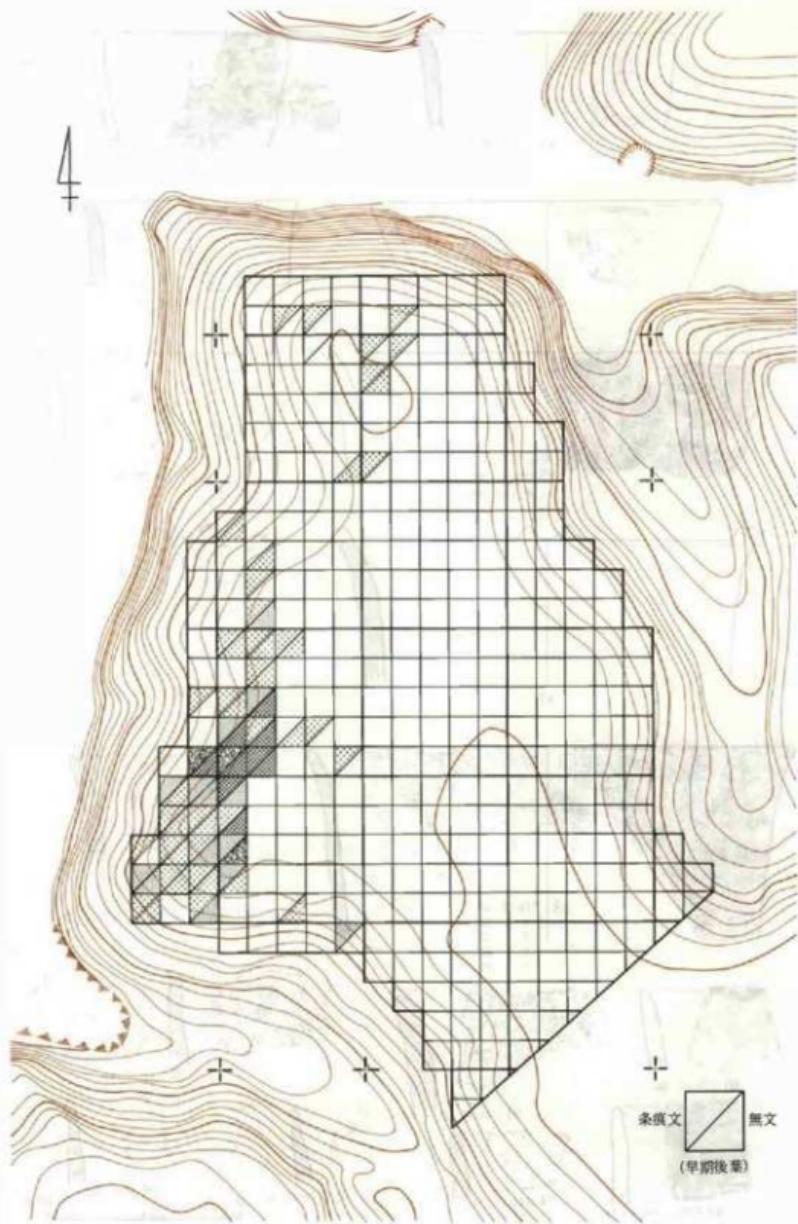
無文土器（81~126）。器形をうかがいする資料は少ないが、比較的大型の破片から推定してみると、口縁部の軽く外反する単純な深鉢形を呈し、尖底あるいは丸底形土器となるものが多い。平縁のものが多いが、遺構からは波状縁のものも多く検出されているから、両方あったのであろう。87は山形の小突起が2個付されたもので、稀な例。口縁部の断面形態を見ると、徐々に器厚を薄くし、丸くなるものが多いが、82、86~88のように、籠状工具によって外面を平坦に切られたような截痕を残すものが特徴的である。

次に器面の状態を観察すると、(1)ナデセいけいによる無文のもの(83、85、90、100、101、116など)もあるが、過半は(2)「柔軟なものを擦り付けた跡」(山内1967)が表裏に観察される。この種の無文土器が有文土器第2類に多量に伴出したという例はないから、その大半は有文土器第2類の無文部か、有文土器第1類と共に共存したであろう無文土器と考えてよい。纖維の混入は全般に少く、判定に苦慮するものも多い。

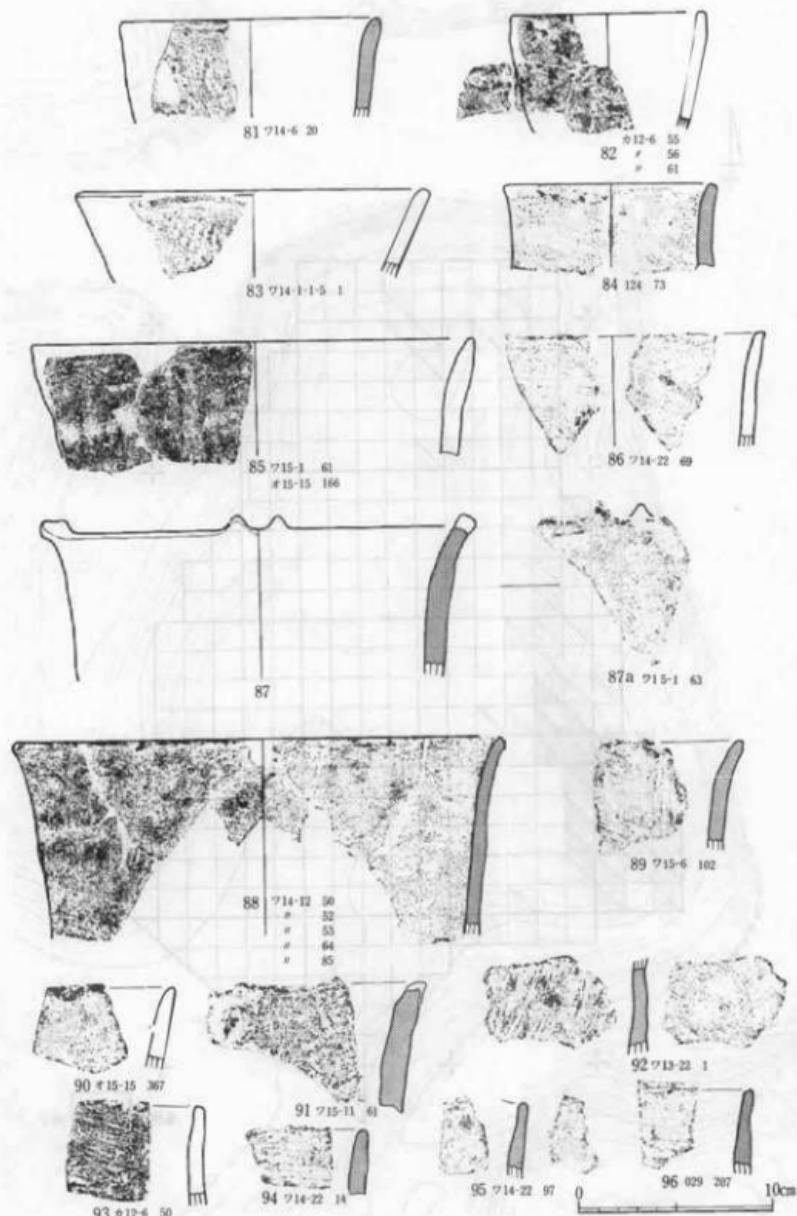
貝殻条痕文土器（128~150）。フネガイ科 (Arcidae) の貝殻腹縁部による条痕をもつ土器であるが、無文土器と同様に器形はよくわからない。口縁部周辺の様相は無文土器に近いが、截痕をとめるものは少い。128、129などは内面条痕、131、133は外面条痕であるが、一般に内外面に条痕が施される場合が多い。条痕の走向は、口縁外面では横位、胸部以下が縦位乃至斜位となる傾向が強い。表裏条痕の場合には内面は横走条痕となる。検出された破片総数では無文土器を若干上まわっているが、有文土器第2類の存在を考慮すると、これに伴う条痕文土器が相当量混入している可能性もあり、有文土器第1類にともなうものの個体数は無文土器のそれを若干下回るのではないかと推定される。



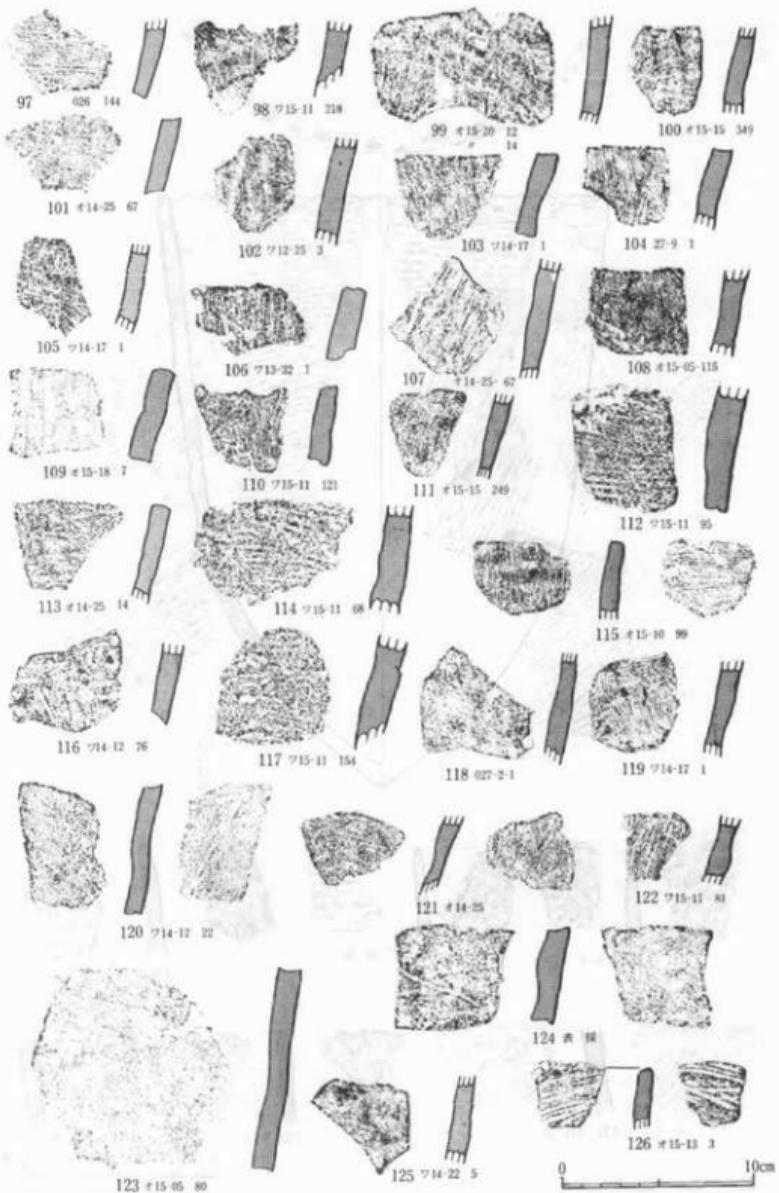
第70図 繩文土器拓影図(5)



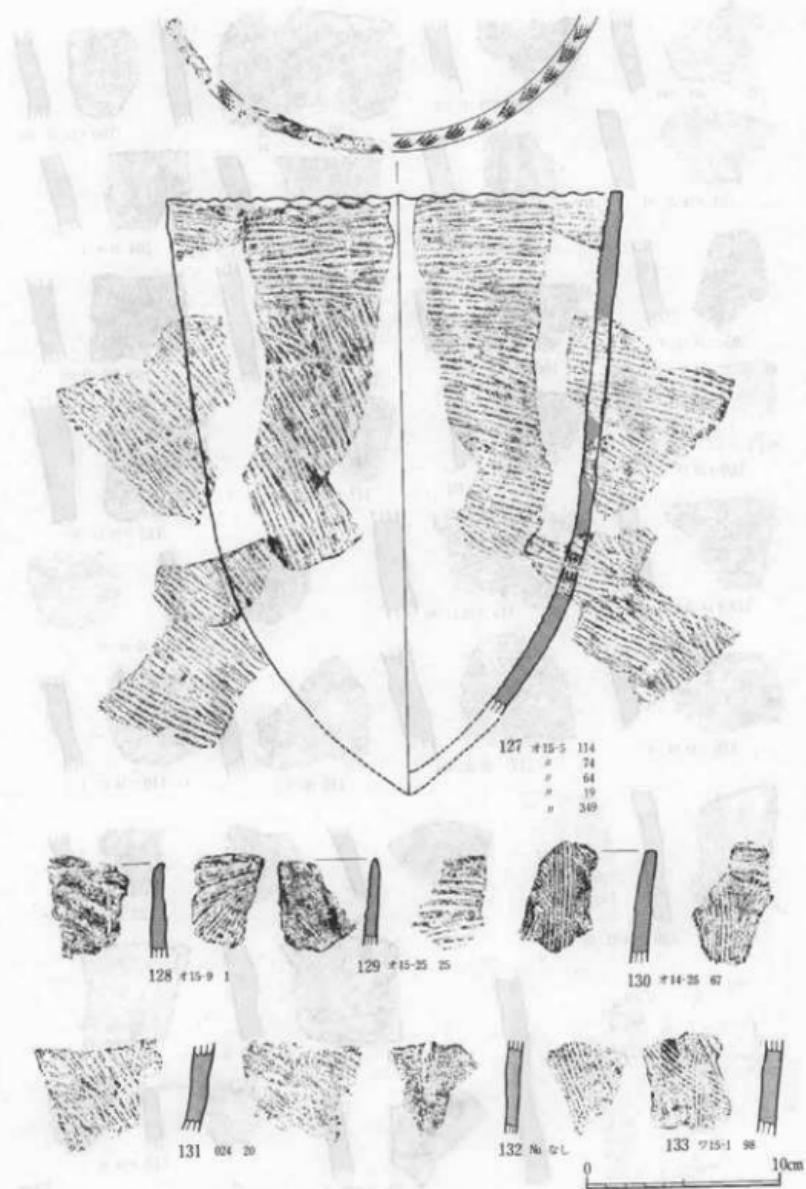
第71図 類別土器の分布状況(2)



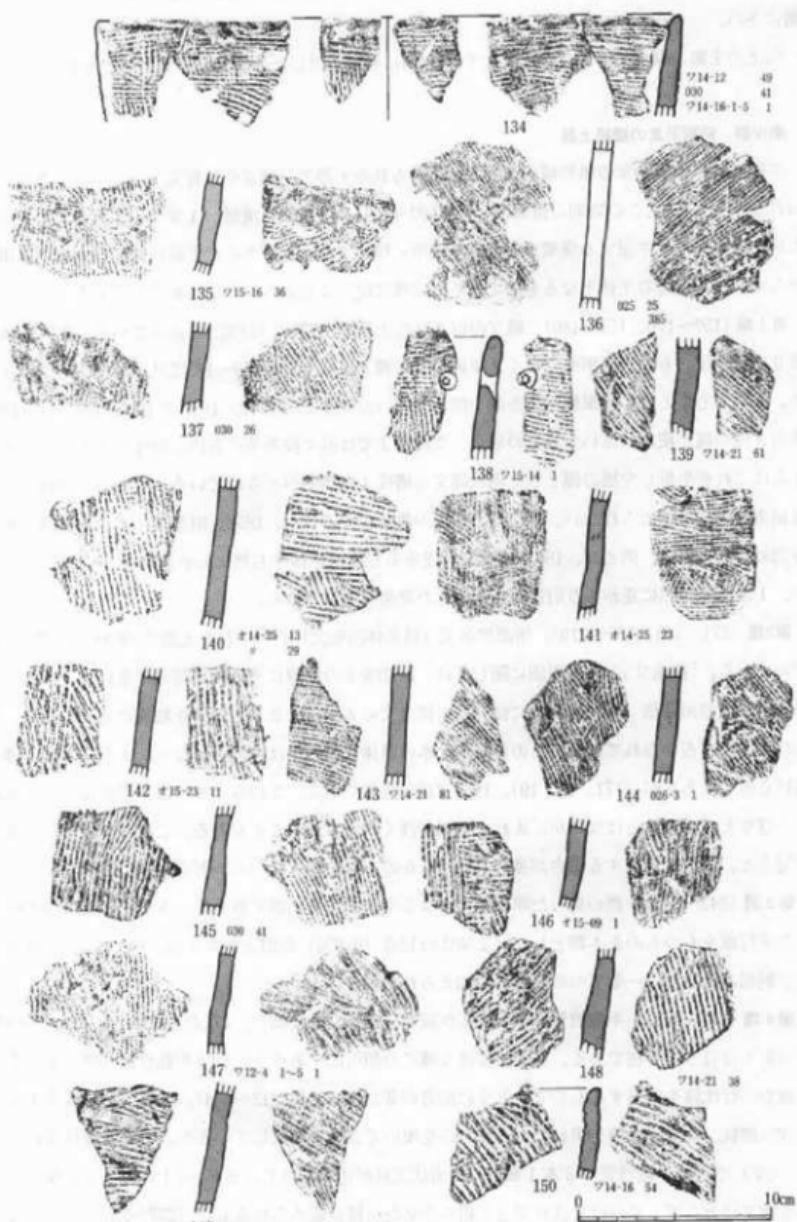
第72図 繩文土器拓影図 (6)



第73圖 繩文土器拓影圖(7)



第74図 縄文土器拓影図(8)



第75図 縄文土器拓影図(9)

底部（154～158）。好例を欠くが、平底の3例（156～158）は既に触れたように有文土器第2類段階に多い。

以上の土器の編年的位置づけに関しては第6章に考察を付したので参照していただきたい。

第IV群 前期前葉の纖維土器

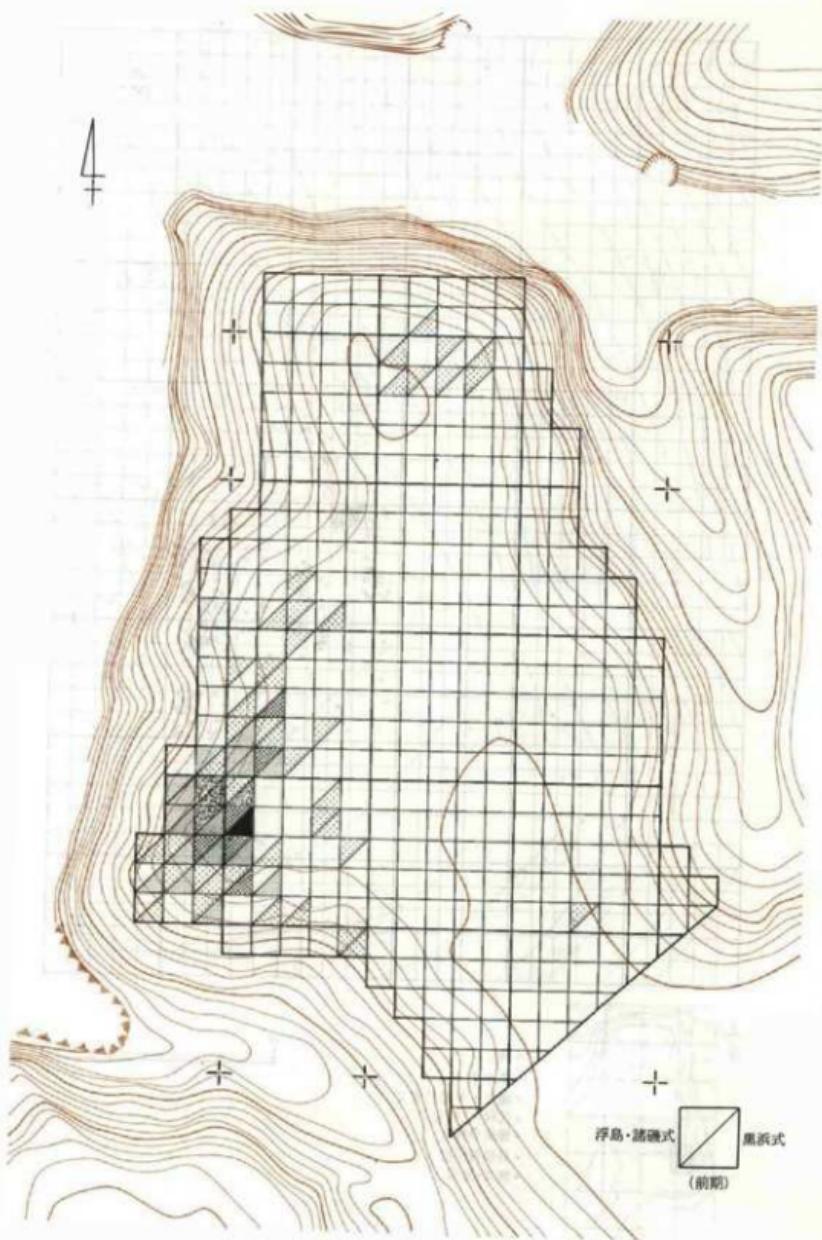
本群は胎土中に多量の植物纖維の混入が認められる土器で、縄文や竹管文などによって器面が飾られることが多い。この時期の遺構としては093号とした小堅穴状遺構が1基検出されたにとどまつたが、ブロック状を呈する廃棄土器群が数箇所に検出され、探集された土器片は1267点と、第III群とならび、本遺跡の主体となるものである。文様に則して型式内容を明らかにしておきたい。

第1類（159～170、174～186）。縄文の付された土器で、230点（18%）を占めている。使用原体の燃り方は2段のものが圧倒的に多く、単純な斜行縄文となるが、180～182では羽状縄文となっている。異例のものとしては異種原体を同一個体で使い分けるもの（182～183）があり、182では0段多条の3段の縄が使われている。この場合、2段目までは前々段多条の右燃の原体を共用し、一本はさらにこれを半折し左燃の縄として羽状縄文を構成する手法がとられている。なお、羽状縄文中には結束の手法は認められない。他に反の縄が少数存在する（184、185）。附加条とすべき明確なものは認められないが、例えば、165では、直前段多条左燃の原体を右燃にした原体が用いられているが、1段の縄の燃に差があり附加条と近似した効果が看取される。

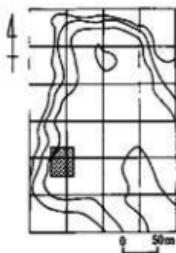
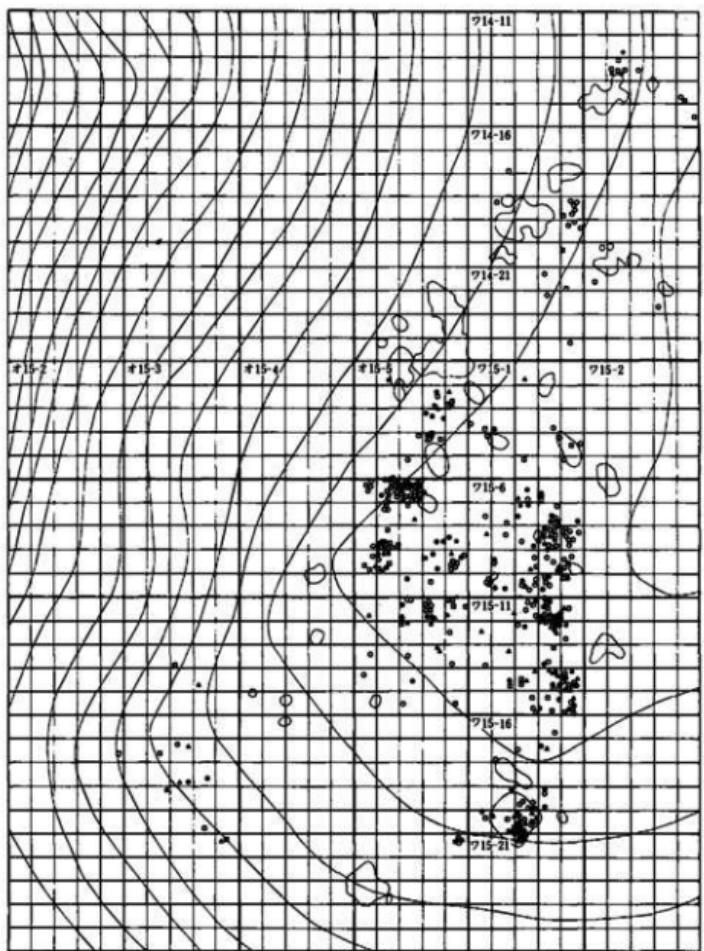
第2類（171～173、187～210）。所謂燃糸文（絡糸体回転文）の付された土器で130点（10.3%）を占めている。「燃糸文」という用語に関しては、附加条との境界に不分明な部分が多いが、本書では下村克彦氏の用語法（下村1981）に従った。燃糸文の大半は、2本の原体を軸縄に並列して絡げたものによって占められており、この場合、2本の原体に燃の差は認められない。また、1本の縄を絡げるものもあるが（171、13、194、196、210）少數である。これらの多くは、当然ながら、軸縄の圧痕をとどめることはないが、まれに軸縄が浅く表出されることもある。これらの燃糸文の走向を見ると、斜位に交差する場合が多いが、何らかの文様を構成したのかどうかはよく分らない。

第3類（243～244）。燃の異った単節縄文による羽状縄文の土器であるが、さらに半截竹管内側による平行線をもつものを本類とした。2個体分12点（0.9%）の出土があった。243では、口縁直下及び脣部の屈曲部に一条ずつの平行線が加えられている。

第4類（211～242）。半截竹管を多用する沈線文、刺突文の土器で、471点（37%）を占め、本群中では最も目立った存在である。基本的には3種に分類可能であろう。（1）半截竹管内側による波状沈線や平行沈線を表出するもので、とくに前者が著しい（211、212～234）。235、236は3本1単位の細い櫛状、あるいは棒を束ねたようなものを曳いて文様を構成しているが、一応本種に含めておく。（2）やはり半截竹管や3本1単位の櫛歯状工具が用いられているが、（1）のように横位の単純な施文はとらず、平行線と波状文とを組み合せた文様が認められるもの（237～239）。238では第3類にあったように、頸部のくびれ部に短沈線による区画があり、文様帶が上下に画されているよ



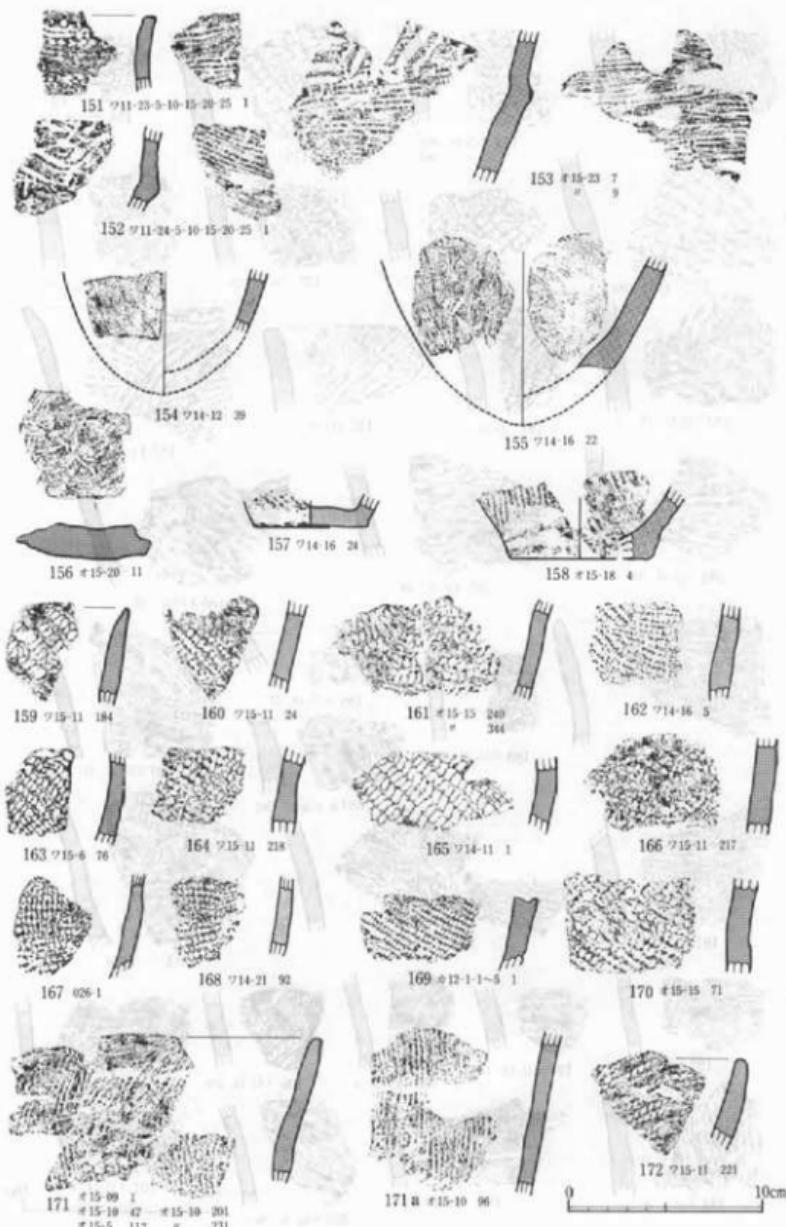
第76図 類羽土器の分布状況 (3)



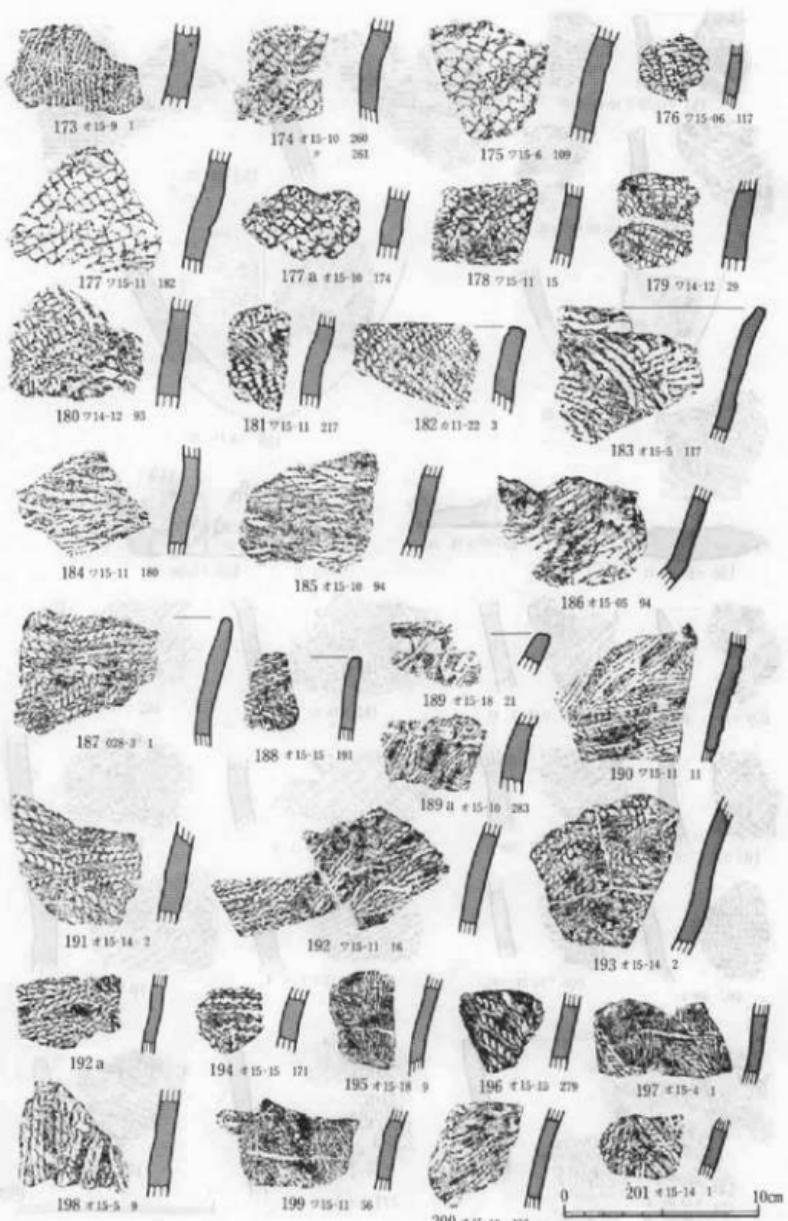
- 繩文
- 捻糸文
- 繩文+半截竹管文
- 沈縫文・刺突文
- 带齒条線文
- 貝紋背圧痕
- 無文・底部

0 20m

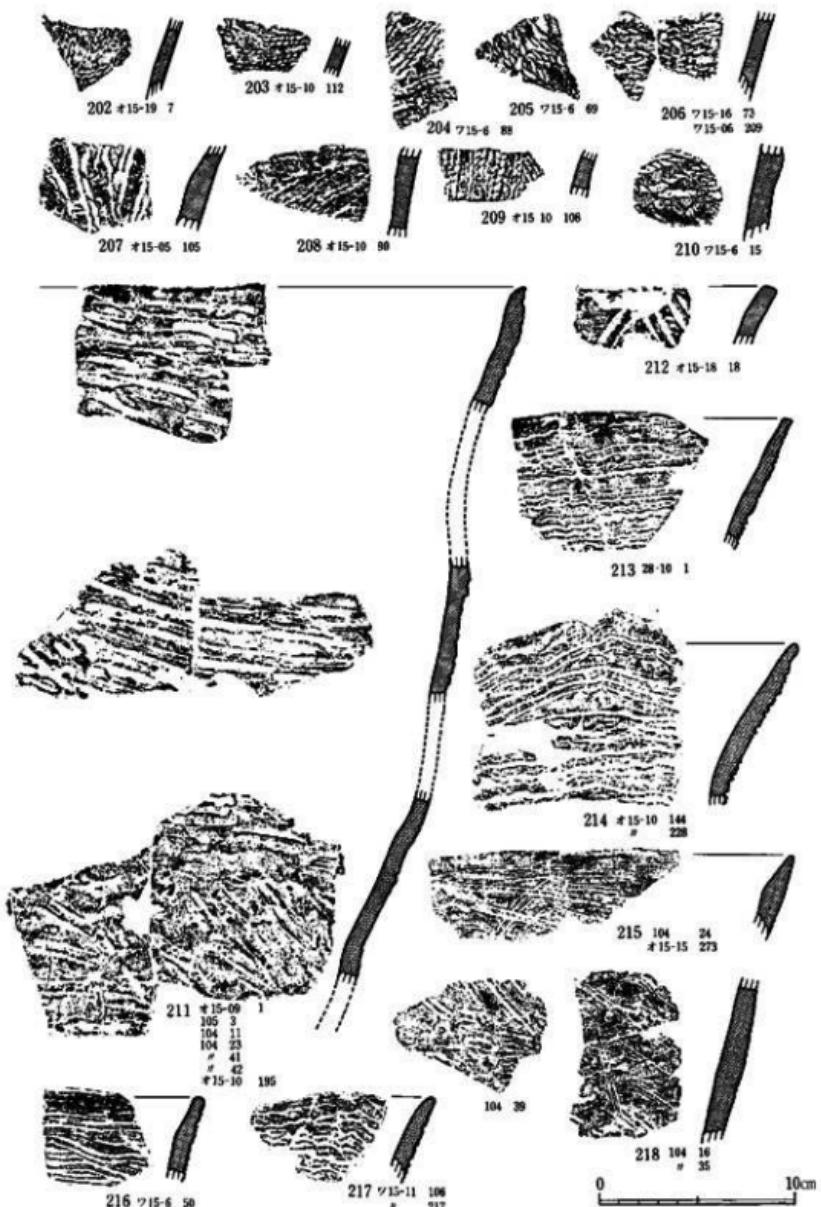
第77図 第IV群土器の種別分布状況



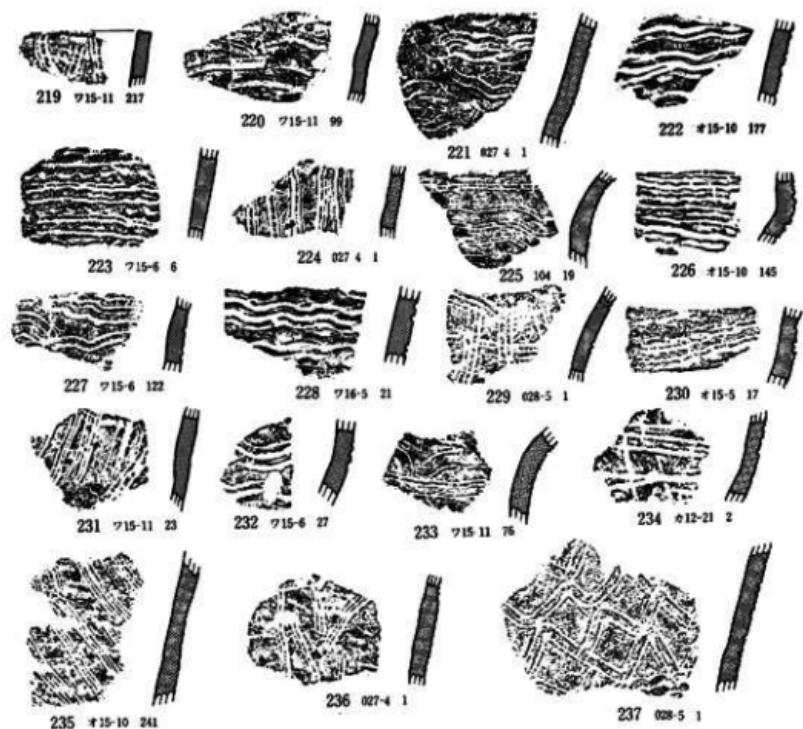
第78図 繩文土器拓影図 (10)



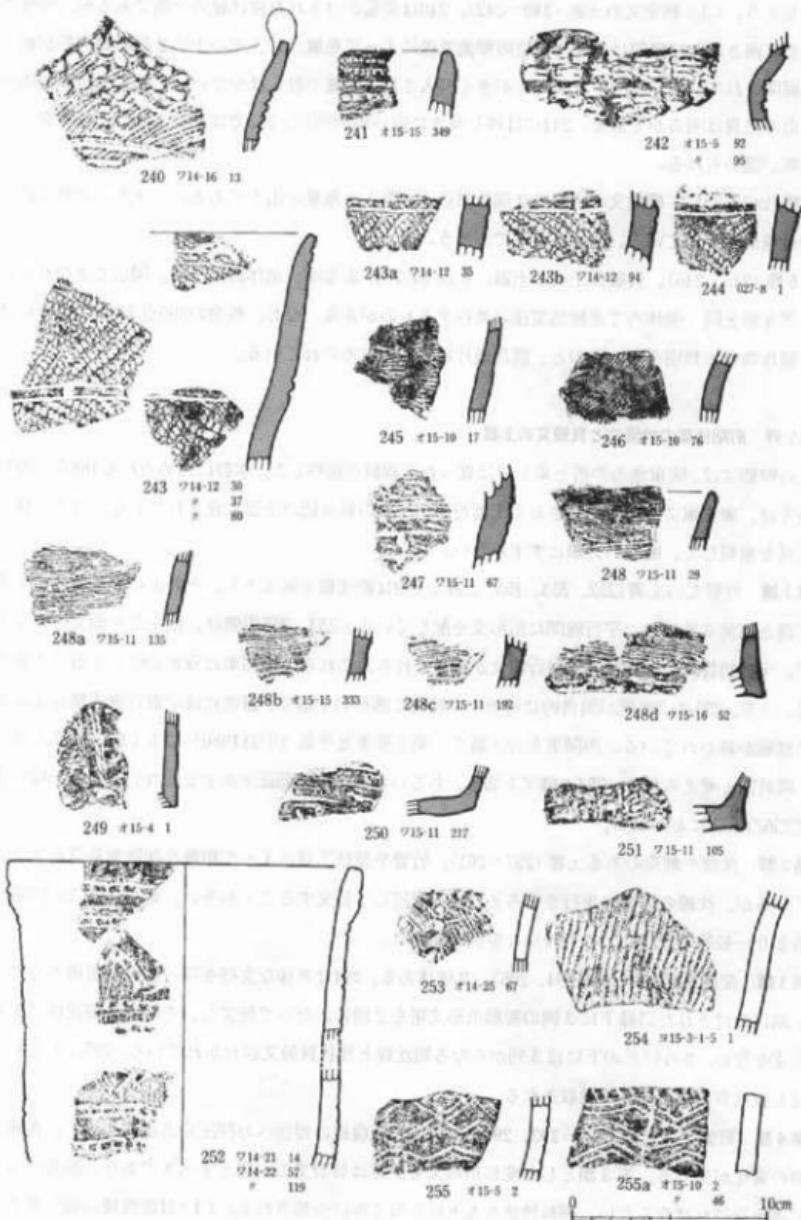
第79図 繩文土器拓影図-1B



第80図 織文土器拓影図 02



第81図 繩文土器拓影図 (3)



第82図 繩文土器拓影図 04

うに見える。(3) 刺突文の土器(240~242)。240は突起の付された波状縁の土器であるが、竹管によって区画された口縁部は4条1単位の櫛歯条線によって充填され、その上に2列の刺突列が縦、横に展開されている。胎土中に雲母片が多く混入され、纖維の混入は少ない。一見して他の土器との出自の差異は明らかである。241には押し曳きに近い刺突列が、242では叉状工具による刺突文列の重疊が認められる。

第5類(247~251)。櫛歯文の土器で2個体21点(1.7%)と微量の出土である。いずれも波状に近い櫛歯条線が横走している。櫛歯は4本であろう。

第6類(245、246)。貝殻背压痕の土器。8点(0.7%)あるが、個体数は不明。図示できなかったが、第4類と同一個体内で異種施文法の共存するものがある。なお、残余の395点(31%)については、細片のため類別不明のものと、底部破片によって占められている。

第V群 前期後葉の竹管文と貝殻文の土器

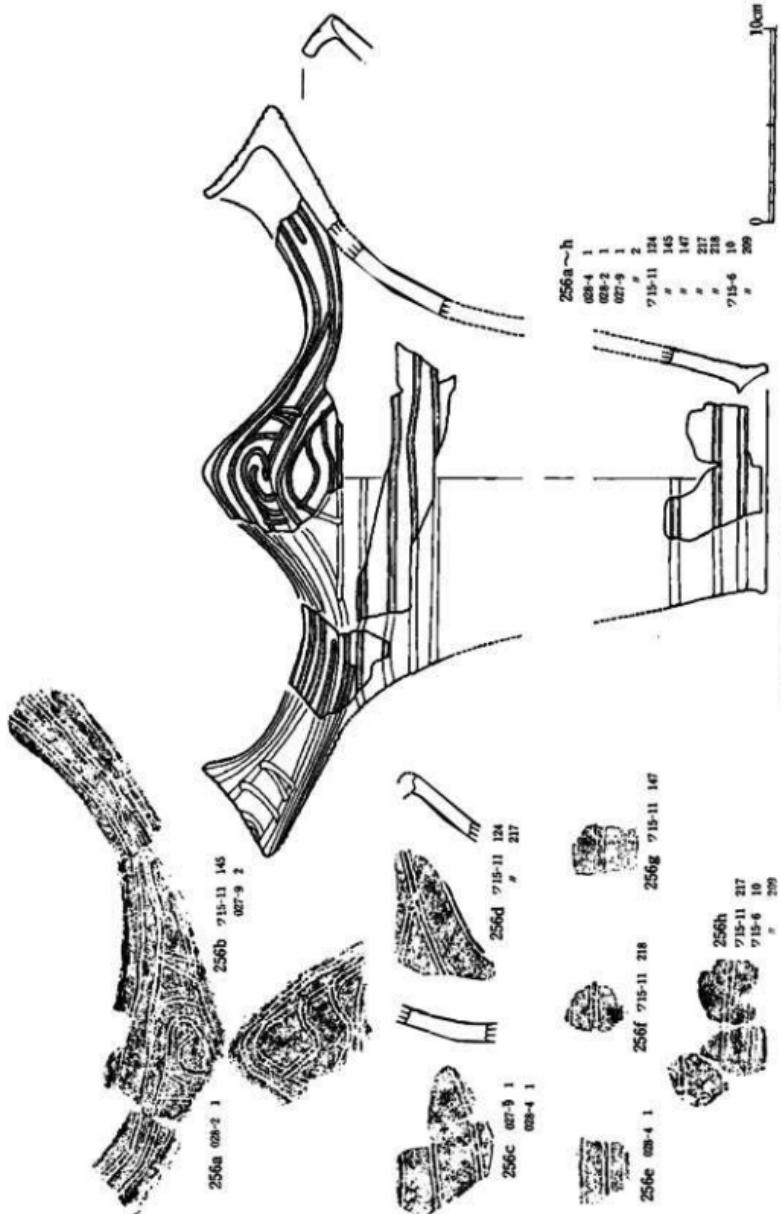
この時期には、関東地方の西と東とでは異った土器群が推移した。本群に含められる488点の遺物の多くは、東関東に分布の中心をおく土器だが、少数の異系統の土器も含まれている。以下文様と施文具を重視して、細かい分類にすすみたい。

第1類 竹管文の土器(252、253、255、256)。252は細沈線を地文とし、その上に半截竹管による平行線と鋸歯文を描き、平行線間に爪形文を配している。253、255両例は、燃糸文を地文とする土器で、半截竹管による鋸歯文、斜行線文が認められる。これらは東関東に分布の中心をおく土器である。一方、256は口縁部が鋭角的に屈折する特異な器形の土器で、器面には半截竹管内側による直線や曲線が描かれている。西関東系の土器で、埼玉県東光寺裏(中島1980)によく似た類品が知られ、同時期と考えられる。254の縄文土器も、あるいは本類の胸部破片かもしれないが、その場合は当然256の系統におかれる。

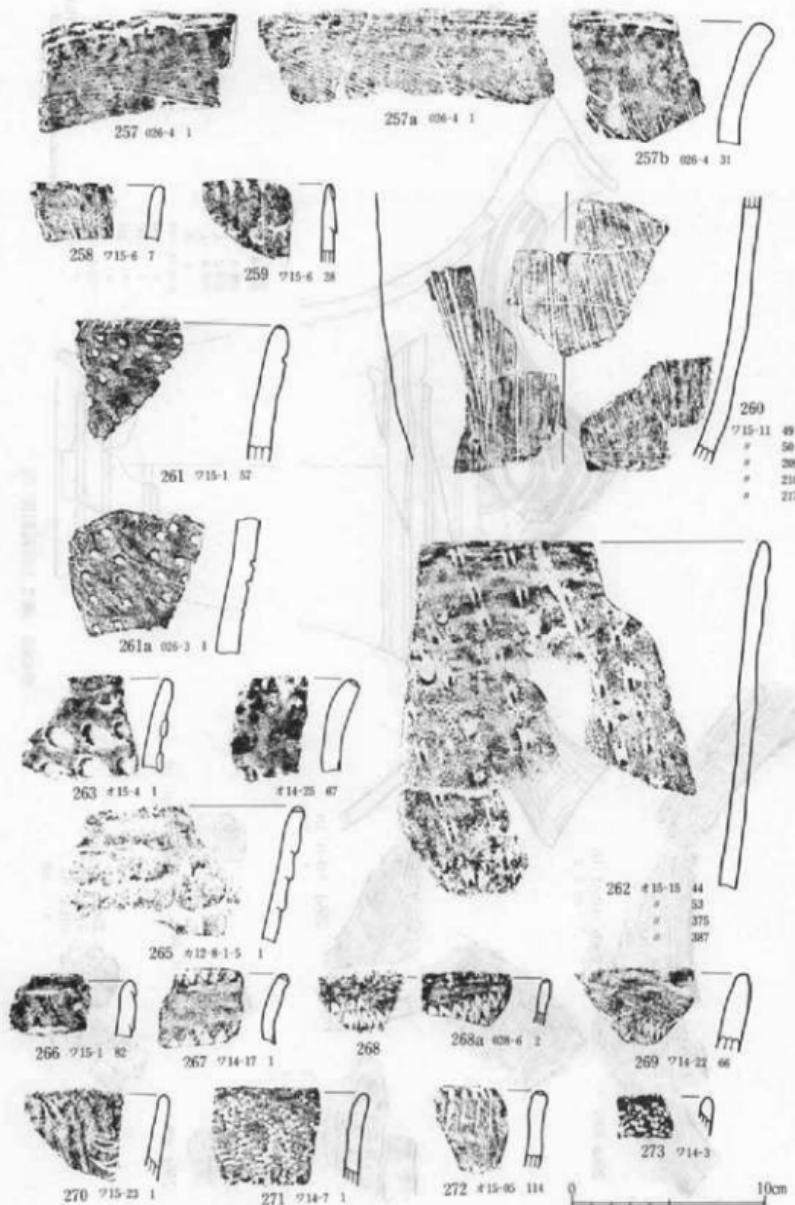
第2類 沈線や刺突のある土器(257~261)。竹管や箒状工具によって粗雑な沈線や刺突が加えられているが、沈線の場合、走行をそろえ、かつ密接して施文することが多い。刺突文はこの段階ではあまり一般的ではなく、やや特殊な事例に属そう。

第3類 変形爪形文の土器(294、295)。2個体ある。294は多様な文様を同一器面に重層させている。刻目の付された口縁下に2例の変形爪形文帯を2段にわたって施文し、その中は細沈線による菱形文を埋め、さらにその下には3列からなる短沈線と波状貝殻文がおかれている。295にも変形爪形文と波状貝殻文の複合が看取される。

第4類 貝殻文の土器(267~293、296~307)。貝殻腹縁の器面への押圧の方法によって、各種の文様の変化が生じる。第3類とした変形爪形文も、実は貝殻文の一種とすべきであり、厳密には本類に含めなければならない。押捺技法をもとにいつくかに分類される。(1)貝殻腹縁の振り曳きによる波状貝殻文の土器(267~273、275~293、296)。最も出土量が多かった。器形の判明する2例(275、276)をみると、器形は直線状に外反する平縁の深鉢形となる。口縁部は268~273では丸味



第83圖 繪文土器拓影圖 (15)



第84図 繩文土器拓影図 (10)

を帯び指頭状となるが、275、276では折り返し口縁となり、下端に刻目の付される場合がある。(2) 所謂三角文の土器(297~303)。三角文は通常2列1単位で、器面を水平にめぐるが、鋸歯状、あるいは斜行するかと思われるもの(301、302)もある。(3)貝殻複縁を間隔をおきながら、器面にはほぼ垂直に刺突するもの(304~305)。全体の構成は不明であるが、数段にわたって水平に施文されている。(4) 所謂磨消貝殻文の土器(306、307)。僅少な出土である。割線内に波状貝殻文が充填されているが、構成の詳細は不明である。

第5類 条線文の土器 (274、308~311)。第2類の沈線文が、不整な集合沈線であったとすれば、本類は櫛齒条線、あるいはそれを模倣したかと見られる疑似櫛齒条線の施文された土器と定義づけられる。309~311などは櫛齒状工具による櫛齒条線文であり、274、308の両例は細沈線による疑似櫛齒条線文である。

底部(312~314)。底部は比較的肉薄で、胴部とだいたい同一の器厚を示す。ほぼ直角に立ち上るもの(312、314)と、底面が突出し外に開くもの(313)がある。313、314では底部にまで施文が及んでいる。313は4類(1)の、314は同類(3)の破片である。

第VI群 前期末葉の縄文土器

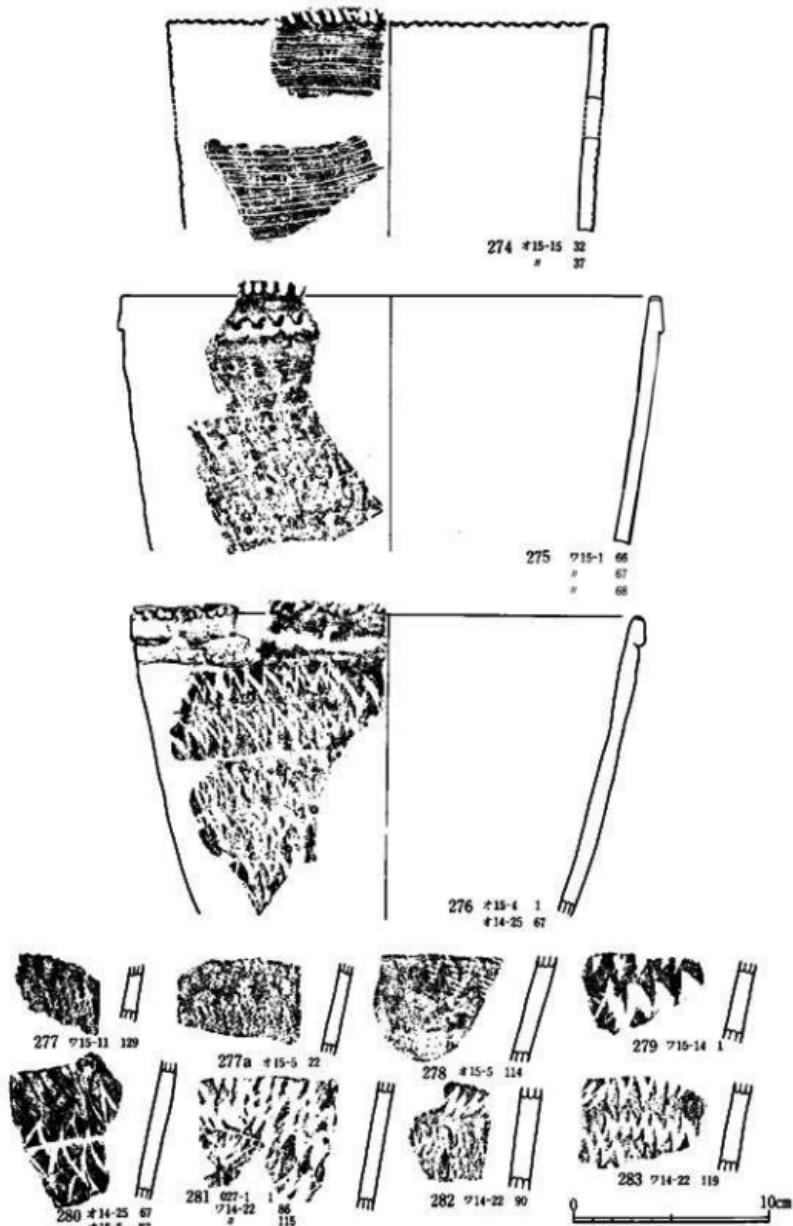
結節縄文の盛行する土器群であるが、出土量は僅かで、大体のものを図示した(315~325)。口縁部破片が2点あるが、1例は口端に刻目のある直立するもので、口縁下に綾絡文がある(315)。もう一例では、折り返し口縁となり、口端より斜行縄文が施されている。他は全て胴部の細片。縄文原体の圧痕のあるものは含まれていない。羽状縄文となる例もない。原体の回転方向を見ると、横位の場合が一般的であるが、斜位(316)、縦位(323、325)もあり、一定しない。前期末葉という位置づけをしたが、あるいは中期初頭に下降するものもあるかもしれない。いずれにせよ、帰属のあいまいな一群といえる。

第VII群 中期初頭の土器

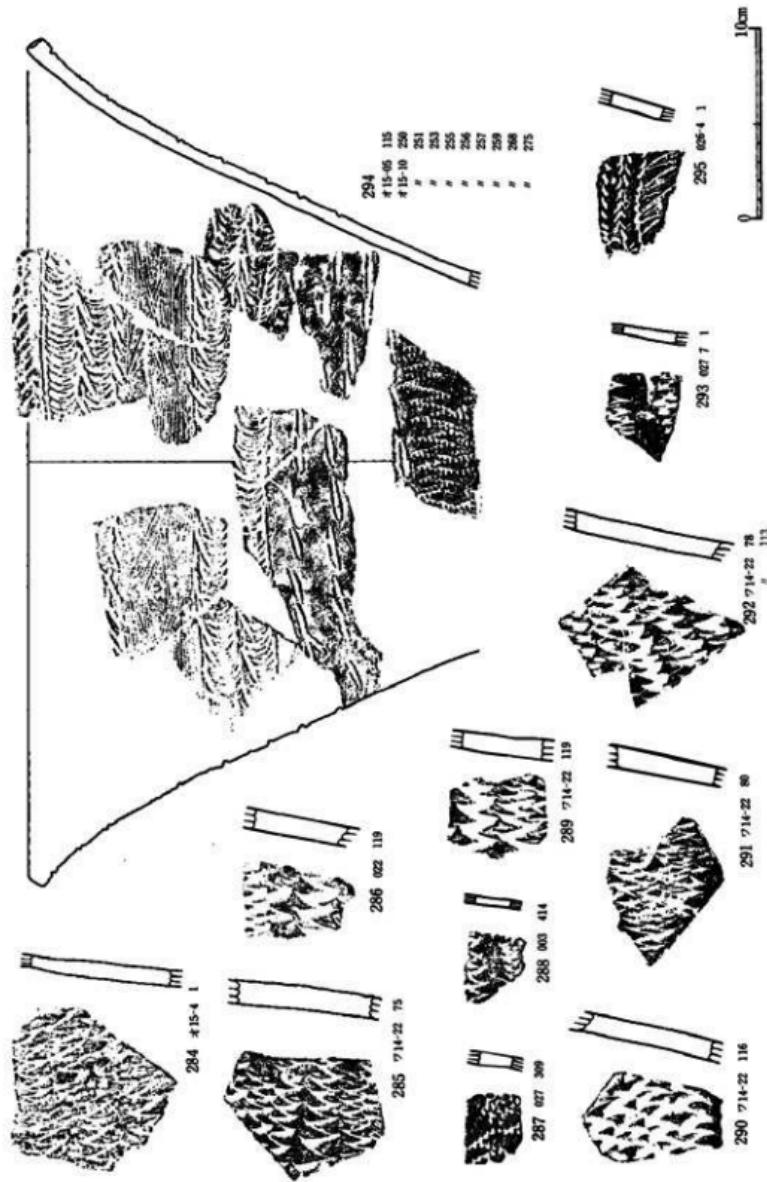
総数156点と少數であるが、注目すべき土器群であろう。3類に分けられる。

第1類 1個体が検出された(326)。所謂集合沈線文系統の土器としては古い段階であり、本県での検出例は極めて少ない。細片であるため文様構成については知り得ないが、口縁部には半截竹管による刻目が、胴部には印刻的手法を加えた格子目文が加えられている。第2類以下とは分布を異にしていることを付言しておく。

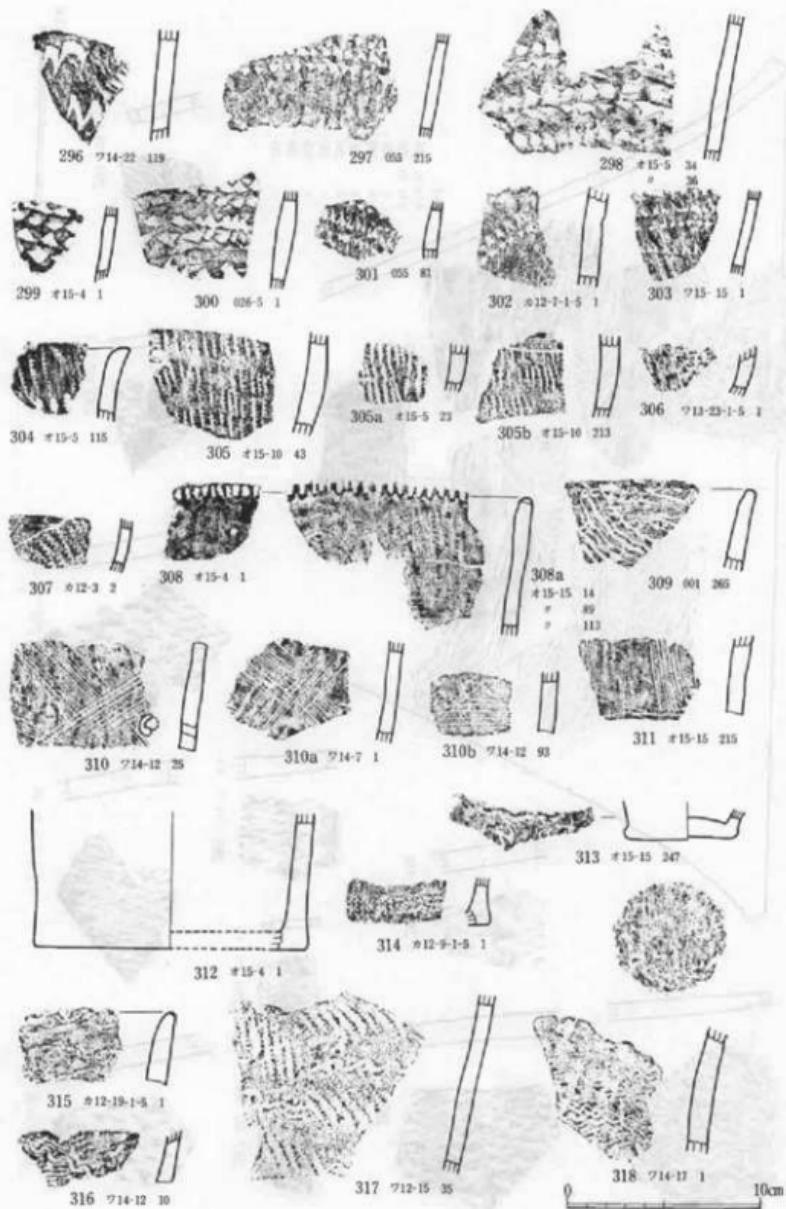
第2類 縄文を地文に沈線を主体とする文様のあるもので、2個体ある(327、328)が、破片は近接して出土している。327は破片をもとに器形復元を行った。波頂部に突起を有する波状縁の土器であるが、外反する口縁部と強く屈折する頸部によって特徴的な器形となっている。施文は、まず全面に縄文を付し、次いで口縁部と頸部屈折点とに刺突に近い刻目のある平行沈線を引くことによって、やや幅のある口縁部文様帯を形成する。この区画内はクランク状、あるいは弧線状の2本1



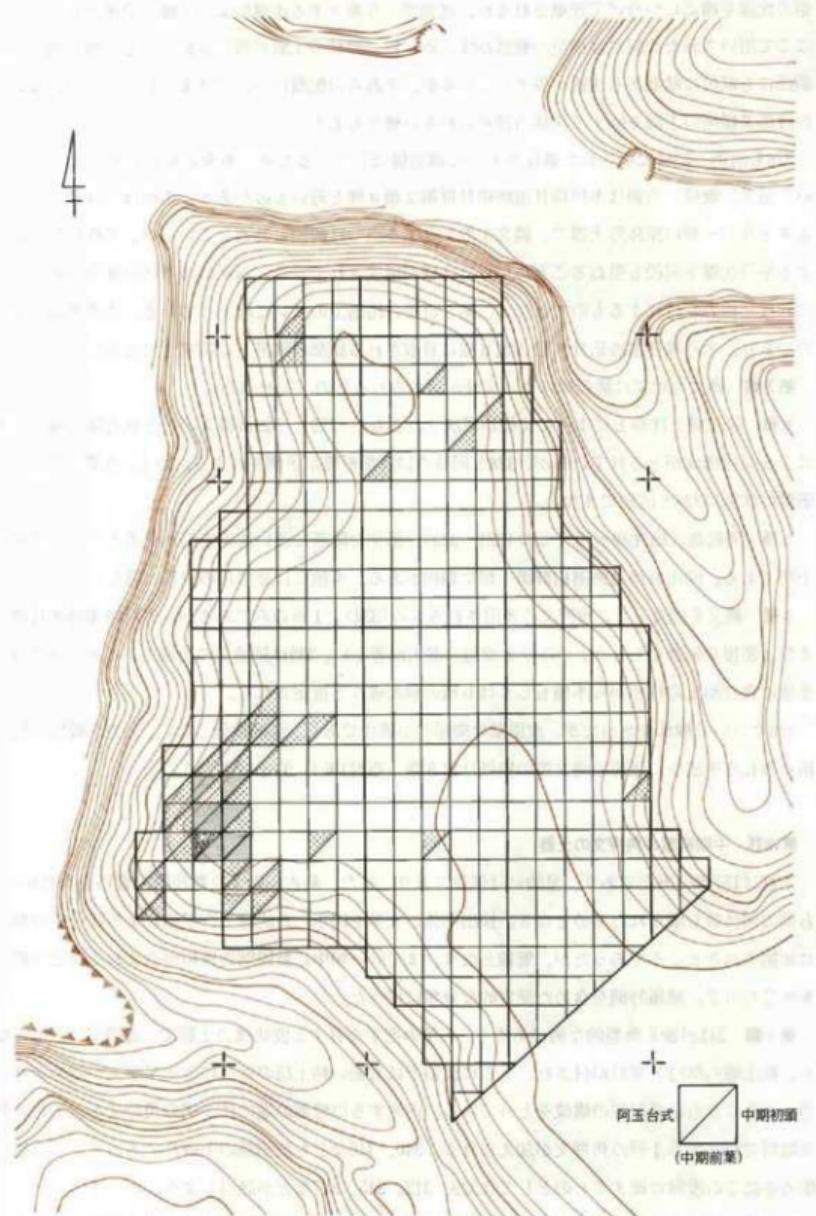
第85図 繩文土器拓影図 (II)



第86图 繁文土器拓影图 (6)



第87図 繩文土器拓影図 09



第88図 類別土器の分布状況(4)

組の沈線を横ににつなげて充填されるが、波頂部より垂下する沈線によって縦に分帶されている。ここで用いられた沈線には横位の截痕が伴うが、鋭い鉗状の工具が用いられている。屈折部以下の胸部にも縦位に截痕ある沈線が垂下しているが、それらの配置についてはよくわからない。なお、口縁部文様帶の下限を画する沈線の認められない破片もある。

328も前例と同様に限られた破片をもとに器形復元しているため、多少の誤りがあるかもしれない。胎土、焼成、色調は木戸場II遺跡第II群第2類a種と近いものがある。本例は口縁部の内彎するキャリバー形の深鉢形土器で、繩文を地文とする点では前例と共通しているが、半截竹管外側による平行沈線を何段も重ねることによって文様が構成されている。頸部に隆帯状の部分があるが、これは隆線の貼付によるものではなく、粘土帶接合段階でのズレに起因している。当然意識的なものであり、木戸場II遺跡第II群第2類b種に看取される頸部の隆帯との関連性に注意したい。

第3類 繩文を地文に隆起線による文様が認められるもの（329～335）。

a種 隆起線と沈線とによって文様が構成されるもの（329）。329は繩文の付された隆起線と沈線による文様構成がとられているが、328と同様の口縁部形態が予測されよう。胎土、色調、焼成及び研磨の状態は328と区別できない。

b種 隆起線に細沈線が沿うもの（321～333）。低平な隆帯に浅い沈線を沿わせるもので、詳細は不明である。向山谷津遺跡第III群第1類に類例がある。本種には金雲母の混入が著しい。

c種 繩文を地文とし、角押文の多用されるもの（334）。1点のみであるが、木戸場遺跡第II群第3類と密接な関連をもとう。やはり金雲母の混入が著しい。335は綾格文の土器であるが、金雲母を多量に含む胎土の様相から本種もしくはb種の胸部破片と推定される。

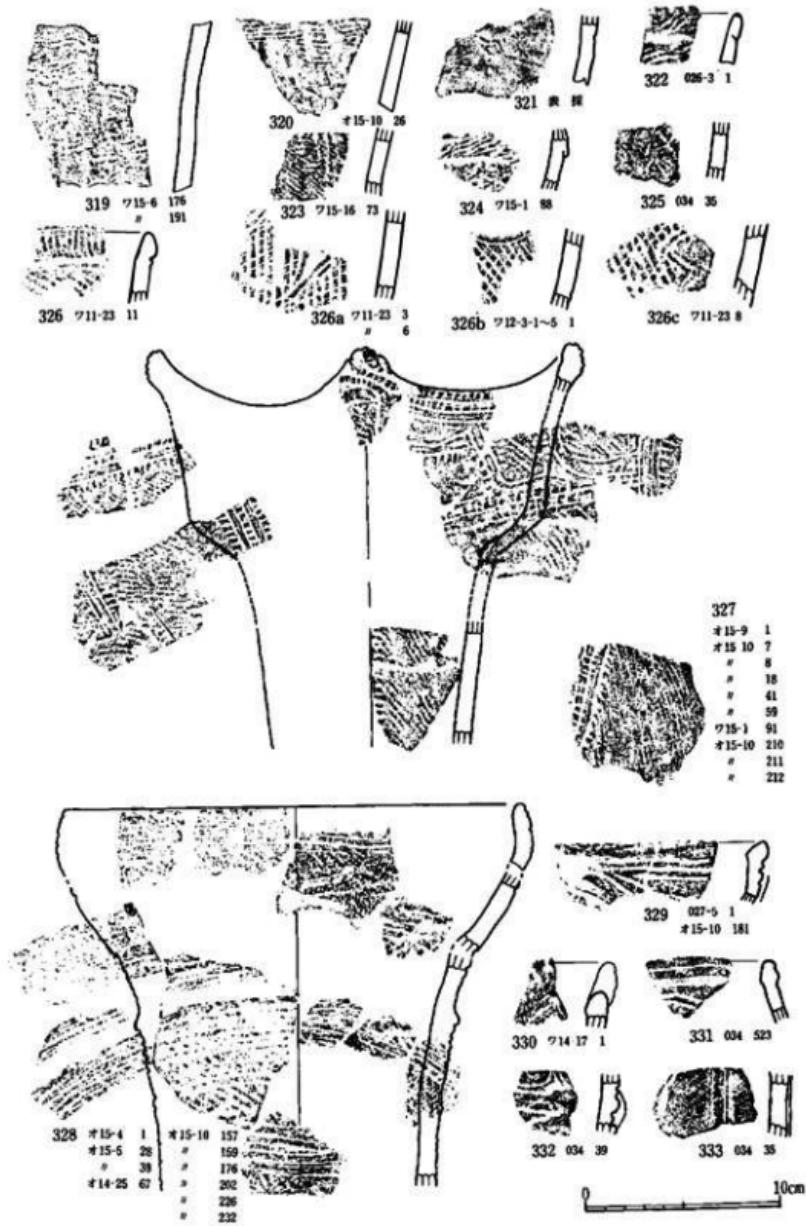
330について触れなかったが、波頂部の突起の小破片であり、詳細は分らない。ただ、縦位に粘土紐を束ねる手法や口縁部の繩文帶の特徴は雷5類（西村1954）的といえよう。

第八群 中期前葉の角押文の土器

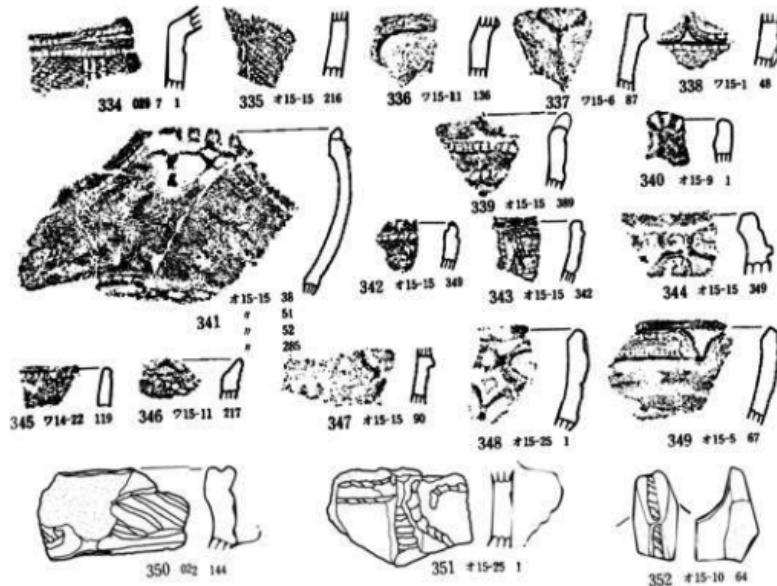
本群は157点の出土であり、量的には僅少であり、また、最古段階より数段階の資料を含むから、各期の個体数も限られたものとなる。検出個体の大半を図示した。施文の手法による統一的分類法に依拠すべきところであったが、繁雑となり、また同一類中に数段階の資料が含まれるなど不都合を生じたので、帰属時期を含めた便宜的な分類に従った。

第1類 341が最も典型的な例であろう。大型の把手を有する波状縁の土器で、波頂部は平坦となり、粘土紐の貼付と刻目が付され、さらに波頂下にも細い粘土紐の貼付によるY字文が認められるが、ともに左右が非対称の構成をとっている。内彎する口縁部の端には1例の角押文が、また頸部の隆帯に沿っても1例の角押文が加えられる。340、346なども波頂部の小破片であろう。この他に明らかにこの段階に属するものとしては329、312、345、347などが該当しよう。

第2類 357と361が代表的な例である。外反する口縁部にはX字状区画が付され、単列の角押文がこれに沿っている。348～352、356、358、359、362、363、365、367もこれに含まれよう。個体数は

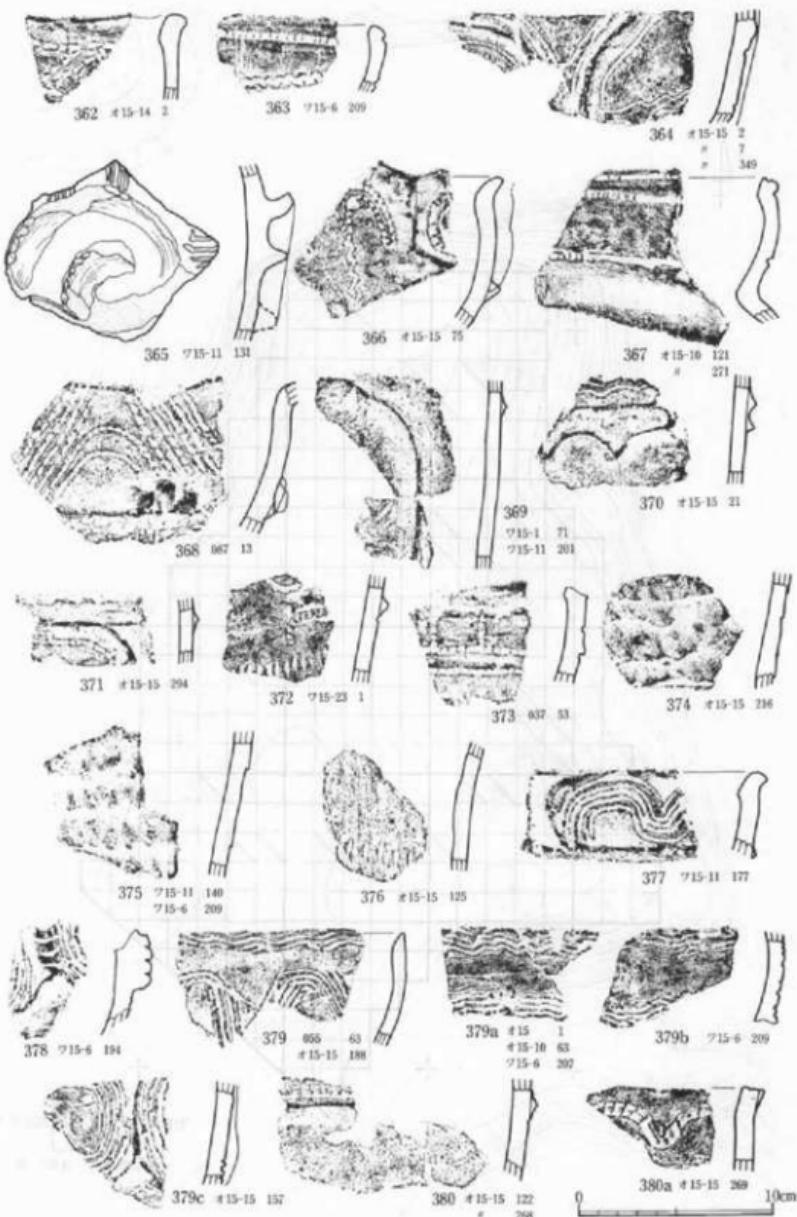


第89図 繪文土器拓影図 (2)

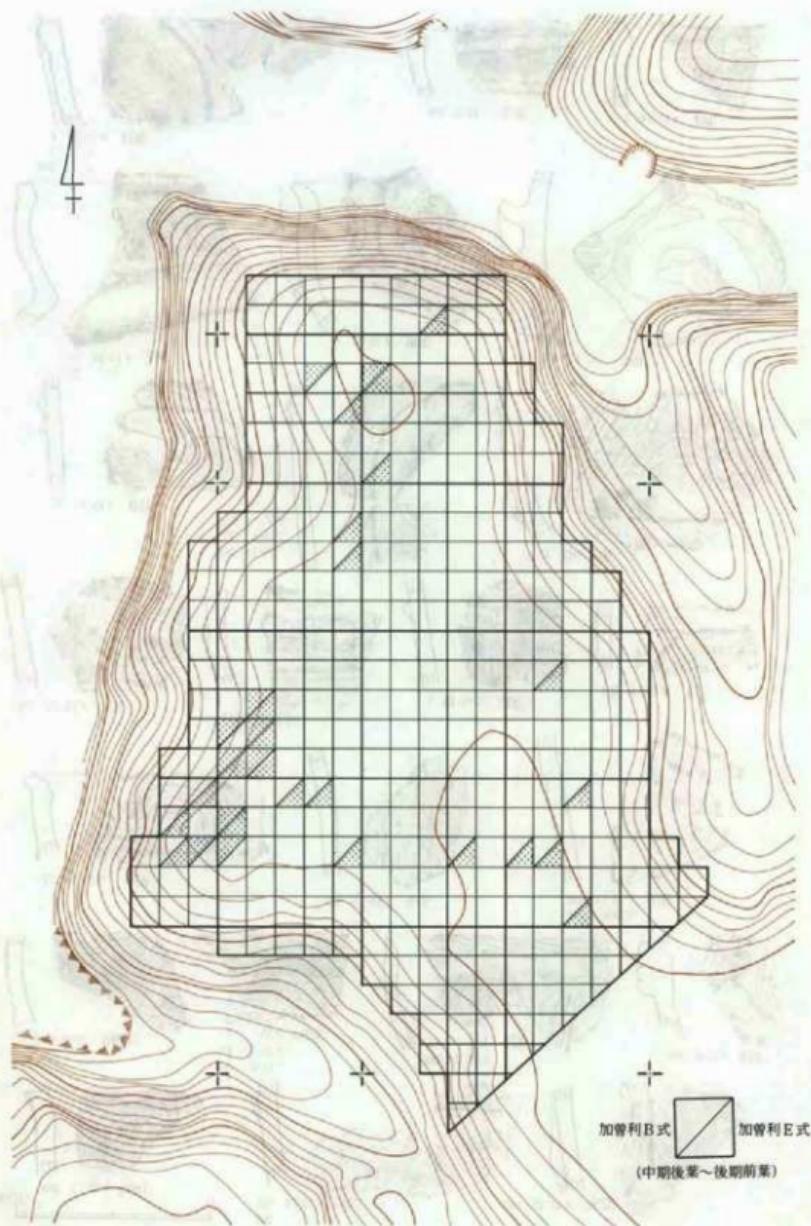


0 10cm

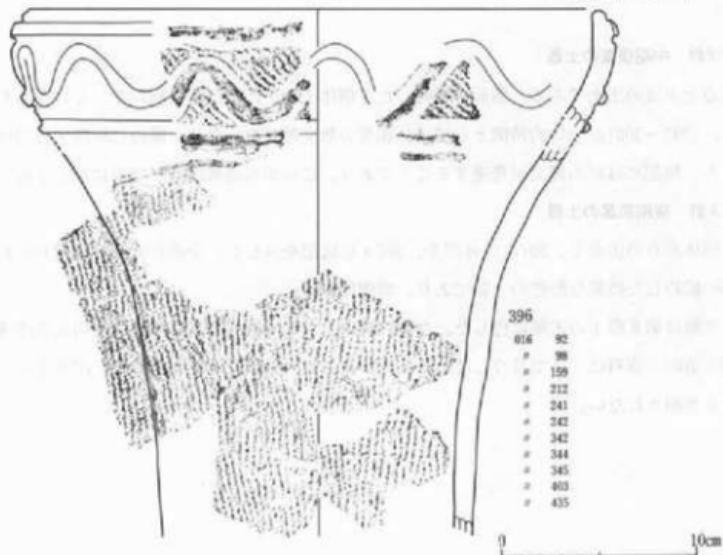
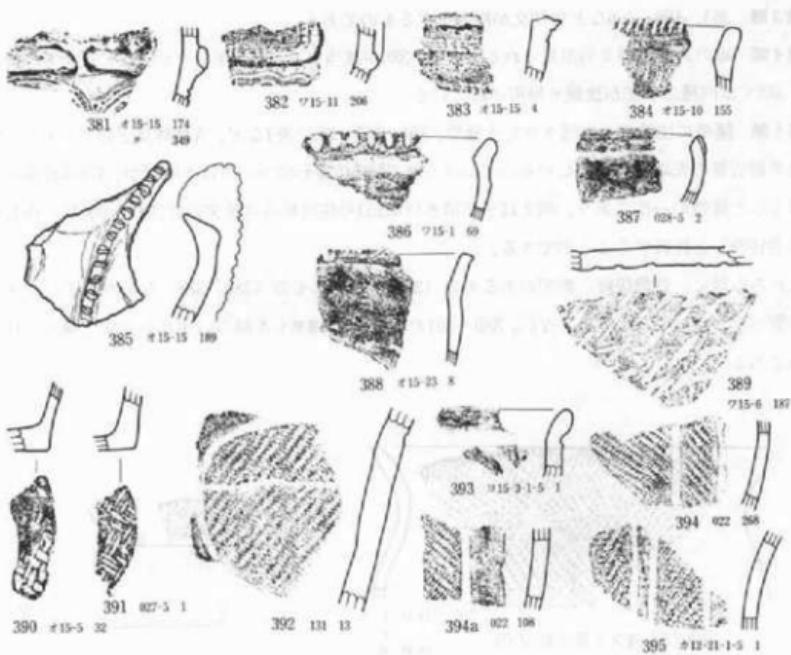
第90図 繩文土器拓影図 20



第91図 繩文土器拓影図 (2)



第92図 類別土器の分布状況(5)



第93図 繩文土器拓影図(2)

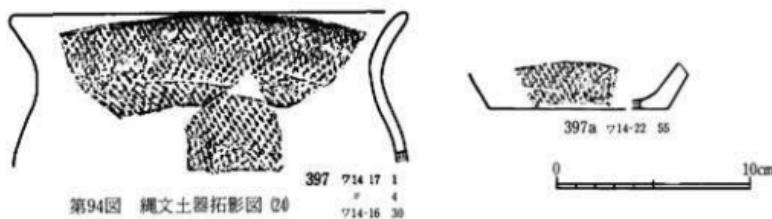
多いが、細片が多く文様構成、器形等不明な部分が多い。

第3類 353、360、366など角押文が複列化するものである。

第4類 幅のある角押文列が見られるもので、380が該当する。所謂キャタピラ文に近いものである。382では同種の手法が沈線と併用されている。

第5類 隆帯に沈線文を付隨させた土器で、364、377～379、381など、5個体ほど認められた。沈線は半截竹管の先端を叉状にしたものでつけられている。器形については不明だが、378は波頂部から垂下した隆帯の一部であり、例えば子和清水貝塚153号住居址の条線文の付された例(松戸市教育委員会1978)と比較することができる。

これら他に、貝殻腹縁の刺突のあるもの(384)、無文のもの(386、388)などがあるが、詳しい位置づけについてはよく分らない。389～391の網代痕のある底部も本群のいずれかの類に編入されるものである。



第IX群 中期後葉の土器

82点と少量の出土である。器形の判明した1個体(396)の他は全て細片で、そのうち若干を図示した。(392～395)。全体的特徴としては、頸部の無文帯がなくなり、横位に展開する口縁部文様帯をもち、胸部には磨消繩文が発達することであり、これから帰属段階が容易に判定される。

第X群 後期前葉の土器

1個体30点の出土で、397に口縁部を、397aに底部を示した。全面斜行繩文におおわれた土器で、頸部の縮約した特異な形態の土器であり、類例は少い。

(文献は第6章1の末尾に付した。なお佐倉第三工業団地内の木戸場遺跡・向山谷津遺跡など、未報告遺跡の資料について言及している部分があるが、分類記号等も含めて、次年度刊行予定の報告書を参照されたい。)

第7表 縄文土器観察表

番号	胎 土	焼 成	色 調	せ い け い	施 文
1	微細砂 0	0	明 褐 色	内面ナデ口縁部無文帯、軽い研磨	R L
2	細砂粒 0	-	赤～暗褐色	内面軽い研磨痕あり	R L
3	微細砂 +	-	赤 褐 色	-	R L
4	細砂粒 + (長石)	+	茶 褐 色	内面研磨痕あり	R
5	細砂粒 +	+	赤 褐 色	-	R L
6	細砂粒 +	+	黒 褐 色	口唇部研磨、内面研磨痕あり	R L
7	微細砂 0	+	明 褐 色	口唇部研磨内面ナデ	R L
8	細砂粒 -	+	明 黄 色	口唇部、口縁内面研磨	R L
9	細砂粒 +	+	灰 褐 色	口唇部～内面研磨	R L
10	微細砂 +	+	明 黄 色	口唇部内面の一部研磨痕あり、器面アレ顕著	R L
11	細砂粒 + (石英)	+	灰 褐 色	内面研磨痕あり	R L
12	細砂粒 0	0	黄 褐 色	口唇部研磨	R L
13	細砂粒 0	-	赤 褐 色	口唇部、口縁部内面研磨痕あり	R L
14	細砂粒 +	0	黄～黒灰色	口縁部、胴部内外面研磨→縄文	R
15	細砂粒 0	+	明 黄 色	口縁部、胴部内外面研磨→縄文	R
16	細砂粒 0	+	茶 褐 色	口唇部、口縁内側研磨以下ナデ	Y-R
17	細砂粒 +、スコリア 0	-	灰 褐 色	-	Y-R
18	細砂粒 -	+	明 黄 色	口唇部、口縁部内面研磨	Y-R
19	細砂粒 +	+	明 褐 色	口唇部研磨	Y-R
20	細砂粒 -	+	黄～黒褐色	口唇部、内面研磨	Y-R
21	細砂粒 +	+	黄 褐 色	-	Y-R
22	細砂粒 0	-	明 褐 色	-	Y-R
23	細砂粒 0	0	明 褐 色	-	Y-R
24	細砂粒 0	0	暗 褐 色	-	Y-R
25	細砂粒 +	+	暗 灰 色	口唇部研磨痕あり外面ナデ	Y-R
26	細砂粒 0	0	黄 褐 色	口唇部研磨、外面部的に研磨痕	Y-R
27	細砂粒 0	-	明 褐 色	口唇部内面研磨	Y-R
28	細砂粒 0	+	黄褐色 黒底	口唇部～外面上入念な研磨	Y-R
29	細砂粒 0	0	茶 褐 色	内面のみナデ	Y-R
30	細砂粒 0	+	灰 褐 色	口唇部研磨、外面部に弱い研磨内面ナデ	なし
31	細砂粒 0	+	暗 茶 褐 色	内面研磨痕	L R
32	細砂粒 0	0	赤 褐 色	-	R L
33	細砂粒 0	-	赤 褐 色	-	R L
34	細砂粒 0	+	明 黄 褐 色	内面に弱い研磨痕	L R
35	細砂粒 +	+	明 黄 褐 色	外面上に弱い研磨痕	R L
36	細砂粒 +	+	黄～赤褐色	-	R L

番号	胎 土	焼成	色 調	せ い け い	施 文
37	微細砂 0	+	明茶褐色	内面ヨコ研磨外面も研磨	R L
38	微細砂 0	+	明茶褐色	内外面研磨痕あり	R
39	細砂粒 0	+	明黄褐色	—	Y-R
40	細砂粒 0	+	茶褐色	内面研磨	Y-R
41	細砂粒 0	0	茶褐色	—	Y-R
42	微細砂 +	0	赤褐色	外面研磨痕あり	Y-R
43	微細砂 +	+	茶褐色	外面研磨→擦糸文	Y-R
44	細砂粒 +	+	茶褐色	—	Y-R
45	細砂粒 +	+	赤褐色	—	Y-R
46	細砂粒 +	+	茶褐色	外面研磨→擦糸文	Y-R
47	細砂粒 0	+	暗灰色	外面研磨痕	Y-R
48	微細砂 +	0	明茶褐色	外面研磨→擦糸文	Y-R
49	細砂粒 +	+	暗~赤褐色	外面研磨痕あり	Y-R
50	細砂粒 +	+	赤褐色	内外面研磨	細沈線
51	細砂粒 0	+	赤褐色	内面入念な研磨	細沈線
52	細砂粒 0	+	明褐色	内外面研磨	細沈線
53	細砂粒 0	0	黒色	—	細沈線
54	細砂粒 0	+	明褐色	内外面研磨	細沈線・太沈線
55	細砂粒 0	+	明褐色	—	細沈線
56	細砂粒 +	+	明褐色	内面研磨入念、外面部分的に研磨痕あり	細沈線、刺突
57	細砂粒 0	+	赤褐色	内外面研磨	細沈線、D字形刺突
58	細砂粒 0	+	茶褐色	ナデ	細沈線
59	細砂粒 0	+	茶褐色	外面研磨顕著、内面も研磨	太沈線
60	細砂粒 +	+	明~茶褐色	内面研磨、外面ナデ	細沈線、太沈線、D字形刺突
61	細砂粒 0、細砂粒 0	+	暗褐色	内外面研磨	細沈線、O字形刺突
62	細砂粒 +	+	赤褐色	外面継位のケズリ	なし
63	細砂粒 +	+	暗褐色	—	なし
64	細砂粒 -	+	赤褐色	外面継位のケズリのち研磨痕	なし
65	細砂粒 +	0	黄~茶褐色	—	細沈線
66	細砂粒 0	0	茶褐色	外面継位のケズリのち部分的研磨	なし
67	細砂粒 0	二次 焼成	灰褐色	外面継位のケズリ、少量のスス付着	なし
68	微細砂 -	+	明褐色	外面継位のケズリ→研磨	なし
69	微細砂 +	二次 焼成	赤褐色	外面研磨痕あり	なし
70	細砂粒、細砂粒 +	+	灰~明褐色	外面のヘラ研磨	細沈線
71	細砂粒 0	+	茶褐色	外面ヘラ研磨	なし
72	微細砂 +、繊維 -	-	茶褐色	内面ヨコ方向の擦痕	細陰線、沈線
73	微細砂 0、繊維 -	+	暗~赤褐色	内外面ヨコ方向の貝殻条痕	口唇部貝殻腹縁刺突
74	微細砂 -、繊維 -	0	明黄色	外面タテ方向の擦痕	口唇部貝殻腹縁刺突

拓印番号	胎 土	焼 成	色 調	せ い け い	施 文
75	微細砂 0	+	赤～暗褐色	内面ナメ方向の貝殻条痕、補修孔	細胞線、刺目的入った円形竹管の 刺突
76	微細砂 0	+	褐 色	—	又状竹管の刺突列、口唇部刺目
77	細砂粒 +	+	黑 褐 色	外外面に部分的に擦痕	又状竹管の短沈線
78	微細砂 +	0	赤 褐 色	外外面貝殻条痕	オーラ・アイ突瘤
79	微細砂 0	0	明 褐 色	外外面貝殻条痕	オーラ・アイ突瘤、口唇部刺目
80	微細砂 0、鐵錐 0	0	明 黄 色	外外面横走貝殻条痕	オーラ・アイ突瘤、口唇部刺目
81	微細砂 0、鐵錐	0	明 褐 色	外表面斜位の擦痕	なし
82	微細砂 +	+	暗 褐 色	口唇部上面へラ擦痕、内面ナデ	なし
83	細砂粒 0	+	暗～黒褐色	内面上部へラケズリ→ナデ	なし
84	微細砂 -、鐵錐 0	0	暗 褐 色	外外面ヨコ方向、ナメ方向の擦痕	なし
85	細砂粒 +	+	茶～暗褐色	口唇部にのみナデ痕	なし
86	微細砂 -	+	明 茶 褐 色	外外面擦痕	なし
87	微細砂 0、鐵錐 -	+	暗 褐 色	外外面擦痕	なし
88	細砂粒 +、鐵錐 -	+	暗褐色 黑茎	外外面擦痕	なし
89	細砂粒 +、鐵錐 -	+	明 茶 褐 色	外外面擦痕	なし
90	細砂粒 +、鐵錐 -	0	暗 褐 色	—	なし
91	細砂粒 0、鐵錐 0	-	黄～暗褐色	—	なし
92	微細砂 +、鐵錐 -	+	明 褐 色	外外面擦痕	なし
93	細砂粒 +、鐵錐 -	+	茶 褐 色	外外面擦痕、内面ヨコ方向ナデ	なし
94	微細砂 0、鐵錐 -	+	暗赤褐色	外外面擦痕	なし
95	微細砂 0、鐵錐 -	+	赤 褐 色	内外面擦痕	なし
96	微細砂 0、鐵錐 -	+	明 褐 色	口唇上面へラ擦痕、外下面下位にヨコ 方向の擦痕	なし
97	細砂粒 0、鐵錐 -	0	赤 褐 色	外外面斜位の擦痕	細沈線？
98	微細砂 0、鐵錐 -	+	赤 褐 色	外外面擦痕	細沈線
99	微細砂 0、鐵錐 -	+	赤 褐 色	外外面タテ方向の擦痕	なし
100	微細砂 0、鐵錐 -	+	赤 褐 色	外外面弱いナデ	なし
101	細砂粒 +、鐵錐 -	+	赤 褐 色	外外面弱いナデ	なし
102	微細砂 +、鐵錐 -	0	明 褐 色	外外面擦痕	なし
103	細砂粒 +、鐵錐 0	二次 焼成	赤 褐 色	外外面擦痕（わずかに認められる）	なし
104	微細砂 +、鐵錐 -	+	暗赤褐色	外外面擦痕	なし
105	微細砂 +、鐵錐 -	0	明 褐 色	外外面擦痕	なし
106	微細砂 +、鐵錐 -	0	明 茶 褐 色	外外面擦痕	なし
107	細砂粒 0、鐵錐 -	+	暗～赤褐色	外外面擦痕	なし（細沈線？）
108	微細砂 +、鐵錐 -	+	明 褐 色	外外面弱い擦痕	なし
109	細砂粒 0、鐵錐 -	+	明 茶 褐 色	外外面タテ方向の研磨	なし
110	微細砂 0、鐵錐 -	+	暗赤褐色	外外面ナデ、内外面擦痕	なし
111	微細砂 +、鐵錐 -	+	黑 褐 色	外外面タテ、内面ヨコ方向の擦痕	なし
112	微細砂 +、鐵錐 0	-	暗 褐 色	—	なし

番号	胎 土	焼 成	色 調	せ い け い	施 文
113	細砂粒+	繊維-	+	赤褐色	外表面擦痕
114	微細砂+	繊維0	-	赤褐色	-
115	微細砂+	繊維0	0	褐色	外表面ナデ、内面ヨコ方向の擦痕
116	微細砂0	繊維0	+	暗褐色	外表面タテ方向の研磨、内面ナデ
117	微細砂+	繊維0	-	赤褐色	-
118	微細砂+	繊維0	+	明茶褐色	外表面に斜位の擦痕
119	微細砂+	繊維-	0	赤褐色	外表面タテ、内面ヨコ方向の擦痕
120	細砂粒+	繊維0	+	黒褐色	内外面擦痕
121	細砂粒+	繊維-	+	明褐色	内外面擦痕
122	微細砂0	繊維-	+	赤褐色	外表面タテ方向の強い擦痕
123	微細砂+	繊維-	0	黄~暗褐色	内外面弱い擦痕
124	微細砂+	繊維-	+	明赤褐色	外表面ナデ、内面弱い擦痕
125	微細砂0	繊維0	+	黒褐色	外表面ナデ、内面弱い擦痕
126	微細砂0	繊維-	+	赤~黒褐色	内外面条痕(非目般条痕)
127	微細砂+	繊維-	+	明赤褐色	内外面貝殻条痕 口唇部貝殻頂部背面押圧
128	微細砂+	繊維-	0	明褐色	内面貝殻条痕
129	微細砂0	繊維-	+	暗赤褐色	内面貝殻条痕
130	微細砂0	繊維-	+	明褐色	内外面貝殻条痕
131	微細砂+	繊維-	+	赤褐色	内外面貝殻条痕
132	微細砂0	繊維-	0	黒褐色	内面貝殻条痕、外表面ナデ
133	微細砂0	繊維-	0	黒~赤褐色	外表面貝殻条痕、内面擦痕
134	微細砂0	繊維-	0	明褐色	内外面貝殻条痕
135	微細砂0	繊維-	0	茶褐色	内外面貝殻条痕
136	微細砂0		+	明褐色	内外面貝殻条痕
137	細砂粒0	繊維-	0	赤褐色	内外面貝殻条痕
138	微細砂+	繊維-	+	明茶褐色	内外面貝殻条痕(補修孔)
139	微細砂+	繊維-	+	明褐色	内外面貝殻条痕、口唇部ナデ
140	微細砂0	繊維-	+	暗赤褐色	内外面貝殻条痕
141	微細砂0	繊維0	0	暗~赤褐色	内外面貝殻条痕
142	微細砂-	繊維-	+	明茶褐色	内外面貝殻条痕
143	微細砂0	繊維-	0	赤褐色	内外面貝殻条痕
144	微細砂0	繊維-	+	赤褐色	内外面貝殻条痕
145	微細砂+	繊維-	0	赤褐色	内外面貝殻条痕
146	微細砂+	繊維-	+	黒褐色	内外面貝殻条痕
147	微細砂0	繊維-	0	黄~暗赤褐色	内外面貝殻条痕
148	微細砂+	繊維-	0	暗赤褐色	内外面貝殻条痕
149	微細砂0	繊維0	+	赤褐色	内外面貝殻条痕
150	微細砂+	繊維-	0	暗褐色	内外面貝殻条痕

拓印番号	胎 土	焼 成	色 調	せ い け い	施 文
151	微細砂-、繊維0	0	茶褐色	内面ヨコ方向の貝殻条痕	口唇部刻目、押し曳き状刺突
152	微細砂-、繊維+	0	暗褐色	内面ヨコ方向の貝殻条痕	沈線文
153	微細砂-、繊維+	0	明~茶褐色	内外面ヨコ方向の貝殻条痕	脛曲部刻目、沈線文
154	微細砂0、繊維-	+	明赤褐色	外面弱い擦痕、内面ナデ	なし
155	微細砂+、繊維0	0	赤褐色	内面ナナメ、外面タテ方向の擦痕	なし
156	微細砂-、繊維+	0	赤~暗褐色	-	内面に貝殻殻頂部背圧痕
157	微細砂-、繊維+	0	赤褐色	外面にナナメ方向の貝殻条痕	なし
158	微細砂-、繊維+	-	明赤褐色	内外面貝殻条痕	なし
159	微細砂-、繊維+	-	暗褐色	内面研磨	RL
160	微細砂+、繊維+	+	暗赤褐色	内面研磨	RL
161	微細砂-、繊維0	0	茶褐色	内面研磨	LR
162	微細砂0、繊維+	+	茶褐色	内面研磨	RL
163	微細砂+、繊維+	0	明褐色	内面研磨	RL、LRによる羽状繩文
164	微細砂-、繊維+	0	茶褐色	内面研磨、外面研磨→繩文施文	RL
165	微細砂-、繊維+	0	黄褐色	内面研磨	R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right\}$
166	微細砂0、繊維-	+	茶褐色	内面弱い研磨	RL
167	微細砂-、繊維+	-	赤褐色	内面弱い研磨	RL
168	微細砂0、繊維+	0	茶褐色	内面研磨	RL
169	微細砂+、繊維+	0	暗茶褐色	内面研磨	RL
170	微細砂0、繊維+	+	暗褐色	内面研磨	RL、LRの羽状繩文
171	微細砂-、繊維+	0	明茶褐色	内面研磨	
172	微細砂0、繊維0	0	明黄色	内面弱い研磨	Y-2R
173	微細砂0、繊維+	0	茶褐色	内面軽く研磨	Y-R
174	微細砂0、繊維+	0	黑色	-	LR
175	微細砂0、繊維0	0	黄褐色	内面入念な研磨	LR
176	微細砂0、繊維0	0	暗褐色	内面研磨	Y-R
177	微細砂0、繊維+	0	黄褐色	内面研磨	LR
178	微細砂0、繊維-	0	黑色	内面研磨	LR
179	微細砂+、繊維-	0	黑色	-	RL
180	微細砂+、繊維-	-	明茶褐色	-	RL、LRの羽状繩文
181	微細砂-、繊維-	+	茶褐色	内面研磨	RL、LRの羽状繩文
182	微細砂-、繊維+	+	明茶褐色	内面入念な研磨	L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ L $\left\{ \begin{array}{l} R \\ R \end{array} \right\}$ Lの羽状繩文
183	微細砂+、繊維+	0	茶褐色	-	LL、LR二種の原体が使用
184	細砂粒-、繊維+	0	暗茶褐色	-	RR
185	微細砂-、繊維+	0	灰褐色	内面研磨痕あり	RR
186	微細砂-、繊維+	0	茶褐色	内面研磨	Y-2R

番号	胎 土	焼成	色 調	せ い け い	施 文
187	微細砂0、繊維+	0	明褐 色	内面研磨、外面研磨→織文施文	Y-2L
188	微細砂-、繊維+	0	明褐 色	外面軽い研磨	Y-2L
189	微細砂0、繊維+	+	赤褐 色	内面研磨、外面研磨→織文施文	Y-2L →竹管押し曳き
190	微細砂0、繊維+	+	暗赤褐 色	内面研磨、外面研磨→織文施文	Y-2L
191	微細砂-、繊維+	0	明褐 色	内面研磨	Y-2L、Y-2R
192	微細砂-、繊維+	0	暗赤褐 色	内面研磨、外面研磨→織文施文	Y-2L ± Y-2R (輪縫はR.L. L.R.の交互の振り廻し)
193	微細砂0、繊維0	0	黄~赤褐色	内面軽い研磨、外面研磨→織文施文	Y-2R
194	微細砂0、繊維-	0	暗褐 色	内面入念な研磨	Y-R
195	微細砂+、繊維+	0	茶褐 色	内面研磨、外面研磨→織文施文	Y-2R
196	微細砂-、繊維0	+	赤褐 色	-	Y-L
197	微細砂+、繊維0	0	明褐 色	内面研磨	Y-2R
198	微細砂+、繊維-	-	明褐 色	-	Y-2R
199	細砂粒0、繊維-	+	赤褐 色	内面研磨	Y-2R
200	微細砂-、繊維+	0	暗赤褐 色	内面研磨	Y-2R
201	微細砂-、繊維+	+	赤褐 色	内面ヨコ研磨	Y-2R
202	微細砂0、繊維+	+	明褐 色	内面研磨、外面研磨→織文施文	Y-2R
203	微細砂+、繊維0	0	赤褐 色	内面研磨、外面研磨→織文施文	Y-2R
204	微細砂+、繊維0	-	明褐 色	外面スス付着	Y-2R
205	微細砂-、繊維+	0	褐 色	内面入念な研磨、外面研磨→織文施文	Y-2L
206	微細砂0、繊維0	-	赤褐 色	内面研磨	Y-2L
207	微細砂0、繊維-	+	茶褐 色	-	Y-2R
208	微細砂0、繊維+	-	茶~暗褐色	-	Y-2L
209	微細砂0、繊維+	0	赤褐 色	外面研磨→織文施文	Y-2L
210	微細砂+、繊維+	0	暗褐 色	内面研磨	Y-L
211	微細砂0、繊維+	0	黒~茶褐色	内面ヨコ方向の弱い研磨	半截竹管文(ヘラ状の竹管)
212	微細砂0、繊維+	-	黒~黃褐色	-	半截竹管内側による斜行沈線
213	微細砂0、繊維+	0	黄褐色 黑斑	内面研磨	結節状蛇行沈線
214	微細砂0、繊維+	0	黄~茶褐色	内面ヨコ研磨	蛇行沈線
215	微細砂0、繊維+	0	暗褐 色	内面ヨコ研磨	半(多)截竹管文
216	微細砂0、繊維-	+	明茶褐 色	内面研磨、外面ヨコ研磨→沈線文	蛇行沈線
217	微細砂0、繊維+	0	黑 色	内面ヨコ研磨	結節状蛇行沈線
218	微細砂-、繊維+	0	明褐 色	内面研磨、外面軽い研磨→沈線文	半截竹管内側による斜行沈線、貝殻压痕
219	微細砂-、繊維+	0	明~暗褐色	内面研磨	3本1単位の櫛齒文
220	微細砂-、繊維+	0	赤褐 色	内面研磨	半截竹管外側による沈線
221	微細砂-、繊維+	0	赤褐 色	-	半截竹管内側による蛇行線文
222	微細砂0、繊維+	-	黄~暗褐色	内面研磨	半截竹管内側による蛇行線文
223	細砂粒+、繊維0	0	赤褐 色	内面研磨	結節状沈線による蛇行線文
224	微細砂+、繊維0	+	明~黒褐色	内面軽い研磨	3本1単位(1本は不明)の櫛齒文

拓印番号	胎 土	焼成	色 調	せ い け い	施 文
225	微細砂+、繊維 0	0	暗赤褐色	外面研磨→櫛歯文	条数不明の複数歯による櫛歯文
226	微細砂 0、繊維 +	0	黄褐色	内外面研磨	結節状沈線による蛇行線文
227	微細砂-、繊維 +	0	赤褐色	-	半截竹管内側による蛇行線文、3本の竹管を束ねた原体による蛇行線文
228	微細砂-、繊維 +	-	暗褐色	内面研磨	(半截竹管外側の搖曳条線か)
229	微細砂-、繊維 +	0	黒褐色	内面ナデ	3本1単位の櫛歯文
230	微細砂 0、繊維 +	0	明褐色	-	2本1單位の又状工具による結節状蛇行線文
231	微細砂-、繊維 +	0	褐色	内面研磨	3本(2本+1本)1単位の櫛歯文
232	微細砂 0、繊維 0	0	赤褐色	内面研磨	3本1単位の櫛歯文
233	微細砂+、繊維 +	0	赤褐色	内面研磨、外面研磨→沈線文	2本1単位の又状工具による沈線文
234	微細砂 0、繊維 +	-	明~黒褐色	-	沈線文(3本1単位の櫛歯条線か)
235	微細砂-、繊維 +	0	赤褐色	内面研磨、外面研磨→櫛歯文	3本1単位の櫛歯文
236	微細砂-、繊維 +	0	黄褐色	内外面に弱いヨコ研磨痕	3本1単位の櫛歯文
237	微細砂 0、繊維 +	+	黒褐色	内面入念な研磨、外面研磨→波状文	又状工具による波状文
238	微細砂+、繊維 -	0	赤褐色	口縁部内面ヨコ研磨、外面研磨→櫛歯文	3本1単位の櫛歯文
239	微細砂+、繊維 0	+	赤~暗褐色	外面研磨	又状工具による沈線文
240	微細砂 0(露母片) 繊維 0	0	暗褐色	口唇部~内面研磨	櫛歯条線→竹管文、竹管刺突
241	微細砂-、繊維 +	0	茶褐色	内面研磨、外面研磨→沈線	櫛状(竹管外側か)工具による結節状沈線
242	微細砂 0、繊維 +	-	褐色	内面研磨(上部ヨコ下部ナナメ)	2本1単位の竹管による刺突列
243	細砂粒 0、繊維 -	+	赤褐色	内面弱い研磨	R L、LR羽状縞文→半截竹管文
244	細砂粒 0、繊維 -	+	暗褐色	内面研磨、外面研磨→竹管文	LR→半截竹管文
245	微細砂 0、繊維 +	0	明褐色	内面部分的研磨痕	貝殻背圧痕
246	微細砂 0、繊維 0	0	茶褐色	内面研磨	貝殻背圧痕
247	微細砂-、繊維 +	-	茶~黒褐色	内面弱い研磨	5本1単位の櫛歯文、細沈線
248	微細砂-、繊維 +	0	暗茶褐色	内面研磨、外面口縁部研磨	5本1単位の櫛歯文
249	微細砂 0、繊維 -	0	茶褐色	内面研磨	Y-2 R
250	微細砂-、繊維 -	0	赤褐色	-	細沈線
251	微細砂-、繊維 +	0	明茶褐色	-	R L
252	細砂粒 +	+	茶褐色	内面入念な研磨	細沈線→爪形文
253	細砂粒 0	+	明褐色	内面研磨	沈線文、刺突文
254	細砂粒	+	明茶褐色	内面入念な研磨	R L { T T T T L T }
255	細砂粒 +	0	赤褐色	-	半截竹管文、Y-R(下端)
256	細砂織	+	明褐色	内外面研磨	半截竹管文
257	細砂粒 0	+	明褐色	-	細沈線
258	細砂粒 0	+	明褐色	内外面研磨	細沈線
259	細砂粒 0	0	暗褐色	外面スス付替、輪積痕	細沈線
260	細砂粒 0	+	茶~黒褐色	内面研磨、外面ヘラ研磨→施文	半截竹管文
261	細砂粒 0	+	赤~黒褐色	内面研磨・外面ヘラ研磨→施文	円形刺突

番号	胎 土	焼成	色 調	せ い け い	施 文
262	細砂粒+	0	黄～暗褐色	—	又状工具による刺突列
263	細砂粒+	0	黄褐色	輪積痕	円形刺突列
264	細砂粒+	0	赤褐色	内面研磨、輪積痕	輪積部端に刻目（斜位の刺突）
265	細砂粒-	+	明褐色	内面研磨、輪積痕	
266	細砂粒-	0	黒 色	口唇部研磨、輪積痕	
267	細砂粒 0 (長石)	+	褐 色	外表面ヨコナデ、輪積痕、口縁部ヨコナデ	口唇、輪積痕端に刻目（斜位の刺突）
268	細砂粒-	0	赤褐色	外表面ヨコナデ	貝殻腹縁拂り曳き、口唇上円形刺突
269	細砂粒 0 (長石)	+	暗褐色	外表面研磨、外面スス付着	貝殻腹縁拂り曳き
270	細砂粒 0	+	赤褐色	外表面弱い研磨	貝殻腹縁拂り曳き
271	細砂粒-	0	明褐色	—	貝殻腹縁拂り曳き
272	細砂粒 0 (長石)	0	茶褐色	内面入念な研磨	貝殻腹縁拂り曳き
273	細砂粒 0 (長石)	+	茶褐色	外面研磨→施文	貝殻腹縁拂り曳き
274	細砂粒 0	+	黄褐色 黑斑	内面弱い研磨、外面弱い研磨→施文	平行沈線
275	細砂粒+	+	暗褐色	—	原体不詳の刺突文
276	細砂粒+	+	明茶褐色	内面研磨痕、外面研磨→施文	貝殻腹縁拂り曳き
277	細砂粒 0	0	茶褐色	—	貝殻腹縁拂り曳き
278	細砂粒 0	+	暗赤褐色	内面研磨、外面研磨少し	貝殻腹縁拂り曳き
279	細砂粒 0	+	赤褐色	外面研磨痕少し	貝殻腹縁拂り曳き
280	細砂粒 0	+	赤褐色	外面ヘラケズリ痕、内面入念な研磨	貝殻腹縁拂り曳き
281	細砂粒 0	+	赤褐色	内面研磨、外面ヘラ研磨→	貝殻腹縁拂り曳き
282	細砂粒 0 (長石)	+	赤褐色	外面ヘラミガキ	貝殻腹縁拂り曳き
283	細砂粒 0	+	赤褐色	外面ヘラミガキ	貝殻腹縁拂り曳き
284	細砂粒 0	+	明褐色	外表面軽い研磨痕	貝殻腹縁拂り曳き
285	細砂粒 0	+	明～暗褐色	外表面入念な研磨	貝殻腹縁拂り曳き
286	細砂粒+	+	明褐色	内面研磨、外面ヘラ研磨→	貝殻腹縁拂り曳き
287	細砂粒+ (長石)	+	茶褐色	内面研磨痕	貝殻腹縁拂り曳き
288	細砂粒+	+	茶褐色	内面研磨、外面ヘラ研磨→	貝殻腹縁拂り曳き
289	細砂粒 0	+	赤褐色	外表面研磨痕、内面一部研磨痕	貝殻腹縁拂り曳き
290	細砂粒 0	+	明～暗褐色	外表面研磨	貝殻腹縁拂り曳き
291	細砂粒+	+	暗褐色	外表面研磨	貝殻腹縁拂り曳き
292	細砂粒 0	+	明赤褐色	外表面研磨	貝殻腹縁拂り曳き
293	細砂粒 0	+	明茶褐色	内面入念な研磨	貝殻腹縁拂り曳き
294	微細砂 0 (砂礫)	+	明茶褐色	内面研磨、外面スス付着	変形爪形文、半纏竹管文、刺突文 貝殻腹縁拂り曳き
295	細砂粒 0	+	赤褐色	内面入念な研磨	変形爪形文、貝殻腹縁拂り曳き
296	細砂粒+	0	茶褐色	外表面研磨痕	貝殻腹縁拂り曳き
297	細砂粒+	+	暗灰褐色	内面ヘラミガキ、外面研磨	三角文
298	細砂粒 0	+	灰黄褐色	内面継位のヘラミガキ、外面研磨→	三角文
299	微細砂 0	+	黒 色	内面研磨、外面軽い研磨→	三角文

板面番号	胎 土	焼 成	色 調	せ い け い	施 文
300	微細砂 0	+	明～暗褐色	内面研磨	三角文
301	細砂粒 +	0	明褐色	内面軽い研磨	三角文
302	細砂粒 +	0	茶褐色	外面一部研磨痕	三角文
303	細砂粒 + (砂継)	+	黒 色	内面研磨、外面研磨→	三角文
304	微細砂 +	0	明褐色	—	貝殻腹縫刺突
305	微細砂 +	0	赤褐色	外面研磨痕	貝殻腹縫刺突沈線 (305b)
306	微細砂 +	0	赤褐色	外外面ナデ	割縫内刺突充填
307	微細砂 +	0	赤褐色	内面研磨	割縫内貝殻腹縫刺突充填 (廢消貝殻文)
308	細砂粒 0	+	赤褐色	口縁部内外面ヨコナデ	沈線による疑似貝齒文
309	微細砂 +	+	黒褐色	—	条数不詳の櫛齒条線文 (おそらく10本の櫛齒条線文)
310	細砂粒 0	+	黒褐色	—	
311	細砂粒 0	+	赤～黒褐色	内面弱い研磨	条数不詳の櫛齒条線文
312	細砂粒 0	+	茶褐色	外面ヨコ研磨、内面ヨコケズリ	なし
313	細砂粒 0	0	赤褐色	内面一部ヘラ研磨	貝殻腹縫延引き曳き
314	微細砂 0	0	赤褐色	外外面ヘラ研磨	貝殻腹縫刺突
315	細砂粒 0	+	明赤褐色	外面ナデ、内面ヨコ研磨	R L、開端自繩自縛結節回転
316	微細砂 0	0	明赤褐色	内面入念な研磨	L、開端自繩自縛結節回転
317	細砂粒 +	+	明赤褐色	内面一部研磨痕	R L、開端自繩自縛結節回転
318	細砂粒 + (長石)	+	赤褐色	外面研磨→	L、開端自繩自縛結節回転
319	細砂粒 +	+	暗赤褐色	内面研磨	地文 L → R L 開端自繩自縛結節回転
320	細砂粒 0	+	茶褐色	内面弱い研磨、スス付着	R L、開端自繩自縛結節回転
321	細砂粒 0	0	褐色 黑斑	—	L、開端自繩自縛結節回転
322	細砂粒 0	+	黒 色	輪積痕	R L、口唇部原体押捺
323	細砂粒 0	0	明褐色	内面研磨	地文 L → R L 開端自繩自縛結節回転
324	細砂粒 0	+	明褐色	内面弱い研磨	L
325	細砂継 (金雲母)	+	赤褐色	内面研磨 (入念)	L R 自繩自縛結節回転
326	細砂継 +	+	茶褐色	内面研磨	半纏竹管文、沈線
327	細砂継 + (石英)	+	明褐色	—	L R、沈線、刺突
328	細砂継 0 (組円継)	0	黃褐色	内面ヘラ研磨	R L、半纏竹管文
329	細砂継 +	+	暗褐色	内面入念な研磨、外面研磨	R L、隆蒂、沈線
330	細砂継 +	+	赤褐色	—	R L、沈線
331	細砂継 + (金雲母)	+	赤褐色	—	細隆蒂、沈線
332	細砂継 +	+	赤褐色	—	隆蒂、沈線、三角印刻文
333	細砂継 + (金雲母)	+	赤褐色	内面弱い研磨	R L、隆蒂、沈線
334	細砂継 + (石英)	+	赤褐色	外外面研磨	R L、押し曳きによる角押文
335	細砂継 + (金雲母)	+	赤褐色	内面厚くスス付着	L R、開端自繩自縛結節回転
336	細砂継 +	+	暗赤褐色	—	隆蒂、結節沈線
337	細砂継 + (金雲母)	+	暗褐色	内面研磨	隆蒂

番号	胎 土	焼成	色 調	せ い け い	施 文
338	細砂礫+	+	茶 褐 色	内面研磨	隆帯、押し曳きによる角押文
339	細砂礫+(金雲母)	+	赤 褐 色	口縁部内外面研磨	円形竹管押し曳き、隆帯
340	微細礫 0	0	黒 褐 色	—	刻目
341	微細砂+	—	赤~暗褐色	内面ヘラ研磨	隆帯による貼付文に沿う押し曳き角押文
342	微細砂 0	0	茶 褐 色	内面研磨	押し曳き角押文
343	微細砂 0	+	明~暗褐色	内面入念な研磨	押し曳き結節沈線
344	細砂礫+	0	黄 褐 色	内面研磨	隆帯に沿う竹管刺突列
345	微細砂 0	0	明 褐 色	内面研磨	押し曳き角押文
346	微細砂 0	0	赤~黒褐色	内面研磨	竹管刺突列
347	微細砂+	0	茶 褐 色	—	隆帯に沿う押し曳き角押文
348	微細砂 0	0	茶 褐 色	内面研磨	隆帯に沿う押し曳き角押文
349	細砂粒+	+	赤 褐 色	内面入念な研磨、外側は軽くヘラ研磨	隆帯、口縁に沿う押し曳き角押文
350	細砂礫+(金雲母)	+	茶 褐 色	内面研磨	隆帯、結節沈線
351	細砂粒 0 (金雲母)	+	茶 褐 色	内面研磨	隆帯、結節沈線
352	細砂粒 0 (金雲母)	+	明 茶 褐 色	—	結節沈線
353	細砂礫 0	+	暗~茶褐色	内外面研磨	隆帯に沿う結節沈線
354	細砂礫 0	+	赤 褐 色	内面研磨	結節沈線
355	細砂礫 0 (金雲母)	+	赤 褐 色	内面研磨	刻目隆帯
356	細砂粒+	+	茶 褐 色	内面研磨	隆帯に沿う結節沈線
357	細砂粒 0 (金雲母)	+	赤 褐 色	—	隆帯に沿う結節沈線、波状沈線
358	細砂粒+(金雲母)	+	茶 褐 色	—	隆帯、結節沈線
359	細砂礫+	+	明~黒褐色	内面研磨	結野沈線
360	細砂粒 0 (金雲母)	+	赤 褐 色	内外面研磨	刻目隆帯、角押文
361	細砂粒 0 (金雲母)	+	赤~黒褐色	内外面研磨	隆帯、結節、沈線
362	細砂粒 0	+	茶 褐 色	内面入念な研磨	角押文
363	細砂粒+	+	赤~黒褐色	内面研磨、外側軽く研磨	角押文
364	細砂礫 0	+	赤 褐 色	内外面軽く研磨	隆帯に沿う沈線(一部結節沈線)
365	細砂礫 0	+	赤 褐 色	—	隆帯、4本1単位の櫛齒状条線
366	細砂礫 0	+	赤~暗褐色	内外面研磨	隆帯、結節、沈線、波状沈線
367	細砂粒+	0	赤 褐 色	内面研磨、外側軽く研磨	押し曳きによる角押文
368	細砂礫 0	+	茶~暗褐色	内面入念な研磨	隆帯、貼付文、結節沈線
369	細砂礫 0 (金雲母)	+	赤 褐 色	内面研磨	隆帯
370	細砂礫+(金雲母)	+	赤 褐 色	内面研磨、外側も研磨	隆帯、竹管による波状文
371	細砂礫+	+	赤 褐 色	—	隆帯に沿う押し曳き角押文
372	細砂礫+	+	赤 褐 色	—	隆帯に沿う刺突列、ハマグリ貝殻模様刺突
373	細砂粒+	0	赤 褐 色	内面に研磨	隆帯に沿う押し曳き角押文
374	細砂粒 0	+	赤 褐 色	輪横痕	なし
375	細砂粒 0	0	黒 褐 色	輪横痕、内面研磨	なし

拓印番号	胎 土	焼成	色 調	せ い け い	施 文
376	細砂礫+(金雲母)	+	赤~黒褐色	内面研磨	ハマグリ貝殻腹縁刺突
377	細砂粒+	0	黄褐色	—	隆帯、4本1単位の櫛齒状条線(一部結節条線)
378	細砂粒0(砂礫)	+	明褐色	—	隆帯、櫛齒状条線
379	細砂礫0	+	明~暗褐色	外面研磨	隆帯、4本1単位の櫛齒状条線
380	細砂礫+	+	赤褐色	内外面研磨	竹管による押し曳き文
381	細砂礫0	+	赤褐色	外面研磨	隆帯、櫛齒状条線
382	細砂礫0	+	明茶褐色	—	隆帯、複列結節沈線、櫛齒状条線
383	細砂礫0	+	赤褐色	内面研磨	隆帯、角押文
384	細砂礫+	+	赤褐色	—	貝殻腹縁刺突
385	細砂礫0(金雲母)	+	暗赤褐色	—	刻目隆帯
386	細砂礫0	+	茶褐色	内外面研磨	口縁部刻目
387	細砂礫0(金雲母)	+	暗褐色	内外面に研磨	なし
388	細砂礫0(金雲母)	+	暗褐色	内外面入念な研磨	なし
389	細砂礫+(金雲母)	+	暗赤褐色	—	網代痕
390	細砂粒0	+	赤褐色	外面ヘラ研磨	網代痕
391	細砂礫+	+	暗赤褐色	外面研磨	網代痕
392	細砂粒+	0	暗赤褐色	内面入念な研磨	R L磨絞文
393	細砂粒0	+	赤~黒褐色	内外面研磨	隆帯、R L
394	細砂粒0	+	赤褐色	内面研磨	L R磨消繩文
395	細砂粒+	+	赤~黒褐色	内面研磨	R L磨消繩文
396	細砂粒0	+	暗~赤褐色	内外面胴上部入念な研磨	隆帯、R L
397	微細砂-	+	暗~赤褐色	内面入念なヨコ方向のヘラ研磨	R $\left\{ \begin{array}{l} L \\ L \end{array} \right.$

(注) 胎土櫻の記号 +多い 0 標準 -少ない
 焼成櫻の記号 +優 0 並 -劣

B 石器（第95～101図）

タルカ作遺跡の縄文時代包含層より採集された石器類は、総計299点であった。このうち、剝片や石核、あるいは破碎礫が232点を占めるから、実際に使用に供された石器は67点あるにすぎず、内容的には極めて貧弱なものと評価される。また、石器の分布が各期の土器の出土範囲と重複しているために、各個の資料の帰属を決定し、ある特定の時期の石器組成を確定するための条件も悪かった。従って、ここでは検出資料の掲載に努めるにとどめておく。

有舌尖頭器（1～3）。グリッドを異にして3点の資料が得られた。石材は1、2がチャート、3は砂岩であるが、1、2は同一母岩とみられる。1は細かい鋸歯縁をもつ両面打製の長手のもの。舌部を半分欠損している。2も1と同様に鋸歯縁の長手のものだが、継長剝片素材で、半両面打製となる。やや短幅で、やはり舌部端を欠損している。両例の外形は良く一致し、同一工人の製作にかかるものであろう。形態的特徴としては（1）逆刺の発達が認められないこと、（2）舌部は所謂三角舌に近いことがあげられる。3の例では鋸歯縁加工はないが、有舌尖頭器の仲間と考えてよいだろう。だいたい3例とも同一段階の資料とみられる。

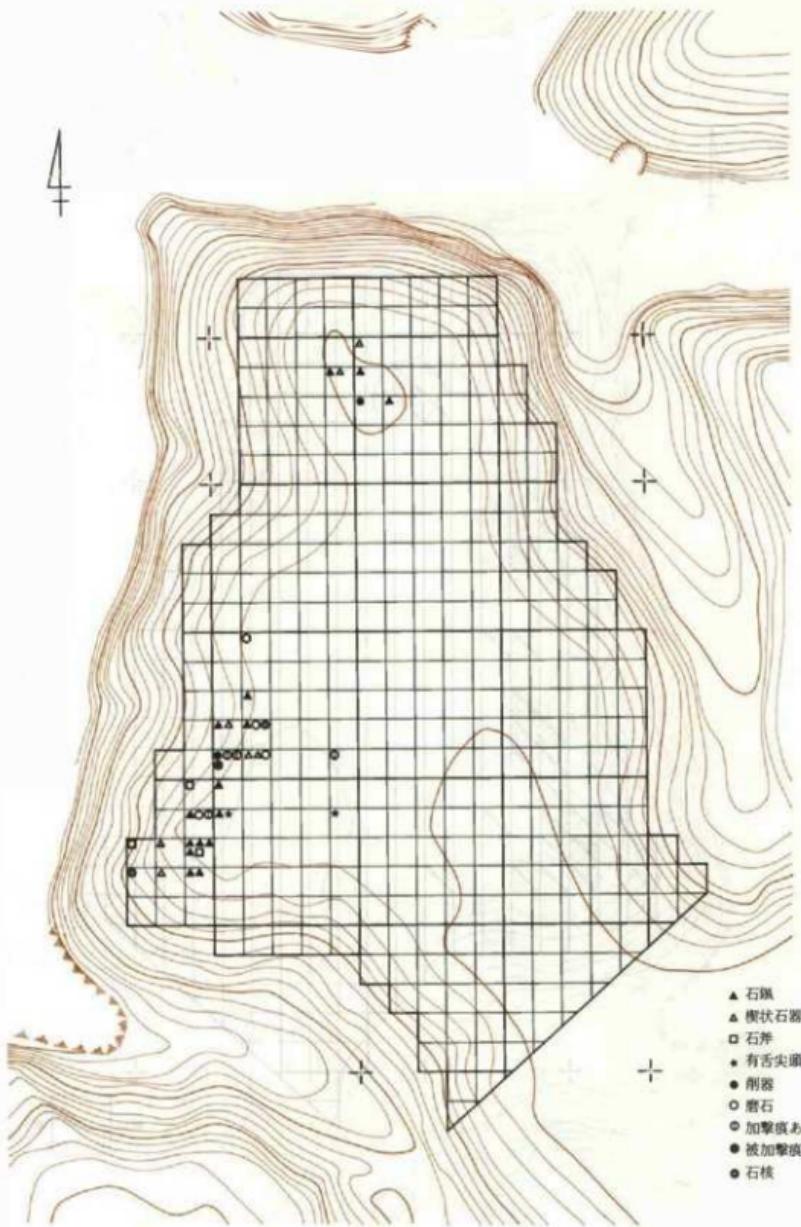
有舌尖頭器の編年に照して、これらの位置を推定すると、南大溜袋の直後、南原の直前に位置し、ほぼ中林一鳴鹿の段階に相当しよう。

石鏃（4～21）。20例あるが、そのうち18例を図示した。残余の2例は細かい破片であり、部位もよくわからない。完形のものが8例で、12例は破損していた。石材は6、7、9、12、13、15、21がチャート、11と14が玄武岩だが、残りの11例が黒曜石である。形態的には凹基三角鏃が主体となるが、基部の抉入の浅深の差が大きい。また、脚部末端の形態にも差がある。例えば21などは第I群土器に伴う特徴的な形態を示している。7～9などやや抉りが大きく側縁の彎曲する傾向のあるものは第IV群土器に、12～14など長脚のものはVI群、VII群に伴うと考えられるが、残りの微凹基のものは第III群土器子母口期に比定されるであろう。子母口期の石鏃については市原市鶴牧遺跡で工房址が一部調査されており（上守、1983）、形態の概要を知ることができる。なお石鏃の重量は、完存しているものについて計測してみると、最大の4が1.6g、最小の9が0.4g、平均重量0.79gとなっている。参考までに、1の有舌尖頭器は5.0gである。

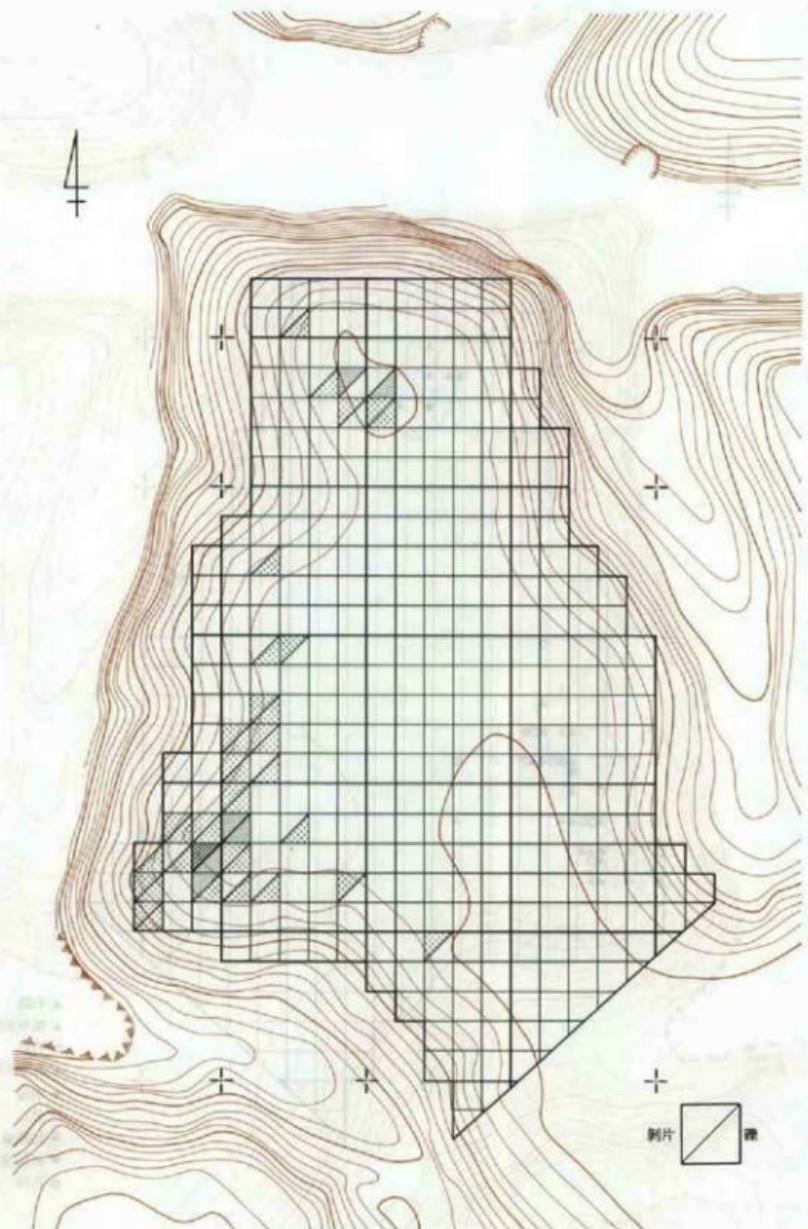
模状石器（22、23、25～28）。剝片あるいは小円礫の両端に加擊あるいは被加擊痕をとどめるもので、7例検出されている。黒曜石製のものは一例のみ（22）で、チャート、安山岩、砂岩など多様な石材の選択がうかがわれる。重量をみると、最小のもの（22）で重量1.0g、最大のもの（25）で重量70gもあり、近似した形態と製作手法をもつもののうちに、異った用途、機能のあったことが推測される。

削器（31）。2例あるが、1例のみ図示した。他は不定形の剝片の一部に付刃したもの。31は横長の剝片末端に剥離を加え、約70度の切り立った刃部が作出されている。玄武岩製。本例についてはただちに縄文時代の石器と断定することはできない。より先行する可能性もある。

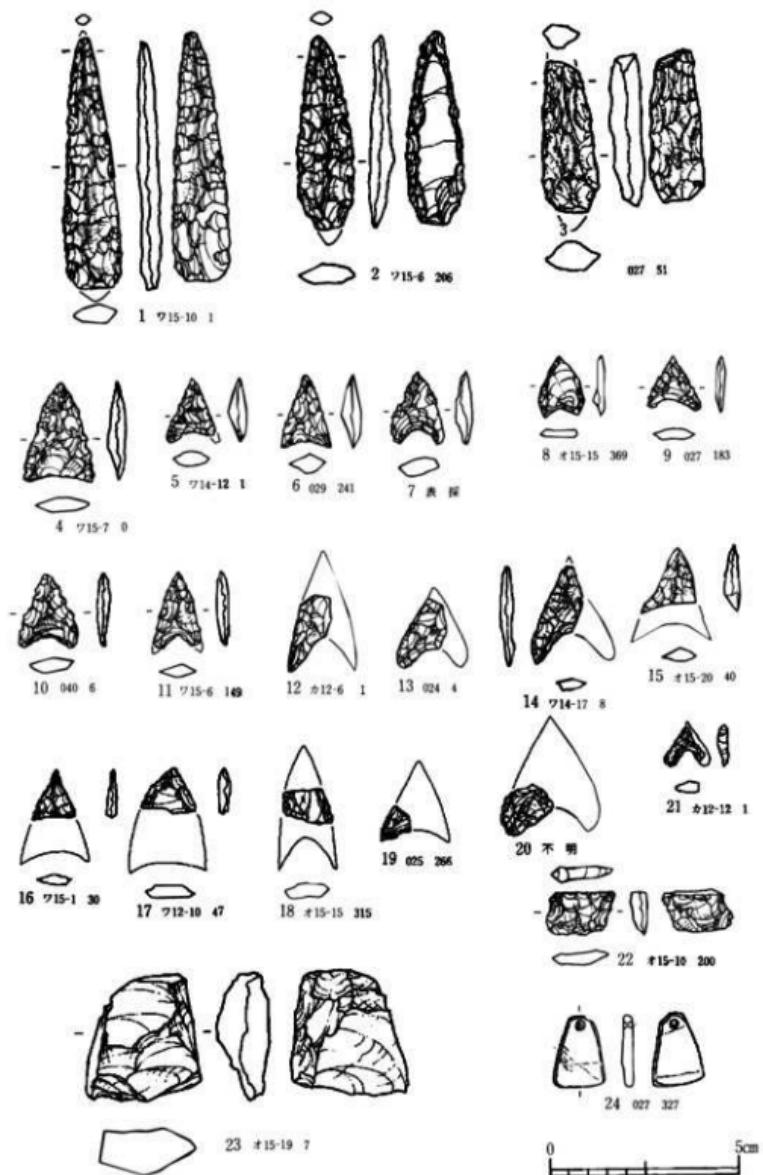
4



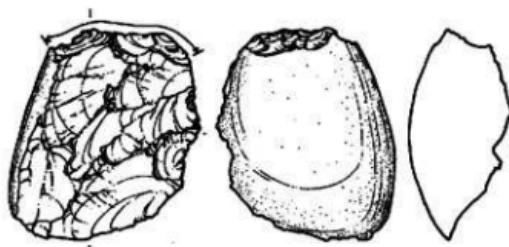
第95図 繩文時代石器分布状況



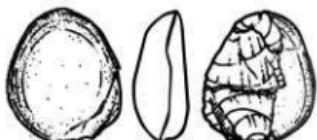
第96図 縄文時代刺片・礫の分布状況



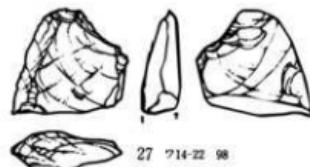
第97図 繩文時代石器実測図 (1)



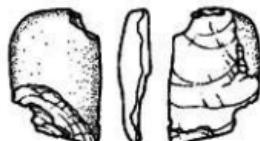
25 714-22 32



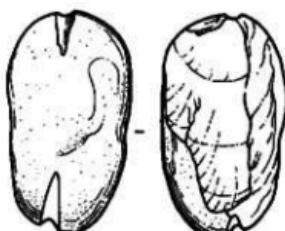
26 715-14 2



27 714-22 98



28 714-22 111



29 622 33



30 715-13 8



31 622-11 31



第98図 縄文時代石器実測図(2)

石斧 (30、34)。2例ある。30は硬砂岩の部厚い剝片を素材とした短冊型の石斧。背面の中央に原礫面らしい少し風化した部分が残されているが、両面からよく調整されている。刃部背面側に使用痕かと思われる長軸に平行する擦痕が看取される。重量55g。34は所謂礫斧であり、砂岩の大型の円礫の周辺に粗い剝離を加え、握斧様の形状に仕上げられている。重量365g。34は確実に、そしておそらく30も子母口期の所産であろう。

片刃打割器 (35)。方形周溝の覆土内に落ち込んでいたが、明らかに縄文時代あるいはそれ以前の石器である。頁岩の円礫の一端に大きめの加撃痕が認められ、本来一種の石核かと考えられる。しかし、刃部には細かい剝離痕が著しく、一部に磨滅した部分もあるから打割器として使用された可能性が高い。本資料で特に注意されるのは、表面の風化の進行状況から剝離痕に新旧2面が識別されることで、先に指摘した刃部周辺の細かい剝離はいずれも新しい剝離面に属する。

切目石錐 (29)。一面に浅い剝離痕の残る円礫の長軸両端に研磨された刻目を入れた石錐であり、渡辺誠氏の分類(渡辺1973)に従えば、切目石錐A種に相当し、縄文中期～晩期に盛行すると言われている。本資料は古墳時代の住居跡覆土中採集であるから、正確な帰属時期は不詳である。重量23.2g。

垂飾 (24)。美しい茶褐色をした粘板岩の、偏平な水磨された小礫を素材にしている。概形は上底の短い等脚台形状で、各辺に研磨痕が認められるが、表裏は自然面をそのまま残している。上部に径1.8mmの小孔が両面から穿たれている。重量1.1g。帰属時期は詳かではない。

円礫素材の大型石器(36～43)。所謂磨石あるいは敲き石とされる石器で、比較的大型の円礫に磨痕や加撃痕、あるいは被加撃痕などをとどめるものを一括した。使用痕あるいは加工痕の遺存状況よりいくつかに類別される。出土総数9点。

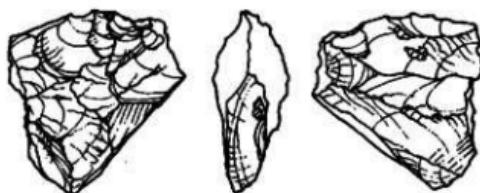
A類 円礫の側面に敲打痕のあるもの(38、39)。この場合の敲打痕は加撃痕であると考えられる。38では敲打痕は側面の一部に限定されるが、39では礫周を一巡するのである。

B類 円礫の一面乃至両面に敲打痕のあるもの(41、43)。本類の敲打痕は被加撃痕と推定される。A類との組み合せが合理的であろう。

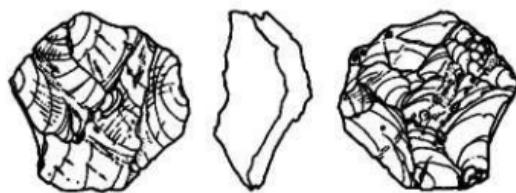
C類 敲打痕が側面とともに両面に加えられるもの(40、42)。A類、B類の両機能を一器種内で複合的に保有するものと規定される。40では側面にも深い凹点が3箇所あり、半転して加撃された場合が考えられる。

D類 素材礫の平面に磨痕のあるもの(36、37)。磨痕のみからなる例はなく、36では側面に、37では他面に敲打痕の集中するところが認められ、複数の機能が推定されるが、この場合、C類におけるように両様の機能が同時に発揮されるとは考え難く、むしろ磨痕の形成→打痕の形成という過程が推定される。一種の転用である。また、D類の存在は、石皿との共存を仮定させるが、本遺跡内部に石皿は検出されず、他へ搬出されたものと考えてよい。

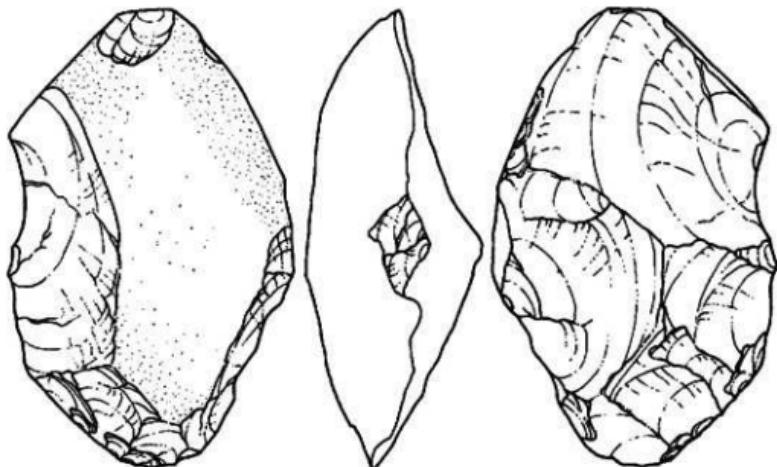
これらは縄文各期に普遍的に存在するから、各々の時期を確定することはできない。ただし、41、



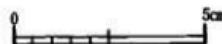
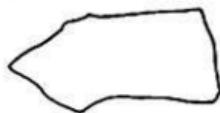
32 714-17 8



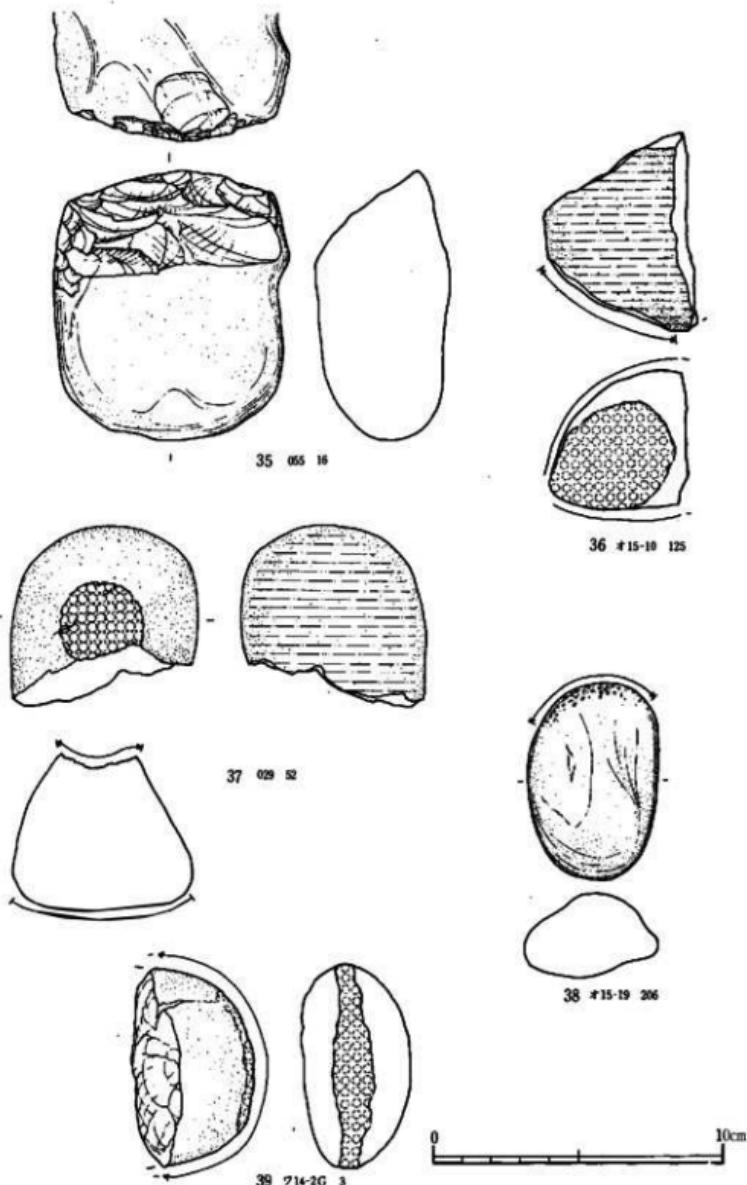
33 715-18 23



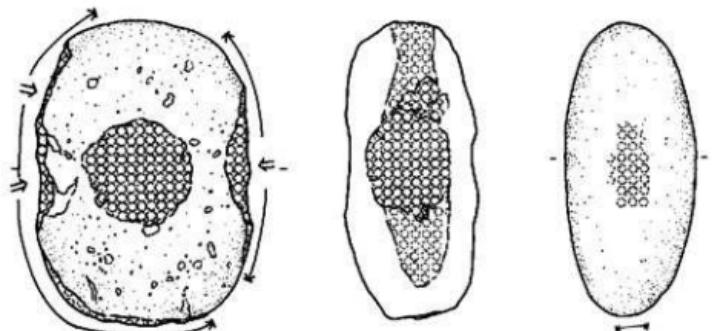
34 715-15 117



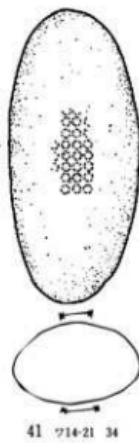
第99図 繩文時代石器実測図 (3)



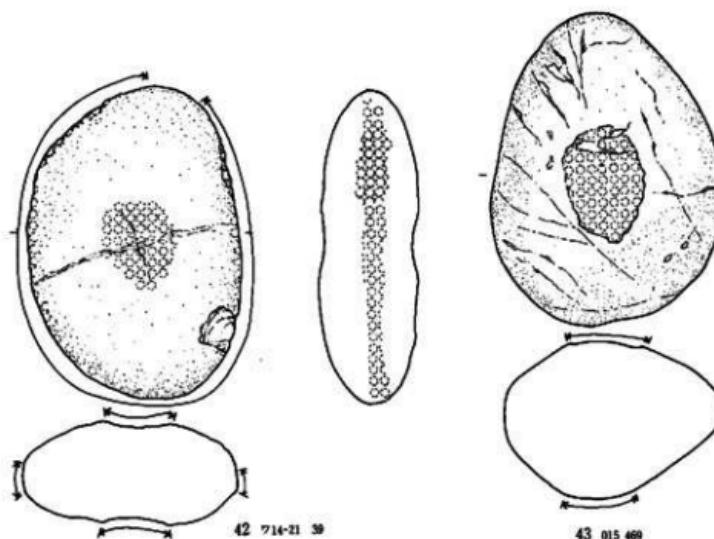
第100図 縄文時代石器実測図 (4)



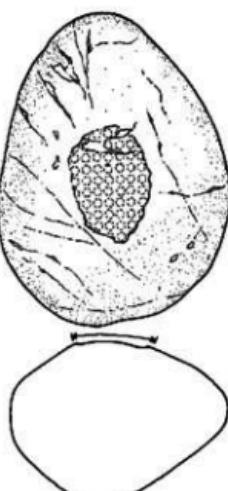
40 15-2-1-5 1



41 714-21 34



42 714-21 39



43 015 469



第101図 縄文時代石器実測図 (5)

42などは子母口式土器の集中部内からの出土で、その段階に属するのかもしれない。40もその可能性が強い。これらから、子母口期の大体の石器組成を推定することも可能であろう。

この他に石核4点、剝片131点、破碎礫97点の検出があった。石核は2例を示した(32、33)。ともに求心的な剥離痕をもつ板状の多面体石核である。32がチャート製で、33は黒曜石製。石器の素材剝片の作出を目的としている。剝片と礫の分布は、基本的には土器片の散布範囲に重複しているが、詳しく見ると、才15—15区やワ15—6区など、むしろ土器片集中部の外縁に多く認められる傾向があり、両者の廃棄過程に差異のある点を指摘しておきたい。とくに、ここに示した両区は、炉穴群の中央に位置し、仮に、両区の剝片と礫とが子母口期を中心とする早期後葉の所産であると仮定した場合、土器の廃棄が炉穴と関連する傾向の強いとの著しい対照を示している点は重要であり、当時の景観復元にひとつの手がかりを与えるものであろう。

C 土製品(第102・103図)

今回の調査によって検出された土製品は20点ある。内訳を見ると、土器片を再加工した土製円盤12点、土器片錐7点、手づくねの粘土塊1点からなっている。

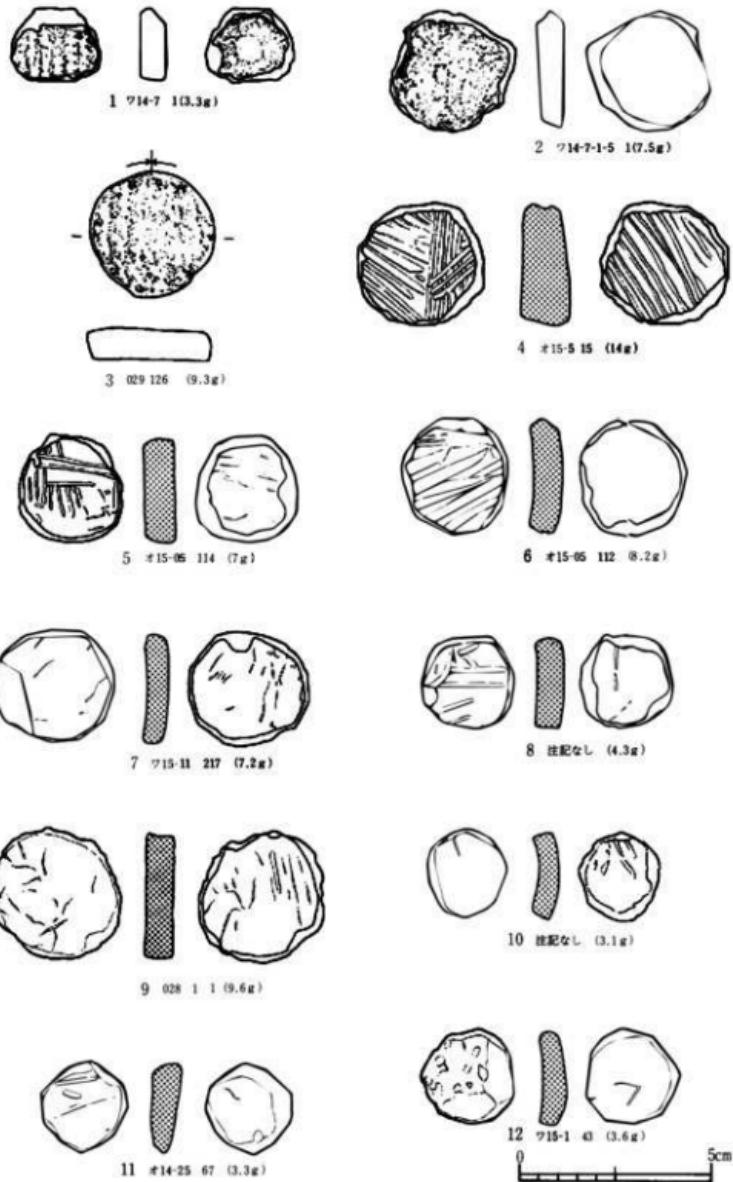
土製円盤(1~12)。素材とされた土器片の特徴から、(1)草創期後葉の一群(1~3)と、(2)早期後葉の一群(4~12)とに二分される。

(1)草創期後葉の一群 1は約1/2を欠損している。外面はR Lの単節繩文が付され、内面中央に径6mm、深さ3.5mmの円形の凹みが穿たれている。凹みはネガティブな半球状の形状で、貫通していない。周縁部は破損箇所が多いが、良く研磨されている。2、3も同趣の工作を示しているが、内面に凹点が見られない。2は粗雑な作りで、周縁部に打ち欠かれたような形跡があるものの、研磨痕が僅かであるところから、あるいは未製品とも考えられよう。外面には、R Lのまばらな繩文が散り、第I群第2類第2種の土器が素材と推定される。3は外面にRの燃糸文が看取され、第I群第4類第2種に帰属しよう。周縁の研磨は入念で、全周に及ぶ。

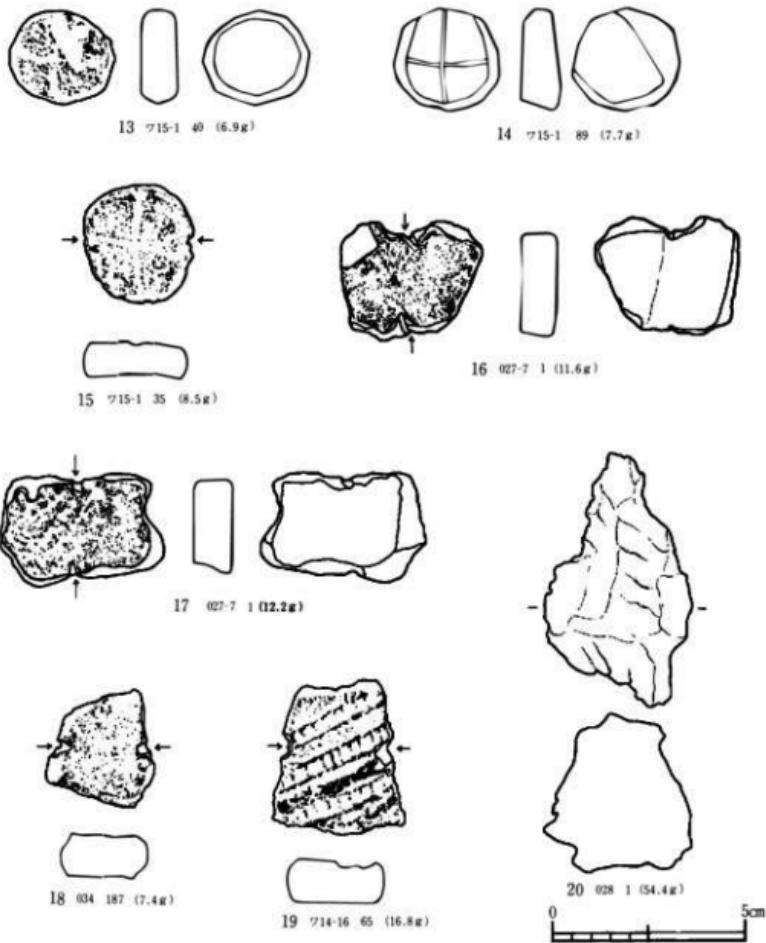
(2)早期後葉の一群 9点あるが、第22号炉穴よりの類例2点を加えて、本遺跡からは総数11点の出土があったことになる。土器片のうち、手ごろな破片を選択し、周縁に細かいリタッチを加えて、最終的に研磨を加えるという工作手法は(1)と同様であるが、一般に(1)と比して、研磨の粗雑なものが多いようである。素材のあり方を見ると、内・外面貝殻条痕(4、5)、外面貝殻条痕(6、8)、内面貝殻条痕(10)、内外面無文(7、9、11、12)であり、貝殻条痕の付されたものと、無文のものとの比率は5:4であり、だいたい第III群土器のあり方に近似した傾向がうかがわれる。胎土、焼成等の状況から、第III群土器のなかでも、第1類により近似しているところが多く、一括して子母口期の所産かと推定される。

土器片錐(13~19)。7点あるが、形状の差異に従って2種に分けられる。

(1)円盤形の形状を示し、外面に浅く十字の溝を切るもの(13~15)。3例あるが全て同一個体の土器を素材としている。素材の土器片は、細砂粒を多く含み、赤褐色を呈する土器で、文様は認



第102図 繩文時代土製品実測図 (1)



第103図 繩文時代土製品実測図(2)

められない。従って、帰属時期も分らない。15には、細い刻目が周縁に2箇所取られ、次に述べる(2)と近い形状を呈している。この刻目を手がかりとすれば、外面の十字溝も糸懸け溝と理解され、土器片錐の仲間に加えた。(2)周縁の対応2箇所に刻目を有するもの(17~19)。土器片錐として最も一般的なものである。17は加曾利E式、19は阿玉台I b式の土器片を素材としている。18の素材とされた土器片の帰属時期はよく分らないが、外面にR Lの細目の繩文が浅く回転されていることと、胎土・焼成の様子からは、最も諸磯式に近似しているようである。20は手づくねの土製品である。その形状からは、何ら作者の意図が伝わってこない。繩文時代のものかどうかも疑わしいが、一応ここに紹介しておいた。(田村 隆)

第4章 古 墳 時 代

1 概 要

古墳時代の遺構は、住居跡が43検出された。いずれも鬼高期に属する。タルカ作の台地の全体に散らばって分布するが、北の方に稠密で、南は比較的まばらである。また、中央に径50~60mの空白部分がみられる。住居跡の立地は、平坦面であるものがほとんどであるが、斜面への肩口に立地するものもみられ、第40・41号のように、はっきりと小さな谷の斜面部内に立地するものもある。どの住居跡も、基本的な構造は同じで、カマドを持ち、4本の主柱穴があり、貯蔵穴を伴なう。ただし、第37・38号については、構造が不明瞭で、住居跡ではない可能性もある。

このほかに鬼高期と思われる小判形の土塹2と方形周溝状遺構1が検出された。

なお、住居跡の床溝について、柱穴とのつながりは確実であるが、壁溝とのつながりや切り合いは、床溝の検出時にはすでに壁溝が掘上げた後の放置によって崩れかけていたために、はっきりとしない。したがって、長さはもとまらない。

2 住 居 跡

第1号住居跡(001) (第104~106図 第8表)

検出状況 本住居跡は、タルカ作遺跡の古墳時代住居跡群の中で、もっとも北のはずれに位置する。立地は、台地の平坦面上であるが、台地の突端に近く、北、東、西の三方は、すぐに斜面となっている。床面の標高は、34.10mである。台地下の現在の水田面の標高は、16m弱である。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。南寄りの炉を覆うかたちで、床面上に1m×0.6m前後の大さきの焼土の堆積がみられた。

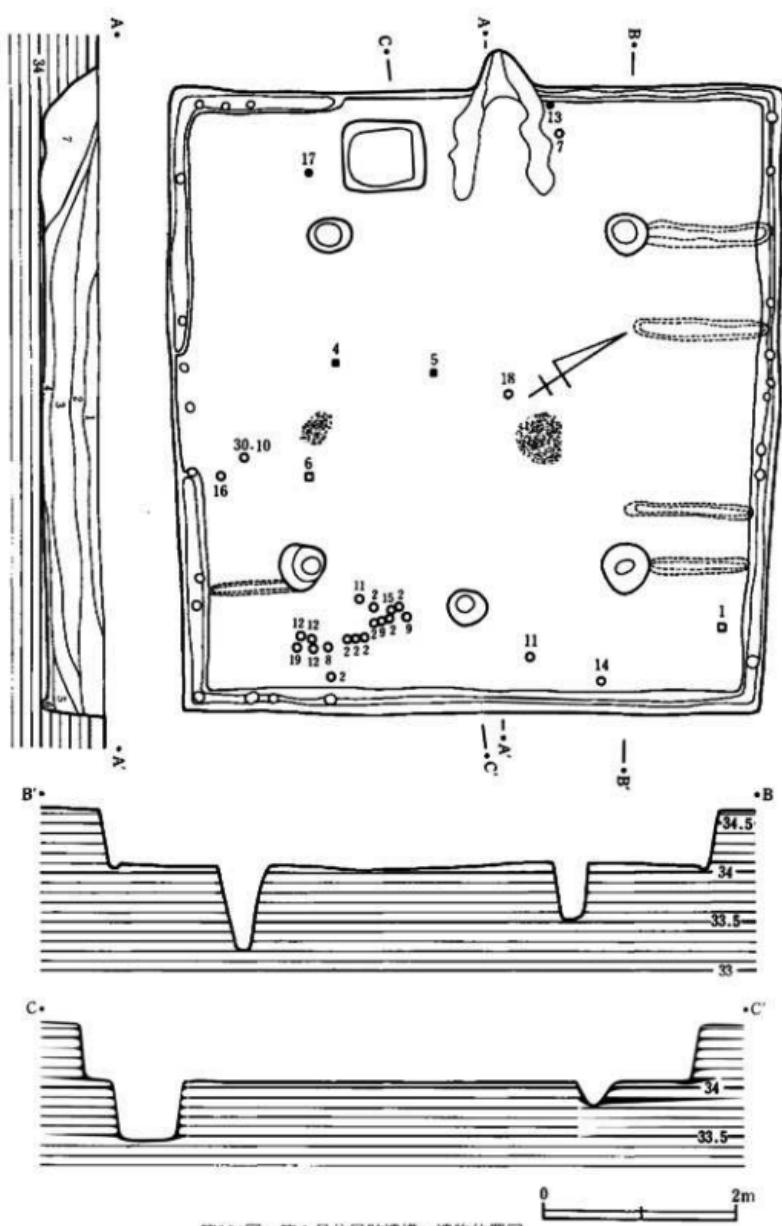
形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形である。カマドと向い合う南東側の辺がやや短くて6.1mであるほか、のこりの3辺は、6.3m~6.4mである。主軸の方位は、N-55°Wである。壁は、高さが45~60cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床 面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

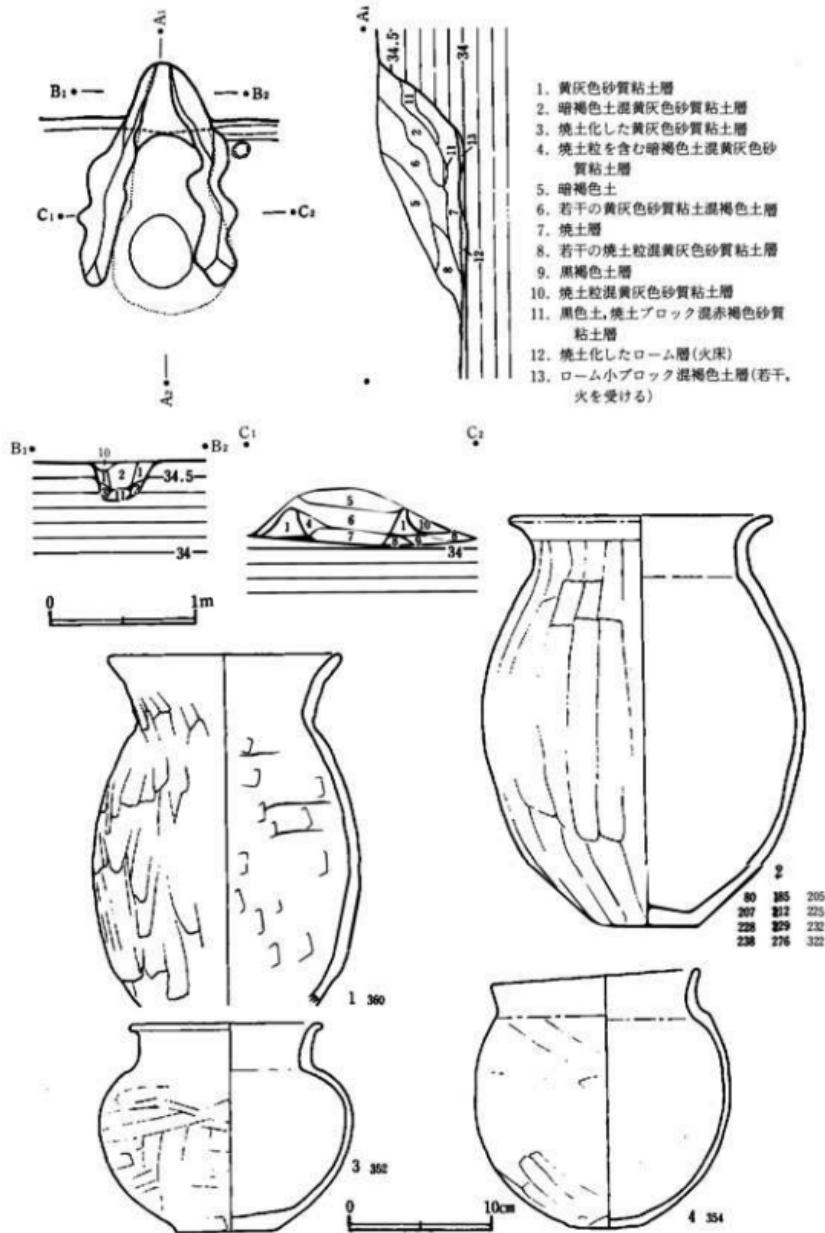
壁 溝 カマドおよび貯蔵穴の部分と、カマドに向って左側の南西壁の中央部分をのぞいて、ぐるりとあぐっている。幅10~20cm、深さ3~5cmで、断面はU字形である。

壁柱穴 壁溝の中を含めて、4つの壁に沿って、壁柱穴が、合わせて23個めぐっている。その間隔は、必ずしも同じではない。径4~5cm、深さ2~9cmである。

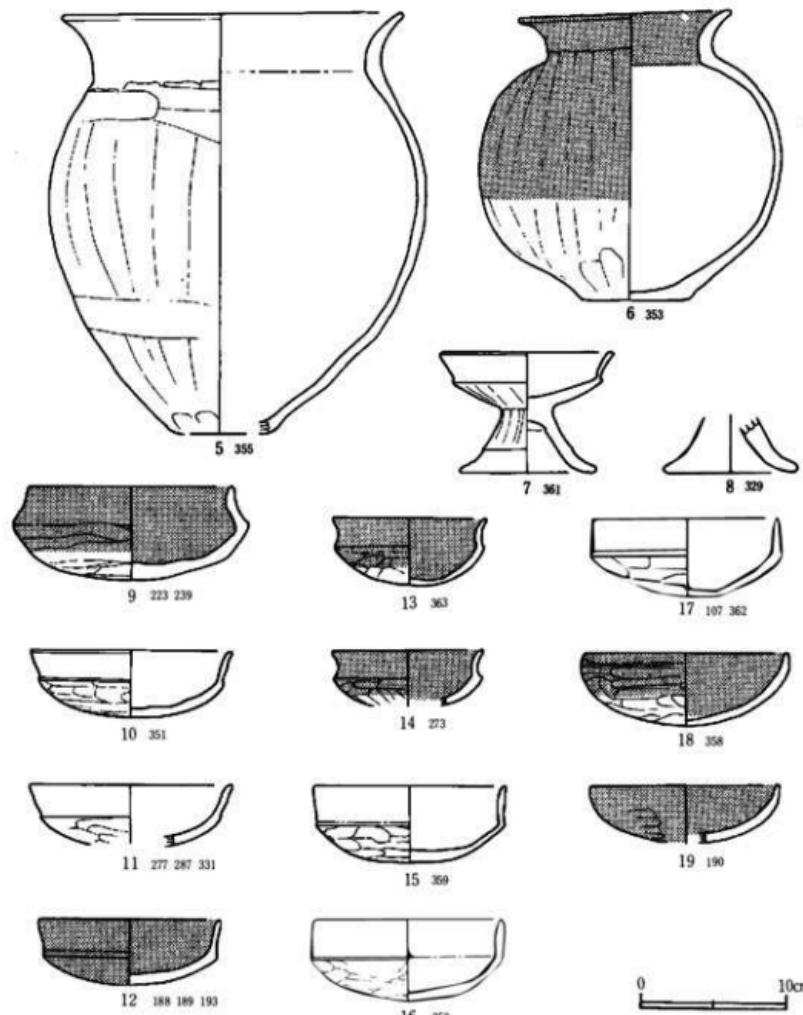
床 溝 カマドに向って右側に4本、左側に1本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅11~22cm、深さ4~5cmである。覆土は、床面の土とよく似て見分けにくい。



第104図 第1号住居跡遺構・遺物位置図



第105図 第1号住居跡カマド実測図(上)遺物実測図(下)(1)



第106図 第1号住居跡遺物実測図(2)

柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径35~51cm、深さ50~89cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びからはずれる。径33~41cm、深さ24~25cmである。

貯藏穴 カマドの左脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさは70cm×85cm、深さ64~67cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、粘質の茶褐色土、黒色土、暗褐色土、褐色土の順で、平らに堆積しており、このうち、黒色土と褐色土に焼土の若干の混入がみられた。中からは、土器

片が1点出土しただけである。

カマド 北西壁のほぼ中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅60cm、奥行き35cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。また、床を、焚き口から煙道に向って、細長く少し掘りくぼめている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。

炉 住居跡の中央近くで、2個所の炉跡がみつかった。いずれも、床面のハードロームが焼けて焼土に変わっている。

遺物出土状況 床面からは、カマドの右側で13の土師壺、貯蔵穴近くで17の土師壺半欠、床の中央から4・5の土師壺が出土した。また、床面から5~10cm浮いた状態で、覆土中から、3の土師広口壺、6の土師壺、7の土師高壺、10・15・16・18の土師壺が出土した。

覆 土 1. 黒褐色土層

5. 黑色土層

2. 褐色土層

6. 黄褐色土層

3. スコリア混入黑色土層

7. カマド

4. 茶褐色土層

第8表 第1号住居跡土器観察表

序 番 号	種 類	法 盤 (mm)			透 度	燒 成	色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整				出 土 状 況 (床 面 ～ (cm))	備 考	
		器 高	口 径	底 径					内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ			
1	壺	?	158	?	185	%	良	赤褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+9.4	
2	"	?	150	?	226	%	やや良	黒褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+12.6~+38.9	
3	広口壺	141	125	71	173	完	良	河原褐色 外側は明 青褐色、 内側は褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+10.0	
4	壺	168	143	52	175	#	#	赤褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+3.0	
5	"	294	235	?	260	#	#	赤褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+0.5 網中央に黒斑	
6	"	195	152	74	204	#	#	赤褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+10.0 内全面 外上半 赤彩	
7	高 壺	81	115	88	37	#	#	明褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+5.0 環部内外面に黒斑	
8	高 壺	-	-	-	-	河原部	#	明褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+21.8	
9	壺	63	143	-	163	%	#	赤褐色	密 黒石、石英 鐵粒、石粒 白母	内 外	ヨコナデ	網	ヨコナデ	+18.3~+20.5 赤彩。神社工具に より被用が跡に出現 (ミガキ風)が散射 状に描かれている	

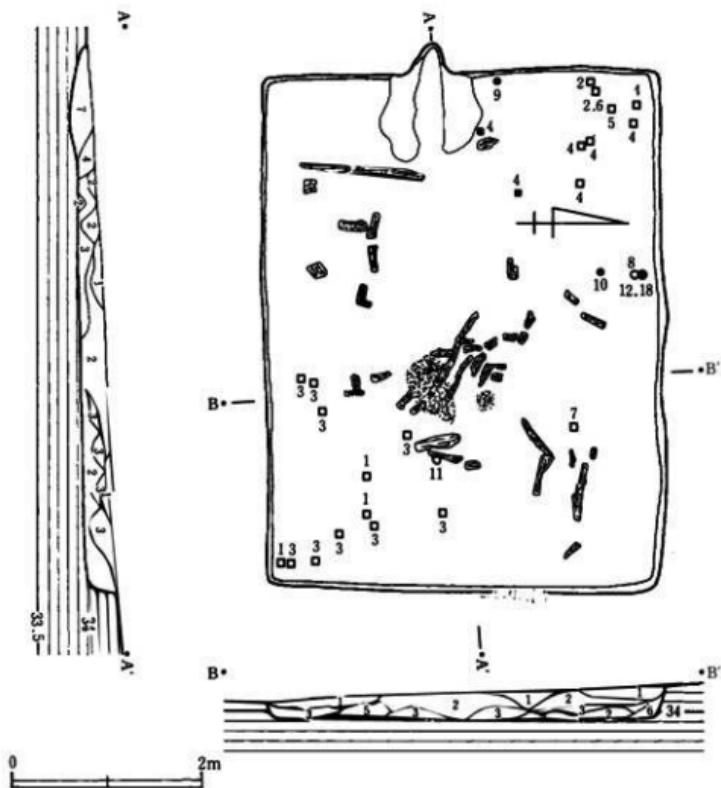
さく	層	法量(cm)			遺存度	構成	色調	胎土	成形・調整				出土状況(床面～)(cm)	備考
		高	口縁径	底部径					内	外	内	外		
10	坏	45	136	—	125	完	良	黒褐色 密粒石	内	#ヨコナダ	丁寧な ヨコナダ	丁寧な ヨコナダ	+5.0	内外黒色處理。ミ ガキはかけてない 為光沢はない。二次 焼成を受けている
11	#	?	138	—	127	%	#	明褐色 密粒石	内	#ヨコナダ	#ナダ	#ナダ	+13.0～+42.4	内外、黒色處理の 痕跡あり
12	#	44	124	—	120	%	#	赤褐色 外混に黒褐 密粒石 白雲母	内	#ヨコナダ	#ナダ	#ナダ	+26.2	赤影
13	#	45	105	—	103	完	#	黄褐色 密 白雲母	内	#ミガキ	#ミガキ	#ミガキ	-1.6	#
14	#	49	104	—	104	%	#	黄褐色 密 白雲母	内	#ミガキ	#ミガキ	#ミガキ	+15.5	#
15	#	52	133	—	130	完	#	淡赤褐色 密 白雲母	内	#	#ミガキ	#ミガキ	+9.0	
16	#	55	130	—	134	#	#	内暗赤色 外赤褐色 密粒石 白雲母	内	#	#ナダ	#ナダ	+5.0	口内に黒色處理 内は還元火
17	#	52	127	—	133	%	復	黒褐色 若干の 密 石	内	#	#ナダ	#ナダ	+2.6	
18	#	?	138	—	143	完	良	黄褐色 密 白雲母	内	#	#ナダ	#ナダ	+5.0	赤影
19	#	?	129	—	127	%	#	黄褐色 密 白雲母	内	#	#ナダ	#ナダ	+20.9	赤影

第2号住居跡(002) (第107・108図 第9・10表)

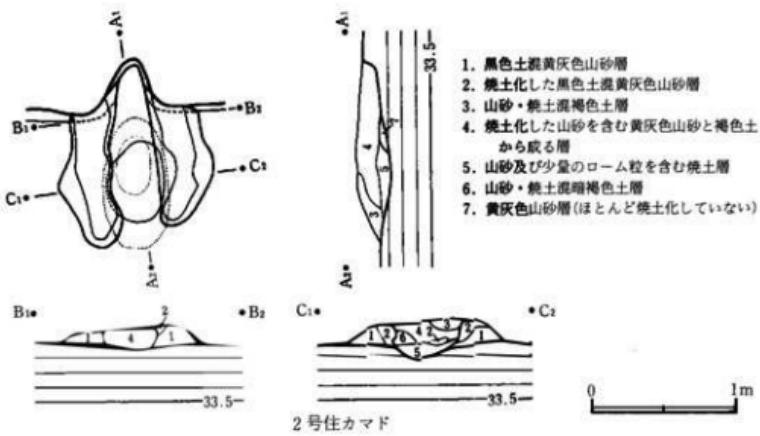
検出状況 本住居跡は、第1号住居跡の真南よりやや西寄り20mのところに位置する。立地は、台地の平坦面から斜面にかかるやや傾斜したところである。西側が斜面で、南に西へ向ってひらく小さな谷があり、その北側斜面に、本住居跡から20m前後はなれて、第40・41号住居跡がある。床面の標高は、33.90mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土の堆積状況は特異で、2層と3層の境が細かく波打っている。床面に転がった状態で炭化材が多数出土し、床面近くの覆土中に焼土と炭化物が混入していたことから、火災に遭っていると思われる。焼土塊が北東と北西の隅近くにあった。

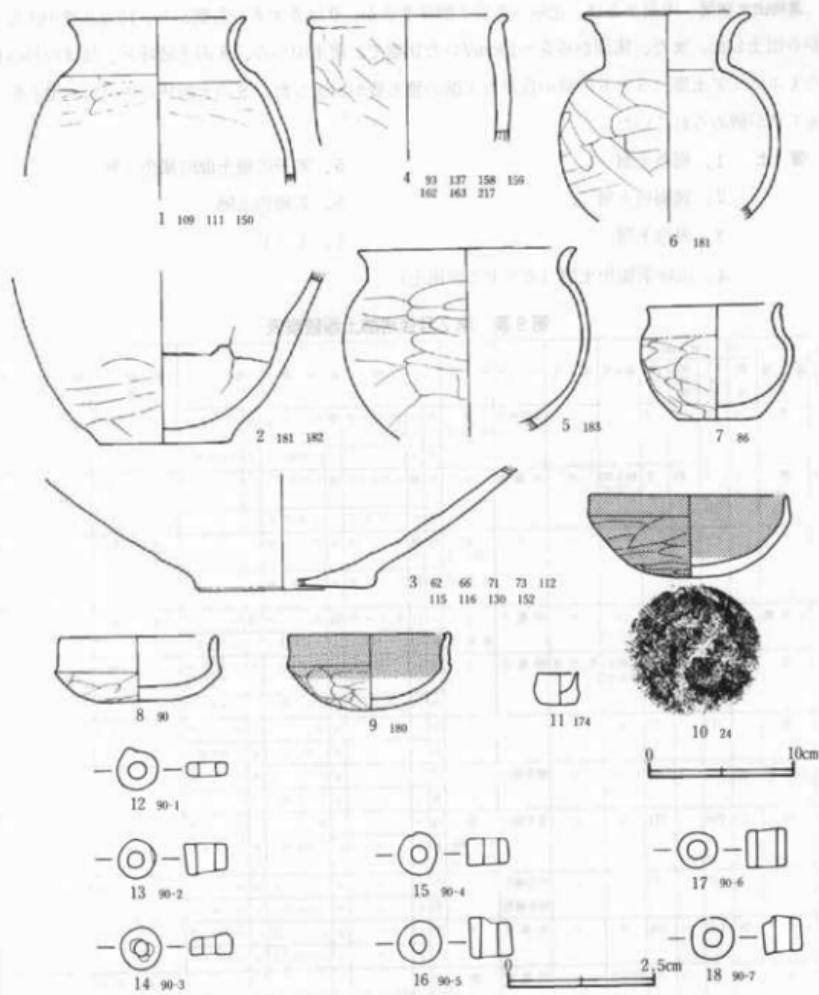
形状・規模 平面形態は、長方形である。長辺が5.2～5.4m、短辺が4.1～4.2mである。主軸の方位は、N-90°-Wである。壁は、高さが8～38cmであり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ソフトロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。中央部が堅緻であった。



第107図 第2号住居跡遺構・遺物位置図（上）カマド実測図（下）





第108図 第2号住居跡遺物実測図

古墳時代中期後半のもの

カマド 西壁の中央よりやや南よりに位置し、黄白色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅40cm、奥行き30cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。また、床を、焼き口から煙道に向って、細長く少し掘りくぼめている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。

炉 住居跡の中央よりやや東寄りで、2個所の炉跡がみつかった。いずれも、床面が焼けて焼土に変わっている。

遺物出土状況 床面からは、完形の赤彩土師壺2点が、9はカマドの右側から、10は北壁中央近くから出土した。また、床面から5~10cm浮いた状態で、覆土中から、8の土師壺と、ほぼ完形の11のミニチュア土器、5と6の底の抜けた土師の壺と壺が出土した。8の土師壺の中には、滑石製白玉7点が納められていた。

- | | | |
|-----|----------------------|----------------|
| 覆 土 | 1. 褐色土層 | 5. 若干の焼土混暗褐色土層 |
| | 2. 黄褐色土層 | 6. 茶褐色土層 |
| | 3. 黒色土層 | 7. カマド |
| | 4. 山砂混褐色土層 (カマドの流出土) | |

第9表 第2号住居跡土器観察表

品種	法量 (mm)				遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整				出土状況 (床面～) (cm)	備考	
	幅	口縦径	口横径	厚径					内口	コナデ	内側	ヘラナデ	外側		
1 瓢	?	120	?	?	×	良	淡赤褐色	密粒石	内口	コナデ	内側	ヘラナデ	外側	ヘラケズリ	+21.0
2 瓢	?	?	89	?	房上部～底光	?	赤褐色	?	内側	ヘラケズリ	内側	ヘラケズリ	外側	ヘラケズリ	+4.0
3 #	?	?	123	?	底のみ光	?	?	密粒の石英 火照母	内側 下	コナ	デコナ	デ	外側 下	ミガキリ	+9.7～+17.3
4 小型 瓢	?	138	?	?	?	明褐色	密粒石	内側 外側	内口	コナデ	内側	デコナ	外側	ヘラケズリ	+0.7～+21.9
5 瓢	?	147	?	171	底部を錆き光	やや良	暗褐色	?	内側	?	?	?	?	?	+10.0
6 瓢	?	113	?	152	?	?	?	?	内側	?	?	?	?	?	+9.0
7 小型 瓢	80	93	?	109	?	?	暗赤褐色	?	内側	?	?	?	?	?	+6.5
8 壺	43	108	-	114	完	良	淡赤褐色	密 呑子の微粒 石白雲母	内側 外側	?	?	?	?	?	+7.0
9 #	50	110	-	112	?	?	内明褐色 外赤褐色	?	内側	?	?	?	?	?	+3.0 赤影
10 #	54	135	-	140	?	?	赤褐色	?	内側	?	?	?	?	?	-0.4 #
11 ミニチュア	21	27	24	-	ほぼ光	?	明褐色	密	内側						+15.3～+31.5
								外側							

第10表 第2号住居跡石製品観察表

品種	法量				遺存度	焼成	色調	胎土	せ い け い				出土状況 (床面～) (cm)	備考
	幅	長さ	丸徑	重量					内口	外口	内側	外側		
12 白玉	7	2	3	0.15	完	-	暗灰色	-	外面研磨面		+	12.0	滑石製 (~18同一素材を切削)	
13 #	7	5	3	0.3	?	-	?	-	?	?	?	?	+	12.0 #
14 #	7	2.5~3.5	2.5~3	0.2	?	-	?	-	?	?	?	?	+	12.0 #
15 #	7	5	3	0.3	?	-	?	-	?	?	?	?	+	12.0 #
16 #	7	5.5~6.5	3	0.3	?	-	?	-	?	?	?	?	+	12.0 # * 切削時破損部あり
17 #	7	6.5	3	0.4	?	-	?	-	?	?	?	?	+	12.0 #
18 #	7	5~6.5	3	0.4	?	-	?	-	?	?	?	?	+	12.0 # * 切削時の段差あり

第3号住居跡（003）（第109～111図 第11表）

検出状況 本住居跡は、第1号住居跡の東20mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。北側がすぐ谷で、東に北へ向かってひらく大きな谷がある。床面の標高は、33.90mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形である。西側の一辺が短い。四辺の長さは、6.1～6.5mである。主軸の方位は、N-20°-Eである。壁は、高さが49～71cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドと向い合う住居跡南側に、逆U字形にめぐる土手状の高まりが、削りのこされていた。

壁溝 貯蔵穴に近い住居跡の北西隅をのぞき、ぐるりとめぐっている。幅10～25cm、深さ1～9cmで、断面はU字形である。

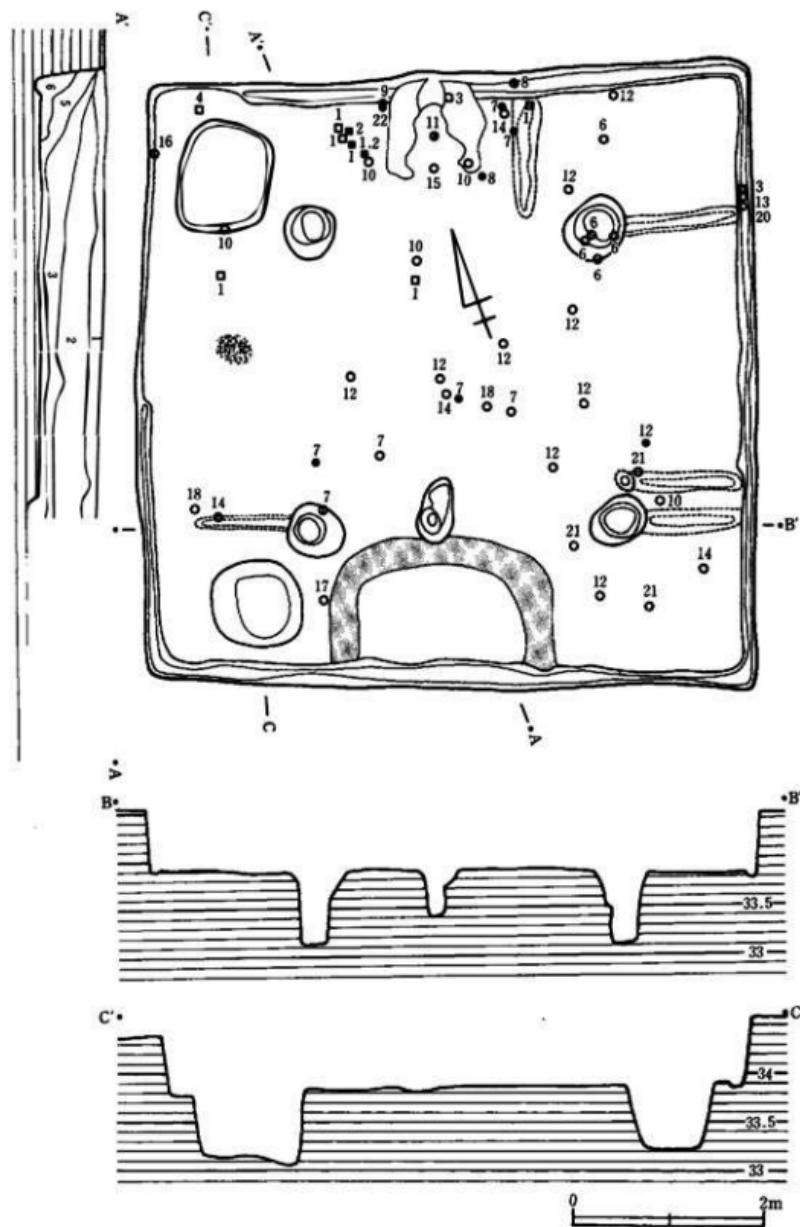
床溝 カマドの右脇と、カマドに向って右側に3本、左側に1本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅10～26cmで、深さは、南東と南西の柱穴につくものが4cm前後で、のこる3本が13cm前後である。右側の南から2本目の溝の先には、径10cmのピットがある。

柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径46～70cm、深さ74～75cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びにのる。長楕円形で、長径70cm、短径40cm、深さ50cmである。

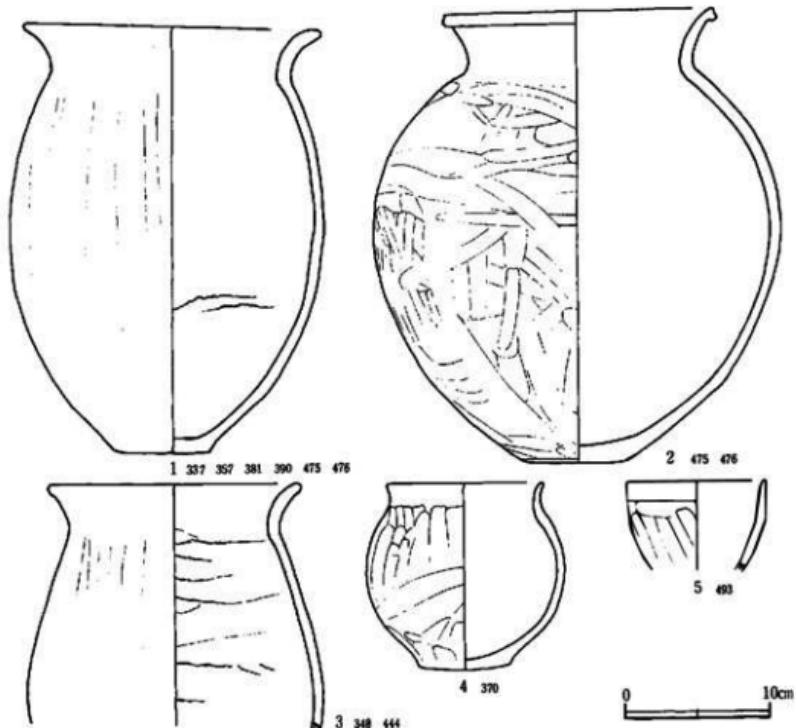
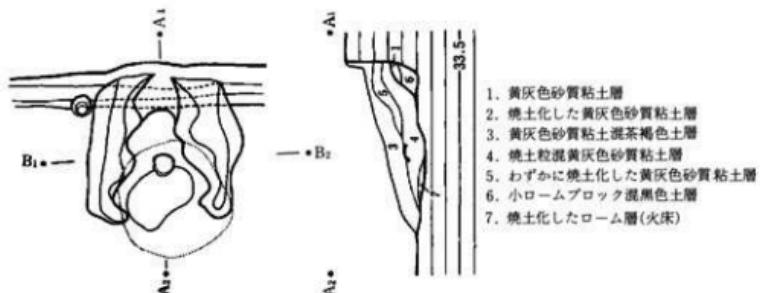
貯蔵穴 北西隅と南西隅にある。北西隅のものは、北壁のカマドに伴なうもので、南西隅のものは、旧く西壁にあって取りのぞかれたカマドに伴なっていたものと思われる。北西隅のものは、平面形態は、隅丸長方形で、110cm×95cm、深さ60～70cmである。底は、まん中がやや高まっている。覆土は、下の方にローム主体の黄褐色土が40cm程度厚く堆積し、その上に黒褐色土が堆積していた。南西隅のものは、平面形態は、ほぼ隅丸正方形で、一辺90～95cm、深さ70cmである。覆土は、ほとんど黄褐色土から成り、底の方に黑色土の堆積がみられた。黄褐色土は、ロームを主体とする。床面に近いところで、焼土がわずかながら含まれていた。口のところは堅くしまっており、北壁にカマドがつくられる際に埋められたものと思われる。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁への煙道の掘り込みは無い。焚き口から火床にかけて、丸く少し掘りくぼめている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。北壁中央のカマドの前に、西壁の中央にカマドが築かれていたようで、火床のこりと思われる丸く焼土化した床面と、それと西壁のあいだの黄灰色砂質粘土を含む茶褐色土の床面への堆積が、みられた。

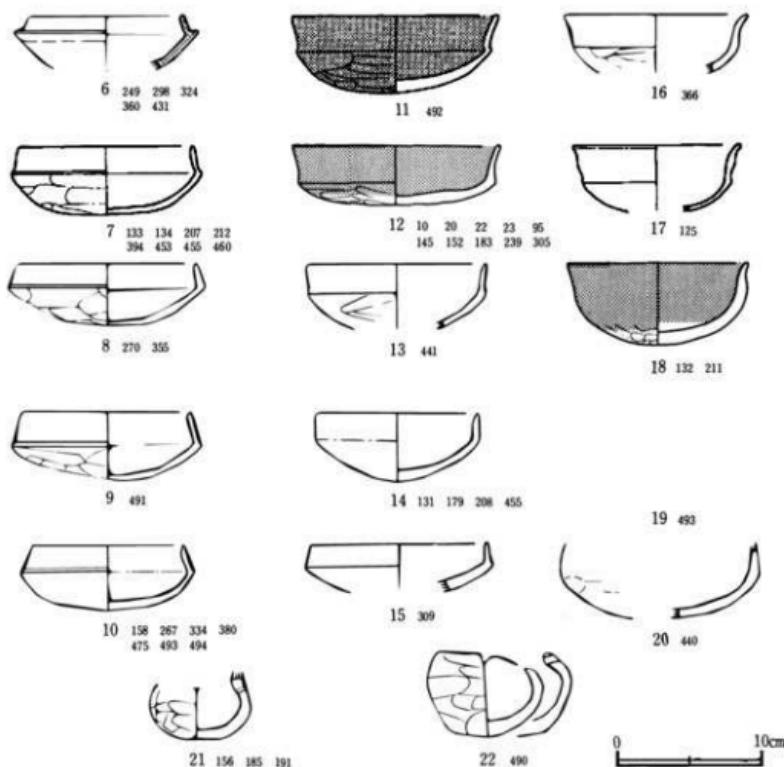
遺物出土状況 カマドの周辺に集中して、床面で、9の土師壺と、完形に近い8の土師壺、1と2の土師甕が、置かれた状態で出土した。同じくカマド近くの床面から出土した22の有孔異形土器は、頭を形どったものであろうか。カマドの覆土中から出土した11の赤彩の土師壺は、たまたま落ち込



第109図 第3号住居跡遺構・遺物位置図



第110図 第3号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）（1）



第111図 第3号住居跡遺物実測図(2)

んだものと思われる。熱を受けた痕跡は無い。

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 覆 土 1. 下部焼土堆積ローム粒混暗褐色土層 | 4. ローム粒混、黒褐色土と褐色土から成る暗褐色土層 |
| 2. 褐色土、少量のローム粒混暗褐色土層 | 5. 褐色土、ローム粒混暗褐色土層 |
| 3. ローム粒、少量の褐色土混黒褐色土層 | 6. 暗褐色土とローム粒から成る黄褐色土層 |

第11表 第3号住居跡土器観察表

器種 No.	法量 (mm)				透度	桃	成色	調査	胎土	成形・調整					出土状況 (床面～) (cm)	備考
	高 さ	口 径	底 径	厚 さ						内 口	ヨコナダ	内 ナ	ア	内 ナ	ア	
1 瓢	269	208	68	220	光	良	淡赤褐色	密	密粒石外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ	+ 1.7～+ 26.1	
2 #	309	192	81	280	#	#	淡黃褐色	#	内	#	#	#	ナ	ア	+ 1.7	
3 #	?	176	?	206	%	#	赤褐色	#	内	#	#	#	ナ	ア	+ 7.3～+ 49.5	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
										#	#	#	後ヘラナデ	後ヘラナデ		
4 小型瓢	125	110	66	140	%	淡赤褐色	#	#	内	#	#	#	ナ	ア	+ 11.5	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
5 #	?	100	?	105	%	やや良	暗黃褐色	#	内	#	#	#	ナ	ア	カマド内 + 13.0	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
6 漆壺	?	105	-	128	%	良	明灰色	#	内	#	ヨコナダ	#	ロクロ		+ 19.6 ± 32.5	内面にタール状の 底点あり
									外	#	#	#			8.9	
7 环	47	122	-	132	%	#	内黒褐色	#	内	#	ヨコナダ	#	ミガキ	#	- 0.5～+ 14.5	
							外黒褐色	#	外	#	#	#	ハラケズリ	#		
8 #	41	126	-	13.8	%	#	内黒褐色	外暗黃褐色	#	内	#	#	#	難なみがき	+ 3.0±11.1	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
9 #	46	116	-	130	光	#	明黄色	密	内口	#	#	#	ナ	ア	+ 20	
							白	白	外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
10 #	44	106	-	120	%	#	赤褐色	密	内	#	#	#	ナ	ア	+ 7.5～+ 51.4	
							微粒石	外	外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
11 #	545	144	-	140	%	#	#	密	内	#	#	#	ナ	ア	+ 13.0赤影	
							微粒石	白	外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
12 #	40	145	-	139	%	#	内赤褐色	密	内	#	ヨコナダ	#	ナ	ア	- 1.3～+ 43.0赤影	
							外暗黃褐色	微粒石	外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
13 #	?	128	-	126	%	#	黄褐色	#	内	#	#	#	ていねいな ナ	ア	+ 7.3	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
14 #	47	114	-	116	%	#	淡赤褐色	#	内	#	#	#	ミガキ	ミガキ	- 2.5～+ 49.2	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
15 #	?	126	-	136	%	#	#	#	内	#	#	#	ミガキ	ミガキ	+ 25.0	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
16 #	?	128	-	116	%	#	黄褐色	#	内	#	#	#	ていねいな ナ	ア	+ 16.2	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
17 #	?	115	-	105	%	#	内淡黃褐色	外黑褐色	#	内	#	#	ナ	ア	+ 41.0	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
18 #	55	125	-	120	%	#	暗赤褐色	#	内	#	#	#	ていねいな ナ	ア	+ 10.5～+ 35.0赤影	
									外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
19 #	60	131	-	132	%	#	黄褐色	#	内	#	#	#	ナ	ア	- 一無	
							白	白	外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		
20 #	?	132	-	138	%	#	密	黑褐色	内	#	#	#	ナ	ア	+ 6.1	
							微粒石	白	外	#	#	#	ハラケズリ	ハラケズリ		

記 号	器 種	法 式 (mm)				造作度	焼 成	色	質	土	成 形・調 整				出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考
		器 高	口 縦 径	底 縦 径	側 縦 径						#	太めの棒状 工具による ナ	太めの棒状 工具による ナ	#		
21	ミニチュア	?	?	—	76	#	やや良	暗黄褐色	鐵 軽石	内	#	太めの棒状 工具による ナ	太めの棒状 工具による ナ	#	+30.0～+58.5	
										外	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		
22	有 底 土 器	?	?	—	80	削下半 のみ	良	#	#	内	#	ナ	ナ	#	+4.0厚手	
										外	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		

第4号住居跡(006)(第112～117図 第12・13表)

検出状況 本住居跡は、第3号住居跡の南20mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.90mである。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。壁際がまず埋まったのち、中央が埋まったことがよくわかる。

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺6.9～7.2mである。主軸の方位は、N-25°Wである。壁は、高さが53～66cmあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 ハードロームを平らに削って床としているが、北東の主柱穴近くは、一段埋めている。

壁 溝 カマドの部分をのぞき、ぐるりと全周している。幅4～9cm、深さ1～8cmで、断面はU字形である。

床 溝 貯蔵穴の右に1本：カマドに向って右側に5本、左側に6本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。右側の3本の溝の先をつないで、東壁に平行に1本の溝が走る。右側の太い溝2本は深さが10cm前後、のこりは深さが5cm前後である。東壁に平行する溝は、壁側の掘り込み面が高く、反対側の掘り込み面が低い。幅は、10～30cmである。

柱 穴 主柱穴が4つ、副柱穴が2つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径49～66cm、深さ44～50cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びからはずれる。北側のものは、径40～44cm、深さ17cmで、南側のものは、径44～48cm、深さ34cmである。

貯蔵穴 カマドの右脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさは50cm×60cm、深さ60～68cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、ローム主体の黄褐色土、黒褐色土、黄褐色土の順で堆積していた。

ピット 北東隅近くの床面のものは、径36～38cm、深さ7cmである。南東隅外側のものは、径46～50cm、深さ15cmである。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅40cm、奥行き20cmの半月状に掘り込んで、煙道がつくられている。また、床を、隅丸方形にゆるく掘りくぼめている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけである。中から土製支脚が出土した。

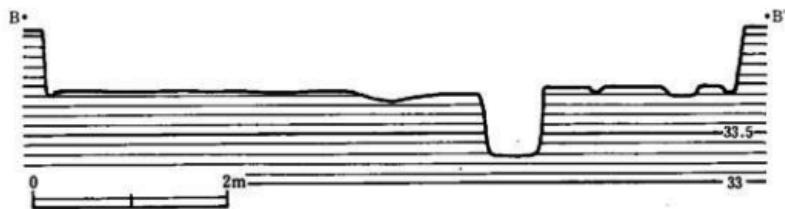
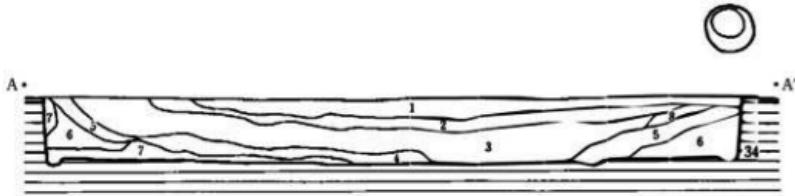
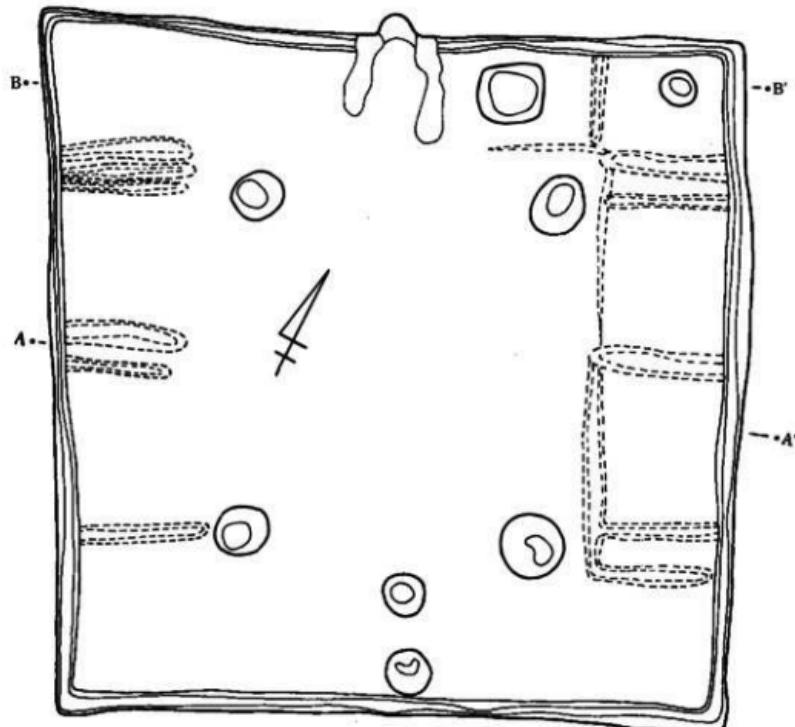
遺物出土状況 南東の柱穴から、逆さで3の土師壺が出土した。床面から5cm程度浮いた状態で、

24のミニチュア土器が出土した。上述の南東隅外側のピットから、完形の18、完形近くまで破片の
壊す17・21の土師壊が出土した。割れて出土したものは、破片が散っているが、完形に復原できた
ものが目立つ。勾玉・管玉・紡錘車はいずれも床面からやや浮いて出土している。

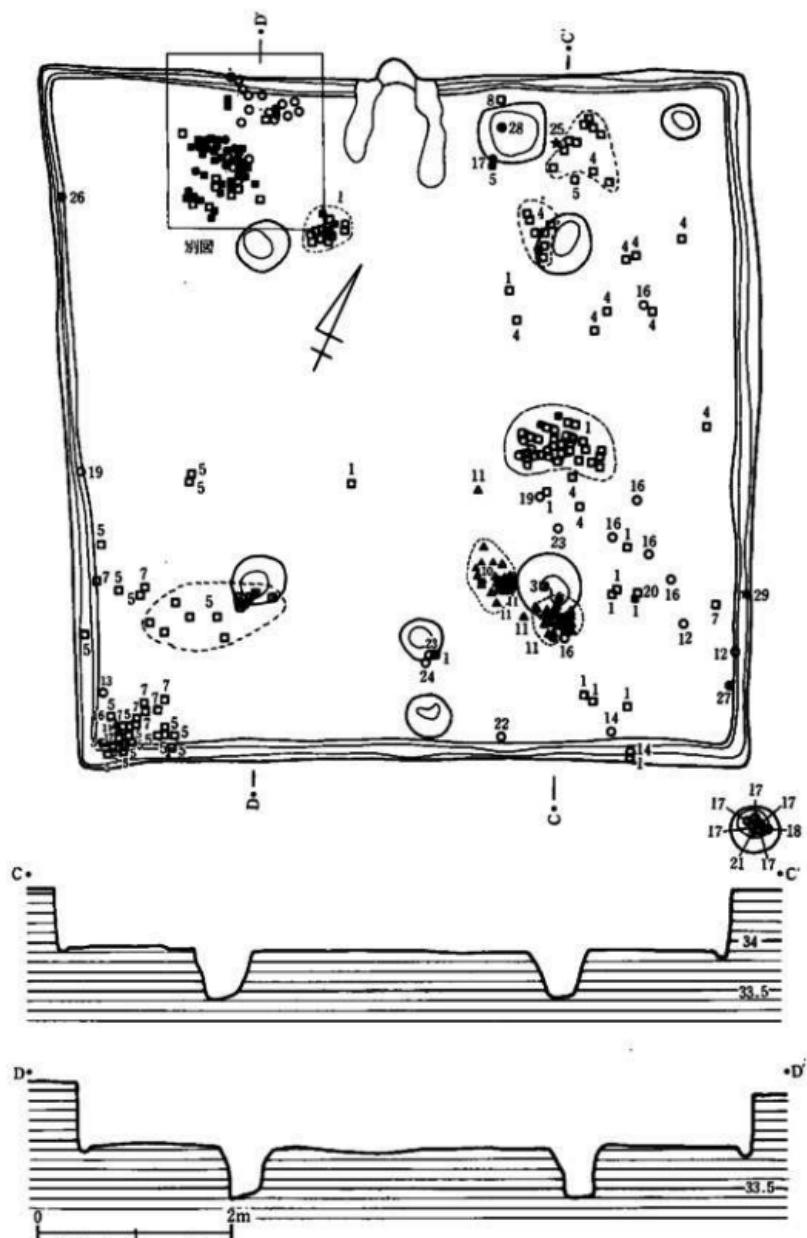
- | | | |
|----|--|---|
| 覆土 | 1. 下部に焼土混暗褐色土層
2. 少量ローム粒混、褐色土と黒色土から成る黒褐色土層
3. 大粒ローム粒混暗褐色土層
4. ローム粒、少量のロームブロック混黒褐色土層 | 5. 褐色土、少量のローム粒混暗褐色土層
6. 黒色土、やや粒の大きいローム粒混褐色土層
7. 少量のロームブロック、ごく少量のローム粒混黒褐色土層
8. ロームから成る黄褐色土層 |
|----|--|---|

第12表 第4号住居跡土器觀察表

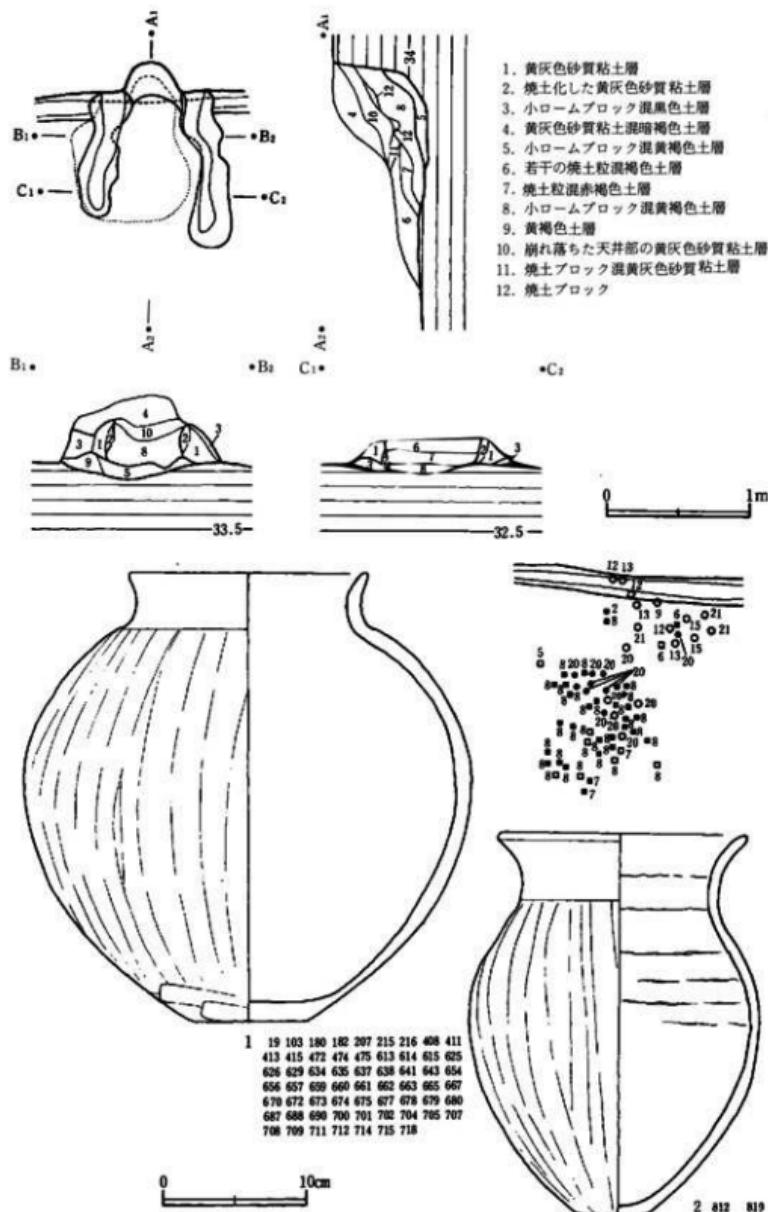
器種	法量(cm)						造密度	焼成	色調	胎土	成形・調整					出土状況 (床面～) (cm)	備考		
	器高	口幅	底幅	開底径	造密度	焼成					内	口コナデ	側ナデ	良ナデ	外	#	#		
1 瓢	305	165	86	316	1/4	良	密	赤褐色	密	内	口コナデ	側ナデ	良ナデ	外	#	#	+3.0～+44.5	使用により表面より剥離	
											外	#	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		
2 #	256	169	43	204	脚下部 欠他充	#	赤褐色	密石、石英 粒石	密	内	口コナデ後 ルガキ	側ナデ	良ナデ	外	#	#	#	+2.1カマド	
											外	#	#	#	ヘラケズリ				
3 #	276	170	104	263	充	#	赤褐色	脚下部 半に異質	密	内	口コナデ	側ナデ	良ナデ	外	#	#	#	+24.5	南東柱穴内遺物出土
											外	#	#	#	ヘラケズリ				
4 #	?	164	?	280	脚上半 充	#	赤褐色	#	密	内	#	#	#	ヘラナデ	#	ヘラナデ	+16～+31.4		
											外	#	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		
5 #	245	205	77	255	充	#	黒褐色	密	密	内	#	#	#	ヨコナデ	#	ヨコナデ	-1.6～+54.5		
											外	#	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		
6 #	344	176	85	217	脚下部 欠他充	#	内黒褐色 外褐色	石子の石英 粒石	密	内	ヨコナデ後 ルガキ	側ナデ	良ナデ	外	#	#	#	+6.7～+3.8	脚外側中央に黒斑 あり
											外	#	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		
7 #	199	173	65	191	1/4	#	赤褐色	密	密	内	ヨコナデ	側ナデ	良ナデ	外	#	#	#	+2.5～+34.3	脚と底は接着せず 底裏あり
											外	#	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		
8 #	?	184	?	222	底欠 その他 X	#	暗褐色	密	密	内	#	#	#	ヘラナデ	#	ヘラナデ	-0.6～+15.5		
											外	#	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ		
9 #	?	173	?	206	上半部 のみX	#	赤褐色	密	内	#	#	#	#	ナデ					
											外	#	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラナデ		
10 瓢	217	196	82	—	1/4	#	赤褐色	粗	内	#	?	?	?				+0.4～+25.6	内面は使用による 黒化が進み剥離 が著しく調査根は 不明	
											外	#	ヨコナデ	#	ヘラケズリ				
11 #	195	224	70	—	充	#	灰褐色	密	内	#	#	#	#	底	#	ヘラケズリ	+4.4～+30.6		
											外	#	#	#	#	#			
12 漆器壺	51	100	—	124	充	良	灰褐色	密	内	口ヨコナデ	側	ロコロ	底	ロコロ			+7.5～36.0		
											外	#	#	#	上ロコロ	#	田ヘラケズリ		



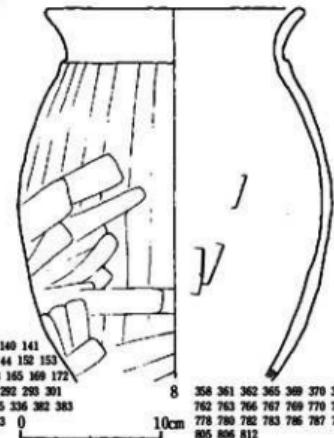
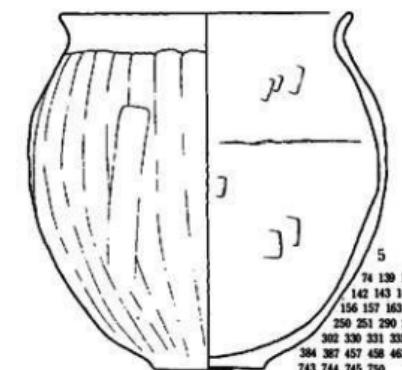
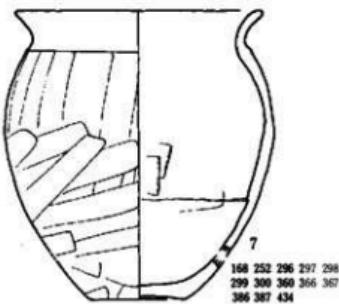
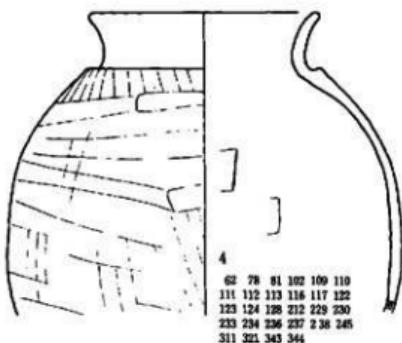
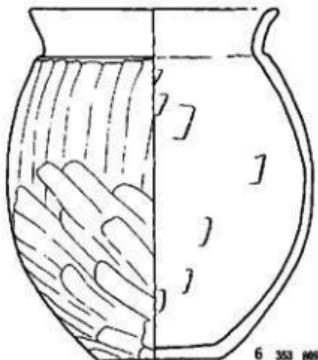
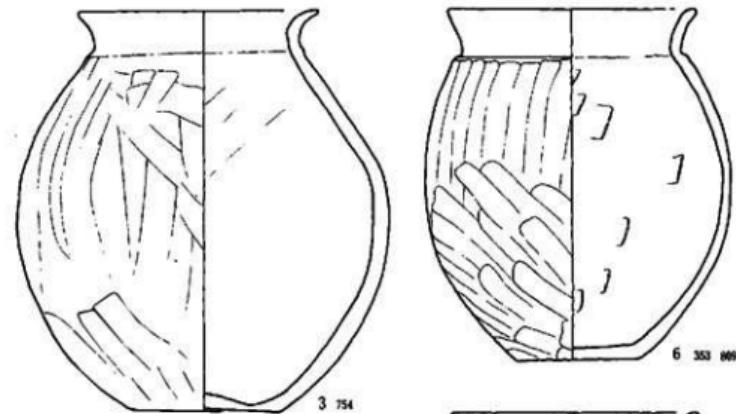
第112図 第4号住居跡遺構図



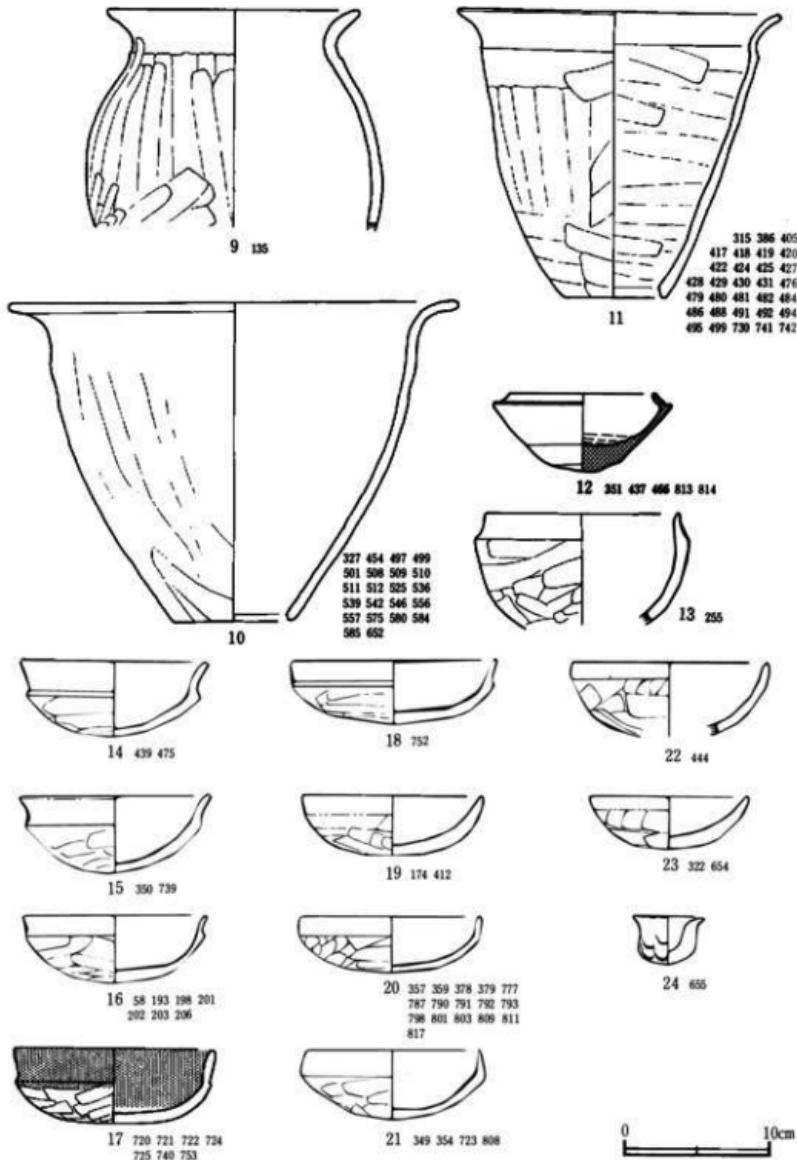
第113図 第4号住居跡遺物位置図



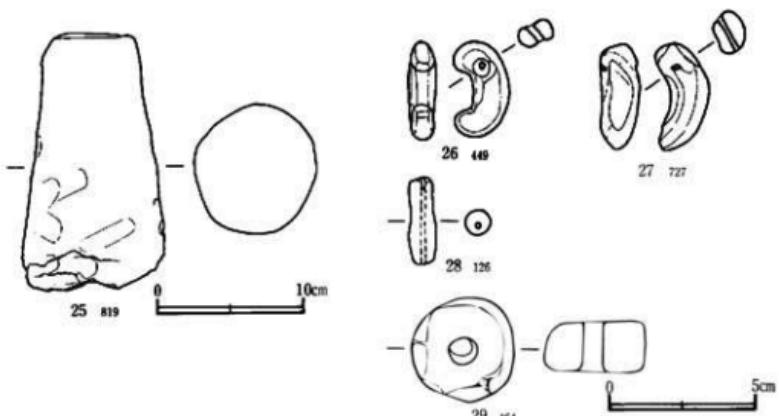
第114図 第4号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）(1)



第115図 第4号住居跡遺物実測図(2)



第116図 第4号住居跡遺物実測図(3)



第117図 第4号住居跡遺物実測図(4)

器種	法量 (mm)	断面度	形	色調	胎土	成形・調査				出土状況 (床面～) (cm)	備考	
						内	ヨコナダ後 ミガキ	網	ミガキ			
13 棺	? 135	—	148	底は欠 %	及	内黒褐色 外褐褐色	金雲母 長石、石英	内口	ヨコナダ後 ミガキ	網	ミガキ	+39.4
								外	#	#	# ヘラケズリ 後ミガキ	
14 环	51 130	—	120	充	#	暗褐色 白雲母	密	内口	ヨコナダ後 縫いみがき	# ナ	デ	+10.4～+48.4
								外	# ヨコナダ	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ	
15 #	51 134	—	121	#	#	#	密	内	# ミガキ	# ミガキ	# ミガキ	+12.9～+22.4
								外	# ヨコナダ	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ	
16 #	50 124	—	123	%	#	淡褐色 密	白雲母	内口	ヨコナダ	# ナ	デ	+29.8～+39.1
								外	#	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ	
17 #	50 140	—	132	%	#	淡褐色 密	白雲母 石英	内口	ヨコナダ後 ミガキ	# ナ	デ	-7.2～+27.7
								外	# ヨコナダ	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ	口縁部内外赤色 住居跡外ピット内
18 #	43 144	—	140	充	#	黄褐色 金雲母	密	内口	ヨコナダ	# ナ	デ	+14.0
								外	# ヨコナダ	# ヘラケズリ 後縫いヘラ ミガキ	# ヘラケズリ 後ミガキ	住居跡外ピット内
19 #	41 126	—	119	%	#	内褐色 外褐褐色	密	内	#	#	ミガキ	+6.9～+26.2
								外	#	#	# ヘラケズリ 後ミガキ	
20 #	33 126	—	126	ほぼ充	#	淡赤褐色	#	内	ミガキ	# ミガキ	# ミガキ	+1.2～+10.1
								外	# ヨコナダ	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ	
21 #	46 120	—	130	充	#	内黑色 外褐褐色	白雲母	内口	#	# ミガキ	# ミガキ	+9.3～+21.0
								外	#	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ	住居跡外ピット内
22 #	? 176	—	—	%	#	黑灰色 密	#	内	#	# ナダ後ミガキ	# ナダ後ミガキ	+3.4
								外	#	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ	
23 #	35 110	—	—	%	#	内黒褐色 外褐色	#	内口	ミガキ	底	ミガキ	+3.9～+26.2
								外	# ヘラケズリ	# ヘラケズリ		
24 リニア	32 49	—	—	充	#	内黒(黒褐色) 外褐色	#	内口	ヨコナダ	網	手こね底	+5.3
								外	#	#	#	

第13表 第4号住居跡土製品・石製品観察表

番 号	器 種	法 量			遺存度	構 成	色 調	胎 土	せ い け い	出土状況 (底面~) (cm)	備 考
		幅(D)(cm)	高(高)(cm)	孔径(cm)							
25	土製支脚	96	170	—	1150	?	二次焼成	褐色	砂(多)	カマド一基	
26	青石勾玉	11.5	62	1.5	7.5	完	灰	白色	—	外表面入念な研磨	+3.2 空孔は一方から
27	土製勾玉	13	36	1~3	6.6	完	灰	黑色	微細砂	外表面粗雑な研磨	+6.5
28	土製管玉	9	27.5	1.5	2.9	完	灰	黑色	粗	外表面入念な研磨	+7.7
29	土 師 範 草	35	17	6.5	22.4	完	灰	褐色	微細砂	表面研磨	+6.9

第5号住居跡(007) (第118~120図 第14表)

検出状況 本住居跡は、第4号住居跡の南西15mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、34.00mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺は、5.5~5.7mである。主軸の方位は、N-75°-Wである。壁は、高さが46~62cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床はおこなっていない。全体に堅緻であった。北東隅の貯蔵穴を囲むように、くの字形に土手状の高まりを削りのこしている。幅29~36cm、高さ2~3cmである。

壁溝 カマドの右脇をのぞき、全周している。幅6~14cm、深さ3~6cmで、断面はU字形である。

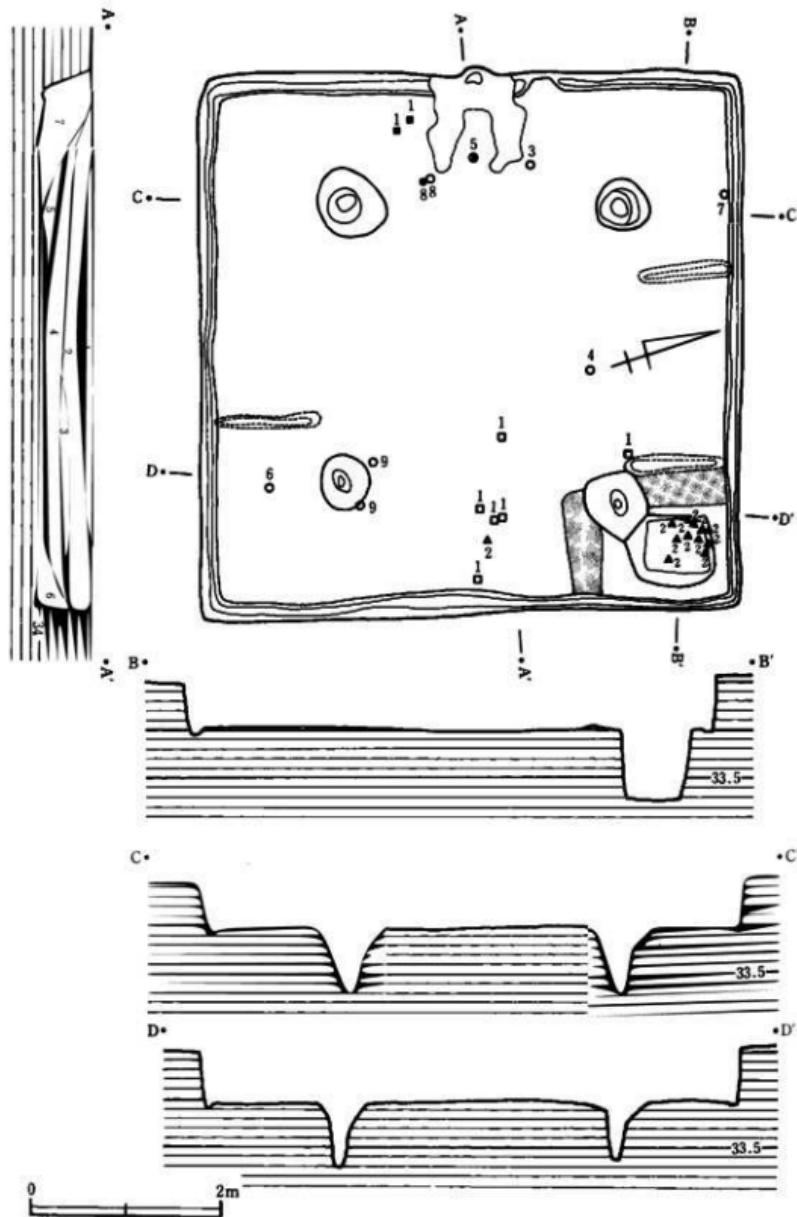
床溝 カマドに向って右側に2本、左側に1本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅8~20cm、深さ10cm前後である。

柱穴 4つみつかった。それぞれ対角線上に位置する。径50~70cm、深さ67~84cmである。

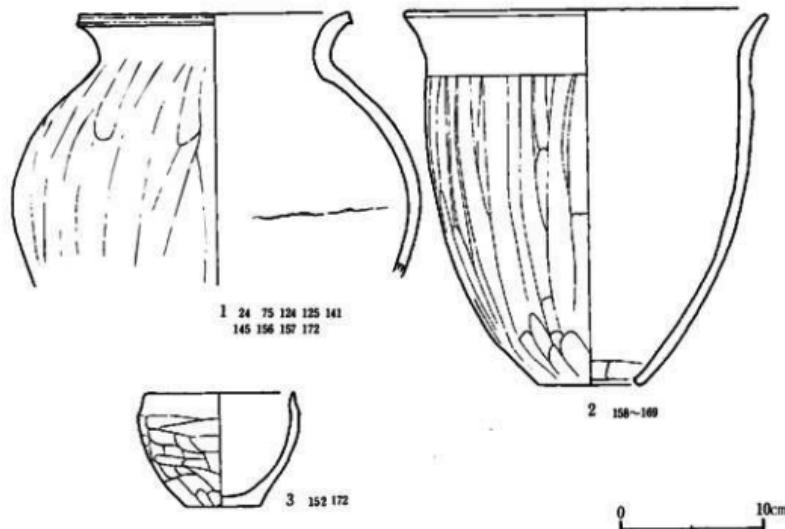
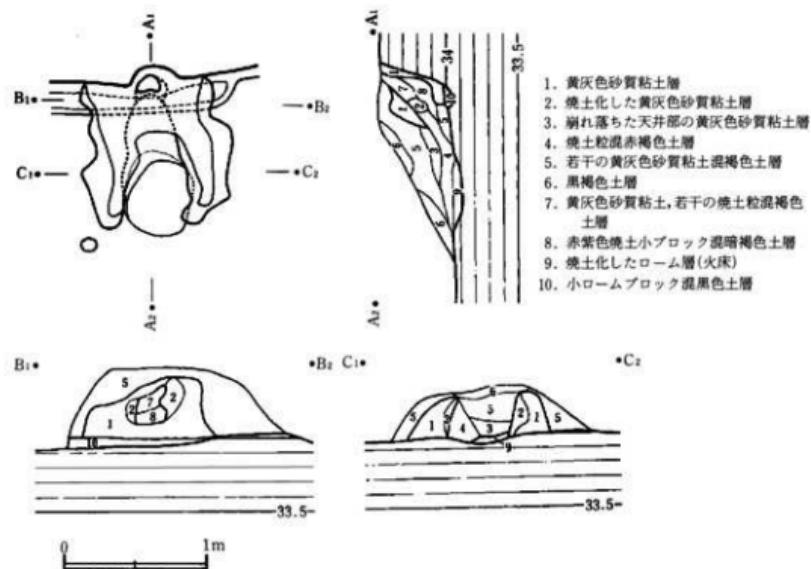
貯蔵穴 カマドからはなれて、北東隅に位置する。柱穴と近接する。柱穴を抜きとる際に柱穴とのあいだの床が崩れて、柱穴とくっついたものであろう。平面形態は、長方形である。口の大きさは60cm×80cm、深さ76cmである。底は平らである。覆土は、ロームを主体とする黄褐色土が穴のかたちに堆積した中に、ローム混黒褐色土がほぼ口まで堆積し、その上にローム混暗褐色土がのっていた。

カマド 西壁中央に位置し、黄白色の山砂を主として構築されている。ローム壁を幅40cm、奥行き10cmの半月状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床は、はっきりとしていて、少しへこんでいる。天井部はのこっていたが、掛け口の位置は、はっきりしない。

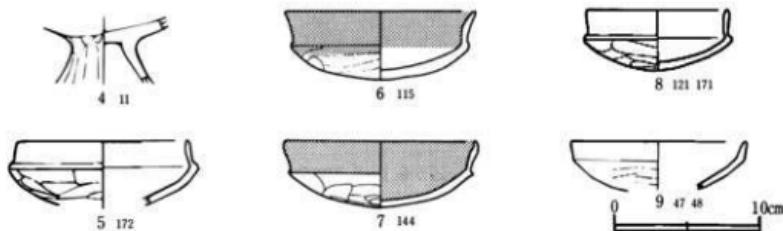
遺物出土状況 床面からは、カマドの左前で、8の土師壺が、完形に近い状態で出土した。床面から浮いた状態とカマド内からの一括出土で、3の土師小型鉢1個体分近くの破片が出土した。貯蔵穴中から、2の土師瓶の1個体分近くの破片が出土した。



第118図 第5号住居跡遺構・遺物位置図



第119図 第5号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）(1)



第120図 第5号住居跡遺物実測図(2)

覆 土 1. 茶褐色土層

2. 茶褐色土混暗褐色土層

3. 焼土粒混褐色土層

4. 黒色土層

5. 暗褐色土層

6. 小ロームブロック混黄褐色土層

7. カマド

第14表 第5号住居跡土器観察表

土器種類	高さ cm	法尺(m)			造形度	焼成	色調	胎土	成形・調整				出土状況 (底面~) (cm)	備考
		高 さ cm	口 幅 cm	底 幅 cm					内 口	ヨコナダ	脚	ヨコナダ		
1 瓢	?	190	?	268	上部のみ赤	良	淡赤褐色	密	内 口	ヨコナダ	脚	ヨコナダ	+0.2~+31.8	内外口に赤影内側にも赤影の可能性あり
									外	×	×	ヘラケズリ		
2 瓢	258	256	70	一 ほぼ完	内淡褐色 外淡黃褐色	#	淡赤褐色	#	内	×	#	ナ ダ	+13.4~ 野窓穴	
									外	×	×	ヘラケズリ 後一部ナダ		
3 小型鉢	78	104	52	113	%6	#	淡赤褐色	や や 粗	内	×	×	ナ ダ	+5.0~カマド	
									外	×	×	ヘラケズリ		
4 高 杯	?	?	?	?	杯底 脚部上部のみ	#	黄褐色	密	内 底	ミ ガ キ	脚	ヘラケズリ	+30.2	器底部内と高台外に黒斑
									外	×	×	ナ ダ ケズリ ヘラケズリ		
5 坯	?	138	-	132	%	#	地は黄褐色 黒斑によ り黒褐色	#	内 口	ヨコナダ	脚	ミ ガ キ	カマド一部	
									外	×	ヨコナダ			
6 #	47	133	-	124	%	#	黄褐色	#	内	×	×	×	+48.6	内全面外口に赤影 内面は荒れています
									外	×	ヨコナダ	ヘラケズリ		
7 #	45	134	-	130	%	#	#	#	内	×	ヨコナダ	?	+4.9	内全面と外口に赤影、内面調理
									外	×	ヨコナダ	ヘラケズリ		
8 #	43.5	98	-	102	%	#	淡赤褐色	#	内	ヨコナダ	ナ ダ	ヨコナダ	-0.5~+0.7	内、外に黒斑
									外	ヨコナダ	ヘラケズリ			
9 #	?	122	-	118	%	#	赤褐色	#	内 脚中空~口に かけヨコナダ	ヨコナダ	脚	ナ ダ	+40.1~+40.5	
									外	ヨコナダ	ヘラケズリ			

第6号住居跡(008)(第121・122図 第15表)

検出状況 本住居跡は、第5号住居跡の南東25mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.80mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。四隅の床面上に、焼土の堆積がみられた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺が6.1~6.3mである。主軸の方位は、N-15°-Wである。壁は、高さが50~65cmで、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床はおこなっていない。

壁溝 北東壁の4分の1周の壁をのぞいて、ぐるりとめぐっている。幅6~12cm、深さ4~8cmで、断面はU字形である。

壁柱穴 壁溝の中を含めて、4つの壁に沿って、壁柱穴が、合わせて17個めぐっている。北東、北西、南西の隅にかたまっている。径6~12cm、深さ2~9cmである。

床溝 カマドに向って右側に2本、左側に1本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅13~19cm、深さ5~7cmである。

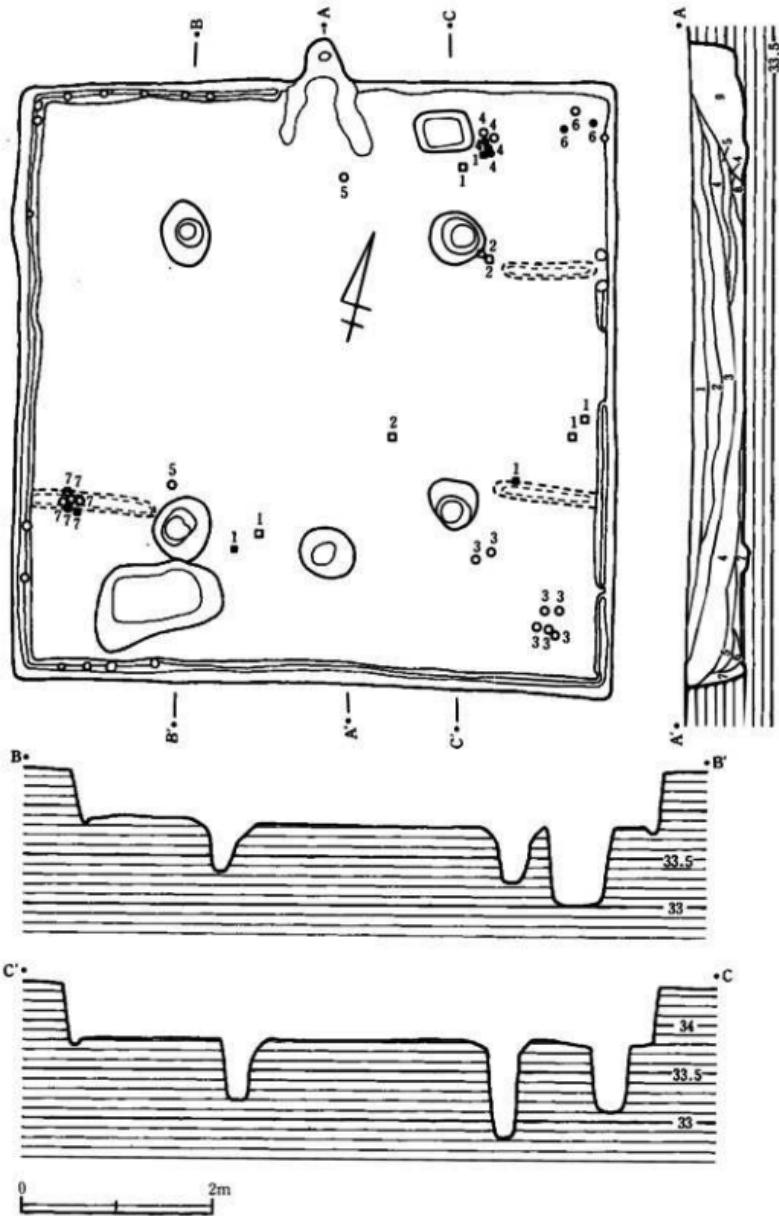
柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ相対する対角線上に位置する。径46~68cm、深さ55~91cmである。南東の柱穴がやや北に寄りすぎているように思える。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びからはずれる。径50~60cm、深さ31cmである。

貯藏穴 カマドの右脇に1つ、南西隅に1つある。どちらも、平面形態は、長方形で、カマド右脇の方が小さい。カマド右脇のものは、口の大きさが40cm×60cm、深さ72cmである。覆土は、底の方から、ローム主体の黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土の順に堆積していた。南西隅のものは、口の大きさが70cm×130cm、深さ57cmである。覆土は、黒褐色土主体で、底の方ではハードロームブロックの混入がみられた。

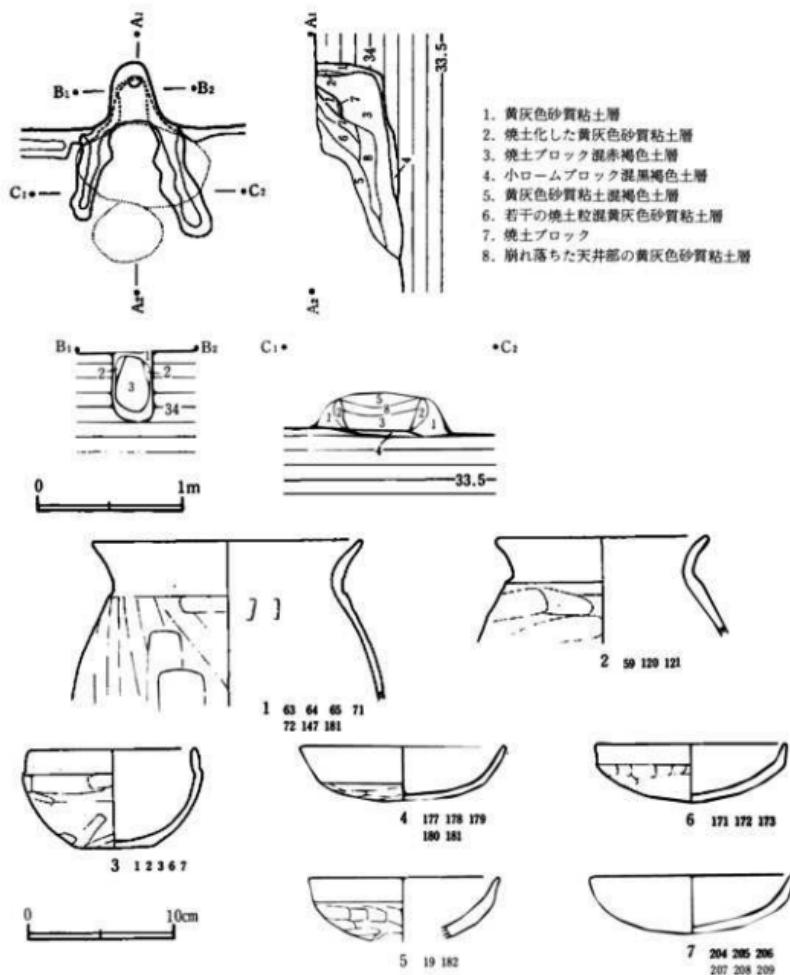
カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅40cm、奥行き45cmの逆U字状に掘り込んで、煙道がつくられている。床のくぼみに1枚土を貼るとともに、煙道の壁にも黄灰色の山砂が貼られている。天井部は、煙道付近がのこっていた。

遺物出土状況 床面および覆土中のどちらからも、完形に近い土器は出土しなかった。

- | | | |
|-----------|----------------|-----------------|
| 覆土 | 1. ローム粒混暗褐色土層 | 6. 黒色土層 |
| | 2. ローム粒混黒褐色土層 | 7. 褐色土層 |
| | 3. ローム粒混褐色土層 | 8. 山砂、焼土粒混茶褐色土層 |
| | 4. ローム粒混黒色土層 | 9. カマド |
| | 5. カマド山砂混茶褐色土層 | |



第121図 第6号住居跡遺構・遺物位置図



第122図 第6号住居跡カマド実測図(上) 遺物実測図(下)

第15表 第6号住居跡土器観察表

器種	法尺(m)			保存度	焼成色	調査土	成形・調査				出土状況 (底面~)(cm)	備考		
	高さ	口幅	底幅				内	外	コナデ	調	ナ			
1 瓢	?	188	?	? 腹上半のみ	良	内 黄褐色 外暗褐色	密 粒 石	内	口	コナデ	調	ナ	ダ	+2.4~6.9
								外	#	#	#	ヘラケズリ 痕		
2	?	148	?	? 腹上半のみ	?	内黄褐色 外赤褐色	密 粒 石	内	#	#	ナ	ダ	+5.0~+12.0	
								外	#	#	ヘラケズリ			

さく	部	法量 (mm)				遺存度	性成	色調	胎土	成形・調整						出土状況 (床面～) (cm)	備考	
		高 度	口 幅	底 幅	脚 部幅					内	口	タコナデ	網	上毛コナデ	下毛コナデ	外		
3	环	67	116	—	124	%	良	内暗褐色 外暗褐色	密 粒	石	内	口	タコナデ	網	上毛コナデ	下毛コナデ	+26.2～+48.4	
4	*	37	144	—	118	%	*	黒褐色	密	石	内	口	*	ミガキ			+1.1～+3.4	
5	*	?	134	—	128	%	*	内黒色 外褐色	やや粗	石	内	口	ミコナデ後	ミガキ			+5.8～+33.4	
6	*	39	134	—	132	%	*	暗褐色	密	長 石	内	口	*	*	ミガキ		+1.6～+5.4	網外下半ナデ
7	*	40	144	—	136	%	*	黒褐色	密	長 石	内	口	*	ミガキ			+2.4～+3.9	

第7号住居跡(009)(第123～127図 第16・17表)

検出状況 本住居跡は、第6号住居跡のほぼ南10mに位置する。立地は平坦面上である。床面の標高は、32.90mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。床面を覆う層中には、焼土粒、炭化物が目立ち、火災に遭った可能性がある。

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺5.1～5.3mである。主軸の方位は、N-10°-Wである。壁は、高さが47～58cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁溝 カマドの部分をのぞいて全周している。幅10～15cm、深さ3～4cmで、断面はU字形である。

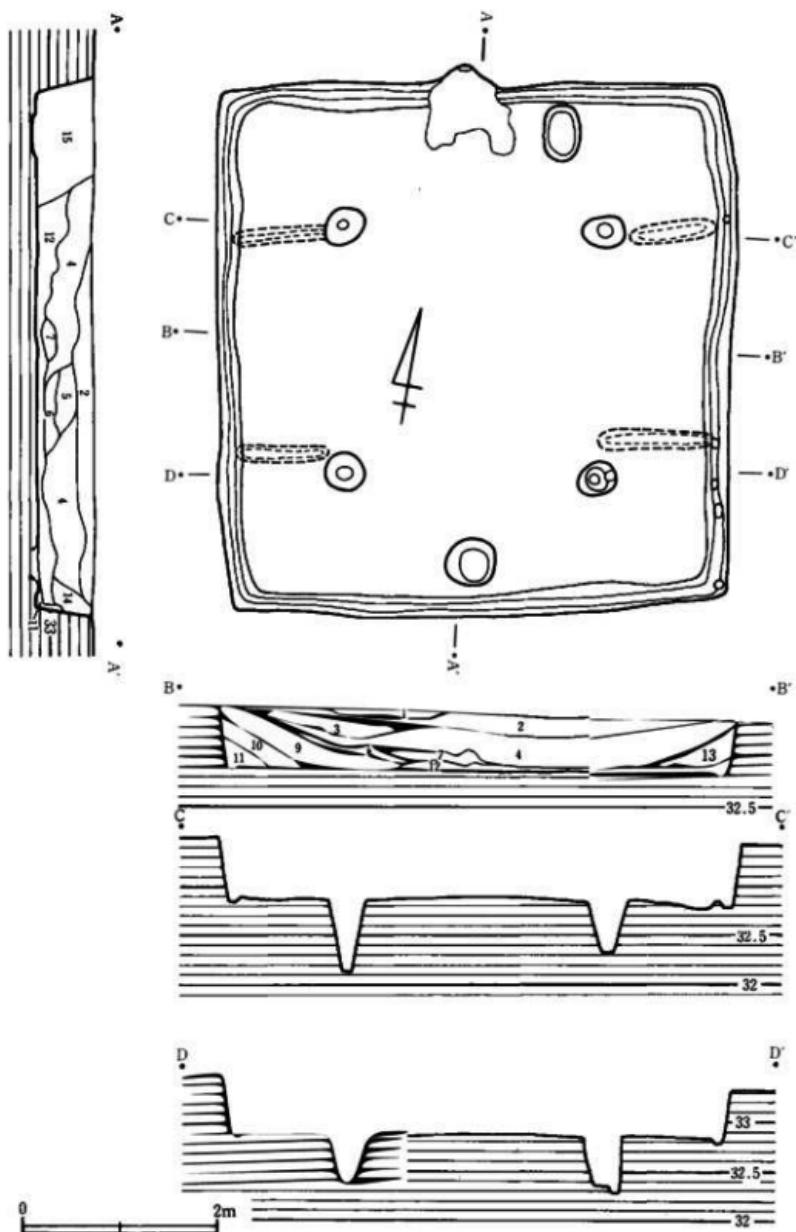
壁柱穴 東壁の壁溝中に、5個みつかった。径6～12cm、深さ6～9cmである。

床溝 カマドに向って右側に2本、左側に2本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅13～20cm、深さ10cm前後である。

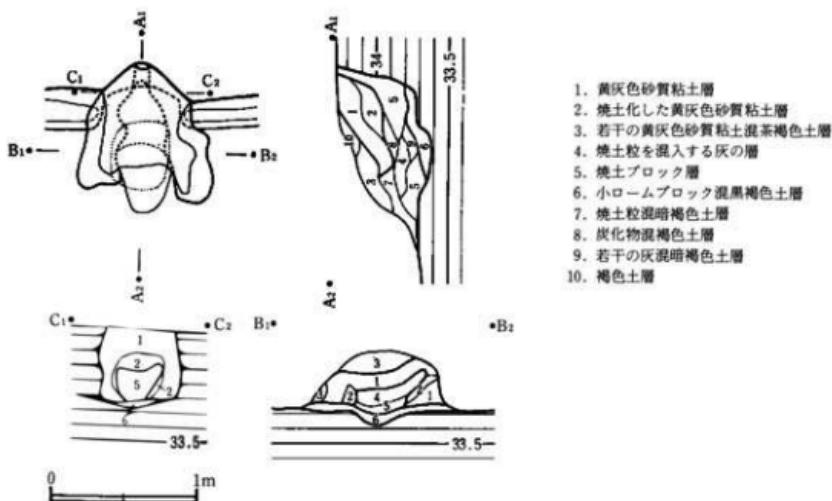
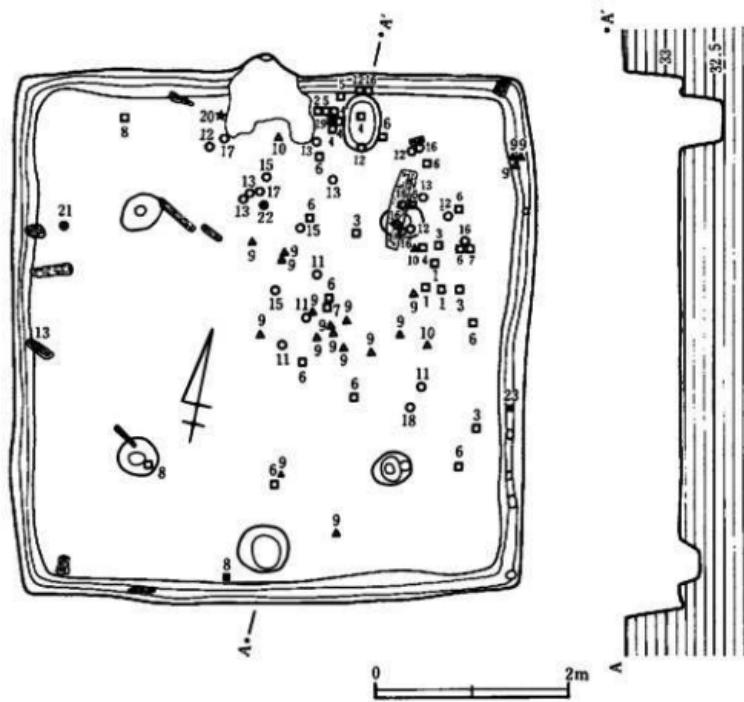
柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径32～45cm、深さ48～73cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びからはずれる。径47～50cm、深さ24cmである。

貯藏穴 カマドの右脇にある。平面形態は、楕円形である。口の大きさは34cm×57cm、深さ47cmで、底は平らである。覆土は、不明である。

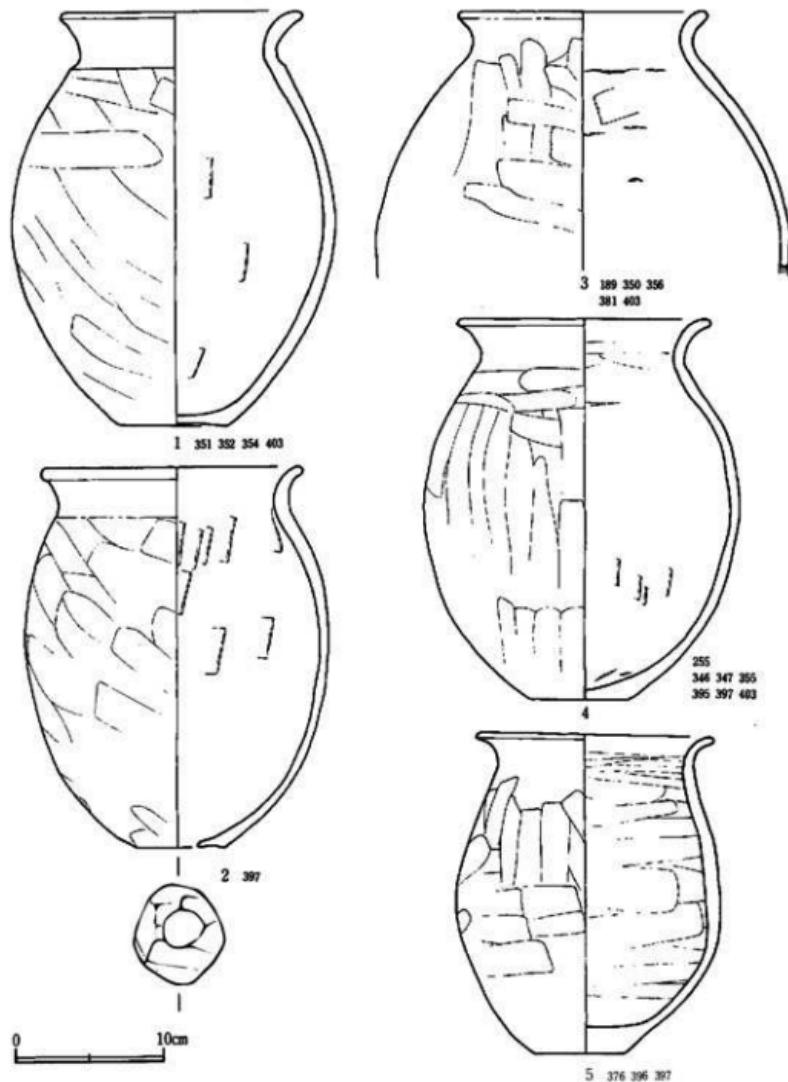
カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅60cm、奥行き16cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床が一段へこんで、小ロームブロックの混じった黒褐色土が、貼られている。土製支脚が、カマドの右脇で、床面から5cmほど浮いて出土している。天井部はのこりがよいが、掛け口の位置はつかめなかった。



第123図 第7号住居跡遺構図

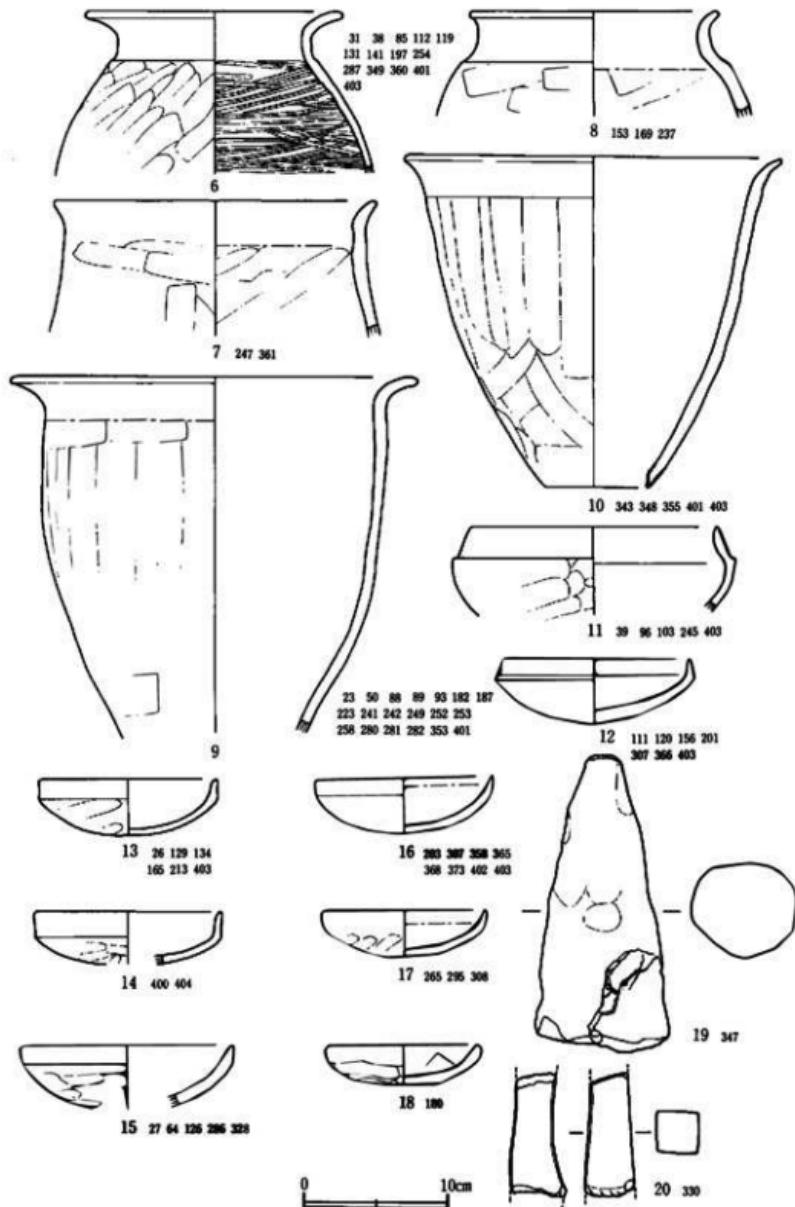


第124図 第7号住居跡遺物位置図（上）カマド実測図（下）

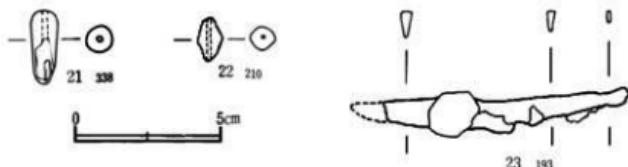


第125図 第7号住居跡遺物実測図(1)

遺物出土状況 出土遺物は、土師器のほかに、砥石、土製管玉、土製小玉、刀子と多彩である。しかし、このうち土製管玉をのぞいては、床面からの出土ではなく、25cm以上も浮いての出土である。出土時に完形ないし完形に近かった2と18も床面からそれぞれ25cm、13cm浮いて出土した。接合の結果、ほぼ完形となった1・4・5の破片も、多くが、床面から25cm前後浮いていた。



第126図 第7号住居跡遺物実測図(2)



第127図 第7号住居跡遺物実測図(3)

- | | | |
|-----|------------------------------------|-------------------------------------|
| 覆 土 | 1. 暗褐色土層 | 9. 少量のローム粒、ロームブロック混黒 |
| | 2. ローム粒混暗褐色土層 | 色土主体黒褐色土層 |
| | 3. 黒色土、少量のロームブロック混、ローム粒と褐色土主体明褐色土層 | 10. ごく少量のローム粒、少量のロームブロック混黒色土主体黒褐色土層 |
| | 4. ローム粒、ロームブロック混黒褐色土層 | 11. 炭化物、焼土粒混ローム粒主体黄褐色土層 |
| | 5. 黒色土と褐色土から成る黒褐色土層 | |
| | 6. 少量の黒色土混、ローム粒と褐色土から成る明褐色土層 | 12. 山砂、焼土粒、炭化物混、ローム粒主体黄褐色土層 |
| | 7. 少量の黒色土混、ローム粒と褐色土主体明褐色土層 | 13. ローム粒混黒褐色土主体明褐色土層 |
| | 8. 少量のローム粒混暗褐色土層 | 14. ローム粒混黒褐色土層 |
| | | 15. カマド |

第16表 第7号住居跡土器観察表

名 称 類 別	法 量 (mm)				透 徹 度	形 成 性	色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整				出 土 状 況 (床 面 ～ (cm))	備 考
	高 さ	口 径	底 径	厚 さ					内 口	コ ナ ダ	内 ヘ ラ ナ ダ	外 口		
1 瓢	281	176	74	224	完	良	褐	中や粗	#	#	#	#	+29.4～+24.6	
2 ×	235	180	62	210	#	#	褐	密	#	#	#	#	+25.4	瓶として転用
3 ×	?	194	?	286	網上半 口のみ %	#	赤褐色	密	内	#	#	#	+25.2～+43.3	
4 ×	255	174	76	220	ほぼ完	#	褐	密	内	#	#	#	+4.7～+27.6	
5 小型 瓢	?	165	62	183	#	#	暗赤褐色	密	内	#	#	#	+25.2～+39.2	
6 瓢	?	178	?	?	網上半 口のみ %	#	淡褐色	密	内	#	#	#	+12.9～+55.0	網内、竹管小竹べ タによる曳いナゲ
7 瓢	?	224	?	?	口のみ 完	#	内側赤褐色 外側褐色	密	内	#	#	#	+3.2～+41.3	

番号	種類	法量(cm)			遺存度	構成色調	胎土	成形・調整				出土状況(床面～)(cm)	備考	
		高さ	口径(cm)	底径(cm)				内口コナダ	側ナダ	外口コナダ	側ナダ			
8	甕	?	172	2	?	網上半 のみ %	良	密粒石	内	口コナダ	側ナダ		+1.6～+6.5	
9	甕	?	282	?	-	%	#	内黄褐色 外褐褐色	密粒石	内	#	# ヘラケズリ	-1.2～+50.1	
10	#	225	262	70	-	%	#	褐色	密粒石	内	#	# ナダ	+29.4～+28	底開口部縁に胎土 の貼り付け
11	甕	?	170	-	196	底なし %	#	内黄褐色 一部黒褐色 外赤褐色	密粒石	内	# ヨコナダ後 ミガキ	# ミガキ	+7.2～+27.1	
12	#	34	130	-	138	%	#	内暗褐色 外褐色	密粒石	内	# ヨコナダ後 ミガキ	# ミガキ	+23.8～+41.7	
13	#	38	124	-	124	%	#	内黒色 外黒褐色	密粒石	内	# ミガキ	# ミガキ	+20.5～+62.2	
14	#	?	130	-	128	%	#	黒褐色	密粒石	内	# ヨコナダ	# ナダ	カマド内一括	
15	#	?	148	-	146	底なし %	#	暗褐色	密粒石	内	#	# ミガキ	+4.9～+31.6	
16	#	36	126	-	125	%	#	黒褐色	密粒石	内	#	# ミガキ	+22.5～+33.9	
17	#	31	116	-	-	%	#	黒褐色	密粒石	内	#	# ミガキ	+6.8～+4.3	
18	#	28	108	-	-	ほぼ完	#	褐色	密粒石	内	# ヘラナダ	# ヘラナダ	+12.7	
								外表面あり	密粒石	外	# ヨコナダ	# ヘラケズリ		

第17表 第7号住居跡土製品・石製品・鉄製品観察表

番号	種類	法量			遺存度	構成色調	胎土	せいけい	出土状況(床面～)(cm)	備考		
		幅(径)(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)								
19	土製支脚	86	201	--	1082	完	二次焼成	茶褐色	粗砂粒		+4.8	
20	磁石	35	79	-	187	%強	一	青灰褐色	-	四面研磨	+33.5	細粒凝灰岩
21	土玉	8.5	24	3	1.7	ほぼ完	良	黒色	鐵器砂岩 色スコリア	外側丸みな研磨	+4.0	骨玉形
22	#	8	15	1	8.6	#	#	明～暗褐色	粗砂粒	外側研磨痕あり	-	切子五形
23	刀子	10	85	-	9.4	?	-	-	-	-	+45.8	一部木質付着

第8号住居跡(010) (第128・129図 第18・19表)

検出状況 本住居跡は、第7号住居跡の南西15mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.70mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。床面に少し盛り上がって堆積していた7層は、多量の焼土が入って

おり、床面中央に広がっていた。しかしながら、炭化物は見当らなかった。

形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形である。カマドのある南西壁が最も短かく、5.2mである。のこる3つの辺は、5.4~5.5mとほぼ同じ長さである。主軸の方位は、N-35°-Wである。壁は、高さが49~61cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床 面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドの右脇、貯蔵穴とのあいだにI字形の、北東壁の中央に逆U字形の高まりが、削りのこされていた。それぞれ、幅42cmと24~30cm、高さ3~6cmと1~3cmである。

壁 溝 カマドの部分も含めて、周囲している。幅10~18cm、深さ1~9cmで、断面はU字形である。

床 溝 カマドに向って右側に2本、左側に2本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅12~24cm、深さ10cm前後である。

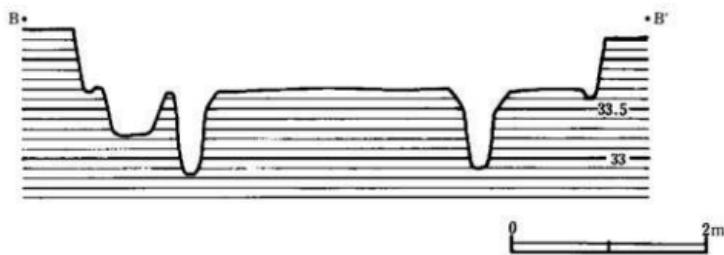
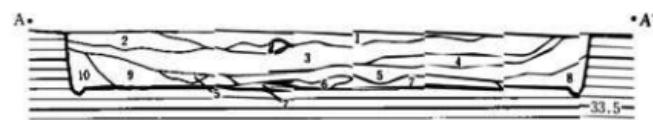
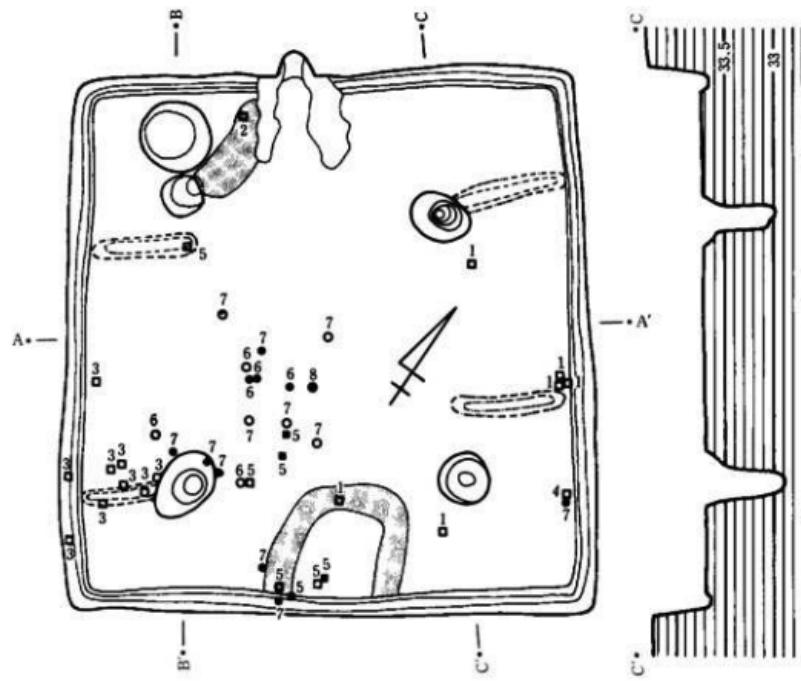
柱 穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径40~77cm、深さ74~91cmである。

貯蔵穴 カマドの左脇にある。平面形態は、円形である。径70cm、深さ50cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、ローム粒主体の黄褐色土、ロームブロック少量混黒褐色土、焼土混、ローム粒少量混黄褐色土、ローム粒混、黒色土少量混黄褐色土の順で堆積していた。

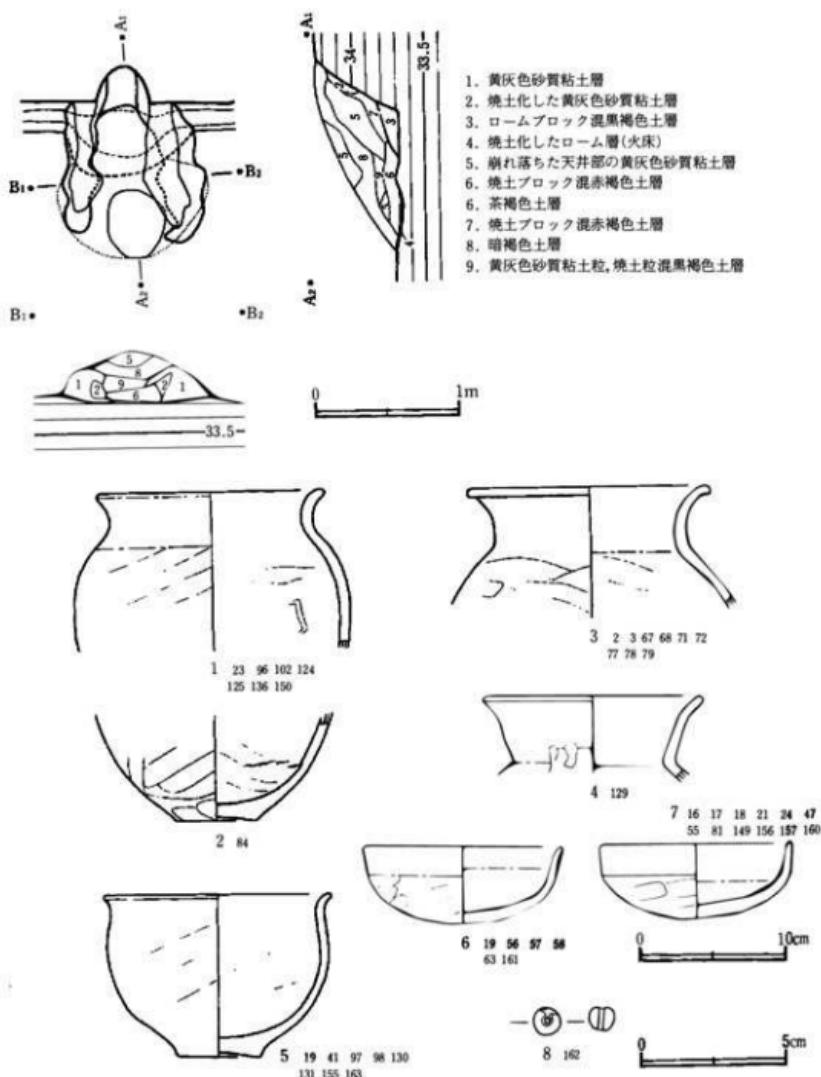
カマド 北西壁の中央よりやや西よりに位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅35cm、奥行き25cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。カマドにかかる部分の壁溝の幅が一段と広くなっているのは、注目される。この部分には、土を1枚貼っている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。ややくぼんでいた。

遺物出土状況 完形あるいはそれに近い状態の土器は、出土しなかった。床面からの出土品としては、8の土製丸玉が、唯一みるべきものである。

- | | | |
|------------|----------------------------------|-------------------------------|
| 覆 土 | 1. 少量のローム粒混暗褐色土層 | 6. 少量のロームブロック混ローム粒主体 |
| | 2. ローム粒、多量の小ロームブロック混
暗褐色土層 | 7. ローム粒、多量の焼土混暗褐色土層 |
| | 3. 黒色土・ローム粒、ロームブロックか
ら成る黒褐色土層 | 8. 黒色土、少量のローム粒混暗褐色土層 |
| | 4. 黒色土、多量のローム粒、ロームブロ
ック混暗褐色土層 | 9. 少量のローム粒、ロームブロック混黑
褐色土層 |
| | 5. 山砂、多量のローム粒、ロームブロッ
ク混黄褐色土層 | 10. ローム粒、焼土粒、褐色土から成る暗
褐色土層 |



第128図 第8号住居跡遺構・遺物位置図



第129図 第8号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）

第18表 第8号住居跡土器観察表

器種	法量 幅(径)(cm)	法量 高(高)(cm)	法量 孔徑(cm)	法量 重量(g)	遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整				出土状況 (底面～) (cm)	備考	
									内	外	ヨコナダ	コロナダ	ヘラナダ		
1 瓢	?	158	?	192	口～口のみ	良	淡赤褐色	鐵粒石	内	外	ヨコナダ	コロナダ	ヘラナダ	+4.6～+30.1	
2 "	?	?	54	?	底～脚のみ	好	赤褐色	密	内	内	ヨコナダ	コロナダ	ヘラナダ	+5.9	
3 "	?	160	?	?	口のみ	好	淡赤褐色	鐵粒石	内	外	ヨコナダ	コロナダ	ヘラナダ	+3.0～+25.5	
4 "	?	152	?	?	口のみ	好	淡赤褐色	鐵粒石	密	内	外	ヨコナダ	コロナダ	+30.8	
5 小瓢	110	156	56	—	%	好	淡赤褐色	鐵粒石	内	外	ヨコナダ	コロナダ	ヘラナダ	+8.1～+58.7	
6 环	53	140	—	130	%	好	淡赤褐色	鐵粒石	密	内	外	ヨコナダ	コロナダ	-8.1～+53.7	ていねいなミガキ
7 "	51	134	—	132	%	好	赤褐色	鐵粒石	密	内	外	ヨコナダ	コロナダ	+3.0～+25.5	

第19表 第8号住居跡土製品観察表

器種	法量				遺存度	焼成	色調	胎土	せいけい	出土状況 (底面～) (cm)	備考
	幅(径)(cm)	高(高)(cm)	孔徑(cm)	重量(g)							
8 土製丸玉	9	8	1.5	0.5	完	良	黑色	精	良	外表面磨擦光沢	+0.9

第9号住居跡(011) (第130・131図 第20・21表)

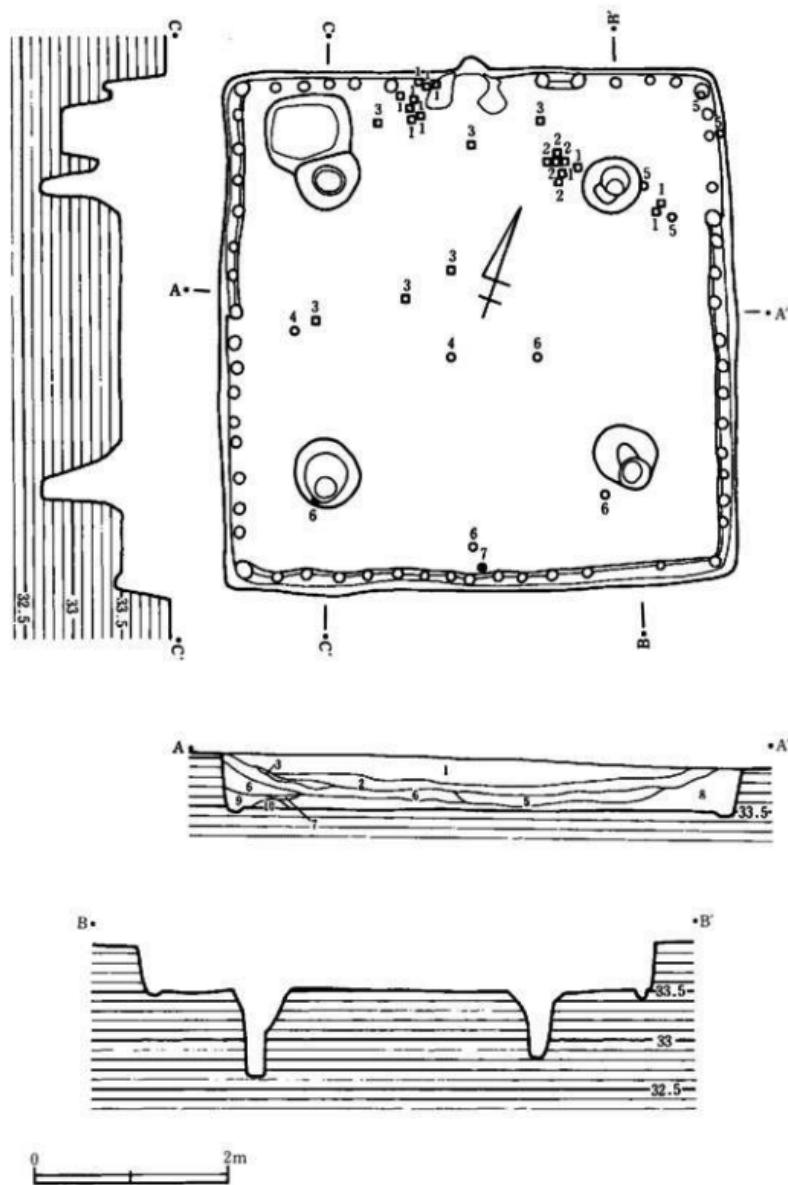
検出状況 本住居跡は、第8号住居跡の南東20mに位置する。立地は、台地の平坦面のへりに近く、すぐ東に北へ向ってひらく大きな谷がある。東に向ってこの大きな谷へひらくゆるい谷の最上部でもある。床面の標高は、33.50mである。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。セクションベルトにかかって、西壁近くで、床面に焼土が堆積しているのがみつかった。

形状・規模 平面形態は、正方形である。カマドのある北辺がやや短く5.1mで、のこる3つの辺は、5.3～5.4mである。主軸の方位は、N-20°-Wである。壁は、高さが39～62cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

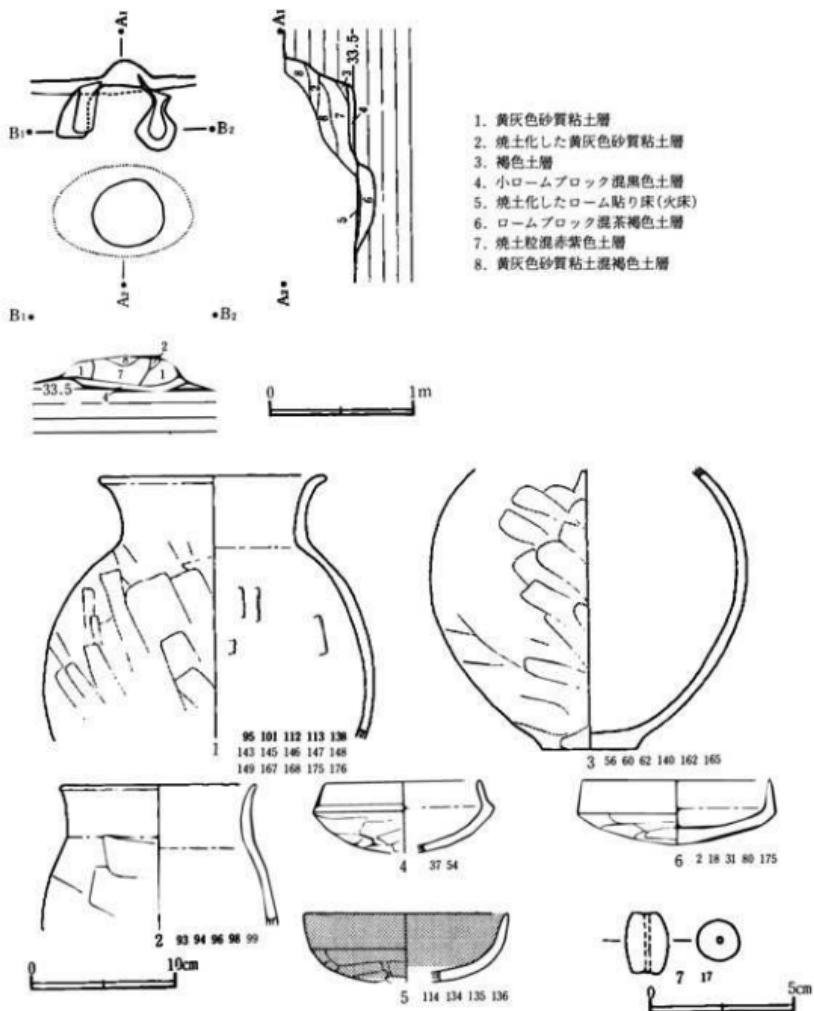
床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁溝 東壁の南側3分の2、南壁、西壁の北側2分の1と北壁のカマド右脇の一部分にみつかった。幅14～16cm、深さ4～6cmで、断面はU字形である。

壁柱穴 四壁に沿ってぐるりとめぐっている。間隔は、ほぼ一定で、20cm前後である。径も同じで、10cm前後である。深さは、5～16cmとバラつきがある。



第130図 第9号住居跡遺構・遺物位置図



第131図 第9号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）

柱 穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径57~70cm、深さ70~90cmである。

貯藏穴 カマドの左脇に、柱穴に接するかたちで有る。平面形態は、長方形である。口の大きさは60cm×90cm、深さ57cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、極めて粘性の強い茶褐色土、同じく黄褐色土が、平らに積もり、その上に、レンズ状に、ロームの入った黄褐色土、同じく黒褐色土、ただの茶褐色土、焼土と炭化粒混暗褐色土、ローム混褐色土、同じく暗褐色土が堆積していた。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅30cm、奥行き15cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。床面からローム壁にかけて土を貼った上につくられており、火床は、くぼみを埋めている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであったが、火床の位置は、はっきりつかめる。

遺物出土状況 完形あるいはそれに近い状態で出土した土器は、無かった。また、接合によっても、完形近くに復原できたものは無かった。注目される遺物は、7の土玉だけである。

覆 土	1. 黒色土層	6. 若干のローム粒混黄褐色土層
	2. 小ロームブロック混褐色土層	7. 焼土粒混暗褐色土層
	3. ロームブロック混黒色土層	8. 小ロームブロック混茶褐色土層
	4. 黄褐色土混暗褐色土層	9. 褐色土層
	5. 褐色土層	

第20表 第9号住居跡土器觀察表

さ き 地 質	岩 種	法 式 (mm)			造 成	色 調	胎 土	成 形・調 整				出 土 状 況 (床 面 ～ (cm))	備 考	
		高 度	口 底 幅	開 底 幅				内 口 コ ナ デ	内 口 ヘ ラ ナ デ	外 口 コ ナ デ	外 口 ヘ ラ ナ デ			
1 磁	?	159	?	231	洞下半 底なし %	良	赤褐色 洞部に黒斑 口に黒縁	密 微粒石	内 口 コ ナ デ	内 口 ヘ ラ ナ デ	外 口 コ ナ デ	外 口 ヘ ラ ナ デ	+3.2～+32.8	
2 #	?	136	?	?	%	#	内暗褐色 外暗褐色	密 微粒石	内 口 コ ナ デ	内 口 ヘ ラ ナ デ	外 口 コ ナ デ	外 口 ヘ ラ ケ ズ リ	+5.7～+10.2	
3 #	?	?	66	223	口なし %	#	暗褐色 やや粗 粒	密 微粒石	内 口 コ ナ デ	内 口 ヘ ラ ナ デ	外 口 コ ナ デ	外 口 ヘ ラ ケ ズ リ	+3.2～+44.5	
4 坪	?	110	-	128	%	#	黑褐色	密 石英	内 口 コ ナ デ	内 口 ヘ ラ ナ デ	外 口 コ ナ デ	外 口 ヘ ラ ケ ズ リ	+5.3～+59.0	
5 #	?	144	-	-	%	#	暗褐色	密 微粒石	内 口 コ ナ デ	内 口 ヘ ラ ナ デ	外 口 コ ナ デ	外 口 ヘ ラ ケ ズ リ	+16.8～+48.5	内全面外口表影
6 #	45	134	-	140	%	#	暗褐色	密 茶褐色粘 土粒	内 口 コ ナ デ	上部コナ デ下半ナデ	外 口 コ ナ デ	外 口 ヘ ラ ケ ズ リ	-0.7～+23.7	

第21表 第9号住居跡土製品調査表

土壤 種 類	法 量				道存度	培 成	色 調	物 土	せ い け い	出土状況 (底面) (cm)	備 考
	幅(米)	高(米)	孔徑(米)	重量(kg)							
7 土 玉	15	21.5	2	4.8	完	良	黑 色	褐	良 外觀入念な研磨	+6.9	切子玉形

第10号住居跡（012）（第132～134図 第22・23表）

検出状況 本住居跡は、第9号住居跡の南東25mに位置する。立地は、台地の平坦面のはずれで、北東へ向ってゆるく傾斜している。床面の標高は、33.40mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。4辺の長さは、4.2～4.3mである。主軸の方位は、N-40°-Wである。壁は、高さが44～64cmあり、床面から上ひろがりに立ち上がる。

床 面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁 溝 壁から20cm前後はなれて、北東壁から南東壁のまん中にかけて、鍵の手に、壁溝に似た溝がみつかった。幅10～16cm、深さ3～6cmで、断面は、U字形である。

床 溝 カマドに向って左側に2本、壁と直角に、壁から柱穴に向って床に溝が走る。幅12～18cm、深さ8～13cmである。

柱 穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径35～60cm、深さ35～55cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びから、少しあはれる。径26cm、深さ18cmである。

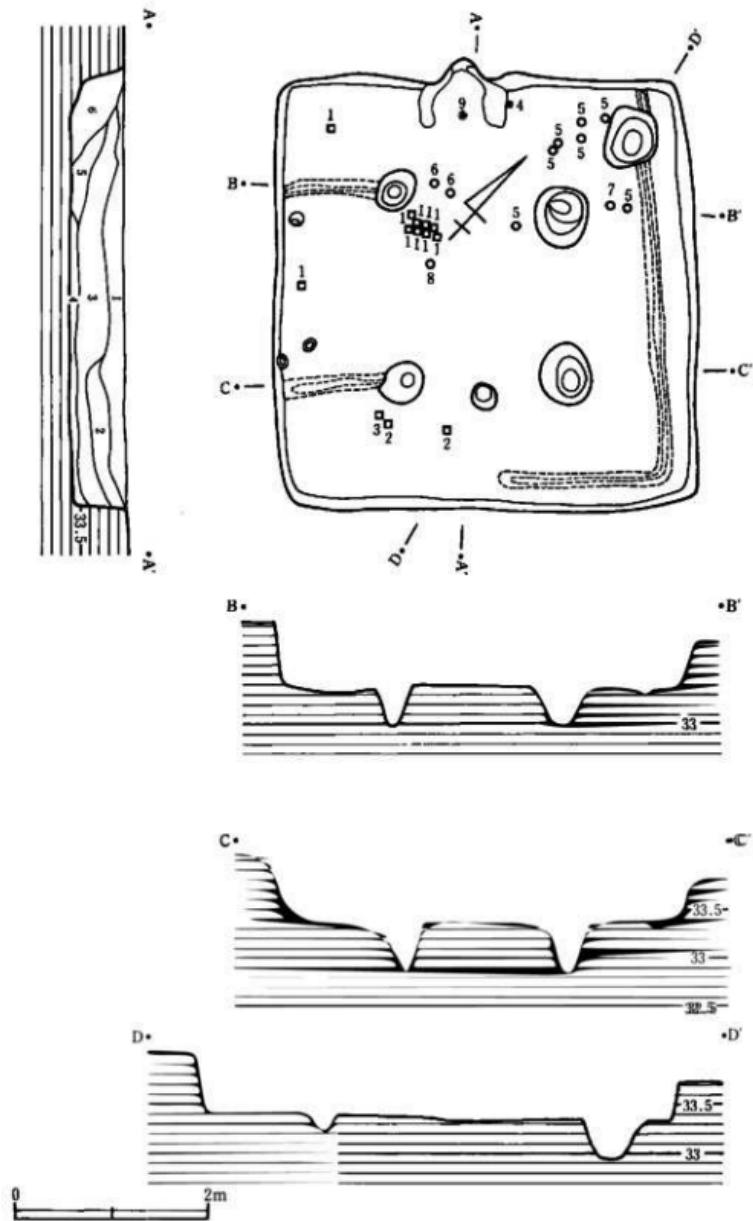
貯藏穴 カマドの右側、住居跡の北隅にある。平面形態は、隅丸台形である。口の大きさは、一辺50cm～60cm、深さ36cmである。掘り方の傾斜が途中で1回変わっている。底は、平らである。覆土は、底の方から、ローム粒を主とする黄褐色土、ローム粒とロームブロック混黄褐色土、黒色土若干混黄褐色土、黒褐色土が、順にレンズ状に堆積していた。

ピット 南西壁のまん中あたりに、3つのピットがみつかった。径8～14cm、深さ6cm前後である。

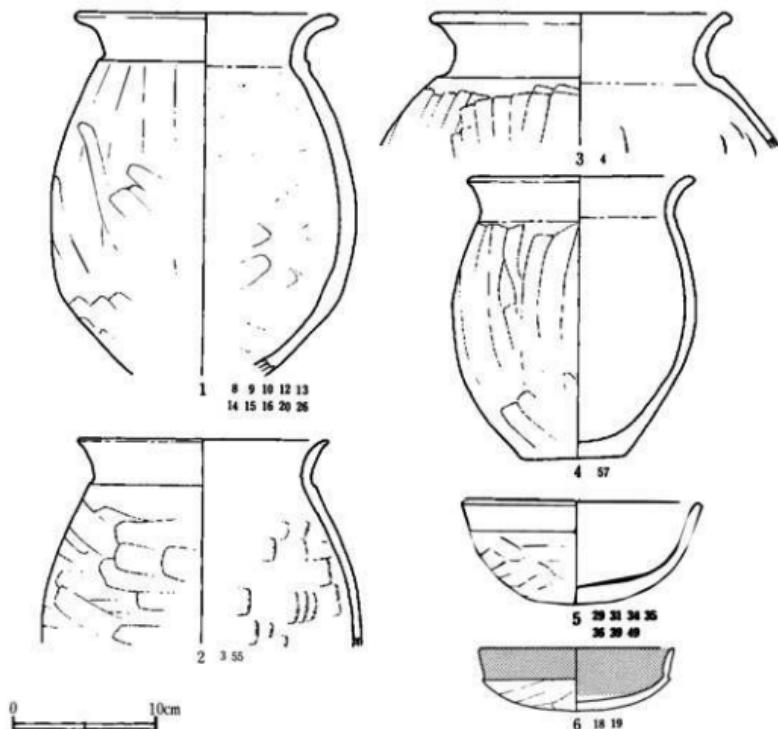
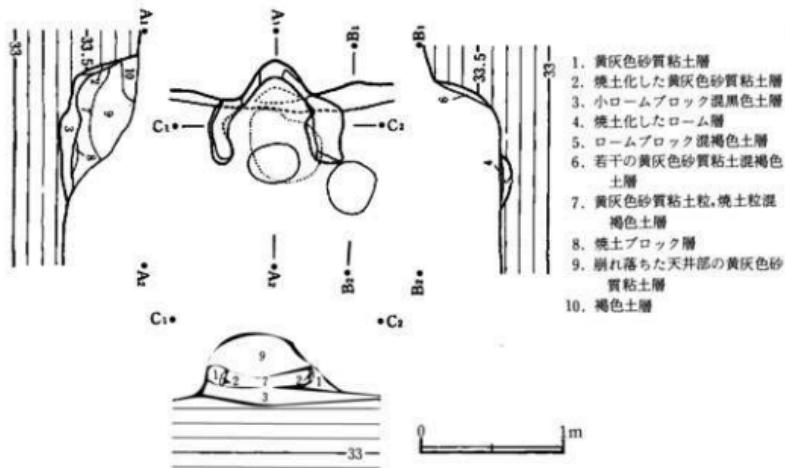
カマド 北西壁の中央よりやや西寄りに位置し、黄灰色の山砂を主として、土を貼った上に構築されている。ローム壁を幅50cm、奥行き25cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床は、はっきりつかめる。火床には、土製支脚がのこっていた。このカマドの右脇には、廃棄されたカマドの火床と、煙道のローム壁に土を貼った痕があった。

遺物出土状況 床面からは、カマドの右脇から完形の土師小型甕（4）が1点出土した。また、床面から14.3cm浮いて、7の土師塊が、つぶれて出土した。5の土師塊の破片は、覆土のかなり上の方から出土した。

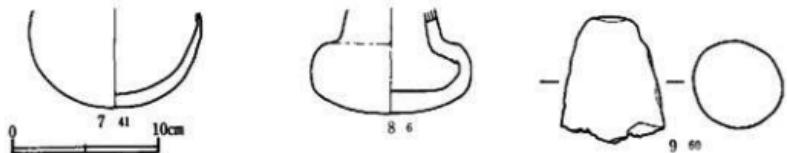
- | | | |
|------------|----------------------|-------------------------|
| 覆 土 | 1. 褐色土、少量のローム粒混暗褐色土層 | 5. 多量の山砂、焼土粒、ローム粒混黄褐色土層 |
| | 2. 多量の小ロームブロック混暗褐色土層 | 6. カマド |
| | 3. 小ロームブロック混黒褐色土層 | |
| | 4. 暗褐色土、ローム粒混黄褐色土層 | |



第132図 第10号住居跡遺構・遺物位置図



第133図 第10号住居跡カマド実測図（上）遺物実測図（下）(1)



第134図 第10号住居跡遺物実測図(2)

第22表 第10号住居跡土器観察表

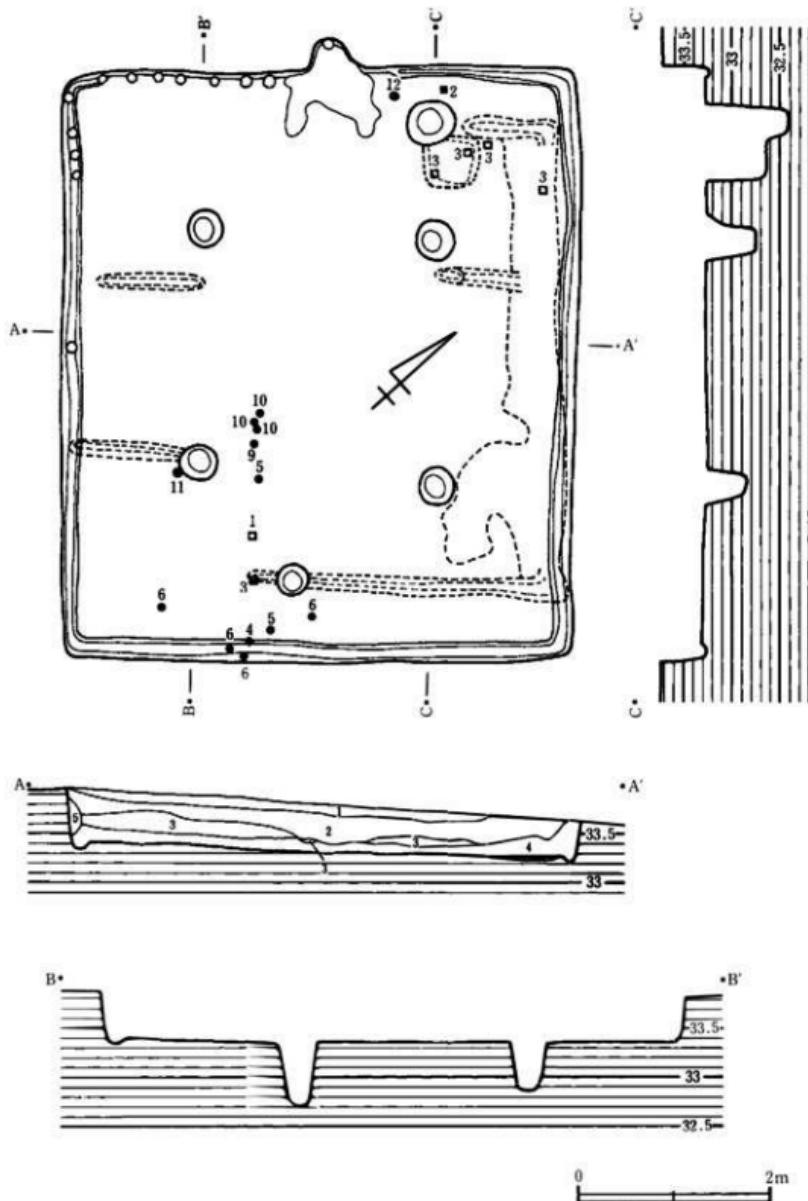
記 録 番 号	器 種	法 量 (mm)			造 作 度	焼 成	色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整				出 土 状 況 (底 面 ～) (cm)	備 考		
		器 高 度	口 幅 度	底 部 幅					内 口 部 形	コ ナ ダ	調 理	ヘ テ ヨ コ ナ ダ				
1	壺	?	176	?	234	底なし X	良	明褐色、外 側下部黒褐色	密 長石粒	内 口 部 形	コ ナ ダ	調 理	ヘ テ ヨ コ ナ ダ	+19.2～+30.5		
2	X	?	169	?	220	口～胴 部上半の みX	X		密	内 口 部 形	X	X	コ ヘ ラ ナ ダ	+22.5		
3	X	?	197	?	?	口～胴 部上半の みX	X	内明褐色 外淡褐色	X	内 口 部 形	X	X	ナ ダ	+16.1		
4	小型壺	144	143	66	156	完	X	暗赤褐色	密 長石粒	内 口 部 形	X	X	ナ ダ	底 ナ ダ	+25.5?	
5	壺	69	163	—	157	ほぼ完	X	明褐色	密 長石粒	内 口 部 形	X	コ ナ ダ	ミ ガ キ	+20.9～+46.2	胎土の粘土は良く こなされている	
6	壺	44	135	—	132	口はご く一部 のみ、 他は完	X	暗赤褐色	密 長石粒	内 口 部 形	X	コ ナ ダ	ナ ダ		+38.6～+22.5	
7	壺	?	?	—	120	口なし 他は完	X	明褐色 外側～底 部黒褐色	密 長石粒	内 口 部 形	X	コ ナ ダ	調 理	ヘ テ ヨ コ ナ ダ	+14.3	
8	實形土製品	?	?	—	112	口なし X	X	明褐色	密	内 口 部 形	コ ナ ダ	調 理	ナ ダツ 後 ナ ダ	ミ ガ キ	+9.7	
9	土製支撑	71	70	—	270	?	二次焼成	茶褐色	細砂粒						—	

第23表 第10号住居跡土製品観察表

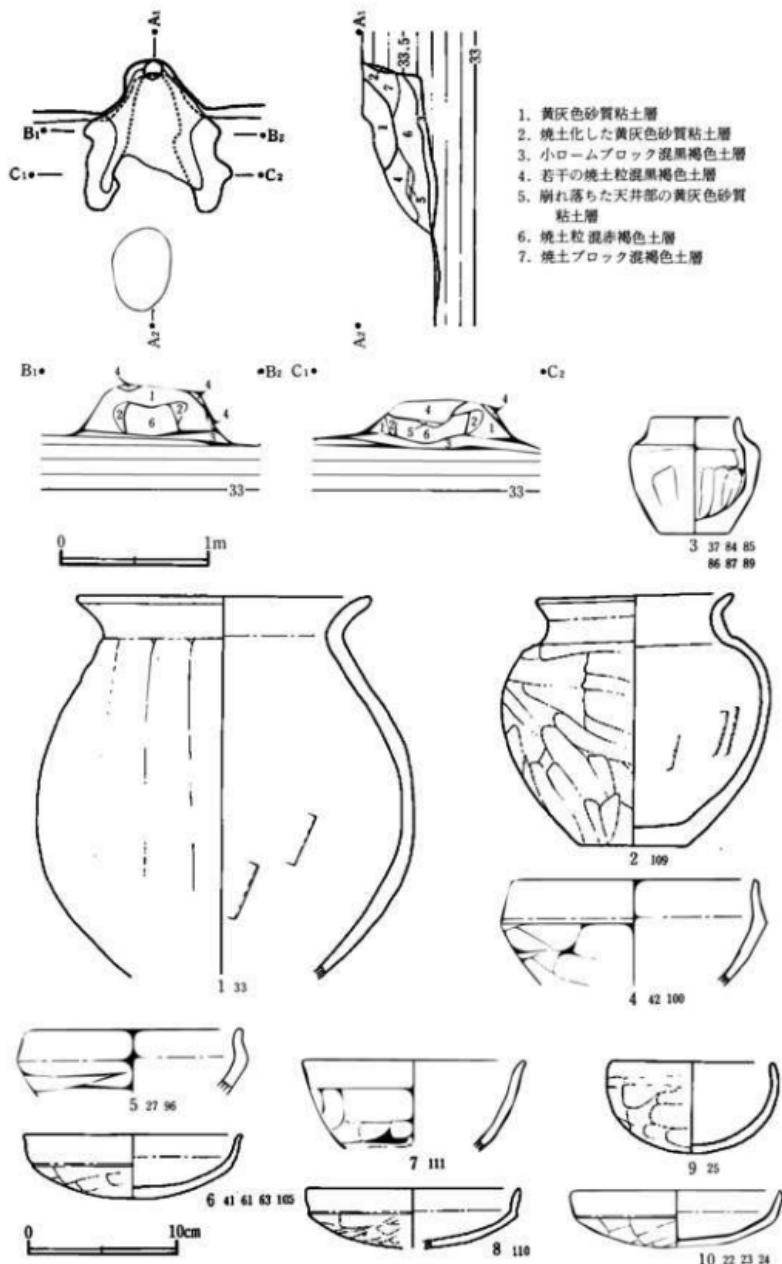
記 録 番 号	器 種	法 量			造 作 度	焼 成	色 調	胎 土	せ い け い		出 土 状 況 (底 面 ～) (cm)	備 考	
		幅(D)(mm)	高(H)(mm)	孔径(mm)					重さ(g)	重さ(g)			
9	土製支撑	71	70	—	270	?	二次焼成	茶褐色	細砂粒				—

第11号住居跡(013) (第135～137図 第24・25表)

検出状況 本住居跡は、第10号住居跡の東よりやや南寄り13mに位置する。立地は、台地の肩口で、北東へ向ってゆるく傾斜している。床面の標高は、33.30mである。造構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。



第135図 第11号住居跡遺構・遺物位置図



第136図 第11号住居跡カマド実測図(上)・遺物実測図(下) (1)



第137図 第11号住居跡遺物実測図(2)

形状・規模 平面形態は、長方形である。カマドのある壁とその対面の壁が短く、5.4と5.3mで、のこる長い2つの壁は、6.1mである。主軸の方位は、N-40°-Wである。壁

は、高さが31~57cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床 面 ほとんど、ハードロームを平らに削り出して床としているが、北東壁に沿って、幅50cm前後にわたり、貼り床をおこなっている。

壁 溝 北西壁のカマドのあたりから西側をのぞいて、ぐるりとめぐっている。幅10~16cm、深さ1~8cmである。

壁柱穴 カマドの左側を中心に、合わせて12個みつかった。径8~12cm、深さ3~8cmである。

床 溝 カマドに向って右側に3本、左側に2本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って、床に溝が走る。幅10~24cm、深さ5~7cmである。貼り床部分では、掘り方がはっきりしなかった。

柱 穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ相対する対角線上に位置する。径36~40cm、深さ50~65cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びからはずれる。径30cm、深さ62cmである。

貯藏穴 カマドの右脇にある。新旧ふたつ切り合っているのが、みつかった。カマドに近い丸い方が新しく、長方形の方が古い。古い方は、口の大きさが50cm×60cm、深さ65cmで、新しい方は、径40~50cm、深さ87cmである。覆土は、古い方が、底の方から、粘質茶褐色土、黒色土、小ロームブロック混褐色土、ロームブロック混茶褐色土が、平らに堆積しており、新しい方は、同じく、粘質茶褐色土、小ローム粒混暗褐色土、同黑色土、同褐色土が、平らに堆積していた。

カマド 北西壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として、土を貼った上に構築されている。ローム壁を幅70cm、奥行き35cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。天井部はのこるが、掛け口はつかめず、火床も、のこっている袖部よりもかなり手前にみつかった。

遺物出土状況 床面からは、カマドの右脇で、2の完形の土師壺と12の土製小玉が、南西の柱穴の脇で11の土製小玉が出土した。

覆 土 1. 黒色土層

4. ローム粒混茶褐色土層

2. 暗褐色土層

5. ロームから成る黄褐色土層

3. スコリア混黑色土層

第24表 第11号住居跡土器観察表

器種	幅 cm	法 量(cm)				温 度	成 色	調 査	成 形 ・ 調 査				出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考	
		口 横 径	口 縦 径	底 横 径	底 縦 径				内 部 材 料	外 部 材 料	口 コ ナ グ	底 ヒ ラ タ グ	?		
1. 壺	?	200	?	260	青～灰 青 5%	良	黑褐色 鐵 石	土	内 部 材 料	外 部 材 料	口 コ ナ グ	底 ヒ ラ タ グ	?	+3.7 調査剖面が著しい	

S-N	断面	法 量 (mm)				遺存度	構成	色調	胎土	成形・調整				出土状況 (床面～) (cm)	備 考	
		高 度 (mm)	口 幅 (mm)	底 部 幅 (mm)	側部幅 (mm)					内 口	ヨコナダ	横	ヨコヘラナダ	底		
2	壁	168	133	74	183	%	良	暗褐色	やや粗	内	ヨコナダ	横	ヨコヘラナダ	底	+0.6	
									微粒石	外	#	#	ヘラケズリ	#		
3	小型壁	79	59	47	90	%	#	明褐色	密	内	#	#	ヨコナダ	底	+10.0～+35.3	
									微粒石	外	#	#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ 表面剥離あり	
4	塊	?	170	—	183	%	#	明褐色	密	内	#	#	ヨコナダ		-2.7	
									一部黒斑	外	#	#	ヘラケズリ			
5	坪	?	148	—	157	%	#	内明褐色 外赤褐色	密	内	ヨコナダ後 ミガキ	横	ヨコヘラナダ	底	-5.5	
									白雲母 微粒石	外	#	#	ヘラケズリ			
6	#	42	143	—	135	%	#	黑褐色	密	内	#	#	ヨコナダ	底	-5.6～+0.3	
									微粒石	外	#	#	ヘラケズリ 後ナダ			
7	塊	?	154	—	145	%	#	淡黄褐色	密	内	#	#	ヨコナダ		カマド一括	
									微粒石	外	#	#	ヘラケズリ			
8	坪	?	149	—	145	%	#	黑褐色	やや粗	内	#	#	ヨコナダ		野窓穴一括	
									長石	外	#	#	ヘラケズリ			
9	塊	61	110	—	118	%	#	明褐色	密	内	ヨコナダ後 ミガキ	横	ヨコヘラナダ	底	-5.7	
									微粒石	外	#	#	ヘラケズリ 後ミガキ			
10	坪	48	143	—	142	%	#	暗褐色	密	内	ヨコナダ後 ミガキ	横	ヨコナダ	底	-4.8～-5.3	
									微粒石	外	#	#	ヘラケズリ			

第25表 第11号住居跡土製品観察表

S-N	断面	法 量				遺存度	構成	色調	胎土	せ い け い	出土状況 (床面～) (cm)				備 考	
		高 度 (mm)	口 幅 (mm)	底 部 (mm)	側部幅 (mm)						内 口	ヨコナダ	横	ヨコヘラナダ	底	
11	土製小五	9.5	9.5	1.5	0.7	充	不 良	灰褐色	精 良						+13.7	11・12脚土、焼成同一、白玉形
12	#	10～12	10	1.5	0.8	ほぼ充	#	灰黑色	#						+10.5	

第12号住居跡 (015) (第138～141図 第26表)

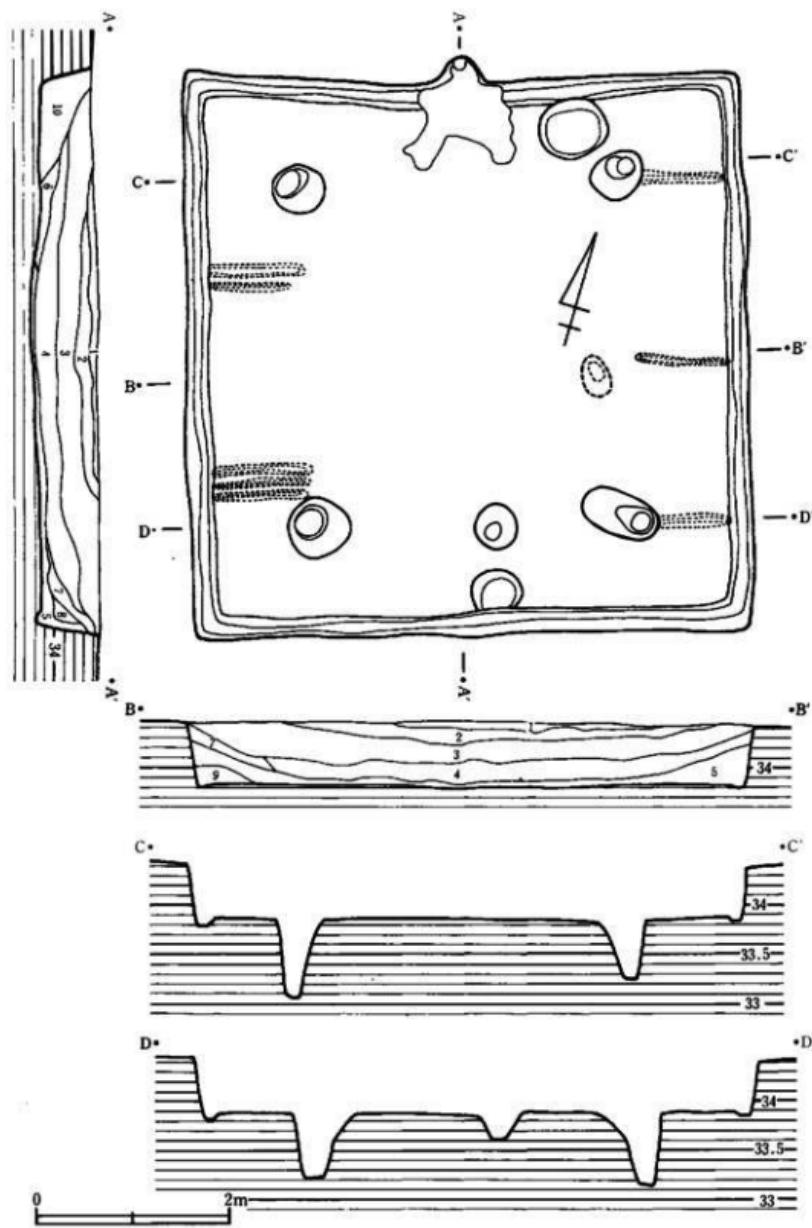
検出状況 本住居跡は、第11号住居跡の南西25mに位置する。立地は、台地の平坦面である。床面の標高は、33.80～33.90mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。4辺の長さは、5.7～5.8mである。主軸の方位は、N-15°-Wである。壁は、高さが48～63cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

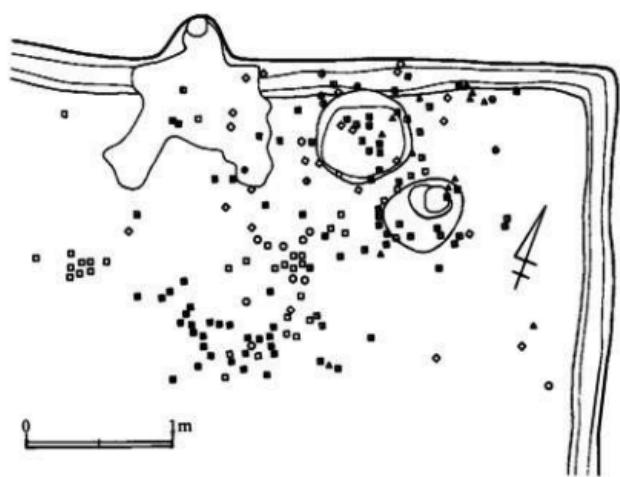
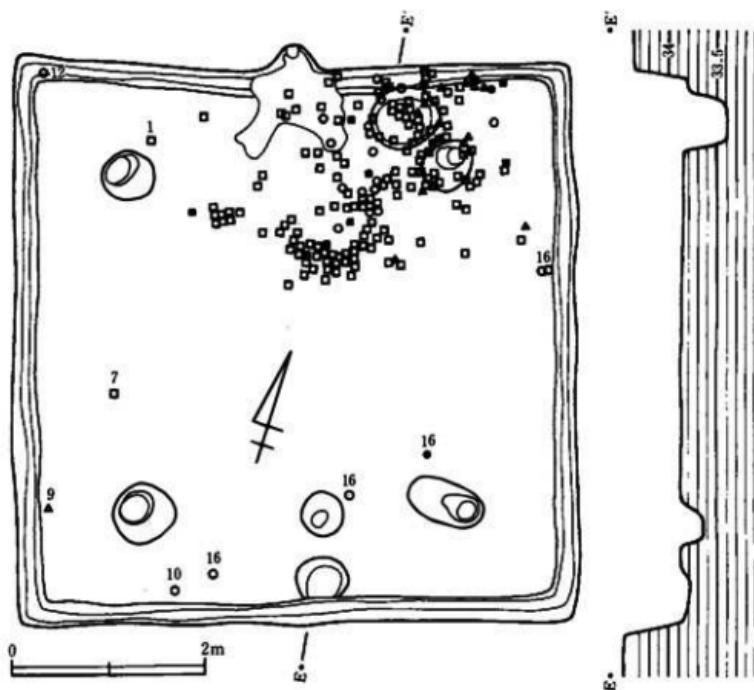
床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁溝 カマドの下をのぞき、全周している。幅10～18cm、深さ2～7cmで、断面はU字形である。

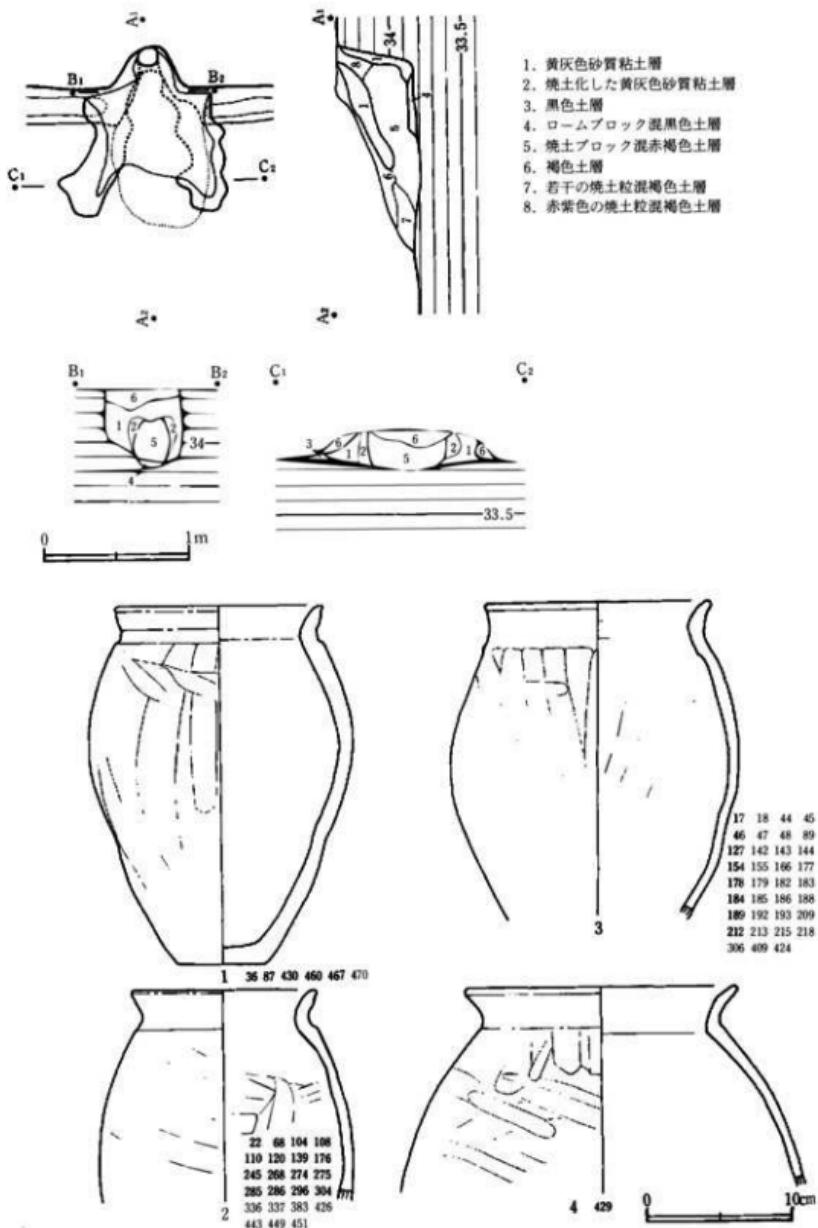
床溝 カマドに向って右側に3本、左側に5本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅6～14cm、深さ5cm前後である。



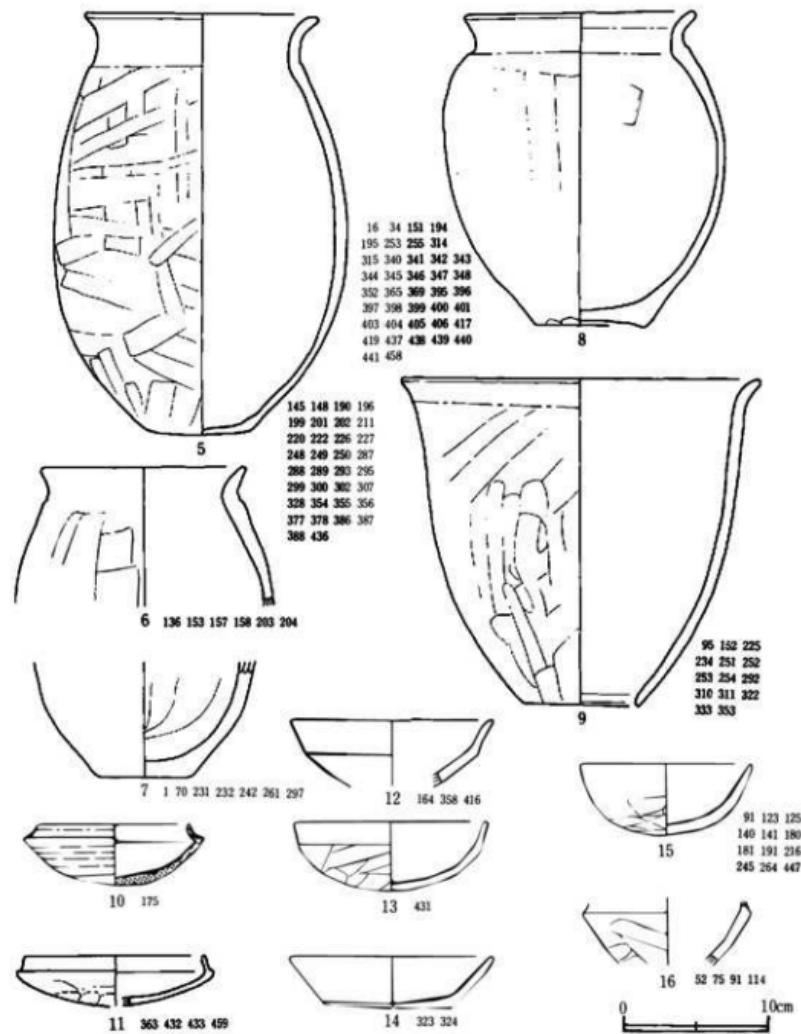
第138図 第12号住居跡遺構図



第139図 第12号住居跡遺物位置図



第140図 第12号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第141図 第12号住居跡遺物実測図 (2)

柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が2つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ相対する対角線上に位置する。径42~80cm、深さ61~75cmである。副柱穴のうち1つはカマドと向い合う位置に、もう1つは東側の主柱穴2つの間にある。径40~46cm、深さ22~24cmである。

貯藏穴 カマドの右脇にある。平面形態は、楕円形である。口の大きさは、60cm×70cmで、深さ52cmである。覆土は、底の方から、ローム粒主体黄褐色土、ローム粒、ロームブロック混暗褐色土、

ローム粒、ロームブロック、焼土、山砂混黒褐色土、ローム粒、山砂混暗褐色土の順で堆積している。

ピット 南壁の中央に、壁溝に接するかたちで、丸いくぼみがみつかった。径46~51cm、深さ8cmである。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅50cm、奥行き30cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。焚き口から火床にかけてゆるく掘りくぼめられ、煙道の底からローム壁にかけて、1枚土が貼られている。天井部はのこるが、掛け口の位置はつかめない。

遺物出土状況 床面からかなり浮いてあるが、10の須恵壺が、完形で出土した。このほかに、5、8の土師甕、9の土師瓶、14の土師壺の破片が、散乱した状態であるが、一個体分あるいはそれ近く、床面近くから覆土中にかけて出土した。18の支脚は第33号住居跡出土のものと付いた。

- | | | |
|-----|--------------------------|---------------------|
| 覆 土 | 1. 多量の焼土、ごく少量のローム粒混暗褐色土層 | 6. 多量のローム粒、山砂混黄褐色土層 |
| | 2. 褐色土、ローム粒混黒褐色土層 | 7. 褐色土混暗褐色土層 |
| | 3. 褐色土、少量のローム粒混暗褐色土層 | 8. 少量のローム粒混黒褐色土層 |
| | 4. ローム粒混黒褐色土層 | 9. 多量のローム粒混黒褐色土層 |
| | 5. 多量のローム粒混黄褐色土層 | 10. カマド |

第26表 第12号住居跡土器観察表

番 号	器 種	法 式 (cm)			造 成度	燒 成	色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整					出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考
		器 高 度	口 徑 性 格	底 盤 性 格					内 部	口 コナ デ	網 ヘラケズリ	底 ヘラケズリ			
1	甕	240	137	?	179	%	良	淡褐色	密	内 外	口 コナ デ	網 ヘラケズリ	底 ヘラケズリ	+5.1～+8.9	
2	#	?	122	?	173	%	やや不良	内黒褐色 外明褐色	#	内 外	"	"	"	+5.7～+49.7	野廬穴
3	#	?	150	?	200	%	良	口淡褐色 網褐色	#	内 外	"	"	"	-1.7～+37.8	
4	#	?	178	?	?	%	#	内明褐色 外淡褐色	#	内 外	"	"	"	+0.1	
5	#	281	158	67	220	ほぼ完	#	内暗褐色 外赤褐色	#	内 外	"	"	"	+8.8～+26.1	野廬穴
6	#	?	135	?	?	%	やや不良	黑褐色	やや粗 粒石	内 外	"	"	"	+17.9～+30.4	
7	#	?	?	64	?	網一底 不	良	内暗褐色 外赤褐色	密 粗粒石 粗粒石	内 外	網 ヘラナデ	底 ヘラナデ		+6.7～+39.5	
8	#	215	155	73	195	%	良	淡赤褐色	やや粗 粒石	内 外	口 コナ デ	網 ヘラナデ	底 ヘラナデ	+8.5～+18.7	内面は使用により 剥離
9	甕	222	244	77	—	ほぼ完	#	暗黃褐色	密 粗粒石	内 外	"	"	"	+12.2～+45.4	野廬穴、柱穴 内面は使用によ り剥離

S N	器種	法寸 (cm)				遺存度	焼成	色調	土	成形・調整					出土状況 (床面～) (cm)	備考		
		高 さ	口 幅	底 幅	側部 厚					内 口	ヨコナダ	銅 ロ	クロ	外 壁	田 ケズ	ヘ ラ		
10	埴輪環	35	120	—	117	完	良	明灰色	密	内 口	ヨコナダ	銅 ロ	クロ	外 壁	田 ケズ	ヘ ラ	+12.7	
11	环	—	120	—	130	%	*	黄褐色	密	内 口	ヨコナダ	ヘラ ナダ後 ミガキ	—	外 壁	ヘラ ケズリ	—	+3.9～+22.6	
12	*	?	137	—	120	%	良	明褐色	?	内 口	ヨコナダ	棒状工具に よるナダ	—	外 壁	ヘラ ケズリ	—	+30.9～+36.5	
13	*	40	134	—	120	%	*	明褐色	密	内 口	ヨコナダ	ナ ダ	—	外 壁	ヘラ ケズリ	—	+29.6	
14	*	31	140	—	122	%	非常に良 い	明褐色 黒斑あり	密	内 口	ヨコナダ	ナダ後ミガキ	底 ナダ後ミガキ	外 壁	ヘラ ケズリ?	ヘラ ナダ後ミガキ	+1.8～+9.8	
15	*	40	119	—	47	%	良	内底褐色 外明褐色	密	内 口	ヨコナダ	ヘラ ナダ	—	外 壁	ヘラ ケズリ	—	+7.0～+33.4	
16	*	?	?	?	106	(缺)	*	淡赤褐色	密	内 口	ヨコナダ	—	外 壁	ヘラ ケズリ	—	—	-0.1～+33.5	

第13号住居跡 (016) (第142～145図 第27・28表)

検出状況 本住居跡は、第12号住居跡の東よりやや南寄り28mに位置する。立地は、台地の、平坦面から斜面へとかわる肩口である。斜面は、北東へ向ってゆるく傾斜する。東に、北へ向ってひらく大きな谷がある。床面の標高は、33.20mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。カマドのある北辺が最も短く7.2m、ついで、西辺の7.3m、東辺と南辺が長く7.7mと7.5mである。主軸の方位は、N-15°-Eである。壁は、高さが32～88cmあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

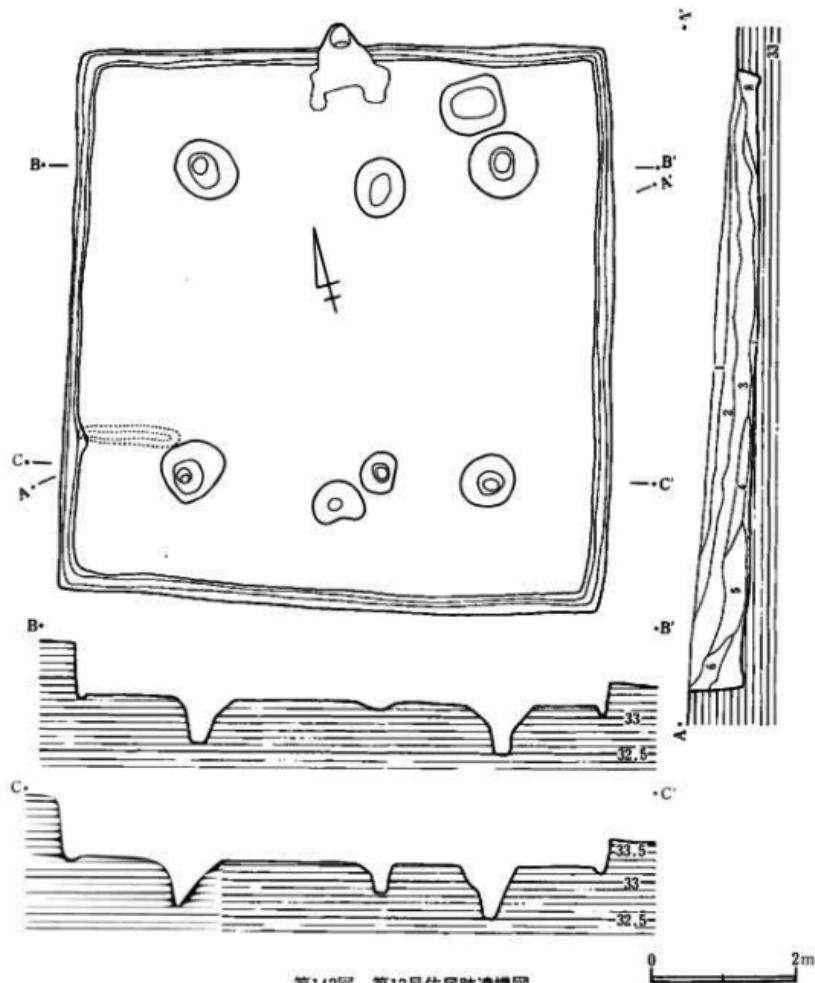
床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁溝 カマドの下を含めて全周している。幅14～20cm、深さ4～16cmで、断面は逆台形である。

床溝 カマドに向って左側に1本、壁と直角に、壁から柱穴に向って床に溝が走る。幅20～25cm、深さ10cm前後である。

柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が3つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ相対する対角線上に位置する。径70～94cm、深さ60～72cmである。主柱穴の東西の並びのあいだにある3つの副柱穴は、北の方から、径68～82cmで深さ27～31cm、径46～54cmで深さ40cm、径56～70cmで深さ35cmである。

貯藏穴 カマドの右側にある。平面形態は、長方形である。口の大きさは74cm×86cm、深さ42cmで、底は平らである。覆土は、上から下まで、ソフトロームとハードロームブロックから成る黄色土がつまっていた。



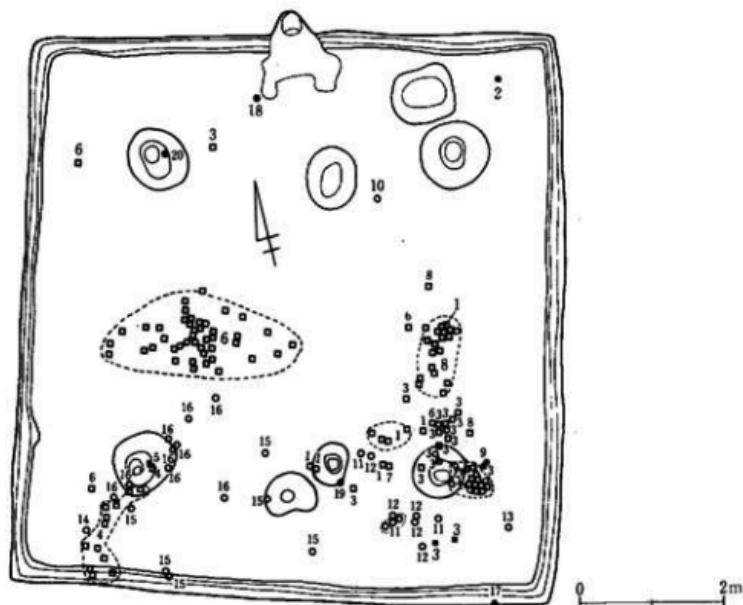
第142図 第13号住居跡遺構図

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅60cm、奥行き32cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。焚き口から火床にかけてゆるくくぼんでいる。煙道の立ち上がりから、ローム壁に土が貼られている。天井部はのこっているが、掛け口の位置は、わからない。左袖の前から土製支脚が出土している。

遺物出土状況 床面からは9の土師高壺がほぼ完形で出土し、19の土製臼玉も出土した。南西の主柱穴中からは、5の土師甕が、上を向いた状態で出土した。7の土師甕はほぼ完形での出土であるが、25cm以上も床面から浮いての出土である。1の土師甕は、接合の結果、完形に復元できたが、

破片は、床面からかなり浮いた状態でも出土している。

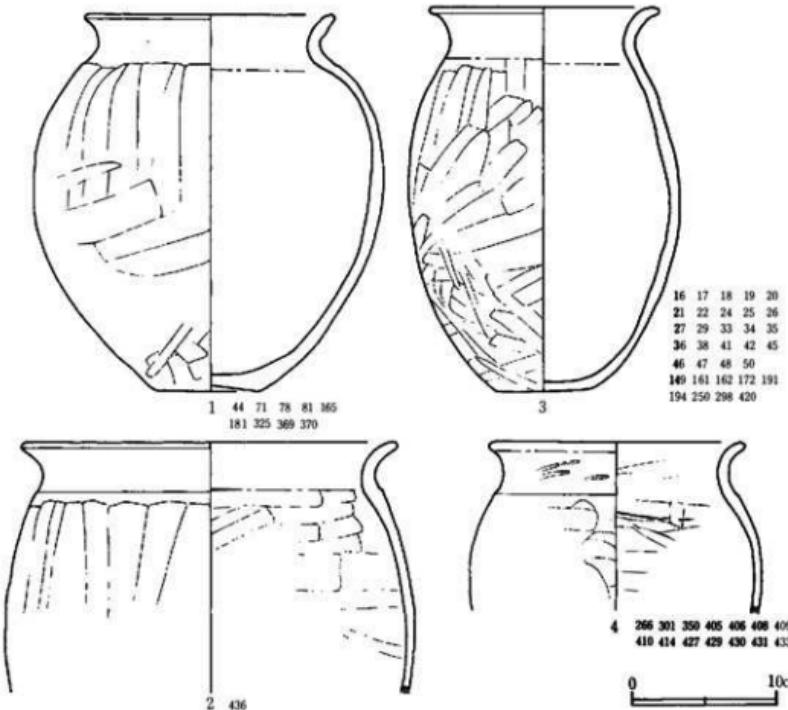
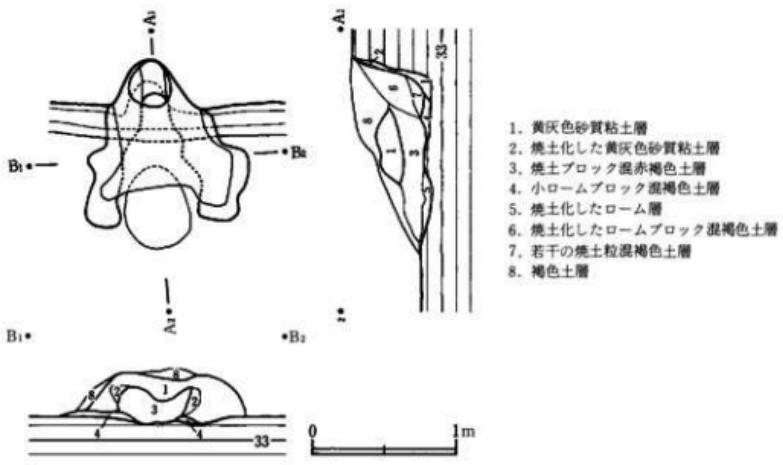
- | | | |
|-----|----------------------|----------------------------|
| 覆 土 | 1. 多量の焼土、少量のローム粒混暗褐色 | 5. ローム粒、ロームブロック混暗褐色土層 |
| | 2. ローム粒混黒褐色土層 | 6. 多量のロームブロック混暗褐色土層 |
| | 3. ローム粒混暗褐色土層 | 7. ローム粒、若干の黒色土混明褐色土層 |
| | 4. ローム粒混黒褐色土層 | 8. ロームブロック、褐色土混ローム粒主体黄褐色土層 |



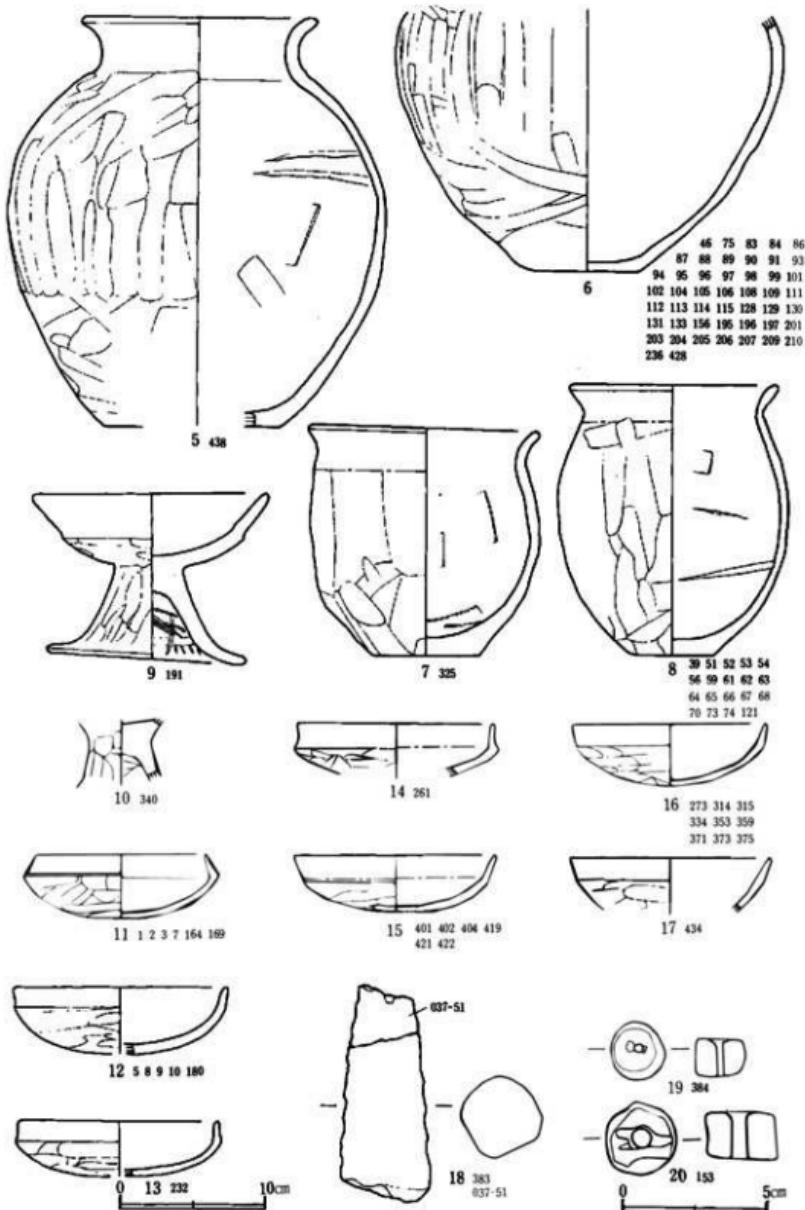
第143図 第13号住居跡遺物位置図

第27表 第13号住居跡土器観察表

器種	法寸 (mm)	成形・調査						出土状況 (床面 ~) (cm)	備考
		口部 底部 側部 高 径	底 部 高 度	側部 底 部 厚	造存度	成 形 色 調 胎 土			
1 瓢	252 170 70 242	完	良	黄褐色	密 微粒石	内口 外#	ヨコナダ ハラケズリ	ナデ ナデ	+0.7~+11.8
2 #	? 258 ? 280	口~柄 % %	#	外底赤褐色 黒斑あり 白石母	密 微粒石	内口 外#	# #	ヨコヘナダ ハラケズリ	-0.8
3 #	257 157 64 186	%	#	淡黄褐色	密 微粒石	内# 外#	# #	ナデ ハラケズリ	+0.7~+19.8 内面は使用により 剥離
4 #	? 174 ?	201 %	#	内暗褐色 外底赤褐色	密 微粒石	内# 外#	ヨコナダ~ ヨコナダ	ナデ ハラケズリ	-29.2~+78.1 口外面に棒状工具 痕あり



第144図 第13号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第145図 第13号住居跡遺物実測図(2)

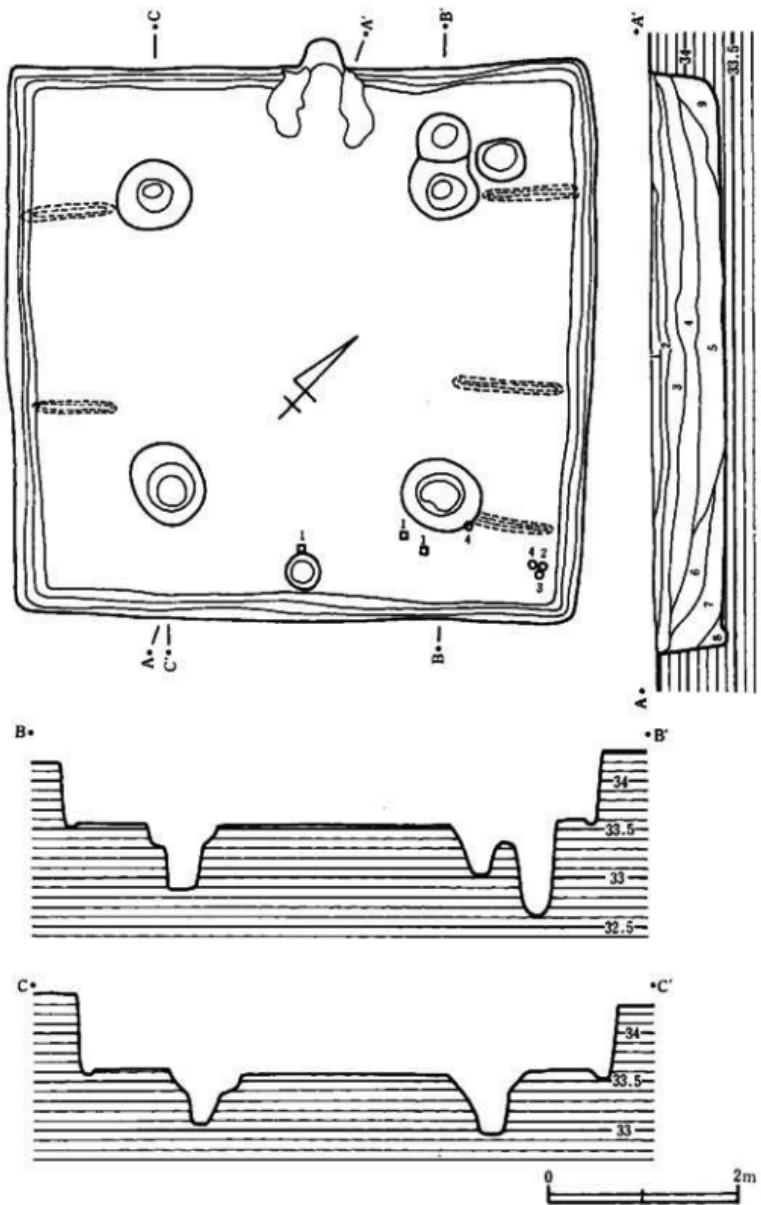
さ ら に 分 類	法 量 (mm)			遺 存 度	機 成	色 調	胎 土	成 形・調 整				出 土 状 況 (底 面 ト ー) (cm)	備 考
	器 種	高 さ (mm)	幅 (mm)					内 外	コ ナ ダ グ	内 外	コ ナ ダ グ		
5 瓢	277	155	—	263	底残存 わずか。 口～側 中央付近	良	暗褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	内 外	コ ナ ダ グ	南西柱穴内一様
6 #	?	?	52	? 深 %	#	内赤褐色 外明褐色 黒斑あり	#	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	底 外	+ 1-5± 6 背表面 刻離
7 #	152	155	52	160	ほぼ完	#	赤褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 52表面 刻離あり
8 #	180	140	50	160	%	#	淡赤褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 7.0~+ 6 40.
9 高 环	111	159	125	54	ほぼ完	#	环内外黄 褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 7.0の内、外は 环の 下の内、外は 环の 形成、調整
10 #	?	?	?	?	环と側 板のみ	#	明褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 0.7.
11 环	42	116	—	134	%	#	暗褐色 口黑色処理	#	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 8-9± 7.4.
12 #	44	—	—	145	%	良	黑褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 3.3~+ 1.21.
13 #	38	135	—	140	%	#	暗褐色	#	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 6表面 是れ切る
14 #	38	137	—	143	高解灰 %	#	暗褐色 黒斑あり	#	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 5.4.
15 #	35	137	—	127	% 傷	やや不良	内赤褐色 外液黑	#	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 5~6± 2表面 刻離
16 #	40	133	—	129	%	良	暗褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 7~8± 0.8.
17 #	?	136	—	130	D30A1	#	暗褐色	密	内 外	コ ナ ダ グ	底 外	コ ナ ダ グ	+ 5.0.

第28表 第13号住居跡土器品・石製品観察表

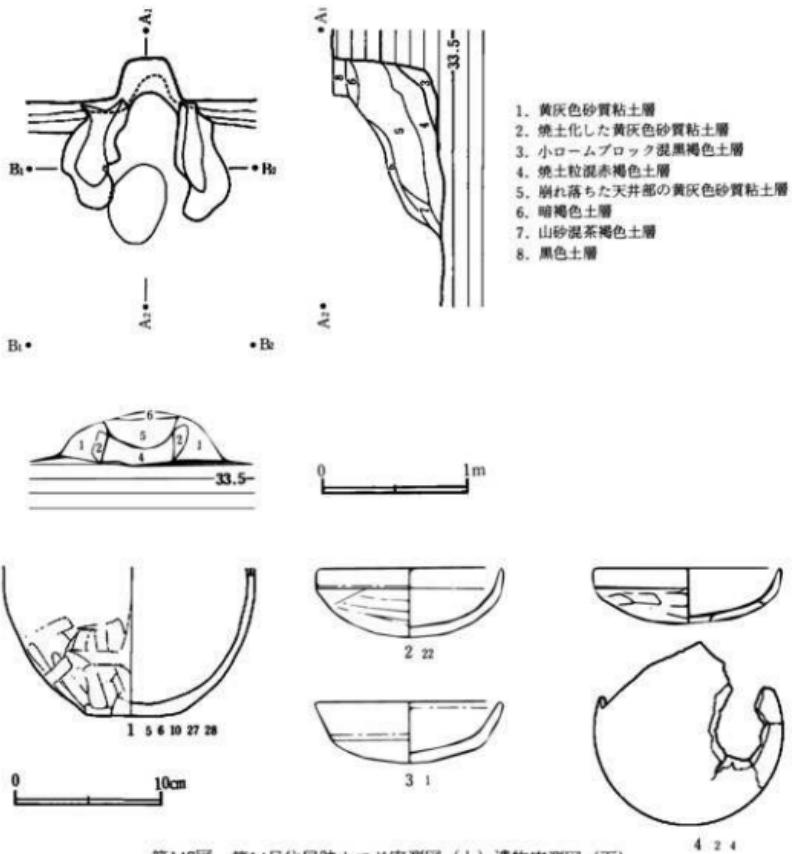
2 5 番	法 量			遺 存 度	機 成	色 調	胎 土	せ い け い	出 上 状 況 (底 面 ト ー) (cm)	備 考	
	器 種	幅(?) (mm)	高(?) (mm)	孔深(?) (mm)	重量(g)						
18 土質支脚	62.5	143	—	350	ほぼ完	二次焼成	茶褐色	燒砂粒		+ .5	31号住居跡の破 と接合
19 土質臼玉	9	6.5	1	0.6	主	良	黑褐色	精良	外面 研磨	+ .4	1
20 磨石臼玉	12	9	3	1.9	完	—	灰綠色	—	外面 縦縫研磨痕あり	+ .2	切歯面に凹凸あり

第14号住居跡 (017) (第146・147図 第29表)

検出状況 本住居跡は、第13号住居跡の南よりやや西寄り18mに位置する。立地は、台地の平坦面の東のはずである。床面の標高は、33.60mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。



第146図 第14号住居跡遺構図・遺物位置図



第147図 第14号住居跡カマド実測図(上) 遺物実測図(下)

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺は5.9mである。主軸の方位は、N-42°-Wである。壁は、高さが56~81cmあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁溝 カマドの下をのぞき全周している。幅12~20cm、深さ4~8cmで、断面はU字形である。

床溝 カマドに向って右側に3本、左側に2本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅12~14cm、深さ2~5cmである。

柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ相対する対角線上に位置する。口径60~86cm、深さ56~64cmである。副柱穴1つは、カマドと向い合う位置にあり、径36cm、深さ40cmである。

貯藏穴 カマドの右側に2つある。1つは、柱穴に接する。ともに平面形態は円形である。東寄りのものは、径44~52cm、深さ64cmである。西寄りのものは、径52~54cm、深さ96cmである。ともに

底は平らである。覆土は、東寄りのものが、底から、ローム粒主体の黄褐色土、ローム粒、黒色土混暗褐色土、ローム粒、ブロック、褐色土から成る黄褐色土の順で堆積しており、西寄りのものが、同じく、ローム粒主体の黄褐色土、ローム粒、ロームブロック混黒褐色土の順で堆積していた。

カマド 北西壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅46cm、奥行き28cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。

遺物出土状況 2と3の土師壺が完形で出土しているが、床面から25cm以上浮いた覆土中での出土である。

- | | | |
|-----|-------------------|-----------------------|
| 覆 土 | 1. 少量のローム粒混暗褐色土層 | 6. 褐色土、ローム粒混暗褐色土層 |
| | 2. 多量の焼土粒混暗褐色土層 | 7. 多量のローム粒、ブロック混黄褐色土層 |
| | 3. 褐色土混黒褐色土層 | 8. 黒色土、ローム粒混暗褐色土層 |
| | 4. ローム粒混暗褐色土層 | 9. ローム粒、山砂、焼土粒混黄褐色土層 |
| | 5. 褐色土、ローム粒混黒褐色土層 | |

第29表 第14号住居跡土器観察表

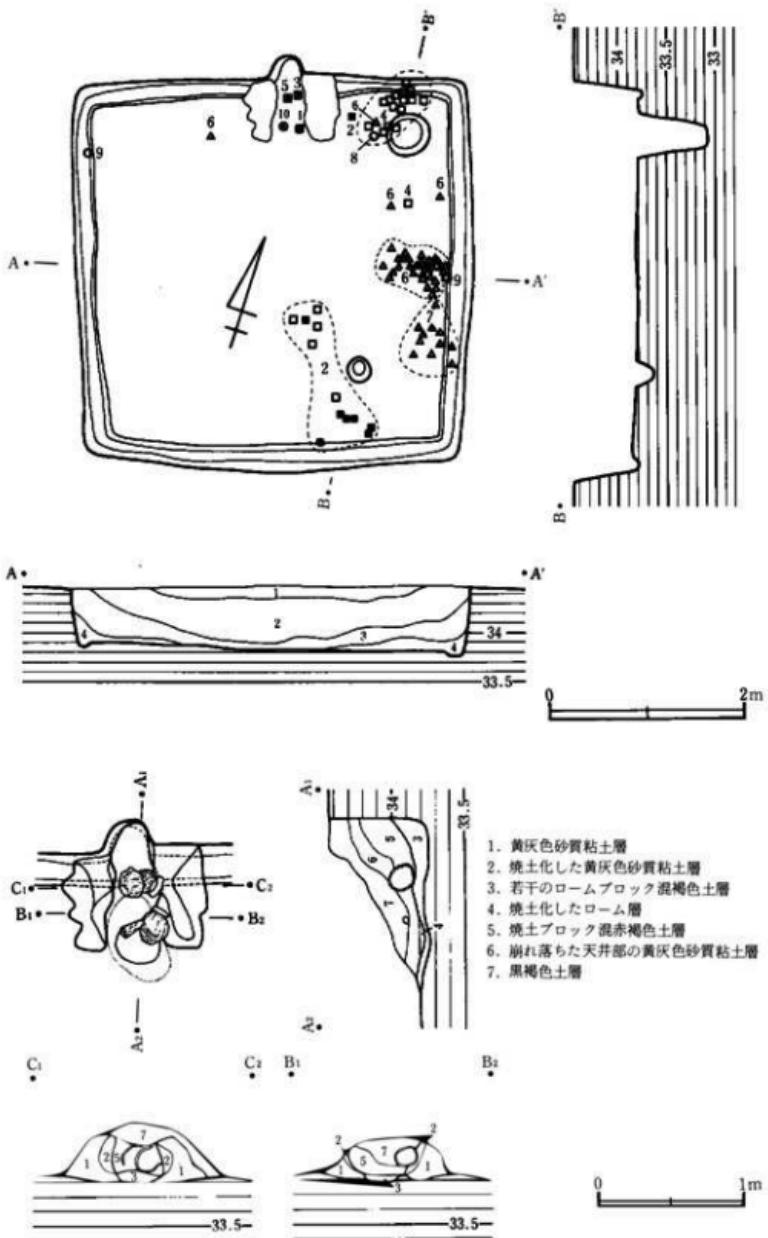
調査者番号	器種	法 尺 (mm)			遺存度	焼成	色 調	胎 土	成 形・調 整					出 土 状 況 (床 面 ~) (cm)	備 考
		高 さ	口 径	底 盤 径					内 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側		
1	壁	?	?	52	?	底部のみ	良	内暗褐色 外浅褐色	密	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	+18.3~+38.8	
										内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側		
2	壺	46	127	—	130	完	#	黑褐色 内外面 黑色修理	#	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	+25.3	
										内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側		
3	#	40	130	—	124	#	やや不良	内 外 外 黑色	#	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	+30.5 内側使用による剥離 調査耗	
										内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側		
4	#	36	126	—	129	% 強	良	明褐色	#	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	内 側 内 外 外 側	+27.7~+36.4	

第15号住居跡 (018) (第148~150図 第30・31表)

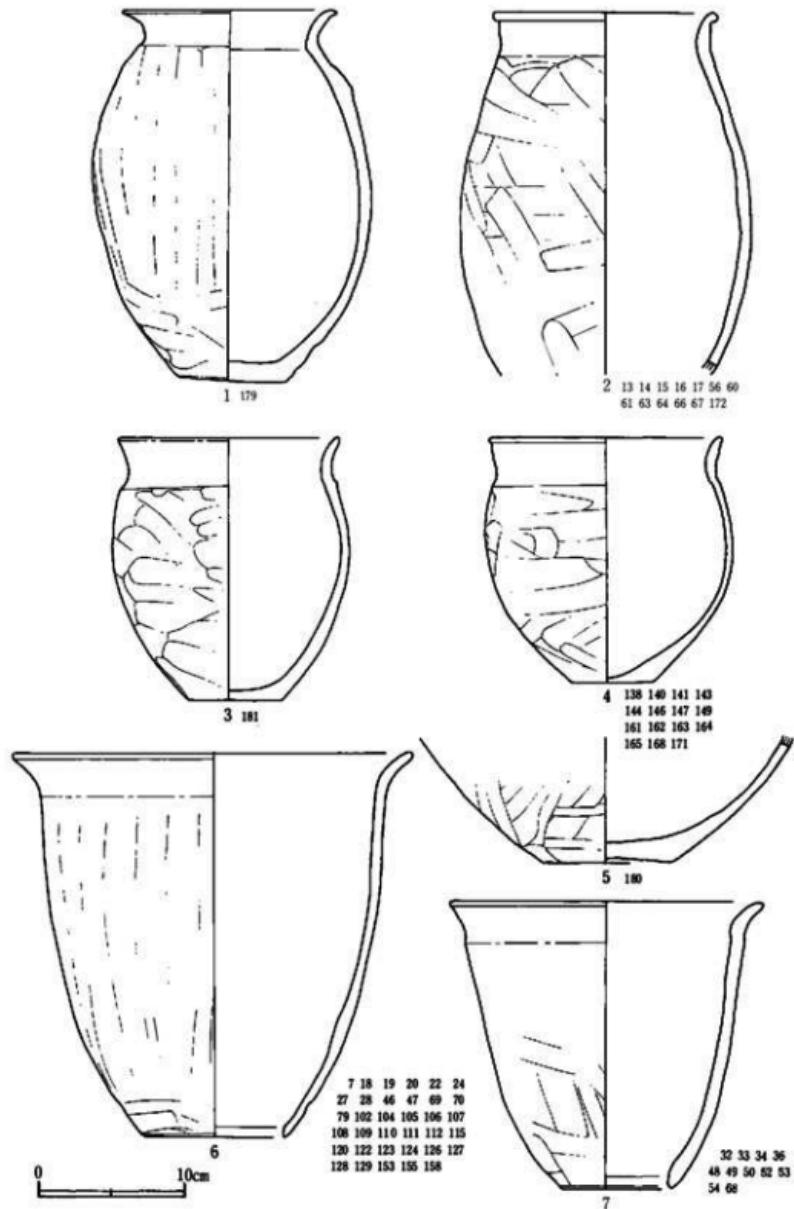
検出状況 本住居跡は、第14号住居跡の北西20mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.80mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形である。各辺は、3.9~4.0mで、南辺がゆるく外側へふくらむ。主軸の方位は、N-15°-Wである。壁は、高さが56~66cmあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

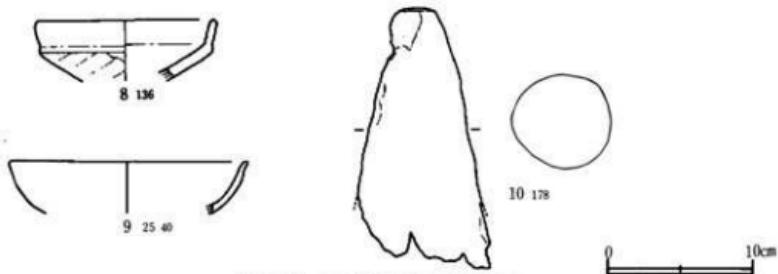
床 面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。全面にわたり火を受けた様子がみられ、特に、中央より西側は、著しく硬化し、ボロボロと剥れるほどであった。



第148図 第15号住居跡遺構図・遺物位置図（上）・カマド実測図（下）



第149図 第15号住居跡遺物実測図(1)



第150図 第15号住居跡遺物実測図(2)

また、北東隅で、白色粘土のブロックが1つみつかった。

壁溝 カマドの下を含めて全周している。幅8~18cm、深さ4cmで、断面は逆台形である。

柱穴 南東隅に1つだけみつかった。径24cm、深さ18cmである。

貯蔵穴 カマドの右側、北東隅にある。平面形態は、円形である。口の大きさは径46cm、深さ72cmで、底は平らである。覆土は、壁に沿ってまず黄褐色土が流れ込み、その後に、底の方から、粘質茶褐色土、ローム粒混黒色土、ローム粒混暗褐色土が順に堆積していた。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅35cm、奥行き20cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床はゆるくくぼんでおり、左右の袖部のあいだは、焚き口から煙道の立ち上がりまで、土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。中からは、1・3の土師壺、5の土師壺底と、土製支脚が、横倒しになった状態で、出土している。

遺物出土状況 床面近くからは、2の土師壺の破片が出土している。4の土師壺と7の土師壺の破片は、いずれも、床面からかなり浮いた状態で出土した。

覆土 1. 褐色土、少量のローム粒混暗褐色土層 4. 多量のローム粒、ロームブロック混黄

2. 褐色土、ローム粒混黒褐色土層 褐色土層

3. 多量のローム粒混暗褐色土層

第30表 第15号住居跡土器観察表

器種	法尺(m)					造存度	焼成	色調	土	成形・調整					出土状況 (床面～) (cm)	備考		
	器高	口絶径	底絶径	厚	幅					内	外	ヨコナデ	トナデ	内	外	ヨコナデ	トナデ	
1 壺	250	142	75	190	完	良	内面及び 外口一帯 赤褐色	外 外 外	密	内	ヨコナデ	トナデ	内	外	ヨコナデ	トナデ	+0.6(カマド内)	
										外	#	#	ヘラケズリ	底	ヘラケズリ			
2 #	?	150	?	20	底なし 地は%	#	暗褐色	#	内	#	#	#	ナ	デ			-0.1～+5.3	
										外	#	#	#	ヘラケズリ				
3 #	178	150	64	164	完	#	明褐色	#	内	#	#	#	ナ	デ			±0カマド内	
										外	#	#	#	ヘラケズリ	底	ヘラケズリ		
4 #	160	157	56	173	ほぼ完	#	赤褐色 暗褐色	#	内	#	#	#	ナ	デ			+12.0～+54.2	
										外	#	#	#	ヘラケズリ	底	ヘラケズリ		

5 15 20	標 識	法 量 (mm)			遺存度	成 土	色 調	物 土	成 形・調 整				出土状況 (床面～ (cm))	備 考
		幅 (m)	口 幅 (m)	底 幅 (m)					内 側 厚 (mm)	外 側 厚 (mm)	内 側 厚 (mm)	外 側 厚 (mm)		
5	裏	?	?	?	85	底部ノリ	良	淡赤褐色	密	内側ナ ダ	外 側ヘラケズリ	底 部ヘラケズリ		カマド内
6	紙	261	270	94	224	%	#	明褐色	#	内口ヨコナナ デ鋼ナ デ	外 側#	# ヘラケズリ	+5.5～+38.7	
7	#	190	215	75	192	ほぼ完	#	黄褐色 内外面に 黒斑あり	#	内# 外#	# #	ラナナ デ下 口ヘラケズリ	+18.5～+35.9	
8	坏	?	118	?	116	底部ナ シ	#	内暗褐色 外黑色	#	内# 外#	# #	ミガキ ヘラケズリ	+30.5	
9	#	?	162	?	-	#	#	淡赤褐色	#	内# 外#	# #	ミガキ ヘラケズリ	+25.1～+39.9	

第31表 第15号住居跡土製品観察表

5 15 20	標 識	法 量			遺存度	成 土	色 調	物 土	せ い け い				出土状況 (床面～ (cm))	備 考
		幅 (m)	長 (m)	高 (m)					2次焼成	茶褐色	細砂粒	外側 ヘラガ		
10	土製支脚	90	174	-	590	%	2次焼成	茶褐色	細砂粒	外側 ヘラガ	-	基部を大きく欠損		

第16号住居跡 (019) (第151・152図 第32表)

検出状況 本住居跡は、第15号住居跡の南よりやや東寄り19mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、34.00mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだゆるいレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形で、カマドのある北辺が短く6.8mで、のこる3辺は7.1mである。主軸の方位は、N-5°-Wである。壁は、高さが46cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

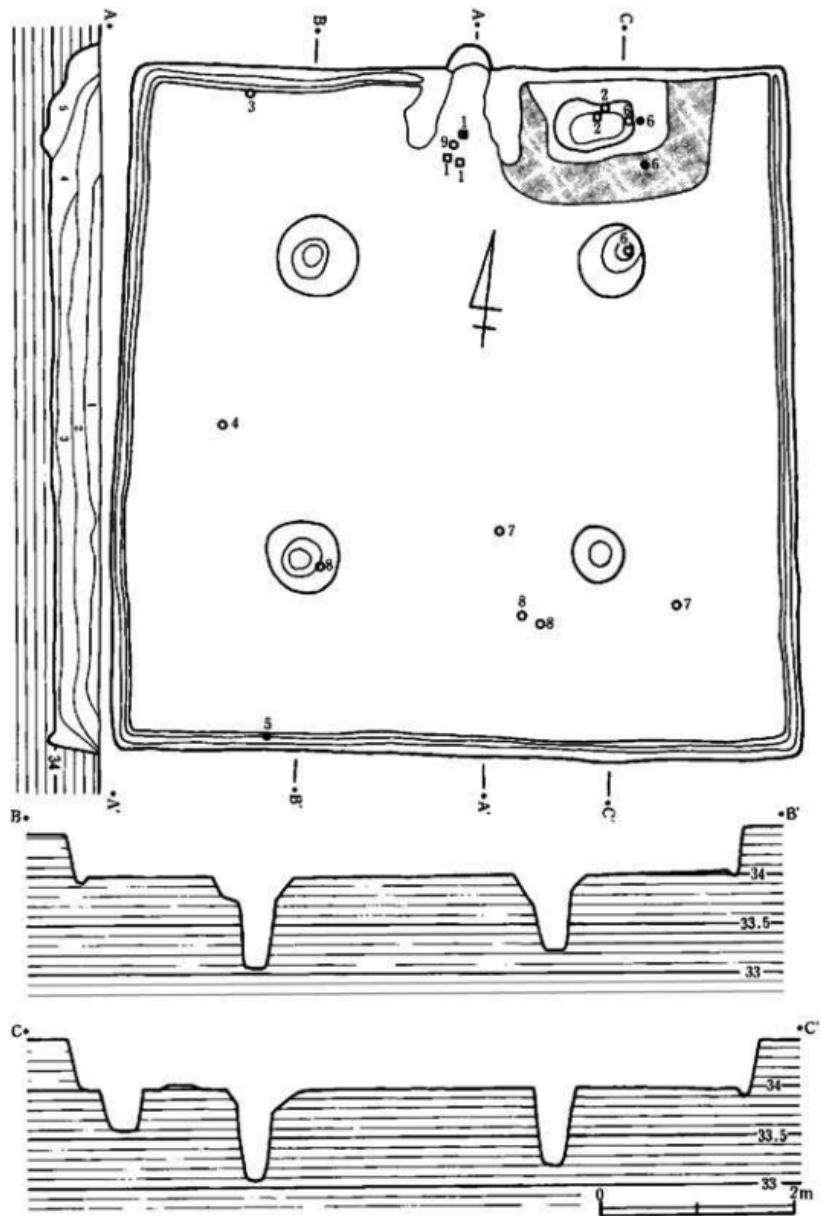
床 面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドの右袖の下から貯蔵穴を囲むようにU字形に、土手状に高く削りのこされている。幅46～48cm、高さ8cmである。

壁 溝 カマドの右側の北壁をのぞき、ぐるりとめぐっている。幅14～28cm、深さ5～6cmで、断面は逆台形である。

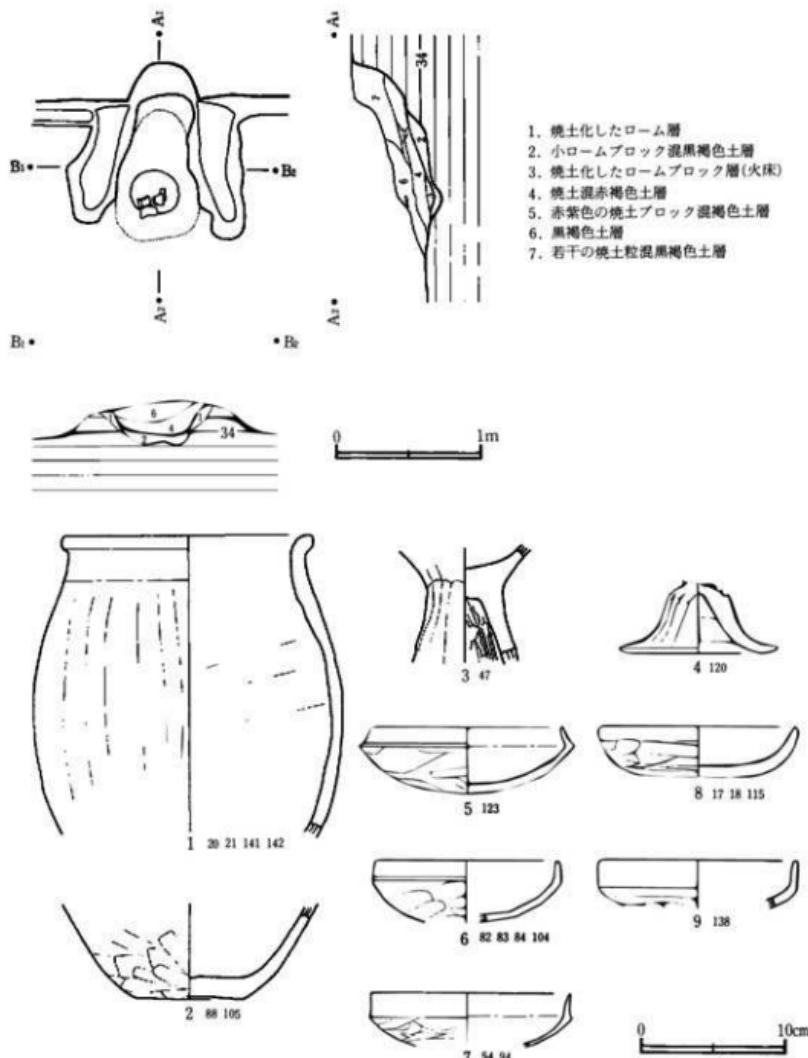
柱 穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径52～84cm、深さ76～92cmである。

貯蔵穴 カマドの右脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさは44cm×82cmで、深さ40cm、底は平らである。覆土は、底の方から、ローム粒主体のロームブロック混黄褐色土、ローム粒と褐色土から成る黄褐色土、ローム粒混黒褐色土、ローム粒、ブロック、焼土粒混暗褐色土、黒褐色土の順で堆積していた。

カマド 北壁の中央に位置する。ハードロームをローム壁から突き出すように2本土手状に並べ



第151図 第16住居跡遺構図・遺物位置図



第152図 第16号住居跡カマド塞測図（上）遺物塞測図（下）

て削りのこして、左右の袖の一部としている。ローム壁を、幅48cm、奥行き26cmの半円状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床から煙道にかけて、一段くぼんでいて、土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりわかる。

遺物出土状況 全体に、質、量とも乏しい。完形あるいはそれに近く復原できたものは無かつた。

覆土 1. 暗褐色土層

4. ローム粒混黄褐色土層

2. 褐色土層

5. カマド

3. 若干のスコリア混黒色土層

第32表 第16号住居跡土器観察表

S 器 種 類	法 量 (cm)			遺存度	地 成 色	調 査 土	成 形 ・ 調 査			出 土 状 況 (床 面 ~) (cm)	備 考
	高 さ	口 径 横 径	厚 さ				内 容	外 形	内 容		
1 瓢	?	167	?	212	底欠け やや不良	内黒褐色 外暗褐色 黒斑あり	密	内 口ヨコナデ 外 ×	内 ヘラナデ 外 × ヘラケズリ	+8.2~+10.2 カマド	
2	?	?	72	?	底部のみ	底赤褐色	中や 細	内 ヘラナデ 外 × ヘラケズリ	内 ヘラナデ 外 × ヘラケズリ	+4.0~31.0	
3 高 杯	?	?	?	?	細かく火 熱のみ	暗赤褐色	密	内 ナ 外 × ヘラケズリ	内 ナ 外 × ヘラケズリ	+41.8	
4	?	?	108	?	底の凹凸 良	暗褐色	?	内 口ヨコナデ 外 ×	内 ヨコナデ 外 ×	+4.3	
5 环	44	131	-	149	%	?	?	内 ヨコナデ後 ミガキ	内 ヨコナデ後 ミガキ	+3.0	
6	?	124	?	131	%	?	?	内 × 外 ×	内 × ミガキ 外 × ヘラケズリ	-9.3~+3.5	
7	?	153	?	140	%	底赤褐色 の地に黒 色毛理	?	内 × 外 × ヨコナデ	内 × ミガキ 外 × ヘラケズリ	-6.9~+10.5	
8	?	34	135	-	134	%	?	内 ヨコナデ後 ミガキ 外 × ヨコナデ	内 × ミガキ 外 × ヘラケズリ	+5.2~+38.4	
9	?	136	?	136	%	明黄褐色	?	内 × 外 ×	内 × ヨコナデ 外 × ヘラケズリ	+11.9	

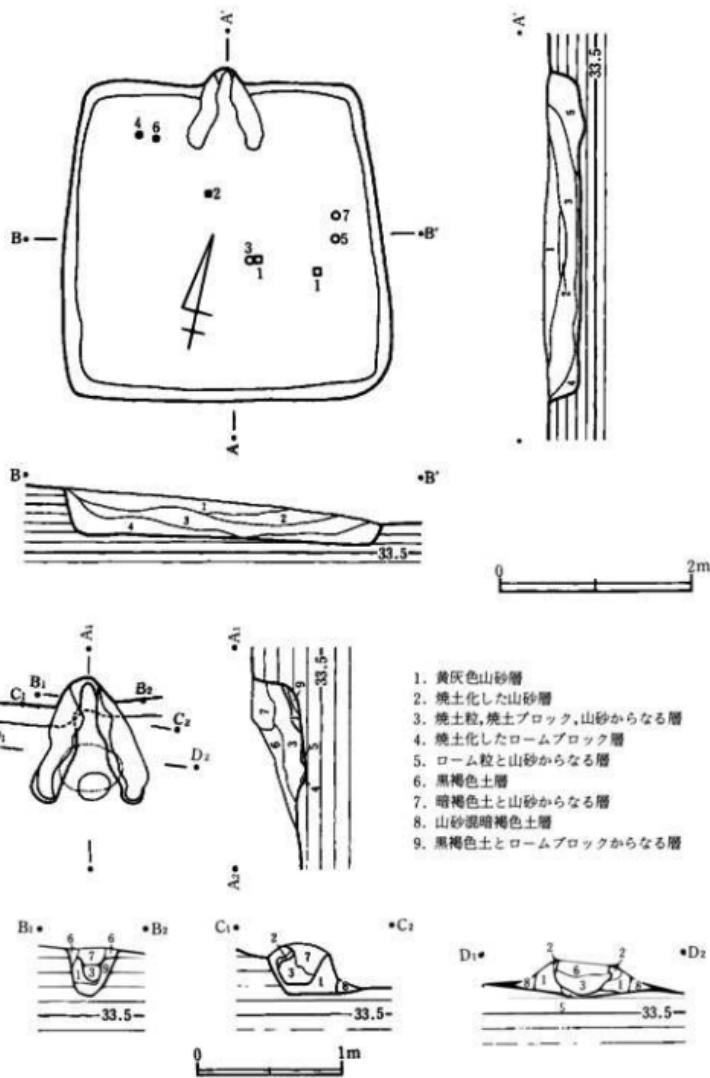
第17号住居跡 (020) (第153・154図 第33表)

検出状況 本住居跡は、第16号住居跡の南東38mに位置する。立地は、ゆるい斜面で、北東へ向って傾斜している。床面の標高は、33.60~33.70mである。遺構の遺存状況は、斜面の下側にあたる東側が、あまり良くない。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、台形である。カマドのある北辺が短く2.9m、これと向い合う南辺が3.4mで、のこる東辺と西辺は3.3mである。主軸の方位は、N-15°-Wである。壁は、高さが16~59cmで、やや上ひろがりに立ち上がる。

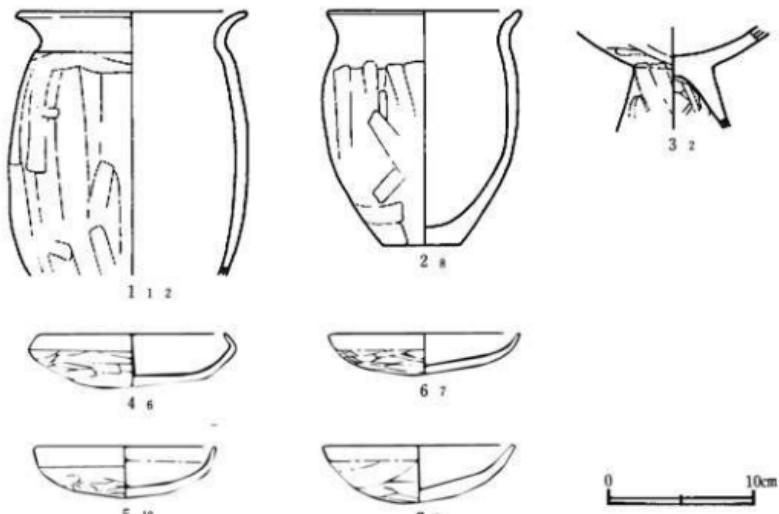
床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を幅39cm、奥行き18cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床が丸くぼんでいる。火床から煙道の立ち上がりにかけて、土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。



第153図 第17号住居跡遺構図・遺物位置図（上）カマド実測図（下）

遺物出土状況 床面からは、2の土師壺がカマドの正面で、横倒しになって出土し、4と6の土師壺が、カマドの左脇から出土した。このほかに完形に近いかたちで出土した5と7の土師壺は、床面から20cm前後浮いていた。



第154図 第17号住居跡遺物実測図

- | | | |
|-----|--------------------|---------------|
| 覆 土 | 1. 部分的に若干黑色土混暗褐色土層 | 4. ローム粒混茶褐色土層 |
| | 2. 褐色土層 | 5. カマド |
| | 3. 黒色土層 | |

第33表 第17号住居跡土器観察表

器種 番號	法 式 (mm)	造 成 度	焼 成 色 調	新 土	成 形 ・ 調 整				出土 状 況 (底 面 ～) (cm)	備 考
					内	口	ヨコナデ	鉗		
1 瓢	?	154	?	164 直なし 下平 丸脚く	良	暗赤褐色	密	内口ヨコナデ鉗	ヘラヨコナデ	+56.5～+58.0
2 小型 瓢	160	131	54	135 ほぼ完	好	内及び外 口暗褐色 外側褐色	#	内口ヨコナデ鉗	ヘラケズリ 後ミガキ	+2.6
3 高 瓢	?	?	?	?	好	环底 黑 脚内外 暗赤褐色	#	内環底ヨコナデ 外#ヘラケズリ	ミガキ セズリシテ ヘラケズリ	+56.5
4 环	35	130	—	142	%	やや不長 外底一部 暗赤褐色	良	内口ヨコナデ鉗	ナダ	+4.1
5	?	36	123	—	116	ほぼ完	良	内口ヨコナデ後 ミガキ	ミガキ ヘラケズリ 後ミガキ	+18.6
6	?	27	132	—	125	好	内黒褐色 外明褐色 黒褐色	内口ヨコナデ 外#ヘラケズリ	ナダ	+2.9
7	?	39	130	—	125	好	良	内口ヨコナデ後 ミガキ	ナダ後 ミガキ ヘラケズリ 後ミガキ	+22.0

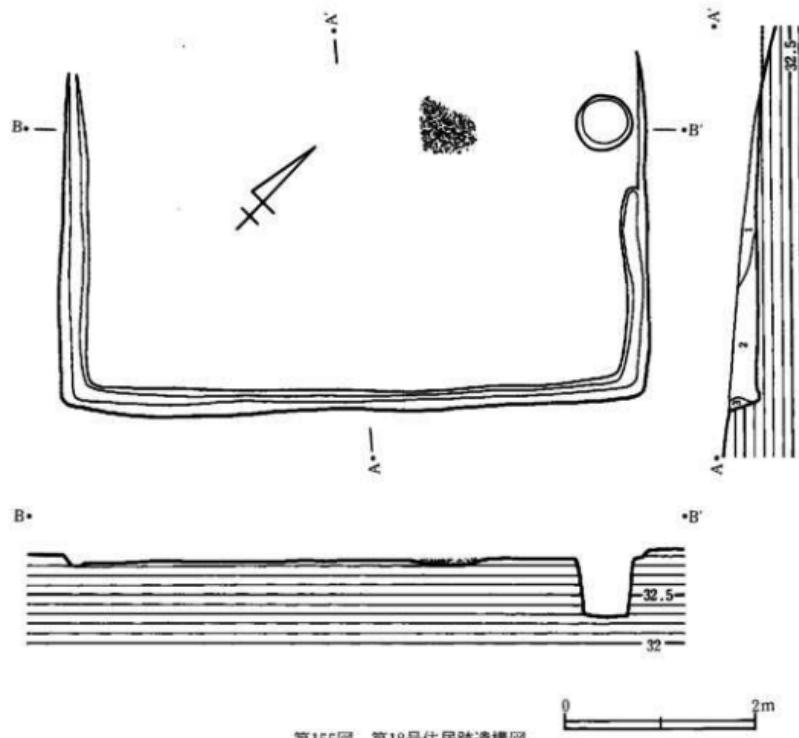
第18号住居跡 (021) (第155図 表ナシ)

検出状況 本住居跡は、第20号住居跡の北17mに位置する。立地は、台地の斜面で、西へ向ってひらく浅い谷の上部である。床面の標高は、32.90mである。遺構の遺存状況は、北西側が斜面のため、半分近く失なわれているものと思われる。覆土は、斜面上方側からの堆積を示す。床面の途切れる床面北西隅に2個所の焼土の堆積がみられた。

形状・規模 平面形態は、方形である。長さのわかる南東辺は6.1mである。壁は、のこりの良い南東壁で、高さが28~34cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 掘り方のわかった部分はロームを平らに削って床としており、のこっていない部分は、貼り床をおこなっていた痕があった。ロームを床にした部分では、南東壁に近いところをのぞいて、きわめて堅緻であった。

壁溝 貯蔵穴にかかるところをのぞいて3つの壁をぐるりとめぐっている。南西壁沿いのものは、北西方向へさらに伸びていたと思われる。幅14cm、深さ4cmで、断面は逆台形である。



第155図 第18号住居跡遺構図

貯藏穴 平面形態は、円形である。口の大きさは径60cm、深さ58cmである。覆土は不明である。

炉 中央よりやや南東寄りにある。床面のローム層が焼土化していた。

遺物出土状況 土器の小破片の出土だけである。

覆土 1. 暗褐色土層 2. 褐色土層 3. 茶褐色土層

第19号住居跡(022) (第156~158図 第34・35表)

検出状況 本住居跡は、第18号住居跡の南東25mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.60mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、図の通り、細かい複雑な堆積をしていた。カマドのつくりかえがおこなわれている。北の柱穴の北東側の床面に2箇所の焼土の堆積がみられた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。西壁ほぼ中央の出張りは、煙道の痕である。西壁が最も長く6.0mで、のこりの3辺は、5.6~5.8mである。主軸の方位は、N-115°-Eである。壁は、高さが54~62cmあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。南東隅の貯蔵穴のまわりを、取り囲むように、U字形に土手状に一段高く削りのこされている。幅18~58cm、高さ5cm前後である。

壁溝 南東隅と南西隅近くの、ともに貯蔵穴にかかるところをのぞいて、ぐるりとめぐっている。幅16~26cm、深さ6~10cmで、断面はU字形である。

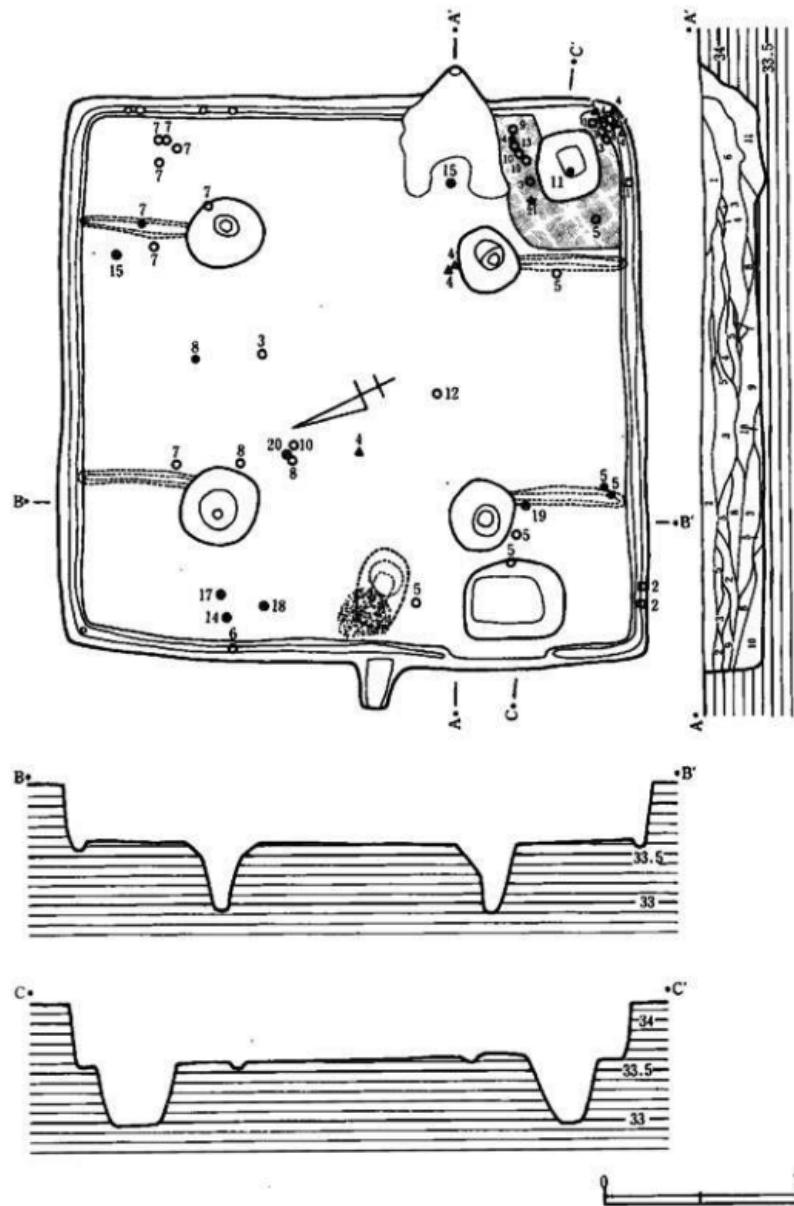
壁柱穴 東壁に4つ、北西隅に1つある。径5~9cm、深さ4~6cmである。

床溝 カマドの左右に2本ずつ、壁と直角に、壁から柱穴に向って床に溝が走る。幅12~20cm、深さ4~6cmである。

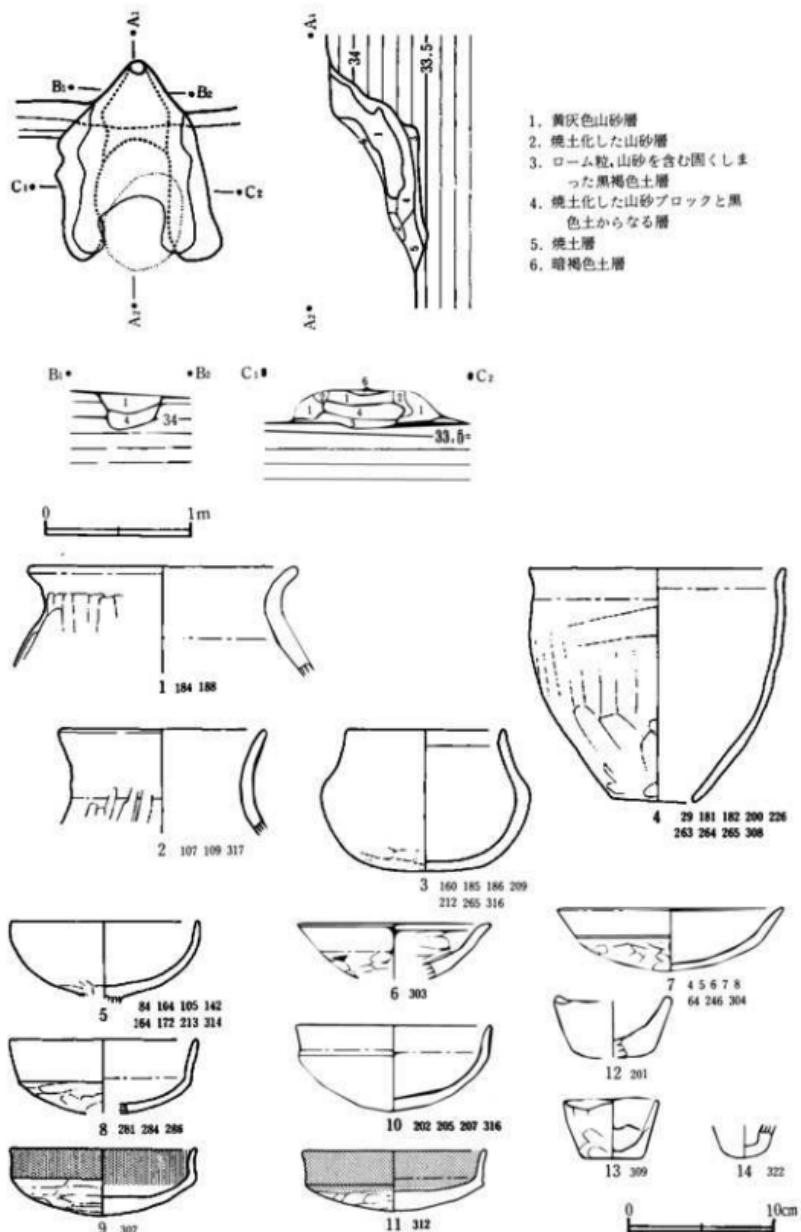
柱穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径64~80cm、深さ68cmである。

貯蔵穴 カマドの右脇にある。北西隅に、旧いカマドに伴うものがもう1つあった。カマド右脇のものは、平面形態がほぼ正方形で、口の大きさ64cm×68cm、深さ64cm、底は平らであった。覆土は、底の方から、粘質茶褐色土、同褐色土、山砂混暗褐色土、同褐色土、焼土とロームブロック混茶褐色土、黒色土、ロームブロック混茶褐色土の順で堆積していた。旧い貯蔵穴は、平面形態が長方形で、口の大きさ80cm×104cm、深さ60cmで、底は平らであった。覆土は、底の方から、炭化物混ロームブロック主体黄褐色土、ロームブロックからなる黄褐色土、山砂混褐色土、ロームブロック混茶褐色土の順で堆積していた。

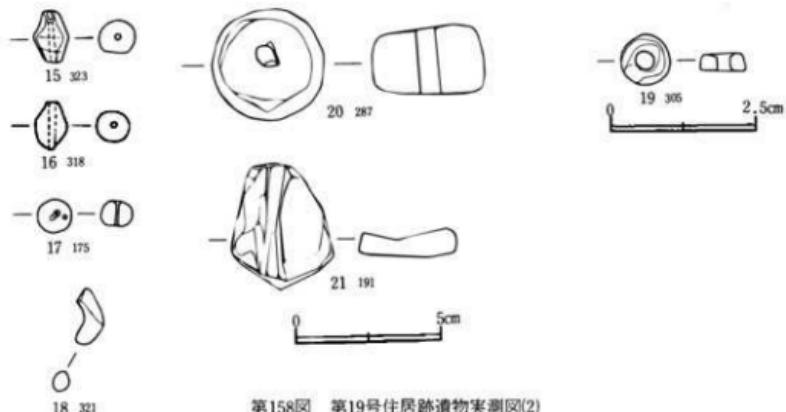
カマド 東壁の南東隅近くに位置し、黄灰色の山砂を主して構築されている。ローム壁を、幅62cm、奥行き24cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。焚き口から煙道の立ち上がりにかけて、楕円形に掘り込まれており、土が貼られている。天井部はのこるが、掛け口の位置はつかめない。西壁の中央よりやや南寄りにカマドの痕があり、火床の痕跡ものこる。火床の部分にかかる



第156図 第19号住居跡遺構図・遺物位置図



第157図 第19号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第158図 第19号住居跡遺物実測図(2)

ように、壁際に白色粘土塊があった。

遺物出土状況 土器は、破片ばかりの出土で、完形で出土したのは、13の小型土器だけである。このほかの土器は、接合によっても完形近くにまでならなかった。土器のほか土製品と臼玉が、出土している。16と17をのぞいて、床面からの出土である。土器片底は、浮いての出土である。

- | | | |
|-----|-------------------------|--------------------------|
| 覆 土 | 1. 暗褐色土層 | 7. 黒褐色土層 |
| | 2. 若干の小ロームブロック混褐色土層 | 8. ロームブロック混茶褐色土層 |
| | 3. ローム粒混黒色土層 | 9. 小ロームブロック混茶褐色土層 |
| | 4. 砂質黄褐色土層（カマドの山砂） | 10. ローム粒、小ロームブロック主体茶褐色土層 |
| | 5. ローム粒、小ロームブロック主体暗褐色土層 | 11. カマド |
| | 6. ローム粒、小ロームブロック主体褐色土層 | |

第34表 第19号住居跡土器観察表

器種	高さ	法量 (mm)			底存度	焼成	色調	胎土	成形・調量					出土状況 (床面～) (cm)	備考		
		口幅	底幅	側幅					内	口	ヨコナ	テ	側	底存部に因 リヨコナ			
1. 壺	?	177	?	?	口縁外 網上%	良	明褐色及 び黄褐色	密 粒 白 雲 母	内	口	ヨコナ	テ	側	底存部に因 リヨコナ	+6.0～+46.3		
									外	#	#	#	ヘラケズリ				
2	#	?	138	?	?	%	暗褐色	密 粒 白 雲 母	内	#	#	#	ヨコハナ	+23.8～+30.8			
									外	#	#	#	ヘラケズリ				
3	壺	93	107	-	144	口縁外 他%位	#	暗赤褐色 白色磨光石 白 雲 母	内	#	ヨコナ	後	ヘラナ	後	ヘラナ	+4.7～+42.7	底外にス付有
									外	#	#	#	ヘラケズリ	ミガキ	ヘラケズリ 後ミガキ		
4	瓶	156	173	54	173	%	#	明褐色	密	内	#	ヨコナ	テ	外	ヘラナ	+1.1～+60.0	
									外	#	#	#	ヘラケズリ	底	ヘラケズリ		

さくらんぼ 品種	法 量 (mm)				遺存度	焼 成	色 調	胎 土	成 形・調 整					出 土 状 況 (底 面 ～ (cm))	備 考		
	基 高	口 幅	底 幅	側 幅					内 口	コ ナ ダ	網	チ デ	内 口	コ ナ ダ	網		
5 高坪の 壊 部	?	127	?	?	%	良	暗赤褐色 内面 黒褐色 外 黑褐色	密	内 口	コ ナ ダ	網	チ デ	内 口	コ ナ ダ	網	+0.10～+52.3	内面 使用による剥 離
6 *	?	134	?	117	口～底%	H	暗 褐色	*	内 口	H	H	H ヘラケズリ	内 口	H	H	+35.9	
7 坪	42	153	—	130	%	*	赤 褐色 黒斑あり	密 褐色粒子	内 口	*	*	H チ デ	内 口	*	*	+1.6～+57.1	内面 使用による剥 離
8 *	50	129	?	115	%	*	暗 褐色	密 黒斑あり	内 口	*	*	H チ デ	内 口	*	*	+1.2～+7.0	
9 *	44	125	—	120	口端上 に あらわ るこま きは死 後は死	H	黄 褐色	*	内 口	*	H	H チ デ	内 口	*	*	+5.2	内面 使用による剥 離
10 *	57	135	—	138	口端の ふくら みは%位 で%位	やや不良	黑 褐色	密 褐色粒を 若干含む	内 口	*	?	H チ デ	内 口	コ ナ ダ	H ヘラケズリ	+3.6～+34.1	内全面 赤影 外網赤影
									外 口	*	コ ナ ダ	H ヘラケズリ	内 口	*	*		内口 磨耗
11 *	40	123	—	122	網口 %	良	赤 褐色	密 白 雲母	内 口	H	H	H チ デ	内 口	H	H ヘラケズリ		野蘿穴 内網中央 ～赤影
12 小型 器	?	76	—	75	%	H	明 褐色	粗	内 口	H	H チ デ	H チ デ	内 口	H	H	+50.0	
13 *	40	65	40	?	完	H	黄 褐色	密	内 口	ヘラケズリ	H ヘラケズリ	H ヘラケズリ	内 口	ヘラケズリ	H ヘラケズリ	+7.1	
14 手 理					%				外 口	H	H	H H				-3.6	

第35表 第19号住居跡土製品・石製品觀察表

器種 番号	法 量					遺存度	焼 成	色 調	胎 土	せ い け い	出土状況 (底面～ (cm))	備 考	
	幅(径)(mm)	長(高)(mm)	孔径(mm)	重量(g)	重(量)(kg)								
15 土玉	13	18	1.5	1.9	完	良	黑色	稍	良	外表面く研磨	-2.4	切子玉形	
16 #	11.5	17	1.5	1.6	#	#	明赤褐色	微	砂	外表面ナメ	#マド一括	切子玉形	
17 土鏡丸玉	11.5	10	1	1.1	4	#	茶褐色	稍	良	外表面入念に研磨	+37.0		
18 土鏡勾玉	7.5	18	?	0.6	%	#	茶褐色	#	外表面	研磨	-4.0	尾端破片	
19 滑石臼玉	8	3	3	0.2	完	-	暗灰色			外表面・切歎面	共に研磨	+1.0	外面の研磨は原位
20 土製 防 錆 車	38.5	22	6	41.5	#	良	茶褐色	微	粗	砂	側面く研磨	+0.4	穿孔や斜削
21 土鏡片鏡	35	44	-	13	#	#	内 黑色	稍	粗			+13.0	内面 13条の被研磨帶

第20号住居跡（024）（第159・160図 第36表）

検出状況 本住居跡は、第19号住居跡の南西20mに位置する。立地は、台地の平坦面上であるが、すぐ西に大きな谷津がある。床面の標高は、33.20mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、細かく分かれれるが、全体として、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。床面の南東隅に焼土の堆積がみられた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。カマドに向い合う東辺が最も短く6.3mで、のこりの3辺は6.5~6.6mである。主軸の方位は、N-73°Wである。壁は、高さ70~94cmあり、床面からほ

は垂直に立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。床の中央には、隅丸長方形に溝を一周させている。また、東壁の中央には、隅丸長方形に、ロームを割りのこして一段高く台状にしている。

壁溝 カマドの部分をのぞき全周している。幅16~32cm、深さ4~8cmで、断面はU字形である。

床溝 カマドの右側に3本、左側に1本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅16~24cm、深さ6cm前後である。

柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ相対する対角線上に位置する。径60~86cm、深さ38~88cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びからはずれる。径32~38cm、深さ35cmである。

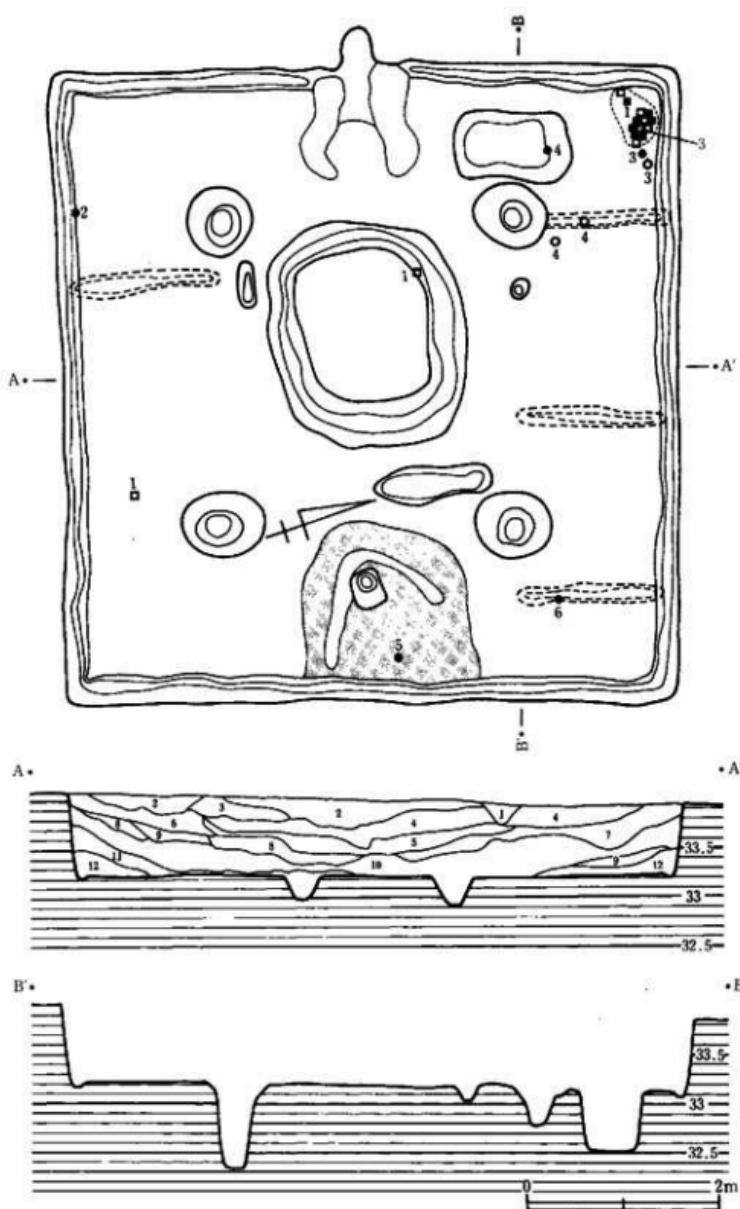
貯蔵穴 カマドの右脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさ66cm×122cm、深さ58cmで、底は凹凸がある。覆土は、底の方から、粘性の強いローム主体の黄褐色土、ローム粒、ロームブロックを主体とする黄褐色土、焼土を多量に含む、ローム粒、ブロック混黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土、ローム粒多量混黄褐色土の順で堆積していた。

ピット 3つみつかった。深さは、北西のものが15cm、南西のものが11cm、北東のものが5~17cmである。

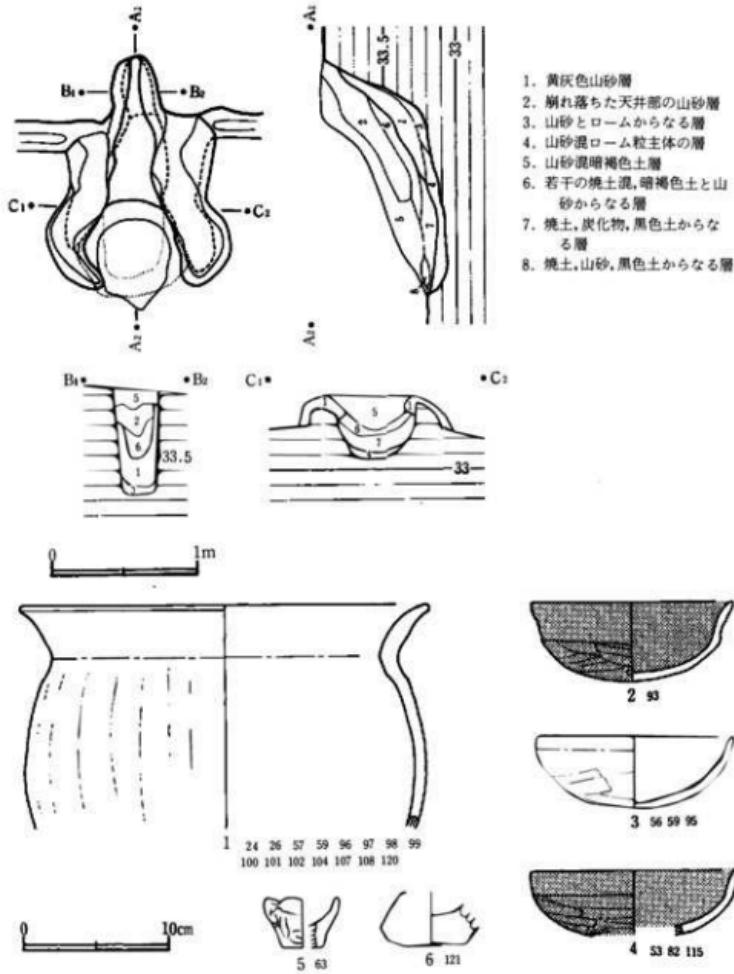
カマド 西壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅44cm、奥行き42cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。第16号住居跡と同じく、ハードロームを削りのこして、左右の袖部の基部としている。火床が一段へこんでおり、火床部から煙道部の途中にかけて土を貼っている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。

遺物出土状況 完形あるいはそれに近い形の土器は出土しなかった。

- | | | |
|-----------|-------------------------------|--|
| 覆土 | 1. 撥乱 | 9. 下部に焼土、ロームブロック少量混、
ロームと褐色土から成る黄褐色土層 |
| | 2. 少量のローム粒暗褐色土層 | 10. 黒色土、多量のロームブロック混黄褐
色土層 |
| | 3. ローム粒混暗褐色土層 | 11. 黒色土、ローム粒、ロームブロック混
暗褐色土層 |
| | 4. ローム粒混明褐色土層 | 12. ロームブロック、焼土混ローム粒主体
層 |
| | 5. ローム粒、ロームブロック混黑褐色土層 | |
| | 6. ロームブロック混暗褐色土層 | |
| | 7. ローム粒、ロームブロック混明褐色土層 | |
| | 8. 黒色土、ローム粒、ロームブロック混
暗褐色土層 | |



第159図 第20号住居跡遺構図・遺物位置図



第160図 第20号住居跡カマド実測図(上)・遺物実測図(下)

第36表 第20号住居跡土器観察表

器種	法量(cm)				道厚度	焼成	色調	胎土	成形・調整				出土状況 (底面~)(cm)	備考
	器高	口幅	底幅	腹幅					内口	ヨコナデ	削	削難の為不		
1 瓢	?	277	?	277	24	良	内赤褐色	密	内口	ヨコナデ	削	削難の為不	-4.0~+14.5	内面は使用により削難
							外淡黄褐色、黒斑あり		外口	#	#	ヘラケズリ後ミガキ		
2 砚	53	136	-	126	24	#	地は青褐色 内は褐色	やや粗粒 石粉	内口	ヨコナデ後ミガキ	#	ナド後ミガキ	-2.9	内外全面赤形 内面は使用により削難
									外口	#	#	ヘラケズリ後ミガキ		

番号	器種	法寸 (mm)			遺存度	焼成	色調	覆土	成形・調査				出土状況 (床面～) (cm)	備考	
		高さ	口幅	底幅					内	外	内	外			
3	壺	46	134	—	134	%	良	明褐色 口橙褐色 外底黒斑	やや粗	#	ヨコナデ	調ナダ		-0.5～+4.7	
4	#	?	140	?	137	%	#	地は黄褐色 色、表面 は赤褐色	#	内	ヨコナデ後 ミガキ	ナダ後 ミガキ		+1.5～+4.7	
5	手座	31	50	28	50	%	不	良	黒	粗	内	ヘラケズリ 直			+2.4
6	#	?	?	47	?	%	良	赤褐色	密	内	調ナダ			-5.5	
									外	手コネ	手コネ	ヘラナダ			

第21号住居跡 (025) (第161・162図 第37・38表)

検出状況 本住居跡は、第20号住居跡の南西13mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。すぐ西に谷津がある。床面の標高は、33.50mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。床面には、多くの炭化材がみつかったが、焼土の堆積は、目立たなかった。

形状・規模 平面形態は、正方形である。北東辺と北西辺が5.9mで、南東辺と南西辺が5.7mである。主軸の方位は、N-43°-Wである。壁は、高さが48～66cmあり、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドの右袖から、貯蔵穴の左半分を取り囲み、北隅の柱穴まで、帯状に一段高く削りのこしている。幅35～44cm、高さ2～4cmである。

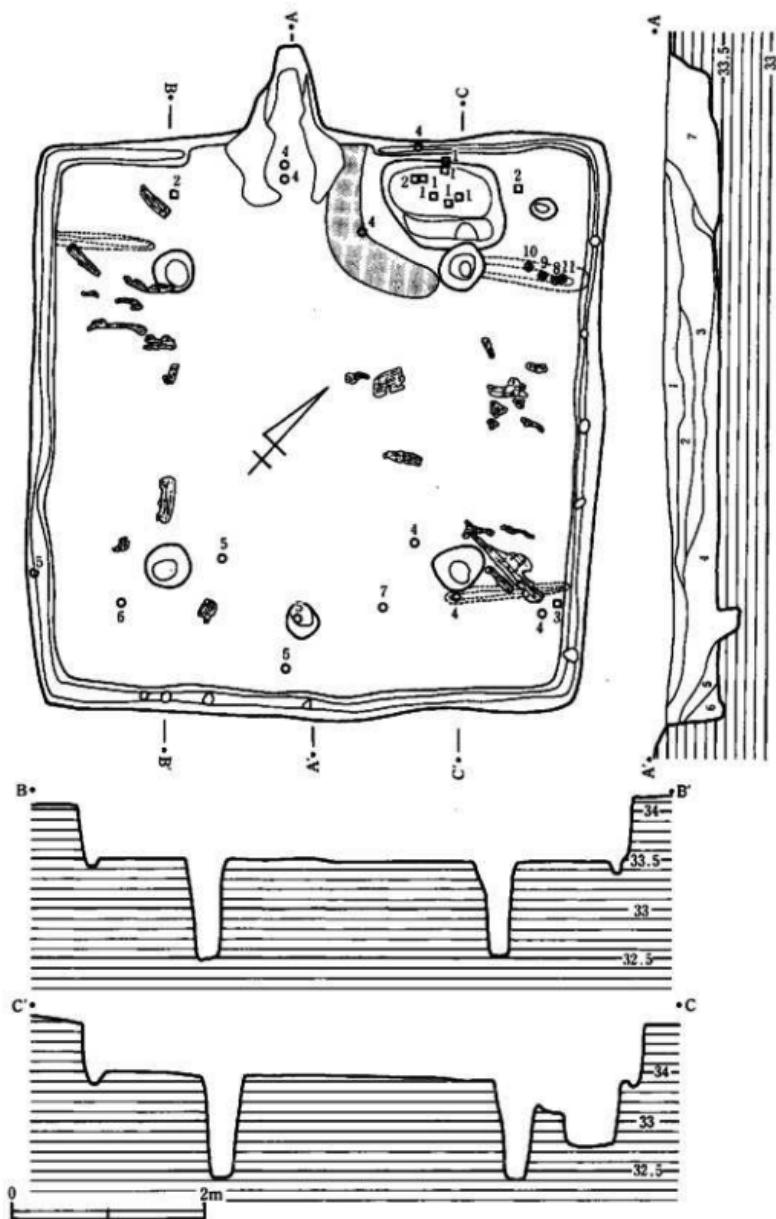
壁溝 カマドの両脇をのぞいて、ぐるりとめぐっている。幅12～32cm、深さ6～12cmで、断面はU字形である。

壁柱穴 北東壁に5つ、南東壁に4つみつかった。径8～15cm、深さ2～9cmである。

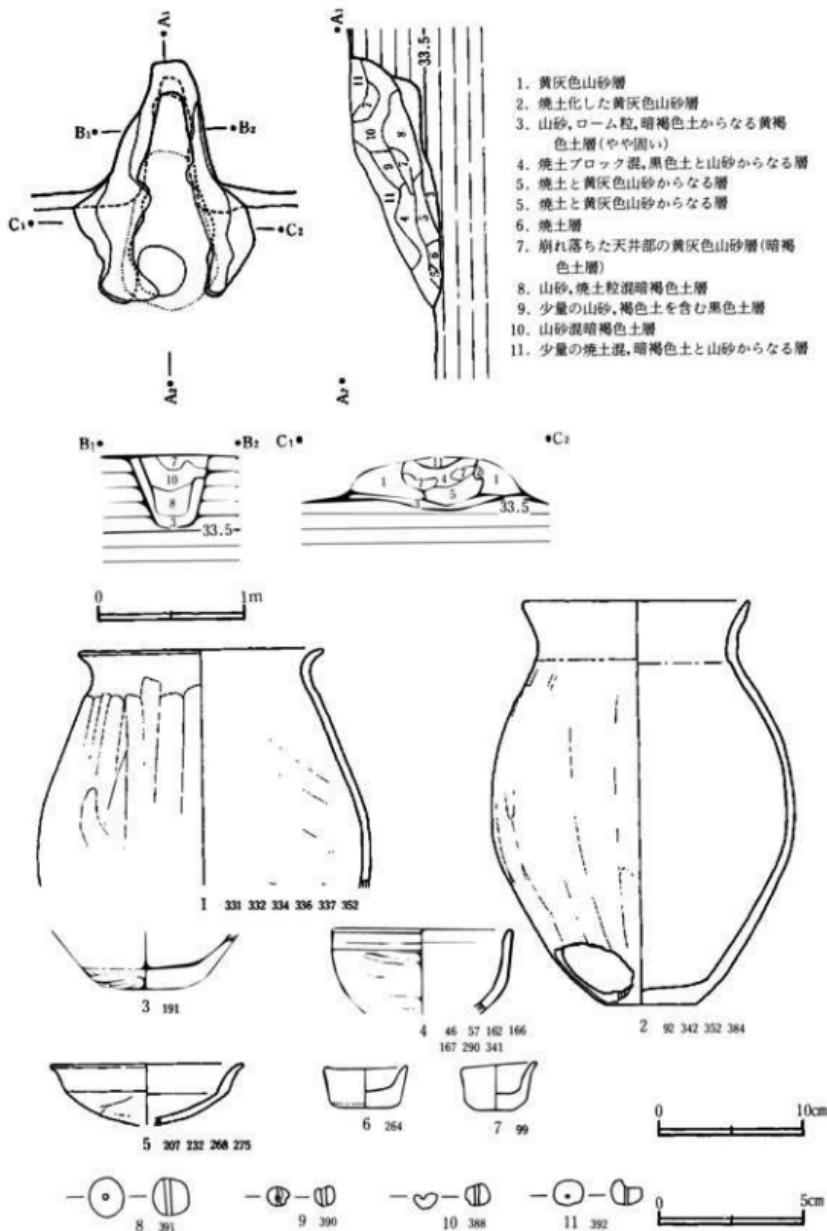
床溝 カマドの右側に2本、左側に1本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅14～24cmで、土玉の出た溝が深さ13cm、ほかの2本の溝が深さ3～5cmである。

柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径40～52cm、深さ94～100cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びからはずれる。径36cm、深さ20cmである。

貯蔵穴 カマドの右脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさ92cm×120cm、深さ66cmで、底から25cm前後に一段、段がある。覆土は、底の方から、粘性に富む黄褐色土、ローム粒、ロームブロック混黄褐色土、山砂と焼土混黄褐色土、ローム粒混黒褐色土の順で堆積していた。



第161図 第21号住居跡遺構図・遺物位置図



第162図 第21号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）

ピット 北隅に円形のピットが1つみつかった。径22~27cm、深さ8cmである。

カマド 北西壁の中央よりやや西寄りに位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅28cm、奥行き88cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床がへこんどおり、その奥側から煙道の立ち上がりにかけて土が貼られている。袖部もその上につくられている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。

遺物出土状況 土製小玉が床溝中からの出土であるのを除いて、あとは、覆土中の出土である。6と7の手捏土器が、ほぼ完形で出土した。

覆 土	1. ごく少量ローム粒混暗褐色土層	5. ローム粒混黒褐色土層
	2. 少量のローム粒混黒褐色土層	6. 少量のロームブロック混、ローム粒主
	3. ローム粒、ロームブロック混暗褐色土	体黃褐色土層
	層	7. カマド
	4. ロームブロック、多量のローム粒混黃褐色土層	

第37表 第21号住居跡土器観察表

器種	法寸 (mm)				直存度	焼成	色調	胎土	成形・裏面				出土状況 (米面高) (cm)	備考			
	高 さ	幅 幅	長 さ	厚 さ					内口	ヨコナメ	側ヘラケズリ	外	ノ	ノ			
1 瓢	?	164	?	225	1/4	やや不良	内黒褐色 外赤褐色	密	内口	ヨコナメ	側ヘラケズリ	外	ノ	ノ	+17.1~+78.2		
2 #	279	153	60	208	ほぼ完	良	淡黄褐色	#	内	ノ	ノ	ナ	テ	底	-3.5~+78.2	外使用により剥離 脚下部に尖孔	
3 #	?	?	39	?	底部のみ	#	内黒褐色 外赤褐色	#	内	ナ	テ	底	ナ	テ	+37.7		
4 环	?	122	?	124	1/4	#	内黄褐色 外暗褐色	#	内口	ヨコナメ	底	ナ	テ		+29.5~+43.6		
5 #	40	136	?	109	1/4	やや不良	赤褐色	やや粗	内	ノ	ノ	ミガキ	外	ノ		+34.0~+45.2	内外面更度による 剥離
6 手 捺	25	56	37	—	ほぼ完	#	内黒褐色 外赤褐色	#	内	4	ノ	ナ	テ	底	+8.5		
7 #	29	52	28	—	#	#	赤褐色	密	内	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	+25.6		

第38表 第21号住居跡土製品観察表

器種	法寸 (高さ×幅×長さ) (mm)				直存度	焼成	色調	胎土	上	セ	イ	け	い	出土状況 (高さ) (cm)	備考	
	高さ	幅	長さ	厚さ												
8 土製丸玉	13	12.5	1	2	完	良	黒褐色	相 良	外表面研磨						底面内 研磨は丸角、全体擦耗	
9 土製小玉	7	8	1	0.3	1/4	#	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	一部外壁に欠損	
10 #	?	7	?	0.3	1/4	#	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	穿孔部で半削	
11 #	19.5	8	1	0.5	1/4	#	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	一部擦耗凹、8~11は同一の胎 土、色調、焼成を呈す。	

第22号住居跡 (026) (第163~165図 第39表)

検出状況 本住居跡は、第21号住居跡の西よりやや南寄り12mに位置する。立地は、台地の平坦面から傾斜面へ移るゆるい斜面で、北西へ向ってゆるく傾斜している。床面の標高は、33.40~33.50mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。カマドのある北西辺が最も長く5.7mで、のこりの3辺は、5.4~5.5mである。主軸の方位は、N-40°-Wである。壁は、高さが44~68cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁溝 カマドの部分と東隅の2箇所をのぞいて、全周している。壁16~28cm、深さ4~16cmで断面はU字形である。

壁柱穴 カマドの部分をのぞき、ぐるりとめぐっている。北東壁12個、南東壁11個、北西壁7個、南西壁8個の合計38個である。比較的間隔が揃っている。径10~15cm、深さ7~13cmである。

柱穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径58~78cm、深さ60~68cmである。

貯蔵穴 カマドの右脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさ60cm×94cm、深さ42cmである。覆土は、底の方から、粘質褐色土、茶褐色土、黒色土の順で堆積していた。

カマド 北西壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅80cm、奥行き58cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。左右の袖部は、ロームを土手状に高く削りのこして基部としている。火床は、へこんでおり、その奥の方から煙道の下面にわたり、土が貼られている。

遺物出土状況 完形で出土した6の土師壺と7の土師瓶、ほぼ完形で出土した5の土師甕、接合の結果、ほぼ完形となった11の土師壺いずれも、床面からの出土ではなく、浮いて出土した。

覆土 1. 暗褐色土層

4. 黒色土層

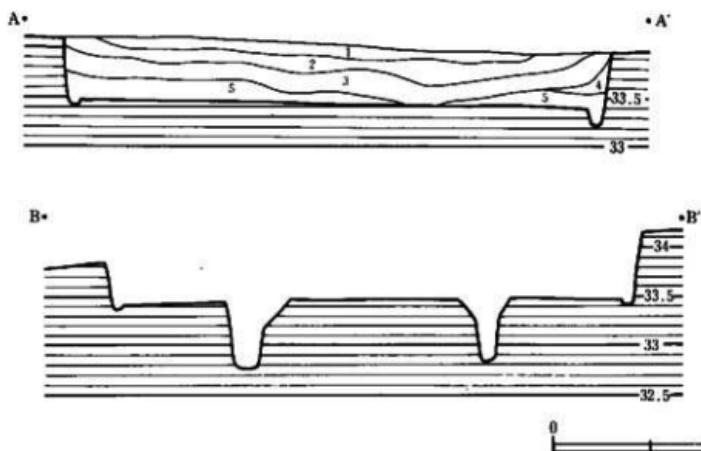
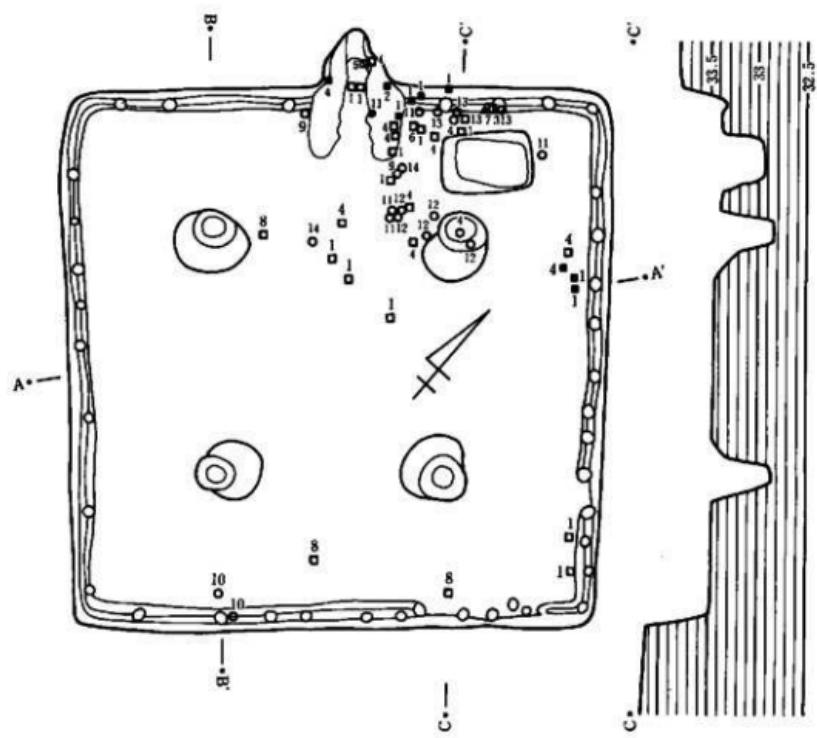
2. 褐色土層

5. ローム粒混褐色土層

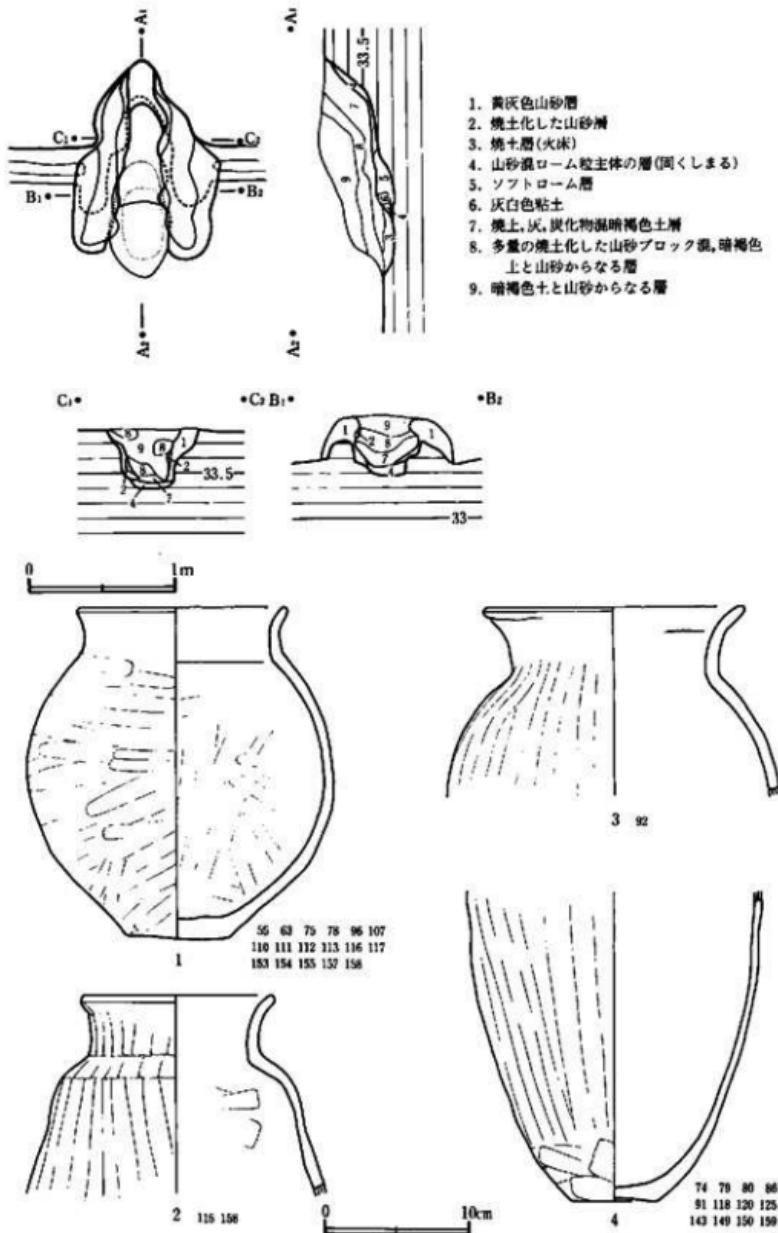
3. 若干のローム粒混黒褐色土層

第39表 第22号住居跡土器観察表

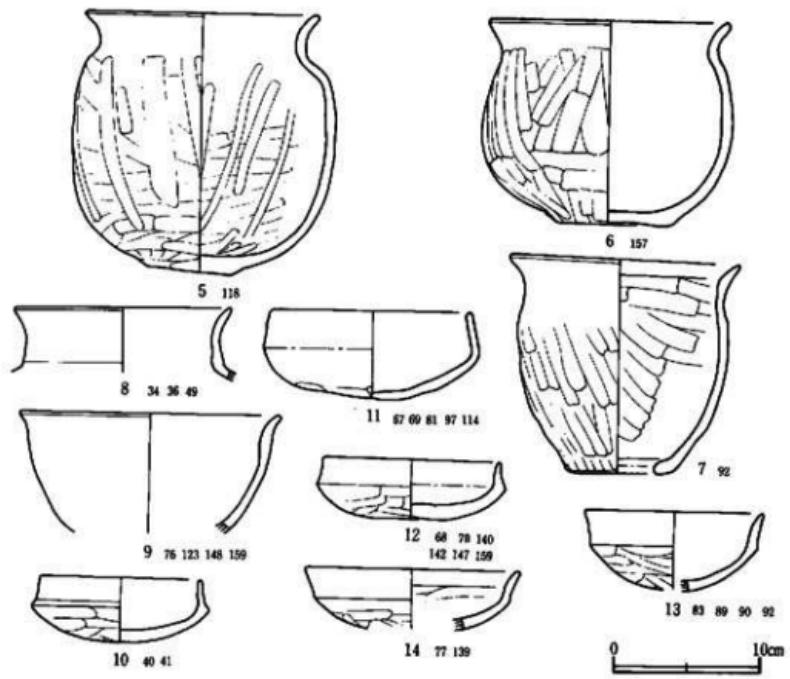
番 号	法 面 積 度 高 度	口 縁 高 度	基 礎 厚 度	掘 削 度	構 成 材 料	色 調 度	輪 郭 形 状	成 形 調 整				備 考	
								内 部	口 縁	コ ナ ド	制 作 方 法		
1. 壁	220	139	68	209	口縁5cm 深さ5cm 内側 外側	真 無 及 等 外 黑 斑	真 無 及 等 外 黑 斑	内 部 外 部	口 縁 コ ナ ド 制 作 方 法	ヘラケズリ ナ ダ # ヘラケズリ # ヘラケズリ # ヘラケズリ	ヘラケズリ ナ ダ # ヘラケズリ # ヘラケズリ	+0.5~+30.4	調査光沢あり



第163図 第22号住居跡遺構図・遺物位置図



第164図 第22号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第165図 第22号住居跡遺物実測図(2)

器 種 類	法 式 (mm)					造 成 度	焼 成	色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整				出 土 状 況 (深 度 ～) (cm)	備 考	
	器 高 度	口 幅 径	底 幅 径	側 幅 径	内 部 幅 径					内 口 部 幅 径	内 口 部 幅 径	内 口 部 幅 径	内 口 部 幅 径			
2 瓢	?	129	?	?	?	口縁完 成部5%	やや不良	淡赤褐色	やや粗	内 口 部 幅 径	コナデ	内 口 部 幅 径	ヘラコナデ		+1.9. 時化穴	
										外	×	×	×	ヘラケズリ		
3 #	?	173	?	?	?	口縁～新 土完成	良	内明褐色 外暗褐色	密	内 口 部 幅 径	×	×	×	ナ デ		+20.9
										外	×	×	×	ヘラケズリ		
4 #	?	?	?	59	196	脚 % 直 完	#	淡黃褐色 外 黑 色	やや粗 粒石	内 口 部 幅 径	ナ デ	内 口 部 幅 径	ナ デ		+1.7～+38.4	内外面共二次燒成 により剥離
										外	×	×	×	木葉痕		
5 #	#	174	155	56	180	ほぼ完	#	暗褐色 及び暗赤 褐色	密 石粒	内 口 部 幅 径	コナデ	内 口 部 幅 径	ヘラケズリ	内 口 部 幅 径	+17.0	
										外	×	×	×	ヘラケズリ		
6 #	#	136	161	77	171	完	#	明褐色 及び淡赤 褐色	密 石粒	内 口 部 幅 径	ナ デ	内 口 部 幅 径	ナ デ		+19.2	
										外	×	×	×	ヘラケズリ		
7 瓢	140	155	74	142	完	#	淡赤褐色	やや粗	内 口 部 幅 径	×	×	×	ヘラケズリ		+20.9	下端底面に木葉 痕あり
										外	×	×	×	ナ デ		
8 瓢	?	166	?	?	?	口縁%	#	赤褐色	#	内 口 部 幅 径	×	×	×		+18.5～+35.0	
										外	×	×	×	ヘラケズリ		

記 号	基 礎	法 式 (m)			遺存状 況	構 成 材	色 調	形 状	成 形 ・ 調 整				備 考	
		高 度	一 般 性	特 徴					内 部	外 部	内 部	外 部		
9	柱 (鉢)	?	170	?	—	円錐形	灰	暗褐色	直 角	内 部	コナデ	直 角	直角に取り 扱コナデ	+8.9~+43.4
									外 部	コ	ア	ト グ		
10	柱	43	110	—	122	口縁外 体 分	?	黑褐色	直 角	内 部	コナデ後 ミガキ	直 角		+29.7~+35.4
									外 部	コナデ	ア	ヘラケズリ		
11	?	55	135	—	148	ほぼ完 成	やや不規 則	内 外 共 黑褐色	直 角	内 部	ナデ後ミガキ	直 角		-1.6~+38.9
									外 部	ミ	ア	ヘラケズリ		
12	?	40	123	—	?	?	?	淡褐色 外表面あり	直 角	内 部	ト グ	直 角		+11.4~+31.4
									外 部	ミ	ア	ヘラケズリ		
13	?	51	121	?	114	?	?	淡褐色	直 角	内 部	ナ ダ	直 角		+20.9~+43.7
									外 部	ミ	ア	ヘラケズリ 後ミガキ		
14	?	?	146	?	133	?	?	暗褐色	直 角	内 部	ナ ダ	直 角		+14.5~+24.2
									外 部	ミ	ア	ヘラケズリ 後ミガキ		

第23号住居跡 (027) (第166~168図 第40表)

検出状況 本住居跡は、第22号住居跡の南東12mに位置する。立地は、台地の平坦面のはずれで、すぐ西は斜面になっている。床面の標高は、33.70mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、長方形である。北東辺と南東辺が5.0m、北西辺と南西辺が5.5mである。主軸の方位はN-45°-Wである。壁は、高さが56~60cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

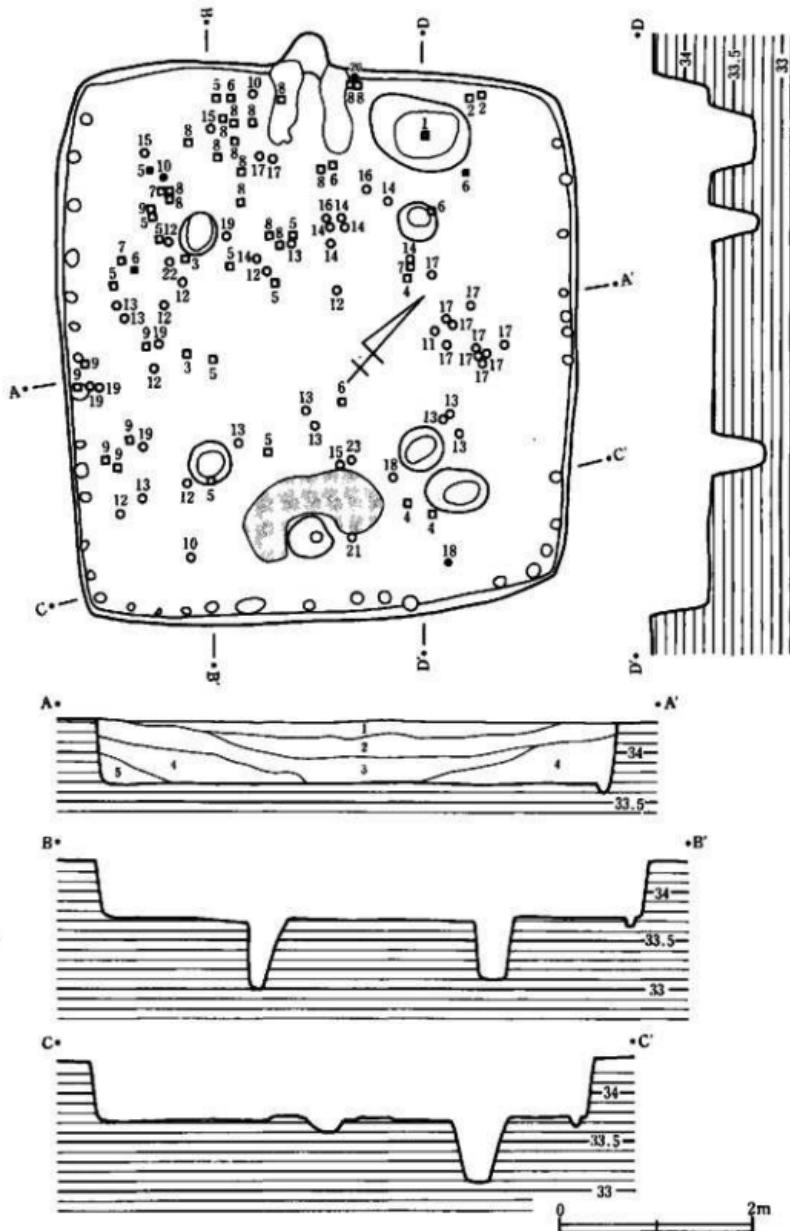
床面 ハードロームを削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドに向い合う副柱穴のカマド側半分を取り囲むように、土手状に一段高く削りのこしてある。幅36~56cm、高さ4cmである。

壁柱穴 カマドのある北西壁をのぞいて、3つの壁ともめぐっている。北東壁10個、南東壁11個、南西壁14個の合計35個である。径3~13cm、深さ3~10cmである。

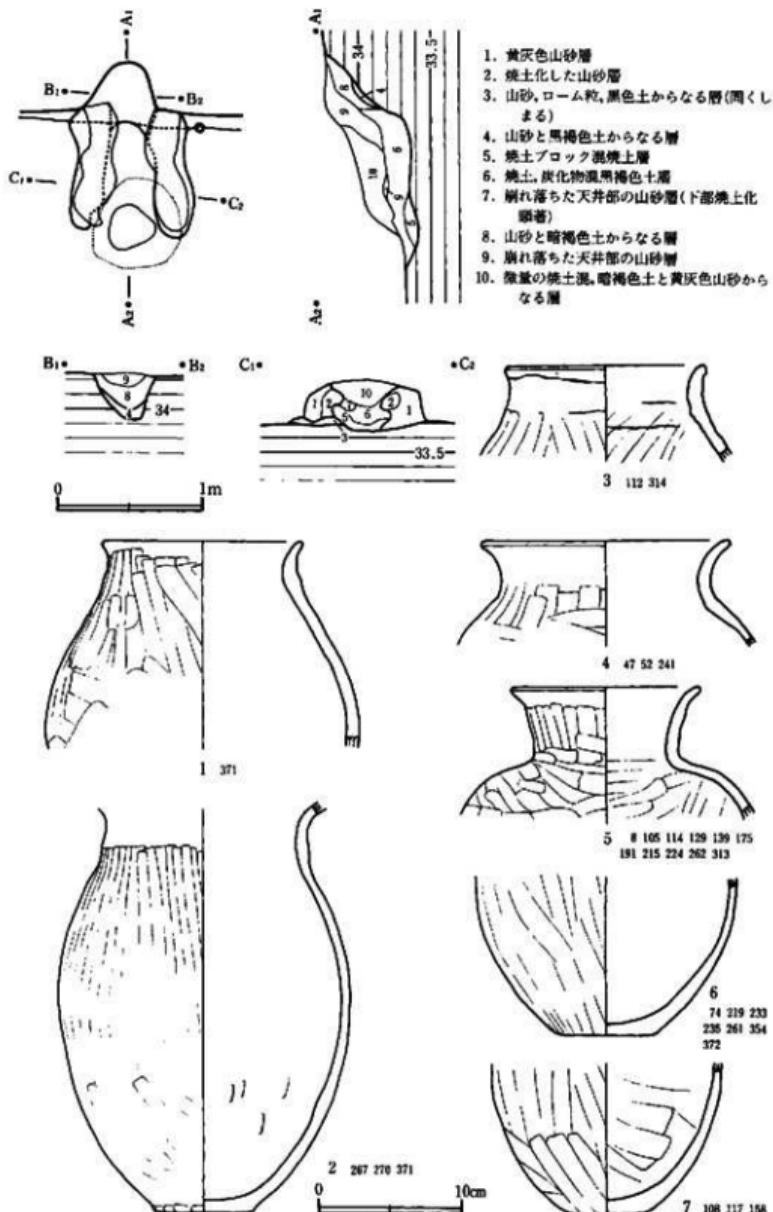
柱穴 主柱穴が5つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ相対する対角線上にある。径38~48cm、深さ58~66cmである。副柱穴1つは、カマドと向い合う位置にあり、径42~46cm、深さ13cmである。

貯蔵穴 カマドの右脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさ74cm×104cm、深さ46cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、粘性に富むローム粒主体の黄褐色土、山砂と褐色土混暗褐色土、ローム粒混暗褐色土、ローム粒と褐色土混暗褐色土の順に堆積していた。

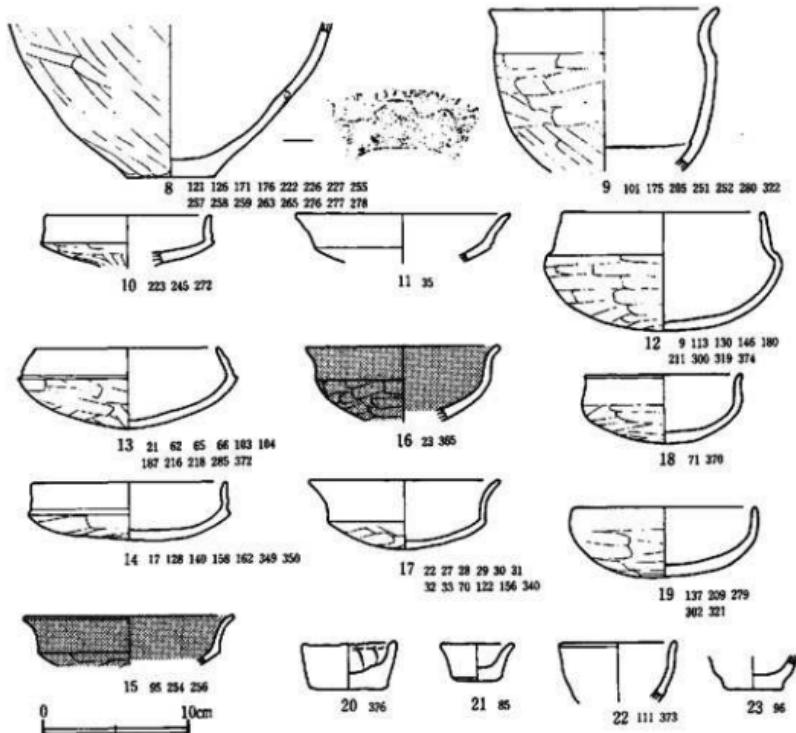
カマド 北西壁の中央よりやや西寄りに位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を幅50cm、奥行き33cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床は一段へこんでいる。



第166図 第23号住居跡遺構図・遺物位置図



第167図 第23号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第168図 第23号住居跡遺物実測図(2)

煙道の奥壁には、土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。

遺物出土状況 完形に近い状態で出土したのは20のミニチュアだけであり、床面からである。のこる土器は、接合によっても、完形に近く復原できたものは、ほとんど無い。例外的なものは、17の土師壺だけである。

覆 土 1. 少量のローム粒混暗褐色土層

4. 焼土ブロック混、ローム粒、ロームブ

2. 多量のローム粒混暗褐色土層

ロック、黒色土から成る黄褐色土層

3. 黒色土、多量のローム粒、ロ

5. ローム粒混暗褐色土層

ームブロック混暗褐色土層

第40表 第23号住居跡土器観察表

名 称	法 量 (mm)				追 加 度	構 成 色	調 整 土	成 形 調 整				備 考	
	高 さ	口 幅	横 幅	深 度				内 口 横 幅	コ ナ ゲ	調 ナ グ	ヘ ラ ケ ズ リ		
1 蓋	?	136	?	218	%	良	褐 褐色	やや相 当	内 外 口 外 リ	コ ナ ゲ	調 ナ グ	ヘ ラ ケ ズ リ	一括

考 察 部 位	層 組	出 土 量 (cm)			透 通 度	成 分	色 調	物 土	成 分 ・ 質 量						出 土 状 況 (底 面 ～) (cm)	備 考
		深 度 (cm)	口 幅 (cm)	底 幅 (cm)					内 口	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	内 外 部 合 計	内 外 部 合 計	内 外 部 合 計
2 硬	?	?	70	295	強固%	良	内暗褐色 外褐褐色	密	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+5.5～+19.5	
3 *	?	135	?	?	%	*	赤褐色 外黒褐色	*	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+30.6～+31.4	口外側に偏斜傾を 有す
4 *	?	170	?	?	口縁%	*	内暗褐色 外暗褐色	や や 粗 粒	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+31.4～+55.7	内面使用により剥 離
5 壁(表)	?	125	?	?	口縁脱 上部%	*	内暗褐色 外暗褐色	密 粗 粒	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+9.5～+47.0	
6 *	?	65	?	?	底下部 %	*	暗褐色	密	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+2.9～+54.0	
7 *	?	45	2	底下部 %	*	内黒褐色 外暗褐色	*	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+31.5～+42.2		
8 硬	?	?	60	?	底下部 ほぼ先	*	暗赤褐色	や や 粗	内 外	口 コ ヘ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+7.2～+45.1	
9 小型壁	?	159	?	152	高部全 部脱離	*	暗褐色	*	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+8.6～+66.7	
10 高 环	?	113	7	117	环縫%	*	暗黃褐色	*	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+9.1～+51.6	内面使用による 剥離
11 *	?	150	?	122	%	*	赤褐色	密	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+24.4	
12 环(表)	80	138	-	160	%	貞	内暗褐色 外暗褐色 黒斑あり	*	内 外	口 コ ナ ダ 後 ミ ガ キ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+4.6～+37.0	
13 坑	54	125	-	150	%	*	紫褐色 内外面 黑色處理	*	内 外	口 コ ナ ダ 後 ミ ガ キ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+5.6～+59.2	
14 *	39	133	-	139	口縁%	*	暗褐色	密 粗 粒	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+19.9～+49.7	
15 *	?	143	-	124	%	*	地黃褐色 底皮赤褐色	密	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+17.7～+36.0	内外同とも赤褐色
16 *	?	133	?	122	%	*	赤褐色	*	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+22.2～+29.6	内側～外に赤褐色
17 *	47	130	-	110	研磨	*	暗赤褐色 外暗褐色 黒斑	密 粗 粒	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ 後 ミ ガ キ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+3.4～+59.0	
18 *	45	106	-	111	%	*	淡赤褐色	密	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+2.5～+35.2	
19 *	47	126	-	130	%	*	内黒褐色 外黄褐色	*	内 外	口 コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	デ ガ ナ ダ	ア ル ミ ウ ム	+	+7.2～+60.6	内面使用により剥 離

記 号	器 種	法 式 (cm)				遺存度	焼 成 度	色 調	附 土	成 形 ・ 調 整						出 工 状 況 (K 面 ～) (cm)	備 考	
		面 高	U 縦 幅	横 幅	厚 さ					内 口	手 コ ネ	壁	手 コ ネ	内 口	手 コ ネ	壁		
		外 縦	外 横	外 厚						外 縦	外 横	外 厚	外 縦	外 横	外 厚	外 縦		
20	土蔵	30	63	50	—	はは完	良	明褐色	密	内 口	手 コ ネ	壁	手 コ ネ	内 口	手 コ ネ	壁	—8.8	
21	火	25	47	23	—	%	#	黄褐色	やや粗	内 口	ヨコナデ	鶴	ヨコナデ	内 口	ヨコナデ	鶴	+52.9	
22	火	?	77	7	—	34	#	淡赤褐色	密	内 口	手 コ ネ	壁	手 コ ネ	内 口	手 コ ネ	壁	+30.0	
23	火	?	?	35	?	%	#	黄褐色	やや粗	内 口	手 コ ネ	壁	手 コ ネ	内 口	手 コ ネ	壁	+32.5	

第24号住居跡(028)(第169・170図 第41表)

検出状況 本住居跡は、第23号住居跡の東25mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。東側には、住居跡の無い空白が広がる。床面の標高は、33.60mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。南北隅付近では床面に焼土が堆積していたが、下の床面は焼けておらず、投げ込まれた可能性が高い。

形状・規模 平面形態は、ややいびつな正方形である。カマドのある北辺と西辺が長く、4.7mと4.6mで、東辺と南辺は4.4mと4.3mである。主軸の方位はN-22°-Eである。壁は、高さが55~71cmあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドと向い合う位置にある副柱穴の北側を逆U字形に取り囲むように、一段高く土手状に削りのこしてあった。幅24~44cmである。高さは不明である。

壁溝 北壁のカマドより左側、北西隅付近、南壁の東側3分の2に、途切れ途切れにめぐっている。幅22~26cm、深さ6~14cmで、断面はU字形である。

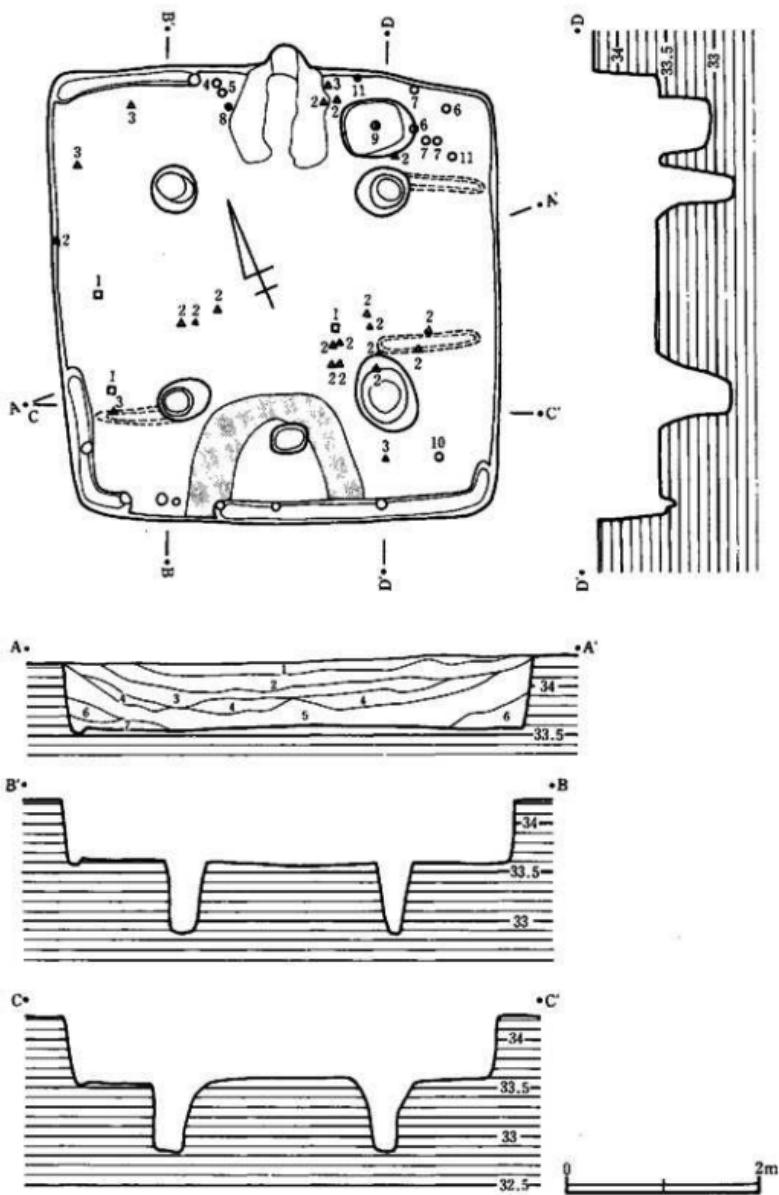
壁柱穴 北壁に1つ、西壁に1つ、南壁に6つみつかった。径7~13cm、深さ3.5~13.5cmである。

床溝 カマドの右側に2本、左側に1本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅14~18cmで、深さは、右側の2本が3~4cm、左側の1本が10cm前後である。

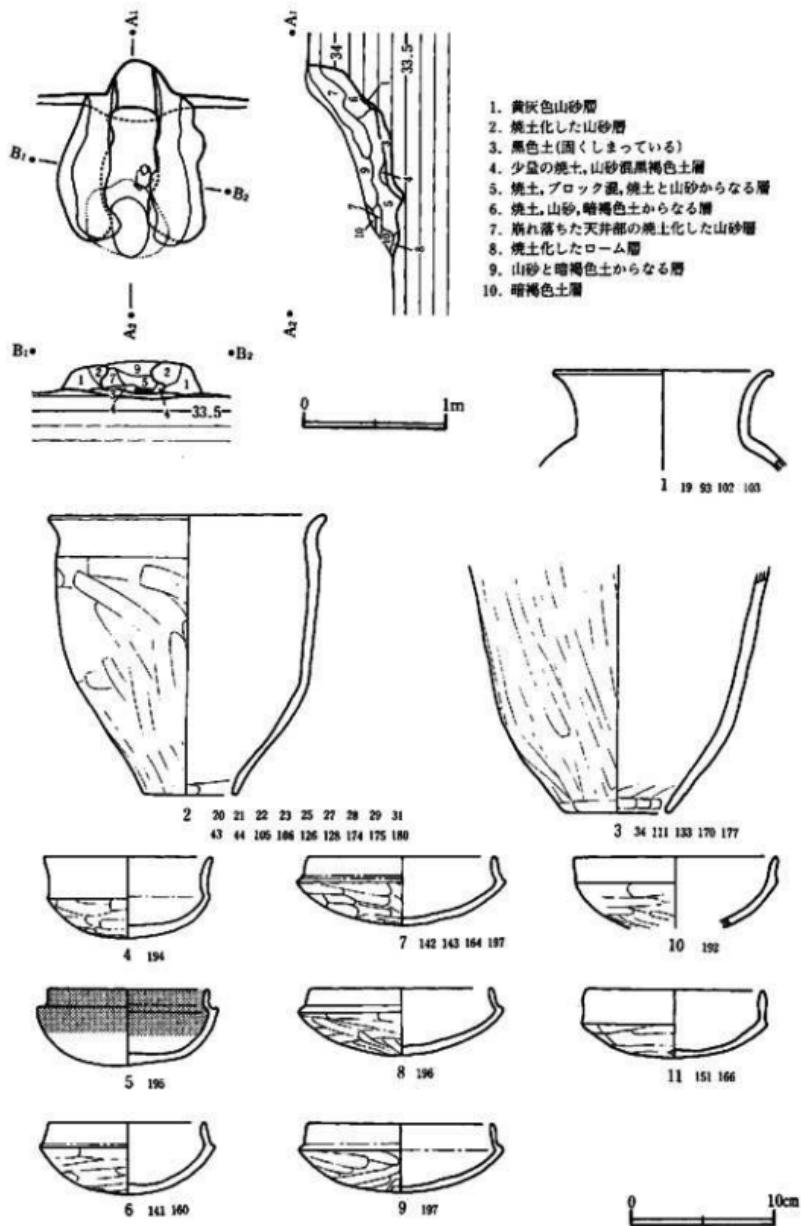
柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が1つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径40~82cm、深さ72~78cmである。副柱穴1つは、カマドと向い合う位置にあり、径30~37cm、深さ14cmである。

貯藏穴 カマドの右脇にある。平面形態は、長方形である。口の大きさ58cm×76cm、深さ52cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、粘質茶褐色土、山砂ブロック混黒褐色土、ロームブロック混茶褐色土、ローム粒混黒色土、焼土粒混茶褐色土の順で堆積していた。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅45cm、奥



第169区 第24号住居跡遺構図・遺物位置図



第170図 第24号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）

行き24cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。煙道の下面に土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。

遺物出土状況 完形ないしそれに近いかたちで出土した土器は4点あるが、床面からの出土は、8の土師壺だけで、あとは覆土中からの出土である。9の土師壺は、一部が欠けている。

- | | | |
|-----|----------------------|-----------------------|
| 覆 土 | 1. 暗褐色土層 | 5. ローム粒、ロームブロック混茶褐色土層 |
| | 2. 黒色土層 | |
| | 3. 若干のローム粒混褐色土層 | 6. 黑色土層 |
| | 4. ローム粒、ロームブロック混黒褐色土 | 7. 焼土粒混黒色土層 |
| 層 | | |

第41表 第24号住居跡土器観察表

さし 記 号	器 種	法 量 (cm)			調査段	性 成	色 調	質 地	上	成 形・質 量					出 土 状 況 (水 面 →) (cm)	備 考	
		高 さ 幅 高 さ 深 度 幅 度 深 度	高 さ 幅 高 さ 深 度 幅 度 深 度	高 さ 幅 高 さ 深 度 幅 度 深 度						内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ		
1	蓋	?	150	?	?	口縁のみ充	灰	淡赤褐色 内外黒斑	密	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+9.7~+38.6	
2	蓋	187	189	69	187	ほぼ完	灰	明褐色	密	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+10.5~+54.8	
3	#	?	?	72	?	調下部 約	#	暗褐色	#	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+13.0~+32.6	
4	壺	54	114		113	完	#	淡赤褐色	#	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+18.3	
5	#	51	110	-	119	ほぼ完	#	明褐色	密	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+4.8	内外LJ~翼中央 部
6	#	48	108	-	121	光	#	暗褐色	密	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+8.8~+39.5	
7	#	46	132	-	147	ほぼ完	#	黑褐色	#	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+3.5~+6.5	
8	#	45	127	-	145	完	#	暗赤褐色	#	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+2.5	使用により裏面が 荒れています
9	#	46	130	-	144	ほぼ完	#	暗褐色	密	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ		野窓穴
10	#	?	140	?	139	#	#	暗赤褐色 内外黒斑	密	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	+8.1	
11	#	45	124	-	130	#	#	黑褐色	#	内 部	外 部	口 コ ナ デ	内 部	外 部	口 コ ナ デ	-0.5~+5.5	

第25号住居跡（029）（第171～173図 第42・43表）

検出状況 本住居跡は、第24号住居跡の南よりやや西寄り24mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.70mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。床面からは、炭化材が少なからず出土したが、床面が焼けている様子はみられず、特に焼土が堆積している場所もみられなかった。

形状・規模 平面形態は、正方形である。南西辺が短かく5.4mであるほか、のこりの3辺は5.6mである。主軸の方位は、N-43°-Wである。壁は、高さが42～48cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床 面 ロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁 溝 カマドの部分をのぞいて全周している。幅16～28cm、深さ6cmで、断面は逆台形である。

柱 穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径26～38cm、深さ44～55cmである。

貯藏穴 カマドと離れて東隅にある。平面形態は、長方形である。口の大きさ68cm×76cm、深さ66cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、ローム粒主体で粘性に富む黄褐色土、ローム粒混暗褐色土、ローム粒主体黄褐色土、暗褐色土、ローム粒混暗褐色土の順で堆積していた。

カマド 北西壁の中央よりやや東寄りに位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅55cm、奥行き14cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。焚き口から煙道の立ち上がりにかけて、土が貼られている。天井部はのこっていたが、掛け口の位置はわからない。火床の位置は、はっきりつかめる。

遺物出土状況 完形で出土したものに、9と12の土師壺があるが、どちらも覆土中の出土である。3の土師壺と6の土師壺は、接合の結果、ほぼ完形に近く復原できたが、破片は、いずれもかなり床面から浮いて出土した。磁石は、床面からの出土である。

覆 土 1. 褐色土層

4. 黒褐色土層

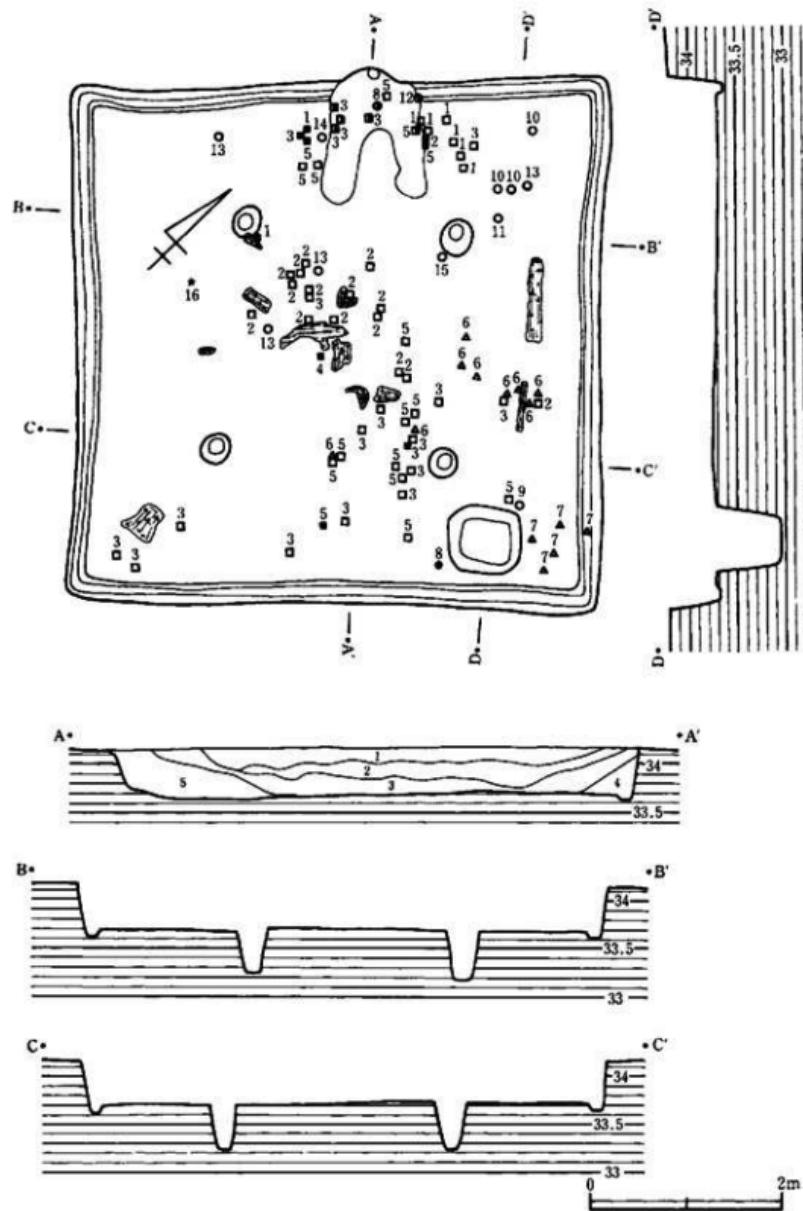
2. 黑色土層

5. カマド

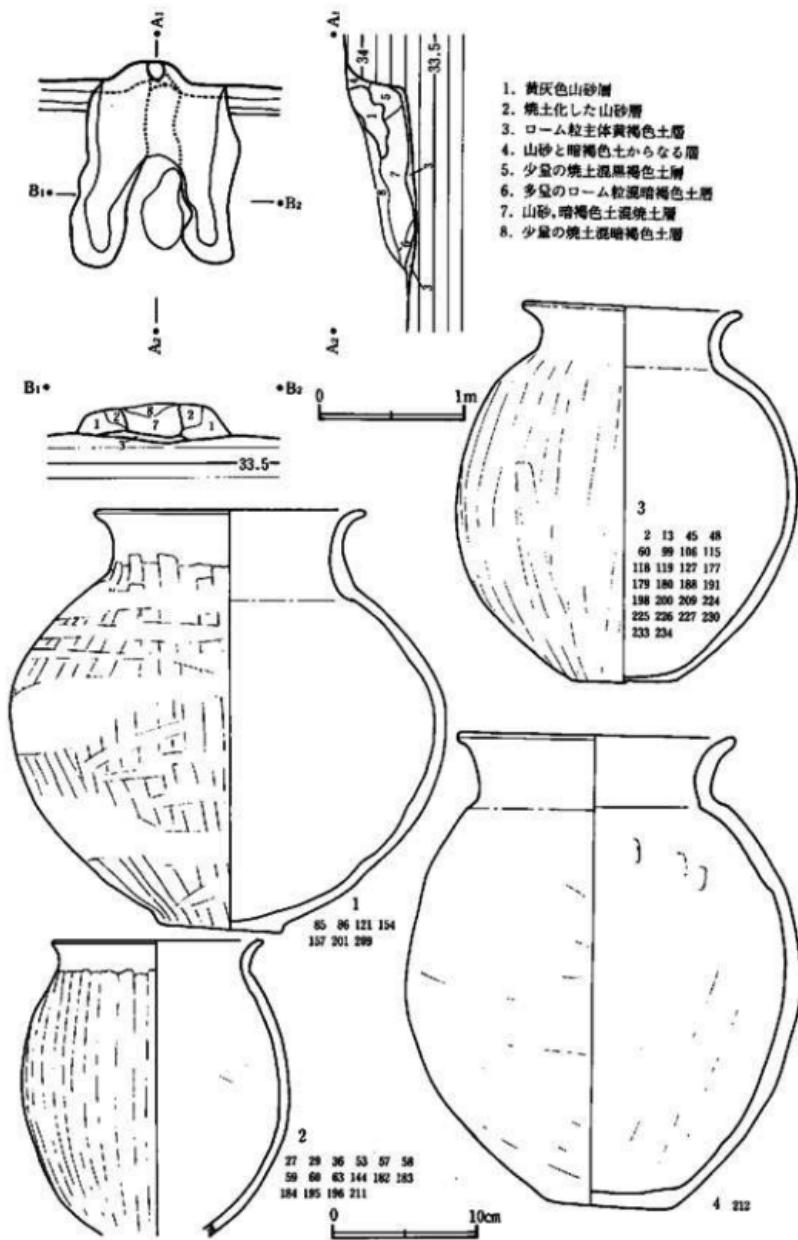
3. 炭化物、ローム粒混茶褐色土層

第42表 第25号住居跡土器観察表

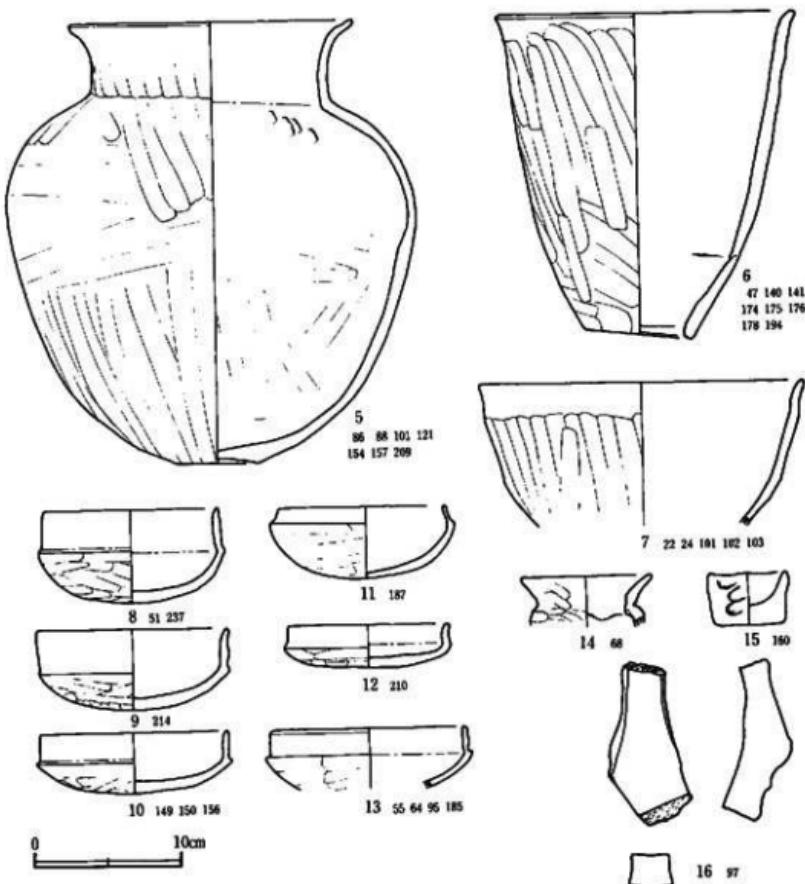
器種	底面 (mm)				遺存度	焼成	色調	胎土	成形・装飾						出土状況 (床面～ cm)	備考	
	面 積 高 度	上 縁 傾 斜	底 盤 傾 斜	側 壁 傾 斜					口縁	口	コナデ	内	ア ル テ ル テ ル	外	ヘ ラ ケ ス リ		
1 壺	289	189	77	309	口縁は 完全に 焼ぼく して ある	丸	暗褐色	密 結石	円	口	コナデ	内	アル	テ	ル	+29.4 +0.5 ~+34.1	



第171図 第25号住居跡遺構図・遺物位置図



第172図 第25号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第173図 第25号住居跡遺物実測図(2)

名 称	形 様	法 寸 (mm)				遺存度	成 形 色 調	胎 土	成 形 調 整				出 土 状 況 (底 面 ~) (cm)	備 考	
		高 さ	口 径	底 径	厚 さ				内 口	コ ナ デ	調 ナ デ	内 外			
2 瓶	192 141	7	182	底面を 除きは 12cm	182	直面を 除きは 12cm	黄 白	暗 褐色 内外面 黒斑あり	密	内 口	コ ナ デ	調 ナ デ		-0.7~+38.8	
3	250 144	71	235	底面を 除きは 12cm	235	内 外 面 黒 斑	白	内 外 面 黒 斑	密	内 口	ハ ラ ケ ズ リ	内 外 面 黒 斑	ハ ラ コ ナ デ	+0.5~+34.2	
4	339 195	86	268	口縁定 底 部 直 角	268	内 外 面 黒 斑	白	内 外 面 黒 斑	密 石 粒	内 口	ハ ナ デ	ハ ナ デ	ハ ナ デ	+3.3	

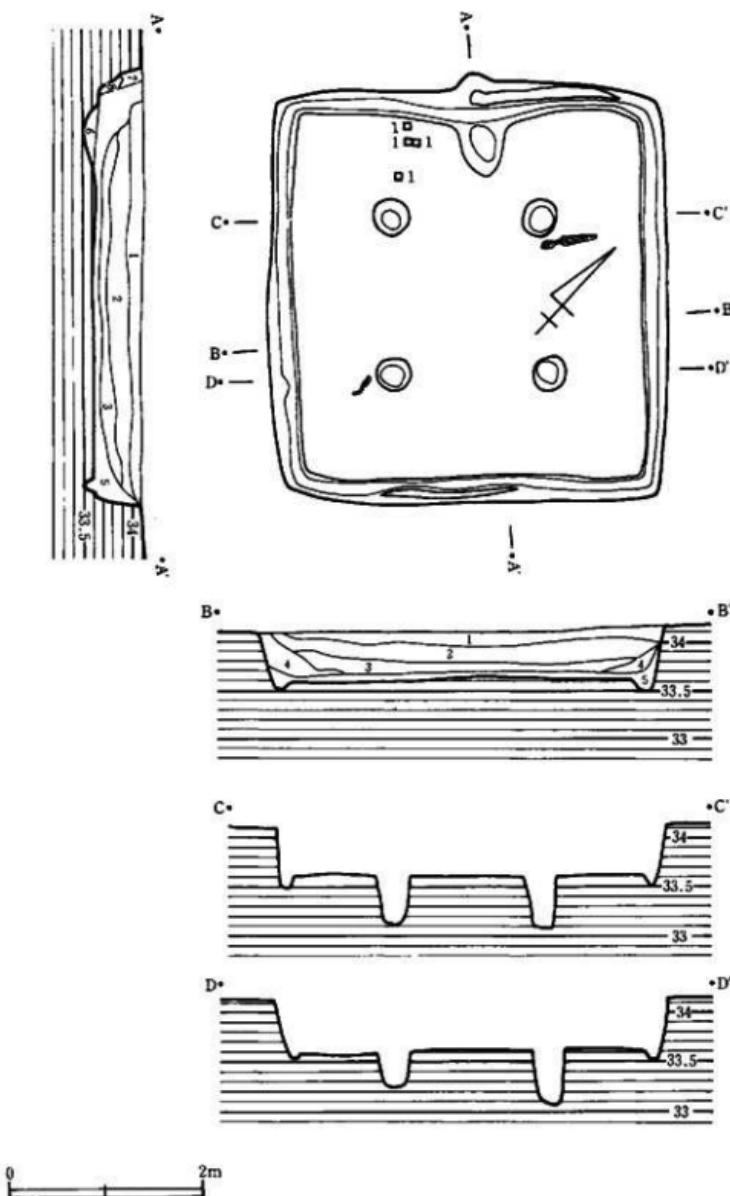
記 号	種 類	法 量 (mm)			遺存度	地 成 色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整				備 考	
		幅 高 さ	厚 さ	重 量				内 口	コ ナ ア	内 壁 の 性 質	外 口		
5	窓	297	191	55	282	口縁光 澤～赤 褐色	風	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
6	窓	218	200	67	285	はは窓	-	赤 褐色	密 封 石 板	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
7	窓	217	?	-	127	口縁光 澤～赤 褐色	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
8	窓	63	117	-	127	口縁光 澤～赤 褐色	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
9	窓	53	130	-	130	完	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
10	窓	40	127	-	134	%	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
11	窓	44	115	-	127	口縁光 澤～赤 褐色	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
12	窓 (黒)	29	107	82	112	完	-	赤 褐色	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
13	窓	7	132	?	138	%	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
14	柱 (木)	?	89	?	105	% やや不良	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		
15	窓	34	52	47	55	%	-	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	内 外 各 部 に 有 る	
									コ ナ ア	内 壁 の 性 質	ヘ ラ ケ ズ リ		

第43表 第25号住居跡石製品観察表

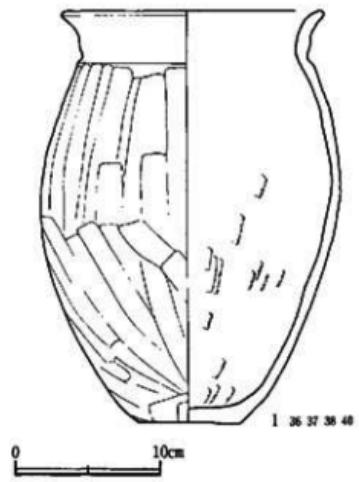
記 号	種 類	法 量			遺存度	地 成 色 調	胎 土	せ い い い	出 土 状 況 (深 度 ～) (cm)	備 考
		幅 高 さ	厚 さ	重 量						
16	柱 (木)	51	112	-	265	柱 大	-	灰 色	-	西側柱頭、一部に敲打痕 10.4 残存部

第26号住居跡 (030) (第174・175図 第44表)

検出状況 本住居跡は、第25号住居跡の南西 8 m に位置する。立地は、台地の平坦面上であるが、すぐ西に北へ向ってひらく深い谷津がある。床面の標高は、33.60m である。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。北西側中央部分では、カマド構築材と思われる砂質粘土が混入していた。床面の北と南の柱穴から炭化材が出上し、



第174図 第26号住居跡遺構図・遺物位置図



第175図 第26号住居跡遺物実測図

南隅で焼土がみられたが、床面が焼けた様子は無かった。

形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形である。カマドのあった辺とそれに向かって立った辺が短く3.9mで、その他の2辺は4.2mである。主軸の方位は、N-43°-Wである。壁は、高さが47~51cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。北西壁と南東壁で、壁と壁溝とのあいだに、床面とほぼ同じ高さの細長いテラスがみられる。

壁溝 カマドの下を含めて全周している。幅12~20cm、深さ5~12cmで、断面は、逆台形ないしU字形である。

柱穴 4つみつかった。それぞれ対角線上に位置する。径35~37cm、深さ35~55cmである。

カマド 北西壁の中央に位置していたと思われるが、煙道部分のローム壁への山形状の掘り込みを除いて、破壊されて、のこっていなかった。山形状の掘り込みは、幅44cm、奥行き14cmである。掘り込みの下部には、暗褐色土と砂質粘土の混合土があり、おそらく煙道の下側に1枚土が貼られていたものであろう。火床及び焚口に相当したと思われる位置の床面には、橢円形のくぼみがみつかった。長径57cm、短径47cm、深さ12cmである。

遺物出土状況 量も少なく、全て破片の状態で散乱して出土した土器だけである。1の土師甕も、ほぼ完形に復原できたが、床面から6cm以上浮いて出土した。

- | | | |
|----|----------------------------------|---------------------|
| 覆土 | 1. 少量のローム粒混暗褐色土層 | 6. ロームブロック混褐色土層 |
| | 2. 褐色土、ローム粒混暗褐色土層 | 7. 少量のローム粒、山砂混暗褐色土層 |
| | 3. ローム粒混黒褐色土層 | 8. 山砂と暗褐色土からなる層 |
| | 4. 黒色土、ローム粒混明褐色土層 | |
| | 5. 褐色土、暗褐色土混、ローム粒、ロームブロック主体黄褐色土層 | |

第44表 第26号住居跡土器観察表

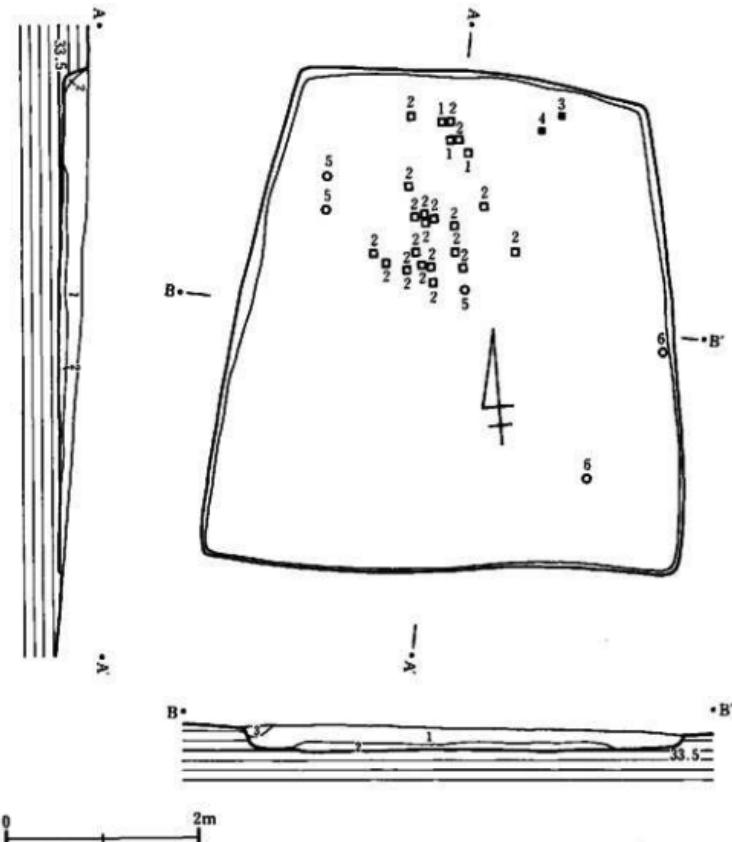
No.	種類	法尺(m)			保存度	成形	色調	胎土	成形・裏裏				出土状況 (床面~) (cm)	備考	
		総高	口絶	底絶					内寸	ヨコナメ	ヨコヘタナメ	ヨコヘタナメ			
1	甕	290	177	76	290	ほぼ完	良	暗褐色	やや粗	内口	ヨコナメ	ヨコヘタナメ	ヨコヘタナメ	+6.1~+19.9	

第27号住居跡（031）（第176・177図 第45表）

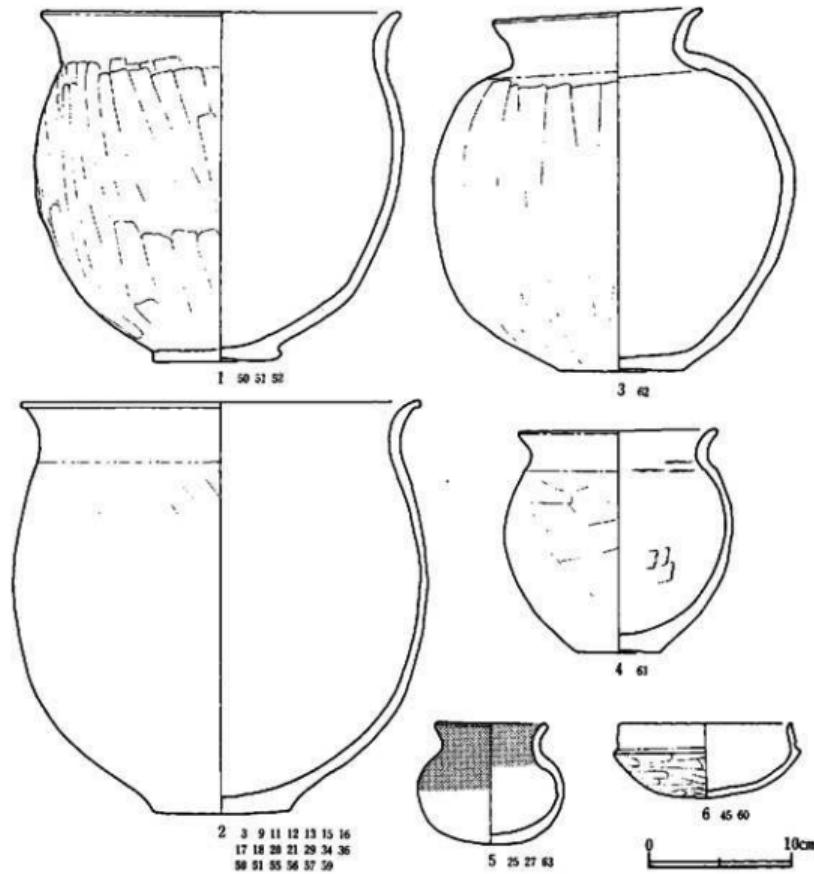
検出状況 本住居跡は、第33号住居跡のすぐ西に接する。立地は、台地の肩口で、南へ向ってゆるく傾斜する。床面の標高は、33.50mである。遺構の遺存状況は、良好とはいえない。覆土は、単純な堆積をしているが、2層黄褐色土層は、うすく盛り上がって堆積している。

形状・規模 平面形態は、台形である。各辺の長さは、北が3.6m、南が5.0m、東が4.8m、西が5.1mである。長軸の方位は、N-10°-Eである。壁は、高さが3~25cmで、床面から上ひろがりに立ち上がる。

床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。



第176図 第27号住居跡遺構図・遺物位置図



第177図 第27号住居跡遺物実測図

遺物出土状況 床面からは、3と4の土師壺が、完形ないしほば完形で、北壁の隙から並んで出土した。接合によって完形に近く復原できた1と2の土師壺と5の土師小型壺の破片は、いずれも、床面から5cm以上浮いた状態で、覆土中から出土した。

覆 土 1. 黒褐色土層

3. 褐色土層

2. 黄褐色土層

第45表 第27号住居跡土器観察表

器種	法寸(cm)	標高	門面	裏面	底面	遺存度	堆成	色調	胎土	成形・調査						出土状況 (体面)~ (cm)	備考	
										内	外	口	コ	ナ	デ	シ	ア	
1 瓢	246	247	88	257	ほぼ完	良	内黄褐色 外黄褐色	密	内	#	#	コナデ	ナ	デ	シ	ア	+7.2~+23.7	
2 #	281	275	94	289	口縁少 缺	%	暗黄褐色	やや密	内	#	#	#	#	#	ナ	デ	+4.2~+30.4	内面は使用により剥離
3 #	249	182	84	237	完	#	淡赤褐色	密	内	#	#	#	#	#	ナ	デ	+2.5	
4 #	150	137	69	163	ほぼ完	#	内黄褐色 外の部分 褐色、その他の赤褐色	#	内	#	#	#	ナ	デ	#	ナ	+2.8	
5 小瓶 ?	82	76	-	100	口縁少 缺	#	暗褐色	#	内	#	#	#	ナ	デ	#	ナ	+5.3~+10.8	内外とも口~側上 手、赤彩
6 砚	50	120	-	132	%	#	黒褐色	#	内	#	#	#	ガ	キ			+7.9~+10.2	
									外	#	#	#	ヘラケズリ					

第28号住居跡(032)(第178~180図 第46表)

検出状況 本住居跡は、第26号住居跡の東よりやや南寄り23mに位置する。立地は、台地の平坦面であり、そのうちでも、最も台地の中側である。東側には、住居跡の全くみられない空白部がある。床面の標高は、33.80mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

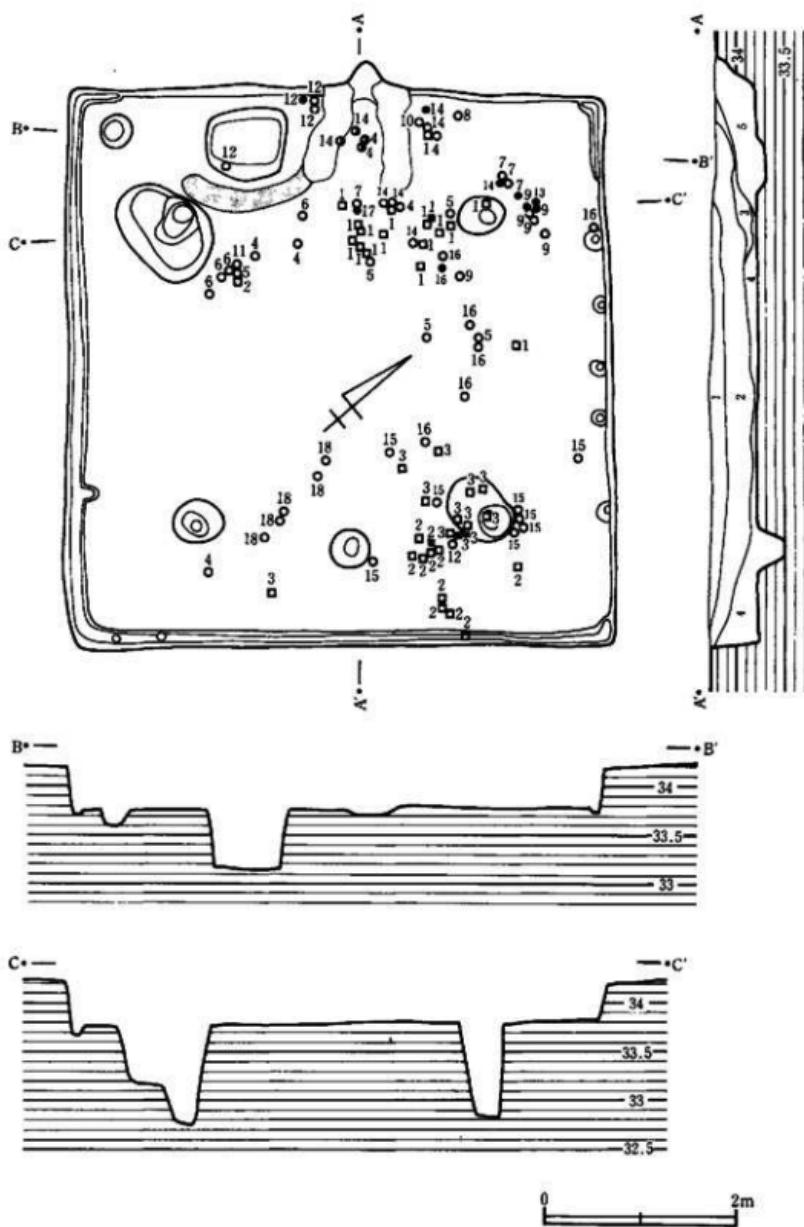
形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺5.6~5.8mである。主軸の方位は、N-50°-Wである。壁は、高さが36~47cmで、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドの左袖部の端から貯蔵穴の手前側を囲むように、弧状に一段高く削りのこしている。幅20~24cm、高さ1~3cmである。

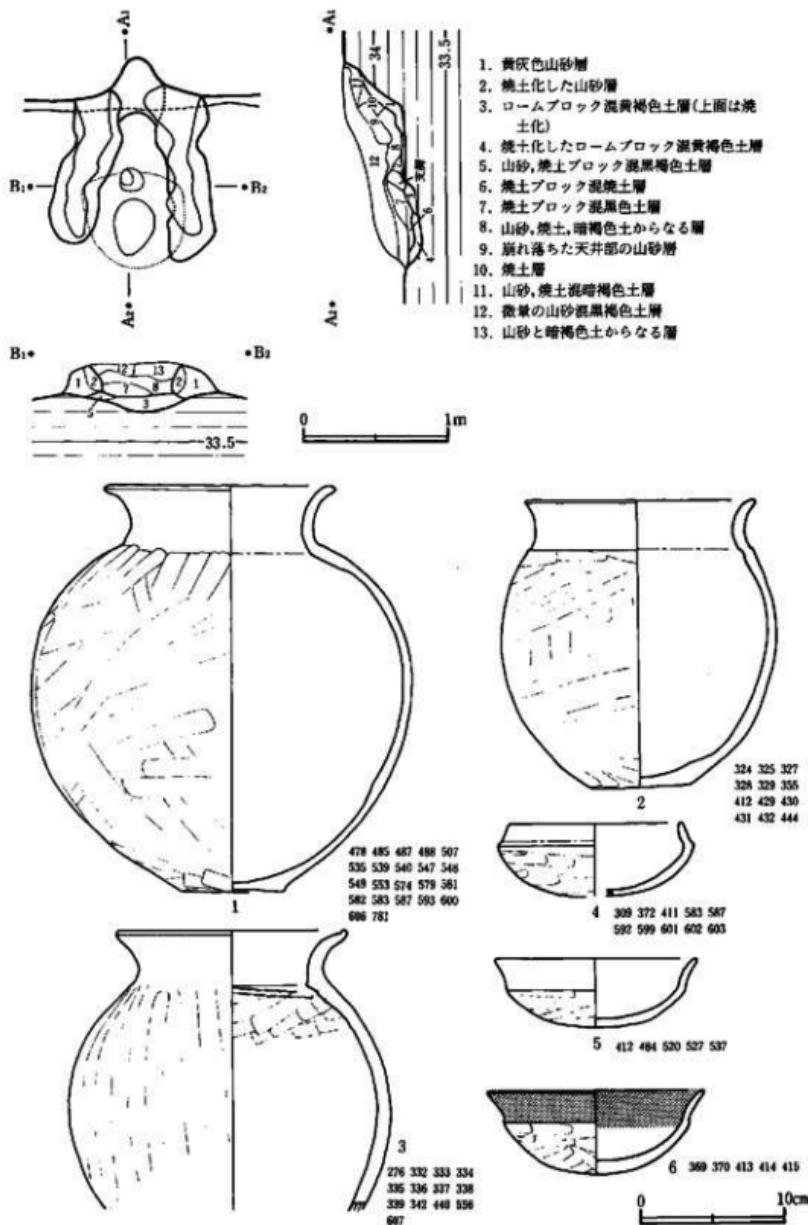
壁溝 北東壁北隅と、南東壁から南西壁にかけてみられる。幅13~23cm、深さ5~10cmである。断面は逆台形である。南西壁の南寄りで、壁溝が1個所中央へ向ってふくらんでいる。

壁柱穴 北東壁に5つ、北西壁に、壁溝中で2つみつかった。北東壁の5つは、径14~19cm、深さ8~17cmで、比較的間隔が揃っている。北西壁の2つは、径8cm、壁溝の底からの深さ、北が5cm、南が11cmである。

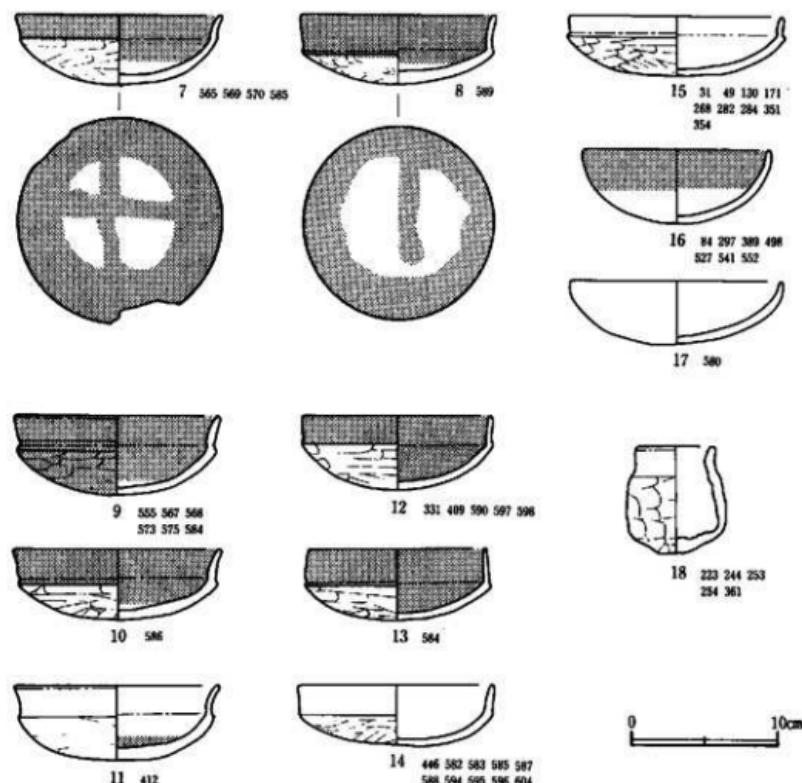
柱穴 主柱穴が4つ、副柱穴が2つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径50~72cm、深さ95~100cmである。西側の主柱穴は、床面から57cm下がったところまで、大きな楕円形の掘り込みがある。西隅の副柱穴は、径31cm、深さ15cm。カマドと向い合う位置にある副柱穴は、径42cm、深さ28cmである。



第178図 第28号住居跡遺構図・遺物位置図



第179図 第28号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第180図 第28号住居跡遺物実測図(2)

貯藏穴 カマドの左脇にある。平面形態は、ややいびつな長方形で、口の大きさは73cm×83cm、深さ64cmである。底は平らである。覆土は、底の方から、ローム粒主体の黄褐色土、暗褐色土、カマドの崩れの山砂が混じった暗褐色土がきて、最も上の山砂混暗褐色土の一部の上に、黒褐色土がのっていた。

カマド 北西壁の、中央よりやや北に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅72cm、奥行き38cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床は一段へこんでおり、それを埋めた上に、煙道の下側にわたって土を貼っている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけである。火床は、はっきりし、直立して土製支脚が出上した。

遺物出土状況 床面ないし、わずかに浮いて、完形、ほぼ完形で、8・10・11・13・17の土師壺が出土した。床面から浮いた状態であるが、破片を接合すると完形あるいはそれに近く復原できたものに、1・2の土師甕、7・9・12の土師壺がある。

種 土 1. 少量のローム粒混黒褐色土層

4. ロームブロック、多量のローム粒混黄

2. 黒色土、ローム粒混暗褐色土層

褐色土層

3. 山砂、ローム粒、少量の焼土混明褐色

5. カマド

土層

第46表 第28号住居跡土器観察表

器 種 類	高 度 cm	底 口 幅 cm	底 深 度 cm	底 部 形 状	底 部 色 調	底 部 上 部 色 調	底 部 形 状 調 査					出 土 地 点 (m 高 度 ~ 海 面 水 平 (cm))	備 考	
							内 部	コ ロ ナ ダ ー	内 部	ア ル テ リ ア ー	外 部			
1. 瓢	275	151	70	260	球形光	真	暗褐色	黒	内	コロナダーノ	アルテリアー	外	+1.5~35.8	
									外	ノ	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
2.	194	157	70	190	?	?	?	?	内	ノ	ノ	ノ	+9.4~43.8	
									外	ノ	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
3.	?	157	?	220	口縁光 側なし	?	?	?	内	ノ	ノ	黒いナダ	+2.4~+9.5	
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
4.	环	50	118	?	136	口縁光 側なし	?	?	内	ココナダ後 ミガキ	ミガキ	内	+3.3~+34.8	
									外	ココナダ	ヘラケズリ			
5.	?	47	138	-	123	%	?	?	内	ココナダ後 ミガキ	ミガキ	内	+5.8~+10.6	
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
6.	?	56	148	-	127	%	?	?	内	ココナダ	ノ	ノ	+3.2~+9.3	内外口に赤彩 内面は使用により 剥離
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
7.	?	48	139	-	134	球形光	?	?	内	ノ	ノ	トゲ後ミガキ	+1.5~+3.9	内外口に赤彩 内は上から見て④ の赤影
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ後 ミガキ		
8.	?	46	132	-	133	完	?	?	内	ノ	ノ	ノ	+3.1	内外口に赤彩内面に ①目に黒点でいる
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
9.	?	53	137	-	136	球形光	?	?	内	ノ	ノ	ノ	+2.5~+5.0	内外赤彩
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
10.	?	47	140	-	136	完	?	?	地は淡黄 褐色	内	ノ	ノ	+3.3	内全面 外口)赤影
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
11.	?	50	137	-	132	?	?	?	地は淡黄 褐色	内	ノ	ノ	+10.6	内全面赤影
									外	ノ	ノ	ヘラナケズ ミガキ		
12.	?	50	130	-	132	球形光	真	?	地は淡黄 褐色	内	ノ	ノ	-6.7~+7.9	内全面 外口)赤影
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
13.	?	47	121	-	128	完	?	?	地は淡黄 褐色	内	ノ	ノ	+2.5	内全面 外口)赤影
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		
14.	?	40	133	-	130	%	?	?	明褐色	内	ココナダ後 ミガキ	ミガキ	+6.4~+11.0	
									外	ココナダ	ヘラケズリ			
15.	?	41	144	-	150	口縁光 側なし	?	?	明褐色	内	ココナダ後 ミガキ	ミガキ	+24.6~+41.8	
									外	ノ	ノ	ヘラケズリ		

No.	種類	法尺 (mm)			遺存度	構成	色調	形状	成形・調整				出土状況 (床面～) (cm)	備考		
		長	幅	高さ					内側壁	外側壁	内口	外口	コナゲ	脱ナゲ		
16	壁	51	129	—	?	X	黄	地は明褐色	密	内	口	ヨコナゲ	脱ナゲ		+1.2～+31.9 内外口に赤泥	
									外	口	ヨコナゲ	脱ナゲ	ヘラケズリ	一部ガキ		
17	?	42	143	—	?	ほぼ光	?	地は明褐色 内は一灰黑色 外は褐色 生透視痕跡	密	内	口	ヨコナゲ	脱ナゲ		+2.1	
									外	口	ヨコナゲ	脱ナゲ	ヘラケズリ	脱ナゲ		
18	手掘	71	59	—	62	X	?	淡褐色	やや粗	内	口	ヨコナゲ	脱ナゲ	指標により 底手コネ	+31.6～+42.7	
										外	口	ヨコナゲ	脱ナゲ	手コネ		

第29号住居跡 (033) (第181～183図 第47・48表)

検出状況 本住居跡は、第28号住居跡のほぼ南10mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、34.10mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだゆるいレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、長方形である。カマドのある辺とそれに向い合う辺が長く、4.8mであり、カマドの左右の辺は短くて、左辺が4.2m、右辺が3.9mである。主軸方位は、N-40°-Eである。壁は、低く、高さ9～19cmで、床面から上ひろがりに立ち上がる。

床面 ソフトロームを平らに削って床としており、貼り床はおこなっていない。中央部が堅くなっていた。

壁 溝 北東壁から南西壁にかけてめぐっている。幅15～25cm、深さ3～8cmで、断面は逆台形である。

柱 穴 柱穴と思われるピットが、2つみつかった。東隅のものは、径22～24cm、深さ27cm、北隅のものは、径25～37cm、深さ13cmである。

貯藏穴 カマドの左側、住居跡北隅にある。平面形態は、楕円形で、口の大きさは長径82cm、短径62cm、深さ22cmである。底は丸底である。覆土は、底の方から、ローム粒主体の黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土で、ローム粒主体の黄褐色土は、うすく底から壁までまわっていた。

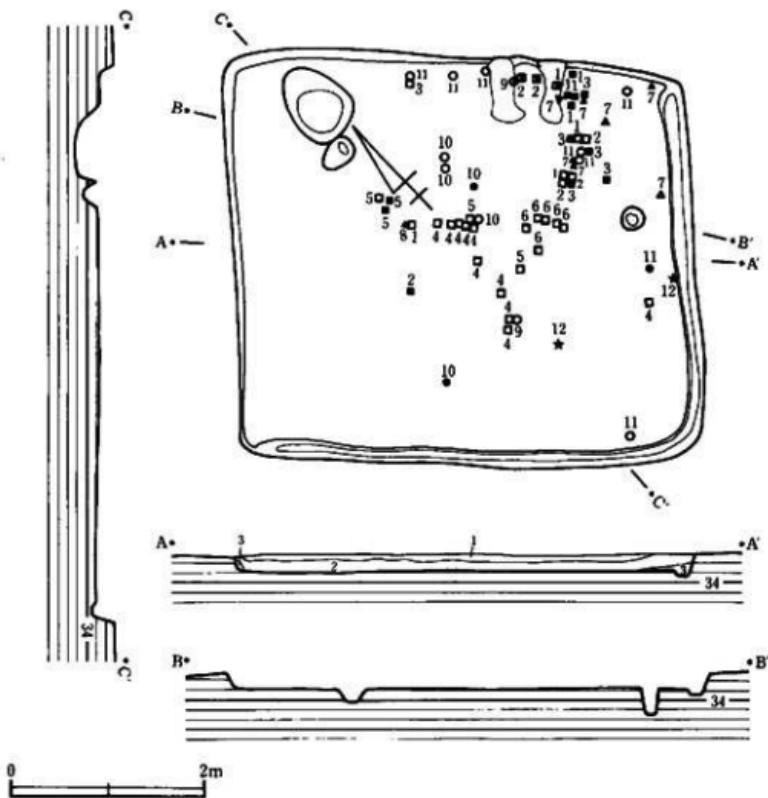
カマド 北東壁の東寄りに位置し、山砂を主として構築されている。ローム壁への掘り込みは、ほとんどない。火床から煙道にかけて、ローム壁に土を貼っている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけである。中から土製支脚が出土している。

遺物出土状況 完形の出土品はなく、7の土師甌と、9の土師壺が、接合によって完形に近くなつたにとどまる。7は多くの破片が床面から出土したが、9の破片は、床面からやや浮いて出土した。

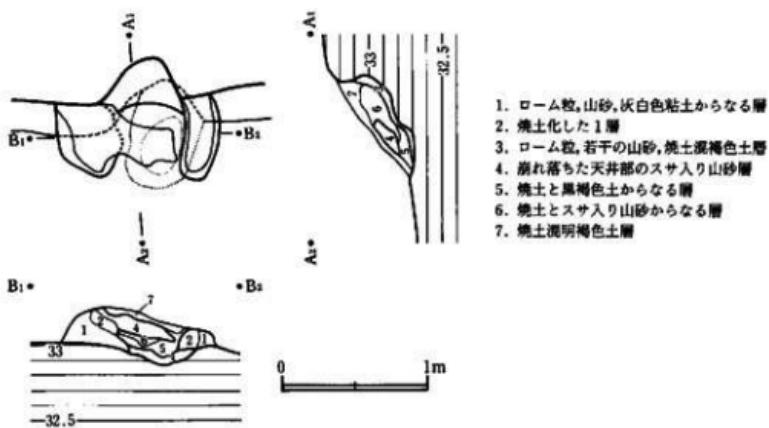
覆 土 1. ローム粒混暗褐色土層

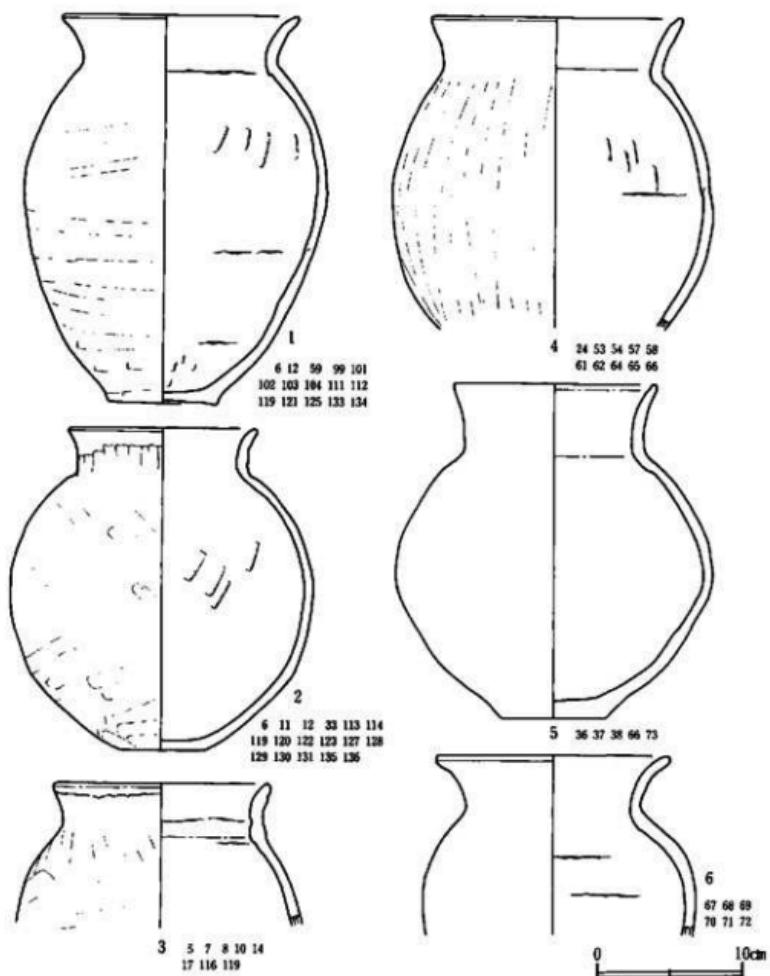
3. 多量のローム粒混黄褐色土層

2. ローム粒混黒褐色土層 (やや硬)



第181図 第29号住居跡遺構図・遺物位置図(上)・カマド実測図(下)

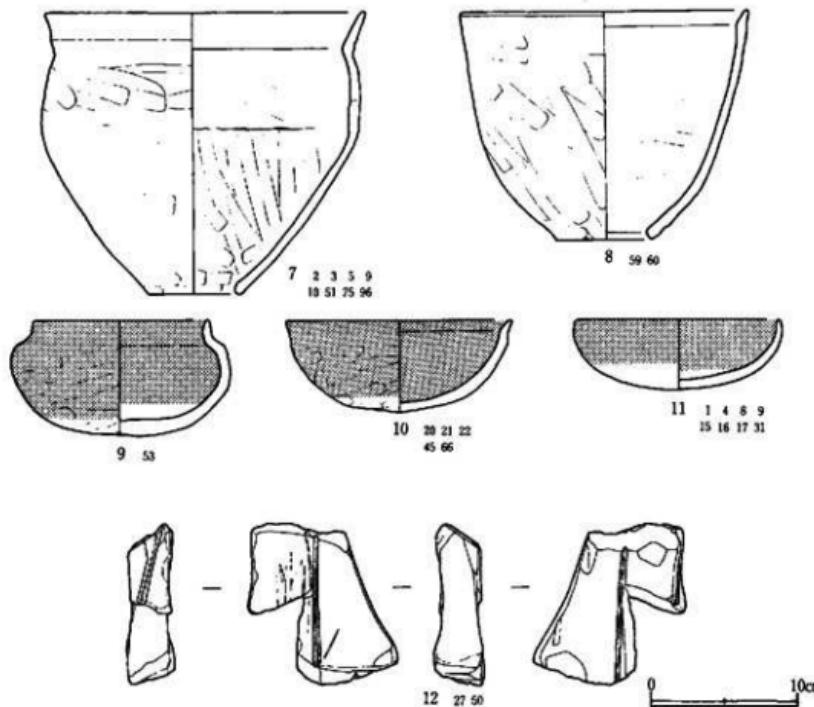




第182図 第29号住居跡遺物実測図(1)

第47表 第29号住居跡土器觀察表

さし 印	器 種	法 量 (cm)				透 度	赤 成	色 調	點 七	成 形・調 整				出 土 状 況 (底 面 ~) (cm)	備 考		
		基 高	口 幅	底 幅	側 幅					内 口	コ コ ナ デ	制	コ ロ ヘ タ ナ デ				
1	要	260	161	75	208	5%	黄	枯葉褐色 外黄褐色	黑	内口	ココナデ	制	コロヘタナデ		+2.8~+14.6	輪縫目を残す	
									外口	リ			ヘラケズリ後ナデ				
2	#	215	126	56	210	1.7倍 徐々減 底部充	#	内赤褐色 外暗褐色	やや粗	内口	リ	リ	ナ	デ	底	+3.9~+15.2	外側下部は熱を受 け落ちる。
										外口	リ	リ	ヘラケズリ後ナデ	リ	ヘラケズリ後ナデ		



第183图 第29号住居跡遺物來源圖(2)

子 孫 治 方	種 類	法 量 (mm)		透 徹 度	硬 成 色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整			出 上 状 況 (体 面 ～) (cm)	備 考	
		器 高	口 幅 径				外 口 径	内 底 径	外 口 径			
3. 頭	?	144	?	? 頭と部 までは ぼく	丸 細赤褐色	やや粗 い	内 口 径	ヨコナ ギ	ヨコナ ギ	+1.6～+11.4		
4.	?	170	?	221 頭部を 陥れ光 る	丸 暗褐色	素	内 口 径	ア	ア	ヘラケズリ	+3.4～+11.8	
5.	#	225	136	76	220 二級 開光	淡黃褐色 微粒石	内 口 径	ア	ア	ヨコヘラケズ リ	+0.5～+10.4 内皮は使用により 剥離	
6.	#	158	?	187 和田 和 田 3 151142	環帶褐色 微粒石	やや粗 い	内 口 径	ア	ア	ヨコヘラケズ リ	+5.2～18.7 輪状痕を残す	
7.	頭	192	217	56	217 和田 和 田 3 151142	赤褐色 やや不均	内 口 径	ア	ア	ヨコヘラケズ リ ナ マ	+2.3～18.4	
8.	#	156	194	55	-	%	良	明褐色 微粒石	内 口 径	ア ヘラケズリ	+14.6～+15.5	

機器種類	法尺(m)				透視度	焼成	色調	物土	成形・調整				出土状況 (床面~) (cm)	備考
	直 高 度 高 度 差	口 幅 度	高 度 差	透 視 度					内 部	外 部	ロコタ ゲ	内 部		
9 圧	77	119	—	150	透視光	やや不良	地:暗褐色	中:暗褐色	内: 外: 外:	内: 外: 外:	ロコタ ゲ ギ	内: 外: 外: 外: 外: 外:	+6.2~+11.7	内底山~側中央部
10 烧	61	153	—	149	%	x	地:暗褐色	中:	内: 外: 外:	内: 外: 外:	ロコタ ゲ ギ	内: 外: 外: 外: 外: 外:	+0.5~+10.4	内全面、外: 壁上部中央:赤影
11 x	46	138	—	—	透視光 部分 はばく	良	地:暗褐色	中:	内: 外: 外:	内: 外: 外:	ロコタ ゲ ギ	内: 外: 外: 外: 外: 外:	+1.7~+17.6	内外山~側上半 赤影、内底に油煙 付着

第48表 第29号住居跡石製品簡表

層 名	種 類	法 量				透 度	成 分	色 調	物 質	土 セ リ ー ク シ テ ル	出 土 状 況 (床 面 付 近) (cm)	備 考
		幅(米)	厚(米)	孔隙(%)	重量(kg)							
12 紙 石		75	104	—	335	%	—	黄褐色	—	同上・側面を研磨	+5.4~ +8.5 き 3mm±の 断面が企 上部	

第30号住居跡（034）（第184～189図 第49・50表）

検出状況 本住居跡は、第32号住居跡の南よりやや西寄り13mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.70mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、レンズ状の堆積をしているが、部分的に埋まっていると思われ、床面からの炭化材、焼土塊の多数の出土という火災に遭った痕のあることからみても、人為的に埋められたものであろう。

形状・規模 平面形態は、ややいびつな正方形である。北東と南東の辺が短く、6.1と6.2mで、北西と南西の辺が長く、6.5mである。主軸の方位は、N-45°-Wである。壁は、高さが34~47cmで、床面からや上ひろがりに立ち上がる。

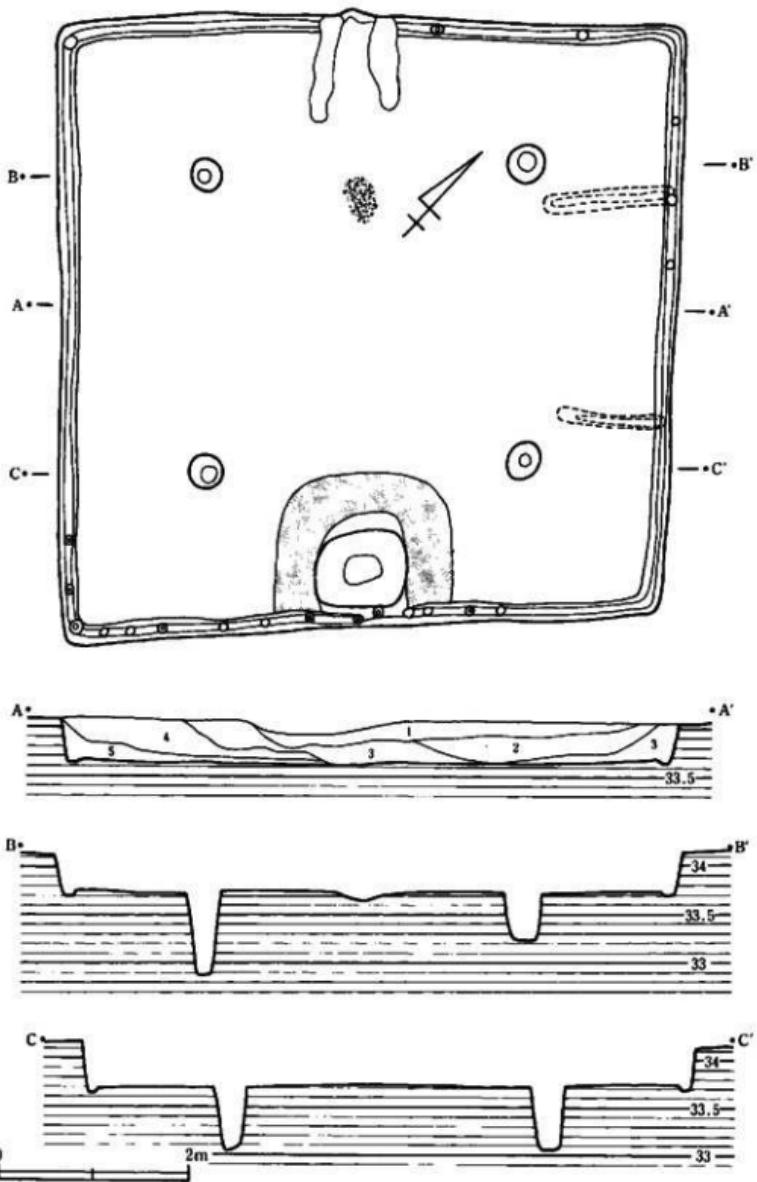
床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドに向い合う位置に設けられた貯蔵穴を取り囲むように、逆U字形に、一段高く土手状に削りのこしてある。幅46~53cm、高さ2~5cmである。

壁溝貯藏穴のところがわずかに途切れるほかは、カマドの下を含め、全周している。幅15~24cm、深さ4~8cmで、断面はU字形である。

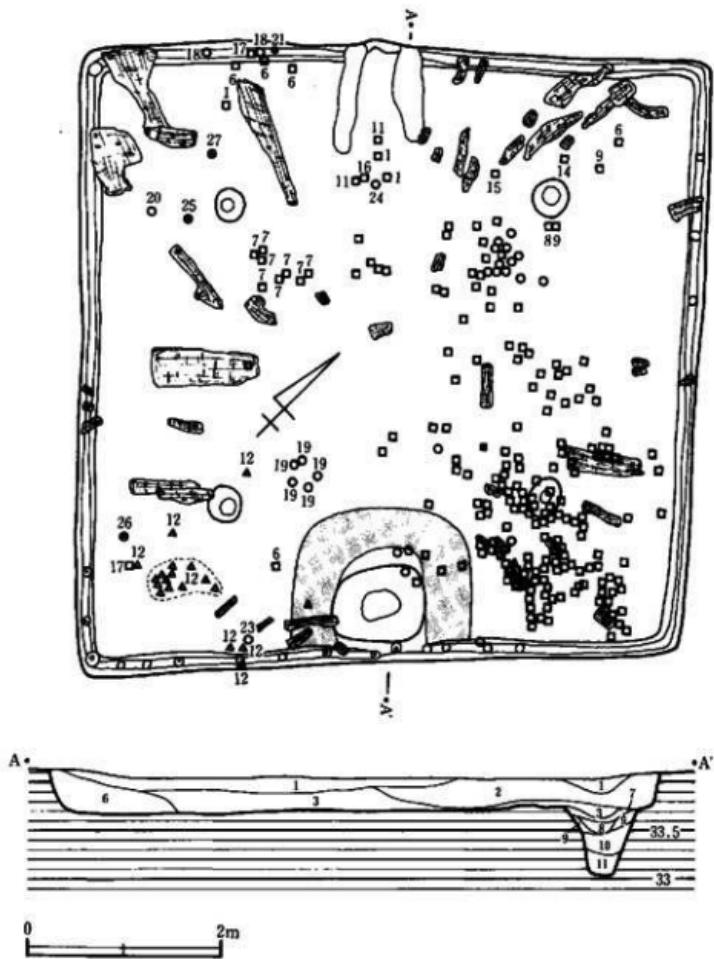
壁柱穴 南東壁、南西壁、南隅、西隅にあり、合わせて19個ある。径7~14cm、深さ4~17cmで、10cm前後の深さのものが多い。

床溝 カマドに向って右側に2本、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅12~21cm、深さ8~13cmである。

柱穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径31~39cm、深さ49~82cmである。



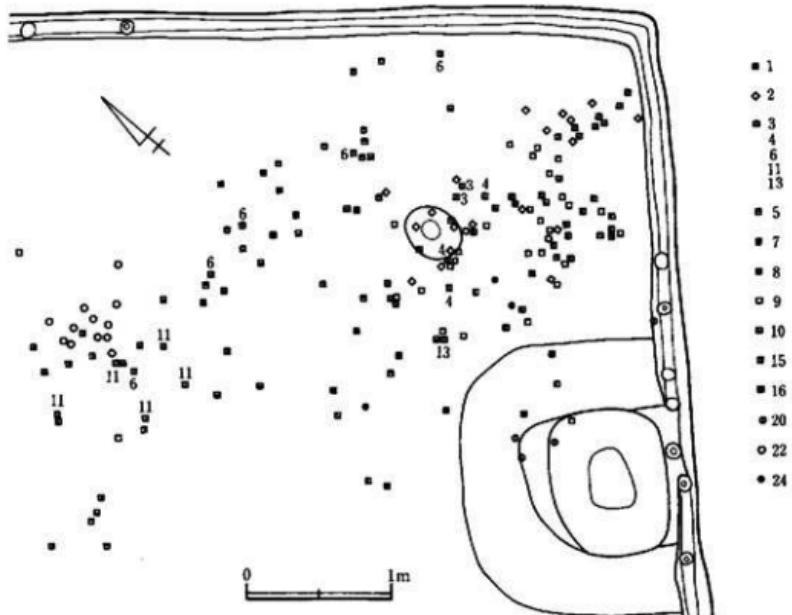
第184図 第30号住居跡遺構図



第185図 第30号住居跡遺物位置図(1)

貯藏穴 南東壁中央にある。平面形態は、ややいびつな隅丸長方形である。口の大きさは77cm×97cm、深さ67cmで、底は平らである。覆土は、住居跡のセクションに記す通りである。床面のところで触れたように、土手が囲んでいる。

カマド 北西壁の中央よりやや西寄りに位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅35cm、奥行き7cmのゆるい山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床にあたると思われるところは、床が一段丸くくぼんでいて、土が貼られ、その上につくられている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけである。火床は、ローム壁から、1.5m離れたところにみつかった。



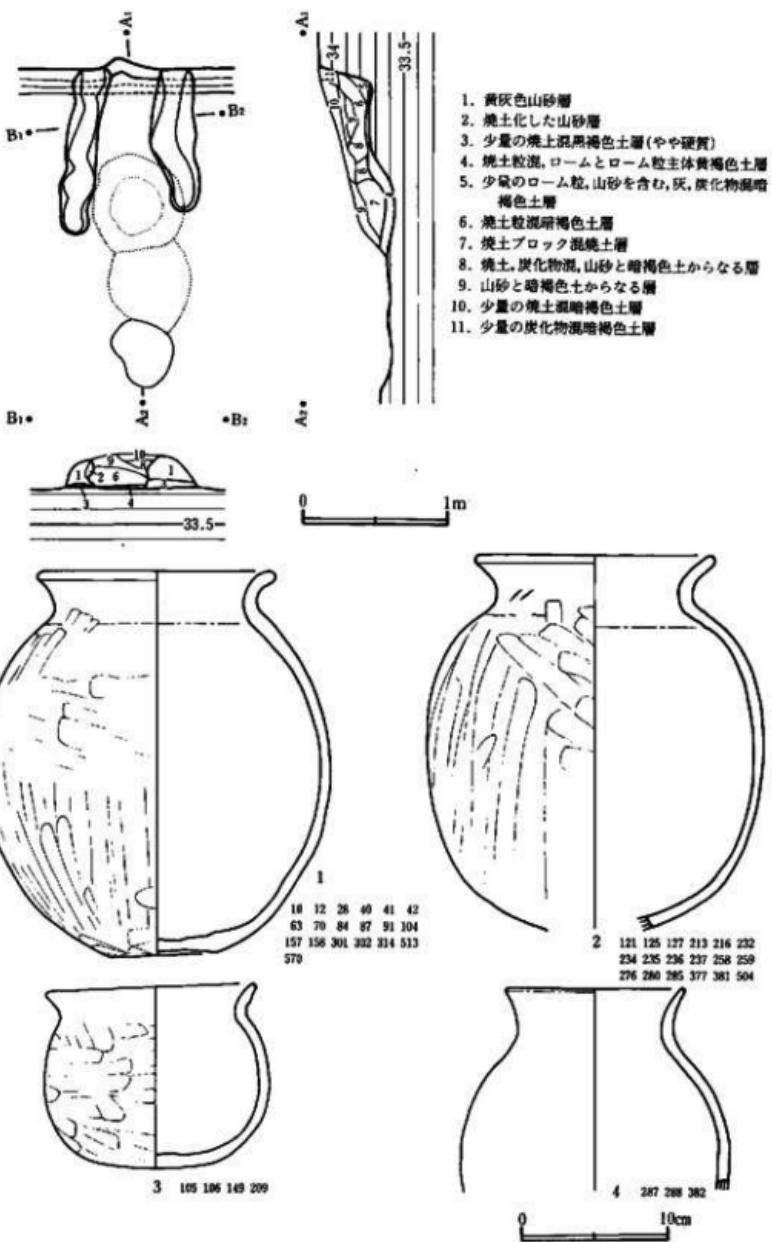
第186図 第30号住居跡遺物位置区(2)

遺物出土状況 遺物の出土量は多い。しかしながら、完形で出土した土器は全く無く、接合の結果、完形に近く復原できた3の土師壺、8の土師壺の破片も、床面からかなり浮いて出土した。25・26の土玉も、床面からやや浮いた状態で出土している。

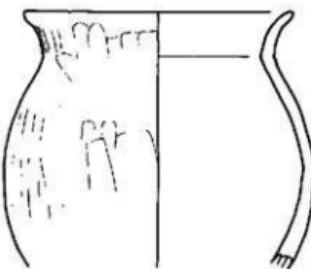
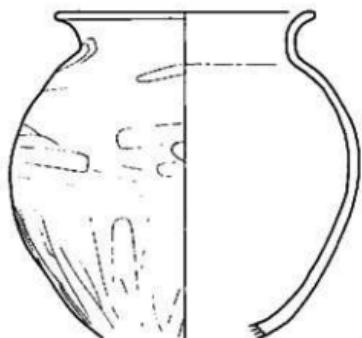
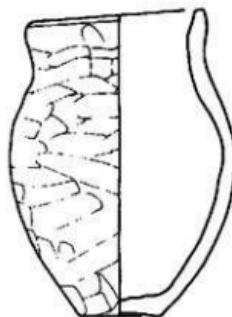
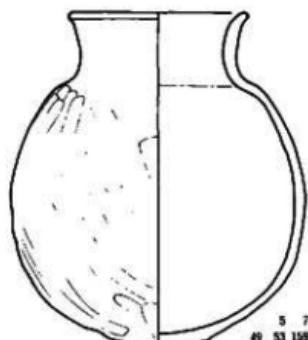
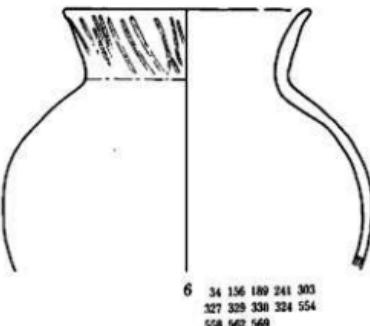
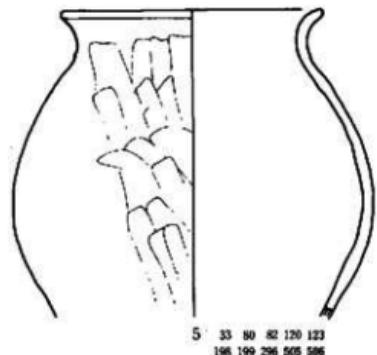
- | | | |
|-----|------------------|------------------|
| 覆 土 | 1. 暗褐色土層 | 7. 黄褐色土層 |
| | 2. 若干のスコリア混黒褐色土層 | 8. 茶褐色土層 |
| | 3. 茶褐色土層 | 9. 炭化物、焼土混褐色土層 |
| | 4. ローム粒混黒色土層 | 10. 多量の炭化物混暗褐色土層 |
| | 5. 茶褐色土層 | 11. 粘質褐色土層 |
| | 6. カマド | |

第49表 第30号住居跡土器観察表

番 号	場 所	法 尺 (cm)				通 度	種 成	色 調	熱 士	成 形・調 整				出 上 状 況 (底 面 ~) (cm)	備 考		
		高	口	底	側					内	外	内	外	内	外		
1	奥	255	150	70	240	%	良	暗褐色	需	内	△ヨコナミテ	駆	ヨコベラナミテ	横	ヨコハラナミテ	+8.8~+41.5	
2	"	?	160	?	233	%	?	汚褐色	需	内	△	△	ヘラケズリ	△	ヘラケズリ	9.0~+25.6	

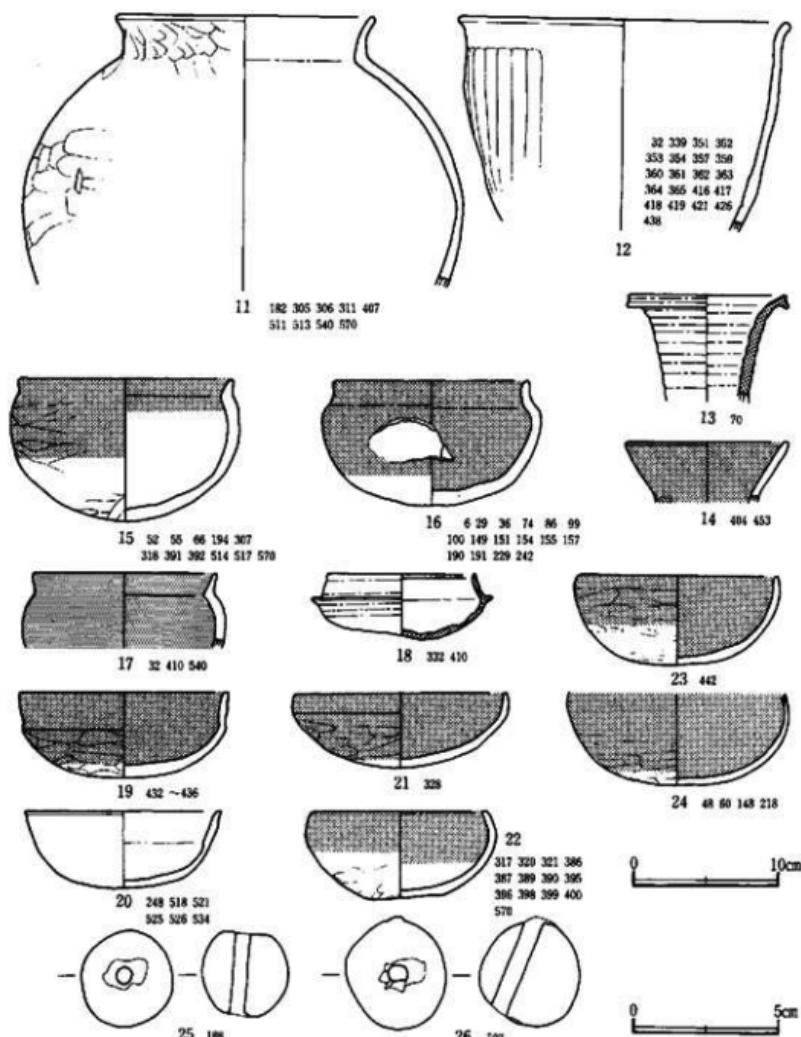


第187図 第30号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



0 10cm

第188図 第30号住居跡遺物実測図(2)



第189図 第30号住居跡遺物実測図 (3)

器種	法寸 (mm)	高さ (mm)	口径 (mm)	底面径 (mm)	保存度	焼成色	調査上	成形・調製			出土状況 (深さ～) (cm)	備考	
								内 (口)	外 (口)	内 (コナメ)	外 (コナメ)		
3 瓢	125	141	—	154	良好	灰	赤褐色	#	#	コナメ	コナメ	+32.0～+34.0	
4	?	122	?	182	?	灰	赤褐色	#	#	ヘラタマリ	ヘラタマリ	+11.3～+12.5	

記 号	器 種	法 量 (mm)			造 成	色 調	胎 土	成 形・調 整				出 土 状 況 (地 面 ～ (cm))	備 考	
		口 幅	口 深	底 径				成 形	施 工	調 整	成 形			
5	瓶	?	174	?	247	%	赤	内 外	コナデ	調	ヘタナデ		+7.4～+41.0	内面使用により剥離
									?	?	ヘタケズリ			
6	壺	?	168	?	253	100% 削り	赤褐色	内 外	コナデ	調	ヘタナデ	ココヘタナデ	+4.5～+39.6	
									?	?	ヘタケズリ			
7	瓶	225	115	69	200	%	褐	内 外	コナデ	調	ナダ	ナダ	12.2～+41.0	
									?	?	ヘタケズリ			
8	#	205	117	55	155	+45%完 成	内 外 赤褐色 外 赤褐色 一端削	内 外	コナデ	調	ヘタナデ	基 指標による ナ デ	+9.0～+43.2	
									?	?	ヘタケズリ			
9	#	?	170	?	239	55%削 除 %	赤褐色	内 外	コナデ	調	ナダ		+9.4～+40.8	
									?	?	上半ヘタナデ			
									?	?	下半ヘタナデ			
10	#	?	183	?	214	削除 削除 削除 削除	赤褐色	内 外	コナデ	調	ヘタナデ	ヘタケズリ	+0.9～+45.2	内外面使用により 剥離
									?	?	ヨコヘタナデ			
11	#	?	177	?	306	10% 削 除 %	赤褐色	内 外	コナデ	調	ヘタナデ		+0.9～+40.5	
									?	?	ヘタケズリ			
12	瓶	?	225	?	-	%	赤褐色	やや粗	コナデ	ヘタナデ			+16.9～+53.9	
									?	?	ヘタケズリ			
13	瓶 漏斗	?	199	?	?	%	赤褐色	内 外	コロ	調	コロ		+41.5	
									?	?	?			
14	壺	?	110	?	?	口縁だ け %	赤褐色	内 外	コナデ	ヘタナデ	一端ヘタナデ ヨコヘタナデ ナタツケ		+3.2～住居外	内外面赤影
									?	?	?			
15	瓶	96	146	?	?	内部完 成	内 外 赤褐色 外 赤褐色 内 外 共 黒褐色多し	内 外	コナデ	調	ヘタナデ		+12.0～+28.8	内 外 赤 外 部 中 央 赤影
									?	?	ヘタケズリ			
16	#	84	136	-	152	口縁 部 削除完	内 外 赤褐色 外 赤褐色	内 外	コナデ	?	ヘタナア		+16.6～+45.0	内外赤 白 内 外 部 下 半 赤影
									?	?	ヘタケズリ			
17	#	?	124	?	138	%	赤褐色	内 外	コナデ	?	ヘタナデ		+9.0～+49.0	内外赤影
									?	?	ヘタケズリ			
18	瓶 漏斗	41	102	-	127	%	青 灰 色	内 外	コロ	コロ			+3.8～+13.7	
									?	?	ヘタケズリ			
19	瓶	57	142	-	140	%	赤褐色	内 外	コナデ	調	ナダ		+7.8～+9.6	内 全 周 外 二 ～ 四 周 赤影
									?	?	?			
20	#	51	134	-	-	%	赤褐色	内 外	コナデ	?	?		+7.9～+16.8	内外面使用により 剥離
									?	?	?			
21	#	51	144	-	148	%	や や 赤褐色	内 外	コナデ	?	ヘタナデ	ヘタナデ	+5.8～+15.9	内 全 周 外 口 ～ 倒 下 赤影
									?	?	ヘタケズリ			

著 者 名	種 類	法 式 (m)				遺存度	焼 成	色 調	胎 土	成 形・調 整				出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考		
		標 高 高 度 標 高 度	口 部 幅	底 部 幅	側 部 幅					内 口 部 幅	外 口 部 幅	内 部 幅	外 部 幅	内 部 幅	外 部 幅		
22	坏	58	124	50	133	%	良	内赤褐色 暗褐色 赤褐色 灰褐色 灰黑色	密	内 口 部 幅	ヨコナ ア	内 部 幅	ヘラナ ダ及 びナ ダ	内 部 幅	ア	+8.8~+13.1	内外口赤影
23	#	61	138	-	-	%	#	内赤褐色 外赤褐色 暗褐色	#	内 口 部 幅	ヘ ナ デ	内 部 幅	ヘラナ ダ及 びナ ダ	内 部 幅		+9.5	内全面外口～底下 赤影
24	#	?	?	-	-	%	#	地は明黄色	#	内 口 部 幅	ヨコナ ア	内 部 幅	ヘラケズリ	内 部 幅		+19.3~+23.1	内外 山～腰中央赤影

第50表 第30号住居跡土製品観察表

著 者 名	種 類	法 式				遺存度	焼 成	色 調	胎 土	せ い け い				出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考
		幅(m)	深(m)	孔深(m)	中量(g)					内 口 部 幅	外 口 部 幅	内 部 幅	外 部 幅		
25	上 玉	31.5	29	6~7	27.8	完	良	茶～黒褐色	無	内 部 幅	ナ	内 部 幅	表面粗く研磨	+11.6	精製品
26	#	38.5	35.5	6~7	43.1	#	#	#	#	内 部 幅	ナ	内 部 幅	表面粗めのケズリーナ	+5.0	粗製品

第31号住居跡 (035) (第190~192図 第51・52表)

検出状況 本住居跡は、第29号住居跡の南東13mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.60mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。覆土最上層の焼土層は、遺跡全体に認められる後世の焼土層である。床面には、南東壁近くを中心に、焼土の堆積が、4箇所みつかった。

形状・規模 平面形態は、ややいびつな正方形である。南東の辺が短く6.2mであるほかは、6.4~6.5mである。主軸の方位は、N-25°-Wである。壁は、高さが62~70cmと深く、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。堅緻である。

壁 溝 カマドの下をのぞき全周している。幅18~24cm、深さ2~9cmで、断面はU字形である。

床 溝 カマドの左右に2本ずつ、壁と直角に、壁から住居跡の中央に向って床に溝が走る。幅9~20cm、深さ5cm前後である。

柱 穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径50~68cm、深さ36~43cmである。

貯藏穴 カマドの右脇にある。平面形態は、円形である。口の大きさは径60~66cm、深さ43cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、ローム粒主体の黄褐色土、ローム粒と焼土粒混黑褐色土、ローム粒と褐色土から成る黄褐色土、少量のローム粒と黒色土混暗褐色土、ローム粒混暗褐色土の順で堆積していた。

カマド 北西壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構成されている。ローム壁を、幅42cm、奥行き29cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。焚き口から火床にかけて丸くぼんでおり、その途中からローム壁にかけて土が貼られ、その上につくられている。カマドの中と右脇から土製支脚が1点ずつ出土している。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであった。

遺物出土状況 土器のほかに、土製紡錘車、砥石が出土した。4の土師壺と7の土師壺の破片は、床面からさほど浮いていない状態で出土したが、8・9の土師壺の破片は、どちらも、かなり浮いて出土したものがある。

層 土 1. 焼土層

4. スコリア混黒色土層

2. 黒褐色土層

5. スコリア混茶褐色土層

3. 褐色土層

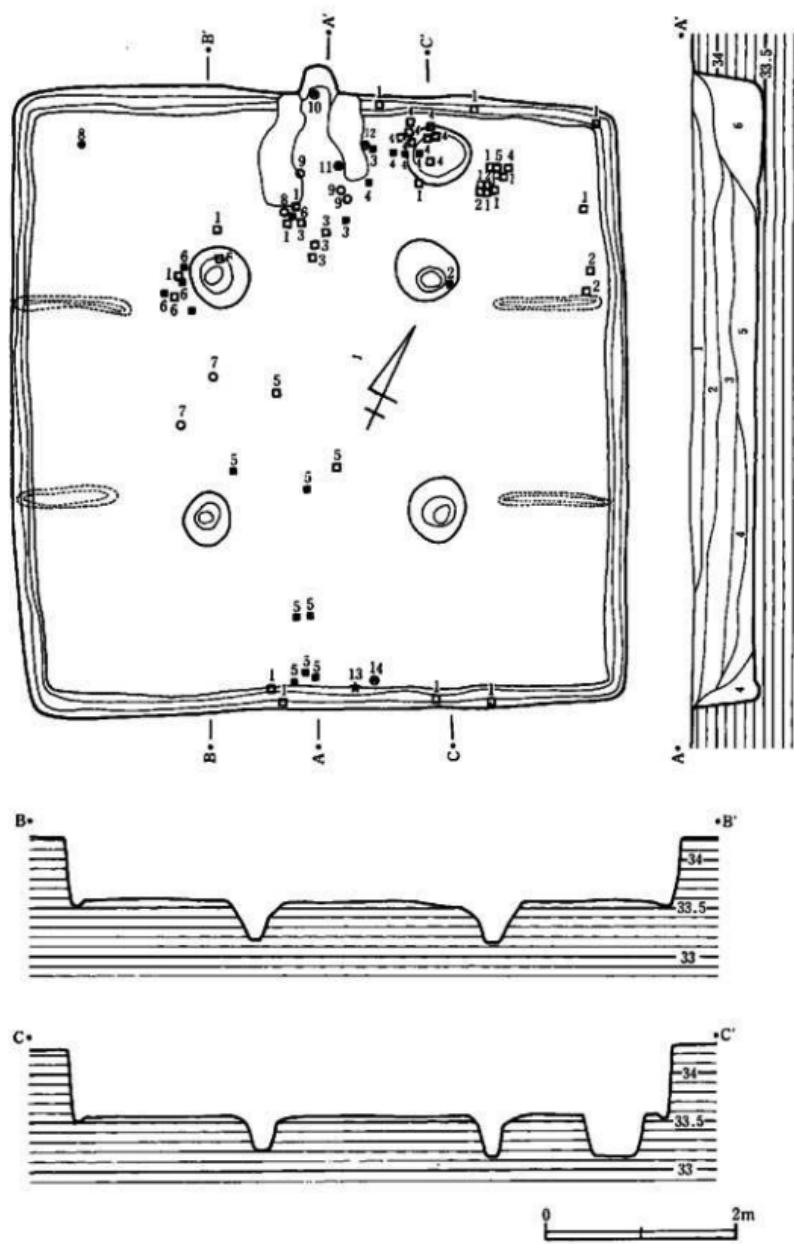
6. カマド

第51表 第31号住居跡土器観察表

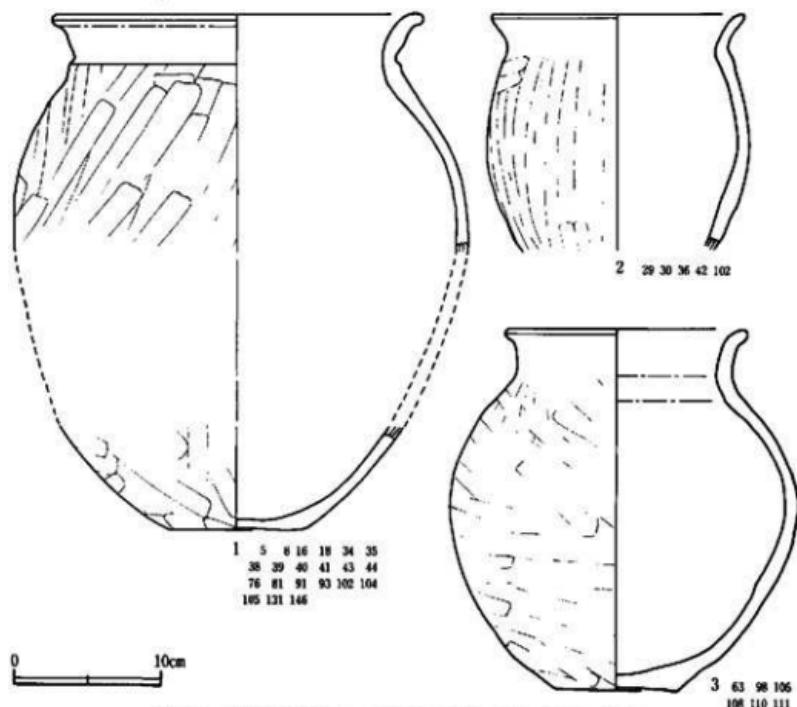
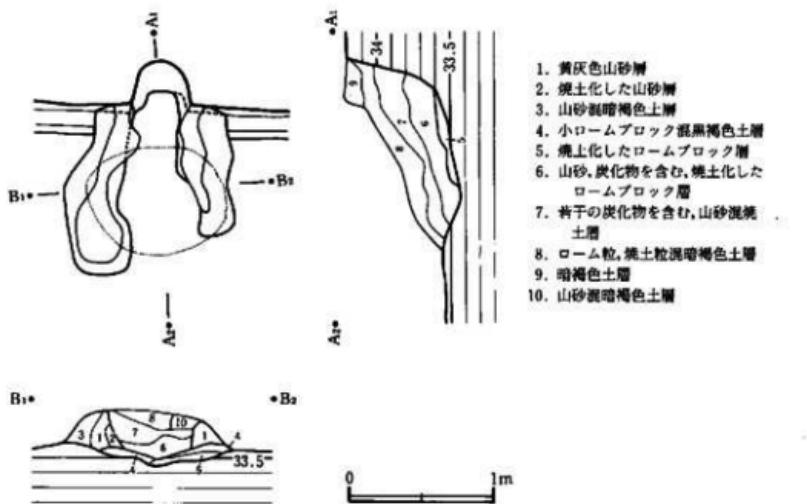
器種	法 面 高 度 mm	W 底 深 度 mm	厚 度 mm	造 存 度	燒 成 色 調	胎 土	成 形 ・ 調 整				備 考	
							内 部 内 部 外 部	口 コ ナ デ	調 ナ デ	密 ナ デ		
1 壁	?	243	99	389	口縁 上部 胴下部	良	内黄褐色 外淡褐色	密	内 口コナデ 外 口コナデ	調ナ デ	密ナ デ	+0.1～+74.6
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
2	?	170	?	180	%	#	内黄褐色 外淡褐色	#	# ハラケズリ	# ハラケズリ		-0.1～+29.7
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
3	#	240	159	83	240	%	#	内黄褐色	#	# ナ デ	密ナ デ	-1.9～+20.9
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
4	#	273	200	93	246	ほぼ完	#	明褐色 外褐多し	やや粗	内 # ハラケズリ	# ハラケズリ	+0.9～+7.3
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
5 小型壺	121	164	64	158	%	やや不良	内黄褐色 外淡褐色	密	内 # ハラケズリ	# ハラケズリ	外 # ハラケズリ	-0.9～+30.8
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
6 壁	?	?	60	151	底走 網	%	内黄褐色 外赤褐色 黒斑多し	やや不良	内 # ハラケズリ	# ハラケズリ	外 # ハラケズリ	+1.9～+6.5
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
7 壺	41	131	—	99	ほぼ完	良	内黄褐色 外赤褐色 内黄褐色 黒斑多し	密	内 # ハラケズリ	# ハラケズリ	外 # ハラケズリ	+5.3～+9.0
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
8	#	44	125	—	121	%	# 明褐色及 び暗褐色	#	内 # ハラケズリ	# ハラケズリ	外 # ハラケズリ	+10.3～+25.9
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
9	#	49	129	—	—	ほぼ完	# 明褐色及 び暗褐色	#	内 # ハラケズリ	# ハラケズリ	外 # ハラケズリ	-0.4～+32.2
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		
10 手 掌	23	61	—	17	%	#	暗褐色	#	内 # ハラケズリ	# ハラケズリ	外 # ハラケズリ	+43.8
								口コナデ	口コナデ	口コナデ		

第52表 第31号住居跡土製品・石製品観察表

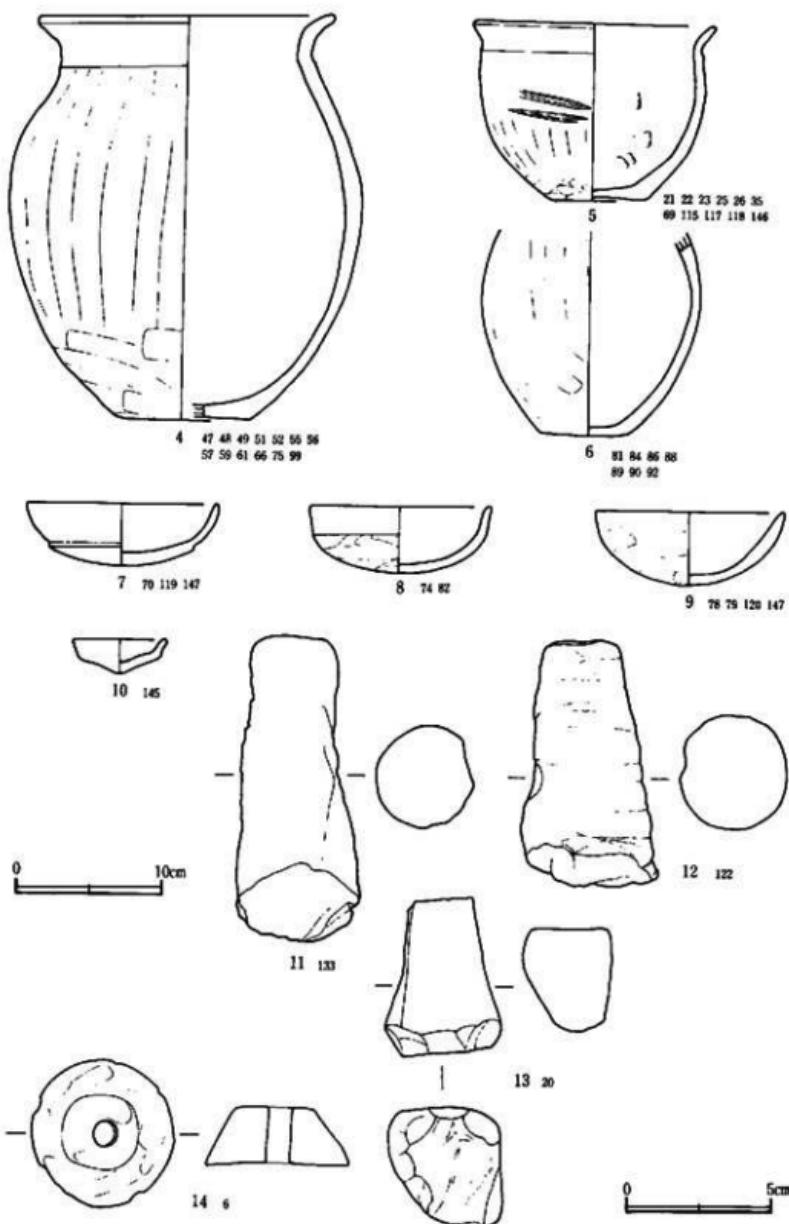
器種	法 面 高 度 mm	W 底 深 度 mm	厚 度 mm	造 存 度	焼 成 色 調	胎 土	セ イ ケ ル	出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)		備 考	
								内 部 内 部 外 部	口 コ ナ デ		
11 上板支脚	83	206	—	1850	ほぼ完	一次焼成	茶褐色	粘 土	口コナデ	口コナデ	+1.5 表面を一部欠損。表面剥離



第190図 第31号住居跡遺構図・遺物位置図



第191図 第31号住居跡カマド実測図(上)・遺物実測図(下)(1)



第192図 第31号住居跡遺物実測図(2)

記 号	種 類	法 算				遺存度	構成	色	調	胎	七	せ い け い	出土状況 (床面～) (cm)	備 考
		幅(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	底量(kg)									
12	土製支脚	49	168	—	1010	底部欠	二次焼成	赤褐色	粗砂粒				+12.9	表面にのみ陶土中に少量のササ入り粘土を用いた。
13	瓦石	40	53	—	82	・端欠	—	青灰色	—	2面研磨			+6.5	粗粒凝灰岩
14	土製筒形	27	19	8	47	ほぼ完	良	青褐色	粗砂粒	全層、ヘラケズリ模を のこすナダ			+4.4	
		46												

第32号住居跡 (036) (第193~195図 第53表)

検出状況 本住居跡は、第26号住居跡の南よりやや東寄り13mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.60mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。南東の辺が最も長く6.2mで、のこりの3辺は6.0mである。主軸の方位は、N-30°-Wである。壁は、高さが43~50cmで、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 軟弱で、凹凸が目立った。貼り床は、おこなっていない。

壁溝 西隅をのぞいてぐるりとめぐっている。幅17~32cm、深さ2~8cm、断面はU字形である。

壁柱穴 南東壁の壁溝中に1つ、北西壁の壁溝中に3つみつかった。径10~16cm、深さ6~17cmである。

柱穴 4つみつかった。それぞれ相対する対角線上に位置する。径37~59cm、深さ39~62cmである。

貯藏穴 南隅にある。平面形態は、長方形である。口の大きさは、69cm×87cm、深さ45cmで、底は、平らでなく、やや傾斜している。覆土は、底の方から、粘質褐色土、ロームブロック混茶褐色土、茶褐色土、褐色土、暗褐色土の順で堆積していたが、南側の壁沿いに、前述の下の方の3つの層の堆積に先だって、ロームの茶褐色土の流れ込みが、最初あったようである。

ピット 西隅近くに、径44cm、深さ13cmの円形のピットがみつかった。

カマド 北西壁の中央にあったものと思われる。北西壁中央の壁溝から20cm離れて、南東方向へのびる幅60cm、長さ130cmの、長楕円形のかすかなへこみが、みつかった。ただ、カマドの構築されていた痕跡は、このへこみだけで、山砂や焼土の堆積は、みつかなかった。

遺物出土状況 床面からは、2の土師甕が完形で出土した。1・3の土師甕、9の土師壇、14・19の土師壠は、接合の結果、完形に近く復原できたが、破片は、浮いた状態で出土している。

覆土 1. 暗褐色土層

5. ローム粒主体茶褐色土層

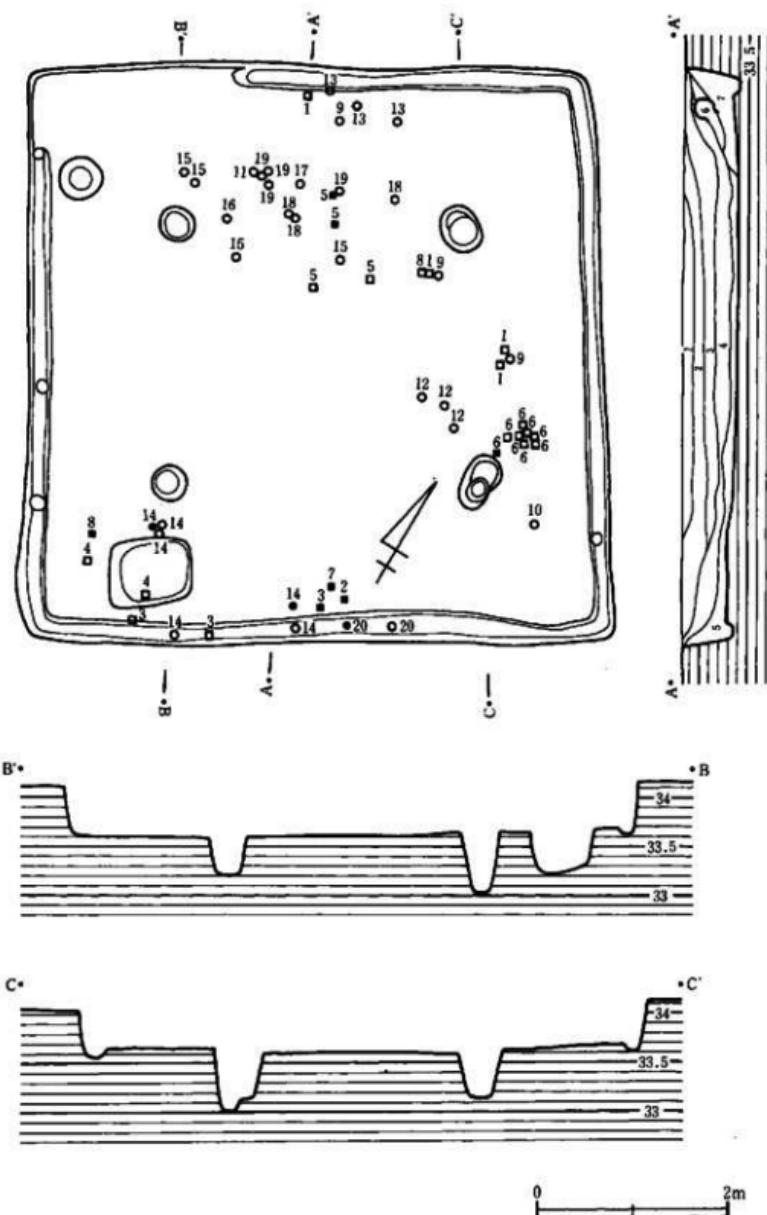
2. 褐色土層

6. 焼土粒混褐色土層

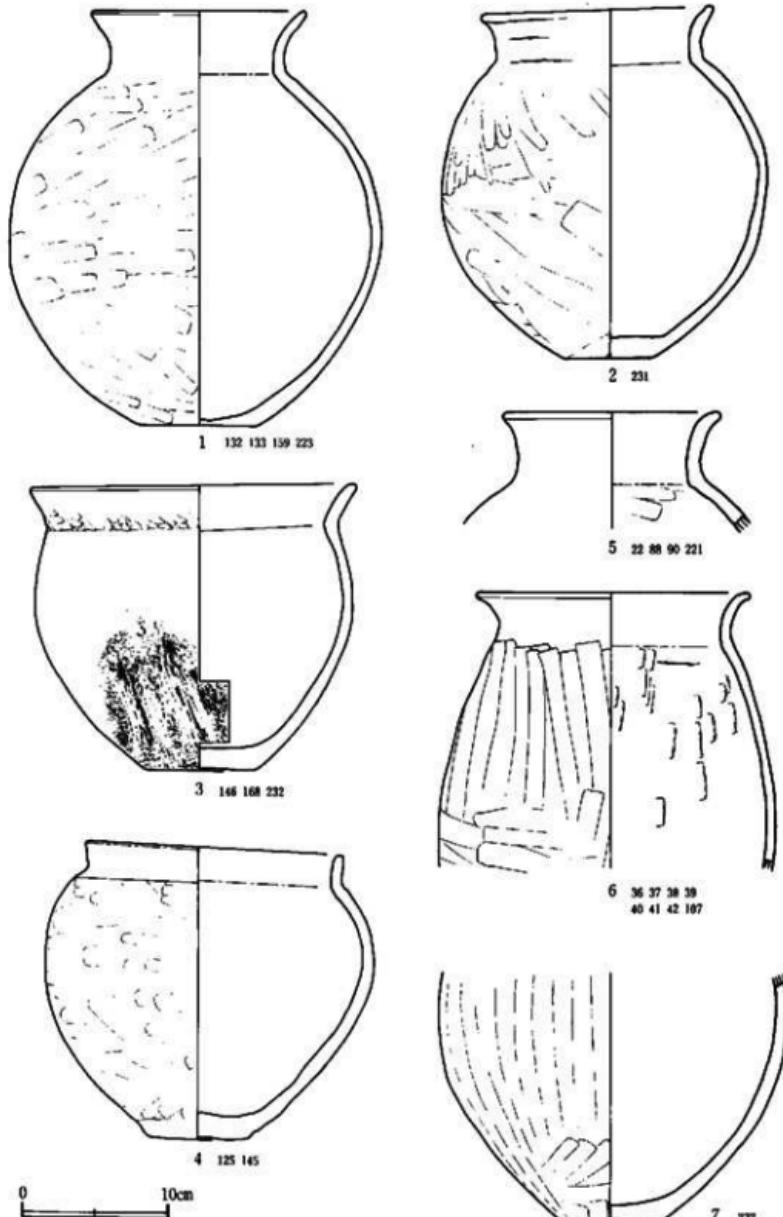
3. 黒色土層

7. 焼土塊混赤褐色土層

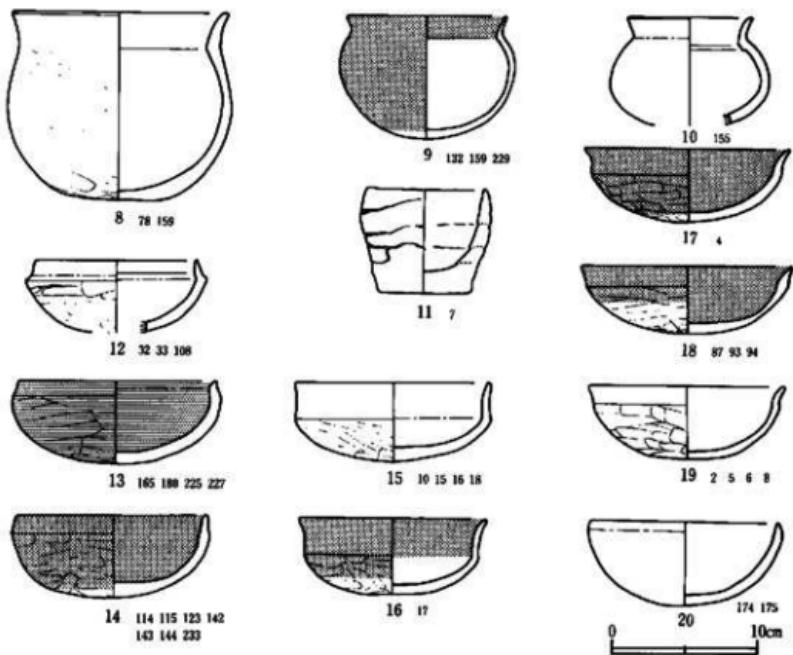
4. スコリア混黑色土層



第193図 第32号住居跡遺構図・遺物位置図



第194図 第32号住居貯藏物実測図(1)



第195図 第32号住居跡遺物実測図(2)

第53表 第32号住居跡土器観察表

器種 No.	法寸 (mm)							成形・調整					出土状況 (床面～) (cm)	備考
	器高	口幅	底幅	厚さ	造存度	焼成	色調	胎土	内	口ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ		
1 盆	280	143	89	256	ほぼ完	良	赤褐色	密	内	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ	+12.2～+46.8	内口に剥離あり
2 奉	235	155	59	220	光	やや不良	褐褐色	粗	内	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ	+1.2	
3	?	190	219	75	218	ほぼ完	良	黄褐色	粗	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ	+2.3～+35.9	
4	?	195	170	69	227	口縁下部 底はば完	赤褐色	やや 難	内	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ	+5.7～+7.6	
5 盆	?	141	?	?	口縁光	やや不良	淡黄褐色	やや 難	内	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ	+1.5～+8.8	
6 盆	?	181	?	224	脚上部 までは び完成	良	暗褐色	密	内	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ	-0.5～+14.0	内脚上端に剥離痕 あり
7	?	?	?	66	?	脚下部 のみ	やや不良	内明褐色 外暗褐色	内	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ	+2.3	
8 盆	128	145	-	154	口縁 体	良	暗褐色	密	内	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ	-0.1～+46.8	
									外	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ		
									外	ヨコナダ	脚ナダ	底ナダ		

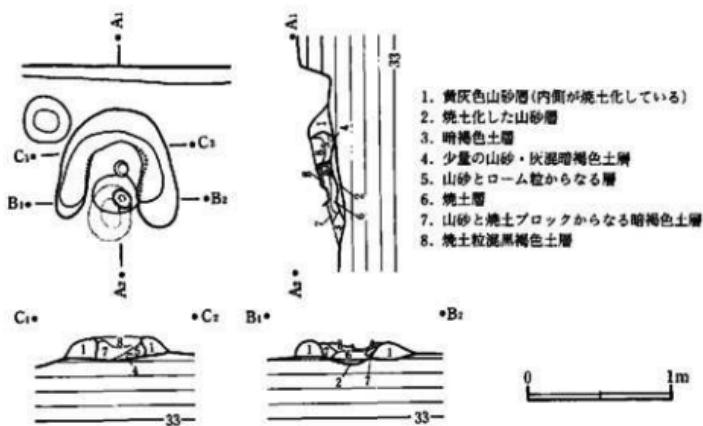
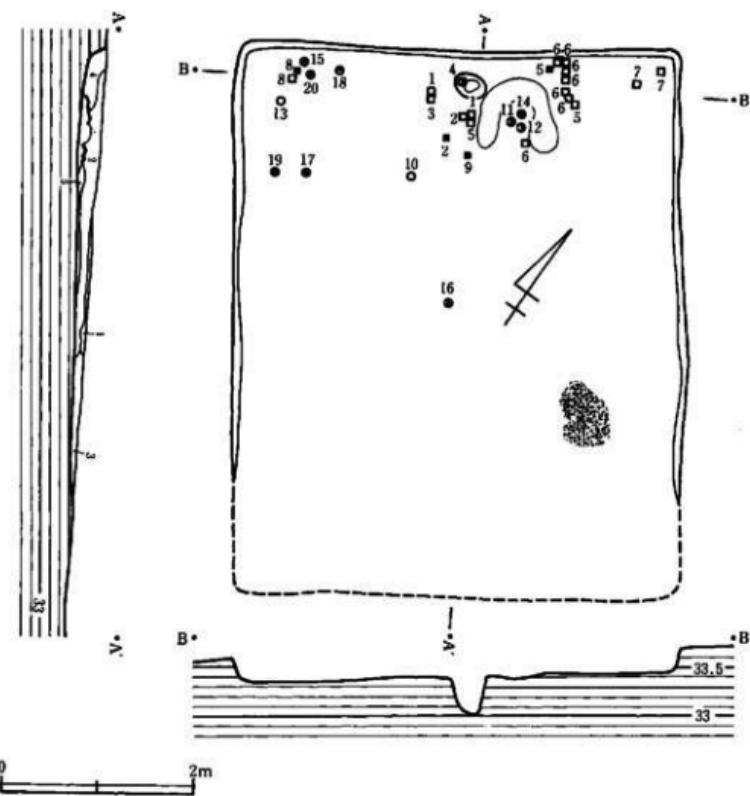
さ し か い 数	部 位	法 量 (mm)			遺存度	成 分	色 調	地 土	成 形・溝 跡				出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考	
		基 高	口 縁 幅	底 幅					内 口	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ			
9	増	84	110	—	123	はび光 真	地:暗赤 白:黄 母:	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+12.7～+46.8	内LJ、外全面赤形	
10	"	?	84	?	111	% やや不良	赤:褐色 色:黒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+11.2	
11	千 程	70	81	66	91	% ア	暗褐色 やや 肥	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+32.2	輪郭部をハッキリと残す	
12	16	?	110	?	124	% 良	暗褐色 色:黒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+3.7～+10.8	外側上部に輪郭部あり
13	"	54	135	—	144	% ア	地:深赤 褐色 長石粒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+12.2～+14.5	内外全面赤形
14	"	55	130	—	135	はび光 やや不良	暗褐色 色:黒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	-2.5～+12.2	"
15	"	52	134	—	137	L 体 % %	良	酒赤褐色 %	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+14.2～+45.7	
16	"	51	128	—	121	% ア	明褐色 地:暗褐色 長石粒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+15.0	内口赤形
17	"	50	140	—	131	はび光 ア	地:暗褐色 色:暗褐色 長石粒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+22.2	内外全面赤形
18	"	45	145	—	139	% ア	地:暗褐色 色:暗褐色 長石粒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+3.5～+6.2	内全面 外口赤形
19	"	48	133	—	129	はび光 ア	明褐色 地:暗褐色 色:暗褐色 長石粒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+31.8～+41.7	
20	"	56	129	—	—	口縁 体形%	やや不良 地:暗褐色 色:暗褐色 長石粒	密	内 外	口 ノ ハ ラ シ テ ク ス	コ ナ デ	横 テ ク ス	ア ク シ テ リ ン ギ キ	+4.3～+5.8	内全面、外口～網 上半赤形

第33号住居跡 (037) (第196～198図 第54・55表)

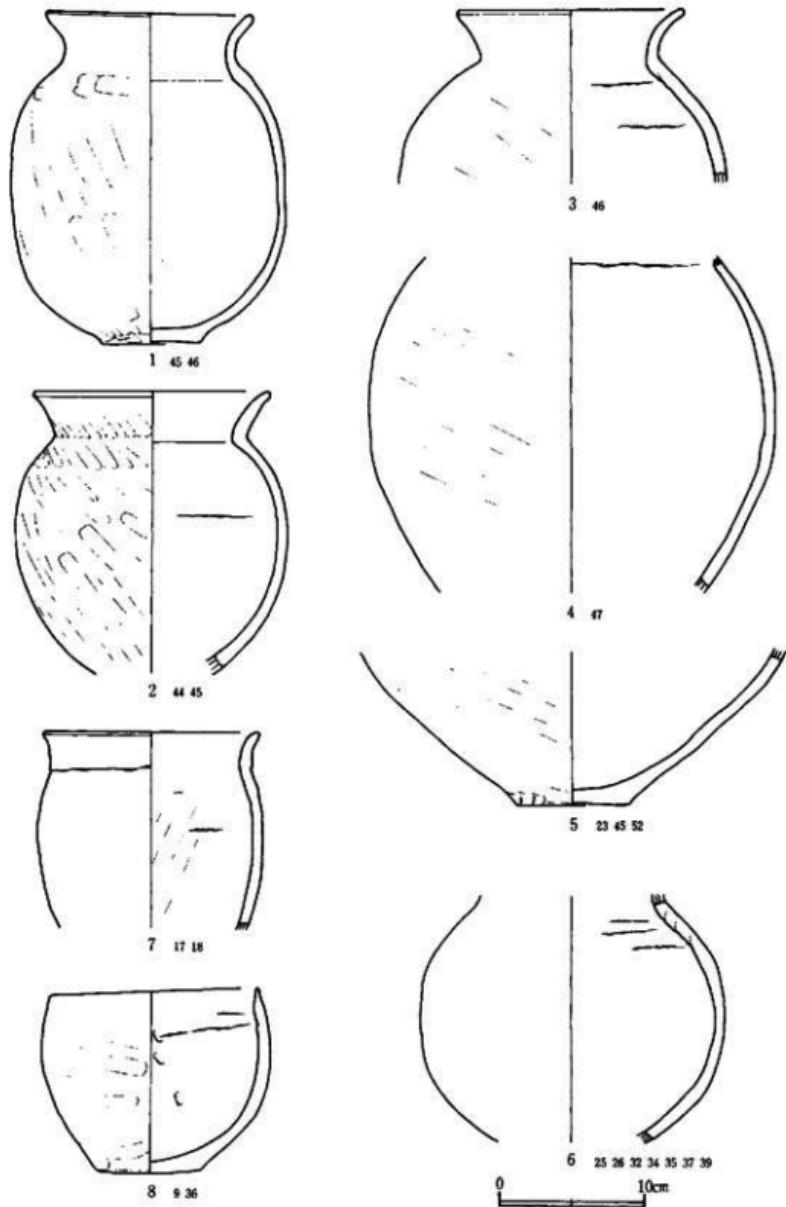
検出状況 本住居跡は、第27号住居跡の東に接する。立地は、台地の斜面である。床面の標高は、33.40mである。遺構の遺存状況は、斜面のために、南東側がのこっていない。覆土は、北西から南東へ、斜面の上方から下方へ向って埋まっていった様子を示す。

形状・規模 平面形態は、長方形と思われる。長さのはっきりした北西辺は4.6mである。北東辺は4.8m以上、南西辺は4.6m以上である。主軸の方位は、N-35°-Wである。壁は、高さが15～25cmあり、床面から上ひろがりに立ち上がる。

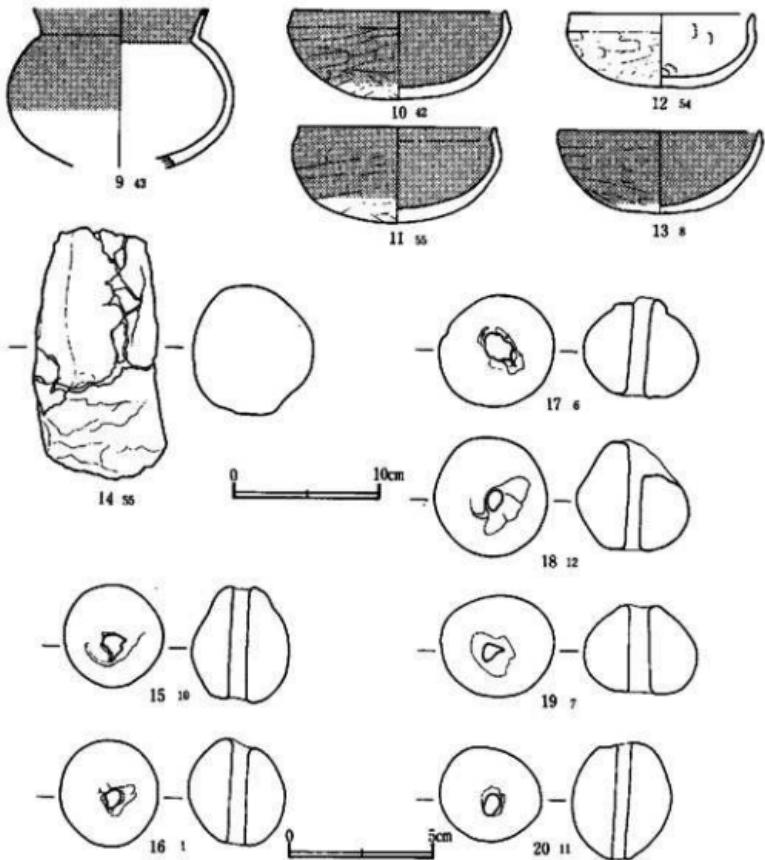
床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床はおこなっていない。



第196図 第33号住居跡遺構図・遺物位置図（上）・カマド実測図（下）



第197図 第33号住居跡遺物実測図 (1)



第198図 第33号住居跡遺物実測図 (2)

ピット 北西壁の中央、カマドの左脇に1つみつかった。径23~35cm、深さ38cmである。

カマド 北西壁の中央よりやや東寄りに位置し、壁から約30cm離れている。黄灰色の山砂を主とし構築されている。煙道をつくるためのローム壁への掘り込みはなく、左右の袖部のがびて逆U字形にまわっている。その内壁は全体にオーバーハングしていて、赤く焼けていたが、奥壁や袖部の一部は、内壁だけでなく、上面も赤く焼けていた。火床の位置は、はっきりとつかめる。焚き口から火床にかけて、浅いくぼみがあって、それを埋めている。火床の奥壁寄りのはずれで、土製支脚が直立して出土した。

炉 東隅近くに、炉跡と思われる焼土溜まりがみつかった。焼土の下に暗褐色土が貼られていて、へこみになっていた。

遺物出土状況 接合の結果、完形に近く復原できた1の土師壺と8の土師鉢は、床面からやや浮いた状態で破片が出土し、同じく12の土師壺は、カマドの中に落ち込んだ状態で、出土した。15~20の土玉は、北隅に集中するかたちで、床面から6cm以上浮いて、覆土中から出土した。

- 覆 土 1. ローム粒混暗褐色土層
 2. ローム粒、少量のロームブロック混黒
 3. ローム粒、ロームブロック混黄褐色土
 4. 山砂、ローム粒混暗褐色土層
 5. 暗褐色土層

第54表 第33号住居跡土器観察表

記 号	基 礎 種 類 名	出 土 高 (mm)			底 面 形 状	底 面 質 地	底 面 構 造	底 面 成 分	底 面 色 調	底 面 施 工	成 形 ・ 装 飾					出 土 状 況 (底 面 ~ (cm))	備 考		
		口 部 高 度	底 部 高 度	側 面 高 度							内 部 形 状	外 部 形 状	内 部 施 工	外 部 施 工	内 部 色 調	外 部 色 調			
1	壺	225	140	68	190	ほぼ完	風	内底褐色 外赤褐色 黒斑あり	やや粗 粒	内 外	ヨコナダ H	四 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+3.8~+13.0			
2	X	?	161	?	189	底部を 剥さば は完	X	内底褐色 外赤褐色 黒斑あり	やや粗 粒 右	内 外	H H	ナ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+1.3~+3.8			
3	壺	?	153	?	?	口縁部 光 剥 上部 完	X	内底褐色 外赤褐色 黒斑あり	密	内 外	H H	ナ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+8.0	内面に修理痕を残す		
4	X	?	?	?	282	剥 少	X	淡黃褐色	X	内 外	網 H	ナ ナ ヘラナダ	テ ナ ヘラナダ	高 ナ ヘラナダ	ナ ヘラナダ	-5.0~+37.6	内面は使用により 削除		
5	X	?	?	76	?	剥下部 X	X	淡赤褐色	X	内 外	H H	ヘラナダ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	一 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+2.7~+11.3			
6	壺	?	7	?	7	219	剥下部 み元	やや不 均	暗褐色 粗粒 粗石	内 外	H H	ヘラナダ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラナダ	一 ナ ヘラナダ	ナ ヘラナダ	+57.2~+98.0	内面修理痕を残す		
7	X	?	146	?	159	底部欠 少	X	内赤褐色 外赤褐色 を基底黒 底多し	内 外	口 内 外	ヨコナダ H H	四 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+6.4~+8.7	中央部に修理痕を残す		
8	鉢	122	143	73	159	ほぼ完	X	赤褐色を 基調 黒斑あり	X	内 外	H H	高いヘラナダ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+2.4~+15.0			
9	壺	?	?	?	?	156	口縁部 底盤を 剥さば は完	X	地は淡赤 褐色	#	内 外	H H	ヨコナダ H H	ナ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+1.6	内口、外全周赤
10	壺	60	148	-	151	%	やや不 良	地は淡赤 褐色	#	内 外	H H	ヨコナダ H H	ナ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	+26.2		
11	X	65	136	-	145	TM26 体斜% %	X	地は淡赤 褐色	#	内 外	H H	ヨコナダ H H	ナ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	テ ナ ヘラケズリ 後 ナダ	高 ナ ヘラケズリ 後 ナダ	ナ ヘラケズリ 後 ナダ	一括	内外赤	

記号	種類	法 質 (cm)				遺存度	成 形	色	調	土 上	成 形・調 積				出 土 状 況 (床 面 ~) (cm)	備 考	
		標高	口 横	底 横	側 横						内	口	コ ナ デ	調	テ		
12	环	50	126	—	—	130	ほぼ完	良	赤褐色	密	内	口	コ ナ デ	調	テ	デ	カマド内一部
13	—	57	136	—	—	—	—	—	—	密	内	口	ヘラケズリ	ナ	デ	—	+13.5 表示
										層	外	口	ヘラケズリ	ナ	デ	—	遺跡にヘラによる 状況

第55表 第33号住居跡土製品観察表

記号	器種	法 質				遺存度	成 形	色	調	土	せ い け い	出 土 状 況 (床 面 ~) (cm)	備 考	
		標高(cm)	奥高(cm)	孔径(cm)	壁厚(cm)									
14	上部支脚	102	166	—	—	1045	圓錐形	二段焼成	茶褐色	粗砂粒	—	—	カマド一部	—
15	柱上部	34	39	6	37.6	充	良	暗茶褐色	粗	砂粒	表面によるナダ	+8.9	15~20表面ケズリ→ナダ	—
16	#	33	33.5	6	33.6	#	#	#	#	#	#	+9.0	—	—
17	#	40	34	10	40	#	#	#	#	#	#	+17.1	—	—
18	#	39	35	5	45.2	#	#	#	#	#	#	+5.9	—	—
19	#	34~38	30	7	35.0	#	#	#	#	#	#	121.6	—	—
20	#	34	39	5	39.5	#	#	#	#	#	#	+8.0	—	—

第34号住居跡 (038) (第199・200図 第56・57表)

検出状況 本住居跡は、第31号住居跡の南東30mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、34.10~34.20mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。床面からは、炭化材、焼土の出土が目立った。

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺5.3~5.5mである。主軸の方位は、N-34°Wである。壁は、高さが26~31cmで、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

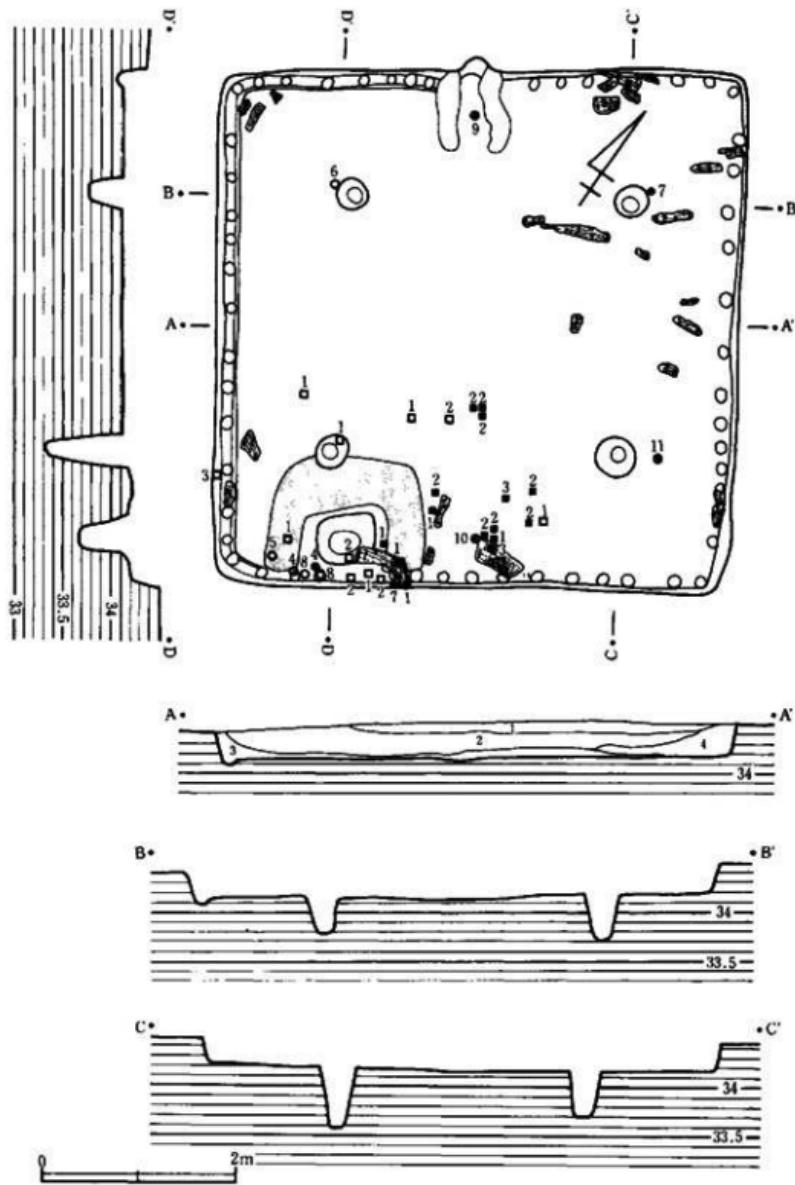
床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。柱穴で囲まれた住居跡中央部は、踏み固められて堅緻である。南隅近くの貯蔵穴のまわりに、逆U字形に、土手状の高まりが、削りのこされている。幅35~52cm、高さ1~4cmである。

壁溝 北西壁の西側から南西壁にかけて、カマドの下からめぐる。幅12~18cm、深さ1~5cmで、断面は逆U字形である。

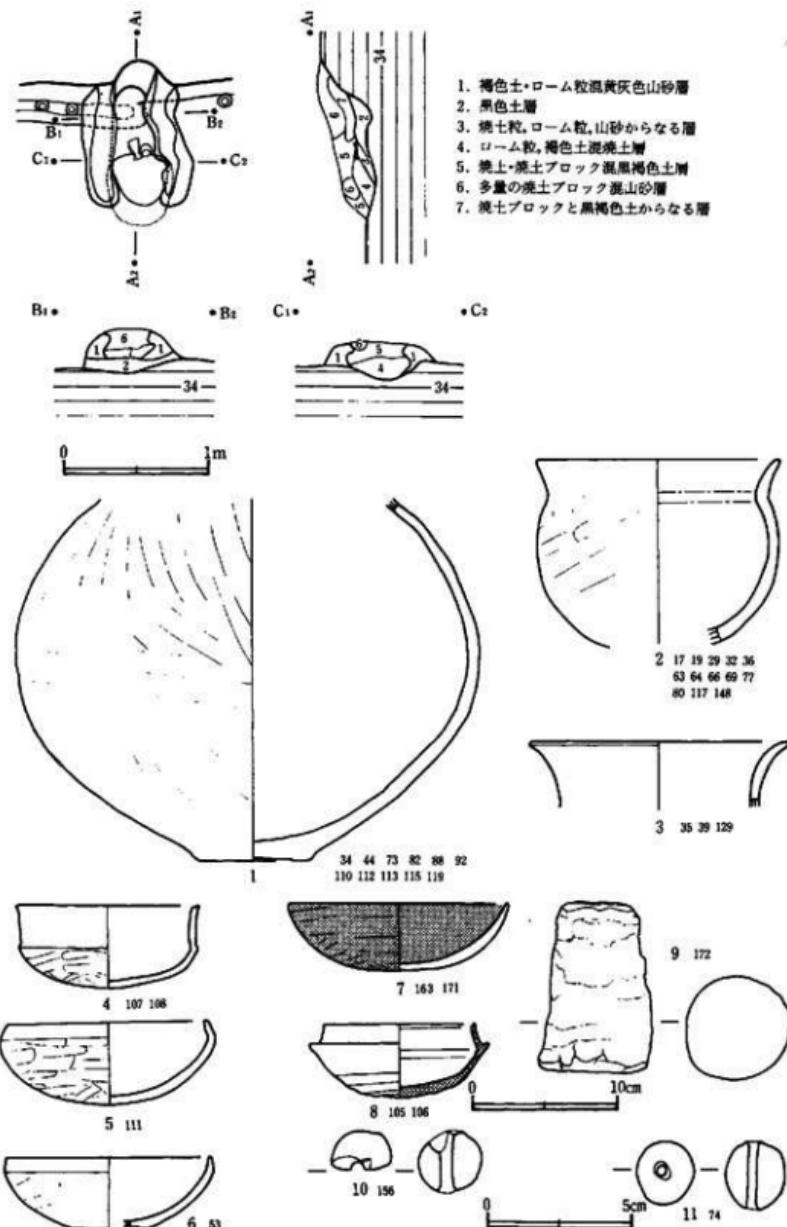
壁柱穴 カマドの部分をのぞいて、ぐるりとめぐっている。合計55個である。間隔は、ほぼ等しい。径9~15cm、深さ3~11cmである。

柱穴 4つある。それぞれ対角線上に位置する。径33~40cm、深さ36~86cmである。西侧の柱穴がひどく浅い。

貯蔵穴 南隅のすぐ東にある。平面形態は、長方形である。口の大きさは、50cm×63cm、深さ53cmである。床面のところで述べたように、土手が取り囲む。底は平らで、覆土は、底の方から、粘質褐色土、炭化物混黒褐色土、炭化物混暗褐色土の順で堆積していた。



第199図 第34号住居跡遺構区・遺物位置図



第200図 第34号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）

カマド 北西壁の中央に位置し、褐色土ローム粒混黄灰色の山砂を主として構成されている。ローム壁を、幅44cm、奥行き17cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。焚き口から火床にかけて床がへこんでおり、そのへこみの奥側からローム壁の煙道の立ち上がりにかけて土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。火床のすぐ奥側で、土製支脚が、直立して出土した。

遺物出土状況 床面からは、土玉2点が出土した。5の土師壺は、床面の土手の上面から少し浮いて完形で出土した。4の土師壺の破片も床面から少し浮いて出土した。8の須恵壺の破片は、床面より8cm以上浮いて出土した。

覆 土

1. 暗褐色土層
2. スコリア混黒色土層

3. スコリア混茶褐色土層

4. 褐色土層

第56表 第34号住居跡土器観察表

番 号	種 類	法 量(cm)			造作度	施 工	成 色	調 査	成 形・調 査	出 土 状 況 (底面~) (cm)	備 考
		母 口 高 度	口 幅 径	底 径							
1	壺	?	?	74	316	剥離5%	不 規 則	内 外 褐 色 無 色	中 や 粗 粒 沙 粒	内 外 圓 形 ナ ギ テ 底 ナ ギ	+1.5~+2.3
2	小 型 壺	?	166	7	169	口幅5% 剥 離	良	赤 褐 色	や や 不 良 質 地	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	-12.0~+18.0 内使用により剥離
3	壺	?	177	?	174	口幅5% 剥 離	や や 不 良	褐 色	密 密 石 灰 粒	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	4.8~+12.2 内外剥離
4	壺	59	125	-	123	ほぼ完 成	良	褐 色	密 内 外 剥 離 有 り	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	+1.2~+3.5
5	"	56	137	-	148	光	"	褐 色	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	+3.5
6	"	49	141	50	144	%	"	地 下 色	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	+4.4
7	"	44	150	-	-	%	"	内 外 赤 褐 色	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	+1.5、カマド 内外剥離
8	須 恵 壺	58	135	125	126	ほぼ完 成	"	褐 灰 色	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	内 外 口 コ ナ グ リ 底 ナ ギ	+7.7~+10.5

第57表 第34号住居跡土器製品観察表

番 号	種 類	法 量			造作度	施 工	成 色	調 査	セ イ レ ジ	出 土 状 況 (底面~) (cm)	備 考
		母 口 高 度	口 幅 径	底 径							
9	土製灰瓦	75	120.5	-	650	光	2次焼成	内 外 褐 色	絆 砂 粒		+1.1 外裏にヒビ割れ
10	土 玉	?	20.5	?	4.5	%	良	褐 色	内 外 圓 形 ナ ギ	内 外 圓 形 ナ ギ	-0.2 骨孔部から半折
11	"	19.5	20	4	8.8	光	"	褐 色	内 外 圓 形 ナ ギ	内 外 圓 形 ナ ギ	+2.7 一部表面に覗れ

第35号住居跡（039）（第201～203図 第58・59表）

検出状況 本住居跡は、第34号住居跡の北東20mに位置する。立地は、台地の平坦面上で、最も高い尾根上の背にあたるところである。床面の標高は、34.00mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形であるが、東隅が出張っている。北と西の辺が6.2mで、東と南の辺が6.5mである。主軸の方位は、N-25°-Wである。壁は、高さが55～62cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。全体に、踏み固められて堅緻である。

壁溝 カマドの下をのぞき周囲している。幅15～29cm、深さ3～13cmで、断面は、U字形ないし逆台形である。

柱穴 4つみつかった。それぞれ対角線上に位置する。南東と北西のものは、底近くで段がついている。径50～77cm、深さ64～86cmである。

貯藏穴 カマドの右側、住居跡の北東隅近くにある。平面形態は、長方形である。口の大きさは、65cm×99cm、深さ56cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、黒色土、褐色土が、ほぼ同じ厚みで堆積していた。

カマド 北壁の中央に位置し、山砂によって構築されている。ローム壁を、幅55cm、奥行き30cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。焚き口から火床にかけて、ゆるいくぼみがある。天井部がのこり、掛け口の位置もわかる。左脇から土製支脚が2点出土している。

遺物出土状況 カマドの左右の脇から完形に近い土器がかたまって出土した。4の土師壺、6の土師瓶は、ともに完形で床面から出土した。5の土師壺、7・8の土師壺は、浮いた状態ながら完形ないし完形に近いかたちでの出土である。

覆土 1. 焼土層

4. スコリア混黑色土層

2. 黒色土層

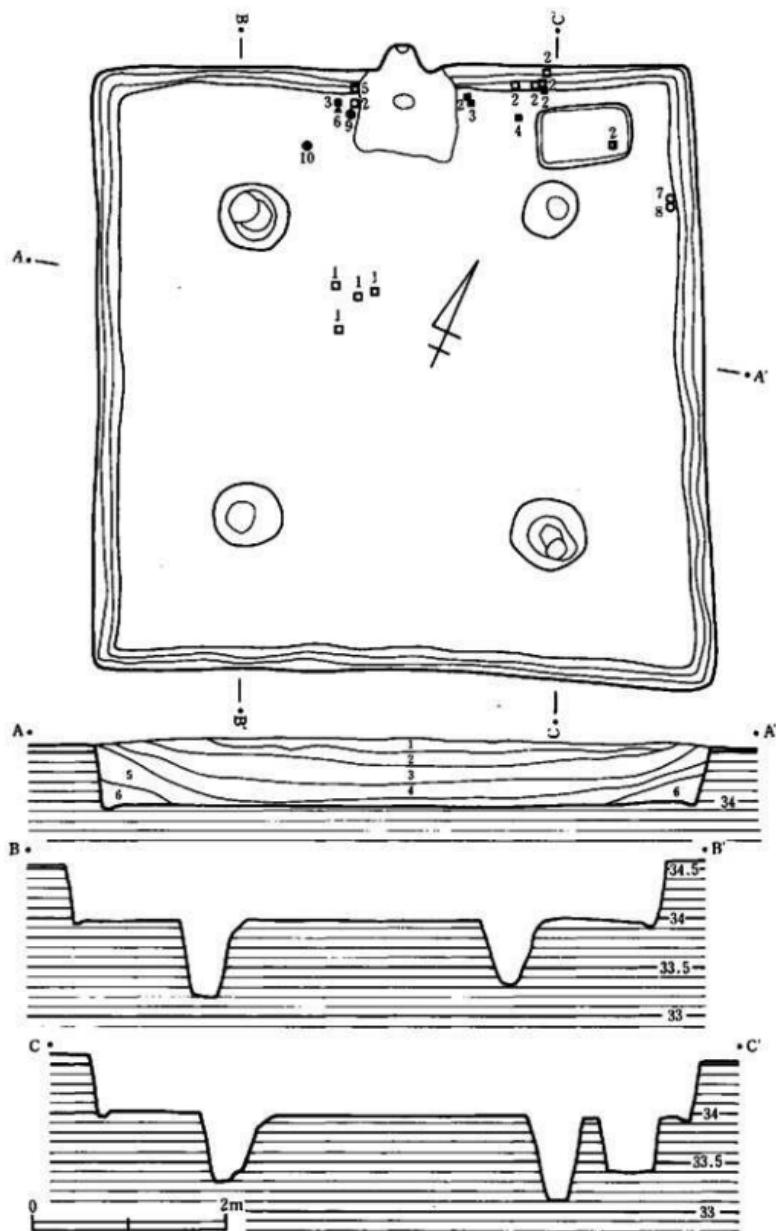
5. スコリア混黄褐色土層

3. 褐色土層

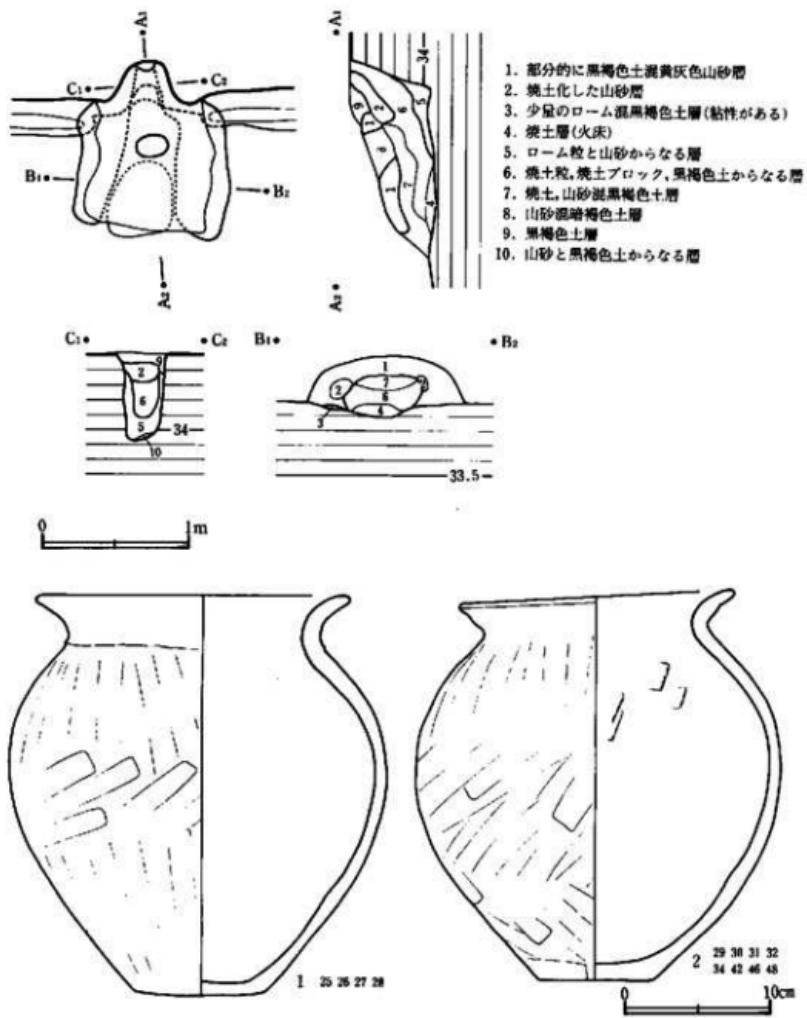
6. 黒色土層

第58表 第35号住居跡土器観察表

さく	場所	法寸 (mm)				遺存層	成形	色調	胎土	成形・実験				出土状況 (体高～) [cm]	備考
		基盤	口縁	底盤	側面					内	外	内	外		
1	東	270	205	90	257	%	丸	淡褐色	黒 石	内 ヨコナダ	内 ヘラナダ	内 ヨコナダ	外 ヘラナダ	+3.8～+7.0 外壁使用により削薄	
										外 ヨコナダ	外 ヘラナダ	外 ヨコナダ	外 ヘラナダ		
2	東	261	186	76	249	%	丸	暗褐色	黒 石	内 ヨコナダ	内 ヘラナダ	内 ヨコナダ	外 ヘラナダ	+0.4～+26.2 貯藏穴	
										外 ヨコナダ	外 ヘラナダ	外 ヨコナダ	外 ヘラナダ		

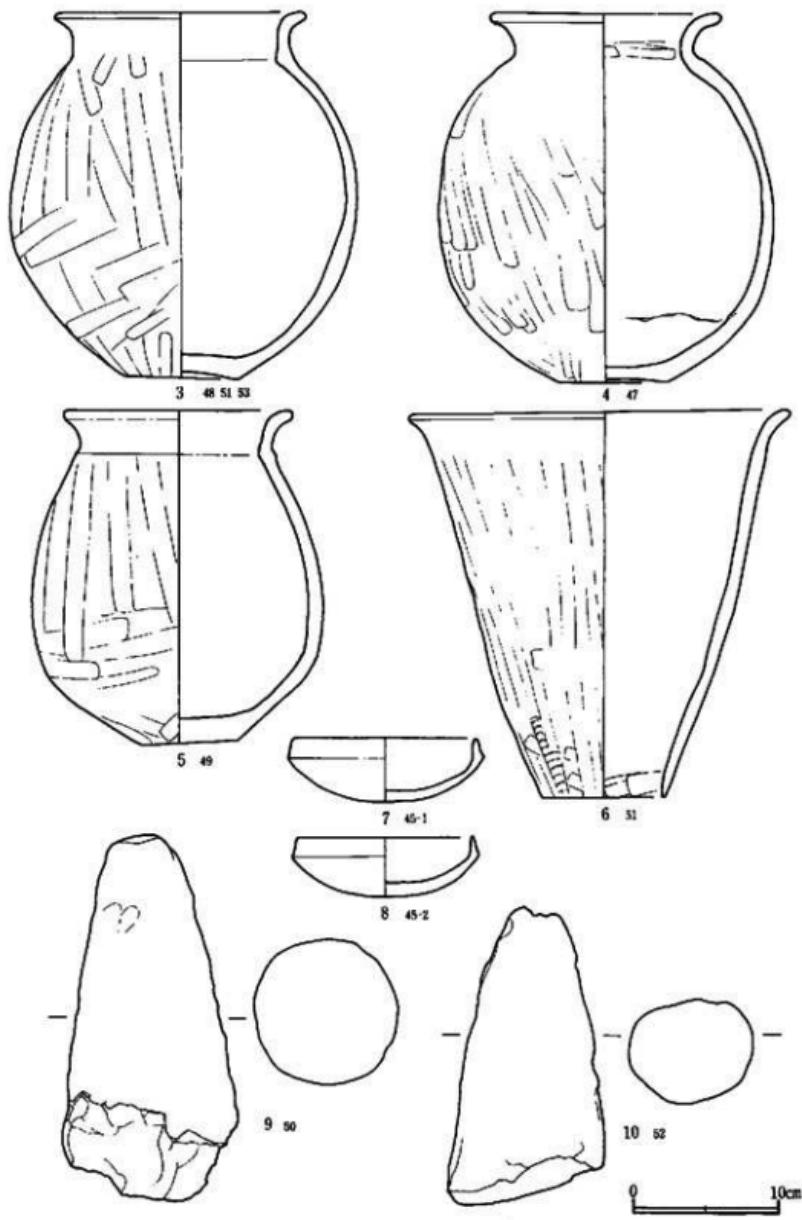


第201図 第35号住跡遺構図・遺物位置図



第202図 第35号住居跡カマド実測図(上)・遺物実測図(下)(1)

記号	品種	法量(mm)				透存度	焼成色	調査土	成形・調量						出土状況 (深さ～)(cm)	備考	
		高さ	幅	奥行	側面				内	外	ヨコナダ	網	ヘラナダ	底	ヘラナダ		
3	瓦	251	162	76	236	ほぼ完	良	横褐色 無磁石	内	外	ヨコナダ	網	ヘラナダ	底	ヘラナダ	+0.4～+2.1	
4	×	249	151	75	231	光	×	横褐色	内	外	×	×	ヘラナダ	×	×	-0.4	内面剥離痕あり



第203図 第35号住居跡遺物実測図 (2)

名 称	法 量 (m)	高 度 (m)	底 部 幅 (m)	底 部 厚 (m)	遺 存 度	施 成 形	色 調	施 上 土	成 形 ・ 調 整					出 土 状 況 (底 面 ～) (cm)	備 考
									内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ		
5 墓	224	166	65	200	ほぼ完 成	良	棕褐色	土	内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ	+18.0	
									内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ		
6 墓	260	255	82	—	完 成	良	黄褐色	土	内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ	+2.0	
									内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ		
7 墓	43	127	—	137	良	良	地帶褐色	土	内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ	+10.1	内全面、外口半周 修理
									内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ		
8 墓	40	123	—	129	良	良	棕褐色	土	内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ	+10.1	良
									内 外	コ ナ ダ	鋼 ナ ダ	テ ナ ダ	底 ナ ダ		

第59表 第35号住居跡土製品観察表

名 称	法 量 (m)	高 度 (m)	底 部 幅 (m)	底 部 厚 (m)	遺 存 度	施 成 形	色 調	施 上 土	せ い け	レ イ	出 土 状 況 (底 面 ～) (cm)	備 考		
9 土製灰瓦	118	250	—	1860	ほぼ完 成	二二次成 形	褐 色	砂 粒	—	—	—	—	+2.1	
10	—	165	292	—	?	燒土、瓦 割欠	—	—	—	—	—	—	+0.1	実測後の破損により多少不明

第36号住居跡 (040) (第204~207図 第60・61表)

検出状況 本住居跡は、第35号住居跡の南17mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、33.90~34.00mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。南隅の床面上で粘土塊が出土した。

形状・規模 平面形態は、正方形である。カマドのある北辺が短く5.1mで、のこる3辺は5.2~5.3mである。主軸の方位は、N-25°-Wである。壁は、高さが50~60cmあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 ハードロームを半らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。南北隅では、柱穴にかかって、焼土の堆積がみられた。カマドと向い合う位置にある副柱穴の北側に、逆U字形に、一段高く土手状に削りのこしたところがみつかった。幅31~35cm、高さ3~5cmである。

壁 溝 カマドの下を含めて全周している。幅12~22cm、深さ3~13cmで、断面はU字形である。

柱 穴 主柱穴が4つ、副柱穴が一つみつかった。主柱穴4つは、それぞれ対角線上に位置する。径42~63cm、深さ46~54cmである。副柱穴は、カマドと向い合う位置にあり、主柱穴の並びから少しずれる。径33~38cm、深さ23cmである。

貯藏穴 カマドの右側に、柱穴と接してある。平面形態は、円形である。口の大きさは、径56~62cm、深さ40cmで、底は丸底である。覆土は、底の方から、粘性に富んだローム粒主体の黄褐色土、ローム粒とロームブロック主体で黑色土混黄褐色土、ローム粒とロームブロック混黒褐色土、ローム粒混暗褐色土の順で堆積していた。柱穴の掘り方を切断して掘られている。

カマド 北壁中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅34cm、奥行き11cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床にあたるところが、へこんでいる。このへこみの奥寄りから煙道の立ち上がりにかけて、土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであった。中に横たえて置かれた状態で、4と5の土師甕が出土している。中と左脇の北壁際から、土製支脚が1点ずつ出土した。

遺物出土状況 床面からは、3の土師小型甕が北東隅から、10の土師甕が北東隅のやや南寄りから、12の土師甕がカマドの右脇から、14の土師高坏が、10の土師甕よりさらに少し南から、15の土師高坏が、カマドの左脇の北壁際から、16・17の土師坏が、14の土師高坏の少し北から、18と19の土師坏が、カマドの左脇の北壁際から、完形ないしそれに近い状態で出土した。このほか浮いた状態ながら、2の土師甕は、ほぼ完形で出土した。このほか、破片を接合した結果、完形あるいはそれに近く復原できたものに、7の土師甕、8の土師甕、13の土師高坏がある。

覆 土 1. 上部に焼土混、少量のローム粒混黒褐 4. ローム粒混黒褐色土層

色土層 5. 多量のローム粒混暗褐色土層

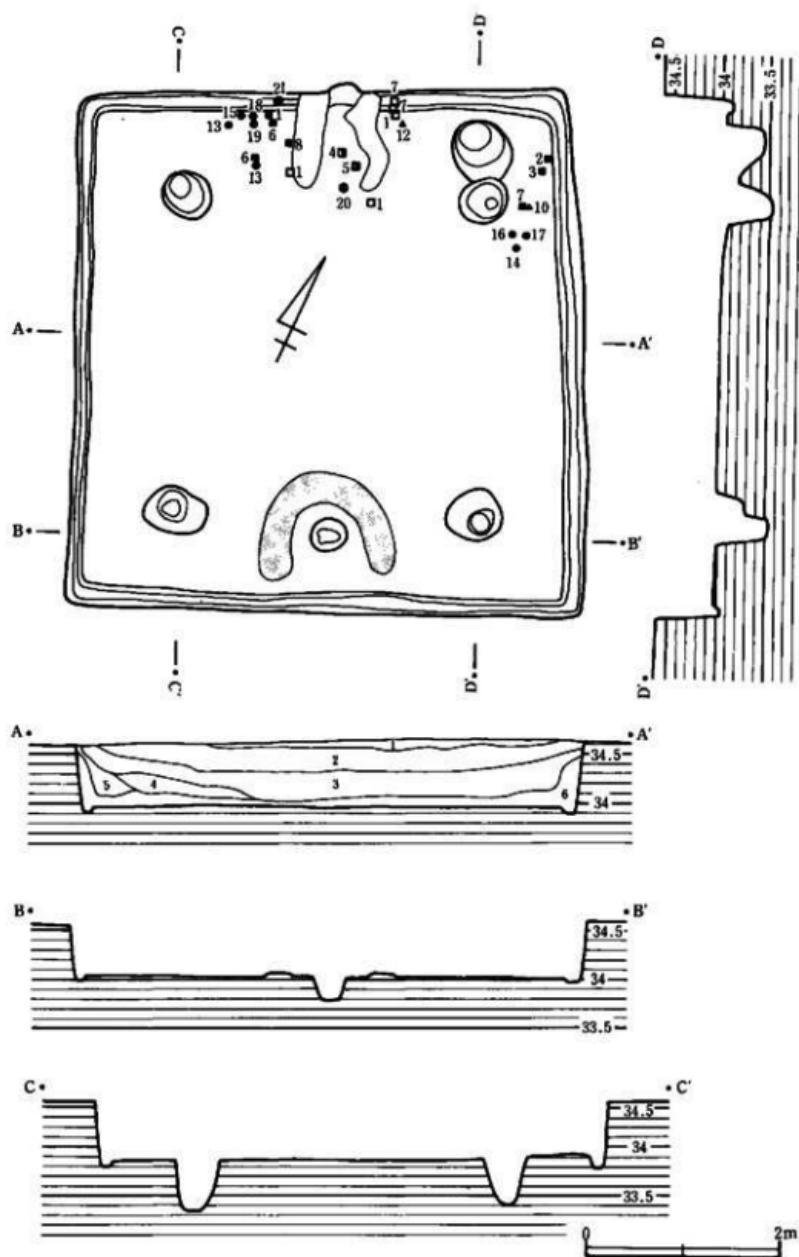
2. 褐色土、ローム粒混暗褐色土層 6. ローム粒と褐色土からなる黄褐色土層

3. ローム粒、少量の褐色土ブロック混暗

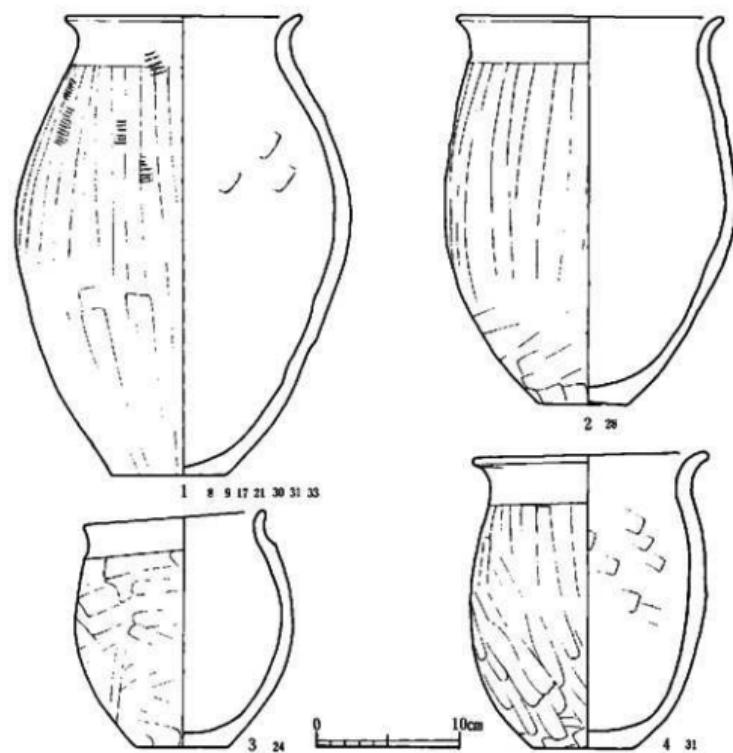
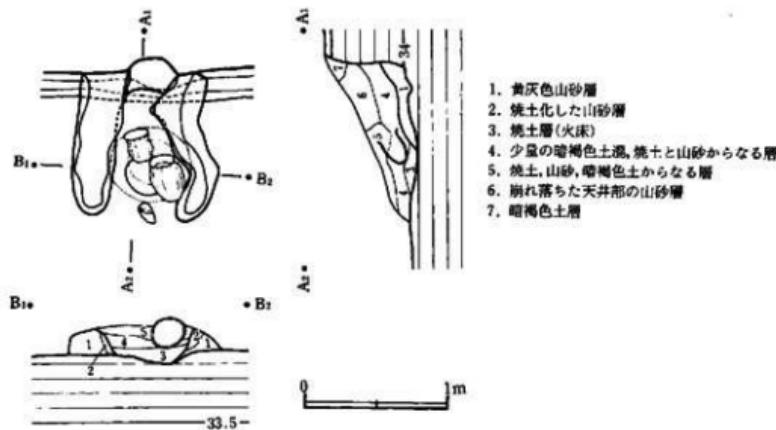
褐色土層

第60表 第36号住居跡土器観察表

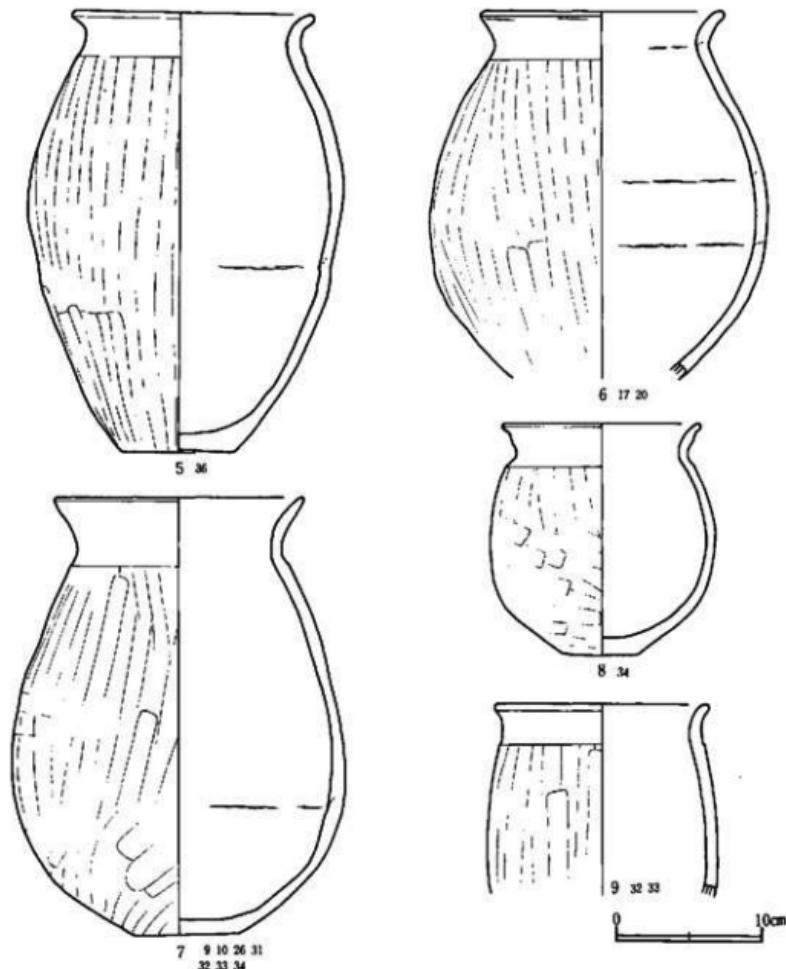
番 号	器 種	法 量 (mm)				透 視 度	組 成	色 調	地 上	成 形・調 整					出 土 状 況 (床 面 ←) (cm)	備 考		
		器 高 度	底 径	底 厚	側 厚					内 口	コ ナ グ	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ			
1	甕	318	159	78	231	ほぼ完	良	暗褐色	密	内 口	コ ナ グ	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	カマド +0.3～+21.7		
2	＝	263	180	62	203	〃	〃	灰褐色	やや相 長	内 口	〃	丁寧なナゲ	内 口	コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	+6.4	
3	小型 甕	157	123	63	152	光	〃	明褐色	やや相 長	内 口	〃	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	内 口	+2.0	
4	甕	200	157	76	164	〃	やや不良	浅褐色	密	内 口	〃	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	内 口	カマド内	
5	＝	298	162	77	225	〃	良	黄褐色	やや相 長	内 口	〃	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	内 口	カマド内	
6	＝	?	165	?	235	（底 膨大）	〃	内 側 膨 化 の 傾 向 有 る。	密	内 口	〃	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	内 口	+6.3～+2.0	
7	＝	295	169	70	228	ほぼ完	〃	明褐色 褐褐色	〃	内 口	〃	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	内 口	カマド内 +8.6～+28.7	
8	小型 甕	159	132	52	153	〃	〃	暗褐色	〃	内 口	コ ナ グ	内 コ ハ タ チ	外 コ ナ グ	内 口	コ ナ グ	内 口	一括	



第204図 第36号住居跡遺構図・遺物位置図

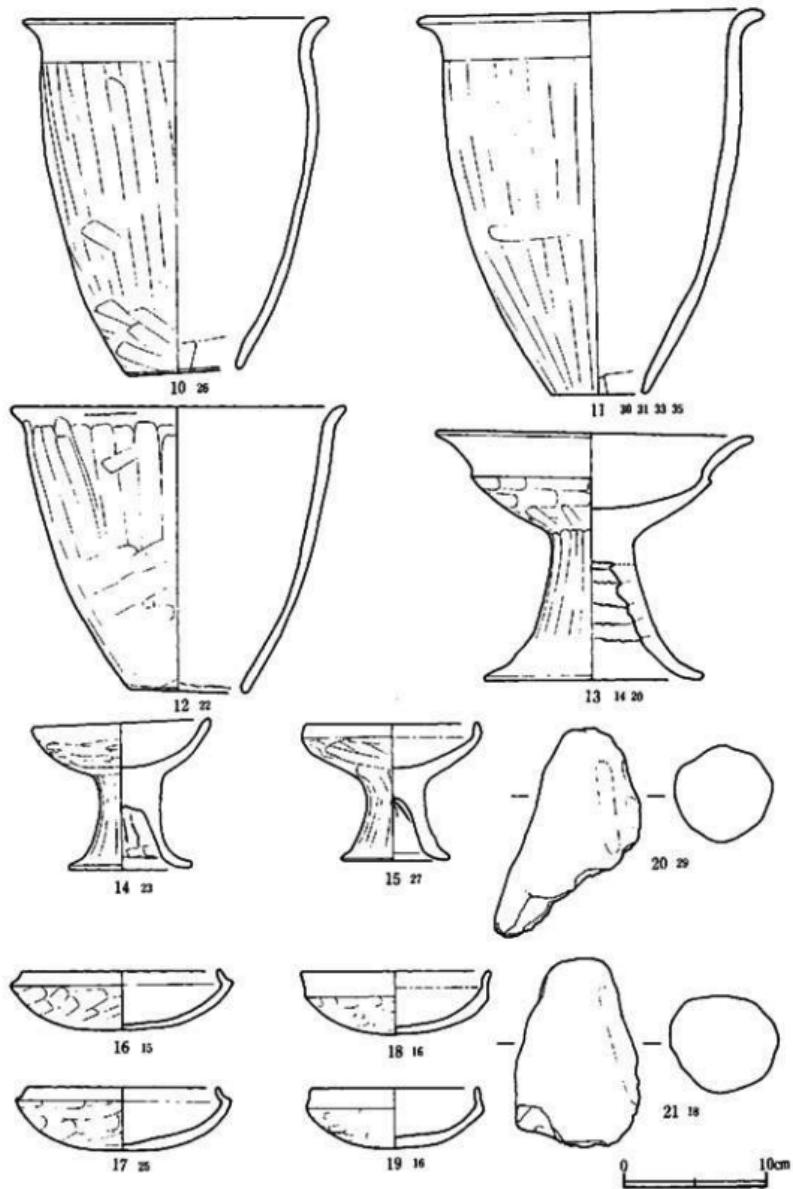


第205図 第36号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第206図 第36号住居跡遺物実測図 (2)

器 種	法 式	法 式 (mm)				透 明 度	模 成	色 調	細 子	成 形・底 盤				底 状 況 (底 面 ~) (cm)	備 考	
		基 高	口 幅 径	底 幅 径	側 厚					内	口	リコナフ	内	ナ ダ		
9 甕	?	144	?	157	透 明 度 (透 明 度)	中 や 不 良	模 成	暗 褐 色	密	内	口	リコナフ	内	ナ ダ	一 様	一 様
										外	口	口	口	ヘラケズリ		
10 甕	?	247	212	72	透 明 度 (透 明 度)	良	模 成	内 法 暗 色	密	内	口	口	口	ヘラナダ	+0.6	一 様
										外	口	口	口	ヘラケズリ, 深 ナ ダ		



第207区 第36号住居跡遺物実測図(3)

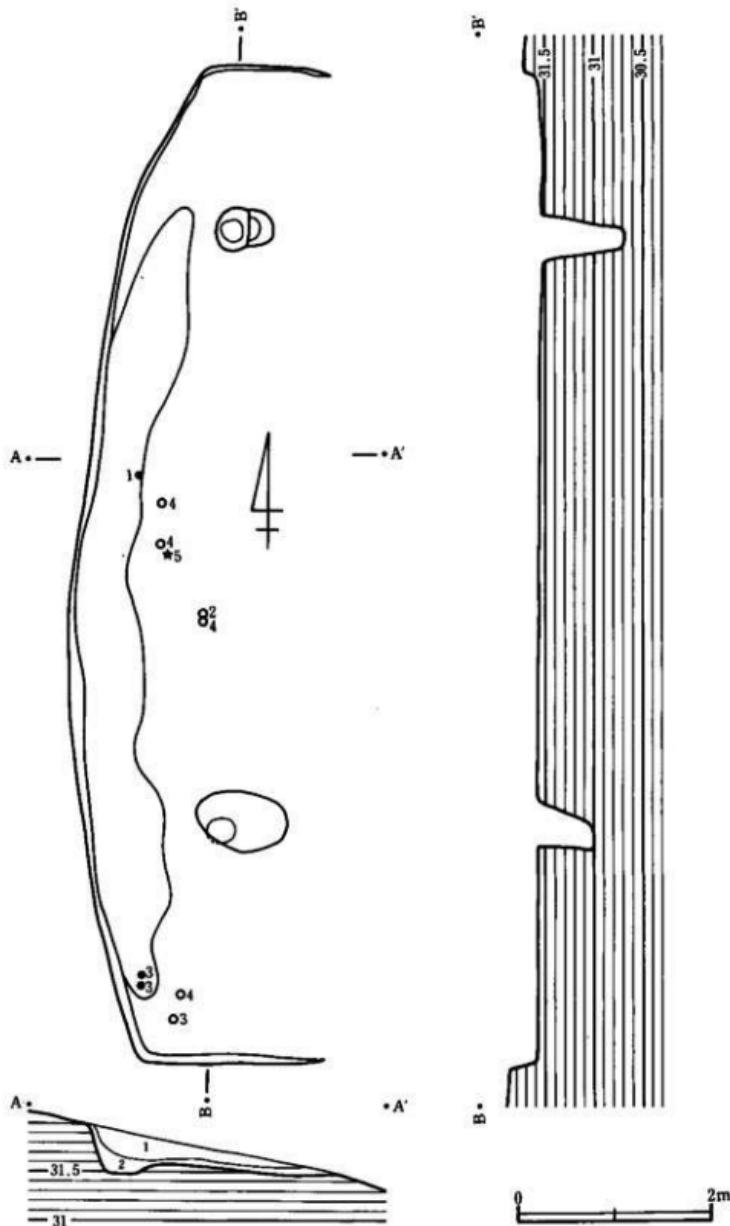
番号	器種	法量 (mm)			遺存度	焼成	色調	胎土	成形・調整			出土状況 (床面～) (cm)	備考			
		高さ	口幅	底径					内	外	ヨコナダ	リコナダ				
11	瓶	264	230	66	230	X	真	内赤褐色 外褐褐色	密	内	ヨコナダ	リコナダ	ナガキ	カマド内一括		
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ				
12	π	196	229	80	205	光	真	褐褐色	#	内	ヨコナダ	リコナダ	ナガキ	+0.3		
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ				
13	高杯	172	214	146	164	ほぼ完	#	内赤褐色 外赤褐色	密	内	ヨコナダ後 1ガキ	リコナダ後 1ガキ	ミガキ	施用箇所残 リコナダ	+2.0～+4.4	
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ	ヘラケズリ			
14	π	100	123	76	42	光	#	灰褐色或 色性未確認	密	内	ヨコナダ	リコナダ	ナガキ	ヘラケズリ リコナダ	+4.1	
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ	ヘラケズリ リコナダ			
15	π	93	122	73	42	#	#	外部外明 褐色内黒 褐色	#	内	ヨコナダ	リコナダ	ナガキ	ヘラケズリ リコナダ	+9.1	
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ	ヘラケズリ リコナダ			
16	高杯	41	137	-	155	#	#	褐褐色	やや粗	内	ヨコナダ	リコナダ	ナガキ		+0.5	
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ	ヘラケズリ			
17	π	44	134	-	153	#	#	暗褐色	やや粗	内	ヨコナダ	リコナダ	ナガキ		+2.3	
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ	ヘラケズリ			
18	π	43	133	-	139	ほぼ完	#	地赤褐色 外赤褐色 内褐色或 色性未確認 外はほとんど と赤褐色の あら、茶褐色 を呈す	密	内	ヨコナダ後 1ガキ	リコナダ後 1ガキ	ミガキ		+0.3	
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ	ヘラケズリ			
19	π	42	118	-	126	#	#	地赤褐色 内褐色或 色性未確認 外はほとんど と赤褐色の あら、茶褐色 を呈す	#	内	ヨコナダ後 1ガキ	リコナダ後 1ガキ	ナガキ		+0.3	
									外	ヨコナダ	リコナダ	ヘラケズリ	ヘラケズリ			

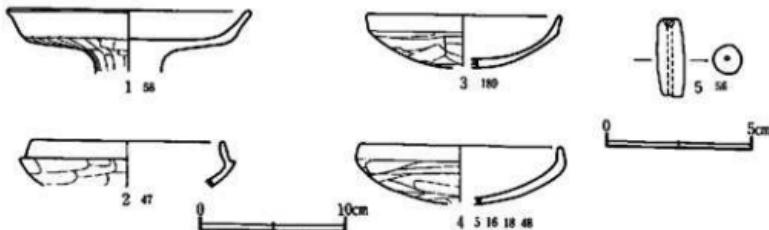
第61表 第36号住居跡土製品観察表

番号	器種	法量			遺存度	焼成	色調	胎土	せいけい	出土状況 (床面～) (cm)	備考	
		高さ	長さ	孔径	重量							
20	土質分析	80	145	-	585	断面のみ	二次焼成	赤褐色	粗砂粒		床中	複合部から半折
21	π	86	130	-	630	#	#	#	#		+5.7	地中に腐植土、ローム粒を多 く含む

第37号住居跡 (048) (第208・209図 第62・63表)

検出状況 本住居跡は、第17号住居跡の北東20mに位置する。立地は、台地の斜面である。斜面は、西から東へ傾斜しており、東に、北へ向ってひらく深い谷がある。本住居跡は、タルカ作の古墳時代の住居跡のうちで、最も東に位置する。床面の標高は、31.50mである。斜面に立地することから、遺構の遺存状況は、良くなく、東側の床面のひろがり、壁の立ち上がりは不明である。覆土





第209回 第37号住居跡遺物実測図

は、レンズ状の堆積であるが、住居跡の掘り込みが浅く、のこりが悪い。

形状・規模 のこっているところからすると、北辺と南辺は直線であるが、西辺は、ゆるく弧を描いている。西辺の長さは、10.2mである。主軸の方位は、不明である。壁は、のこったところで、浅い東側が7cm前後、深い西側が62cm前後あり、や上ひろがりに立ち上がる。

床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床はおこなっていない。中央よりやや北寄りの部分が、比較的堅くなっていた。

壁溝 他の住居跡のものと異なるが、西壁に沿って幅の広い溝がみつかった。幅46~74cm、深さ2~8cmで、断面は、ゆるいU字形である。

柱穴 2つみつかった。径60~94cm、深さ56~88cmである。北の柱穴は、東側に段を持ち、南の柱穴は、掘り方が、やや南北方向へ、えぐれ込んでいる。

遺物出土状況 出土遺物は少なく、完形あるいはそれに近い形で出土したものや、接合によって完形もしくはそれに近くまで復原できた上器は無い。滑石製と思われる管玉も、床面から6cm近く浮いての出土である。

四 土 1. 黑褐色土層

2. 日ごろの日ごろのプロック混載褐色土

第52表 第37号住居跡土器調査表

層 級 名	法 量(cm)			堆 積 度	成 分	色 調	地 上	成 形 ・ 製 作					出 土 状 況 (底 面 (cm))	備 考	
	器 高	口 徑	通 體					内	ヨコナメ	四	ト	ア	圓		
1 高 杯	?	164	?	142	环状 堆积, 带 内凹部	真	明褐色 やや粗 粒状 多し	内	ヨコナメ	四	ト	ア	圓	-7.1	
								外	ヨ	ヨ	ヘラケズリ	ヨ	ヘラケズリ		
2 瓶	?	132	?	147	口~側 下部 のみ	?	明褐色 やや粗 粒状	内	ヨ	ヨ	ヨ	ミ	ガ	+19.0	
								外	ヨ	ヨ	ヘラケズリ				
3 瓶	36	134	-	131	%	?	地明褐色 内褐色化 微粒状 有斑点	内	ヨ	ヨ	ヨ	ミ	ガ	+0.5~-6.5	
								外	ヨ	ヨ	ヘラケズリ				

記 号	種 類	法 量 (mm)			遺存度	成 形	色	調 査	上	成 形・調 査			出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考	
		高 度	口 縁 幅	底 盤 幅						内 口	外 口	ココナツ 模 型	ミ ダ キ		
4	环	40	140	146	5%	良	褐褐色 板岩	やや 粗粒 板岩	内 口	ヨコナツ模 型	ミ ダ キ	ミ ダ キ	内 口	+4.6～+21.4	内外面に氧化け きつ

第63表 第37号住居跡石製品観察表

記 号	種 類	法 量			遺存度	成 形	色	調 査	上	せ い け い	出土状況 (床面～) (cm)	備 考	
		幅 幅	高 度	孔 径	孔 数								
5	管	E	19	25	1～2	2.6	完	一	黑 色	一	研磨による微光沢	+5.7	磨石器か?

第38号住居跡 (052) (第210図 第64表)

検出状況 本住居跡は、第31号住居跡の西13mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、34.10mである。遺構の遺存状況は、良くない。後世の耕作等の削平により壁の立ち上がりはつかまらず、また北側と西側の隅にも後世の擾乱を受けている。なお、セクションは、覆土のものではなく、貼り床のものである。

形状・規模 平面形態は、床面が検出されたのみで、壁はつかまらず、住居跡全体の正確な形は十分把握できないが、床面のみで言うなら、2m×2.5mの長方形である。短辺の方位は、N-60°～Wである。

床面 黒褐色土にロームを混ぜて、堅く築き固めた貼り床をしている。厚さ10cmである。

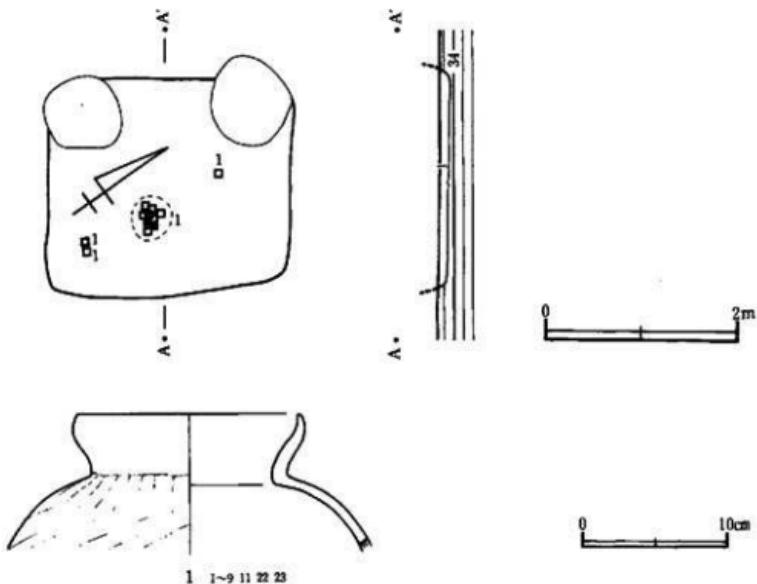
遺物出土状況 一部の破片が貼り床にもぐった状態で、1の土師甕の口縁から胴部上半部にかけての部分が出土した。

第64表 第38号住居跡土器観察表

記 号	種 類	法 量 (mm)			遺存度	成 形	色	調 査	土	成 形・調 査			出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考	
		高 度	口 縁 幅	底 盤 幅						内 口	外 口	ココナツ 模 型	ミ ダ キ		
1	坐	?	154	?	?	口縁洗 削	良	褐褐色 陶器	やや粗 粒	内 口	ココナツ模 型	ミ ダ キ	ミ ダ キ	3.0～15.6	

第39号住居跡 (056) (第211～213図 第65・66表)

検出状況 本住居跡は、タルカ作遺跡の古墳時代住居跡群のほぼ中心部に位置する。立地は、平坦面上である。南側の平坦面は、住居跡の無い空白になっている。床面の標高は、32.85mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。



第210図 第38号住居跡遺構図・遺物位置図(上)・遺物実測図(下)

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺4.9~5.1mである。主軸の方位は、N-95°-Eである。壁は、高さが49~54cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

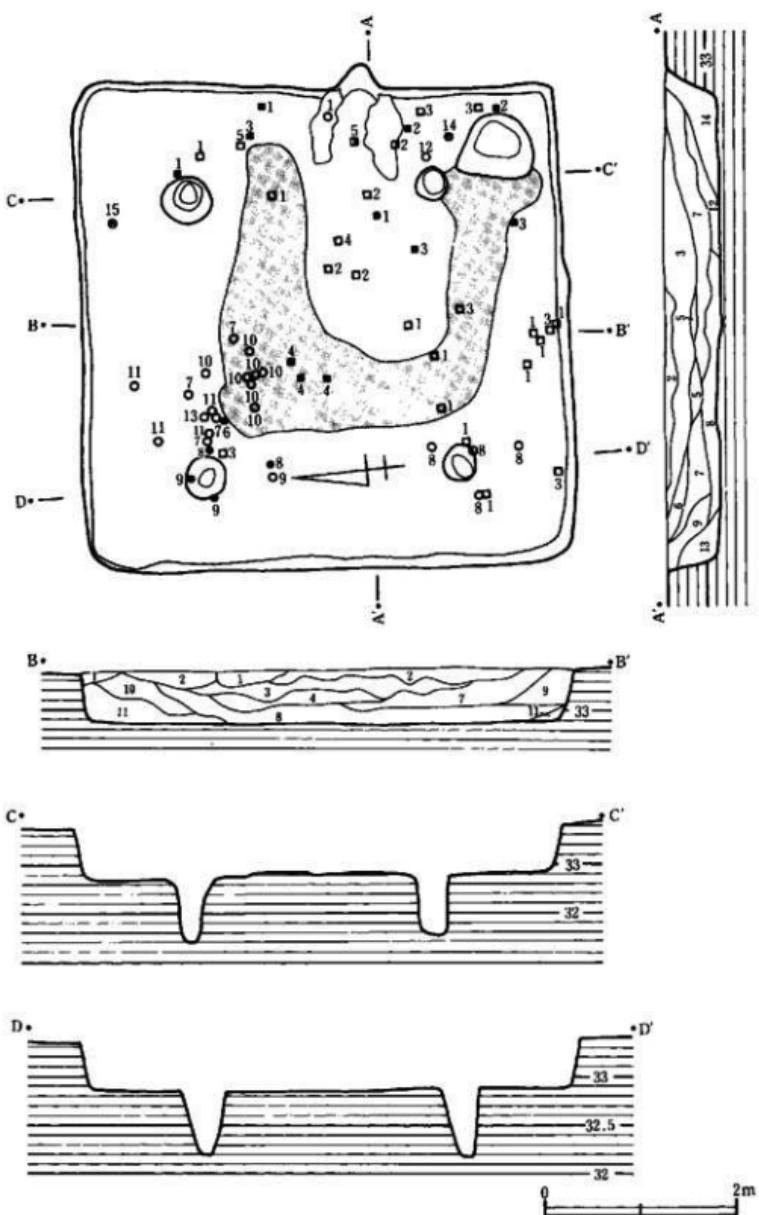
床 面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。カマドの左脇から右側の貯蔵穴の前にかけて、大きくU字形に一段高く土手状に削りのこしている。幅48~140cm、高さ4cmである。

柱 穴 4つみつかった。それぞれ対角線上に位置する。径30~50cm、深さ65~70cmである。

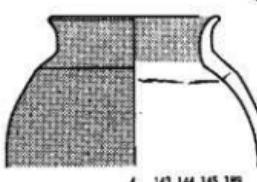
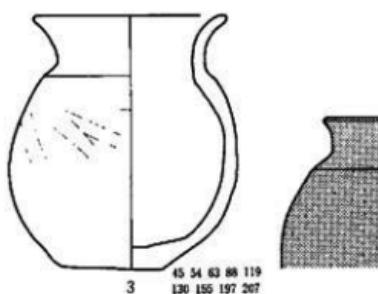
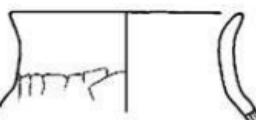
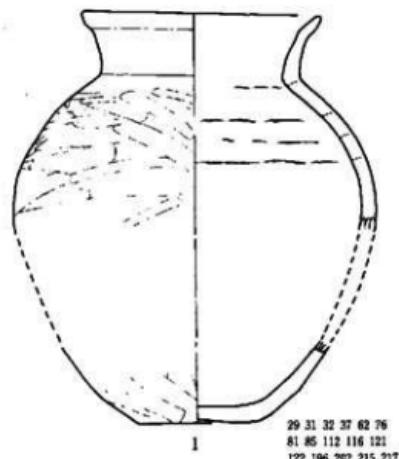
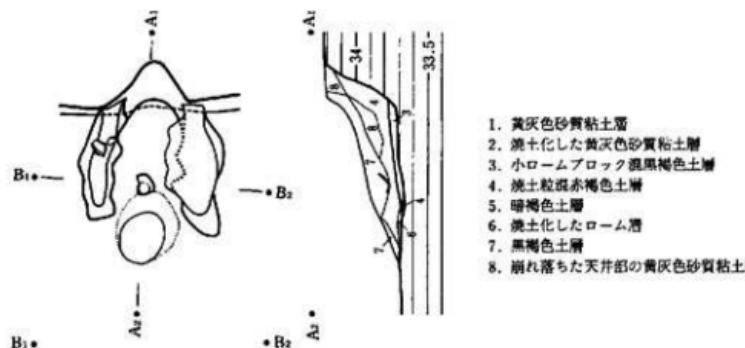
貯蔵穴 カマドの右側、住居跡の南東隅にある。平面形態は、台形である。口の大きさ68cm×80cm、深さ47cmで、底は平らである。覆土は、底の方から、粘性に富むローム粒主体黄褐色土、ローム混黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土、多量のローム粒混黄褐色土の順で、堆積していた。

カマド 東壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅58cm、奥行き29cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。また、ローム壁寄りに半円形に土を貼ってその上につくられている。天井部はのこつておらず、左右の袖部がのこるだけであるが、火床の位置は、はっきりつかめる。右脇から、9cm床面より浮いた状態で、土製支脚が出土している。

遺物出土状況 床面からは、北西の柱穴の東側で、6の土師壺が出土した。15の土製筋縫車は、北東の柱穴の北から、5cm浮いて出土した。このほかに接合の結果、完形に近く復原できたものに3の土師甕、9と10の土師壺があるが、破片は、床面から浮いた状態で出土したもののが少なくない。

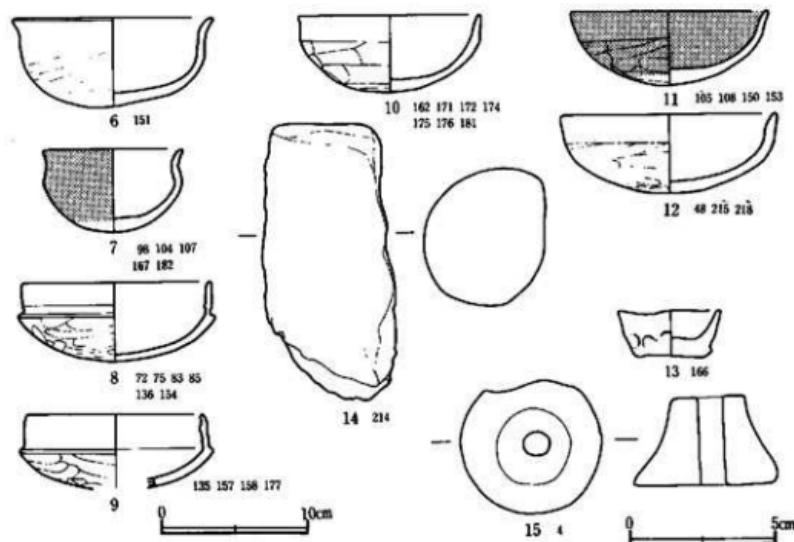


第211図 第39号住居跡遺構図・遺物位置図



0 10cm

第212図 第39号住居跡カマド実測図（上）・遺物実測図（下）(1)



第213図 第39号住居跡遺物実測図(2)

- | 層 | 土 | 1. 撥乱 | 9. 少量のローム粒、ロームブロック混黒褐色土層 |
|---|---|---------------------------------|---------------------------|
| | | 2. 少量のローム粒混暗褐色土層 | 褐色土層 |
| | | 3. 黒色土、ローム粒、ロームブロック混
黄褐色土層 | 10. 多量のローム粒、ロームブロック混黒褐色土層 |
| | | 4. ローム粒、ロームブロック混黒褐色土層 | 11. 多量のローム粒混黄褐色土層 |
| | | 5. 少量のローム粒混黒褐色土層 | 12. 山砂、少量のロームブロック混黒褐色土層 |
| | | 6. 黒色土、少量のローム粒混暗褐色土層 | 13. 多量のローム粒混黄褐色土層 |
| | | 7. 山砂、多量のローム粒、ロームブロック混
黄褐色土層 | 14. カマド |
| | | 8. 黒色土、ロームブロック、多量のローム粒混黄褐色土層 | |

第65表 第39号住居跡土器観察表

名	器種	法寸 (mm)				造作痕	成形	色調	胎土	成形・調査						出土状況 (底面～) (cm)	備考	
		高	口幅	底幅	厚					内	外	コナグ	剥	ナ	テ	瓦		
1	壺	?	150 (80)	247	74	内赤褐色 外暗赤褐色	丸	内赤褐色 外暗赤褐色	泥	内	口	コナグ	剥	ナ	テ	瓦	+0.6～+31.3	内面に輪状痕を残す

番号	標高	法寸 (mm)				地存度	構成	色調	胎土	成形・調整					出土状況 (底面～) (cm)	備考	
		壁厚	口幅	底幅	側壁厚					内	外	内	外	内	外		
2 磁	?	154	?	?	口縫の み	やや不良	内面黄褐色 外見褐色	中や粗	内 外	内	外	内	外	内	外	+3.3～+20.9	
										内	外	内	外	内	外		
3	+	169	128	67	155	底付光	良	淡赤褐色	中	内 外	内	外	内	外	内	外	-0.9～+32.3
										内	外	内	外	内	外		
4	+	?	113	?	178	口縫の み	良	内面赤褐色 外見褐色	密	内 外	内	外	内	外	内	外	-0.9～+28.1 内外日本形、外口 はその上にススの 付着あり
										内	外	内	外	内	外		
5	+	?	?	60	?	脚下部 ～底付 のみ	良	内面黄褐色 外見褐色	中	内 外	内	内	内	内	内	内	+6.0～+30.5
										内	外	内	外	内	外		
6	坪	59	134	-	-	光	良	内面黄褐色 外見赤褐色	白	密 粗	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+0.1
										内	外	内	外	内	外		
7	+	55	98	-	94	%	良	地明褐色 白	中	密 粗	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+21.6～+33.7 外窓を除いて全周 赤形
										内	外	内	外	内	外		
8	+	52	127	-	134	%	良	口のみ内 外共黒色 他暗褐色	中 石	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+11.6～+37.8
										内	外	内	外	内	外		
9	+	49	120	?	130	底付完	やや不良	黒褐色	中 石	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+0.6～+15.9
										内	外	内	外	内	外		
10	+	51	124	-	123	底付完	良	地明褐色 白	中 石	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+8.1～+19.4
										内	外	内	外	内	外		
11	+	50	133	-	127	%	強	良	地明褐色 白	中 石	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+13.6～+45.3 内全面、外口～腰 中央赤形
										内	外	内	外	内	外		
12	+	53	147	-	143	%	強	良	淡赤褐色	中	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+5.6 カマド、野落穴
										内	外	内	外	内	外		
13 手	手	29	69	46	-	%	良	明褐色	密 粗 石	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	内 外	+9.5
										内	外	内	外	内	外		

第66表 第39号住居跡土製品観察表

番号	標高	法寸				地存度	構成	色調	胎土	せいか							出土状況 (底面～) (cm)	備考
		壁厚	口幅	底幅	側壁厚													
14 上敷支脚	90	190	-	1340	腰部分	二次焼成	灰～褐色	粗	粗	内	外	内	外	内	外	内	外	+9.2 断面丸方形に近い
15 下 脚 支 脚	25	30	8.5	55	は 完	良	黒	色	粘	内	外	内	外	内	外	内	外	15.5

第40号住居跡 (124) (第214～216図 第67表)

検出状況 本住居跡は、タルカ作遺跡の古墳時代住居跡群の北西隅に、41号住居跡と並んで位置する。立地は、台地西側の大きな谷津に向ってひらく浅い谷の北斜面である。床面の標高は、31.20mである。遺構の遺存状況は良好である。北壁を除く他の壁際の覆土に、焼土の堆積が見られ、炭化材も含まれていることから、この住居跡は焼失家屋であると思われる。覆土は、中央の最もへこん

だレンズ状の堆積をしており、覆土の内容と合わせて、本住居跡は焼失後廃棄され、自然に埋ったものと思われる。

形状・規模 平面形態は、正方形である。一辺5.0~5.2mである。主軸の方位は、N-3°-Wである。壁は、高さが、斜面の上方側で70~91cm、下方側で12~38cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床はおこなっていない。

壁溝 東壁の南寄り3分の1あたりから、南壁にかけてめぐっている。幅28~60cm、深さ3~11cmで、断面は浅いU字形である。

柱穴 4つみつかった。それぞれ対角線上に位置する。径45~60cm、深さ55~80cmである。西南の柱穴には、途中に一段の段がある。

カマド 北壁の中央に位置し、山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅60cm、奥行き20cmの浅い山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。火床から左袖の下にかけて、浅いくぼみがみられた。大井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであった。

遺物出土状況 遺物の出土は、カマド周辺に集中した。カマドの袖部および床面の直上の遺物としては、左袖の壁際から完形ではないが7、13の土師壺が出土した。また右袖際からも、2、3の土師壺と8、10、14の土器壺が、ほぼ完形で出土した。これら5点は床面から浮いた状態の出土ではあるが、その出土状況から見て、この住居跡に本来伴うものであろう。

夏圭山水图

4. 黑褐色土、只二分粒混暗褐色土層

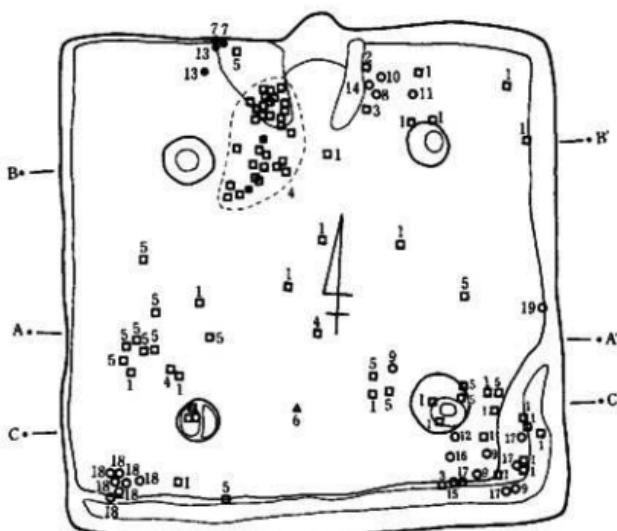
2 暗褐色十層

5 暗褐色+混黃褐色+黑

3 黑褐色十圖

第67卷 第40号住居跡土器調査表

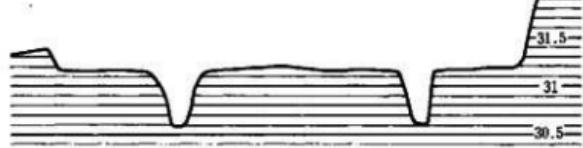
さと場所	種 種	法 則 (mm)			適存度	地 形	色 調	物 土	成 形・調 整				出 土 次 況 (深 度～) (cm)	備 考	
		高 度	口 幅	底 幅					内 口	吉 コナ デ	黒 コヘラ ナデ	チ ナ デ			
1 畑	1	310	181	90	289	山 嶺 ほば 斜上 斜下 底 完	良	明 褐色 黒泥化	密	内 口	吉 コナ デ	黒 コヘラ ナデ	チ ナ デ	+3.2～+67.0	
										外 口	エ ヌ	エ ヘラケズリ	エ ヘラケズリ		
2	+	239	158	54	191	地盤 第3 第4 光	好	淡黃褐色 やや 褐	内	内 口	エ ヌ	エ コヘラ ナデ	チ ナ デ	+6.0～+39.0	
										外 口	エ ヌ	エ ヘラケズリ	エ ヘラケズリ		
3	+	165	157	65	157	%	好	赤褐色	密	内 口	エ ヌ	エ コヘラ ナデ	チ ナ デ	+3.5～+27.5	
										外 口	エ ヌ	エ ヘラケズリ	エ ヘラケズリ		
4	+	?	?	68	216	地盤 下 高 低 差 40% 以上	やや不良	暗 褐色	好	内 口	チ ナ デ	チ ナ デ	チ ナ デ	+0.4～+24.5	
										外 口	エ ヌ	エ ヘラケズリ	エ ヘラケズリ		



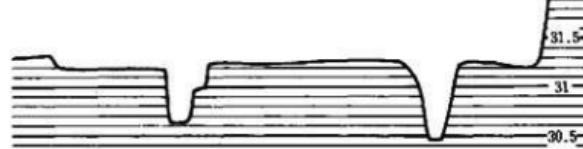
A-A' B-B' C-C'



B-B' C-C'

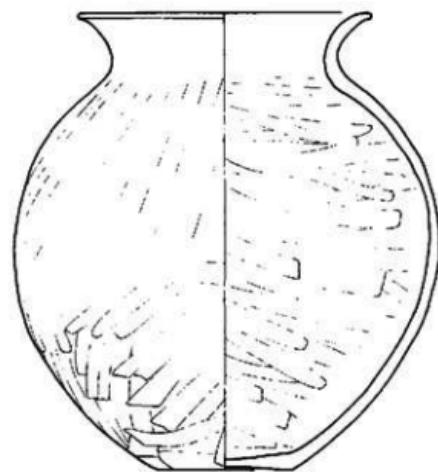
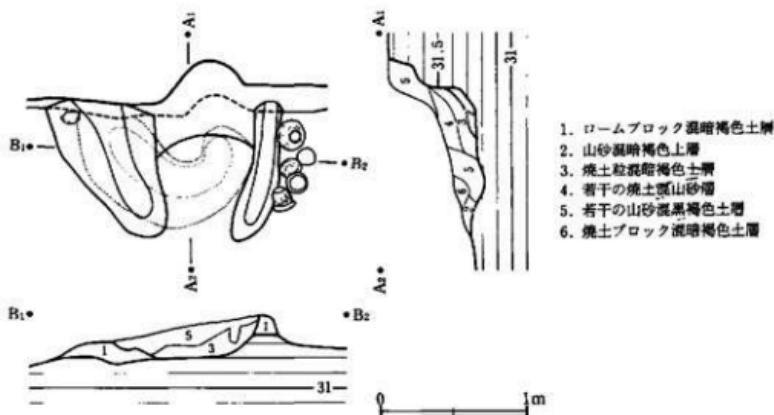


C-C'

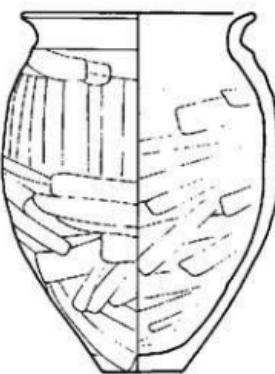


0

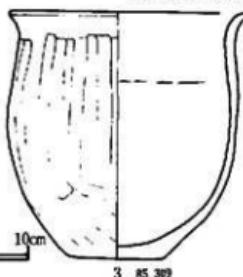
第214図 第40号住居跡遺構図・遺物位置図



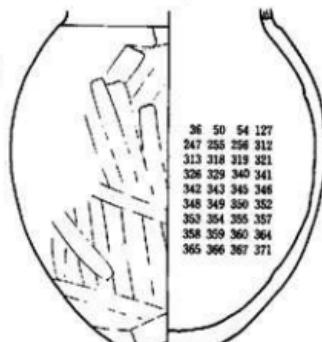
1 4 13 39 45 47 64 92 146 150 157
192 194 198 200 214 216 228 258 261
262 266 287 293 295 301 302 304 310



2 305 356

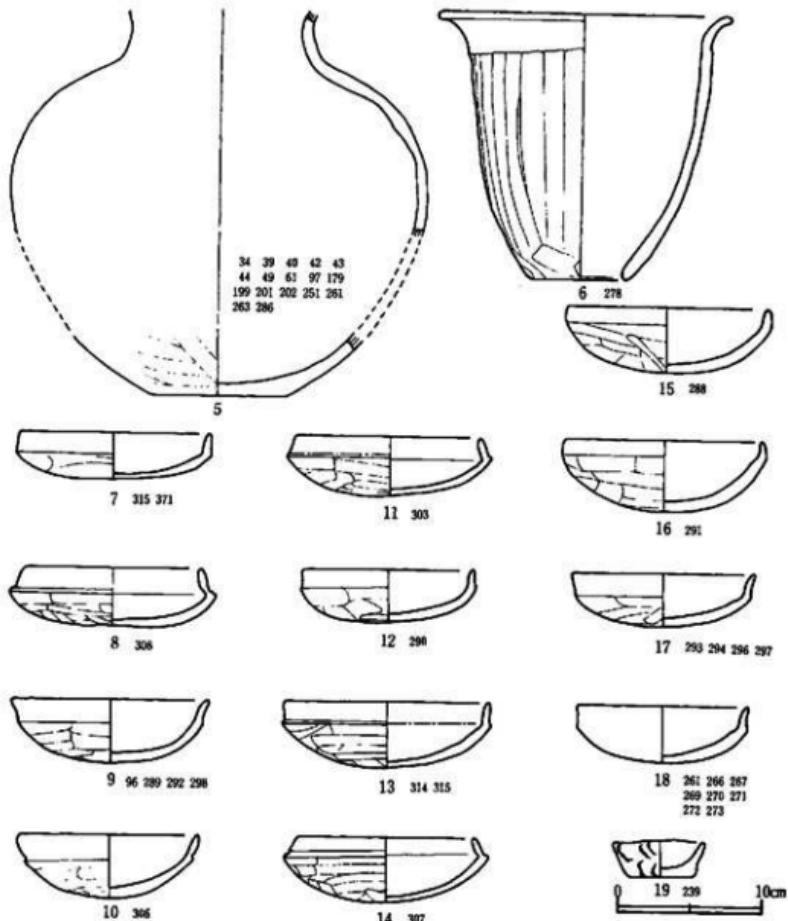


3 85 309
10cm



36 50 54 127
247 255 256 312
313 318 319 321
326 329 340 341
342 343 345 346
348 349 350 352
353 354 355 357
358 359 360 364
365 366 367 371

第215図 第40号生居跡カマド実測図(上)・遺物実測図(下)(1)



第216図 第40号住居跡遺物実測図(2)

器種	法寸 高 幅 口 縦 横 厚	法寸 高 幅 口 縦 横 厚	遺存度	地成	色調	粘土	成形・調整			出土状況 (実寸~ cm)	備考	
							内	外	内			
5 瓶	263	125	95	290	内灰褐色 外灰褐色 びぬけ せりぞ れんげ くらしき 模様	真	内灰褐色 外灰褐色	やや粗 い	内 外	ヘラケズリ 直丁寧なナゲ 落	破壊剥離の 為不 明	+8.7~+55.3 内外とも使用によ り、表面の剥離が 著しい
6 瓶	182	197	63	一 口縫合 物	内 外	内 外	ココナヅ シ ガキ	# #	ナゲ ミオキ ヘラケズリ		+3.0	

記 号	種 類	注 記 (cm)				遺存度	焼 成	色 調	粒 土	成 形・変 形				出 土 状 況 (床 面 高 さ cm)	備 考
		標 高	口 幅	底 幅	厚 度					内 部	外 部	内 部	外 部		
7	环	32	130	—	133	%	やや不良	黒褐色	やや粗	内 部	ヨコナデ後 ミガキ	外 部	焼いとガキ		-1.0~+1.4
8	"	39	121	—	142	完	良	黄褐色	密	内 部	ヨコナデ	外 部	丁寧なナダ ヘラケズリ		+6.5
9	"	42	134	126	口幅56 体 5%	#	暗褐色 表面多し	#	#	内 部	ヨコナデ後 ミガキ	外 部	ナダ後 焼いとガキ ヘラケズリ		+18.0~+23.0
10	"	43	121	—	116	口幅を 一部少 くが完	#	黄褐色	#	内 部	#	外 部	ナダ後 焼いとガキ ヘラケズリ		+5.3
11	"	48	127	—	143	5%	良	黑褐色	密	内 部	ヨコナデ後 ミガキ	外 部	ミガキ ヘラケズリ後 ナダ		+21.8
12	"	35	118	—	122	口幅を 一部少 くが完	#	暗褐色	#	内 部	ヨコナデ	外 部	ナダ		+8.0
13	"	43	142	—	145	%	#	暗褐色	#	内 部	ヨコナデ後 ミガキ	外 部	ナダ後 焼いとガキ ヘラケズリ		1.0~+1.5
14	"	43	124	—	144	口幅を 一部少 くが完	#	暗褐色	#	内 部	#	外 部	ナダ後 焼いとガキ ヘラケズリ		+6.5
15	"	44	139	—	142	口幅を 一部少 くが完	#	地明褐色 内外表面 は黒褐色	#	内 部	ヨコナデ	外 部	ナダ		+35.0
16	"	48	137	—	143	口幅を 一部少 くが完	#	淡褐色	やや粗	内 部	#	外 部	ナダ		+9.5
17	"	36	126	—	123	5%	#	暗褐色	密	内 部	ヨコナデ後 ミガキ	外 部	ミガキ ヘラケズリ		+19.5~+28.0
18	"	7	127	—	132	口幅56 体 5% はが完	#	暗褐色	やや粗	内 部	ヨコナデ	外 部	ナダ		+1.7~+7.0
19	ニチュア	25	60	46	—	%	#	#	#	内 部	ナ ダ	外 部	ナ ダ	ナ ダミガキ	+59.0

第41号住居跡 (125) (第217~219図 第68表)

検出状況 本住居跡は、第40号住居跡の西10mに位置する。立地は、第40号住居跡と同じである。第40号住居跡よりもさらに斜面の下方に位置する。床面の標高は、29.40mである。遺構の遺存状況は良好である。北西部及び南西部壁際に、縦竹のアンペラが炭化したと思われるものが出土している。これは、家屋の屋根材もしくは床の敷物であろう。この住居跡が火災に遭ったことをうかがわせる。覆土は、斜面上方から土が流入し、堆積したと思われる。

形状・規模 平面形態は、基本的には、斜面の等高線に沿う長辺が4.5m、傾斜方向の短辺が4mの長方形であるが、西側の斜面上方側に、浅いテラス状の掘り込みを持つ。このテラスの床面は、斜面の検出面から住居跡の壁の上端まで、20°という急角度になっている。住居跡の主軸の方位は、N-6°-Wである。壁は、高さが斜面上方側で56~82cm、斜面下方側で22~33.5cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

—

床面 住居跡中央から斜面上方側は、ハードロームを平らに削って床としているが、斜面下方側は、ロームブロックを混ぜた暗褐色土を厚めに敷いて、貼り床をおこなっている。

壁溝 壁溝は、カマドの下を除き全周する。幅14~20cm、深さ2~6cmで、断面は逆台形である。

貯藏穴 カマドの右脇にある。平面形態は橢円形である。口の大きさ長径54cm、短径48cm、深さ約37cmで、底面は北壁側がやや深くなっている。覆土は、下の方から、若干のローム粒混暗褐色土、ロームブロック混暗褐色土、ローム粒混暗褐色土の順で堆積していた。

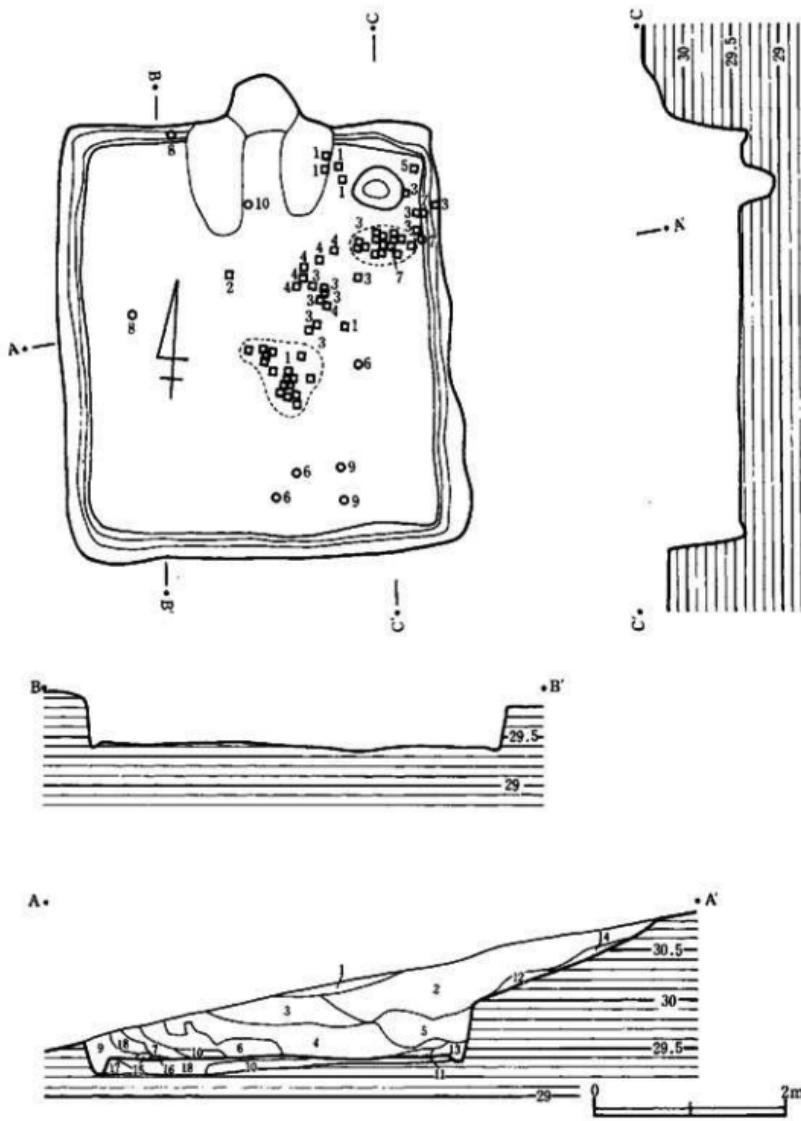
カマド 北壁の中央にあり、山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅80cm、奥行き40cmの半月形に掘り込んで、煙道がつくられている。煙道の奥壁に土が貼られている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであった。

遺物出土状況 点数は多いが、全て覆土中からの出土で、床面直上のものは無い。床面から18.5cm~24.5cm浮いた状態ではあるが、2と4の土師甕がカマドの前から出土したのが目立つ。8の土師甕も、破片は散乱していた。

覆土	1. 暗褐色土層	11. 炭化材混暗褐色土層
	2. 黒褐色土層	12. 明褐色土混暗褐色土層
	3. 暗褐色土混黒褐色土層	13. ローム粒混黒褐色土層
	4. ローム粒混暗褐色土層	14. 暗褐色土層
	5. ローム粒混黄褐色土層	15. ローム粒混黒褐色土層
	6. 若干のローム粒混黒褐色土層	16. 焼土
	7. 若干のローム粒混暗褐色土層	17. 多量のロームブロック混暗褐色土層
	8. ローム粒混暗褐色土層	18. ロームブロック混暗褐色土層
	9. 明褐色土、ローム粒混暗褐色土層	19. ロームから成る黄褐色土層
	10. 若干のロームブロック混暗褐色土層	

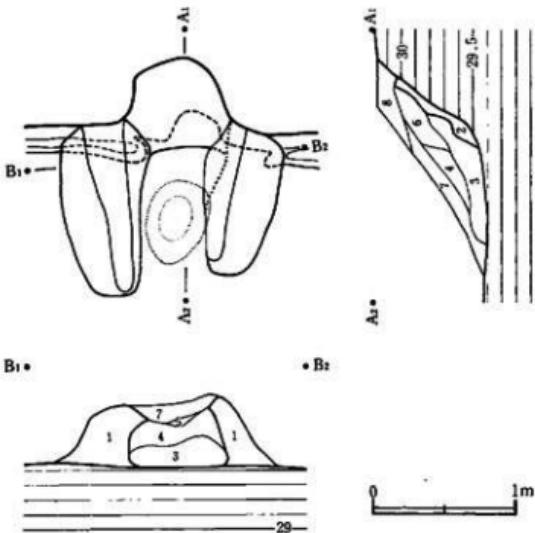
第68表 第41号住居跡土器觀察表

器種	法尺(m)				追存度	焼成	色調	胎土	成形・調量				出土状況 (床面~)(cm)	備考
	高度	口幅	底幅	側幅					内	ヨコナメ	割合	外		
1. 杯	?	165	90	?	口縁少 新底 光	不 良	明褐色 やや粗	内 外	ヨコナメ #	割 合 デ ヘラケズリ			+7.8~+48.5 内外底とも二次焼 成?により剥離	



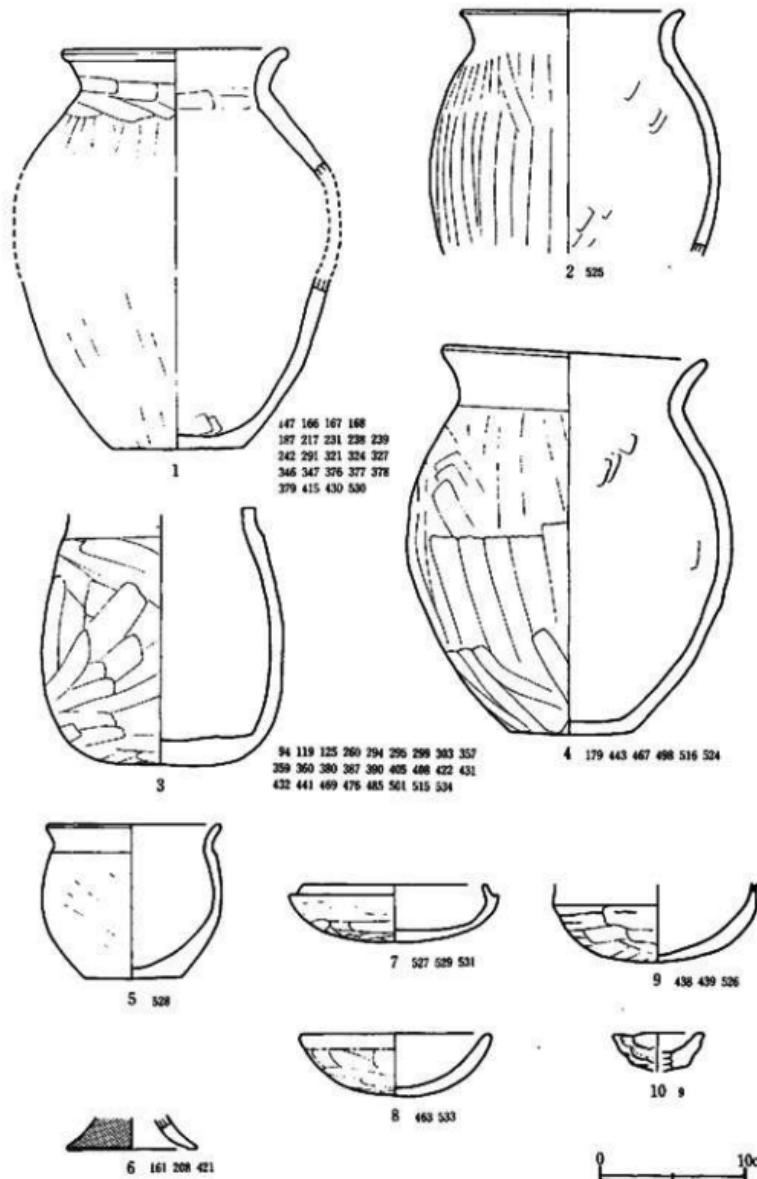
第217図 第41号住居跡遺構図・遺物位置図

種類 高 度	法 規 (mm)			道密度	構成	色	調	地 土	成形・調整				出 土 状 況 (底面～) (cm)	備 考	
	口 幅 度	高 度	側 壁 度						内 口	コナゲ	内 ヘタナゲ	外 ヒ	ヘタケズリ		
2. 塵	?	146	?	200	口端光 割 % 不	良	明褐色	更	内 口	コナゲ	内 ヘタナゲ			+24.5	内外面とも二次粒成により剥離



第218図 第41号住居跡カマド実測図

名 称	法 量 (cm)			透 徹 度	焼 成 度	色 調	物 土	成 形 ・ 固 定				地 上 状 況 (cm)	備 考	
	高 度	口 幅	厚 さ					内 部	外 部	内 部	外 部			
3 壁	?	?	50	166 厚 度	良 好	中や不良 赤褐色	やや粗 粒	内 部	口 部	ココナ ダ	内 部	ナラ ハナ	+9.0～+64.2	
								外 部	#	#	#	ヘラケズリ ナ		
4 H	257	178	82	226 外 厚	不 良	内 外 部 ～ 上半 部 褐色	密	内 部	#	#	#	ナ ダ	+18.5～+30.0	
								外 部	#	#	#	ヘラケズリ		
5 小 壁	104	116	68	124 厚 度	良	内 外 部 褐色 外赤褐色	?	内 部	二 口	ココナ ダ	内 部	ナ ダ	+6.0 内面使用により 削	
								外 部	#	#	#	ヘラケズリ ナ イ ガ キ		
6 高 坪	?	?	88	?	良	内 外 部 褐色 外赤褐色	?	内 部	脚 鋼	ナ ダ	先 ナ ダ	ナ ダ	+17.0～+33.0 外壁本筋	
								外 部	#	#	#	ナ ダ後エゼキ		
7 环	39	126	-	145 外 厚	良	中や不良 黑色	?	内 部	口 ココナ ダ	脚 ミ ガ キ	ミ ガ キ	ミ ガ キ	+19.5～+22.0	
								外 部	#	#	#	ヘラケズリ		
8	41	130	-	128 厚 度	良	黄 褐色 内外混汚 板 黒	?	内 部	コ コナ ダ	ナ ダ後エゼキ	ナ ダ	ナ ダ	+9.5～+33.0 内面使用により削 削	
								外 部	#	#	#	ヘラケズリ ナ イ ガ キ		
9	?	?	?	?	良	口 部 を除き 光	?	内 部	#	#	#	ミ ガ キ	+23.0～+28.0 内面使用により削 削	
								外 部	#	#	#	ヘラケズリ ナ イ ガ キ		
10 ルーフ	?	62	-	-	?	淡 黃褐色	?						+33.5	成形は手づくね



第219図 第41号住居跡遺物実測図

第42号住居跡（126）（第220図 第69表）

検出状況 本住居跡は、タルカ作遺跡の古墳時代住居跡群の中で、もっとも南のはずれに位置し、第43号住居跡とともに他の住居跡よりやや離れている。立地は、台地の平坦面上である。床面の標高は、35.70mである。遺構の遺存状況は悪く、壁が後世の開墾等によって床面より20cm足らずのところまでしかのこらず、北側隅からカマド右脇にかけての住居跡規模の2分の1を、造成工事の掘削機械により削り取られてしまった状況で検出された。

形状・規模 平面形態は、推定で、1辺約6mの正方形とみられる。主軸の方位は、N-169°-Eである。南カマドは、タルカ作遺跡の古墳時代住居跡群の中で、この住居跡だけである。あとは19号住居跡が、南東にある。壁は、残っている部分で、高さが16~23cmあり、上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としたと思われるが、検出時には後世の削平の影響か、多少凹凸があった。貼り床は、おこなっていない。

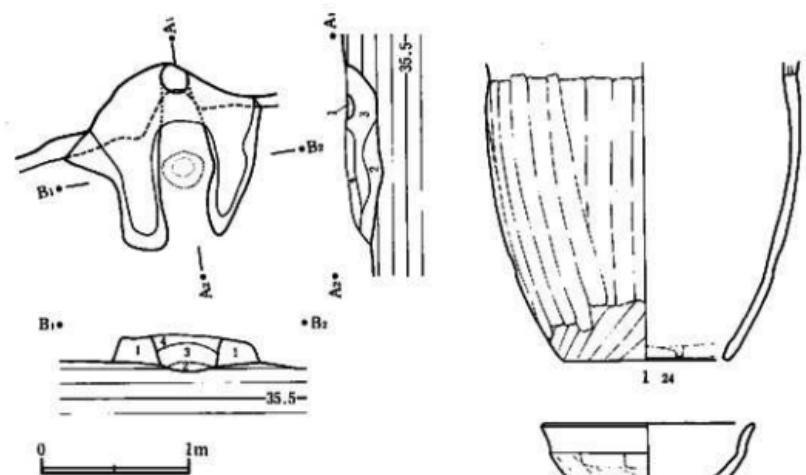
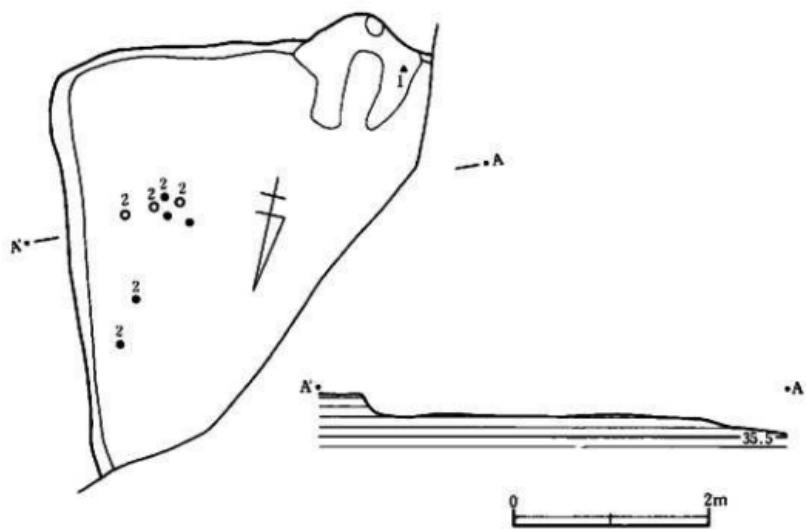
カマド 南壁の、推定ではば中央に位置し、山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅1m、奥行き30cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。後世、住居跡の削平と同時に、カマドの上部も削平を受け、天井部中央は無い。しかし、煙道と袖部、それに袖部に続く天井部の一部が、左右ともわずかに残っていた。

遺物出土状況 床面から6.5cmまでの高さで、2の土師壺が東側壁付近で、数個の破片に分かれて出土し、カマド右袖の山砂内から1の土師瓶が出土した。

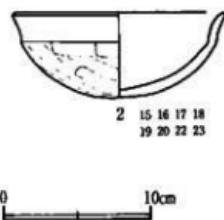
覆土 ややしまった黄褐色土が混じる黒褐色土と、黄褐色土が混じる暗褐色土が層状に堆積していた。

第69表 第42号住居跡土器観察表

さ し 跡 名	種 類	法 式 (m)				遺 存 状 況	成 形	色 調	胎 上	成 形 ・ 調 整				出 土 状 況 (床 面 ～) (cm)	備 考
		器 高	口 径 横 径	表 面 性 質	側 面 性 質		内 側 面 性 質	内 側 面 性 質	内 側 面 性 質	内 側 面 性 質	内 側 面 性 質	内 側 面 性 質	内 側 面 性 質		
1 瓶	?	?	106	一	四 %	炎	淡黄褐色 基底あり	やや 粗	内 側 面 性 質	内 側 面 性 質	ナ ダ ア ヘラケズリ			±0~+3.0	
										外 壁	ヘラケズリ				
2 壺	55	140	-	130	口 縁 若干、 底部少	-	淡赤褐色 中 等 粒 度	中 等 粒 度	内 側 面 性 質	内 側 面 性 質	コ ナ ダ ナ ヘラケズリ	ナ ダ ア ヘラケズリ		+0.5~+6.5	
										外 壁	ナ ダ ア ヘラケズリ	ナ ダ ア ヘラケズリ			



- 1. 多量の暗褐色土混山砂層
- 2. 黄褐色土層
- 3. 烧土混黒褐色土層
- 4. 山砂混暗褐色土層



第220図 第42号住居跡遺構図・遺物位置図（上）・カマド実測図・遺物実測図（下）

第43号住居跡 (130) (第221・222図 第70・71表)

検出状況 本住居跡は、第42号住居跡の北東35mに位置する。立地は、台地の平坦面である。タルカ作の台地のくびれの中心にある。床面の標高は、35.25mである。南西壁から東南隅にかけて、後世の溝によって切られていた。覆土は、中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。

形状・規模 平面形態は、正方形である。カマドのある北西辺が短く5.5mで、のこる3辺は5.8~5.9mである。主軸の方位は、N-40°-Wである。壁は、高さが44~54cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

壁溝 カマドの部分を除き全局している。幅16~44cm、深さ3~12cmで、断面は逆台形である。

柱穴 4つみつかった。それぞれ対角線上に位置する。径55~90cm、深さ50~70cmである。

貯藏穴 カマドの右脇にある。平面形態は、ほぼ正方形である。口の大きさ56cm×60cm、深さ50cmである。覆土は、底の方から、よくしまった暗褐色土、ロームブロック混黒褐色土、多量のローム粒混黒褐色土、黄褐色土混暗褐色土、ローム粒混暗褐色土、暗褐色土の順で堆積していた。

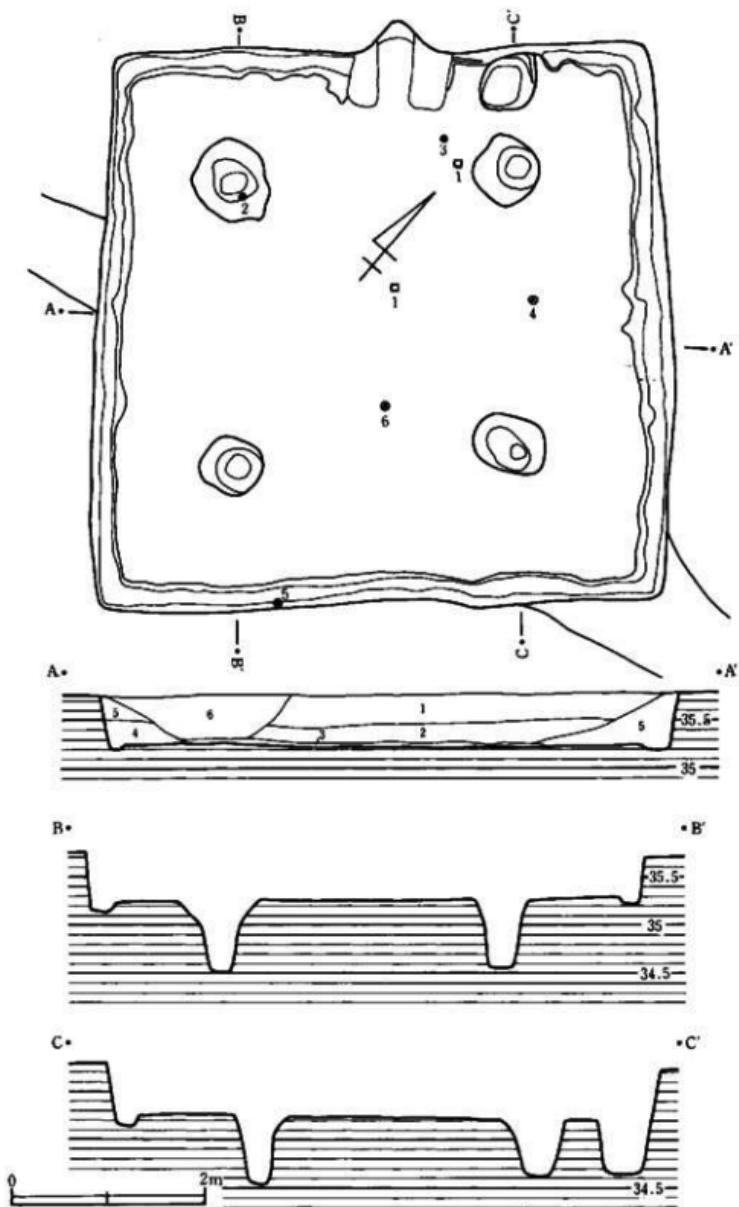
カマド 北西壁の中央に位置し、山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅80cm、奥行き40cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけであった。

遺物出土状況 出土した遺物は非常に少なく、床面から出土したのは、カマド右前からの土師片片だけである。覆土中からは、土器は、同一個体の土師壺の破片2点が出土したのみであるが、覆土の比較的床面に近いところと南東壁際から、土製勾玉が3つ出土している。

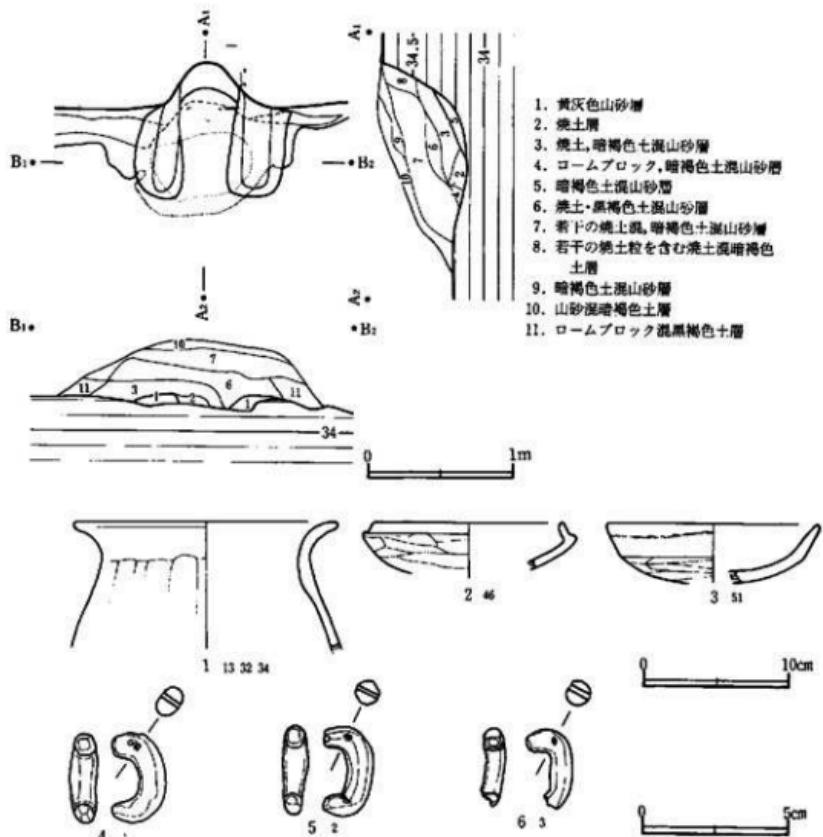
- | | | |
|-----------|-----------------------|-----------------------|
| 覆土 | 1. 暗褐色土、若干のローム粒混黒褐色土層 | 5. 黒褐色土、ロームブロック混暗褐色土層 |
| | 2. ローム粒混黒褐色土層 | 6. 黒褐色土層(住居跡を切る溝の覆土) |
| | 3. 黄褐色土混暗褐色土層 | |
| | 4. ロームブロック混暗褐色土層 | |

第70表 第43号住居跡土器観察表

器種	法尺(m)						造存度	被成	色調	施土	成形・調整				出土状況 (実測~) (cm)	備考
	基高	口幅	底幅	側厚	内厚	外厚					内厚コナガ	外厚コナガ	内厚ヘラケズリ	外厚ヘラケズリ		
1 壁	?	180	?	?	?	?	口縁部のみ	良	明褐色	無	内厚コナガ	外厚コナガ	内厚ヘラケズリ	外厚ヘラケズリ	+8.1~16.7	
2 基	?	132	?	149	14	8	赤褐色 内外風扇	白	白	内厚コナガ後 内厚ヘラケズリ	外厚コナガ後 外厚ヘラケズリ	内厚ヘラケズリ	外厚ヘラケズリ	-2.5		



第221図 第43号住居跡遺構図・遺物位置図



第222図 第43号住居跡カマド実測図(上)・遺物実測図(下)

さし 印	器 種	法 量 (mm)			透 度	透 成	色 調	施 工	成 形・表 面				出 土 状 況 (床 面 ~) (cm)	備 考
		直 径	口 幅	底 幅					高 度	強 度	耐 熱性	耐 酸 性		
3	坪	?	147	?	120	%	r	当面裏面 当面本腰色 口に黒斑	施粒石	内 質	コナテ ル ガ キ	ナ ア ル テ ル	5.6	

第71表 第43号住居跡土製品箇数表

3 土 坡

第1号土坡 (054) (第223図 第72表)

検出状況 本土坡は、古墳時代の第31号と第34号の住居跡のあいだに位置する。立地は、台地の平坦面上である。

形状・規模 平面形態は、小判形である。長径2.7m、短径1.3m、深さ50cmである。底は、ゆるやかな丸底である。墓坡の可能性が考えられる。

遺物出土状況 覆土中からは、土器の破片が出土したにどまるが、その中に、1の須恵提瓶の颈部破片、2の土師壺の底部破片が含まれていた。1の須恵提瓶片は、2層中ほどからの出土である。

年代 覆土中の出土遺物からみて、鬼高期の可能性がある。

第72表 第1号土坡土器観察表

分類	法 面 積 率 %	寸 寸 寸 寸		保存度	成 成 成 成	色 色 色 色	質 質 質 質	成 形 形 形				出土 状 況 (床 高 さ) (cm)	備 考	
		直 径 幅 幅	口 縁 縁 縁					内 部 部 部	外 部 部 部	口 口 口 口	横 横 横 横			
1 須恵提瓶	?	? ? ?	? ?	口側部 のみ%	やや不良	赤褐色土色； 密 +浅緑色白帶付く 上緑色色斑付く	土	内	口	クロ			+35.0	
								外	口	ミ	ミ			
2 壺	?	? ?	87	? 深	良	褐褐色 EARTHENWARE	土	内	底	ミ	ガ	キ	-	
								外	口	ヘタケ	ア	リ		

第2号土坡 (058) (第223図)

検出状況 本土坡は、古墳時代の第36号住居跡の南南東37mに位置する。立地は、台地の平坦面上である。

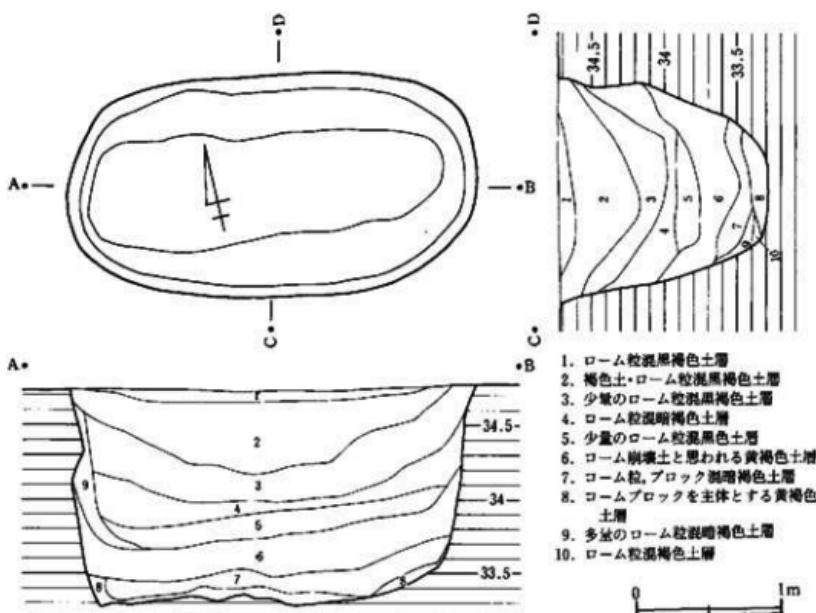
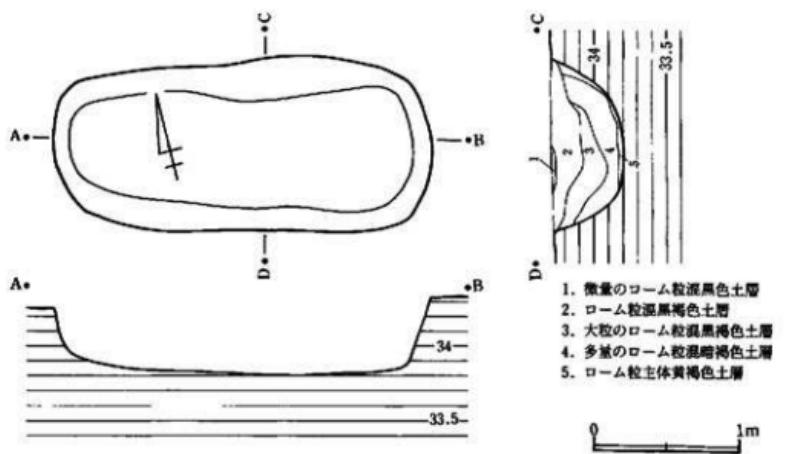
形状・規模 平面形態は、小判形である。長径2.8m、短径1.5m、深さ1.4~1.5mである。底は、ほぼ平らであるが、多少凹凸がある。墓坡の可能性が考えられる。

遺物出土状況 覆土中からは、遺物は出土しなかった。

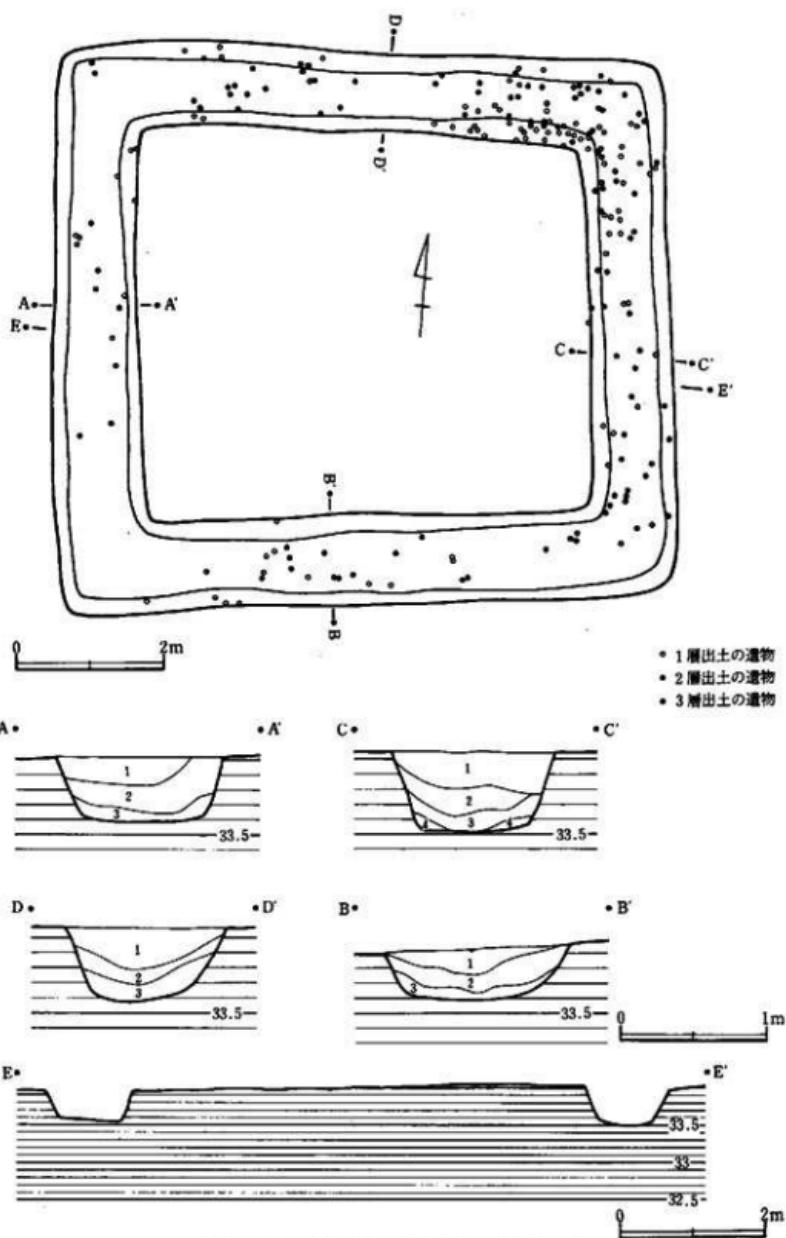
年代 形状の類似から、第1号土坡と同時期の可能性が高い。

4 方形周溝状遺構 (055) (第224図)

検出状況 本遺構は、調査区の南西側に位置する。標高はその検出面で34mである。立地は、台地の平坦面であるが縁部に近く、南側は、小さな谷津によってつくられた緩やかな斜面となっている。周囲は古墳時代の住居跡によって囲まれている。



第223図 第1号土塚（上）・第2号土塚（下）遺構図・遺物実測図



第224図 方形周溝状遺構遺構図・遺物位置図

形状・規模 周溝外周で、東西方向の辺が8.4m、南北方向の辺が東側7.5m、西側7.0mで、台形を呈している。マウンドは伴わず、主体部もみつからなかった。

周溝 幅1.0~1.2m、深さ0.35~0.5mで、断面は逆台形である。

遺物出土状況 上師器片を主体に須恵器片が少量出土した。土師器片は、鬼高窓のものばかりである。土師壺の種類をみると、識別可能な12個体分の破片中、8個体は第III群に、4個体は第IV群に入るとと思われる。また、土師壺片には、赤彩のあるものが目立った。

年代 鬼高窓の土師器の周溝覆土中からの出土から、鬼高窓の可能性が高い。

覆土	1. ローム粒混暗褐色土層	3. 多量のローム粒とロームブロック混黄褐色土層
	2. ローム粒混褐色土層	4. ローム粒混暗褐色土層

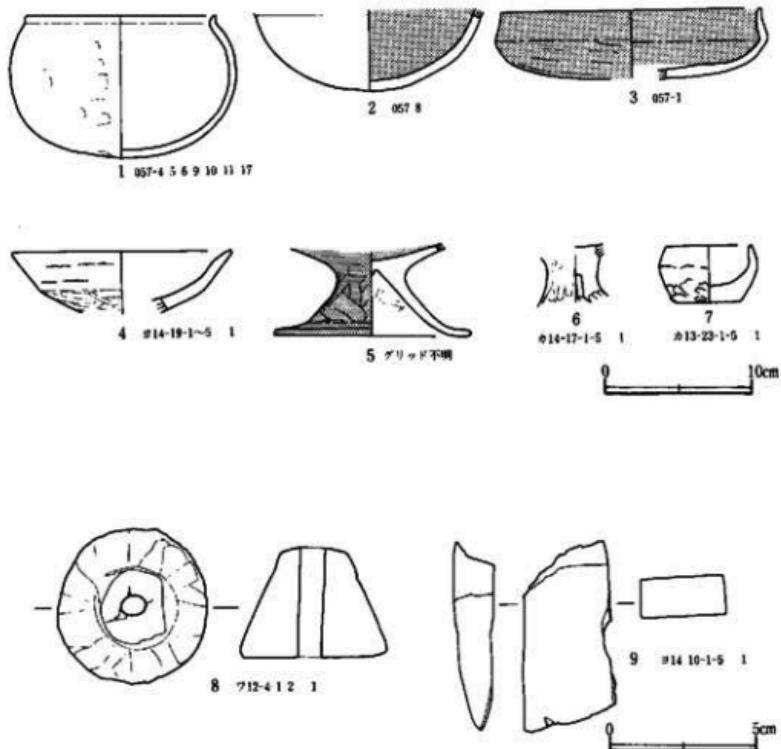
(矢戸三男 石倉亮治 菊淳一 服部哲則 観察表作成 服部)

付章 グリッド表採の遺物 (第225図 第73・74表)

表採された遺物のうちの主なものは、第225図の通りである。057は、当初、遺構として調査を始めたが、途中で遺構ではないことが判明した落ち込みである。(菊淳一)

第73表 グリッド採集土器観察表

順位	種類	法寸 (mm)			遺存度	成色	質	土	成形・調候				出土状況 (底面 ~) (cm)	備考	
		高	口幅	底幅					内	口	ココナ	テ	割		
1	壺	97	130	坪	155	%	良	内深褐色 外赤褐色 内側とも 黒褐色	内	口	ココナ	テ	割	ココナ テ	—
									外	#	#	#	#	ヘラケズリ 後ナダ	
2	#	?	?	?	7	U型部 全く出	やや不良	地暗褐色	内	#	#	#	#	ナダ	外側は使用により 荒れている 内壁中央を残して 全表面
									外	#	#	#	#	ヘラケズリ 後ナダ?	
3	#	47	180	?	187	%	?	地暗褐色 長	内	#	#	#	#	ナダ	内壁中央を残して 全表面
									外	#	#	#	#	ヘラケズリ	
4	高	坪	?	150	?	?	?	?	内	基底	ナ	ア	割	ナダ	—
					外				#	ヘラケズリ	#	ヘラケズリ	ヨコナダ		
5	#	?	?	?	?	?	?	?	内	口	ココナ	テ	割	ミダキ	—
									外	#	#	#	#	ヘラケズリ	
6	#	?	?	?	?	?	?	?	内	調	竹籠のような 調	テ	割		—
									外	#	ヘラケズリ				
7	手作	39	58	45	56	%	?	?	内	口	ココナ	テ	割	ナダ	—
									外	#	#	#	#	ナゲ子邊は指 輪による押し 押えワタの 痕あり	



第225図 グリッド採集の遺物

第74表 グリッド採集土製品・石製品観察表

分類 種類	法 量				遺存度	成 形	色	測 定	胎 土	せ い け い	出 土 状 況 (深 度 ～) (cm)	備 考
	高さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	余量(cm)								
土製器物	50.5	36.5	8.5	50	完	良	褐 色	直 筒 形	砂 質 胎 土	陶 器 ケ ズ リ → ナ ダ (横 位)	—	—
石	31	64	—	35.3	完	良	褐 色	—	4面研磨	—	粘板岩製(硬質)	—

第5章 歴史時代

1 概 要

歴史時代の遺構は、住居跡2が検出された。ともに国分期に属する。

住居跡は、互いにひどく離れている。第44号は、タルカ作の台地の北東の先端にある。第45号は、同じく南西の張り出しの突端にある。2つの住居跡の間の距離は、200m強ある。しかし、立地はどちらも同じで、台地の肩口である。

2 住 居 跡

第44号住居跡 (004) (第226・227図 第75表)

検出状況 本住居跡は、古墳時代の第3号住居跡の東14mに位置する。立地は、台地の平坦面から斜面にかかる肩口であり、北東方向へ向ってゆるく傾斜したところである。タルカ作の台地の北東のはずれ、突端にあたる。北側には大きな谷津が、東側には北へ向ってひろく大きな谷がある。床面の標高は、33.50mである。遺構の遺存状況は、良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。中には炭化物と焼土が含まれており、その量は、床面近くが多く、上の方は少なかった。床面からは、炭化材が転がった状態で出土した。

形状・規模 平面形態は、ほぼ正方形で、カマドのある西壁の長さが最も短く、2.6mであり、のこる3辺は、2.9mである。主軸の方位は、N-110°-Wである。壁は、高さが、斜面の下方側で4~9cm、上方側で39~40cmであり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

カマド 北西壁の中央に位置し、黄白色の山砂を主として構築されている。ローム壁の角を、北西方向へ20cmばかり掘り抜けて煙道がつくられている。また、カマドの部分の床は、5cm前後三角形に掘りくぼめられている。天井部はのこっておらず、左右の袖部がのこるだけで、火床の位置もつかめなかった。このカマドとは別に、西壁の中央に、カマドを築いた痕がみつかった。煙道をつくったローム壁への掘り込みがのこっていた。

遺物出土状況 床面からは、4の土師皿が出土し、覆土中の床面から9cmで2の土師壺が、同20cmで3の土師壺が出土した。

覆土 1. 掘乱

5. 暗褐色土とローム粒から成る黄褐色土層

2. ローム粒、若干の炭化材と焼土粒混暗層

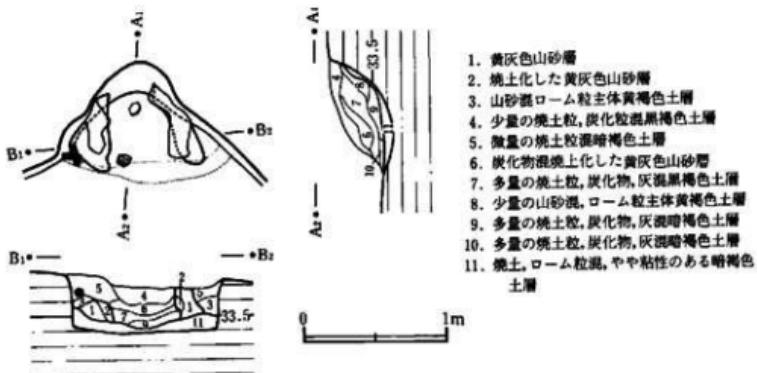
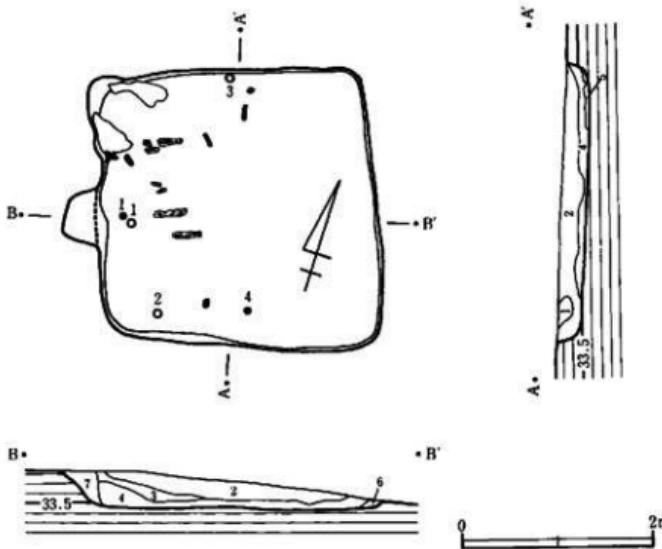
6. ロームから成る黄褐色土層

褐色土層

3. ローム粒混暗褐色土層

4. 多量の炭化材、焼土粒混暗褐色土層

7. カマド



第226図 第44号住居跡遺構図・遺物位置図（上）・カマド実測図（下）



第227図 第44号住居跡遺物実測図

第75表 第44号住居跡土器観察表

器種	高さ mm	口径 mm	底面径 mm	厚さ mm	保存度	地 成 色 調	胎 土	成形・調整態						出土状況 (UE面～) (cm)	備考
								内	外	ローテー	ローテー	ローテー	ローテー		
1 磁	52	163	82	—	鉄 錆 斑 斑	良	銅赤褐色 底及肩部に 白質母	密	内	ローテー	ローテー	ローテー	ローテー	+3.0～+5.0	表面内側に油煙が 付着
2 *	37	122	72	—	光	*	淡黃褐色 銅、内部 内面 赤褐色	密	内	ローテー	ローテー	ローテー	ローテー	+9.3	
3 *	37	116	80	—	*	*	黄褐色 底、外面 赤褐色	密	内	ローテー	ローテー	ローテー	ローテー	+19.7	
4 三	17.5	142	72	—	*	*	黑褐色 銅外表面 油煙付着	密	内	ローテー	ローテー	ローテー	ローテー	+2.5	墨書「生」

第45号住居跡 (060) (第228・229図 第76表)

検出状況 本住居跡はタルカ作の台地の南西端に位置し、本遺跡のもう1軒の国分期の住居跡である第44号住居跡とは、ちょうど平坦面をはさんで台地の反対側になる。立地は、台地が南北へ向って突き出したその尖端の斜面部であり、西に大きな谷津が、南に西へ向ってひらく谷がある。床面の標高は、32.00mである。遺構の遺存状況は良好である。覆土は、住居跡の中央が最もへこんだレンズ状の堆積をしていた。東壁際から炭化材が多く出土し、床面にも焼土の堆積が目立った。

形状・規模 平面形態は正方形である。一辺2.9～3.1mである。主軸の方位は、N-16°Wである。壁は、高さが22～78cmあり、床面からやや上ひろがりに立ち上がる。

床面 ハードロームを平らに削って床としており、貼り床は、おこなっていない。

カマド 北壁の中央に位置し、黄灰色の山砂を主として構築されている。ローム壁を、幅50cm、奥行き25cmの山形状に掘り込んで、煙道がつくられている。煙道の下面には土が貼られている。天井部は、一部のこるが、中に流れこんでいる。左右の袖部ものこる。

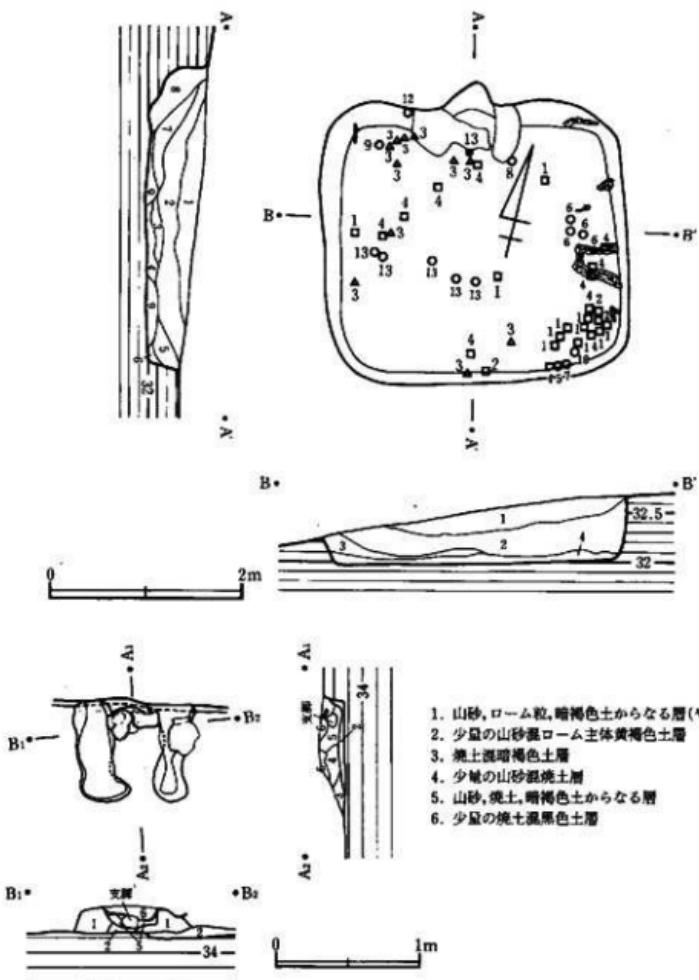
遺物出土状況 完形の土器は、上部の壺が6点、皿が1点出土したが、いずれも床面から浮いての出土である。12の上部壺は、外壁に「盃」の墨書と「丕」、「十」の刻書があり、内底のへりに「丕」の刻書がある。

- | | | |
|-----|----------------------------------|-------------------------------|
| 覆 土 | 1. 褐色土、微量のロームブロック混黑色
土層 | 6. 微量の焼土混、ローム粒主体黄褐色土
層 |
| | 2. 少量の褐色土、炭、焼土粒混、ローム
粒主体黄褐色土層 | 7. 山砂、少量の焼土粒混、ローム粒主体
黄褐色土層 |
| | 3. 多量の焼土混黄褐色土層 | 8. カマド |
| | 4. 上部に炭が層を成す黄褐色土層 | |
| | 5. 少量の焼土粒、ロームブロック混暗褐
色土層 | |

(鶴淳一 服部哲則 觀察表作成 服部)

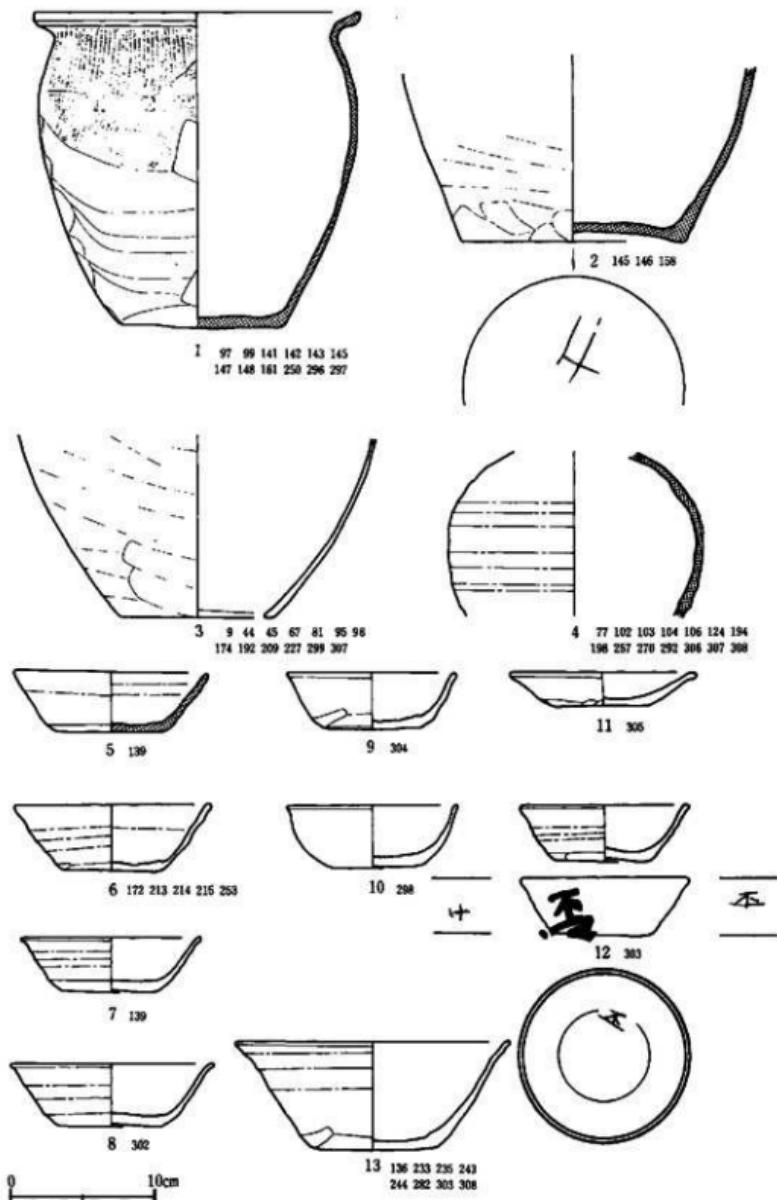
第76表 第45号住居跡土器観察表

番 号 (2) 名	形 種	寸 寸 寸 寸 寸 寸			透 透 透 透 透 透	地 成 成 成 成 成	色 調 調 調 調 調	輪 十 十 十 十 十	成 形 ・ 調 葉				出 土 状 況 (E. 高 さ) (cm)	備 考	
		M (mm)	W (mm)	H (mm)	厚 (mm)				内 (mm)	外 (mm)	内 (mm)	外 (mm)			
1 滝 窓	壺	217	227	113	223	%	やや不良	明褐色	密	内口ヨコナデ				+5.2～+24.2	
2.	?	?	?	153	?	調査のみ	?	暗褐色	?	内側ナデ	内側ナデ	内側ナデ	内側ナデ	-11.2～-15.5	
										外#テクニメ	#?				直に窓印
3 窓	?	?	?	98	?	調査のみ	良	暗赤褐色	?	内#ヨコヘラナデ				+8.0～+25.9	カマド
4 滝 窓 壺	?	?	?	176	調査のみ	%	?	灰白色	?	内#ロクロ				+0.8～+45.4	
										外#?					
5 滝 窓 壺	40	133	73	-	光	やや不良	青灰褐色	中や粗	内口#	内口#	内口#	内口#	内口#	+43.4	
6.	壺	45	133	66	-	光	?	暗褐色	?	内#	内#	内#	内#	-9.3～+18.2	
										外#	外#	外#	外#		内輪ヘラケズリ
7.	?	37	122	64	-	調査のみ	?	暗褐色	?	内#	内#	内#	内#	-143.4	
										外#	外#	外#	外#		内輪ヘラケズリ
8.	?	42	139	68	-	光	?	暗褐色	?	内#ロクロ後#ミガキ	内#ロクロ後#ミガキ	内#ロクロ後#ミガキ	内#ロクロ後#ミガキ	+8.0～カマド	
										外#ロクロ	外#ロクロ	外#ロクロ	外#ロクロ		内輪ヘラケズリ
9.	?	38	116	67	-	光	?	明褐色	?	内#	内#	内#	内#	+5.5	
										外#	外#	外#	外#		手持ちヘラケズリ
10.	?	42	119	66	-	光	?	暗褐色	?	内#ミガキ	内#ミガキ	内#ミガキ	内#ミガキ	+3.9	
										外#ロクロ	外#ロクロ	外#ロクロ	外#ロクロ		内輪ヘラケズリ
11.	皿	22	127	64	-	光	?	暗褐色	?	内#良	内#良	内#良	内#良	+12.6	
										外#	外#	外#	外#		手持ちヘラケズリ



第228図 第45号住居跡遺構図・遺物位置図(上)・カマド実測図(下)

品 目 番 号	法 面 積 (m ²)	深 度 (m)	性 質 (保 留 状 態)	透 視 度	素 材	成 分	色 調	形 状	成 形 ・ 調 整						出 上 状 況 (底 面 一) (m)	備 考
									内 部 材 料	内 部 形 状	内 部 材 料	内 部 形 状	内 部 材 料	内 部 形 状		
12 坪	38	115	63	—	光	板	暗褐色	板	内 部 材 料	コ	ク	ロ	内 部 材 料	内 部 材 料	+40.2	基盤、割字あり
13 坪(火堀)	74	190	78	—	不	良	棕褐色 黒褐色多し	長 石	内 部 材 料	ハ	ク	メ	内 部 材 料	内 部 材 料	+1.8~14.8 カマド	



第229图 第45号住居跡遺物実測図

第6章 調査の成果

タルカ作遺跡第III群第1類土器の諸問題

——子母口式土器の成立——

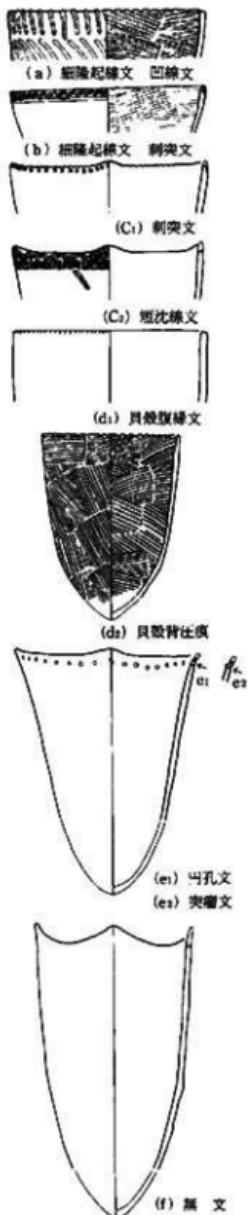
はじめに

タルカ作遺跡出土の縄文土器を大きく10群に分けて、各々の概要を記載した。それら各群の大よその帰属時期、換言するならば、各群が如何なる既存型式に該当するものであるのかは、各個の記載に照して、ほぼ推測することが可能であったが、ここで仮に第III群第1類と分類した土器群は、極めて難解な様相を呈し、既成の諸型式との対応がなかなかうまくいかなかった。種々の考察を試みた結果、一応暫定的な結論に到達したにすぎないが、そこでの諸問題を呈示することは、今後、縄文早期後葉の土器群を扱ううえで必要なこととも思われる所以、若干の考察を付すこととした。

(1)

タルカ作第III群土器とは、先に瞥見したようにひろく縄文早期後葉の条痕文系の土器を包括していた。包含層中の遺物に関しては、神奈川県茅山貝塚（赤星、岡本1957）出土土器を基準にして、全体を大きく2分し、茅山貝塚にない部分を第1類に、ある部分を第2類に区分した。第2類に関しては、胴部の屈曲する器形ならびに「凹線あるいは刺突等によって文様構成される」ことから、茅山貝塚下部貝層群（6層～9層）の土器と対比され、茅山下層式の範疇に帰属することは明らかであると考えられた。さらに、表裏に貝殻条痕をもち、纖維混入の著明な土器片、あるいは平底の破片などもこの式に加えられることも明白であろう。一方、第14号炉穴の土器に関しては、茅山貝塚貝層下土層の土器と共通した特徴を示すところから野島式と対比された。なお、茅山貝塚上部貝層の土器と対比される資料は一例も検出されなかった。かくして、第2類が大きく分けて新旧2期の遺物からなることが判明するのだが、第2類自体は全体でも数個体あるにすぎず、包含層、遺構を合わせると復元された3個体の土器以外に1881点検出された第III群土器のうちに、それらが占める比率は低く、第III群土器の相当量のものが第1類に包括されるものと推定された。

さて、第III群第1類とはどのような特徴をもった類であるのか。第1類は有文のものと無文のものとに2分された。前者の全体に占める割合は極めて低く、10パーセント未満であると考えられる。先に包含層検出の第1類有文土器が第III群に占める割合を3.9%と報告したが、第III群中には第2類も若干量混入しているものの、それらはむしろ少數であるから、この数値を大きく上回ることはないであろう。有文土器胴部破片の存在を勘案し、大体のところだが、4～5%ぐらいであろう。残余のものが無文土器となるが、無文のものには、擦痕をとどめる場合もあるが、文字通り無文のも



第230図 第三群第1類土器の組成

のと、貝殻条痕の付されたものとの両者があり、それらはほぼ同数ずつ検出されている。両者の正確な比率を知りたいのだが、ここでも第2類の存在が障害となって、正確な組成は判らない。仮に、表裏貝殻条痕の土器の一部を第2類に比定すると、第1類中に占める貝殻条痕の割合は若干低率なものとなることのみ指摘しておきたい。

有文土器に関する観察結果はすでに第3章にて記載したとおりであるが、もう一度まとめておこう。本遺跡より検出された有文土器には以下のような種類がある(第230図にその模式図を示す)。

(a) 細目の粘土紐を口縁部に斜位に貼付するもの。胸部にはやはり斜位の凹線が認められる。

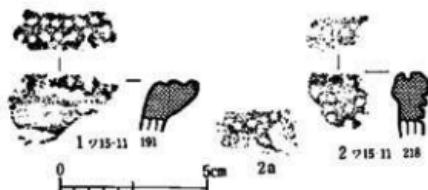
(b) 斜位の短隆線と籠状の細隆線による区画内に円形刺突文が配されるもの。

(c) 口縁下に刺突(c₁)、短沈線列(c₂)の加えられるもの。

(d) 貝殻文の土器で、口唇上に斜位の貝殻腹縁の刺痕の認められるもの(d₁)。やはり口唇部に貝殻殻頂部の背圧痕の認められるもの(d₂)。d₁は絶条体圧痕との判別が難しい(小笠原 1974)。

(e) 刺突文の一種であるが、円形竹管による円孔文(e₁)。O・I突瘤文(e₂)。

これらの特徴を要約すると、文様施文は基本的に、短隆線、刺突文、貝殻文、そして不明確ながら沈線文があり、絶じて文様帯はその幅が狭く、口縁部周辺に限定されている。また、器面調整をみると、無文、貝殻条痕文の両者があり、ほとんどの資料の胎土中に微量の植物纖維が混入されている。このような特徴をもつ土器の報告例は極めて乏しく、その編年的位置づけに苦慮したが、千葉県城ノ台(北)貝塚(吉田 1955)第5類土器が最も近似する資料であろう。この第5類土器は、吉田氏によって子母口式に対比されているから、仮にタルカ作第三群第1類土器が城ノ台(北)貝塚第5類に対比されるという想定が正しいものとすれば、その編年的位置づけも必ずしも決せられることになるが、ここには若干の検討を要する



第231図 タルカ作遺跡第III群第1類土器

問題が伏在している。

(2)

よく知られているように、城ノ台（北）貝塚においては上部混土貝層上に純貝層が堆積し、前者からは第4類とされた田戸上層式が出土し、純貝層中より問題の第5類土器が層位的に検出された。第5類土器は「無文のものがかなり多く、出土量の殆んどすべてであるといつてもよい」という指摘のように、無文、条痕文を主体とする含繊維尖底土器の一群であり、微量の有文土器を含んでいる。有文のものはA～Dの4類に細分されている。（第232図）

A類 口唇部のみに刻目又は貝殻文が施文されたものと、無文、条痕文の土器。

B類 口縁部に縦方向の隆線文の施文されたもの。

C類 沈線文又は刺突文の施文されたもの。

D類 内側に突出した口縁をもつ土器で、刺突文と貝殻文の付されたもの。

これらはタルカ作第III群第1類にそれぞれ対応する土器である。すなわち、A類はタルカ作d種と第1類の無文、条痕文土器の全てが、B類にはa種とb種が、C類にはe種が対応しよう。D類は1個体のみであるが、本遺跡においても2例の類似する資料（第231図）を検出することができた。1の平坦な口唇上の刺突は巻貝の殻頂部の垂直刺痕であり、口縁下には浅い沈線の一部が看取される。2も同趣の刺突文の土器であり、2列1単位の刺突列が、鋸歯状の文様構成をとる可能性が強い。このように両遺跡間の土器は極めて類似する特徴を共有すると言ってよく、従ってまた、ある特定の時期にこのような特徴をもつ土器が、一定の地域的ひろがりをもって分布していたらしいことも推定されるのであるが、はたしてこれが所謂子母口式に対比し得るか否かを検証しなければならない。

子母口式に関しては、言うまでもなく、神奈川県子母口、大口坂両貝塚発掘資料に基づいた「日本先史土器図譜」（山内 1967）の解説を典拠としなければならない。周知の記載であり、要点のみを引用しよう。

（1）器壁の彎曲の少い深鉢形尖底土器が多く、口縁部に突起のあるものが少くない。

（2）通常厚手の製作で、繊維の混入は甚微量だが多数の土器に認められる。

（3）少量の貝殻条痕もあるが、擦痕の付されたものが多いため多い。

（4）土器外面には装飾の全く無いものが多いが、稀に諸種の文様が付される。

（5）有文土器には①隆起線文、②点列文、③沈線文、④絡合条痕文等の種類が認められる。

（後に「日本先史土器の繩文」（山内 1979）図版64下段に波状の条線文あるいは条痕文の土器が示されたが、原体、出土地共に不詳であるため、一応有文土器には含めないでおく）



第232図 千葉県城ノ台(北)貝塚第5類土器

さて、このように定義された子母口式とタルカ作第III群第1類、城ノ台(北)第5類との関係はどうであろう。各項ごとに検討してみよう。まず器形については、その代表的な例(第230図f)から明らかなように、ほぼ共通した傾向がうかがわれ、繊維の混入状況、器面調整についてもよく一致した特徴を示している。器厚については、タルカ作、城台岡遺跡の場合、あまり厚手の製作を示すものではなく、むしろ8mm前後のものが多く、子母口、大口坂例よりは全体的に薄手となるようである。有文土器の稀少であることは共通するが、両者に大きな相異が認められるのは有文土器のあり方である。

有文土器における決定的な差異はタルカ作、城ノ台(北)には、子母口、大口坂で多用されている、縦条体压痕文の欠落することであるが、また逆に、タルカ作、城ノ台(北)に認められた貝殻文の土器が子母口、大口坂には欠落している。点列文(刺突文)に関しては、子母口、大口坂例では口縁下に2~3条の粗雑な押し曳き状の刺突列がくるのが普通だが、タルカ作(C₂)、城ノ台(北)(図版IV左4、同右21)など、斜行する刺突列がやや幅の広い文様を構成する場合があり、また、城ノ台(北)D類の存在など、細部に違いが多い。この間の事情は隆起線文についても該当し、タルカ作、城ノ台(北)にある口縁下の短隆線は子母口、大口坂に無く、逆に子母口、大口坂にある細隆起線を多用した文様構成を示すものは前者には認められない。このように、有文土器に種々の差異が認められることから、両者を一律に子母口式の範疇でくくることには種々の問題が残されることになろう。

この問題に関しては、吉田氏も昭和18年に調査の実施された、城台(南)貝塚(池田 1949)と城ノ台(北)貝塚との関連性に就き予察されている。城台(南)貝塚の同期の資料(C₁、C₂類)は

十分に示されていないが、示された資料による限り、基本的に子母口、大口坂例と近似した内容を示すようであり、時期的にほぼ平行するものと考えてよい。この同一台地上に営まれた両貝塚の土器の差異について、吉田氏は特に絡条体圧痕文の有無に着目され、それが時期差もしくは嗜好の差によるものであることを指摘するとともに、田戸上層式から茅山式への円滑な推移を指摘された池田氏を批判し、田戸上層式→子母口式→野島式という編年案を強調された。

この子母口式をめぐる系統関係に就いては後述するとして、すくなくとも、この段階において、城台（南）貝塚と城ノ台（北）貝塚の土器の示す内容に明らかな差異が認められること、換言すれば、城ノ台（北）貝塚の土器と子母口式との異同が認識されていたことを確認しておく。

昭和30年の段階では、城ノ台（北）貝塚と子母口、大口坂貝塚（直接的には城台（南）貝塚であるが）の土器の違いは、時期差とも嗜好の差とも判然としなかったのであるが、昭和42年に至り、多摩ニュータウンNo269遺跡の報告書（安孫子 1967）中で、安孫子氏により子母口式の4段階細分案が打ち出された。そこでは城ノ台（北）貝塚例は「貝殻腹縁文を所有し、絡条体圧痕文を所有しない一群」と総括され、「絡条体圧痕文と貝殻腹縁文とを併有する一群」である子母口、大口坂貝塚に先行する位置を与えられ、子母口式の最古段階、田戸上層式の直後段階という積極的な位置づけがおこなわれた。この細分案自体は、のちに安孫子氏自身によって「一旦棄却」され、「研究史として清算」されることになるのだが（安孫子 1982）、城ノ台（北）貝塚第5類土器を田戸上層式直後あるいは子母口式の古い段階とする見解は、鈴木秀雄氏（鈴木 1980）、高橋雄三氏（高橋 1981）等にもあらわれ、今なお再検討される余地を残している。

（3）

田戸上層式には、沈線文、貝殻文、結節文、刺突文、細隆起線文など多くの施文手法があり、表出される文様も直線文と曲線文とが複雑に組み合され、極めて変化にとみ、その特徴を簡単に述べることは難しい。しかし、新東京国際空港内No.7遺跡（西川 1984）の典型的な田戸上層式の資料を見ると、直曲線文と言われる入組文状の多種多様な文様が描出されているが、それらの基本的な特徴として文様帶のあり方が共通している点に気づく。田戸上層式の規範的な器形はキャリバー形の口縁部と屈曲する頸部とを有する深鉢であるが、頸部屈曲部によって例外なく文様帶が区画される。「田戸下層式から上層式への変化は、おおよそ縦の分帯の消滅、区画文の簡略化と横への文様の連続化」（西川 1984）にあるという指摘のとおり、頸部区画帯によって文様帶が上下に分帯されることが原則であろう。この頸部区画帯のあり方を手がかりに型式学的に細分されることになるが、本稿は田戸上層式の細分を目的とするものではないので、概要を記すにとどめたい。

頸部区画帯による文様帶の区画、分帯のあり方をみると、（1）口縁直下に区画帯が位置し、狹少な口縁部文様帶と幅のある胴部文様帶に分帯するもの、（2）区画帯が頸部に下降し、やや幅広の口縁部文様帶と幅のある胴部文様帶に分帯するもの、（3）区画帯が胴部にまで下降し、幅の広い文様帶を画するもの、という3者を識別することができる。これらは（1）→（2）→（3）と変化したにちがいない。

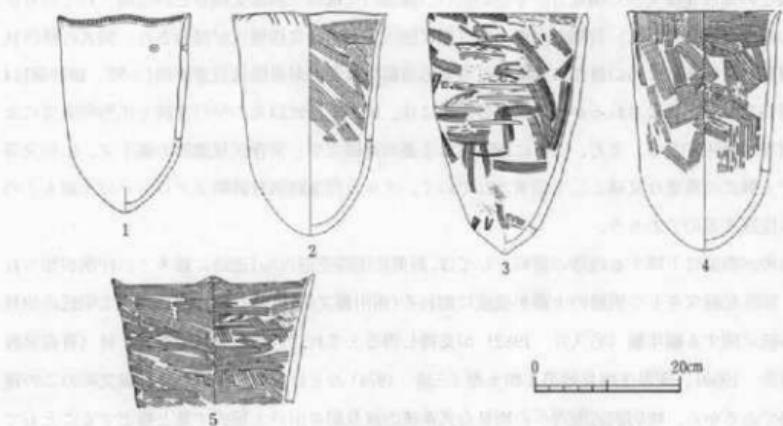
新東京国際空港内No.6遺跡B地点(宮 1981)の土器(第106図11)を見ると、頸部の屈曲部によって横位の菱形連綴文から構成される幅の狭い口縁部の文様帯と胴部文様帯とが区画されているが、胴部の構成は城ノ台(北)貝塚の完形土器(報文図版I下)の文様構成が踏襲され、両式の移行状況を暗示している。この口縁部に看取される菱形連綴文は茨城県常陸伏見遺跡例(小野 1979第114図、第153図5)と比較されるが、これらの土器には、田戸下層式以来の平行沈線と爪形刺突文による区画帯が著明である。また、ここに観察される菱形連綴文や、常陸伏見遺跡の蕨手文、山形文等は田戸上層式の重要な文様として伝承されていく。タルカ作遺跡第II群第2ブロックの土器もこの段階に位置するのであろう。

区画帯が頸部に下降する段階の資料としては、新東京国際空港内No.7遺跡に数多くの好例が知られるが、細隆起線文をもつ別種の土器が組成に加わる(西川報文第50図)。仮に、名久井文明氏の物見台式系統に関する編年観(名久井 1982)が支持し得るとすれば、青森県長七谷地1号(青森県教育委員会 1980)、同県庄内墓地第1類土器(三浦 1974)などは、明らかに細隆起線文系のこの種の土器であるから、吹切汎式圏内への物見台式系統の波及期を田戸上層式中葉と推定することもできる。

「繩文上器大成1」図版152、153の土器が、頸部区画帯による文様帯の分帯から胴部区画帯による一帯型構成に転換した段階の資料とみられる。152が典型的例で153はその変異体であろう。152は4単位の突起をもつ土器で、尖底土器に復元されているが、旧態は不明であるという(土井 1982)。器形を見ると、直線的に外反する深鉢形土器で、胴部中央に付された刻目の入った細隆起線によって、胴部上半に幅の広い文様帯が形成されている。施文は刺突痕をもつ円形の瘤状浮文と連続刺突による鋸歯状の文様からなるが、刺突のある瘤状浮文は、前段階の諸例から判断すると、細隆起線と対になるから、この土器が細隆起線文系統の土器であることを疑うことはできない。類例が東京都戸塚遺跡(小暮 1984)からまとまって検出されているが、2号住居跡の大形破片の文様は田戸遺跡出土の図版152例の文様と比較することができる。

この期の東関東の情況には不明なところが多く、実体の究明は将来にまたねばならないが、城ノ台(北)貝塚の一部に該当する資料が含まれているかもしれない。田戸遺跡や戸塚遺跡の例を見ると、前段階の土器の器形から脱し、外反する口縁部を有する尖底土器が主体的となり、区画帯による文様帯の2段の分帯は認められない。区画帯は胴部中位にまで下降し、幅広の文様帯が刺突文と細隆起線によって形成されるようになる。さらに、施文自体が簡略化され、規範的な文様の横位の連續性が崩壊している。今、この観点に立って城ノ台(北)貝塚の土器を見ると、報文図版III右5・11・13・15などが注意され、同3などもこの段階に下降してくる可能性が高い。ここでもうひとつ指摘しておかなくてはならないのは、第4類A類とされる口縁部に刻目と刺突とを有する多量の無文土器の存在である。

第4類A類は第4類(田戸上層式とされたもの)の約半数を占め、むしろ第4類の主体的な土器である。田戸上層式に含まれる無文土器の比率についての詳細なデータは少ないが、新東京国際空

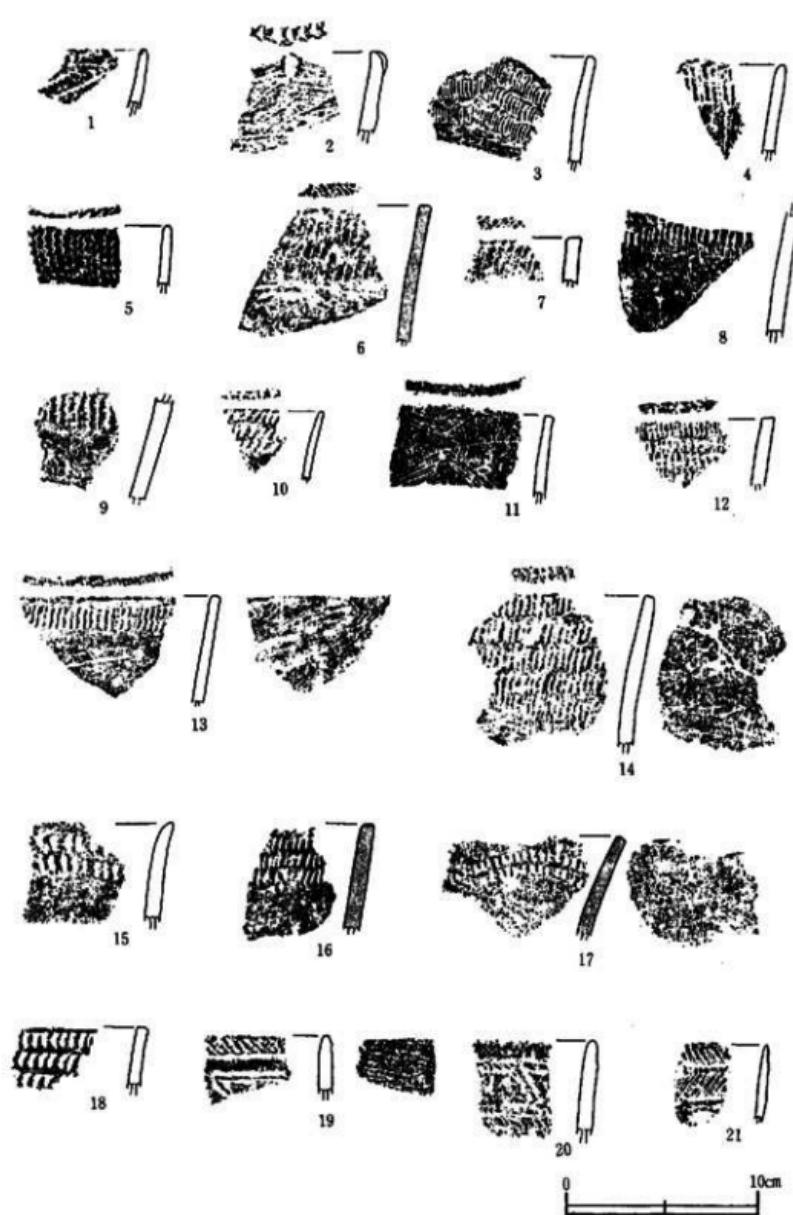


第233図 埼玉県ト伝遺跡A地点I類・II類土器

港内No.7遺跡A地点では35個体中5個体(14%)あるにすぎない。しかも、第4類A類の器形をみると、口縁部の外反するものが多いらしく、おそらく前記の土器と共伴するのであろう。戸塚遺跡においても無文土器の比率は高いから、田戸上層式末葉に至り、俄かに土器の無文化が促進されたものとみることができる。

城ノ台(北)貝塚の該期の諸例を通して、施文手法には細沈線と刺突とが多用され、さらに少量の刻目細隆起線が認められよう。貝殻文の実体は明らかではない。先に、物見台式系統の成立期について言及したが、この系統はその後青森県螢沢遺跡(三宅 1976)第IV、V類のように土着化が進行し、田戸上層式との脈絡を失っていくが、一方、この段階には大寺下層式が成立する。その時期はおそらく関東地方において器面の無文化が著しく進展した段階に並び、さらに、円形刺痕のあり方を手がかりにすれば螢沢遺跡第IV、V類一大寺下層式—田戸上層式(新)段階という田戸上層式末葉の諸型式の系統的分化の状態が推察される。おそらく、貝殻文の衰退の背景として、このような田戸上層式系統の在地型式としての分化状況を指摘し得るのであろう。

そしておそらく、関東地方南半においては、この状況は次段階にも及ぶと考えられる。この間の推移は、城ノ台(北)貝塚における上部混土貝層から純貝層への土器型式の変遷に対応している。すなわち第4類から第5類への変遷過程を追うと、第4類に認められた田戸上層式を特徴づける区画帯の消滅をもって、別型式への移行が根拠づけられることになる。再び「縄文土器大成1」を開いてみると、図版152の土器の胴部の区画帯である刻目細隆起線から図版154(城ノ台報文図版IV左1・2)への変化に注意したい。図版154の土器では図版152の土器に認められた刻目細隆起線は、単に縦位の刺痕列として退化化するが、その頃にはすでに文様帶は形骸化し、むしろ父祖伝来の区画



第234図 阿玉台北遺跡A地点の土器

意識の痕跡化として理解されるであろう。

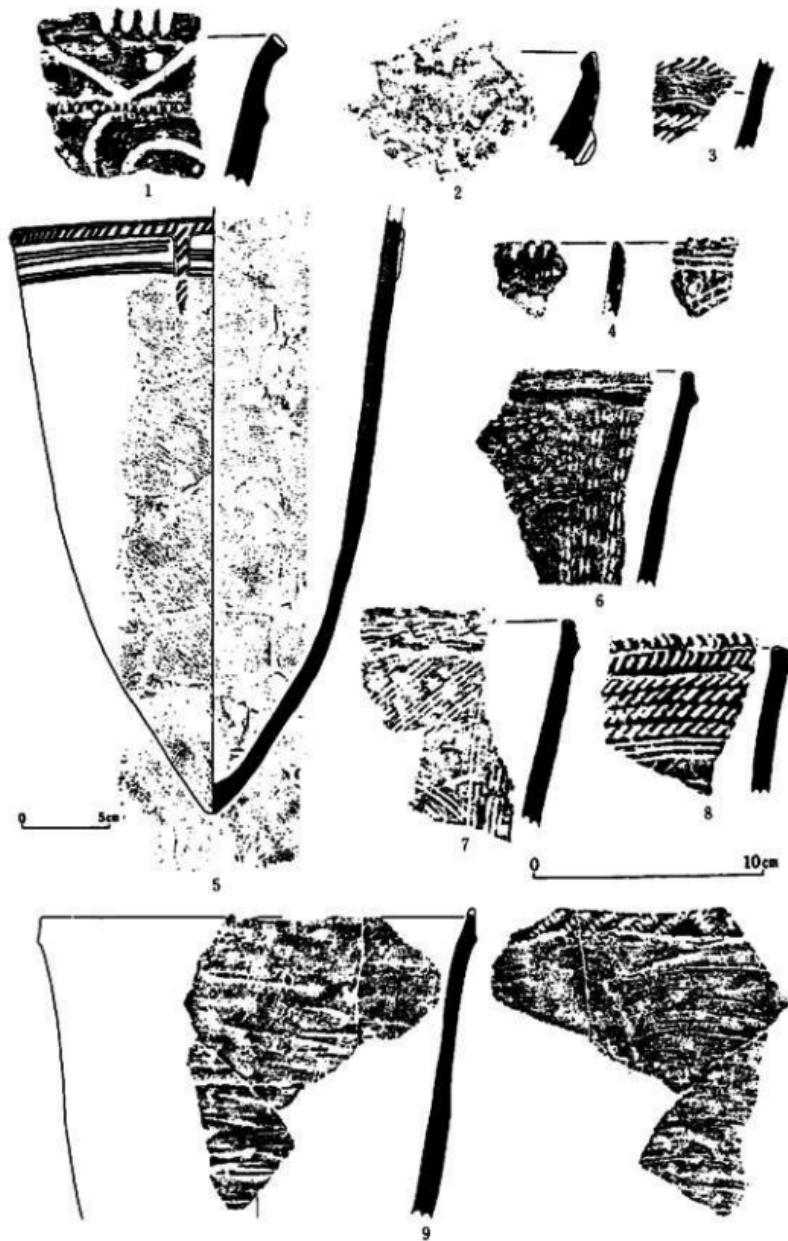
城ノ台（北）貝塚第5類の内容に関しては前項にて触れたが、タルカ作例を加えたとしても、その類例は極めて少ない。埼玉県ト伝遺跡A地点（鈴木 1980）（第233図）、同駒前遺跡（鈴木 1983）、千葉県阿玉台北遺跡A地点（矢戸他 1975）（第234図）等に近似する土器群が知られるが、その内容には若干の差異が認められ、あるいは城ノ台（北）貝塚とは時期差をもつかもしれない。基本的には刺突文、貝殻腹縁文、細隆起線文などによって、口縁下に幅の狭い文様帶が確立される。ところで、この段階の施文手法を遺跡ごとに検討してみると、ト伝遺跡A地点では貝殻文と細隆起線文が認められ、「ノーマルでない子母口式」という位置づけがなされているが、城ノ台（北）貝塚併行とみられる。一方、駒前遺跡には角押状刺突文とともに貝殻腹縁文があり、新たに絡条体圧痕文が出現する。

埼玉県針ヶ谷北通遺跡（土肥 1975）の第5群第1類土器、同明花向台遺跡B区第IV群、第V群上器（金子 1984）もこれらに似ているが、阿玉台遺跡A地点の資料が最も充実している。これらはおそらく、城ノ台（北）貝塚直後段階を形成するものと考えられる。

第234図に阿玉台遺跡A地点の資料の一部を示した。施文具については拓本から判定したが、貝殻腹縁による刺突文が目立つ。11～13は口唇部上面に絡条体が斜位に押捺されている。19～21は別段階の土器で後述する。刺突文は、駒前遺跡に見られる角押状のものではなく、むしろ箇状工具先端を器面に直角に近い角度で密接して押し曳く手法がとられる。各刺突例には2段、3段、5段のものがあり、全例が口縁部に平行施文されている。貝殻腹縁の刺突は、やはり器面に直角におこなわれるが、口縁に直交して刺突され、刺突列自体は平行する状態になる。問題となる絡条体圧痕は、（1）口唇部に斜位に連続押捺されるものと、（2）器面に数段にわたり平行押捺されるもの（報文第35一三図2、第208一IV図104）とがあり、駒前遺跡とは様相を異にしているが、同一時期とみられる茨城県中根大和田遺跡（茨城県史編集委員会 1979）にある低隆帯上の斜位の絡条体圧痕文を媒介にすれば、同一段階における変異との評価が可能であろう。

さて、この種の絡条体圧痕文の出自系統についてはどうであろう。これについては茨城県大寺遺跡（興野 1969）2層上部検出の著名な資料が母胎であると説かれている。（伊藤 1957、興野 1970、安孫子 1982等）。絡条体圧痕文は纏文草創期前半、草創期終末、早期中葉～早期末葉、中期前葉などの各期に断続的にあらわれるが、大寺遺跡上層の段階ではどうか。現在のところ、東北地方北半では、まず寺の沢式（名久井 1974）に出現し、吹切沢式に盛行するが、後続する早稻田貝塚1類（佐藤他 1957）や笛沢遺跡II類（三宅 1976）高ヶ長根IV遺跡第1群（庄内 1981）等の諸段階では明確でないから、吹切沢式系統の後葉には認められないであろう。一方、物見台式や田戸上層式にも絡条体は存在しないから、別系統に発したにちがいない。ここで問題とされるのが常世式（吉田 1962）である。

常世式の位置づけに関しては諸説があるが、大寺遺跡下層は福島県道德森遺跡2類に対比され、田戸上層式最末に編年され（中村 1976）、常世式への円滑な移行関係がうかがわれるから、おそらく



第235図 栃木県出流原小学校内遺跡の土器

く大寺遺跡上層は常世式に併行するばかりか、常世式細分の可能性をも示唆しているであろう。絡条体圧痕文自体を、貝殻腹縁文の置換されたものと解釈すれば(馬目 1982、安孫子 1982)、この置換期は大寺遺跡上層の新しい部分であり、福島県竹の内遺跡(馬目 1982)においては13-aから15-bへの過程とも推定することができる。

この視点に立って、関東地方における田戸上層式以降の土器群を観察してみると、城ノ台(北)貝塚は道徳森遺跡2類直後、大寺遺跡2層下部に、そして阿玉台北遺跡は大寺遺跡2層上部に対応するものとみられる。事実、阿玉台北遺跡においては常世式が共存し(第234図1・2)、細沈線間を縦位の貝殻腹縁の刺突で充填する土器(第234図8)や、胸前遺跡に1例ある刺突方向を違える多段の貝殻腹縁文等も、絡条体とともに南下した要素と考えられよう。すなわち、この段階に到って初めて子母口式の基本的性格が確立することになり、沈線文系統から貝殻条痕文系統へ転換する画期をなすものとも評価されることになる。この間の型的推移に関しては、最近報告された栃木県出流原小学校内遺跡(佐野市教育委員会 1984)の状況が示唆的である。

第235図に同遺跡の諸型式を掲げたが、大きく4種に分けて考えることができる。(1) 田戸上層式末葉の土器(1、2)、(2) 常世式土器(3、4)、(3) 口縁直下に一条の細隆起線文をもつ土器(5~8)、(4) 繼条体圧痕文土器(9)となるが、問題は(3)の帰属である。5の類例は城ノ台(北)貝塚(報文 図版III右3)にあるが、タルカ作遺跡第III群ブロック外第2類を媒介項として8と系統的に連続すると考えられる。8では多段の刺突列間に沈線による鋸歯文が認められ、大寺上層との関連から、矢島俊雄氏の御指摘のとおり、常世式と関連するから、5はその直前型式とみられよう。6、7は8と共に存し、だいたい同時期と考えられる。(4)の絡条体圧痕文の土器は、子母口式であるから、前記の土器との時期的な関係に微妙な問題を残している。仮に、5を(1)に共存したものと理解し、田戸上層式最末の土器とすれば、後続する6~7は子母口式初頭と理解されるから、多分、南関東における型的推移の状況から、(4)は6~7の土器に後続するのかもしれない。この仮説に立てば、5を除外する(3)の一群は、城ノ台(北)貝塚第5類段階における北関東の状況を明らかにする上で、逸することのできない一群と評価される。なお(2)が(3)、(4)と共に存したことは、あらためて説く必要もないが、正確な共存関係の確定は、なお常世式自体の細分をまつて決する必要があろう。

これまでの考察によって、タルカ作遺跡第III群第1類土器の占めるだいたいの編年的位置が決定できるのであるが、阿玉台北遺跡以降の土器群の変遷についても簡単に触れておこう。

城ノ台(北)貝塚において田戸上層式の文様帶構成が解体し、次期に口縁部に幅の狭い文様帶が独特的の施文具によって確立する過程を想定したが、以降の変遷は再び文様帶下限が脇部に下降する過程と把握することが可能である。この場合、刺突文系の土器には保守的な傾向が強く、文様帶拡張の要因は細隆起線の多用にあることが指摘されている。細隆起線文の系統的な変遷には不明のところが多いが、前記の出流原小学校内遺跡の例から、また戸場遺跡や城ノ台(北)貝塚例から田戸上層式末葉以降にも細隆起線文系の土器の系統的变化を追うことは可能である。城ノ台(北)貝塚

第5類、タルカ作遺跡第III群第1類をみると、(1)口縁部あるいはその直下に水平に細隆起線を貼付するもの、と(2)口縁部に斜位に細隆起線を垂下させるものの両様のあり方が指摘される。後続する駒前遺跡や多摩ニュータウンNo26の遺跡(安孫子 1967)、新東京国際空港内No7遺跡B地点(西川 1984)例では(1)と(2)は低平な隆帯に変化し、しばしば斜位の絡条体圧痕文をとどめるようになる。一方、これとほぼ同一時期かと考えられる神奈川県子母口貝塚と大口坂貝塚の資料(山内 1967)を見ると、太目の隆線とともに、たいへん細目の隆起線文が知られる。この細隆起線文は、水平、垂直、斜行、蛇行等、前段階のそれに比し、極めて変化にとむが、細隆起線上への絡条体の押捺は認められないようである。

おそらく、この細目の隆起線文は、この段階における新出の要素なのであろう。表出されるモチーフの詳細は現知し得ないが、木の根A式(安孫子 1982)と仮称された細隆起線文系土器の出自母胎と想定してよいであろう。これ以降は、阿玉台北遺跡A地点(第234図19~21)、明花向遺跡C区(金子 1984)、埼玉県高輪寺遺跡第2群土器(青木 1979)、千葉県勢子久保遺跡(飯塚 1982)段階を経て、埼玉県ささら遺跡IV区(鈴木 1983)の土器群が成立する。この頃、ようやく、神奈川県野島貝塚(赤星 1948)において貝層の形成が開始される。

(4)

本稿の主旨は、タルカ作遺跡において第III群第1類に総括された一群の土器の編年的位置を確定することにあるが、文様系統を軸とする段階設定に意を注いだ結果、この一群が、複数の型式に深く関わりをもつものであったこともあり、取り上げる範囲が広く、概要のみの記述にとどまっている。しかし、田戸上層式から子母口式に至る細かい諸段階認識の過程で、本土器群の編年位置づけに関しては大略の見通しを得るとともに、また、同時に、城ノ台(北)貝塚の重要性をあらためて確認することにもなった。子母口式の細分案としては、先に安孫子氏の四期編年を参照したが、その後の新資料の増加に伴なう手直しの必要性はあるものの、基本的な流れとしては、それほど大きな変更ではないかったと評価することができよう。また、本稿において、子母口式の型式細分設定を積極的におこなわなかったのは、本稿の主旨もあり、子母口式末葉の型式内容について詳述できなかったことによるものであり、野島式の成立過程とあわせて、別稿にて展開したい。

さらに、本稿において触れられなかつた問題は多い。ひとつは、常世式の系統的関係の背景としての東北地方における貝殻文系統の諸型式の推移であり、この点に就いては、一部、名久井文明氏の所説に負っていることは前項のとおりである。これと関連して、芳賀英一氏の常世2式(芳賀 1977)に就いても触れていない。さらに、問題の多い清水柳E類(瀬川他 1976)と、これに端を発する瀬川裕市郎氏の「世界観なり人生観」(瀬川 1982)についても、氏の常世式に関する異論を含めて論及すべきであった。子母口式の学史的研究に就いては、詳細を極めた幾多の論文がある(鈴木 1978、小川 1981、高橋 1981、毒島 1983等)ので、今回は大半の部分を割愛した。前記の諸論考を参照していただきたい。

タルカ作遺跡第III群第1類土器は、三戸式に発する沈線文系土器群の推移の終焉を告げる土器群

であり、子母口式成立期に編年される土器群であった。これを一応の結論として擱筆しておきたい。

(田村 隆)

引用参考文献（あいとうえお頃）

- 青木秀雄（1979）高輪寺遺跡（久喜市埋蔵文化財調査報告書）
- 青森県教育委員会（1980）桔梗野工農団地造成に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書（青森県埋蔵文化財調査報告書51）
- 赤星直忠（1948）神奈川県野島塚（考古学集刊1）
- 赤星直忠・岡本勇（1957）茅山貝塚（横須賀市立博物館研究報告（人文科学）1）
- 安孫子昭二（1967）No.269遺跡・縄文早期後半の土器（多摩ニュータウン遺跡調査報告IV）
- 安孫子昭二（1982）子母口式土器の再検討（1）、（2）（東京考古1）
- 坂塚博江（1982）牛廻・合之瀬・勢至久保（野田市遺跡調査会報告1）
- 池田次郎（1949）城古谷塚出土早期縄文土器の細別（広島医科大学論文集2）
- 伊東信雄（1957）宮城県古代史（宮城県史1）
- 茨城県史編集委員会（1979）茨城県考古資料編先土器・縄文時代
- 岡崎文書・新津健他（1977）佐倉道南
- 小笠原忠久（1974）兩館古石崎町出土の早期の縄文土器（椈山考古学研究会誌3）
- 岡本勇編（1982）縄文土器大成I早・前期
- 小川和博（1981）子母口式土器についての覚書（1）（奈和19）
- 小堀一夫（1984）戸塚遺跡
- 小野真一・秋本真造（1979）常陸伏見
- 金子直行（1982）野鳥式土器について—金平遺跡出土土器を中心として—（土曜考古6）
- 金子直行他（1984）明花向・明花上ノ台・井沼方・馬塗・とうのこし（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書35）
- 上守秀明 縄文時代の遺物（鶴牧3号墳）（千葉台ニュータウンII）
- 川上正幸（1980）伊穴・焼土・藤の土（土の土遺跡III）
- 興野義一 宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器（古代文化12）
- 佐野市教育委員会（1982）佐野市出流原小学校内遺跡
- 佐藤次男（1969）戸戸市柳崎貝塚下出土の子母口式土器について（茨城考古2）
- 下村克彦（1981）附加条縄文に関する一、三の問題について（土曜考古4）
- 庄内昭男（1981）鳩ヶ長根IV遺跡（秋田県文化財調査報告書53）
- 鈴木克彦（1978）子母口式土器の検討の必要性（多摩考古13）
- 鈴木敏明他（1983）ささら・帆立・馬込新断面・馬込大原（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書24）
- 鈴木秀雄（1980）ト佐（埼玉県道路発掘調査報告25）
- 鈴木秀雄他 中原前・駒前（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書30）
- 瀬川裕市郎他（1976）清水橋遺跡の土器と石器（沼津市歴史民俗資料館紀要1）
- 瀬川裕市郎 子母口式土器再考（沼津市歴史民俗資料館紀要6）
- 間野哲夫（1980）鷺が島台式土器細分への覚書（古代探叢）
- 高橋雄三（1981）子母口式土器研究史における問題点（福島考古22）
- 千葉市史編纂委員会（1976）千葉市史資料編1
- 土井義夫（1982）主要遺跡・因坂解説152（縄文土器大成I早・前期）
- 十肥孝他 鈴ヶ谷北遺跡発掘調査報告書（埼玉県遺跡調査会報告26）
- 中村五郎（1976）飯柳町の縄文土器
- 名久井文明（1974）北日本縄文式早期編年に関する一試験—青森県三戸町寺の浜遺跡出土遺物について—（考古学雑誌60-3）
- 名久井文明（1982）貝殻文尖底二器（縄文文化の研究3縄文土器1）
- 西川博孝（1980）三戸式土器の研究—千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心として—（古代探叢）
- 西川博孝（1984）No.7遺跡（新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告IV）
- 二本柳正・角鹿晶三・佐藤達夫（1957）青森県上北郡早稲田貝塚（考古学雑誌43-2）

- 芳賀英一（1977）常世遺跡出土の早期縄文土器をめぐる2・3の問題点（福島考古18）
- 毒島正明（1983）子母口式土器研究の検討（上）（三重考古7）
- 馬目順一他 竹之内遺跡（いわき市堆蔵文化財調査報告書8）
- 三浦圭介（1974）新住区予定地周辺の新発見遺跡（庄内盆地遺跡）（むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布、試掘調査報告書、青森県埋蔵文化財調査報告書51）
- 宮重行徳（1981）No.6遺跡木の根（新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書II）
- 二宅徹也（1976）堂沢遺跡
- 矢戸三男、菊池真太郎、深沢克友、青木勝（1975）阿玉台北遺跡
- 山内清男（1967）日本先史土器図譜Ⅱ
- 山内清男（1979）日本先史土器の縄紋
- 八幡一郎、新津健（1975）、佐倉道南
- 吉田格（1955）千葉県城ノ台貝塚（石器時代1）
- 吉田格（1962）福島県耶麻郡常世遺跡調査概報（武藏野43-1）

タルカ作遺跡出土土師器の分類と鬼高峰期集落の構造

はじめに

タルカ作遺跡出土の土師器は、壺・甕・甌・高壺・及び多数のミニチュア土器である。壺の中には、これに先立ち流布した和泉期からの系統的発達を示す丸底の、きわめてシンプルな口縁部をもつものがある。これをA類とする。A類の壺は、深く、口怪の大きめのつくりのもの、浅く小型化したものなど4つのグループに分類できる。これを第1群～第4群とする。また、A類の壺には赤彩が施されたものが顯著である。丸底をもつことではA類の壺と同様であるが、口縁部が外反し、鉢型土器を小型化したような壺をB類とする。B類の壺は、口縁部のみが直立気味に立ち上がるものの、口縁部のみが直線的に外傾するもの、小型で浅いつくりとなるものに分類される。これを第2群～第4群とする。C類は須恵器の蓋壺のうち壺部を模倣したものと思われる壺である。須恵器壺を忠実に再現したものから、口縁部と体部の境を弱い棱で表現したものまで、第2群～第4群に分類される。D類の壺は、C類の壺と同様に須恵器壺をその原形としたものと考えられるがC類の壺の口縁部が直立気味に立ち上がるのに対してD類の壺は直線的に内傾するのが特徴である。丸底のものと器形の低い扁平なつくりのものがあり、第3群及び第4群に分類される。E類の壺は、須恵器の蓋壺の蓋部を模倣したものである。口縁部と体部の境の稜から内反り気味に外反する口縁部をもつ。器形は深めのものから扁平で器高の低いものまで、第2群～第4群に分類される。さらにF類の壺は、口縁部の発達が著しく、大きく直線的に外傾している。原形となったのはE類の壺と同様に、蓋部の系統をたどるものと考えられる。第4群として、分類しておきたい。次に、甕についての分類は、細部に觀察点を置くならば、分類作業に必要な特性に欠ける形態のものが多く、ここでは、全体の器形から大きく3分類しておくことにする。A類の甕は胴部が球形に近く、胴中央部に最大径をもつ。口縁部は大きく「く」の字状に外反する。口縁部の発達の度合い、外反の状況に応じて第1群～第4群に分類される。B類の甕は、胴部の張りがA類の甕ほどではなく、たて長ぎみとなり、口縁は上に向って大きく広がっている。胴上半に最大径をもつものから、胴中央部に最大径をもつものへと変化しており、第2群及び第3群として分類される。また、C類の甕は、B類の甕よりもより細目の胴部となり、長胴化の印象のつよいものである。口縁部はしだいに簡略化されていく傾向にある。第2群～第4群として分類される。この他の甕・高壺・堵について、観察可能な個体数の少ないことから併出する壺をもとにそれぞれ分類をおこなった。なお、タルカ作遺跡は、古墳時代全般にわたって多くの出土遺物の報告された佐倉市漆谷津遺跡と至近距離にある(佐倉市教育委員会 1983)。集落の占める地理的環境には多少の差の存在することは差し引くとしても、時期的に近く、また、距離的にも近い漆谷津遺跡の出土遺物は、タルカ作遺跡出土の遺物と比較すると極めて興味深いものがある。したがって、分類に際しては、可能な限り、漆谷津遺跡における分類と対比するかたちで考察を展開することとした。

(1) 出土土師器の分類

坏

第1群A類 和泉期の坏の形態的特徴を受け継いでおり、33号住居跡出土の坏は、いずれも丸底で深いつくりとなっており、体部は内彌しながら立ち上がり、口縁部へとつながっている。体部外面には口縁部と体部の境にヨコナデ調整によって生じたわずかな稜が認められる33号住居跡第198図、10・12及び、稜の認められない33号住居跡、11・13がある。このうち、10・11・13は内面と外面底部を除く体部に赤彩が施されている。第1群A類の坏はいずれも漆谷津におけるIII群A4類に該当するものであるが、11及び12は口唇部の先端が外側へ弱くつまみあげられている。

第2群A類 全体に小型化し、丸底で体部から口縁部へとなだらかに内彌する特徴は第1群A類と同様であるが、1号住居跡第106図、18にみられるように、口径に比べて器高が低いつくりとなる。なお、18は内面と体部外面上半に赤彩が施されている。漆谷津におけるIII群A1類に相当するものと思われる。2号住居跡第108図、10は口唇部のみが直立気味に立ち上がる。

第2群B類 全体に大型で、深めの丸底であり、器形は口縁と体部の境に弱い稜をもつ。39号住居跡第213図、6、12は口唇部の先端がかるく外反している。また、10は口縁部が稜よりほぼ直立する。漆谷津のIII群A4類及びA5類に該当する。

第2群C類 須恵器の蓋坏の坏部を模倣した器形であり、口縁部の立ち上がり幅は発達しており口縁部と体部の境の稜は明瞭な段となっている。1号住居跡第106図、17、24号住居跡第170図、5及び39号住居跡第213図、8は、稜の比高差もあり、口縁部が垂直に立ち上がる。漆谷津のIII群B1類に相当するものと思われる。また、2号住居跡第108図、8は口縁部と体部の境の稜は存在するが、底部は偏平となり、口縁部は曲線的に内傾する。2号住居跡、9は稜の直上に凹帯があり、口縁部との境をより明瞭なものとしている。底部はゆるやかな曲線を保ち、口縁部は直立した後に口唇部のみがかるく外反する。内、外面ともに体部上半には赤彩が施されている。前者は漆谷津のIII群B5類に、後者は同じくIII群B1類に該当するものである。

第2群E類 体部と口縁部の境の稜から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁部の立ち上がり幅もよく発達している。底部はゆるやかな曲線を描き、1号住居跡第106図、10は須恵器の蓋坏の蓋を模倣したものである。漆谷津のIII群C3類に該当するものである。また、1号住居跡、13は底部の丸味をもった曲線に連なる稜を境として、口縁部は外彌気味に立ち上がり、口径に比べて器高の高い、深いつくりとなっている。漆谷津のIII群B6類に相当するものと思われる。

第3群A類 口径に比べて器高が低く、底部からゆるやかな曲線に連なる口縁部は、直立気味に立ち上がる。23号住居跡第168図、19及び28号住居跡第180図、17は、ヨコナデ調整によって生じたわずかな稜が、体部と口縁部の境となっている。漆谷津のIII群A2類に該当するものである。また、28号住居跡、16及び30号住居跡第189図、23は、ゆるやかな丸底の深いつくりとなっている。16は内・外面ともに体部上半に、23は内面と体部外面上半にそれぞれ赤彩が施されている。30号住居跡第189図、21及び32号住居跡第195図、14はヨコナデ調整によって生じたわずかな稜をもち、口縁部が直立気味に立ち上がる。内面と底部付近を除く外面に赤彩が施されている。漆谷津のIII群A3類に該当す

るものである。32号住居跡第195図、13は丸いゆるやかな底部に連なる口縁部がかるく内彎し、口唇部のみが直立気味につまみ上げられている。漆谷津の76号住居跡に類似の坏の出土がみうけられる。34号住居跡第200図、5は、丸いゆるやかな底部をもち、それに連なる口縁部は強く内傾している。漆谷津のIII群A₄類に該当する。

第3群B類 口径に比べて器高は低く、体部と口縁部の境にあたる稜は弱い突線として痕跡を残すにとどまる。口縁部は強く外彎して口唇部で尖り気味となる。32号住居跡第195図、18は口縁部が直線的に外傾し、内面と外面体部上半に赤彩が施されている。漆谷津の4号住居跡、18号住居跡、155号住居跡より類似の坏の出土がみられる。また、32号住居跡、19は口縁部が曲線的に外彎しており、漆谷津のIII群C₁類に該当するものである。

第3群C類 口径に比べて器高の高い、深いつくりで、須恵器の蓋坏の坏部にみられる蓋受け部を意図したと考えられる稜は明瞭で、口縁部は直立している。また、口縁部の立ち上がり幅もよく発達している。5号住居跡第120図、8は体部に比べて口縁部の器厚が薄いつくりとなっており、漆谷津の161号住居跡に類似の坏もみうけられる。7号住居跡第126図、12は稜の比高差も明瞭であり、口縁部はあまり発達していないもののほぼ垂直に立ち上がる。漆谷津のIII群B₁類に該当する。また、25号住居跡第173図、8は底部が丸底で口縁部の立ち上がり幅も一段と発達したものとなっている。23号住居跡第168図、14及び28号住居跡第180図、15は口径に比べて器高がさらに低くなり、全体に扁平となっている。これらは漆谷津ではIII群B₁類として一括されているものである。9号住居跡第131図、6、28号住居跡第180図、12、30号住居跡第189図、19、31号住居跡第192図、8、32号住居跡第195図、15、34号住居跡第200図、4はいずれも体部と口縁部の境の稜は痕跡的なものとなるが、底部はゆるやかな曲線を保ち、口縁部の立ち上がり幅もよく発達している。また、28号住居跡、12は内面と外面口縁部に、30号住居跡、19は内面と底部を除く外面にそれぞれ赤彩が施されている。これらは漆谷津のIII群B₂類に該当するものである。

第3群D類 第3群C類の坏と同様に、底部は丸底であるが、口縁部は直線的に内傾している。9号住居跡第131図、4及び22号住居跡第165図、10は、口径に比べて器高の高い、深いつくりとなっているが、13号住居跡第145図、11、16号住居跡第152図、5、24号住居跡第170図、7、40号住居跡第216図、11、43号住居跡第222図、2は口径が広く浅いつくりとなっている。これらは漆谷津のIII群B₂類に該当する。なお、43号住居跡、2は口縁部と体部の境の稜が蓋の受け部を意識した明瞭なつくりとなっている。

第3群E類 底部は丸底であり、口縁部と体部の境の稜は、屈曲点となり器形的印象を異なったものとしている。口縁部は稜から直立し、口唇部のみが強く外彎する。5号住居跡第120図、6、13号住居跡第145図、15、19号住居跡第157図、10、23号住居跡第168図、17、28号住居跡第180図、7、32号住居跡第195図、16、17が該当し、漆谷津のIII群C₂類に相当するものと思われる。また、5号住居跡、6は内・外面ともに口縁部を中心に、28号住居跡、7は内面体部上半と外面口縁部に、32号住居跡、16は内面口縁部と外面体部上半に、17は内面と外面（外面の底部中央を除く）にそれぞれ

赤彩が施されている。19号住居跡、7は器高に比べて口径が大きく浅いつくりとなっている。漆谷津のIII群C類に該当する。

第4群A類 全体に小型化し、底の浅いつくりとなっている。口縁部と体部の境となる稜は、ヨコナデ調整によってわずかに確認できる程度の痕跡的なものとなる。また、器厚もやや厚手のものとなっている。4号住居跡第116図、19、31号住居跡第192図、9、41号住居跡第219図、8は漆谷津のIII群A₁類に、13号住居跡第145図、17は漆谷津のIII群A₂類に、また、40号住居跡第216図、15は漆谷津のIII群A₃類にそれぞれ近いものである。

第4群B類 底部は丸底を保ち、口縁部と体部の境の稜は痕跡的なものとなる。口唇部は外側へかるくつまみあげられている。3号住居跡第111図、18、19は口径に比べて器高が高く、深いつくりとなっており、内・外面ともに底部を除き赤彩が施されている。12号住居跡第141図、13、17号住居跡第154図、7、20号住居跡第160図、3は口径に比べて器高が低く浅いつくりとなるが、口唇部は同様に外側へかるくつまみあげられている。これらは漆谷津のIII群A₄類に該当する。

第4群C類 口径に比べて器高は低く、浅いつくりとなっている。口縁部と体部の境はヨコナデ調整によって、わずかに稜を残し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。4号住居跡第116図、20、6号住居跡第122図、6、13号住居跡第145図、12、16、37号住居跡第209図、3が該当し、いずれも、体部に比べて、口縁部の器厚は薄いつくりとなっている。漆谷津のIII群A₅類に相当すると思われる。

第4群D類 底部は丸味を失い、口径に比べて器高の低い偏平な印象を与えている。蓋の受け台としての稜は、まだわずかながら比高差を保ち、口縁は直線的に内傾する。漆谷津のIII群B₁類に該当するものである。また、4号住居跡第116図、21、17号住居跡第154図、4、35号住居跡第203図、7、36号住居跡第207図、16は、口径に比べて器高の低い、浅いつくりとなっており、口縁部と体部の境の稜は痕跡的なものとなっている。口縁部はいずれも直線的に内傾する。漆谷津のIII群B₂類に該当するものと思われる。

第4群E類 口径に比べて器高は低く、全体に扁平となっている。口縁部は外彫気味に立ち上がり、体部に比べると、器厚は薄いつくりとなっている。稜は痕跡的なものとなってわずかに認められる程度である。3号住居跡第111図、12は内面と外面の底部を除く部分に赤彩が施され、これは漆谷津のIII群C₂類に該当する。また、4号住居跡第116図、17は口縁部がよく発達しており、器厚も厚く、丸味をもったつくりとなっている。漆谷津の106号住居跡、119号住居跡、155号住居跡に類似の坏がみうけられる。また、17号住居跡第154図、5は器形において第3群E類に近いものであるが、全体に小型となっている。漆谷津の3号住居跡に類例がみとめられる。

第4群F類 稜を境として、口縁部が著しく発達し、口唇部において最大径となる器形である。底部はいずれもゆるやかな曲線を描き、口唇部は丸味を保ちながら終っている。6号住居跡第122図、4、11号住居跡第136図、6、14号住居跡第147図、3、31号住居跡第192図、7、40号住居跡第216図、10が該当し、漆谷津のIII群C₃類に該当するものと思われる。

本图展示了从第1群到第4群的环分烟圈，以及一个单独的烟圈，共分为A、B、C、D、E、F六类。

	A類	B類	C類	D類	E類	F類	烟器
第1群	 33-10						
	 33-11						
	 33-12						
	 33-13						
第2群	 1-18	 39-6	 1-17		 1-10		
	 2-10	 29-10	 2-8		 1-13		
		 39-12	 2-9		 15-8		
			 24-5				
			 39-8				
第3群	 23-19	 32-18	 5-8	 9-4	 5-6		
	 28-16	 32-19	 7-12	 13-11	 8-6		 30-13
	 28-17		 9-6	 16-5	 13-15		 30-18
	 30-21		 23-14	 22-10	 19-7		
	 30-23		 25-6	 19-10			
	 22-13		 28-12	 24-7	 23-17		
	 22-14		 28-15	 40-11	 28-7		
	 34-5		 30-19	 42-2	 22-16		
			 32-15		 32-17		
			 34-4		 42-2		
第4群	 4-19	 3-18	 4-20	 3-7	 3-12	 6-4	 4-12
	 13-17	 3-19	 6-6	 4-21	 4-17	 11-6	 3-6
	 21-9	 12-13	 13-12	 17-4	 17-5	 14-3	 12-10
	 40-15	 17-7	 13-16	 35-7	 31-9	 31-7	
	 41-8	 20-3	 37-2	 36-16		 40-10	

第236图 环分烟圈 (住居番号-掉园番号)

鑑

第1群A類 33号住居跡第197図、3は胸部下半を欠くが、胸部は球形もしくは、それに近い形で、胸中央部に最大径をもつものと推定される。頸部の収縮は強く、口縁部は外輪ぎみに大きく開いている。漆谷津のIII群H類に該当する。1の胸部は横に押しつぶされた形状をしているものの口縁部は本類の特徴をよく備えている。同様の壺は漆谷津のIII群C類にみられる。2は球形に近い胸部の張りがみられ、口縁部のくびれも、3と比べるといくらか直線的に外傾する。漆谷津では3号住居跡、10号住居跡、115号住居跡に類似の壺がみられる。

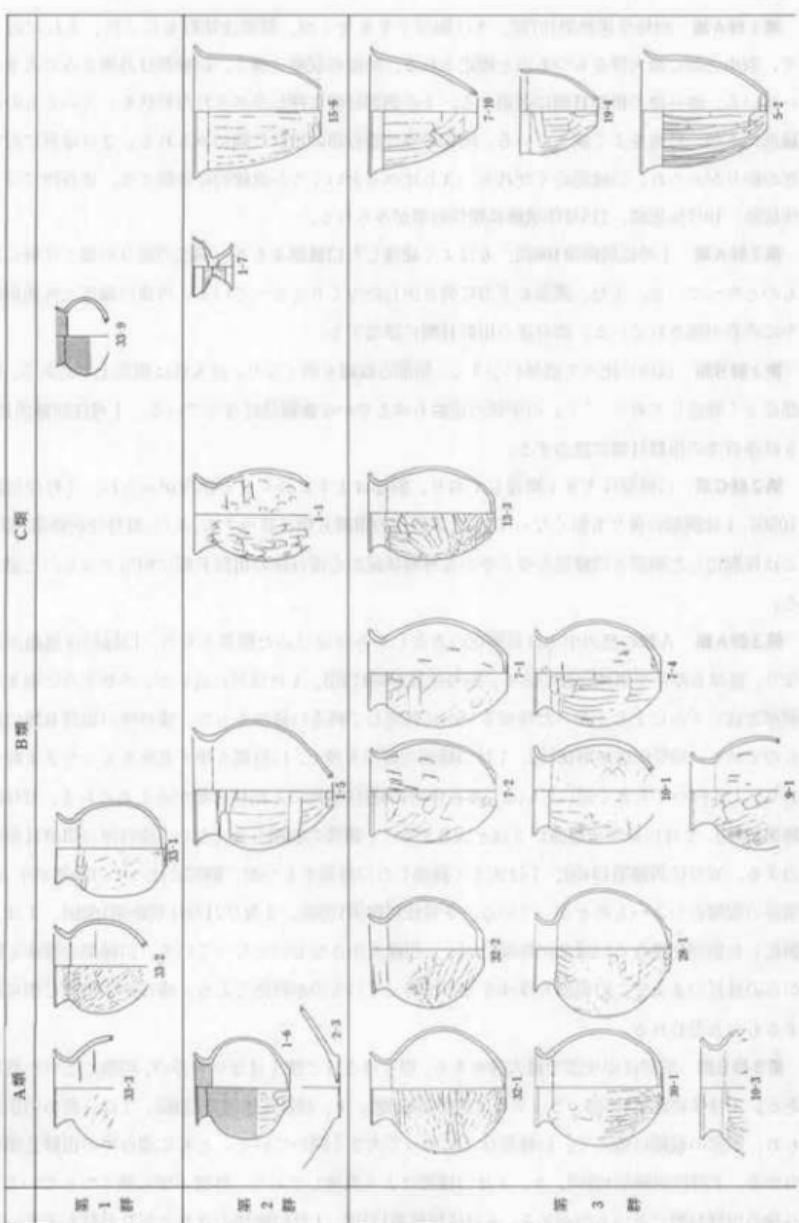
第2群A類 1号住居跡第106図、6はよく発達した口縁部をもち、胸部の張りが強く球形に近いものとなっている。また、底部も下方に突き出したつくりとなっている。内面口縁部と外面制部上半に赤彩が施されている。漆谷津のIII群H類に該当する。

第2群B類 口径に比べて底部が小さく、頸部の収縮も弱くなり、最大径は胸部上半にある。口縁部はよく発達しており、「く」の字状の屈曲もゆるやかな曲線状になっている。1号住居跡第106図、5は漆谷津のIII群H類に該当する。

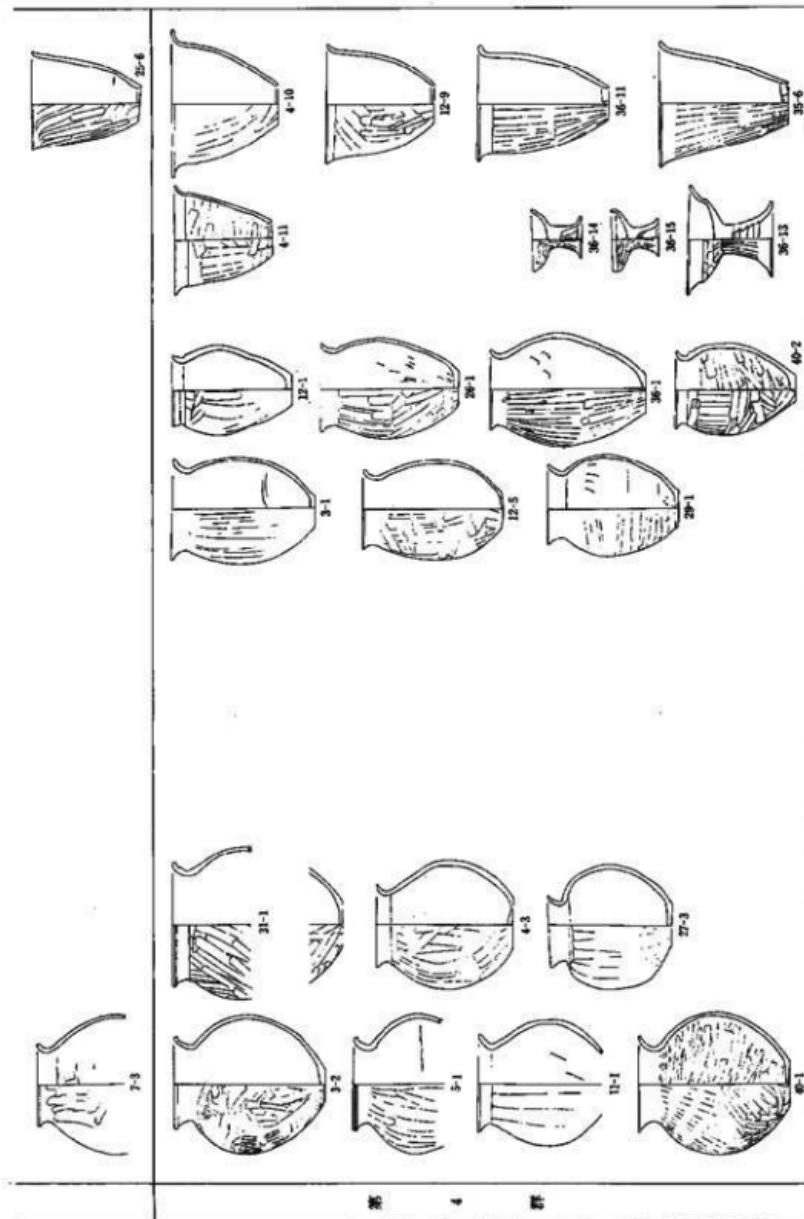
第2群C類 口縁部は大きく発達しており、胸部は上下に長くなる傾向がみられ、1号住居跡第105図、1は胸部の張りも弱くなっている。漆谷津のIII群E類に該当する。また、21号住居跡第162図、2は長胴化した胸部と口縁部のゆるやかな外輪状況から漆谷津のIII群F類に相当するものと思われる。

第3群A類 A類の壺の中では長胴化のきざしをみせはじめた胸部をもち、口縁部は屈曲が弱くなり、器厚も厚めで単純口縁である。28号住居跡第179図、1は球形に近いが、やや下方に突き出た胸部と直立ぎみに上ち上がった後ゆるやかに外輪して終る口縁部をもつ。漆谷津のIII群B類に近いものである。30号住居跡第187図、1は口縁部の器厚も厚く、口唇部も厚く丸味をもったまま終わっており、上に向って大きく開いている。漆谷津の156号住居跡にも同様の壺がみとめられる。32号住居跡第194図、2は口縁部の屈曲がさほど大きくななく、頸部の収縮も強くない。漆谷津のIII群H類に該当する。32号住居跡第194図、1は大きく発達した口縁部をもつが、胸部に比べて口縁部が小さく、頸部の収縮のつよいものとなっている。7号住居跡第125図、3及び21号住居跡第162図、1は、長胴化した胸部に連なる口縁部が極端に短く、屈曲も小さなものとなっている。口縁部の厚味も胸部からの延長のままで、口唇部も厚味をもって終わっているのが特徴である。漆谷津のIII群C類に該当するものと思われる。

第3群B類 胸部は中央部で最大径をもち、張りはさほど強くはないものの、均整のとれた器形である。1号住居跡第105図、2、7号住居跡第125図、1、43号住居跡第222図、1は、長めの胸部をもち、頸部の収縮は強めで、口縁部は上に向って大きく開いている。ともに漆谷津のIII群E類に該当する。7号住居跡第125図、2、4は口縁部はよく発達しており、外輪の度も強くなっている。漆谷津のIII群D類に近いものがある。9号住居跡第131図、1は口縁部の立ち上がりが最も大きいが口縁部の外輪の度はむしろ弱い。漆谷津のIII群B類に近いものである。



第237图 瓣·瓶·高环分属图 (注唇番号—视图番号)



第3群C類 胸部はさらに長くなり、張りのないものとなっている。また、口縁部の外彎の度も弱くなっている。13号住居跡第144図、3は頸部の収縮も弱くなって、一段と長胴化が進んでいる。漆谷津のIII群G類に近いものと考えられる。なお、8号住居跡第129図、1は胸部下半を欠くものの本類の範疇にはいるものと思われる。

第4群A類 胸部は球形に近い形状で、口縁部は外彎ぎみに大きく開いている。3号住居跡第110図、2及び5号住居跡第119図、1は口唇部に段をもち、これは漆谷津出土の壺には類例はみられない。また4号住居跡第115図、3及び11号住居跡第136図、1は胸中央部に最大径をもち、頸部の収縮が強く、頸部から胸中央部まではやや直線的な印象すら感じられる。口縁部は胸部と比べると小さく、立ち上がり幅も低い。また、口縁部の屈曲も曲線的で、胸部との境には調整痕によって生じたわずかな稜が存在する。漆谷津のIII群D類に該当する。27号住居跡第177図、3はややいびつながら球形に近い印象を残しており、口縁部は立ち上がりは高いものの屈曲は小さく、むしろ直線的である。また、40号住居跡第215図、1は球形に近い胸部をもち、それに連なる口縁部は外彎ぎみに大きく広がり、全体的には胸部が大型化していることが特徴である。ともに漆谷津のIII群A類に該当する。

第4群C類 長胴化の傾向はより著しくなる。3号住居跡第110図、1は頸部の収縮も弱くなり口縁部と胸部の境はあまり明瞭でない。漆谷津のIII群E類に近いものである。12号住居跡第141図、5は胸の張りはきわめて弱く、口縁部の外彎の度も弱いものとなる。漆谷津のIII群G類に近いものである。12号住居跡第140図、1は口径に比べて小さめの底部をもち口縁部と胸部の境には凹帯があげられ、口唇部は急激に尖って終る。漆谷津には類例がみられない。26号住居跡第175図、1、29号住居跡第182図、1、40号住居跡第215図、2は細部においては少々異なるところもあるが、長胴で頸部の収縮が弱く、口縁部はゆるやかに広がっている。漆谷津のIII群F類に該当する。36号住居跡第205図、1は胸部の長胴化がさらに顕著なものとなり、口縁部の屈曲も弱く小さなものとなっている。口唇部も単調なまま終っている。漆谷津の28号住居跡に類似の壺がみうけられる。

重

壺は観察可能なものでも10個体にすぎず、壺のみから観察される前後の関係は明確にはしえない。そこで、伴出の壺の分類と合わせて考えることにする。15号住居跡第149図、6は伴出の壺の口縁部の厚味がやや厚めで丸味の強いものであるが、底部の丸底や、深めの器形を考慮すれば第2群E類のものと判断されるところから、この壺を第2群として分類する。5号住居跡第119図、2は第3群C、E類の壺を伴い、胸部は弱い張りを保ち、口縁部は曲線を描きながら外反する。7号住居跡第126図、10は第3群C類の壺を伴い、胸部の張りはきわめて弱く、口縁部は小さく外反する。19号住居跡第157図、4は鉢形土器の底部を抜いたような形で、口縁部は胸部から直立ぎみに連なり、きわめて短いつくりとなっている。第3群E類の壺を伴う。25号住居跡第173図、6は第3群C類の壺を伴う。胸部は直線的なすぼまりをみせ、口縁部はほとんど意識されておらず、口唇部付近までヘラケズリ調整がせまっている。以上の一連の壺を壺との関りから第3群のグループとして分類する。

さらに、4号住居跡第116図、10、11は第4群A、C、D類の坏を伴い、10は口径に比べ底径が小さく口縁部は大きく外反し、上に向いて大きく広がっている。また、11は胸部の張りではなく、むしろ直線的で、口縁部は胸部との境の稜から曲線的に外反する。12号住居跡第141図、9は第4群B類の坏を伴い、胸部は弱い張りを保ち、小さめの口縁部は小さく外反する。35号住居跡第203図、6は第4群D類の坏を伴い、胸部は直線的なすぼまりをみせ、口縁部の外反もきわめて小さいつくりになっている。36号住居跡第207図、11は長めの胸部をもち、弱い張りをもつ。口縁部は小さく急激に外反し、上に向って大きく広がるつくりとなっている。

高坏

個体同様に、観察可能な個体数が少ないため、器形の特徴から前後の関係を知ることは困難である。したがって伴出の坏との関係を述べておきたい。1号住居跡第106図、7は脚部に弱い段をもち、坏部はE類の須恵器の蓋坏の蓋部を模倣したものに近い。漆谷津の83号住居跡に類似の高坏がみられる。36号住居跡第207図、14、15は下に向ってなだらかに広がる脚部とA類の坏部をもつ。また、同じ住居跡の13は大型の高坏で、脚部はゆるやかな曲線を描き下に向って大きく広がっている。坏部は口縁部が稜から内側にふくらみを保ちながら外反するE類に近いものである。それぞれ伴出する坏との関係から1号住居跡、7は第2群に、36号住居跡、13、14、15は第4群に分類する。

その他の土器

壺、観察の可能なものは33号住居跡第198図、9の1個体のみであり、第1群A類の坏を伴出する。全体に小型で、口縁部が欠損しており詳細は不明ながら、胸部はやや扁平で、口縁部内面から外面胸部上半にかけて赤彩が施されている。・応第1群の壺として分類しておく。

ミニチュア土器 共通的な特性はあまりみうけられないが、23号住居跡第168図、20~23の4個体、3号住居跡第111図、21、22と25号住居跡第173図、14、15の各2個体、2号住居跡第108図、11、4号住居跡第116図、24、40号住居跡第216図、19、41号住居跡第219図、10の各1個体となっており、特定の住居跡に集中する傾向がみられる。

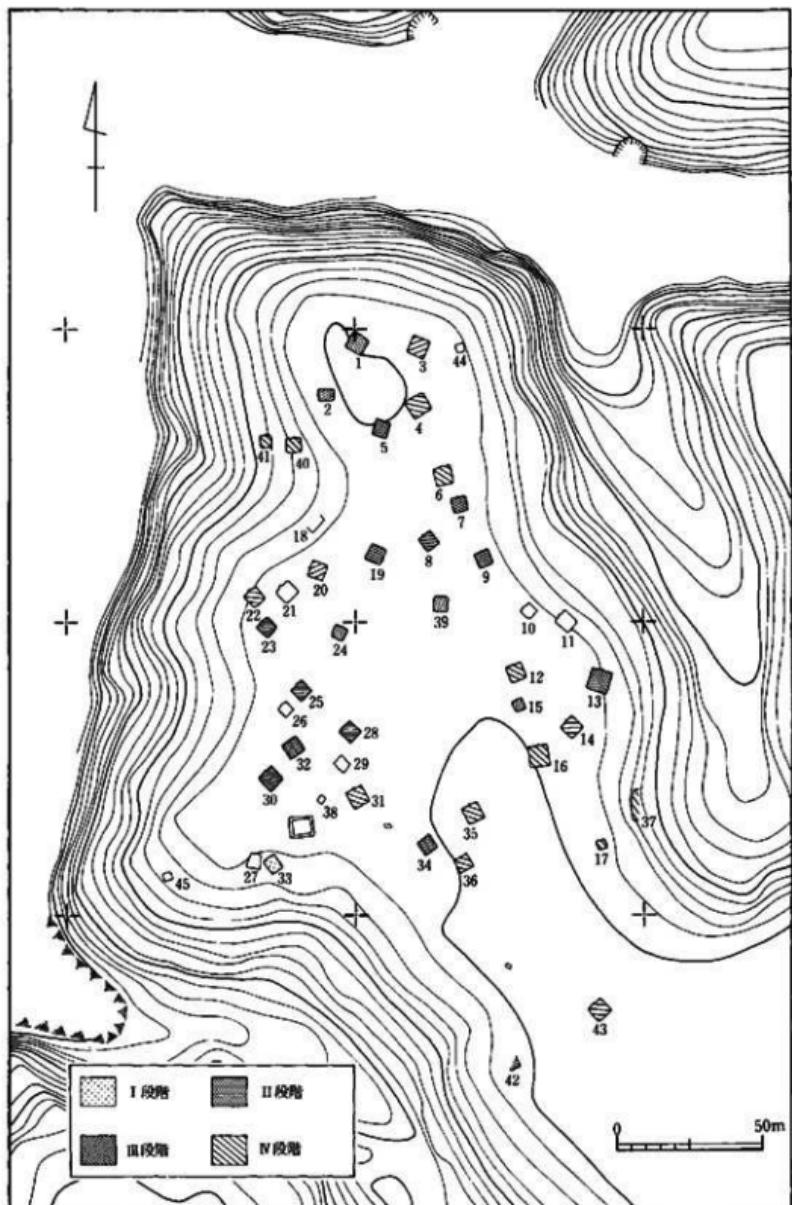
(2) タルカ作遺跡出土の坏の分類から観た集落の展開について

タルカ作遺跡は、古墳時代の中でもほぼ单一と考えられる程、限られた時期に営まれた集落である。台地上には45軒の住居跡が展開しているが（ただし、37号、38号住居跡については正確な帰属時期の判定が難しい）、このうち、古墳時代後期・鬼高窓の住居跡は、44号住居跡と45号住居跡を除く43軒である。第6章2-(1)においておこなった坏の分類によれば、和泉期からの系統的な発展を示すA類の坏、須恵器蓋坏の坏部にその原形を求めるC類の坏、蓋部にその原形を求めるE類の坏に分けられる。またD類の坏はその器形からC類との関りの強いものであり、F類の坏はE類との関りの強いものと思われる。さらに、B類の坏はC類またはE類のいずれの影響下に成立したものか定かでないが、39号住居跡の場合には、B類とC類において第2群の坏を伴っており、32号住居跡の場合には、B類、C類、E類において第3群の坏を伴う。また、3号住居跡では、B類、D類、E類において第4群の坏を伴い、17号住居跡ではB類、D類、E類において第4群の坏

第77表 环の伴出関係一覧

() は住居跡番号

段階	項	目	
I	A類に第1群の环をもつ住居跡 (33)		
	C類に第2群の环をもつ住居跡 (1・24・39)	A類に第2群の环をもつ住居跡 (1・15)	
II	B類に第2群の环をもつ住居跡 (39)	D類に第3群の环をもつ住居跡 (24)	
	C類に第3群の环をもつ住居跡 (5・7・9・23・25) 28・30・32・34	A類に第3群の环をもつ住居跡 (23・28・30・32・34)	E類に第3群の环をもつ住居跡 (5・8・13・19・23) 28・32・42
III	B類に第3群の环をもつ住居跡 (32)	D類に第3群の环をもつ住居跡 (9)	
	D類に第3群の环をもつ住居跡 (13)	A類に第4群の环をもつ住居跡 (13)	
IV	D類のみに第3群の环をもつ住居跡 (16・22・40・43)		
	C類に第4群の环をもつ住居跡 (4・6・13・37)	A類に第4群の环をもつ住居跡 (4・31・40・41)	E類に第4群の环をもつ住居跡 (3・4・17・31)
	B類のみに第4群の环をもつ住居跡 (12・20)	F類に第4群の环をもつ住居跡 (31・40)	B類に第4群の环をもつ住居跡 (3・17)
	D類に第4群の环をもつ住居跡 (4)		F類のみに第4群の环をもつ住居跡 (11・14)
	D類のみに第4群の环をもつ住居跡 (35・36)		F類に第4群の环をもつ住居跡 (31)
	F類に第4群の环をもつ住居跡 (6)		



第238図 タルカ作遺跡の住居跡展開

を伴う。このことから、B類の坏は、C類、またはD類の坏との関りをもつてゐることが考えられる。すなわち、B類の原形を須恵器蓋坏の坏部に求めうる可能性が強いといえるのである。第77表はタルカ作遺跡出土の坏の件出組み合わせ状況を表示したものである。

タルカ作遺跡において、もっとも古手の坏をもつのは、A類に第1群の坏をもつ33号住居跡である。次いで、A類、C類、E類の各類にわたって第2群を中心とする坏をもつグループである。坏の分類の際に観察したように、C類、E類の坏の原形は、須恵器蓋坏の坏部と蓋部にそれぞれ求められるところから、この段階には、須恵器蓋坏の影響を受けた土師器の生産が開始されていることになる。土師器の坏の生産が、特定の地域でおこなわれて流通されたものか、タルカ作遺跡において生産されたものか決め手になりうる資料に欠けるものの、第2群の坏を中心に出土する。1号住居跡、2号住居跡、15号住居跡、24号住居跡、39号住居跡の営まれた時期にC類・E類の土師器坏が同時に導入されていることは興味深い。このうち、1号住居跡からはA類、C類、E類のいずれの坏も出土している。タルカ作遺跡にC類、E類の坏を導入する契機となったのはこの1号住居跡である可能性がきわめて強い。また、24号住居跡の場合はD類に3群の坏をもち、このグループの中ではもっとも新しい傾向を示している。次の段階では、やはりA類、C類、E類の坏が中心となるが、1号住居跡のようにC類と関りの深いD類の坏をもつものもあらわれる。23号住居跡、28号住居跡、32号住居跡は、A類、C類、E類の坏をもつ、このグループの中心的な住居跡といえる。ところが28号住居跡は覆土の堆積状況から住居廃絶後に廃棄された遺物が多く、住居の廃絶は比較的早い段階であったことが推測される。また、A類の坏をもつ住居跡は、必ずC類またはE類の坏を伴っており、30号住居跡、34号住居跡はE類の坏を伴わない。なお、13号住居跡はA類、C類に第4群の坏をもち、一方ではD類・E類に第3群の坏をもつており、この段階の中では新しい傾向を示している。また、5号住居跡の場合には、A類の坏をもつことなく、C類、E類ともにもちあわせている。これに次ぐ段階においてもやはりA類・C類・E類の坏が中心となっている。すなわち、4号住居跡はA類・C類・E類のすべてに第4群の坏をもつ。また3号住居跡、17号住居跡は、C類と関りの強いD類とE類に第4群の坏をもつ。また、6号住居跡はE類と関りの強いF類とC類に第4群の坏をもつ。この段階の特徴はD類及びF類に第4群の坏をもつ住居跡が急増することである。このように、タルカ作遺跡に展開する住居跡を大きく4つの段階に分けて検討をおこなつたが、この場合は必ずしも時間的に連続するということではなく、同時に併存する段階のあった可能性すら否定できない。しかし、土師器坏の系統的な流れから観察するならば、これらの段階の住居跡がある程度共通する特徴を備えた坏をもつ集団としての変遷を示しているのである。同一形態の坏を持つ住居跡の同時存在について、その問題点について指摘した意見もあるが、日用雑器の一つとしての坏は、祭礼用のものでない限り幾世代も経て使用されることは考えられず、むしろ、一住居跡の存続期間内に何度も消費され、棄て去られたものと考えられる。また、このように大量に消費される製品の特徴は画一化、簡略化の傾向をまぬがれない。各遺跡出土の坏は、最近の研究の傾向ともいえる細分化が進む一方、一個体一型式と言われるほどの微細にわたる変化に注目しながら

ら、かえってその細分の結果に翻弄されている観さえある。タルカ作遺跡の坏の分類に際しては基本的な形態差については注目したが、微細な、きわめて個別的な変化はあえて分類の対象としなかった。これは、将来的にタルカ作遺跡のみの考察に留まることなく、多くの他の遺跡出土の遺物についても対応できることを考慮したためである。こうした点に留意しつつ、タルカ作遺跡の営まれた時代の背景とその影響下に展開したタルカ作の『村』について考えてみたい。

古墳時代後期は、日本書記によれば、大化2年(646年)の詔勅に記された地方豪族による土地及び人的な収奪の結果、家族内の親子・兄弟・夫婦といった『血縁』の最小単位ですら異なった氏に所属される事態が生じ、そのための争いが多発したという状況であった。この詔勅は後に付加されたとする説もあるが、むしろ大化改新前後の社会の動搖を物語る一端であった可能性は強い。こうした地方豪族の収奪の対象となった『村』は大化以前においても当然存在したわけである。この『村』を構成するのは『家』である。中村吉治は「私が家と言う単位を、一個の生産・生活構造体の内部単位とみているのは、社会的な意味においてである。」と説く。このことは住居跡内に炉やカマドが存在するか否か、とか、農具が存在するといった現象が『家』の実体ではないことを指摘している。住居跡は居住のための単位である。この住居跡においておこなわれる、消費・生産が単独で自立することのできない状況において、身分制度として同族関係にある他の住居跡とともに『家』を構成するものと考えられる。この場合、同族関係の中には『血縁』によって結ばれたものを含む場合のあることは当然である。タルカ作遺跡の場合、住居跡と住居跡を結ぶものは、その形態もさることながら、『家』を統率する『家長』を通して獲得・導入した各種の製品・利器の頒布の実態をまず明確にしておかねばならない。具体的には、日用雑器としての坏である。前述のように、坏は日用雑器であり、特別な形態変化を起こしえない。その坏が最も大きな変化をみせたのが、須恵器蓋坏の影響である。

タルカ作遺跡のIの段階では須恵器の影響はみられない。また、Iの段階とIIの段階では直接のつながりは観察できない。33号住居跡は住居跡の北西壁寄りにカマドをもつ。しかし、壁から離れた状態であり、最も古い様相を示すカマドである。煙道に相当するつくりは確認されておらず、カマドとしても未完成の段階といえるものである。33号住居跡はカマドの他に東壁近くに炉も併設されている。壁は低く、南東壁は貼床によってわずかに壁の位置を推定できる程度である。しかし、最も古手の坏をもつ33号住居跡は、以下に続く各段階に先行するものであり、やはり区別されるべきであろう。IIの段階において最も中心的な存在となるのは1号住居跡である。1号住居跡は住居跡の北面壁中央部にカマドをもつ。カマドは壁を掘り込み煙道を確保している。2ヶ所の炉を併設している。1号住居跡は、第2群の坏をもつ、他の住居跡と共通する特徴の坏をもち、他の2号住居跡、15号住居跡、24号住居跡、39号住居跡といずれかの類においてつながりをもち、頒布の拠点として組み合わせを充たしている。1号住居跡と他の4軒との住居跡に『血縁』の関係は、可能性としてはありうるもの、むしろ『血縁』も含めた『家』内相互の関係とみるのが妥当である。タルカ作遺跡の当時の農耕形態は定かではないが、水稻及び畠作はすでに実施されていたものと考え

られる。例えば、水田の例を引くならば、直播か田植かということも問題としなければならないが、水利、防虫・鳥・獸、防災、荒地・山林を含む空閑地の利用等、居住（寝食を中心とする）の最小単位としての住居跡のみでは解決のできない状況が存在する。このような農業経営に関する共同作業を背景とするタルカ作遺跡における「村」の成立をこの段階に考えることができる。また、有賀喜左衛門によれば、大化以後の「戸」の基本的性格について「行政組織の下部単位としては表現は戸（聖龜元年（715）以後は郷戸・戸房）であった。」とされ、「家」と「戸」の密接な関係を説かれている。すなわち、大化以後においては「家」の集合体として「戸」が存在することをあらためて指摘されている。戸主によって統率される戸房・寄口・奴婢が郷戸を構成する主たる要員であるとともに先学により検討された成果である。また中村は、このような郷戸について「郷戸はあくまで戸である。戸房その他を含めて、一つの分割不能の生産手段のうえにあることにおいて身分集団である。身分的主従関係が郷戸主とその構成員との間に結ばれているわけである。」と説明されている。大化前後の「村」の実体が大化改新によって変質したとは考えがたく、タルカ作遺跡の場合にも、あるいはこのような「戸」的な「家」の集合体として、各住居跡群が展開していたことも充分に考慮する余地がある。また、この中で24号住居跡はD類に第3群の坏をもつことでやや新しい傾向を示すものの、伴出する坏に限定された様子がうかがわれ、やはり、1号住居跡との間りの中で存在したのではないかと思われる。24号住居跡は住居跡の北壁中央部にカマドをもつ。カマドは壁を掘り込み煙道を確保している。また、カマドの対面の柱穴を囲むように、馬蹄形の土手をめぐらす。

IIIの段階では、23号住居跡、32号住居跡が、1号住居跡と似た性格をもつ住居跡として注目される。23号住居跡は住居跡の北西壁中央部にカマドをもつ。カマドは壁を掘り込み煙道を確保している。24号住居跡と同様に土手をめぐらすが、全局することなく痕跡を留める程度となっている。32号住居跡は、住居跡の北西壁中央部にカマドの存在した痕跡を残す。23号住居跡はA類・C類・E類に第3群の坏をもち、32号住居跡の場合にもA類・C類・E類に加えてB類にも第3群の坏をもっている。すなわち、IIIの段階において拠点ともいべき住居跡が2軒存在していることになる。このことは2つの可能性を暗示している。1つには異なる2つの集団がそれぞれの「家」として、同時に存在する場合であり、もう1つには、有力な「家」の「家長」のもとに他の「家」も組み込まれている場合である。IIIの段階の住居跡の展開は、台地の縁辺に散開し、台地の中央を広場ないしは畠地として利用可能な空間を造り出している。また、C類に間りの強いD類の坏もこの段階において出現する。

IVの段階では、B類・D類・E類に第4群の坏をもつ3号住居跡と、A類・C類・D類・E類に第4群の坏をもつ4号住居跡に拠点としての性格をみとめられる。3号住居跡は、住居跡の北壁中央部にカマドをもつ。カマドは壁の掘り込みを持たず煙道は壁にきわめて近い形でつくられていたものと思われる。また、西壁中央部にもカマドの構築された痕跡がある。こちらも壁の掘り込みはみられない。現存するカマドの対面には、柱穴と壁の間に馬蹄形の土手がめぐる。4号住居跡は、住居跡の北西壁中央部にカマドをもつ。カマドは壁を掘り込み煙道を確保している。カマドと対面

の柱穴は2本直列に位置している。他の住居跡に比べて最も整然としたつくりをし、きわめて規格性の強いものとなっている。複数の拠点をもつことではIVの段階と同じであるが、E類に限りの強いF類の环の出現とD類の环をもつ住居跡の増加はより新しい傾向として理解される。

IVの段階では、A類・B類・C類・D類・E類・F類という多様化した环が観察されるが、いずれも簡略化された、系統的には後出の形態の环を出土する住居跡の多いことが特徴となっている。ところが、13号住居跡の場合にはA類・C類に第4群の环をもちながら、D類・E類には第3群の环をもつ。13号住居跡は、住居跡の北壁中央部にカマドをもつ。カマドは壁を掘り込み煙道を確保している。カマドの対面に位置する柱穴は掘直しのためか2ヶ所ある。これは、II・IIIの段階においてその拠点となるべき住居跡のもちあわせたA類・C類・E類の环をすべてもち、さらに新しく出現したばかりのD類の环をもつことからIIIとIVの中間的な特徴を備えた準拠点的な性格の住居跡であることも考えられる。また、40号住居跡の場合にも16号住居跡、22号住居跡、43号住居跡というD類のみに第3群の环をもつグループの中にあって、A類及び新出のF類に第4群の环をもつ。IVの段階としての性格の強いものと思われる。40号住居跡は、住居跡の北壁中央部にカマドをもつ。カマドは壁を掘り込み煙道を確保している。以上のようにタルカ作遺跡出土の环のうち、分類によって、4群6類に整理されたものについて、出土する住居跡相互に関与し、消費・生産を共にする単位の追求をおこなった。タルカ作遺跡では国分期の2軒の住居跡と鬼高期と思われるが断定できない数例の遺構を除き、半島状の台地一面に鬼高期の住居跡が展開している。すべての住居跡が同時に存在し、衰退したとは考えられず、むしろ数次にわたる、換言すれば數世代にわたる、しかも限られた時間の中に營まれた「村」の姿がある。津田左右吉、石母田正、藤間生大、有賀喜左衛門、中村吉治らによって追求された、「家とは何か」という問題提起が、考古学的調査とその結果に与える示唆はきわめて大きなものがある。一つの試みとして、「住居」と「家」、「家」と「村」という相互の関りの中で住居跡出土の遺物、とりわけ日用雑器としての环からその展開の様相について検討をおこなった。

(土師器分類 服部哲則 集落関係 石倉亮治 文責 石倉)

引用参考文献 (あいうえお順)

- 有賀喜左衛門 (1972) 古代の家 (家「日本の家族」改題)
有澤要 (1983) 古墳時代3・岩富塚谷津遺跡出土の上器-1 (岩富塚谷津・太田宿)
石井則孝 (1982) 古代の集落
石母田正 (1972) 古代村落の二つの問題 (古代国家と奴隸制 (下))
岩崎卓也 (1983) 古墳時代集落研究序説 (古墳文化の新視角)
人場義雄 (1970) 船田
船田淳子・服部敏史 (1966~1968) 八王子中田遺跡資料編I~III
岸俊男 (1947) 古代後期の社会機構
小林三郎 (1972) 上越時代集落把握への小考 (鞍馬史学31)
駒見和夫 (1984) 古代における炉とカマドー北武藏での検討を中心として一 (信濃36-4)
近藤義郎 (1983) 前方後円墳の時代
直木孝次郎 (1958) 日本古代国家の構造

- 中村吉治（1984）日本封建制の源流（上）・（下）
- 日本考古学研究所鬼高期研究グループ（1982）房總における鬼高期の研究資料編・研究編（日本考古学研究所集報Ⅳ・IV）
- 沼沢豊（1974）考察（小室一千葉ニュータウン1）
- 服部敬史（1979）古代集落の形と特徴（日本考古学を学ぶ3）
- 和島誠一・金井琢良一（1961）集落と共同体（日本の考古学V・古墳時代（下））
- 日本書紀 大化二年八月癸酉条（国史体系）

3 結 語

タルカ作遺跡は、先土器時代、縄文時代、古墳時代、歴史時代にまたがって営まれた遺跡である。弥生時代の遺構、遺物は検出されなかった。各時代におけるタルカ作遺跡の様相は、発掘調査の結果、つぎのようであったことがわかった。

先土器時代の遺構としては、下総II-C期のブロックがほとんどで、石器集中が検出されただけである。しかも、最も集中して出土したものでも、石器の総数は19点である(第3ブロック)。したがって、タルカ作遺跡では、長期的な居住はおこなわれず、短期的なキャンプ程度にしか当時の人々は滞在しなかったと思われる。しかし、その際に、南側の斜面肩口を特に選地していたことが、遺物出土地点の分布からみて、うかがえる。

縄文時代の遺構としては、炉穴が中心であり、草創期～前期に限られる。分布は、台地南西の張り出し部に集中する。時期、構造のちがう大きく南北2つの群に分かれようである。子母口期に比定できる炉穴は、概して掘り方が深く、北側に集中している。これに対して、南側の炉穴は、概して掘りが浅い。したがって、出土土器がほとんど無く時期の決定はできないが、分布の範囲が黒浜式の集中して出土した範囲と重なり、中に野島期、茅山期のものと思われる炉穴もみられるが、多くが黒浜期に属する可能性もある。すると、炉穴というよりは、屋外炉とみななければならぬ。炉穴には、落し穴を伴なったようである。集中しての70以上にのぼる炉穴の存在は、継続的な人間の滞在が十分予想できる。しかし、1つの小堅穴を除いて、住居跡に類するような遺構は、検出されなかった。上器の出土は、子母口式の良好な資料が得られたほか、前期の黒浜・中期の五領ヶ台、阿玉台、加曾利Eといった型式もみられるが、中期の土器に伴う遺構は検出されなかった。

古墳時代の遺構としては、住居跡が、台地の全体にわたって検出された。鬼高窓である。土師壺の編年観をもとに分析すると、集落の変遷を4つの段階に分けて考えることができるようである。そして、第II～第IVの段階には、中心となる住居跡とそれに従う住居跡群という集落内の社会構造がうかがえる。各段階における住居跡の占地をみると、特定の段階の住居跡が台地上の特定の場所に集中しているという傾向は、みられない。台地の中央を中心に、第II～第IV段階の住居跡は散在している。1つの見方として、所属段階不明の住居跡はいくつか有るが、地形に従がって台地の中央を北西から南東へ走る集落のメインストリートが當時存在したと想定し、その両側に住居が営まれたと想像することができそうである。台地中央の住居跡の検出されなかった空白は、集落の広場であろう。当時の主たる生業である農業の場としては、台地下の谷津を利用した水田經營が可能であったろう。

鬼高窓の遺構である可能性のある土塹と方形周溝状遺構は、住居跡と混在して、台地の南西側の斜面近くに立地している。集落との関係は、不明である。

歴史時代の遺構としては、国分期の住居跡が2つ検出されたにとどまる。互いに離れているが、ともに台地の突端の斜面の肩口に立地している。広い台地の平坦面には、何も営まれていない。畠地

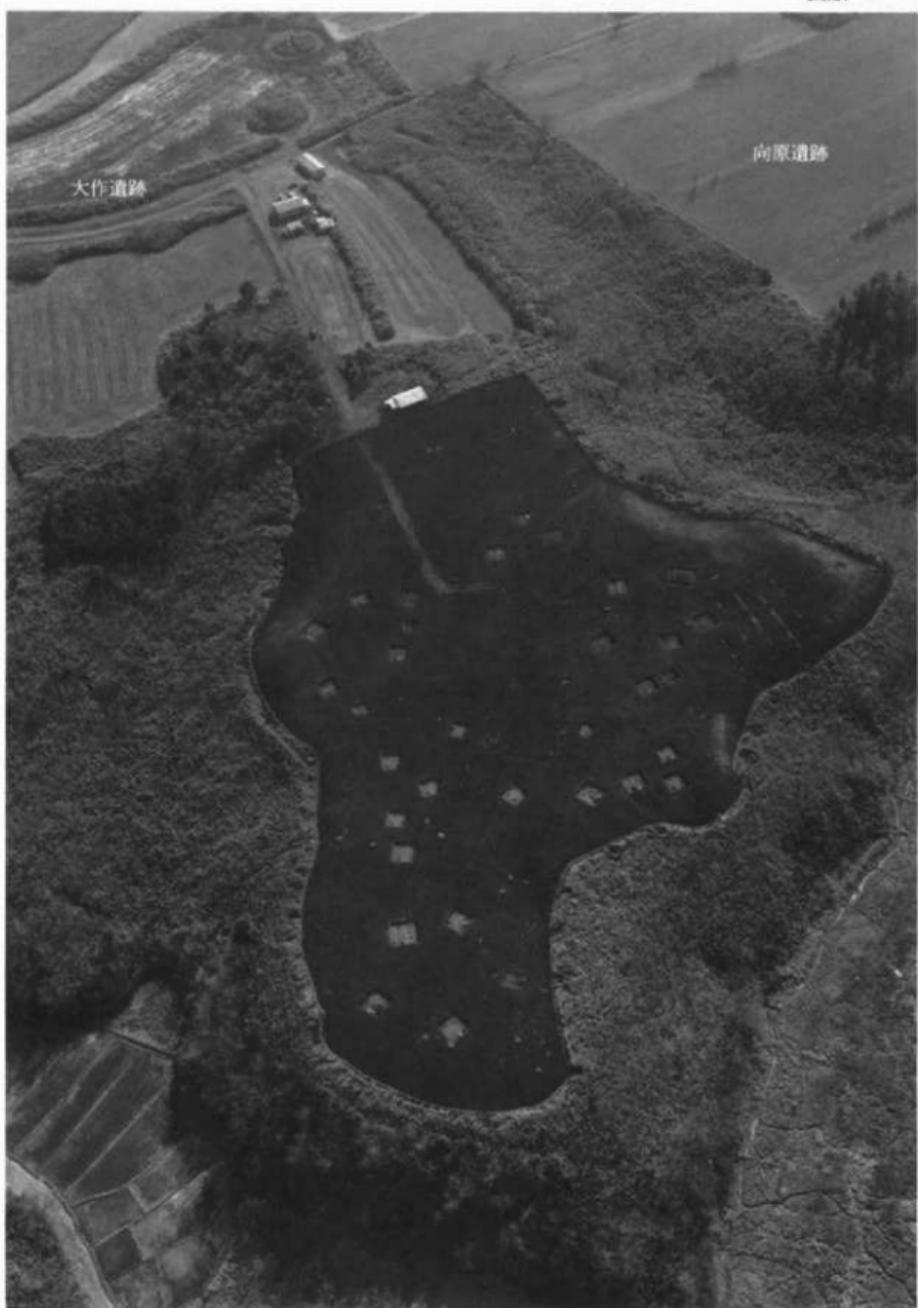
になっていたのであろうか。このようなタルカ作遺跡の発掘調査の成果は、所在する佐倉市一帯の原始、古代の歴史の解明にとって貴重な資料となるものである。

(藤 淳一)

写 真 図 版



タルカ作遺跡とその周辺（空中写真・南から）



遺
跡

タルカ作遺跡とその周辺（空中写真・北から）



遺跡

タルカ作遺跡の俯瞰（空中写真）

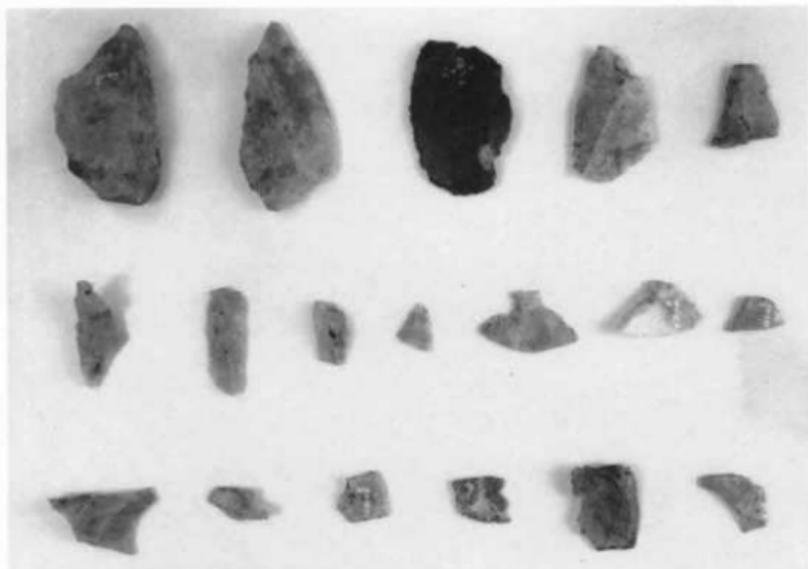


先土器時代第3ブロック (III層)

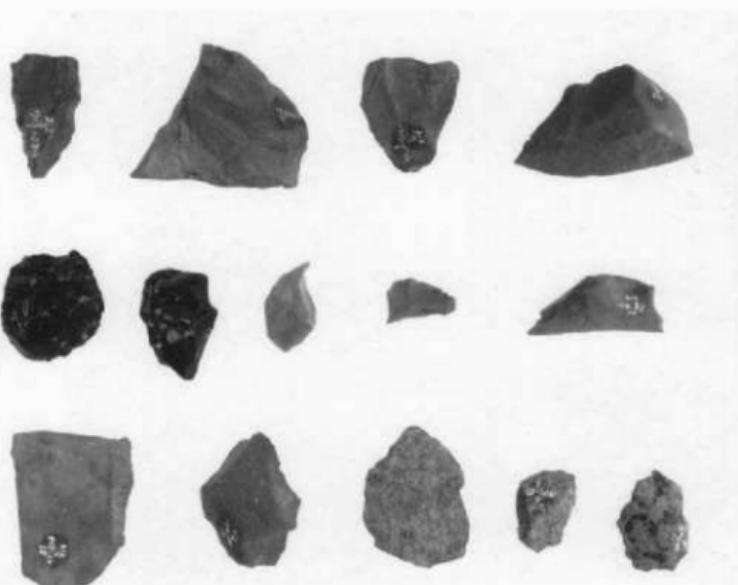
先土器時代



先土器時代第2ブロック (IV層)



先土器時代の石器（第3ブロック）



先土器時代

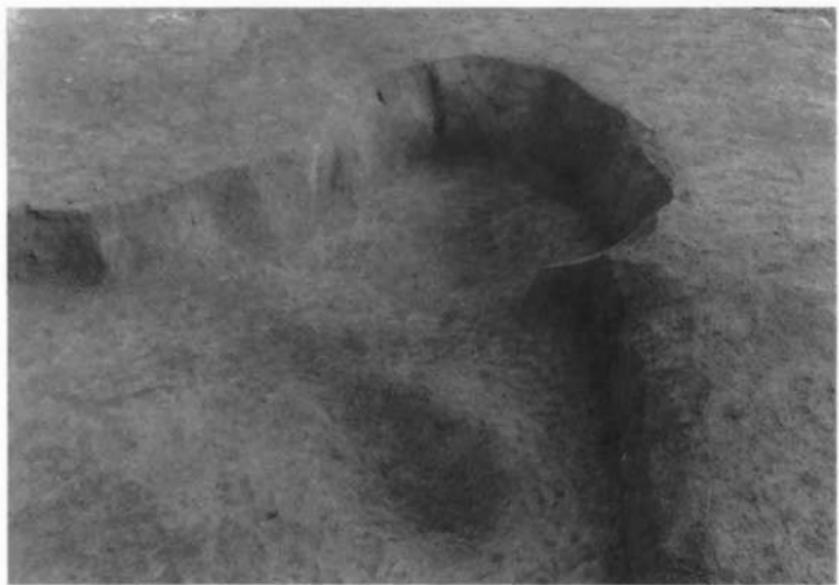
先土器時代の石器（第1・2・4・5ブロック・ブロック外）



第1号炉穴

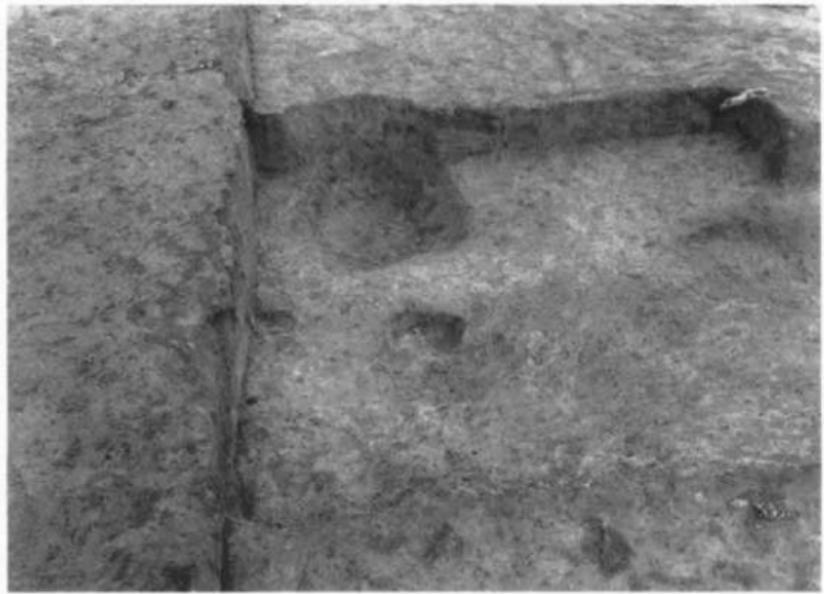


第2号炉穴



第3号炉穴

繩文時代



第4・5号炉穴



第 6 号炉穴



第 7 号炉穴



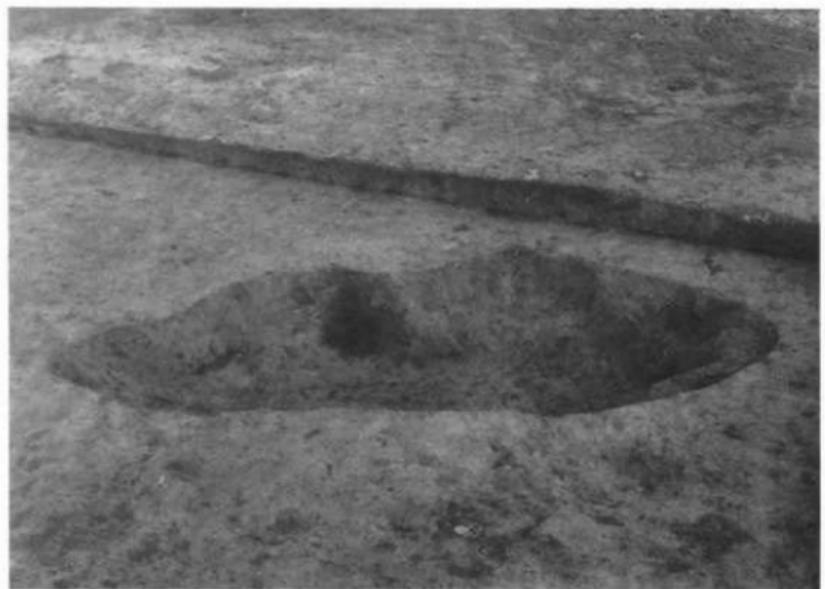
第9号炉穴



第9号炉穴（遺物出土状況）

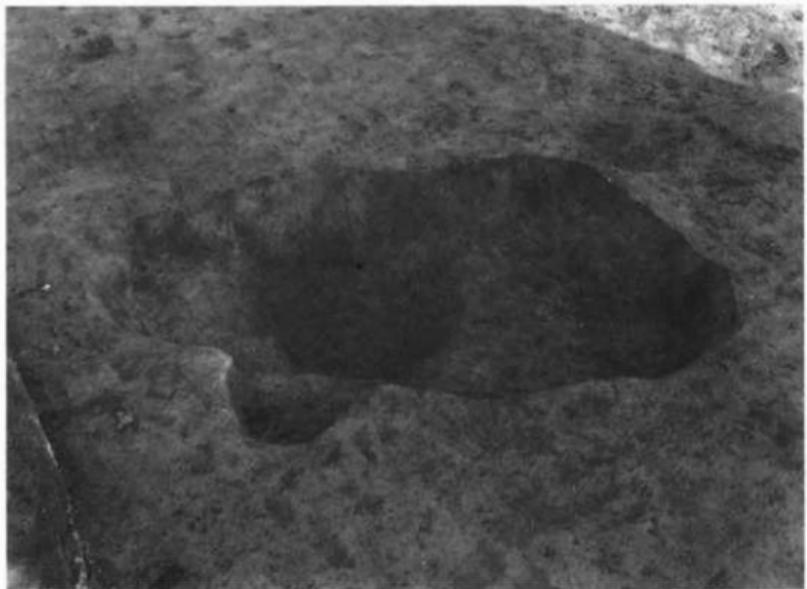


第10号炉穴



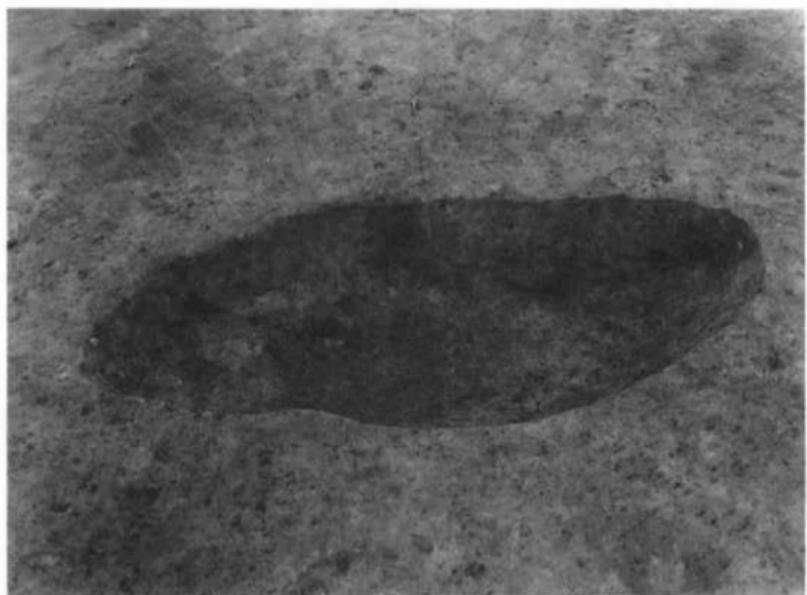
縄文時代

第11号炉穴

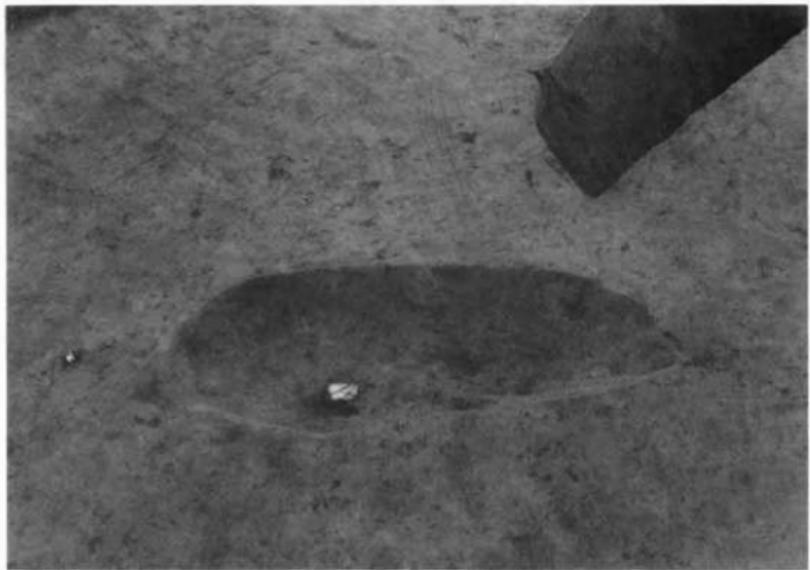


第12号炉穴

縄文時代



第13号炉穴



第14号炉穴



第15号炉穴



第16号炉穴

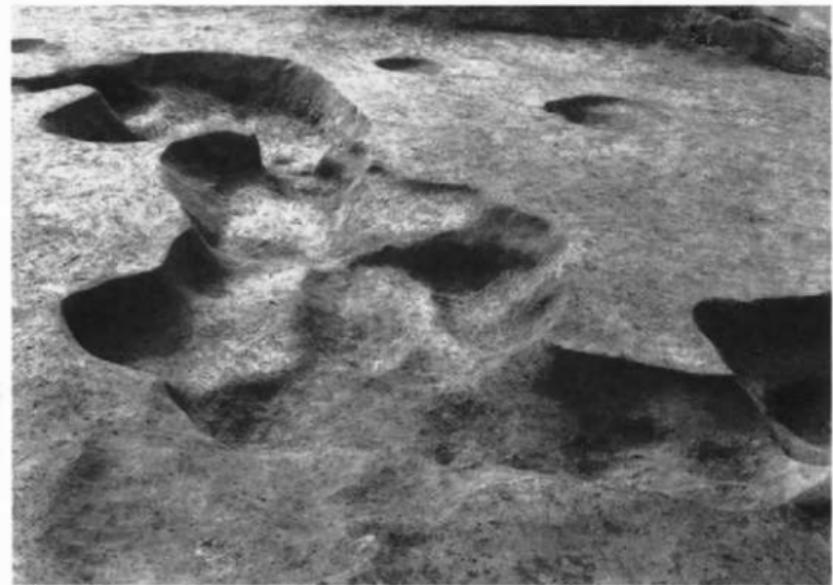


縄文時代

第17号炉穴



第20号炉穴



縄文時代

第22号炉穴



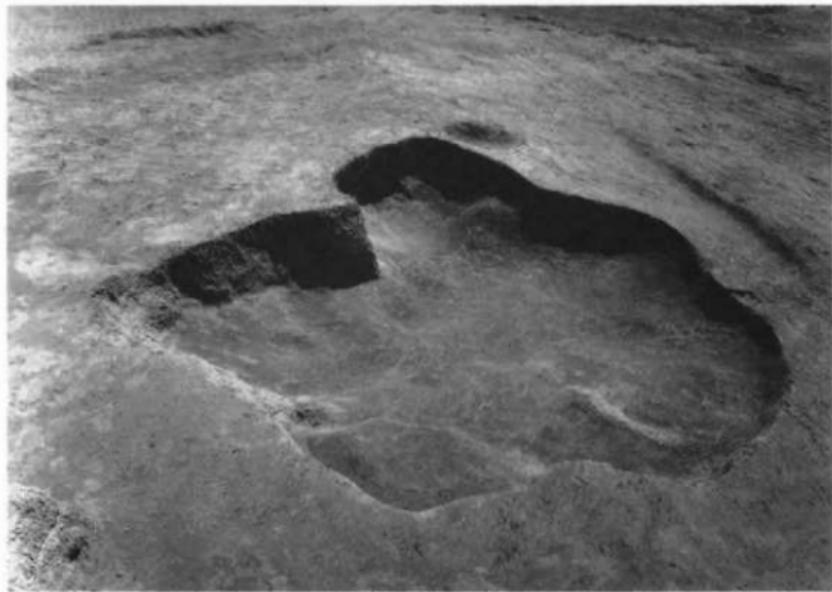
第25号炉穴



第27号炉穴



第29号炉穴

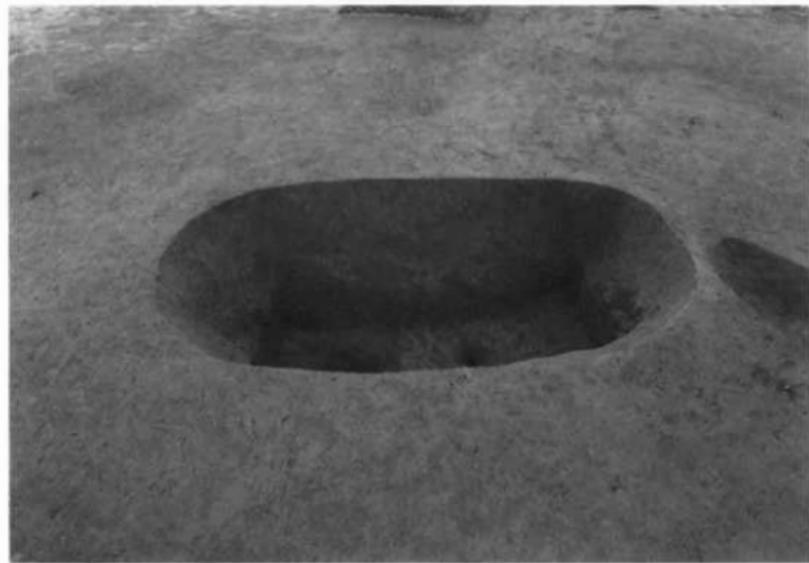


縄文時代

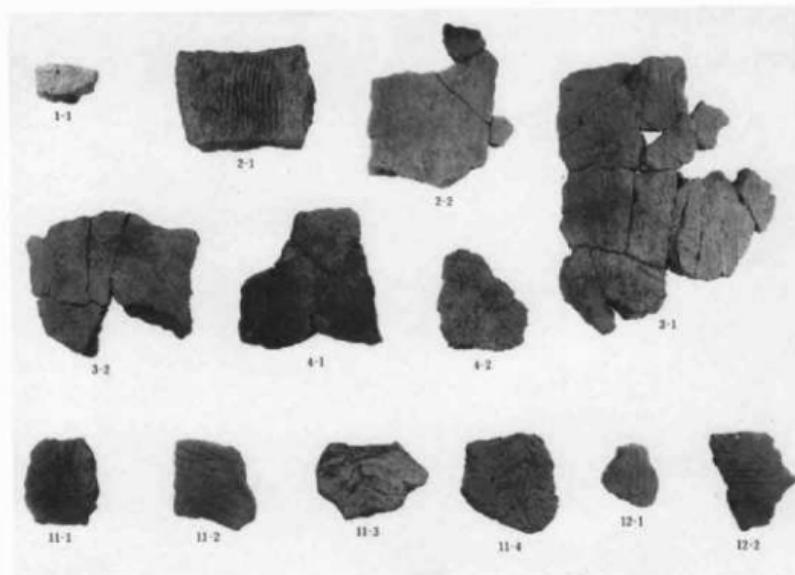
第36号炉穴



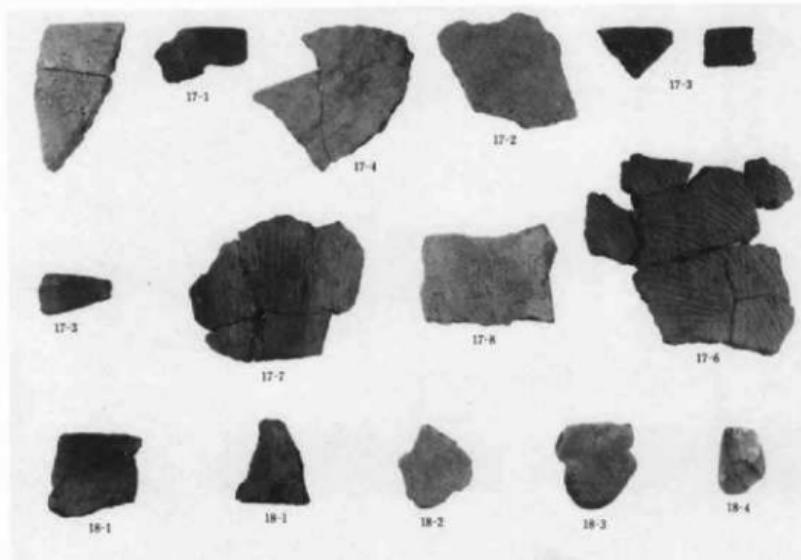
第2号落し穴



第3号落し穴

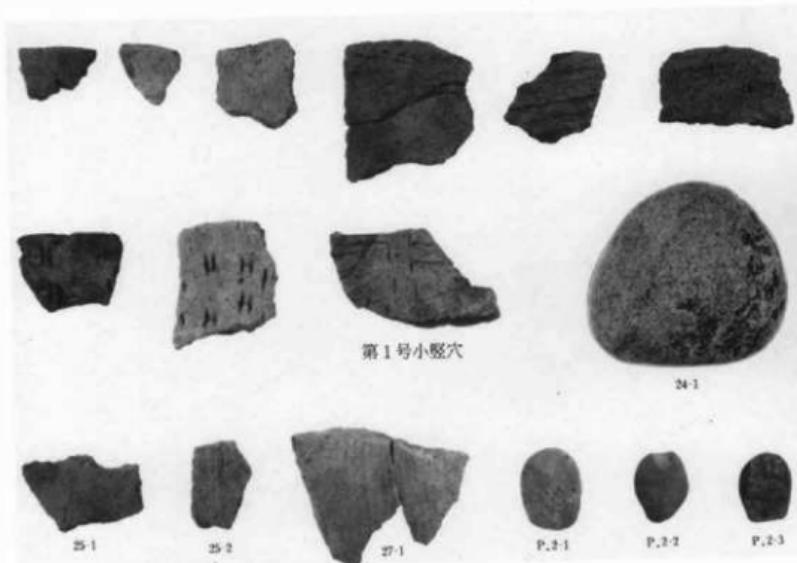


遺構内の遺物

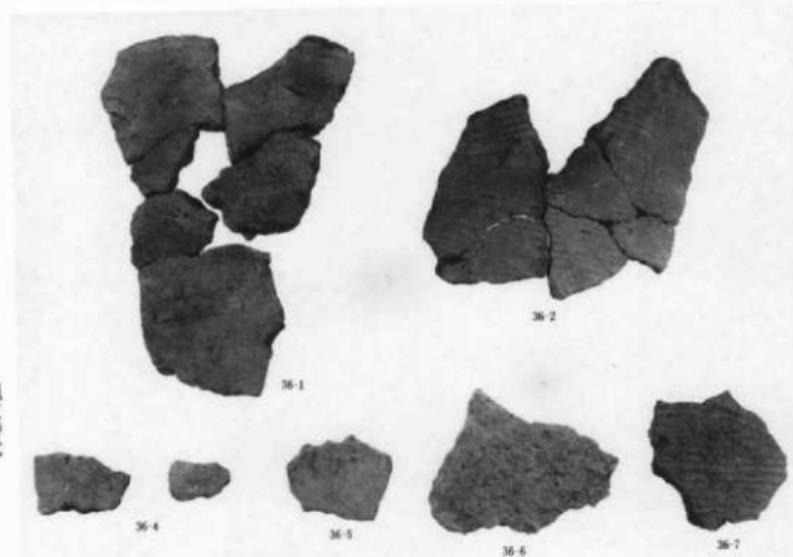


縄文時代

遺構内の遺物

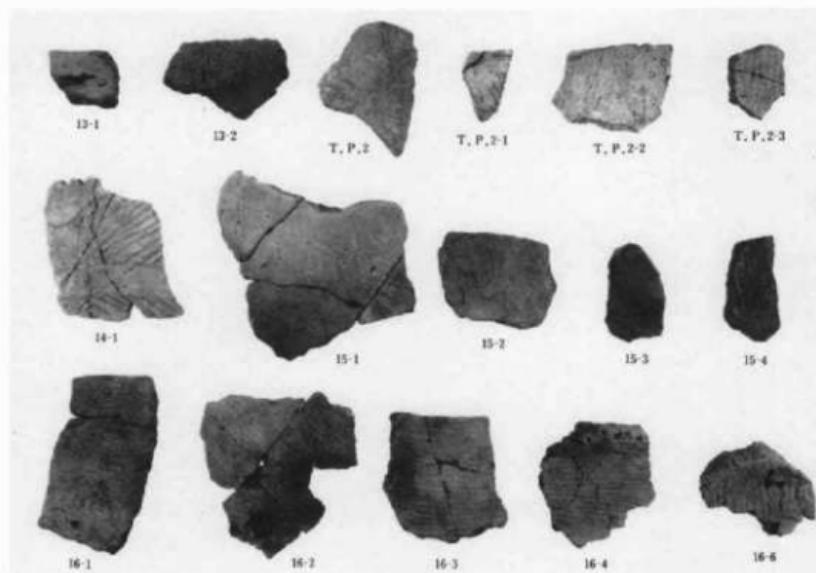


遺構内の遺物

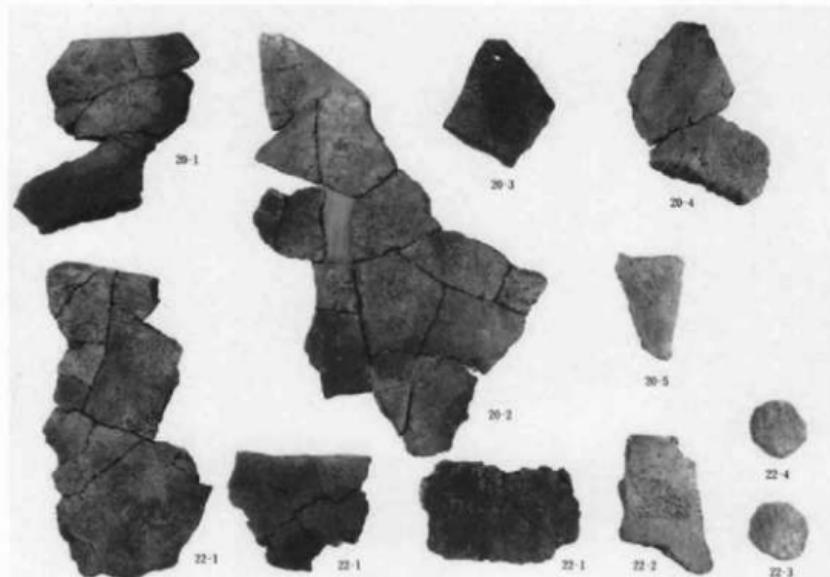


縄文時代

遺構内の遺物



遺構内の遺物



縄文時代

遺構内の遺物



36-3



9-2



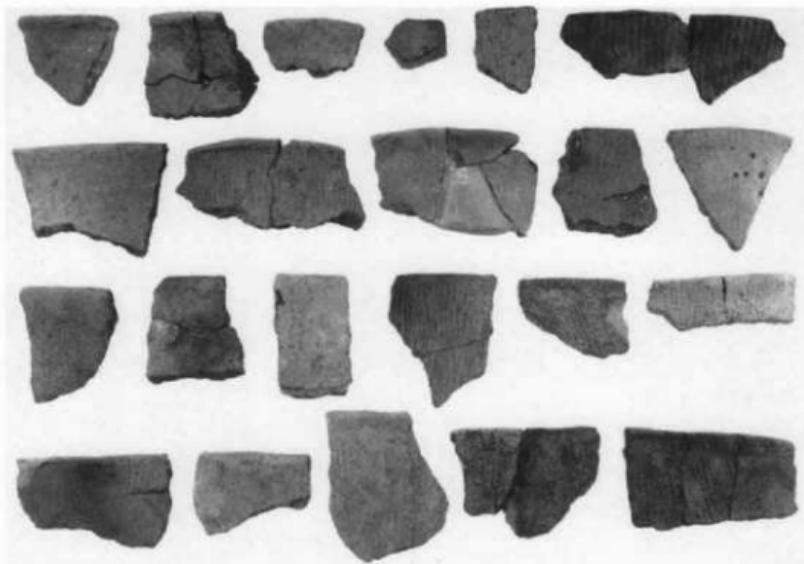
9-1



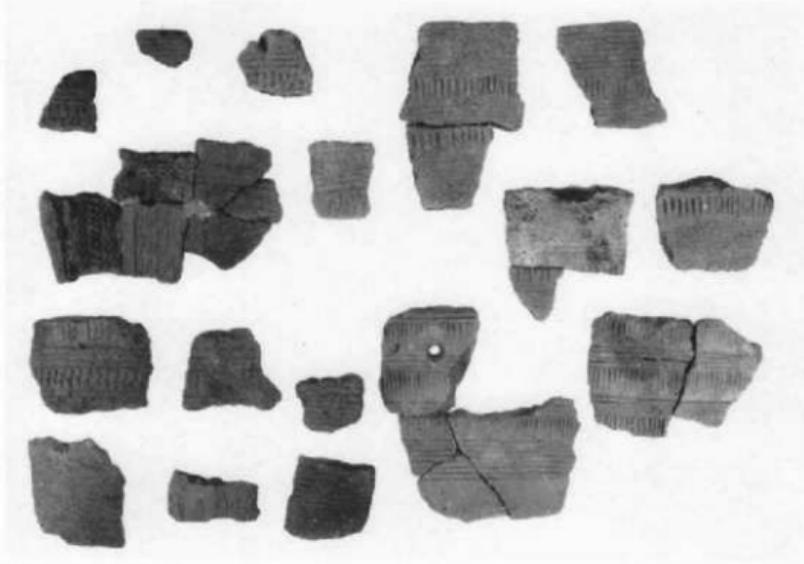
29-1

縄文時代

遺構内の遺物



縄文土器（第Ⅰ群土器）



縄文時代

縄文土器（第Ⅱ群土器）

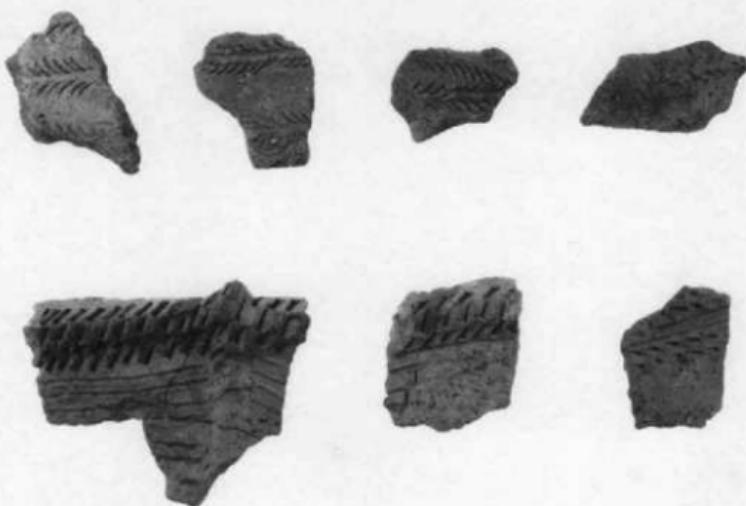


縄文土器（第II群土器）

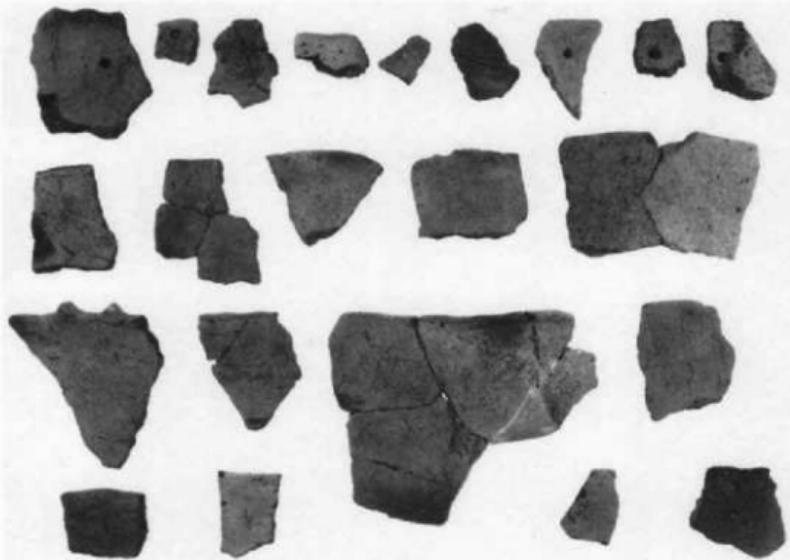


縄文時代

縄文土器（第II群土器）

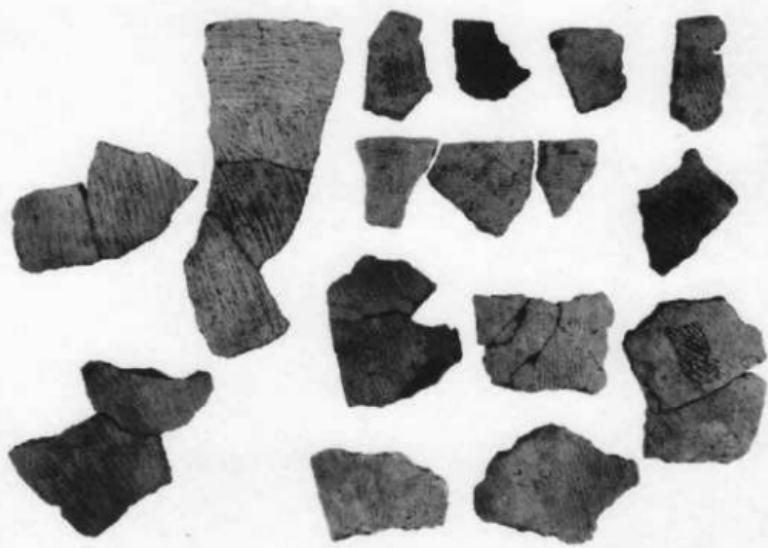


縄文土器（第II群土器）

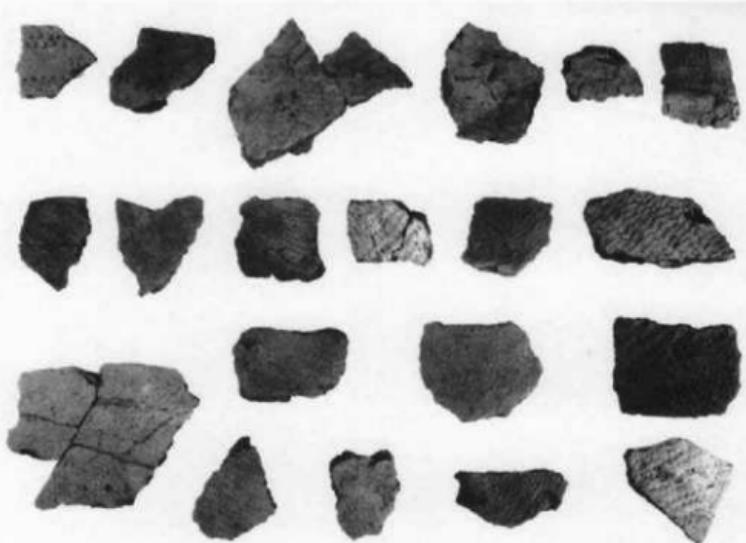


縄文時代

縄文土器（第III群土器）

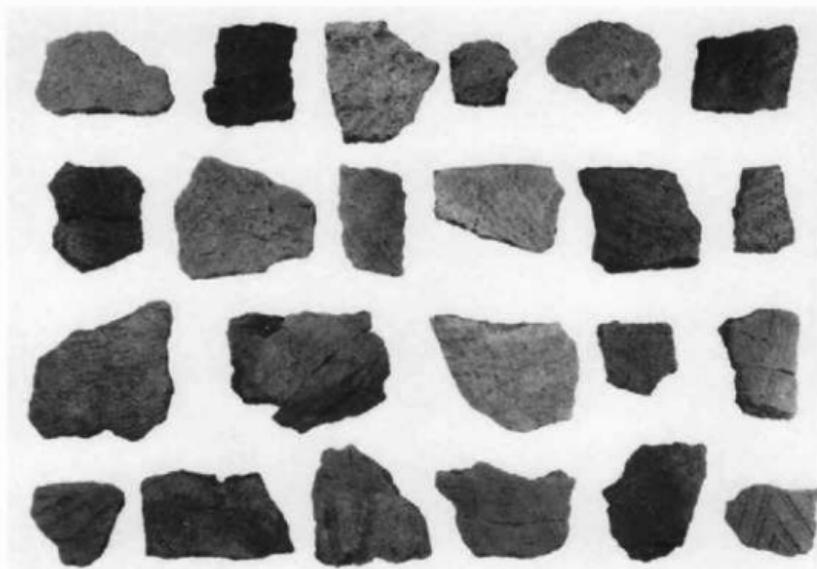


縄文土器（第III群土器）

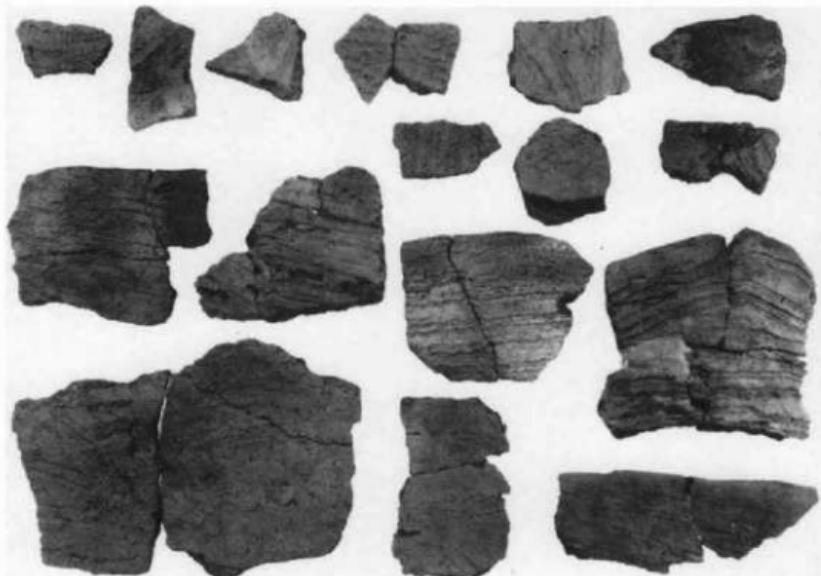


縄文時代

縄文土器（第IV群土器）

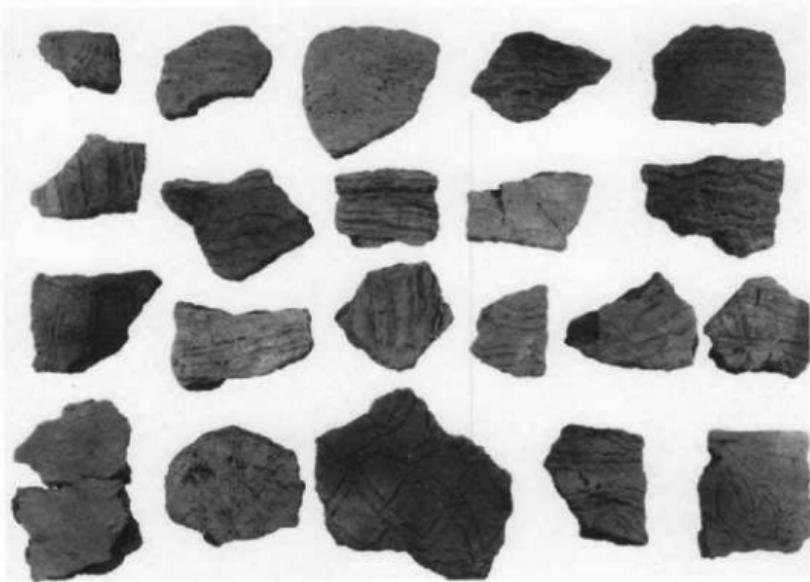


縄文土器（第IV群土器）



縄文時代

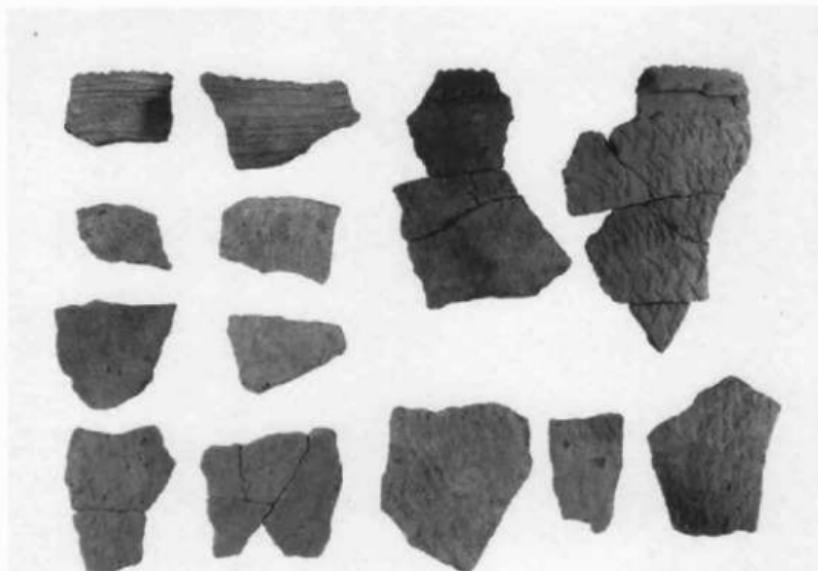
縄文土器（第IV群土器）



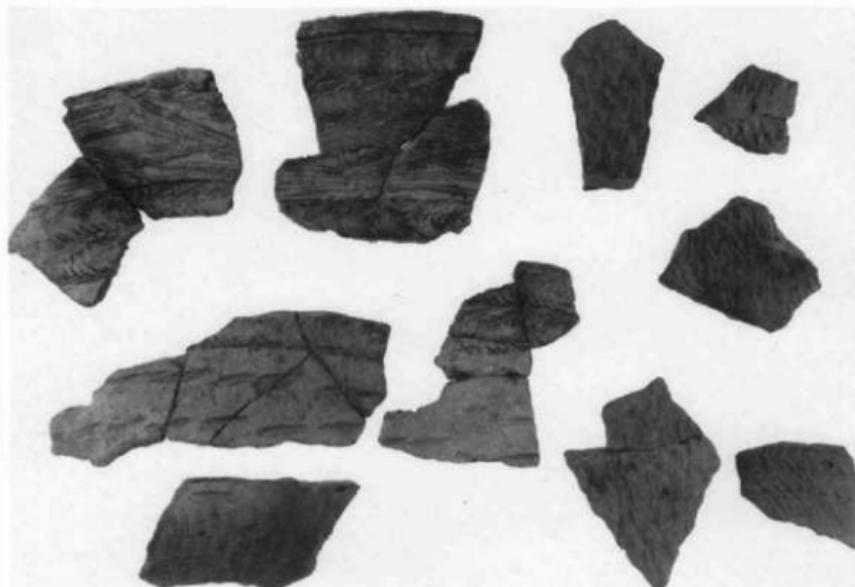
縄文土器（第IV群土器）



縄文土器（第V群土器）

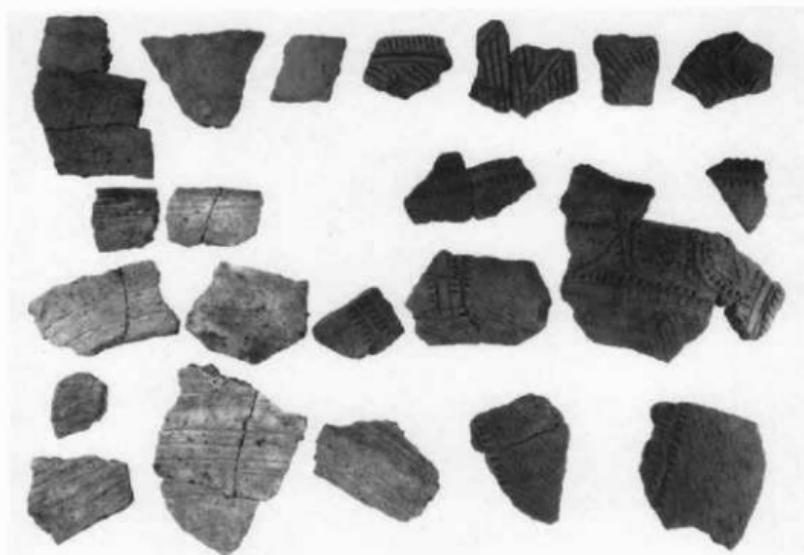


縄文土器（第V群土器）



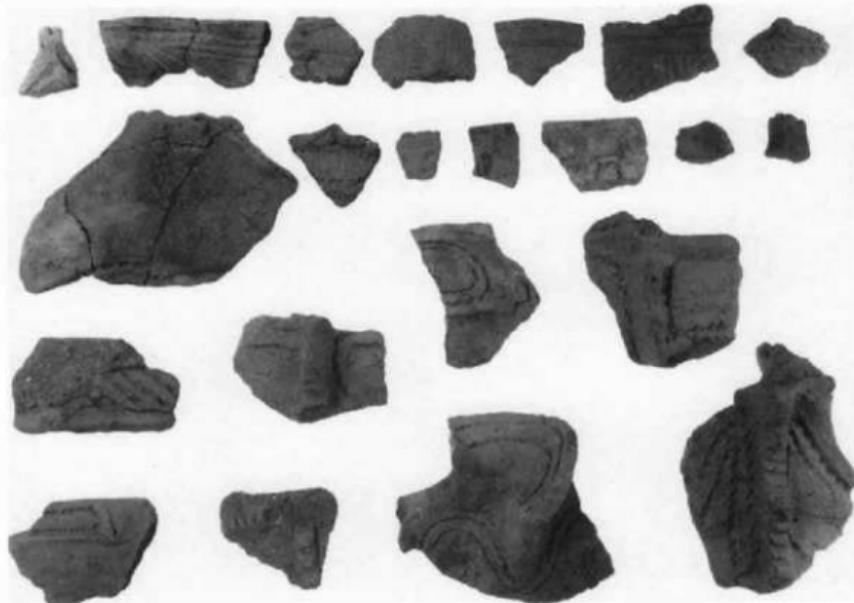
縄文時代

縄文土器（第V群土器）



縄文土器（第VI・VII群土器）

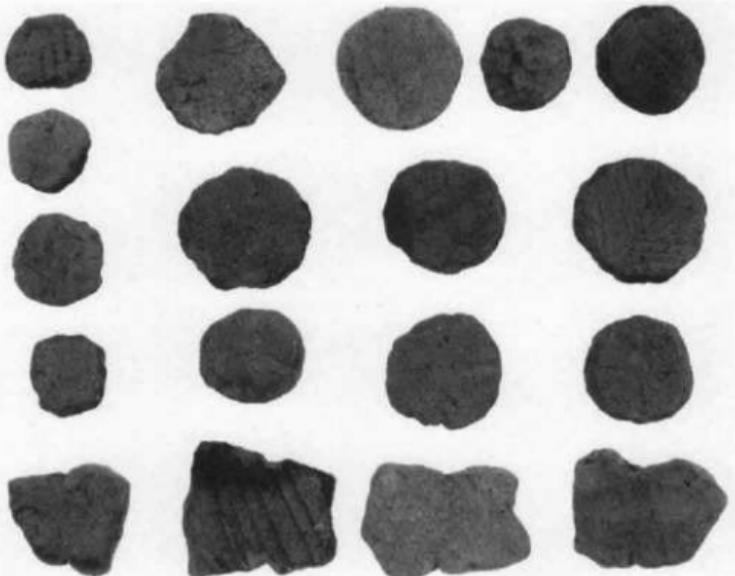
縄文時代



縄文土器（第VII・VIII群土器）

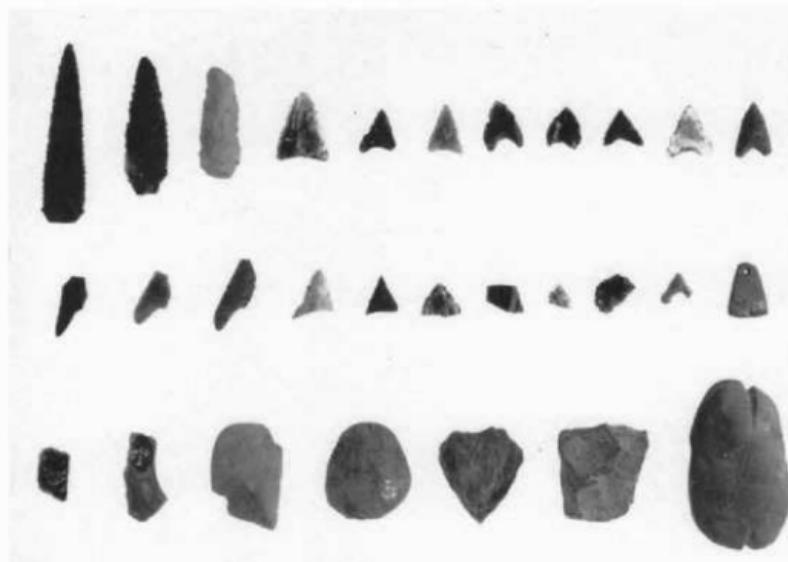


縄文土器（第19群土器）

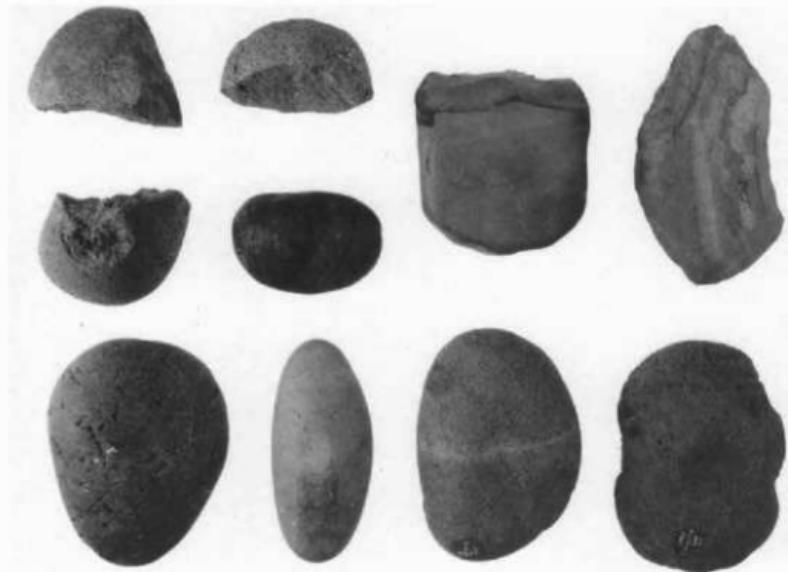


縄文時代
土製品

土製品

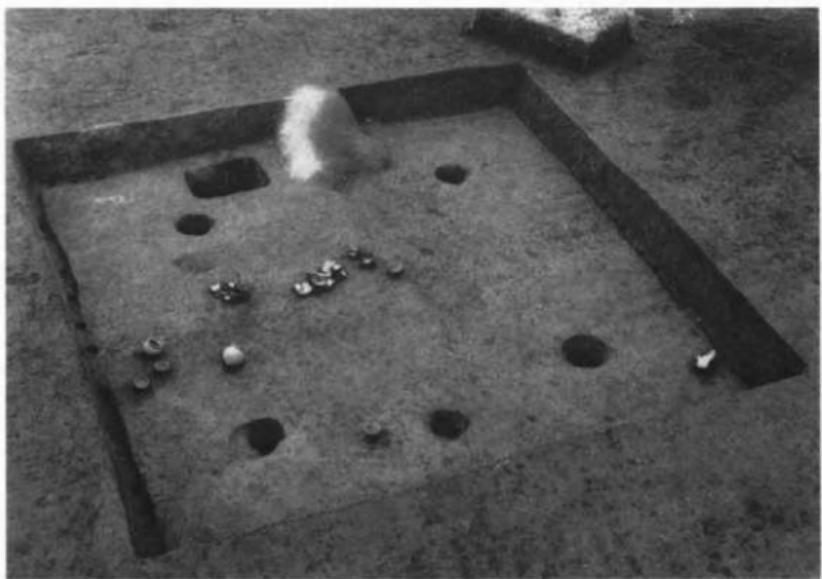


石 器 (1)



縄文時代

石 器 (2)



第1号住居跡



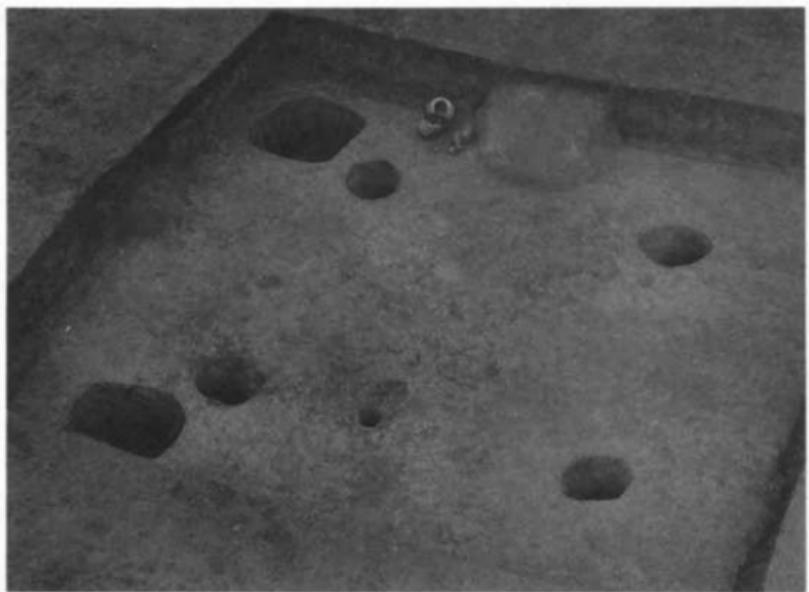
第1号住居跡（遺物出土状況）



第2号住居跡



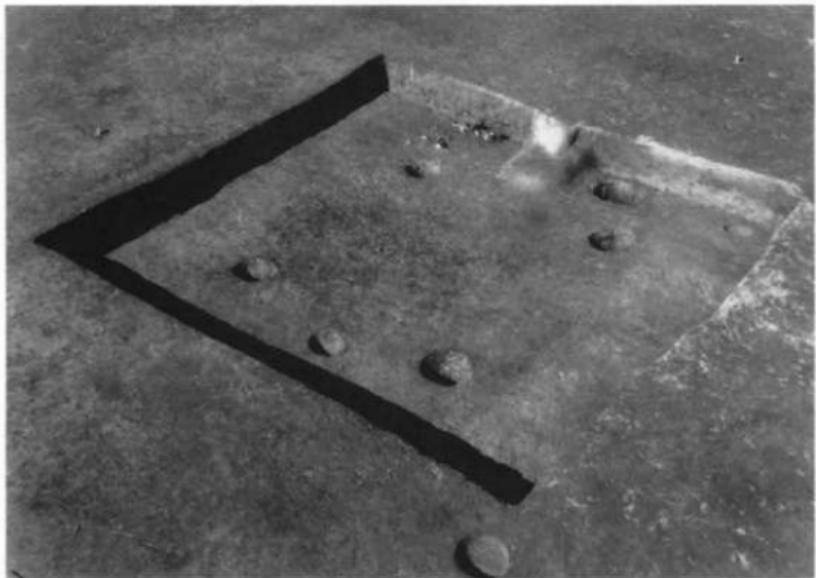
第2号住居跡（遺物出土状況）



第3号住居跡



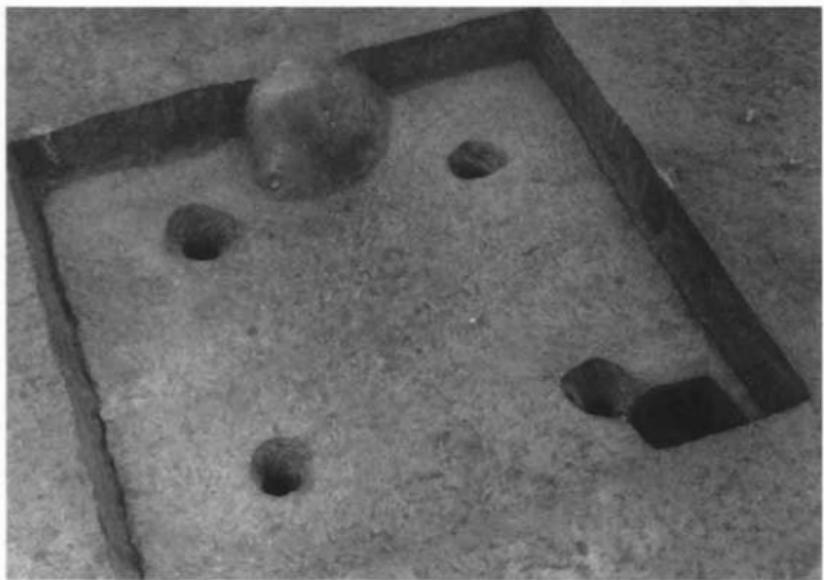
第3号住居跡（遺物出土状況）



第4号住居跡

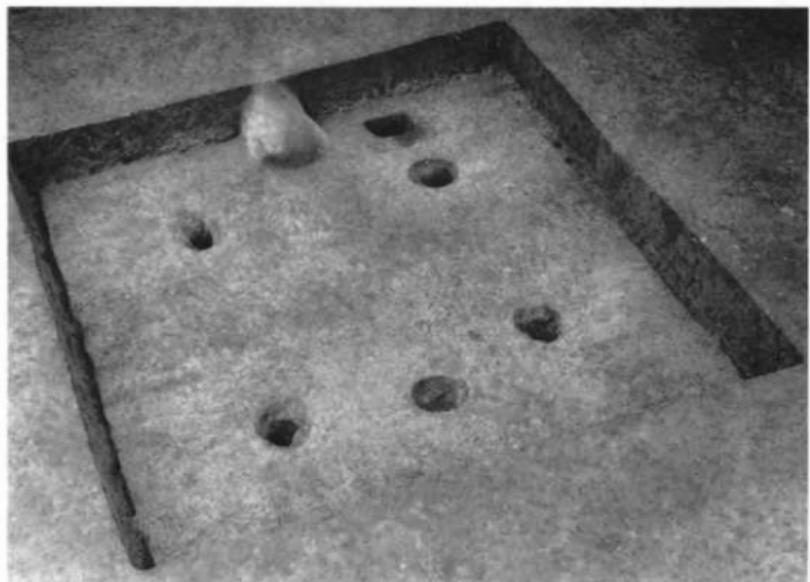


第4号住居跡（遺物出土状況）



第5号住居跡

古墳時代



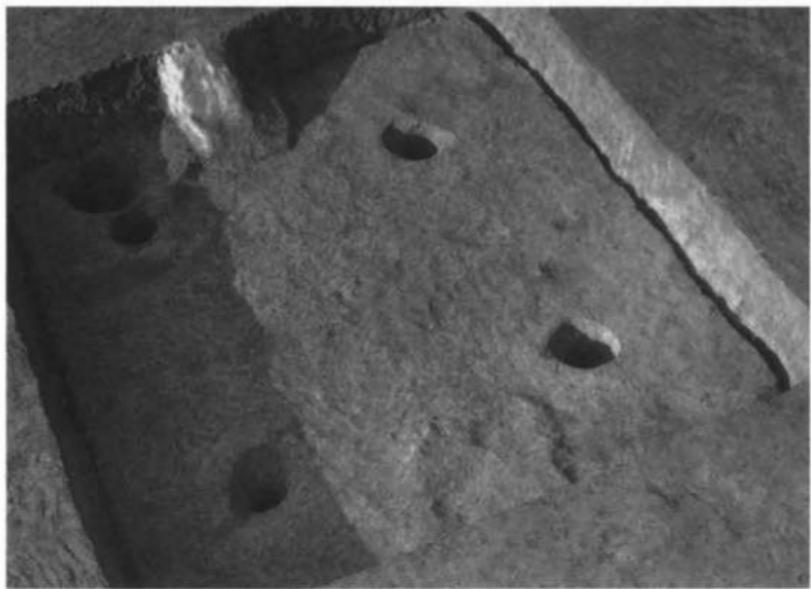
第6号住居跡



第7号住居跡



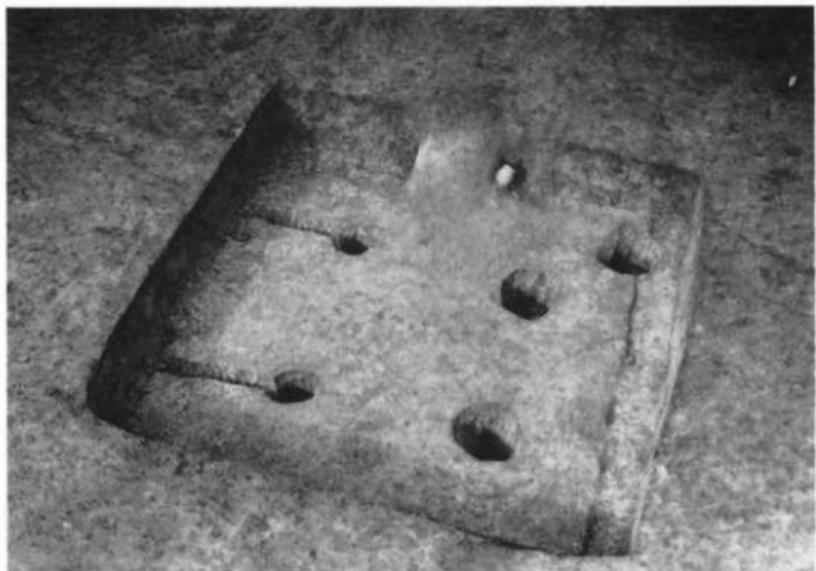
第7号住居跡（遺物出土状況）



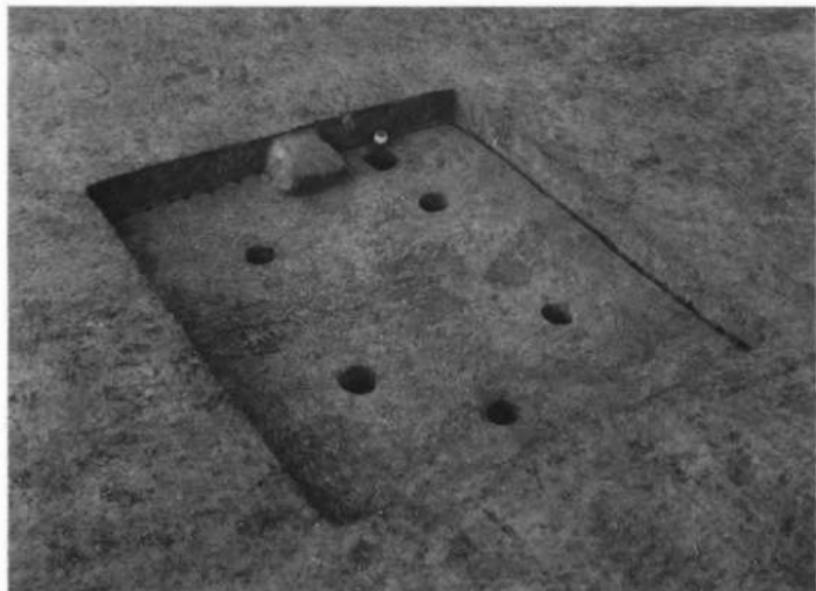
第 8 号住居跡



第 9 号住居跡

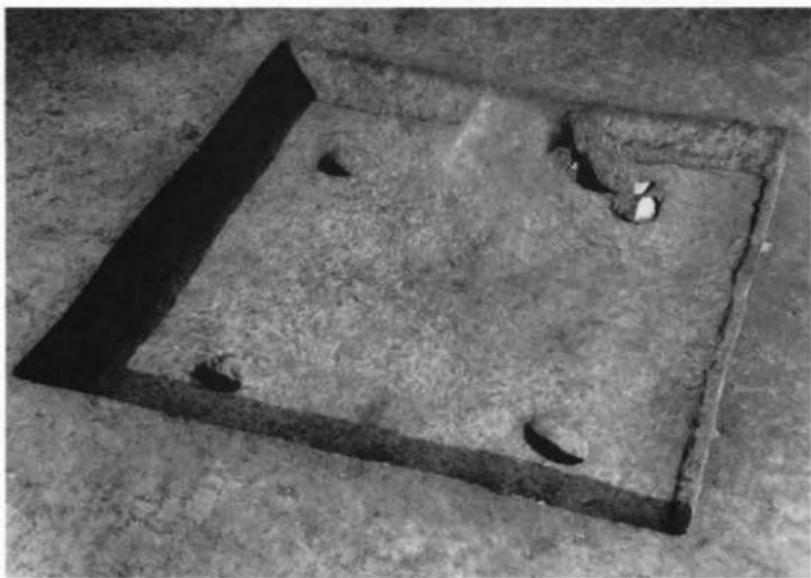


第10号住居跡

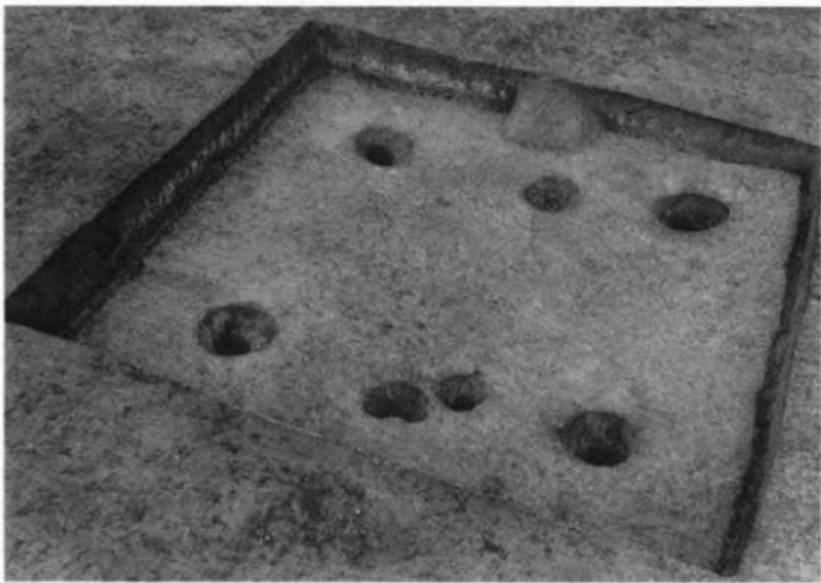


古墳時代

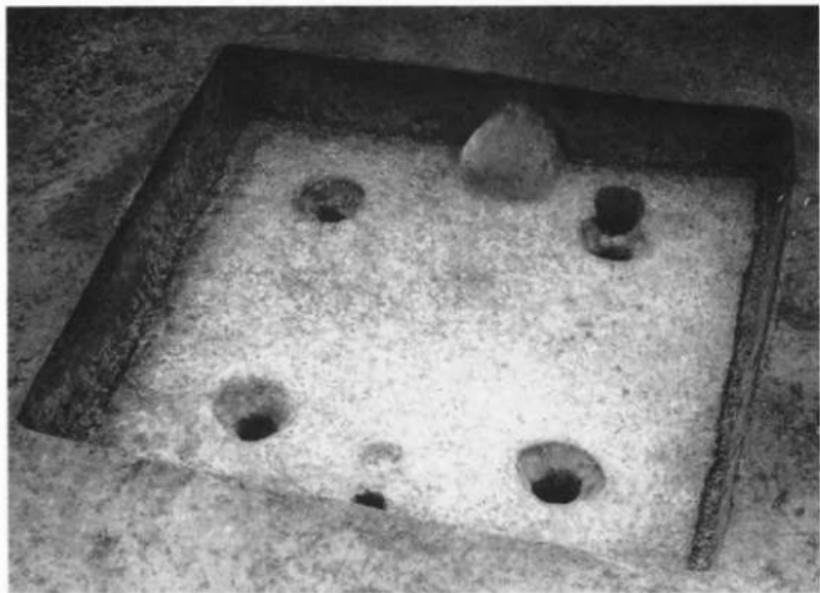
第11号住居跡



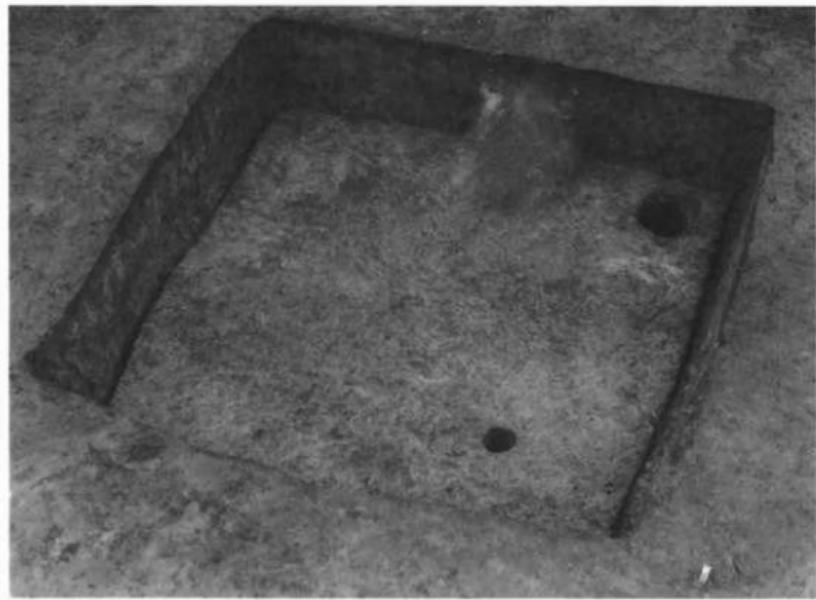
第12号住居跡



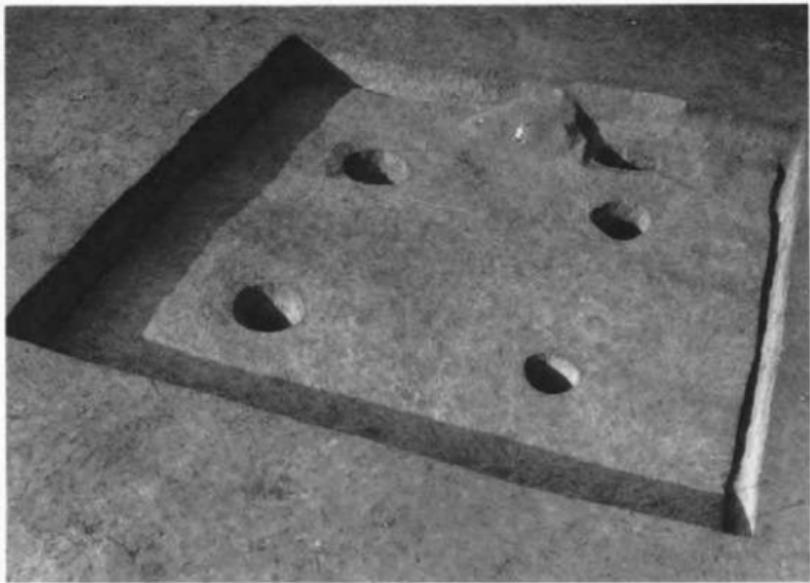
第13号住居跡



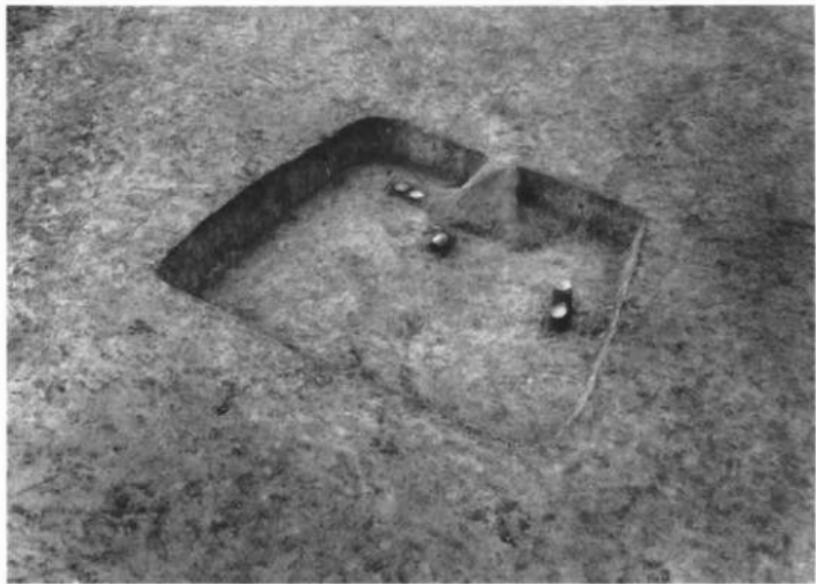
第14号住居跡



第15号住居跡



第16号住居跡

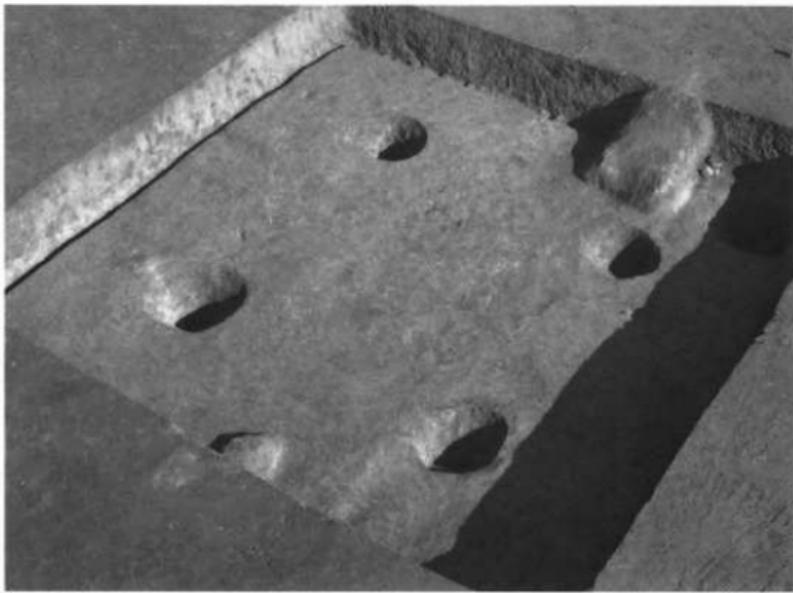


古墳時代

第17号住居跡



第18号住居跡

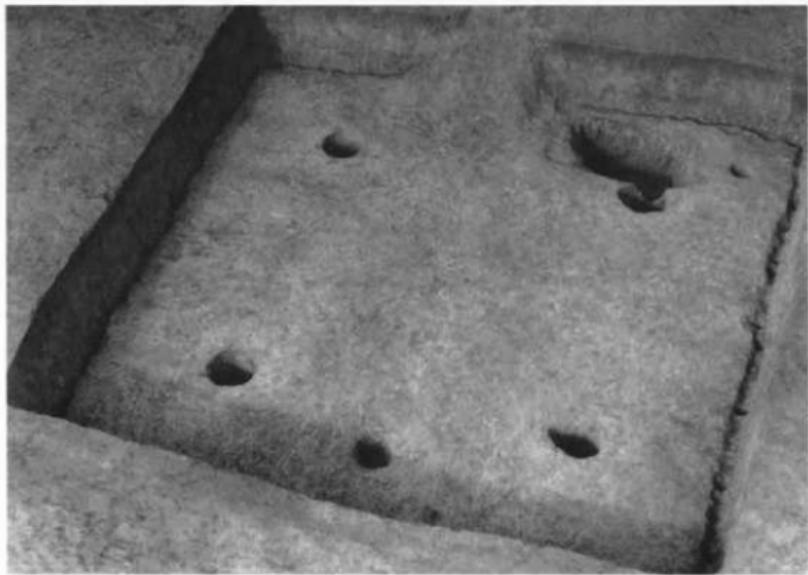


古墳時代

第19号住居跡



第20号住居跡



第21号住居跡

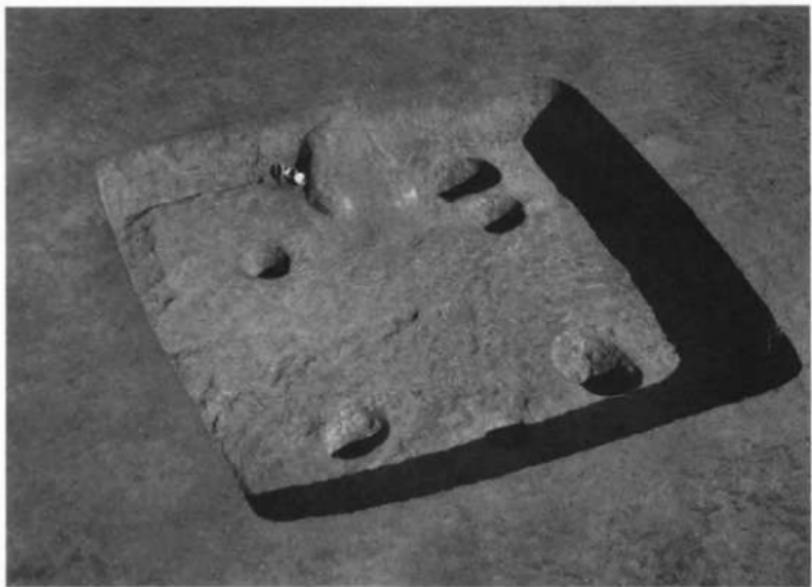


第22号住居跡

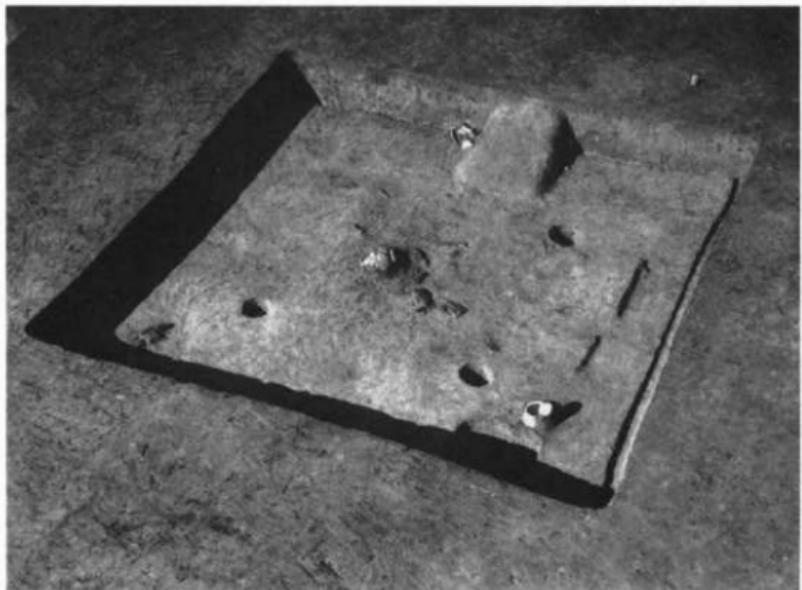


古墳時代

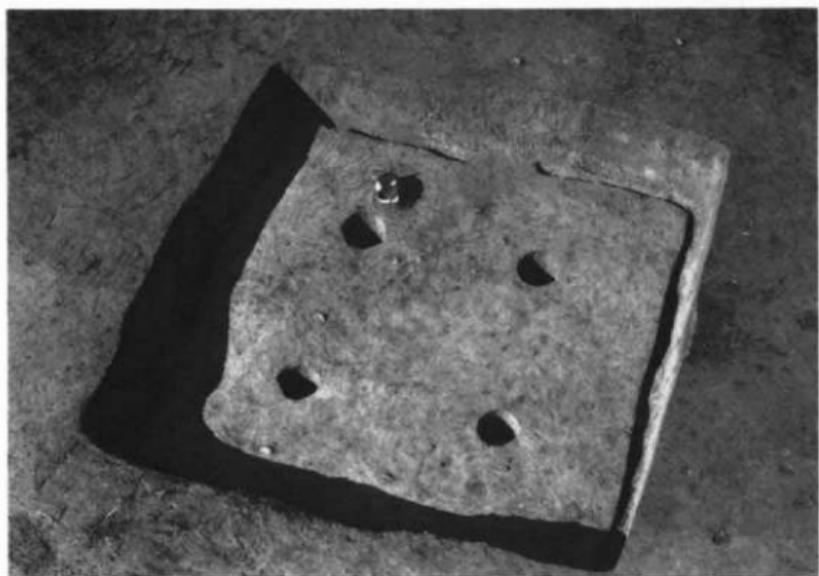
第23号住居跡



第24号住居跡



第25号住居跡

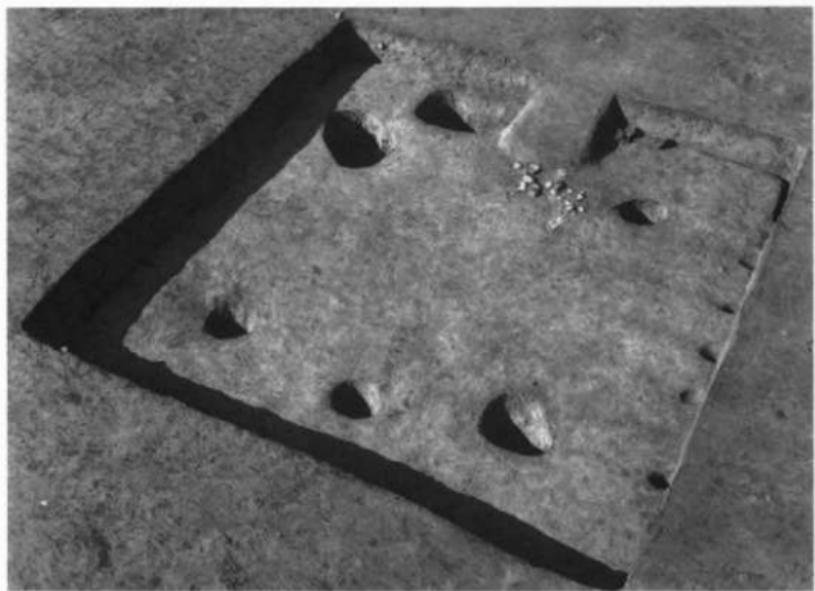


第26号住居跡

古墳時代



第27号住居跡



第28号住居跡

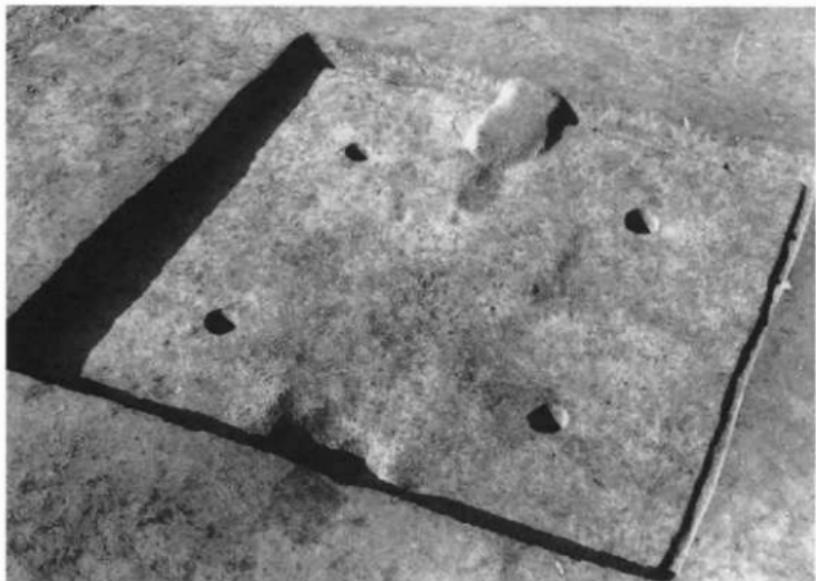


古墳時代

第28号住居跡（遺物出土状況）

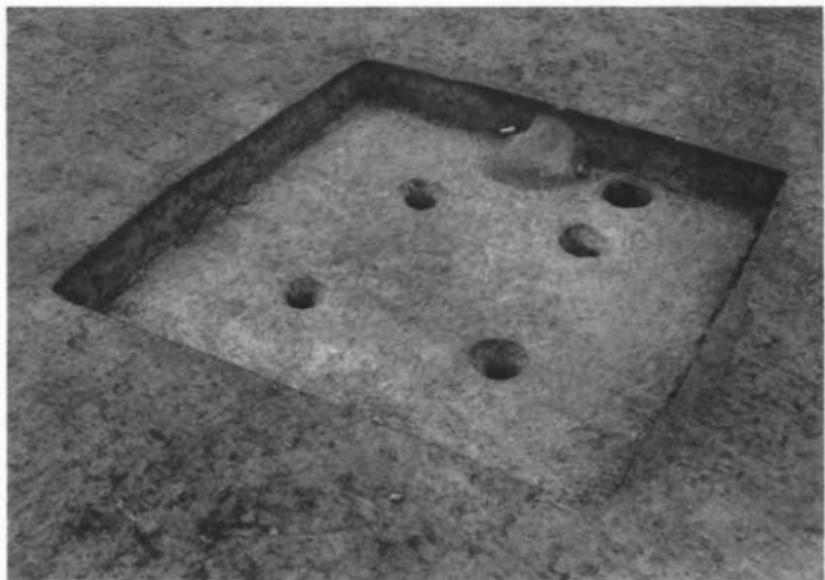


第29号住居跡



古墳時代

第30号住居跡



第31号住居跡



第31号住居跡（遺物出土状況）



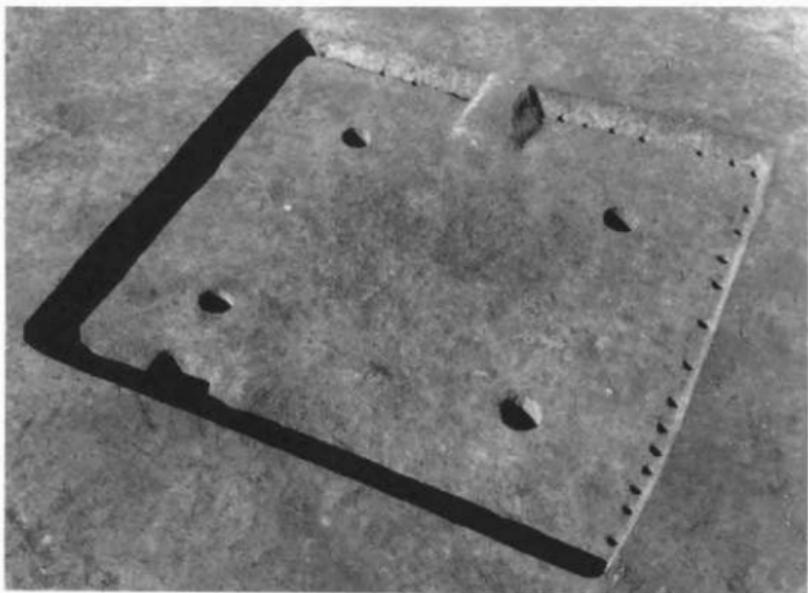
第32号住居跡



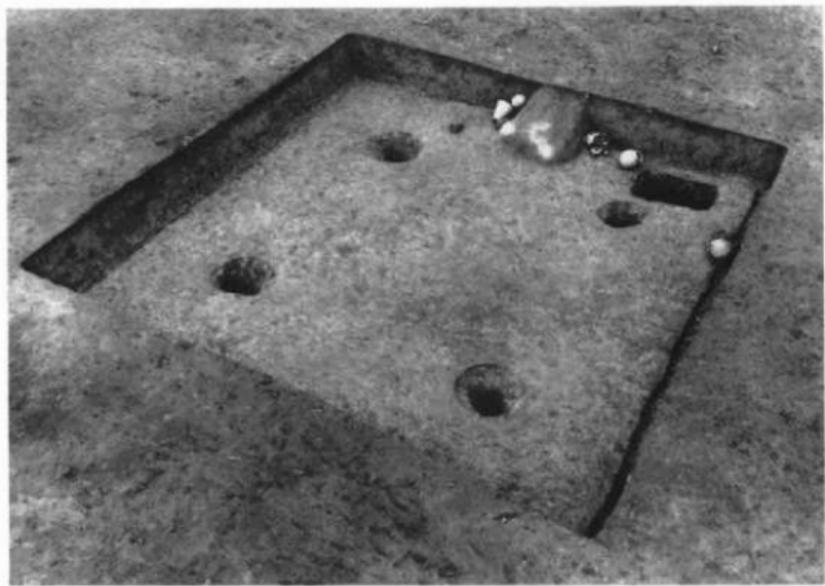
第33号住居跡



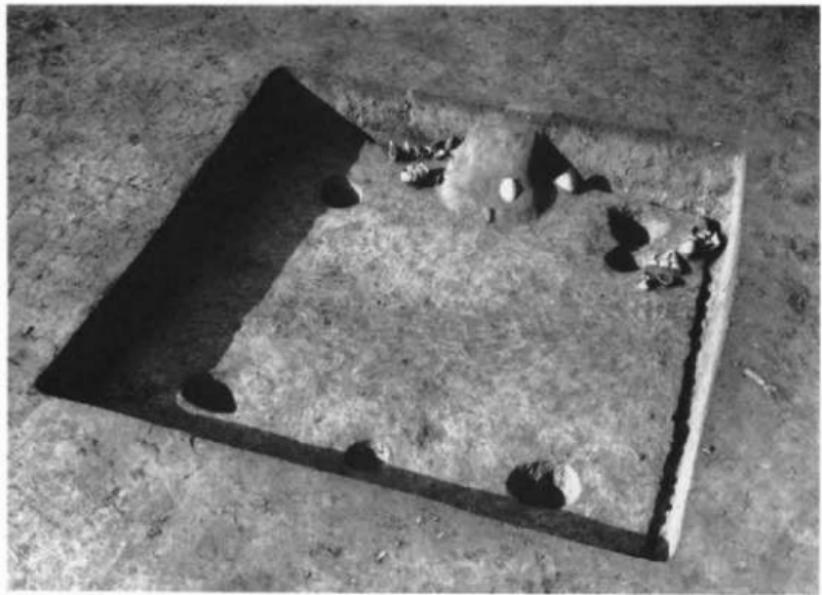
第33号住居跡（カマド断面・中央に支脚）



第34号住居跡



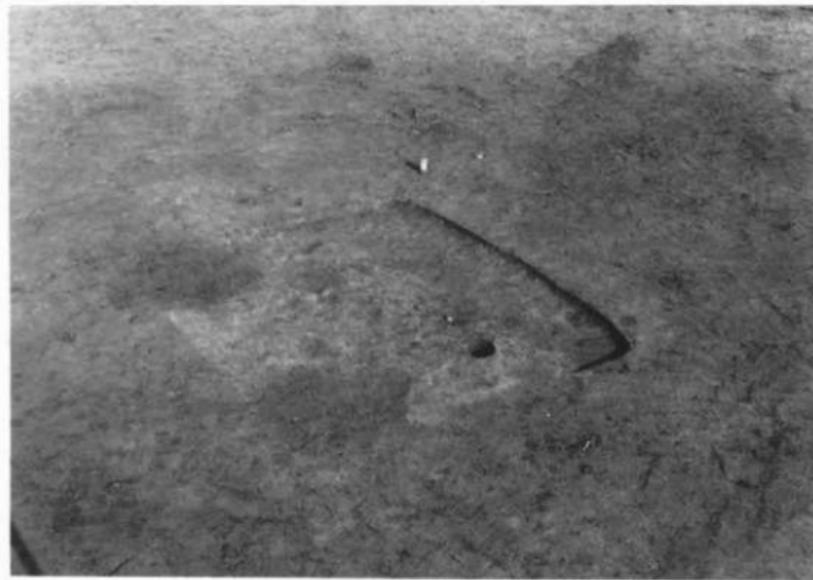
第35号住居跡



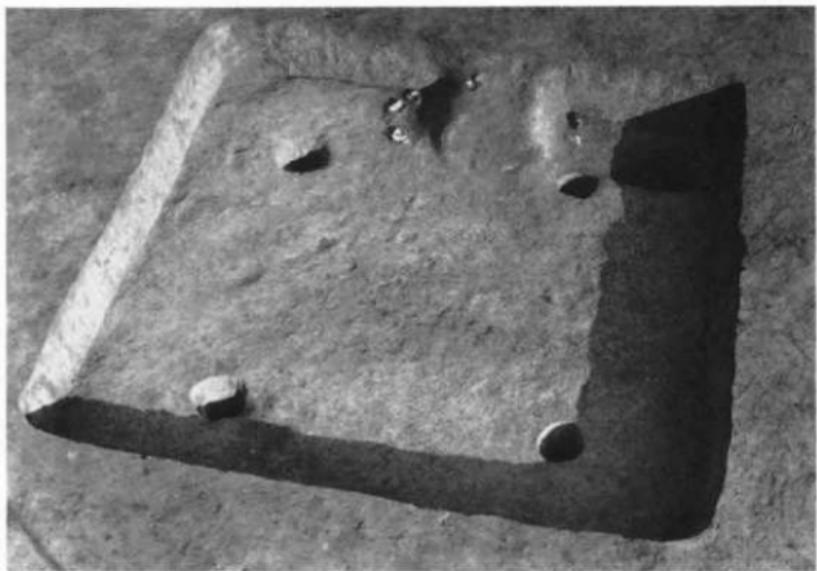
第36号住居跡



第37号住居跡



第38号住居跡



第39号住居跡



第40号住居跡



第40号住居跡（遺物出土状況）



第41号住居跡



第42号住居跡



第43号住居跡

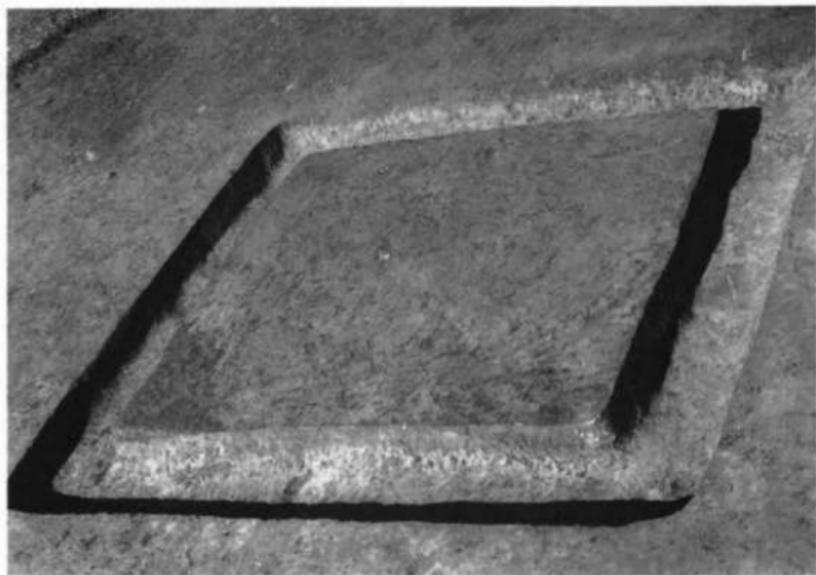


第44号住居跡

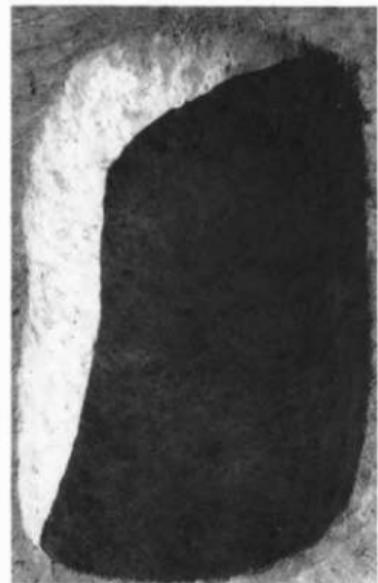
歴史時代



第45号住居跡



方形周溝



古墳時代

第 1 号土塚



第 2 号土塚



1-3



1-2



1-4



1-5



1-6



1-7



1-9



1-10



1-12



1-15



1-16



1-17



1-18



2-2



2-4



2-5



2-6



2-7



2-8



2-9



2-10

古墳時代



2-11



2-12~18



3-1



3-2



3-4



3-7



3-8



3-9



3-10



3-11



3-22





4-8



4-5



4-11



4-9



4-10



4-12



4-13



4-14



4-17



4-18



4-21



4-24



4-29



4-26



4-27



4-28



5-3



5-1



5-7



5-8



6-3



6-6



6-7



7-2



7-4



7-2



7-5



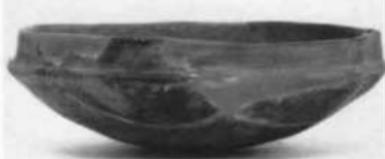
7-8



7-6



7-9



7-12



7-13



7-10



7-16



7-18



7-21



7-22



7-20



7-23



8-5



8-6



9-1



10-1



10-4



10-2

古墳時代



10-5



10-7



11-1



11-2



11-9



11-3



11-12



12-1



12-5



12-8



12-9



12-10



12-14



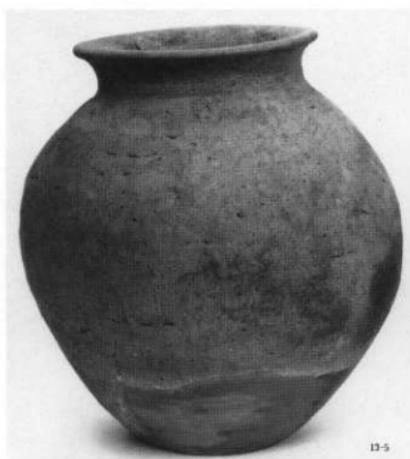
12-15



13-1



13-3



13-5



13-7



13-6



13-8



13-9



13-16



14-2



14-3



14-4



14-4



15-1



15-2



15-3



15-4



15-7



16-1



16-5



17-5



17-1



17-2



17-6



19-4



19-11



19-9



19-20



19-15



19-16



19-17



19-18



19-13



21-2



20-3



21-7



21-6



21-11



21-8



21-9



21-10



22-1



22-5



22-6



22-7



22-11



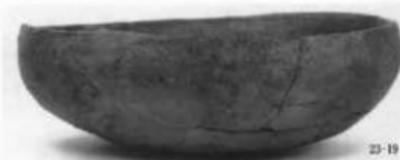
22-12



22-2



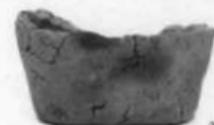
23-13



23-19



23-17



23-29



24-4



24-2



24-5



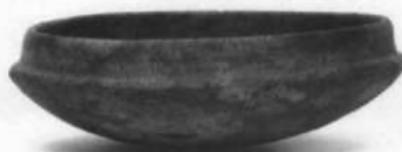
24-7



24-6



24-9



24-8



24-11



25-1



25-2



25-3



25-4



25-6



25-9



25-16



25-10



25-12



27-1



26-1



27-3



27-4



28-1



28-2



28-3



28-4



28-5



28-6



28-11



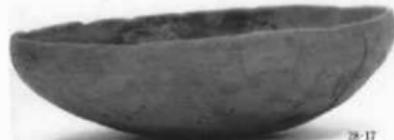
28-12



28-13



28-14



28-17



28-18



29-1



29-4



29-7



29-8



29-9



29-12



30-1



30-2



30-8



30-9



30-12



30-3



30-16



30-18



30-22



30-23



31-25

31-26



31-1



31-3



31-4

古墳時代



31-5



31-7



31-13



31-8



31-14



31-9



32-1



32-2



32-3



32-4



32-6



32-9



32-12



32-13



32-14



32-16



32-18



32-19



32-11



32-1



32-2



32-8



33-11



33-9



33-20



33-15



33-16



33-17



33-19



33-18



34-4



34-8



34-5



34-9



34-10



35-2



35-5



35-3



35-4



35-6



35-7



35-8



36-1



36-2



36-16



36-17



36-18



36-19



36-3



36-4



36-5



36-7



36-16



36-8

古墳時代



36-12



36-13



36-14



36-15



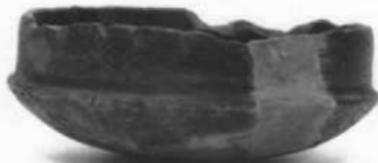
39-3



39-6



39-7



39-9



39-10



39-11



39-15



40-1



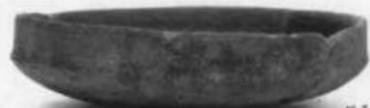
40-2



40-3



40-6



40-7



40-8



40-9



40-10



40-12



40-13



40-14



40-15



40-16



40-19



41-2



41-3



41-4



41-5



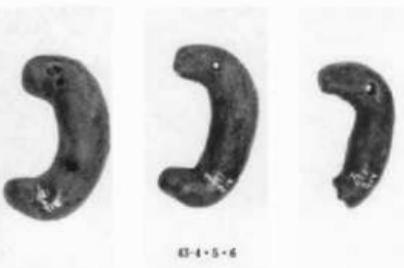
41-6



43-1



43-2



43-4・5・6



44-1



44-2



44-3



44-4



45-1



45-2



45-5



45-6



45-7



45-8



45-9



45-10



45-11



45-12

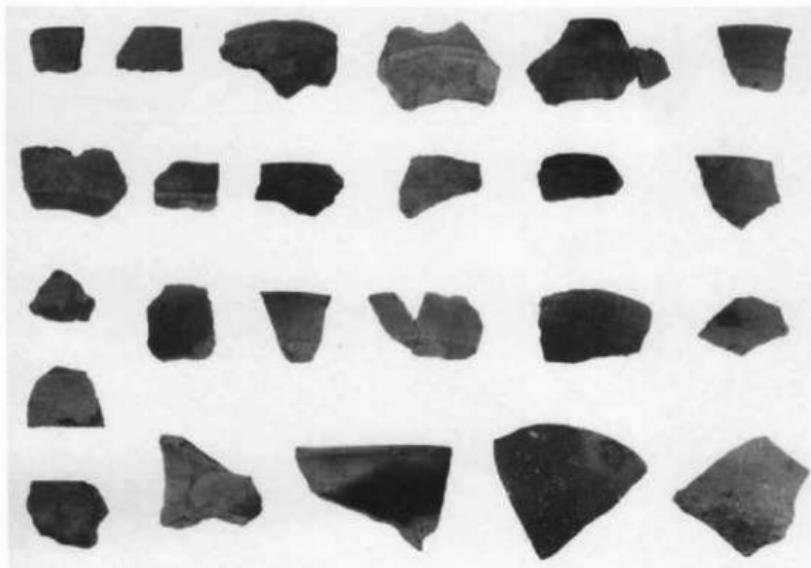


45-13



45号住居跡墨書き土器（拡大）

表面採集の遺物



方形周溝周溝内の土器

昭和60年3月25日 印刷

昭和60年3月30日 発行

佐倉市タルカ作遺跡

発行 千葉県土地開発公社
〒280 千葉市市場町7番9号

財団法人千葉県文化財センター
〒280 千葉市葛城2丁目10番1号
TEL 0472(25)6478㈹

印刷 株式会社弘文社
〒272 市川市市川南2丁目7番2号
TEL 0473(24)5977番

タルカ作遺跡正誤表

ページ	行・図	誤	正
10	下から3行目	かるなる	からなる
21	上から1行目	2.2	2.2
44	下から2行目	(2)	(2~6)
46	上から5行目	(2d)	(6)
46	上から6行目	(2b)	(4)
50	第36図	085 3が4	
53	第38図	遺構図中の土器の出土状況の番号6	2
64	第48図	表題の「(左)出土遺物(右)」	削除
68	第51図	表題の「出土遺物」	削除
82	第63図	1a~9	2~10
100	第77図	グリッド名の「オ」	ヲ
141	上から6行目	オ15	ヲ15
151	上から1行目	黄白色	黄灰色
199	上から11行目	「18の支脚……」は第13号住居跡のこと	
213	第151図	表題の「第16住」	第16号住
224	下から10行目	ローム粒暗	ローム粒混暗
336	下から5行目	狹少	狭小
347	上から6行目	A4	A4
347	上から10行目	A1	A1
347	上から14行目	A4	A4
347	上から14行目	A5	A5
347	上から17行目	B1	B1
347	上から22行目	B5	B5
347	上から22行目	B1	B1

遺物について、出土したグリッド名に「オ」とあるのは、正しくは「ヲ」である。すでに注記が「オ」でおこなわれているので、混乱をさけるためにそのまま報告した。